

広島市立大学

Hiroshima City University

ファカルティ・レポート

2016年度 - 2017年度

巻 頭 言

近年、大学の教育研究の質保証の仕組みとして、内部質保証システムが注目されている。公立大学法人広島市立大学第2期中期計画（以下、中期計画）においても「自己点検及び評価の結果を大学運営の改善につなげるとともに、評価結果をウェブサイト等で積極的に公開する。また、内部質保証（高等教育機関が、自らの責任で自学の諸活動について点検・評価を行い、その結果を基に改革・改善に努め、それによって、その質を自ら保証することをいう。）の強化に取り組む。」ことを掲げている。この中期計画の実現のため、平成29年度に、それまでの自己評価委員会を内部質保証委員会に改組し、内部質保証システムの構築と充実のための方策を種々議論してきた。

内部質保証の強化には、大学全体、各部局や委員会、さらには個々の教員に至るまでの、それぞれのレベルでの重層的な仕組みの構築が不可欠である。この度、本学で初めて刊行するファカルティ・レポートは、個々の教員の質保証の仕組みの1つとして企画されたものであり、外部からの評価を受ける環境にすることで、個々の教員の自発的な質保証と質向上につなげることを意図している。

また、中期計画においては「教育研究等の実績の積極的な公開等により、教員活動の活性化と社会への説明責任を果たす取組を推進する。」ことを掲げており、ファカルティ・レポートの公開により、公立大学としての社会的責任を果たすとともに、本学の教育研究活動が幅広く市民に周知、広報されることも期待される。

本ファカルティ・レポートにおいては2018年4月1日時点での本学専任教員（同日付で本学に赴任した教員、および休職中の教員等を除く）の2016・2017年度の本学における教育・研究・社会貢献の各活動実績の概要を掲載すると共に、教員による自己評価と総括コメントを付している。本ファカルティ・レポートが個々の教員、さらには大学全体の質保証と質向上につながることを期待する。

理事・副学長（企画・戦略担当）
内部質保証委員会委員長
若林 真一

2018年9月

目 次

巻頭言	i

目次	iii

I 国際学部	1
青木 信之	2
アリフ, ヌルハイザル・アザム	4
飯島 典子	6
板谷 大世	8
井上 泰浩	10
今江 秀和	12
岩井 千秋	14
ト部 匡司	16
ヴェール, ウルリケ	18
太田 育子	20
大場 静枝	22
大庭 千恵子	24
柿木 伸之	26
カーソン, ルーク	28
金谷 信子	30
城多 努	32
金 栄鎬	34
倉科 一希	35
ゴーマン, マイケル	37
斎藤 祥平	39
城市 真理子	41
関村 誠	43
高久 賢也	45
高橋 広雅	47
田川 玄	49
田浪 亜央江	51
寺田 英子	53
西田 竜也	55
古澤 嘉朗	57
武藤 彩加	59
目黒 紀夫	61
山口 光明	63
山根 史博	65
湯浅 正恵	67
横山 知幸	69
吉江 貴文	71
吉田 晴彦	73
李 在鎬	75
李 玲	77
渡辺 智恵	79

II 情報科学研究科	81
青山 正人	82
厚海 慶太	84
飯島 聡志	86
池田 徹志	87
石川 直樹	89
石田 賢治	91
石光 俊介	93
市原 英行	95
稲木 雅人	97
稲葉 通将	99
井上 伸二	101
井上 智生	103
井上 博之	105
岩垣 剛	107
岩城 敏	109
岩田 一貴	111
岩根 典之	113
内田 智之	115
大田 知行	117
岡本 勝	119
岡山 友昭	121
小野 貴彦	123
小畑 博靖	125
角田 良明	127
神尾 武司	129
上土井 陽子	131
川端 英之	133
川本 佳代	135
釘宮 章光	137
串田 淳一	139
窪田 昌史	142
黒木 進	144
黒澤 義明	146
桑田 精一	148
香田 次郎	150
河野 英太郎	152
小嵯 貴弘	154
小作 敏晴	156
児島 彰	158
小林 康秀	160
齋藤 徹	162
齋藤 夏雄	164
齊藤 充行	166
佐藤 学	168
佐藤 康臣	170
式田 光宏	172
島 和之	174
新 浩一	175
鈴木 祐介	177
関根 光弘	179
高井 博之	180
高野 知佐	182
鷹野 優	184
高橋 健一	186

高橋 賢	188	廣門 正行	233
高橋 雄三	190	弘中 哲夫	235
高濱 徹行	192	樋脇 治	237
竹澤 寿幸	194	福島 勝	239
田中 公一	196	福田 浩士	241
田中 輝雄	198	藤坂 尚登	243
田中 宏和	200	藤原 久志	245
谷川 一哉	201	藤原 真	247
谷口 和弘	203	舟阪 淳一	249
田村 慶一	205	古川 亮	251
辻 勝弘	207	前田 香織	253
常盤 達司	209	増谷 佳孝	255
中田 明夫	211	松原 行宏	257
中野 靖久	213	満上 育久	259
中山 仁史	215	三村 和史	261
永山 忍	217	宮崎 大輔	263
難波 英嗣	219	宮原 哲浩	265
西 正博	221	村田 佳洋	267
長谷川 義大	223	目良 和也	269
八方 直久	225	森 康真	271
馬場 雅志	227	李 仕剛	273
原 章	229	若林 真一	275
日浦 慎作	231	脇田 航	277
Ⅲ 芸術学部	279		
青木 伸介	280	石松 紀子	286
有持 旭	282	伊東 敏光	288
荒木 亨子	284	今村 雅弘	291

ウォーゼン, チャールズ	293	中村 圭	316
鰐澤 達夫	295	七搦 綾乃	318
及川 久男	296	野田 睦美	320
大塚 智嗣	298	藤江 竜太郎	323
大矢 英雄	300	古堅 太郎	325
笠原 浩	301	前川 義春	327
倉内 啓	303	前田 力	330
佐藤 尉隆	305	南 昌伸	332
志水 児王	307	向川 貴晃	334
田中 圭介	309	森永 昌司	336
釣谷 幸輝	311	吉田 幸弘	338
永見 文人	313	藁谷 実	340
IV 広島平和研究所	343		
ガネサン, ナラヤナン	344	竹本 真希子	356
河上 暁弘	346	直野 章子	358
吉川 元	348	永井 均	360
ジェイコブズ, ロバート	350	福井 康人	362
徐 顕芬	352	水本 和実	364
孫 賢鎮	354	湯浅 剛	366
V 附属施設	369		
塩田 芳丈(附属図書館)	370	佐藤 俊雄(社会連携センター)	376
松本 良徳(国際交流推進センター)	371	島筒 博章(社会連携センター)	377
植松 敏美(社会連携センター)	372	三上 賢治(社会連携センター)	378
國本 善平(社会連携センター)	374	吉岡 研一(社会連携センター)	379

※本ファカルティ・レポートには、2018年4月1日時点で在籍中の教員（同日付着任の教員及び同日時点で休職中の教員等は除く）を掲載しています。

国際学部

氏名	青木 信之
職位	教授(学長)
研究分野	英語教育
研究キーワード	文章産出プロセス、コンピュータによる外国語教育

理事長・学長として第二期中期計画重点項目の達成に努力した。特に国際学生寮を開設すること、COC+を軸として地域の拠点大学となること、「広島市立大学塾」の開設、また平和学研究科設置に向けた準備など、重点項目についてはその道筋をつけることが出来たと思う。最終年度となる今年度は、特に新しい理事長・学長を中心とした新執行部への適切なバトンタッチに意を用いたい。

【教育活動】

大学院授業「英語教育論」を担当した。受講する院生の多くの副指導教員となっており、随時論文指導を行った。学部生対象としては、単位とはならない「広島市立大学塾」が唯一の授業である。初めての取り組みで試行錯誤中であるが、市大塾の目的に合う教育プログラムの充実に努めた。

2016, 2017 年度	大学院「英語教育論」

【研究活動】

e ラーニングを活用した英語教育について、「共通教育期間を通じた英語力向上のための多様な大学環境でのeラーニングマネジメント」というテーマで、基盤研究(B)を研究代表者として獲得している。2016 年8月の外国語教育メディア学会では関連テーマでシンポジウムを開催しており、今年度は上記テーマで開催予定である。また、早期英語教育対象の文法学習ソフトを活用し、文法の帰納的学習について研究を進めている。2018 年に実験を実施し、7月末に開催される小学校英語教育学会の全国大会で発表する予定である。

1. 青木信之、渡辺智恵, 共通教育期間を通じた英語力の向上とeラーニングの活用, 岩手県立大学高等教育推進センター主催ワークショップ, 2018
2. 池上真人、青木信之、渡辺智恵, 自学自習型 e ラーニング・プログラムにおける学習意欲の変化に関する縦断的研究, 第 42 回全国英語教育学会埼玉研究大会, 2016
3. 青木信之、鈴木繁夫、竹井光子、渡辺智恵、志水俊広、寺嶋健史、池上真人, 多様な大学環境における英語eラーニング ― これまでの実践を振り返って ―, 外国語教育メディア学会(LET)第 56 回全国研究大会, 2016

【社会活動】

15年以上継続している市民対象の英語eラーニング講座を年3回ずつ計6回実施した。また、「広島市立大学地域貢献事業発表会」に、「広島市職員を対象にした英語力養成eラーニング講座の実施」と「市民の英語力向上のための研究と実践」として展示した。

2018 年 2 月-	広島市総合計画審議会専門部会専門委員
2017 年 11 月 24 日	広島市立大学地域貢献事業発表会
2017 年 9 月-12 月	市大英語eラーニング講座(平成 29 年度第3期)
2017 年 7 月-10 月	市大英語eラーニング講座(平成 29 年度第2期)
2017 年 6 月-	一般社団法人教育ネットワーク中国理事

2017 年 6 月-	公益財団法人ひろしん文化財団理事
2017 年 5 月-	一般社団法人公立大学協会委員
2017 年 5 月-8 月	市大英語eラーニング講座(平成 29 年度第1期)
2017 年 4 月-	公益財団法人放射線影響研究所広島地元連絡協議会委員
2016 年 11 月 25 日	広島市立大学地域貢献事業発表会
2016 年 9 月-12 月	市大英語eラーニング講座(平成 28 年度第3期)
2016 年 7 月-10 月	市大英語eラーニング講座(平成 28 年度第2期)
2016 年 6 月-	公益財団法人ヒロシマ平和創造基金理事
2016 年 6 月-	公益財団法人大学基準協会評議員
2016 年 6 月-	公益財団法人広島市産業振興センター評議員
2016 年 6 月-	公益財団法人もみじ銀行育英会評議員
2016 年 6 月-	広島シンガポール協会理事
2016 年 5 月-8 月	市大英語eラーニング講座(平成 28 年度第1期)
2015 年 7 月-	彫像・記念碑等の設置審査委員会委員
2015 年 6 月-	公益財団法人広島平和文化センター評議員
2015 年 6 月-	公益財団法人広島観光コンベンションビューロー評議員
2014 年 4 月-	公益財団法人広島市文化財団評議員
2013 年 4 月-	広島県留生活躍支援センター委員
2012 年 4 月-	ひろしま平和貢献ネットワーク協議会委員

氏名	アリフ, ヌルハイザル・アザム
職位	准教授
研究分野	経営学、商学
研究キーワード	国際ビジネス、多国籍企業、International Business、ダイバーシティー・マネジメント、ハラール・ビジネス

広島市立大学の国際学部にて 2017 年の 4 月に赴任して、新たなスタートを切りました。基本的に多国籍企業論及び英語で教える International Business という科目を専門とし、学部と大学院の両方で講義を担当しています。講義では最新の情報やニュースを活用しながら理論と討議を行います。研究活動に関しては、国際環境におけるダイバーシティー・マネジメントを中心にを行います。最近では、ハラール・イスラムビジネスに基づき、多様なニーズに応じた企業戦略におけるダイバーシティー研究を試みています。その内容に沿って社会活動でもハラール推進活動に参加しています。ハラール・ビジネス支援グループに参加し、さまざまな団体と協力しています。

【教育活動】

教育活動では、多国籍企業、International Business（英語で教える科目）、英語応用演習、発展演習 I&II を担当しております。最新の教材や媒体を使用して講義を行い、学生への一方的な講義ではなく、できる限り interactive な内容を取り入れています。新聞・雑誌記事やビデオ教材を活用して、実社会に即した議論をしています。今後は外部講師・実業家を授業に招いて講義してもらうことを考えています。専門演習では海外研修プログラムを毎年夏に実施し、学生を引率して ASEAN 諸国に駐在する日本企業及び海外の大学を訪問・見学しています。

2017 年度	多国籍企業論 I
2017 年度	多国籍企業論 II
2017 年度	英語応用演習 IV
2017 年度	国際ビジネス入門
2017 年度	International Business
2017 年度	発展演習 I
2017 年度	発展演習 II
2017 年度	多国籍企業論 I(大学院)
2017 年度	多国籍企業論 II(大学院)

【研究活動】

研究活動では、主に日本多国籍企業の活動、とりわけ、ダイバーシティー、企業戦略、多文化戦略、ハラール・ビジネスに焦点を当て、さまざまな研究を行っています。最近では日本におけるハラール・ビジネス・エコシステムについて研究しています。フード・ダイバーシティーの観点から企業戦略や地域・個人への影響にも大変注目しています。2020 年の五輪やこれからの労働人口対策に向けて、どのようなダイバーシティーの取り組みがなされたか、及びその課題としてどんなことが潜んでいるかを、ダイバーシティーの観点から考察しています。そのほか、外国人研究者との共同研究も展開し、多国籍企業に関わるさまざまな側面の研究をしています。

1. Raji Abdulwasiu Adeyemi, Mohd.Haniff Jedin, Muhammed Subhan, Nurhaizal Azam Arif, Privatization Policy and Rural Development: An Assessment of Power Holding Company of Nigeria in Ijumu Local Government of Kogi State, Journal of International Studies, Vol. 13, pp. 85-96, 2017
2. Takashi Sakikawa, Kaushik Chaudhuri, Nurhaizal Azam Arif, A study on management practices and manufacturing performance in India and Malaysia, Journal of Asia Business Study, Vol. 11, No. 3, pp. 253-261, 2017

【社会活動】

社会活動では、Japan Food Diversity というコミュニティーや中国地方総合研究所の活動に携わり、ハラールの推進活動をサポートしています。そのほか、富山県のグローバル人材講座にも講師として招かれ講演しました。

2017 年 7 月 -	Food Diversity Japan (Halal Media Japan) Network

氏名	飯島 典子
職位	准教授
研究分野	東洋史
研究キーワード	華南近代史、華僑論、客家

教育活動・研究活動・社会活動の3点に通底する自己の活動テーマは「最新の研究によって先入観(通説)を正すこと」である。どの研究分野にも言えることだが、どうしても「通説」は我々の見識に大きな影響力を持ち、ややもすれば最新の研究も「通説」に引きずられてしまいがちである。「通説」が必ずしも間違いとは言えないが、これだけ情報がある現代では、出来る限り先入観を払拭して通説に「挑む」ことが必要である。そして通説に切り込む面白さを自身が忘れないようにしつつ、院生や学部生にも伝えてゆきたい。

【教育活動】

留学生も多く履修するので、多元的な見方を培う、参加型の授業を目指している。具体的には毎回設問を用意し、自分で答えを考えるワークシートを書く作業を授業に取り入れているが、これは毎回授業評価(受講票も含む)で評価されているので今後も続けてゆきたい。国際ニュースをより深く理解する契機となるように、自身と関連研究者の最新研究動向を出来る限り授業に取り入れている。文化面ではやはり最新研究で評価が変わりつつある中国史上の人物も取り上げ、日本で長年「通説」とされていた評価に一石を投じた。

2016, 2017 年度	国際関係史(中国) I・II
2016, 2017 年度	中国文化論 I・II
2016, 2017 年度	中国語 I
2016, 2017 年度	中国国際関係史(博士前期課程)
2016, 2017 年度	地域研究演習 I・II(博士後期課程)
2017 年度	世界の文学
2017 年度	基礎演習 II
2017 年度	東アジア研究 II
2017 年度	専門演習 I・II
2017 年度	卒業論文指導 I・II

【研究活動】

長年「海外での移民とその社会の発展で有名になった」と評されがちな客家華僑についての研究を大きく書き換える最初の年としたい。具体的には中国の西南、とりわけ雲南に向かった客家語圏出身者(客家とは認識しておらず、専ら出身地域だけをアイデンティティとしていた)の動向を探ることによって、華僑とは異なる客家語圏出身者の国内における移動形態を明らかにし、更に彼らがいつ頃、自らを客家と認識するのか、それは海外との交流と関係があるのか、いつ交流が始まったのか、などを考察するのが向こう3年のテーマである。

また共著として客家の概要をまとめた事典『客家—歴史・文化・心性』(仮、現代書館)の原稿をまとめた。今年度(2018 年度)中に出版するのを目標としている。

1. 『華僑華人事典』丸善出版「梅州」の項目担当，262－263 頁
2. 「第二次世界大戦下に於けるマレーシア・サラワク華人女性の服装－戦時下の女性を表す無言の言語」,『アジア文化』2016 年 11 月第 33 号, pp. 28-34, 2017

【社会活動】

2004 年から日本国際客家文化協会会員(現在は幹事)としても活動。世界的な客家の最新動向を把握するとともに、それを研究の一環として発表している。

2016 年 1 月-2017 年 1 月	日本華僑華人研究学会理事
2012 年 4 月-	日本文学社会学学会理事

氏名	板谷 大世
職位	准教授
研究分野	シンガポール研究、地域研究(東南アジア)、比較政治学、政治学
研究キーワード	東南アジア、政治体制、政党制、一党制、民主化、シンガポール、人民行動党、海峡植民地

最初に、教育活動、研究活動、社会活動、そして大学運営活動の四つの活動に関して概括して述べる。教育活動においては、専門分野に関連する講義・演習だけでなく、初年次教育の演習も担当した。研究活動においては研究分野に関連する複数の地域を訪れて、一次資料の収集を行い論考としてまとめた。社会活動に関しては、所属する学会の大会運営に協力した。また飛び込みで入ってきた取材に応じた。大学運営に関しては、デスクワークを始めとする各種の活動に従事した。以上の四つの活動をバランス良くこなすことはなかなか難しかったが、できるだけ教育・研究活動に時間を割くように心がけてきた。

【教育活動】

学部と大学院で講義を担当している。学部教育では三つの分野の講義を主として担当した。それらは、①初年次教育、②全学共通科目、そして③専門科目である。初年次教育としては「基礎演習Ⅰ・Ⅱ」がそれにあたり、全学共通科目としては「政治学」を担当した。専門科目では、講義形式の授業として「東南アジア研究」と「開発政治論Ⅰ・Ⅱ」を担当し、演習(ゼミ)形式の授業として「専門演習Ⅰ・Ⅱ」と「卒論演習Ⅰ・Ⅱ」を担当した。大学院教育においては修士課程と博士課程を担当しているが、過去二年間においては修士課程の「東南アジア政治論Ⅰ・Ⅱ」と「学術研究の進め方」を担当した。

2016, 2017 年度	開発政治論Ⅰ
2016, 2017 年度	学術研究の進め方
2016, 2017 年度	基礎演習Ⅰ
2016, 2017 年度	専門演習Ⅰ
2016, 2017 年度	政治学
2016, 2017 年度	開発政治論Ⅱ
2016, 2017 年度	基礎演習Ⅱ
2016, 2017 年度	東南アジア研究
2016 年度	卒論演習Ⅰ
2016 年度	卒論演習Ⅱ
2017 年度	東南アジア政治論Ⅰ
2017 年度	基礎演習Ⅰ
2017 年度	東南アジア政治論Ⅱ
2017 年度	専門演習Ⅱ

【研究活動】

現在の研究上のテーマはシンガポールの政治体制の分析である。具体的には内政自治権獲得後、一貫して事実上の一党支配が続いているシンガポールの政治体制が、なぜこれほど安定しているのかを明らかにすることである。このテーマに関する研究は多数

存在するが、その多くは内政自治権獲得後の分析に集中し、植民地支配から内政自治権を獲得するまでの移行期間の分析が乏しい。しかしながら、現在のシンガポールの基本的な政治的枠組みはこの移行期に確立したので、この時期の分析は大切であると考えている。今回は、植民地時代から内政自治権を獲得するまでの憲政面の資料をロンドンおよびシンガポールにて収集し、整理した内容をまとめることができた。今年度以降もこの分野の研究を進めて行く予定である。その他の活動としては、後述する社会活動の一環として行った、所属学会の研究大会での分科会開催の内容に関する報告レポートを寄稿した。

1. 「シンガポールの政治的安定と統治制度—立法・行政評議会改革を中心に—」広島市立大学国際学部 〈際〉研究フォーラム(編), 『〈際〉からの探求:国際研究の多様性』, 文眞堂, 1-39 ページ, 2018.
2. 「2017 年度研究大会報告(東南アジア分科会)」, *JAIR Newsletter*, No. 154, pp. 18-19, 2018.
3. 「2016 年度研究大会報告(東南アジア分科会)」, *JAIR Newsletter*, No. 150, p. 18, 2017.

【社会活動】

社会活動としては、日本国際政治学会の東南アジア分科会の責任者を2年間務めた。この間、同分科会の過去の責任者などのご協力を得て、2016 年 10 月および 2017 年 10 月の研究大会において東南アジア分科会の開催にこぎ着けた。学会活動以外では、シンガポールの報道機関から、シンガポールの選挙制度と日本の選挙制度に関する取材を受け、この件に関してコメントを行った。また、下表には記載されていないが、依頼を受けて 2016 年 6 月には中京大学にて東南アジアの政治体制に関する講義を行った。

2017 年 10 月	日本国際政治学会(2017 年度研究大会) 東南アジア分科会「東南アジアにおける戦後和解と文化協力」 開催
2016 年 12 月-2017 年 1 月	報道機関の取材対応
2016 年 10 月	日本国際政治学会創設 60 周年記念研究大会(2016 年度研究大会) 東南アジア分科会「自由論題」 開催
2015 年 11 月-2017 年 11 月	日本国際政治学会 東南アジア分科会責任者

氏名	井上 泰浩
職位	教授
研究分野	マスメディア学、情報操作と原爆理解、ジャーナリズム、国際関係学(メディアと外交、パブリック・ディプロマシー)、情報通信 ソーシャルメディア
研究キーワード	マスメディア、メディアの影響、情報通信、インターネット、パブリック・ディプロマシー、国際コミュニケーション、メディアと国際関係・外交、グローバル・メディア、ジャーナリズム、社会調査、ソーシャルメディア、情報操作プロパガンダ、原爆神話と情報操作、アメリカ大統領演説

原爆が世界でどのように理解されているかについて研究を続けている。アメリカ大統領として初めて広島を訪問したオバマ大統領について、その意義から演説そのものについていくつかの論文や記事、そして著書としても解説を行った。また、アメリカ大統領と広島についての講演も行う機会があった。

【教育活動】

テレビや新聞に代表されるマスメディアであるが、SNS の人気と影響力が増すにつれ、特に若い世代にとっては SNS の方がはるかに利用され影響力も大きい。専門科目の授業ではこうした新しい流れを取り入れている。また、2013 年から始めたハワイ大学での短期留学はさらに充実した内容になるよう取り組んでいる。

2016, 2017 年度	マスメディア論
2016, 2017 年度	メディアリテラシー
2016, 2017 年度	ハワイ大学短期語学留学
2016, 2017 年度	専門演習
2016, 2017 年度	卒業論文演習
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	発展演習
2016, 2017 年度	メディアと社会(総合科目)

【研究活動】

オバマ大統領の広島訪問の意義、また、演説内容の重要性について新聞記事から著作にまでまとめることができた。

1. 井上泰浩, 世界を変えたアメリカ大統領演説, 講談社, 2017
2. The International Encyclopedia of Media Effects, Wiley-Blackwell, 2017
3. 井上泰浩, トランプ就任演説の特異さ 歴代大統領(リンカン、ルーズヴェルト、ケネディー、レーガン)との比較分析, The Huffington Post Japan, 2017
4. 井上泰浩, 真珠湾でのオバマ演説, 中国新聞, 13, 2017
5. 井上泰浩, 真珠湾攻撃 75 周年と首相訪問の陰に隠れた大変革 屈辱から融和、そして歴史の修正, Huffington Post Japan, 2016
6. 井上泰浩, 真珠湾攻撃 75 周年 首相の訪問を待つハワイ「謝罪は要らない」, Huffington Post Japan, 2016
7. 井上泰浩, 真珠湾75年と首相訪問 生存兵士の思いにかなう, 中国新聞, 6, 2016

8. 井上泰浩, 世界の原爆理解と報道——救世主、天罰、無差別虐殺・戦争犯罪, Huffington Post Japan, 2016
9. 井上泰浩, トルーマン演説の呪縛を打ち破り原爆神話を葬る一歩 見逃されているオバマ広島演説の重要性, Huffington Post Japan, 2016
10. Yasuhiro Inoue, Studying Obama's speech: Yasuhiro Inoue, Hiroshima professor, on the president's promising revision of Washington's official view, Hiroshima Peace Media Center, 2016
11. 井上泰浩, オバマ演説をひもとく 原爆正当化葬る根拠に, 中国新聞, 2016
12. 井上泰浩, ハワイが架け橋 オバマ大統領の広島訪問, Huffington Post Japan, 2016
13. (特別・招待講演) 井上泰浩, Missed points: The significance of President Obama Hiroshima speech, トーストマスターズ秋季大会, 2016
14. 米大統領が初めて被爆地訪問～平和報道は世界に伝わったのか, 2016
15. (特別・招待講演) 井上泰浩, オバマ大統領の広島演説とアメリカの原爆理解, 2016
16. (特別・招待講演) 井上泰浩, オバマ大統領と広島 ハワイ, 2016
17. オバマ大統領広島訪問 中継解説, 2016

【社会活動】

研究で取り組んでいるアメリカと原爆について、2016 年のオバマ大統領の広島訪問もあり、このテーマで講演を行うことが何度もあり、研究成果を社会に還元できたと考えている。

2017 年 11 月	アメリカ大統領と広島、核兵器——トルーマン、オバマ、トランプ、広島市立大学国際学部、広島平和文化センター主催
2017 年 10 月	アメリカの原爆理解とオバマ大統領、比治山女子高校
2015 年 6 月 -	財団法人 情報通信学会 評議員

氏名	今江 秀和
職位	准教授
研究分野	臨床心理学
研究キーワード	精神分析的な心理療法、学生相談

学生相談は大学の教育活動の一つです。悩みや問題を抱えた学生への対応だけでなく、相談室を訪れない学生に対しても、心の成長、発達の援助をしていくことが学生相談の大きな役割の一つです。授業においても、そうした考えに基づき、学生の成長、発達に役立つような内容を取り上げるよう心がけています。また、学生相談に、精神分析をどのように活かしていくかということも研究のテーマとしています。精神分析は、人間理解の方法です。必ずしも精神分析的な技法が適さない学生であっても、学生を理解するときには精神分析的な視点が重要だと考えています。学生相談という教育活動を通して、学生の心の成長、発達の援助ができればと考えています。

【教育活動】

「こころの健康・身体の健康」では、心と身体に関する知識を身につけ、これからの長い人生を、健康に生きていくため自己管理できる人材を育てることを目標としています。「心理学」では、心理学の基礎的な内容について講義しています。「教育相談論」は、教職科目の1つです。教師になったときに、生徒に寄り添うこと、自分の気持ちにオープンでいられることの必要性について伝えていければと考えています。受講者のすべてが教師になるわけではないと思いますが、授業の中で取り上げる事柄は、日常生活においても役に立つ部分があるのではないかと思います。いずれの科目においても、学生の心の成長、発達に役立つことを目指しています。

2016, 2017 年度	心の健康・身体の健康
2016, 2017 年度	心理学
2016, 2017 年度	教育相談論

【研究活動】

研究活動では、学生相談の意義や機能、大学組織を視野に入れた学生相談のあり方といった大きなテーマから、発達障害学生への対応といった個別的なテーマなど、学生相談に関するトピックを取り上げ、学会発表や論文等の執筆を行ってきました。多くの研究で、精神分析の観点を取り入れて考察しています。

1. 松本真理子、永田雅子、野邑健二監修 安田美智子、鈴木健一編著 今江秀和、心の発達支援シリーズ 6 大学生 大学生活の適応が気になる学生を支える、明石書店、2016
2. 学生相談の存在意義と機能を大学組織に伝えるために 一巻き込まれつつ、組織の力動を考えつつ、第 51 回全国学生相談研究会議報告書、8, 2018
3. 今江秀和、「発達障害学生の二者関係を育むサブカルチャーの意味」イントロダクション、精神分析的な心理療法フォーラム、Vol. 5, pp. 57-58, 2017
4. 今江秀和、野坂見智代、新入生における GHQ 得点と初年度の来談について、第 55 回全国保健管理研究集会プログラム・抄録集、97, 2017

5. 今江秀和, 専任カウンセラーの採用による学生相談機関の変化ー組織心理コンサルテーションにおける BART の観点からー, 日本学生相談学会第 34 回大会 大会発表論文集, 90, 2016
6. 学生相談の存在意義と機能を大学組織に伝えるために ー巻き込まれつつ、組織の力動を考えつつー, 第 51 回全国学生相談研究会議, 2018
7. 今江秀和、野坂見智代, 新入生における GHQ 得点と初年度の来談について, 第 55 回全国保健管理研究集会, 2017
8. 鈴木健一、伊藤未青、家次安子、野原一徳、松本寿弥、今江秀和, 発達障害学生の二者関係を育むサブカルチャーの意味, 日本精神分析的な心理療法フォーラム第 6 回大会, 2017
9. 伊藤未青、鈴木健一、家次安子、松本寿弥、今江秀和、野原一徳, サブカルチャーを介した精神分析的な青年期臨床の試み, 日本精神分析的な心理療法フォーラム第 5 回大会, 2016
10. 今江秀和, 専任カウンセラーの採用による学生相談機関の変化ー組織心理コンサルテーションにおける BART の観点からー, 日本学生相談学会第 34 回大会, 2016

【社会活動】

日本精神分析的な心理療法フォーラムでは、理事を務め、2017 年度からはワークショップ委員長として、2018 年度大会のワークショップの企画・運営に携わっています。全国学生相談研究会議では、2017 年度の第 51 回全国学生相談研究会議が中国四国地区での開催でしたので、実行委員長として企画・運営を行いました。全国の学生相談に携わるカウンセラー約 90 名を広島に迎え、有意義な討論・交流を行うことができました。

2017 年 4 月 - 2018 年 3 月	第 51 回全国学生相談研究会議実行委員長
2016 年 4 月 -	全国学生相談研究会議 中国四国地区幹事
2012 年 4 月 -	日本精神分析的な心理療法フォーラム 理事

氏名	岩井 千秋
職位	教授
研究分野	応用言語学
研究キーワード	コミュニケーション方略、学習方略、伝達能力、語用論、言語教育政策

専門領域は「応用言語学」で、特に外国語の習得、学習、使用、言語に関わる教育政策などについて研究しており、教育活動、研究活動、社会活動のいずれもすべてこの専門を軸に行っている。大学で教育・研究に従事しはじめて、30 年以上が経過し、本学には開学時に着任、今年が 25 年目にあたる。この間、大学運営では国際学部長・研究科長、副学長などとして本学や学部の発展に微力を捧げてきた。近年は学会(大学英語教育学会)の理事、支部長として業務を仰せつかっており、学会の発展や若手研究者の育成などに少しでも貢献できればと思っている。

【教育活動】

学部では主に「応用言語論」と「英文構成法」を担当している。前者は筆者の専門の講義科目で、後者は英語による発表技能、ライティング技能の育成に関わる科目である。3 年生の専門演習(ゼミ)は例年 5～12 名程度が受講している。大学院生も可能な限り受け入れており、主指導教員として指導した学生で修士号を取得した者は 16 名である。今年度(2018 年度)も 1 名の学生が博士前期課程に在籍している。また主指導教員として博士号取得に関わった学生は 5 名で、現在は 3 名の学生を指導している。指導した修士・博士の院生は 7 か国に及ぶ。

2016, 2017 年度	応用言語論 I・II
2016, 2017 年度	英文構成法 I・II
2016, 2017 年度	3 年生専門演習 I・II (応用言語論)
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II
2016, 2017 年度	応用言語論 I・II、特別講義 A・B、特別演習 I・II (博士前期)
2016, 2017 年度	国際社会研究演習 II・III・IV (応用言語論) (博士後期)

【研究活動】

現在は特に 2 つの研究活動に従事している。ひとつは科研(2014-2018)の助成を受けて行っている研究で、英語の教授言語に関わる研究である(詳しくは科研サイト <https://nrid.nii.ac.jp/ja/nrid/1000060176526/>)。2018 年度が 5 年間の継続研究の最終年度にあたるため、今年度はこれの結果の取りまとめを中心に行っている。もうひとつは、過去およそ 10 年にわたって実施してきた英語の発表に関する大学間連携の研究活動である。活動開始以来、この活動の代表を務めてきたが、昨年、新しい代表者に交代してもらった。

1. 岩井 千秋, 「Oral Presentation & Performance (OPP) の取組みと教育効果—英語のスピーキング能力を伸ばすための指導の方向性—」, *Learner Corpus Studies in Asia and the World*, Vol. Vol. 3, pp. 61-74, 2018
2. Iwai, C., Willey, I., Takagaki, T., Kawamoto, J., Carson, E., Konishi, K., & Iwanaka, T., “The Influence of the Teaching English in English (TEE) Policy on English

- Education and Learners”, 大学英語教育学会中国・四国支部紀要, No. 14, pp. 19-36, 2017
3. Takagaki, T. & Iwai, C., “Teaching English in English: A Case Study at a Public University in Japan(1)”, 尾道市立大学芸術文化学部紀要 第 17 号, pp. 45-54., No. 16, pp. 87-96, 2017
 4. 岩井千秋(編著), The 8th Oral Presentation and Performance (OPP) Event Report, JACET 中国・四国支部報告書, 全 129 頁, 2017
 5. (特別・招待講演) Iwai, C., “Teaching English in English (TEE): Gaps Between Theory/Reality and the TEE Policy”, 2017 ALAK International Conference, 2017
 6. (特別・招待講演) 岩井千秋, 英語教育改革の理想と現実:「英語を英語で教える」の基本方針を事例に, 第 15 回愛媛大学英語教育改革セミナー, 2017
 7. (特別・招待講演) 岩井千秋, 「Oral Presentation & Performance (OPP) の取り組みと教育効果—英語のスピーキング能力を伸ばすための指導の方向性—」, 第 3 回アジア圏学習者コーパス国際シンポジウム Learner Corpus Studies in Asia and the World (LCSAW) 2017, 2017
 8. Iwai, C., Willey, I., Laskowski, T., & Takegami, F., “*Honne and Tatemaie* of Teaching English in English in Japanese Secondary and Tertiary Education”, JACET 55th International Convention, 2016
 9. 岩井千秋、三熊祥文、平本哲嗣、二五義博、三宅美鈴、吉本和弘、堀部秀雄 「Oral Presentation & Performance (OPP)のイベントを通じた協働学習活動とその教育効果の理論化」大学英語教育学会中国・四国支部紀要, No. 13, pp. 1-18, 2016
 10. Iwai, C., “Teachers’ and Students’ Views on Teaching English Through English (TETE)”, The 14th Asia TEFL International Conference, 2016

【社会活動】

主に学会の役員(大学英語教育学会理事、中国・四国支部長)、英語の発表に関する研究活動の代表(2017 年までの 9 年間)、科研の第 1 次審査委員(3 回目)、英検面接委員、中学生英語スピーチコンテストの審査員などを担当している。また、大学英語教育学会をはじめとする、いくつかの学会誌の論文査読委員も務めている。

2017 年 6 月-	大学英語教育学会中国・四国支部長
2016 年 4 月-2018 年 3 月	科学研究費第一次審査委員
2015 年 6 月-	大学英語教育学会(JACET)理事
2009 年 4 月-2017 年 6 月	Oral Presentation and Performance (OPP) 研究会代表
2008 年 9 月-	高円宮杯全国中学校英語弁論大会広島県大会審査員
2005 年 4 月-	The Language Teacher 誌査読委員
2002 年 9 月-	西日本言語学会運営委員
1986 年 4 月-	日本英語検定協会(英検)面接委員

氏名	卜部 匡司
職位	准教授
研究分野	教育学(比較国際教育学)
研究キーワード	教育評価制度、ドイツの教育、持続可能な開発のための教育

教育活動では、教職課程(のうち教職に関する)科目を担当しているため、国際学部・情報科学部・芸術学部の学生たちに対して、授業だけでなく教育実習や教員免許取得のための指導助言を行っています。研究活動では、ドイツの教育評価制度研究と持続可能な開発のための教育(ESD)を中心に、ドイツや環太平洋地域の研究者たちとの国際共同研究を実施し、その成果を国内外の学会や学術雑誌などで発表しています。社会活動では、ユネスコスクールに加盟する学校を中心に教員研修講師や生徒たちへの講演などに出向き、国際学部が加盟する「ユネスコスクール支援大学間ネットワーク(ASPUnivNet)」の担当者として学校を支援しています。

【教育活動】

教育活動では、教職課程の全学共通科目を中心に、比較国際教育学に関連する科目を担当しています。教職課程では、通常の授業のみならず、教員採用試験の試験対策や模擬授業準備などに向けた学生指導も行っており、また広島市教育委員会主催の「大学生による学校支援活動」への参加大学の担当者と構成される協議会に出席するなど、教育委員会とも連携しながら学生を指導しています。さらに、ドイツ南部のヴァインガルテン教育大学との共同授業を 2017 年度から新設し、ドイツと本学の学生がグループを編成して、日独で同時刻(日本では毎週火曜 5 限/ドイツでは毎週火曜 1 限)にオンライン上で講義を実施するという試みにも取り組んでいます。

2016, 2017 年度	教師論
2016, 2017 年度	教育課程論
2016, 2017 年度	特別活動論
2016, 2017 年度	教職特講
2016, 2017 年度	学校インターンシップ
2016, 2017 年度	教育実習 1・2
2016, 2017 年度	専門演習 1・2
2016, 2017 年度	卒論演習 1・2
2016 年度	国際教育論
2017 年度	ドイツ社会論
2017 年度	教職実践演習

【研究活動】

研究活動では、科研費採択テーマ「二分岐型から三分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容」をはじめ、ドイツの研究者たちとの共同研究に取り組んでいます。また、2015-2016 年度は「ひろしま復興・平和構築研究」(主催:国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会)に参加しました。そして 2016-2017 年度は、環太平洋コンソーシアム教育学会(Pacific Circle Consortium)の理事に就任し、第 41 回大

会を2017年9月に広島市で(本学が大会校として)開催し、大会準備委員会の委員長を務めました。これらの成果は、国内外の学会や学術雑誌、書籍などで発表されています。

1. Urabe, M., Globales Lernen in Japan. In: Lang-Wojtasik, G./Klemm, U. (Hrsg.), Handlexikon Globales Lernen (2. Aufl.). Münster, 2017, 187-191.
2. Urabe, M., Inklusion als Normalfall – japanische Anregungen. In: Lang-Wojtasik, G./Kansteiner, K./Stratmann, J., Gemeinschaftsschule als pädagogische und gesellschaftliche Herausforderung. Münster, 2016, 45-55.
3. ト部匡司, 三分岐型から二分岐型への中等学校制度再編に伴うドイツ教育評価制度の変容, 広島国際研究(第22巻), 2016, 131-141.
4. ト部匡司, 教育現場の復興と学校が地域の復興に果たした役割, 国際平和拠点ひろしま構想推進連携事業実行委員会, 広島の復興経験を生かすために一廃墟からの再生―第2巻, ひろしま復興・平和構築研究事業報告書, 2016.

他6件

【社会活動】

社会活動では、広島市内の小学校で学校協力者会議委員を10年以上も務めており、学識経験者として学校への指導助言を行っています。2016年度からは、広島大学附属高校のスーパーサイエンスハイスクール運営指導委員としても指導助言を行っています。2017年度からは、本学国際学部の「ユネスコスクール大学間支援ネットワーク(ASPUVNet)」および「広島大学ユネスココンソーシアム(2016-2018年度)」への加盟に尽力し、学校におけるESDの推進に貢献しようと努めてきました。近年では、例えば、福山市立内海中学校、廿日市市立七尾中学校、広島県立安古市高等学校、愛知県教育委員会などで講演を行いました。

2017年12月	文部科学省委託事業ESD研修会あいち講師
2017年12月	広島大学ユネスココンソーシアムESD研修会指導助言
2017年11月	広島県立安古市高等学校人権道德教育講演会講師
2017年8月	廿日市市立七尾中学校「総合的な学習の時間」講師
2017年8月	福山市立内海中学校区小中合同研修会講師
2016年6月	カンボジア復興支援プロジェクト広島研修講師
2014年7月 - 2018年3月	広島大学附属高等学校SSH運営指導委員
2013年9月 - 2017年3月	広島ESD・ユネスコスクール研究会事務局長
2007年4月 - 2018年3月	広島市立本川小学校協力者会議委員
2005年4月 - 2018年3月	広島市立上安小学校協力者会議委員

氏名	ヴェール, ウルリケ
職位	教授
研究分野	近・現代日本のジェンダー史
研究キーワード	フェミニズム、国家とジェンダー、国境横断的歴史、植民地主義、「慰安婦」問題、ナショナリズム、反原発運動、平和運動、日本、ドイツ

2016～2017 年度は、大学運営関係の仕事に追われ、研究や出版の余裕がほとんどない状況であった。それでも、日本におけるフェミニズムの現代史で気になっていた、フェミニズムと「平和」、「母性」、「ナショナリズム」との関係を追求し、2014 年ごろから取り組んでいた地元広島のパフェミニズム史についての研究をまとめることができた。教育において最も意義があったことは、地元の市民団体のご協力で、本学学生に日本軍「慰安婦」サバイバーの証言を聞かせることができたことである。大学運営では、国際学部の国際交流委員長として、新たな協定大学の開拓や英語で教える科目の増設などを積極的に進め、国際交流の活性化に貢献した。また、学外では、広島市多文化共生市民会議の座長として、広島という多国籍・多文化社会の発展のために努力した。

【教育活動】

担当専門科目において、ジェンダーとセクシュアリティに関する学生の人権意識を育てるのはもちろんのこと、女らしさ・男らしさ、同性愛・異性愛が文化的・社会的につくられたカテゴリーであり、それが歴史を通じて変わり、常に再編され、再生産されることへの理解をもたせることを目指している。そのために、時間軸と空間軸を取り入れ、物事を「歴史的」に、そして「国境横断的」に考えることを促した。毎年新たな教授法を模索しているが、この2年間で特に成功したのは、2016 年度に開催した韓国人日本軍「慰安婦」被害者の証言会や、2017 年度に「移民国ドイツとジェンダー」というトピックについての学びを導入したことではないかと考える。また、2017 年度中に準備し、2018 年度にスタートさせた英語で教える科目の増設は国際交流を活性化し、本学の正規学生の視野も「国境横断的」に広げてくれるであろう。

2016, 2017 年度	ジェンダーとセクシュアリティ
2016, 2017 年度	ジェンダー論 II (博士前期課程)
2016, 2017 年度	多文化共生入門
2016, 2017 年度	ドイツ語 III
2016, 2017 年度	ドイツ語 IV
2016, 2017 年度	日本研究 II
2016, 2017 年度	専門演習 I
2016, 2017 年度	専門演習 II
2016, 2017 年度	卒論演習 I
2016, 2017 年度	卒論演習 II
2016 年度	基礎演習 II
2016 年度	発展演習 II
2016 年度	ジェンダー論 I (博士前期課程)
2017 年度	平和学概論 (博士前期課程)

【研究活動】

この数年、戦後・現代日本(特に1970年代後半～1980年代)におけるフェミニズムと女性の社会運動を主な研究対象としてきた。2011年の原発事故で衝撃を受け、3年間ほど「日本における(反)原発とジェンダー・女性・フェミニズム」の研究に取り組んだが、その中で、80年代の広島における女性の活発な反核・反原発運動に気付かされた。それをきっかけに、2014年ごろから、「デルタ・女の会」というグループについて調べ、広島に来て初めて広島(そして、ヒロシマ)を研究対象にすることになった。2016年に出版された論文は、この研究をまとめたものである。また、2016年から「フェミニズムと母性」に関する研究に取り組んできたが、残念なことにその出版が編集者の都合で遅れている。

1. “Reimagining Greenham, or the transnationality of the nation in activist women’s narratives in 1980s Japan,” in Clare Midgley, Alison Twells, and Julie Carlier, eds., *Women in Transnational History: Connecting the Local and the Global*, London and New York: Routledge, 2016, pp. 54-74.
2. 「反核・反原発とフェミニズムの問題:「デルタ・女の会」を例に」高雄きくえ(編著)『被爆70年ジェンダー・フォーラム in 広島:全記録』ひろしま女性学研究所, 2016, pp. 175-191.
3. 「国家と地域を横断する地域の女性運動:広島の「デルタ・女の会」」『ジェンダー史学』No. 12, 2016, pp. 154-154.
4. [Review] “Women and Democracy in Cold War Japan. By Jan Bardsley. London and New York: Bloomsbury, 2014,” *Monumenta Nipponica*, Vol. 71, No. 1, 2016, pp. 247-253.
5. “Discourses on Motherhood in Japan: Feminism, Ecology, and Nuclear Power in the 1980s,” DIJ International Conference: Mothers and Social Movements in Postwar Japan (Tokyo), 29 July, 2016.
6. (招待講演)「国家と地域を横断する地域の女性運動:広島の「デルタ・女の会」」, ジェンダー史学会シンポジウム「ポスト「戦後70年」とジェンダー史:地域のジェンダー実践を思考の手がかりに」(東京), 26 June, 2016.

【社会活動】

2011年から委員、2015年から座長を務めている広島市多文化共生市民会議は、広島市の多文化共生関連施策に対して、すべての国や文化の人々の暮らしやすさという観点から意見や要望を述べる機関である。「外国人」として、近代史・ジェンダー史研究者として貢献できればと思って携わってきた。また、他の委員の方たちから多くのことを学ばせていただき、それを日々の教育活動で還元するように努めている。その他にも、たとえば2015年に「被爆70年 ジェンダー・フォーラム in 広島」を共催したひろしま女性学研究所などの方々や、日本軍「慰安婦」問題解決・ひろしまネットワークの方たちと共同活動や意見交換をし、大学と市民社会を結ぶように努力してきた。

2017 年度	広島市多文化共生市民会議・座長
2016 年度	広島市多文化共生市民会議・座長

氏名	太田 育子
職位	教授
研究分野	国際法、国際人権法
研究キーワード	国際人権法、主権機能の変質、自己決定権、レジリエンス、ケア労働、児童の権利条約、子どもの権利、防災教育、グリーフケア

人道性とは生老病死の受容であろう。人道性を欠く政治目的の実現は、私人の間であれ国家の間であれ紛争の連鎖を伴う。その見地から、老病死を含む人権(尊厳)の在り方を、手術入院・在宅介護など日常の実践をも踏まえ、総体的に考察している。

【教育活動】

時事問題を対象とする分野のため、平均して講義および英語応用演習には1コマあたり(毎回の資料作成を含み)4時間、基礎・専門演習では1コマあたり45分、卒論演習では1名あたり(添削や文献選択を含み)1時間を準備に費やしている。受講生に脳力・能力の差がありクラス全員のレベルアップをいかに図るかが、クラス構成が変わる毎期の課題であり、欧米の講義法や最新の心理学・脳科学の知見に目配りし、毎回の受講票感想を精査しつつ、試行錯誤を繰り返している。

提供する講義・演習に共通する目的は、受講生が、学修効率を上げる基盤となるセルフ・エスティーム(自尊感情)を向上し、それにより発想力と柔軟性を高め、講義等終了後も自律的に学修を続けていけることである。手法として、「自己決定モード」な行動様式の動画などを視聴・理解しながら、抽象的な知識の具体化により知識を定着させ、他方で、1コマ内でランダムな題材に触れることにより、抽象的な知識(共通する法則)を自ら発見し、複合的な側面を有する現実問題の構成要素を分類しつつ(論点はなにか?)、保有する知識を適用し(どれを使うか?)、応用力を培う。

2017 年度	国際法 I
2017 年度	国際人権法 I
2017 年度	Hiroshima & Peace
2017 年度	卒業論文指導 I
2017 年度	専門演習 I
2017 年度	国際法 II
2017 年度	英語応用演習 IV
2017 年度	国際人権法 II
2017 年度	基礎演習 II
2017 年度	専門演習 II
2017 年度	卒業論文指導 II
2017 年度	卒業論文

【研究活動】

老病死を含む人権(尊厳)の在り方を総体的に考察している。その際、ナラティブという手法により、個々人の存在の全体的な提示と非批判的な受容が可能になれば、権利行使の基盤にある尊厳の涵養に役立つとの仮説に立つ。ケアに基づくキュア(治癒)、すな

わち生老病死の受容がナラティブ手法によってもたらされ得るならば、自他の尊厳回復に基づく社会正義の具現化も、ナラティブ手法により可能になるのではないかとの展望を持ち、実践的に研究を進めている。

1. 太田育子, “あの戦争”から“わたしの死”を取り戻す: 日本社会のゴースト・ロールの解放のために [平成 29 年度科研費基盤(A)研究成果], 第 41 回日本死の臨床研究会年次大会(セッション 死の臨床を支える文化/死生観), 2017
2. 太田育子, 棄民の系譜からの自由―被災の語りをもたらすもの [平成 29 年度科研費基盤(A)研究成果], 科研費公開シンポジウム「原子力災害とは何か―未来と世界へのメッセージ」, 2017
3. 太田育子, 「第 11 章 運輸・通信」『入門 国際機構』, 法律文化社, 2016
4. OTA Ikuko, Seeking No Apology for A-bombings: Legacies of the 1995 Testimony of Hiroshima's Mayor at the International Court of Justice [平成 28 年度科研費基盤(A)研究成果], Fears and Anxieties in the 21st Century 3rd Global Meeting, Special Focus: Testimony, 2016

【社会活動】

2016 - 2017 年の社会活動は、以下のとおりである。

2016 - 2017 年	広島県 私立学校審議会委員
2016 - 2017 年	広島県 情報公開・個人情報保護審査会委員
2016 年 7 月 8 日	広島県立高陽高等学校 模擬講義

氏名	大場 静枝
職位	准教授
研究分野	ヨーロッパ文学(フランス文学)、地域研究(フランス・ブルターニュ地方)
研究キーワード	フランス文学、ブルターニュ文学、地域文化論、ブルターニュ地方、言語政策、少数言語文化、フランスの家族政策

2016 年度及び 2017 年度は、研究・教育において一応の成果を収めることができた。教育活動では、2016 年度にフランスでの短期語学留学プログラムを立ち上げ、2017 年度前期にはフランスの協定大学から教育実習生を受け入れ、その指導(フランス語教育)に当たった。研究活動では、主として科研費研究であるフランス・ブルターニュ地方の再話文学の系譜に関する研究を行った。その他、18 世紀フランス文学の分野でもレチフ・ド・ラ・ブルトンヌに関する論考を発表した。また今期は、国際交流活動にも力を注いだ。2016 年度にオルレアン大学の国際交流課及びフランス語学院の関係者の本学訪問を実現し、オルレアン大学短期語学留学制度のさらなる充実化を図った。2017 年度は、オルレアン大学フランス語学院副院長、レンヌ第 2 大学副学長の本学訪問を準備し、特にレンヌ第 2 大学に対しては交換学生数の増加に貢献した。

【教育活動】

今期は特にフランス語教育に力を入れた。2016 年度から新たに、協定校であるフランス・オルレアン大学附属フランス語学院における 4 週間のフランス語語学留学プログラムを立ち上げ、以後、毎年 8 月～9 月に 10 名程度の学生の引率を行っている。さらに 2017 年度は、本学においてフランス語教育の教育実習を実施し、オルレアン大学から実習生(修士課程 2 年)を 1 学期間にわたり受け入れて指導を行った。教育実習プログラムの一環で、学生のフランス語力向上を目的に、実習生によるフランス語補習授業(「オルレアン大学短期語学留学補習授業」「長期派遣留学補習授業」)を設置し、短期留学及び長期留学を控えた学生たちに事前準備学習を提供できる体制を作った。また 2017 年度には、長期留学経験者を対象にフランス語で授業を行う科目 Études de la société française をスタートさせた。

2016, 2017 年度	フランス語 I(国際)(情報・芸術)/III/IV
2016, 2017 年度	フランスの文学と文化
2016, 2017 年度	専門演習 I/II
2016, 2017 年度	卒論演習 I/II
2016, 2017 年度	卒業論文
2016, 2017 年度	世界の文学
2016, 2017 年度	フランス文化論
2016, 2017 年度	基礎演習 II
2016, 2017 年度	国際研究特講(オルレアン大学短期語学留学)I/II
2016 年度	発展演習 I
2017 年度	言語コミュニケーション研究入門
2017 年度	Études de la société française
2017 年度	国際研究入門

【研究活動】

今期は、2015 年度に引き続き科研費の研究課題「フランスにおけるブルターニュの再話文学の系譜—『バルザス＝ブレイス』を中心に」(研究代表、基盤研究(C))の研究を行った。フランス国立レンヌ第 2 大学のブルターニュ文学研究者と交流を行う一方、国内では研究会を主宰した。研究会では、『バルザス＝ブレイス』及び 18 世紀末から 19 世紀における民謡の受容に関する研究発表を行い、その過程で得られた知見を共同研究者と共有した。さらに、本科研費研究の目的の一つである『バルザス＝ブレイス』の翻訳を行い、本邦初訳となる『ブルターニュ古謡集 バルザス＝ブレイス』を上梓した。その一方で、18 世紀フランス文学に関する研究も継続し、レチフ・ド・ラ・ブルトンヌの自伝作品に関する論文を発表した。また、保育及び家族政策を扱った参考書の作成プロジェクトに参加し、フランスの最新の子育て支援制度について報告した。

1. 伊藤篤編著、『子育て支援』,「西欧における子育て支援」, pp. 186-202, ミネルヴァ書房, 2018
2. テオドール・エルサール・ド・ラ・ヴィルマルケ編, 山内淳監訳・大場静枝・小出石敦子・白川理恵訳,『ブルターニュ古謡集 バルザス＝ブレイス』, 彩流社, 2018
3. 植田祐次編著,『近代フランス小説の誕生』,「父と息子をつなぐ物語—『わが父の生涯』から『ムッシュー・ニコラ』へ」, pp. 103-126, 水声社, 2017
4. 滝澤雅彦・柑本英雄編著,『祈りと再生のコスモロジー—比較基層文化論序説』,「語り継がれる民族の記憶—『バルザス＝ブレイス』をめぐって」, pp. 695-711, 成文堂, 2016
5. 「『バルザス＝ブレイス』をめぐり—考察—18 世紀後半から 19 世紀の民謡の位置づけ」,『広島国際研究』, No. 23, pp. 61-73, 2017
6. 『バルザス＝ブレイス』の受容—文学から民俗学への変化について, 第 36 回日本ケルト学会研究大会, 2016

【社会活動】

学外の活動については、今期は学会活動が中心となった。2017 年度より日本フランス語フランス文学会において学会誌『フランス語フランス文学研究』の編集委員を務め、年 2 回の研究大会において研究発表の聴取とその評価を担当した。

2017 年 4 月 -	日本フランス語フランス文学会 編集委員

氏名	大庭 千恵子
職位	教授
研究分野	国際関係史、東欧地域研究
研究キーワード	「国民国家」、EU 加盟候補国、「マケドニア」、旧ユーゴスラヴィア

2016～17 年度の教育活動、研究活動、社会活動の 3 点に通底するテーマとしては、とくに激変しつつあるヨーロッパ情勢および国境を超える人々の移動に伴う諸課題に着目した考察があり、それぞれの活動を実施する際にもその考察内容を反映させた。

【教育活動】

2016～17 年度は、学部専門科目においては、ヨーロッパ領域に大量流入した難民をめぐる諸問題や、各国の政治状況などに焦点をおいた講義を展開した。また、英国の EU 離脱をめぐる交渉の進展状況など、最新情報を踏まえた考察を学生とともに実施した。卒業論文につながる各演習では、2016 年度はグローバル化時代の難民問題を国際社会・政府・援助機関・NGO などの対応と課題という視点から議論した。2017 年度の演習は、ヨーロッパにおけるイスラーム移民をはじめとする世界各地の移民問題に焦点をあて、受け入れ各国でみられる「福祉ポピュリズム」現象など具体的課題を扱った。大学院専門科目においては、難民問題と EU 変動に関する専門書を題材に、ヨーロッパのみならず周辺地域の国際関係変動やアジア地域との比較についても論じた。

2016, 2017 年度	ヨーロッパ政治論
2016, 2017 年度	民族国家論 I
2016, 2017 年度	基礎演習 I
2016, 2017 年度	専門演習 I
2016, 2017 年度	卒論演習 I
2016, 2017 年度	民族国家論 II
2016, 2017 年度	専門演習 II
2016, 2017 年度	卒論演習 II
2016 年度	特別演習 I
2016 年度	特別演習 II
2017 年度	特別演習 III
2017 年度	ヨーロッパ国際関係史 I
2017 年度	基礎演習 II
2017 年度	特別演習 IV
2017 年度	ヨーロッパ国際関係史 II

【研究活動】

2016～17 年度の研究活動は、科研費(B) (一般)「ユーゴ後継諸国の対外政策と国際関係に関する研究」(課題番号: 24330057)を中心に行った。ユーゴスラヴィア解体後の後継諸国 7 か国はそれぞれに異なる国際関係上の課題をもっているが、マケドニア共和国の場合は、対外関係においては隣国ギリシアとの国名争議と、国内政治における多民

族共存システムの構築がとくに重要な課題となってきた。国際関係と国内政治が錯綜する中で 2014 年総選挙後の「政治危機」は、2016 年総選挙後の混乱期を経て、10 年ぶりの政権交代にいたったが、その経緯を分析するとともに、対外関係の変化を研究した。また、同共和国独自の民族共存システムの試みとして教育改革を位置づけ、その調査も行った。

1. 共著『解体後のユーゴスラヴィア』, 晃洋書房, 2017。
2. 大庭千恵子, 「マケドニア共和国」『ユーゴ後継諸国の対外政策と国際関係に関する研究』(科学研究費補助金・基盤研究(B)研究成果報告書:課題番号 24330057), pp. 158-187, 2017。
3. 大庭千恵子, 「旧ユーゴスラヴィア・マケドニア共和国における教育改革と非多数派コミュニティ(1991-2015)」『広島国際研究』Vol. 22, pp. 38-59, 2016。

【社会活動】

2016 年度は高校での模擬授業を中心に社会活動を行い、2017 年度は大学基準協会大学評価委員として、大学を取り巻く近年の状況を鑑みながら社会貢献活動を実施した。

2017 年度	公益財団法人 大学基準協会 大学評価委員会委員
2016 年 10 月	模擬授業「ヨーロッパへ向かう難民から見える国際関係の現在」岡山県立倉敷南高校
2016 年 7 月	模擬授業「『国際的』に活躍するためにー国際学部での学びー」広島県立祇園北高校

氏名	柿木 伸之
職位	教授
研究分野	哲学、美学・芸術諸学
研究キーワード	哲学、美学

二十世紀のドイツ語圏の思想を専門領域に、哲学と美学を研究している。最近は二十世紀前半に文筆家として活動したヴァルター・ベンヤミンの思想の研究を足がかりに、言語、歴史といったテーマに取り組んできた。2016 年度から 2017 年度にかけては、このような研究の一環として、従来の歴史の物語からこぼれ落ちる記憶の伝承を含んだ歴史の概念を探究した。教育活動においては、多様化が進む社会のなかで他者とともに生きることを、学生が自身の課題として考える契機を与えることに力を入れている。広島市の文化の発展へ向けた社会活動として、オペラ公演のプログラムなどへの寄稿を続けている。2017 年度には音楽と美術に関する講演も行なった。

【教育活動】

専門科目の「共生の哲学」をはじめとする担当科目をつうじて、現代の世界を歴史認識を踏まえながら見通しつつ、そのなかで他者とともに生きることを自身の課題として捉える契機を、学生に与えようと努めている。2017 年度の 3、4 年生向けの演習では、文献講読と論文指導をつうじて、現代社会に見られる差別や憎悪扇動などの問題に取り組むとともに、ドイツ社会を例に、多様な背景を持つ人々が一つの社会を築いていくための課題についても議論を深めた。2017 年度から新たに担当し始めた「人間論 A」では、人間についての哲学の足跡を辿ることをつうじて、今人間とは何かという問いを深める契機を、全研究科の大学院生に与えようと努めている。

2016, 2017 年度	共生の哲学 I・II
2016, 2017 年度	哲学 B
2016, 2017 年度	専門演習 I・II (I は 2017 年度のみ)
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II
2016, 2017 年度	卒業論文
2017 年度	社会文化思想史 I・II
2017 年度	発展演習 I・II
2017 年度	人間論 A (大学院)
2017 年度	多文化共生入門 (オムニバス)
2017 年度	世界の文学 (オムニバス)
2017 年度	平和と人権 A (オムニバス)

【研究活動】

2016 年度から 2017 年度にかけては、「〈残余からの歴史〉の哲学的・美学的探究」という課題の国際学術研究に取り組み、被爆やショア（ホロコースト）といった「表象不可能」とも称される出来事の記憶にも開かれた歴史の概念の探究に努めた。2016 年度には、学外長期研修の機会を得てベルリンに研究滞在し、この研究に接続しうるかたちでベンヤミンの歴史哲学の研究に取り組んだ。その成果は、ドイツ語と日本語での論文として発表した。また、彼の思想の思想史的な位置と意義を論じた論考も発表した。さらに、現代にお

ける美的表現の可能性の探究の一環として、オペラの創作に関する論文や、パウル・クレーの美術に論及した論文も発表した。

1. 加賀野井秀一、伊藤泰雄、本郷均、加國尚志監修『メルロ＝ポンティ哲学者事典別巻——現代の哲学・年表・総索引』白水社、2017 年（ベンヤミンの項目）。
2. 細川俊夫、ヴァルター＝ヴォルフガング・シュパーラー『細川俊夫 音楽を語る——静寂と音響、影と光』柿木伸之訳、アルテスパブリッシング、2016 年。
3. 秋富克哉、安部浩、森一郎編『続・ハイデガー読本』法政大学出版局、2016 年（第 24 章「ブロッホ、ベンヤミン、ローゼンツヴァイク」を担当）。
4. 柿木伸之「音楽＝劇（ムジーク＝テアター）の批判的構成のために——ベンヤミンとアドルノの美学を手がかりに」、大阪大学美学研究室編『a+a 美学研究』第 12 号、72～87 頁、2018 年。
5. 柿木伸之「形象の裂傷——ショアの表象をめぐるフランスの議論が問いかけるもの」、形象論研究会編『形象』第 3 号、65～76 頁、2018 年。
6. Nobuyuki Kakigi, „Geschichte aus dem Eingedenken: Walter Benjamins Geschichtsphilosophie“（ドイツ語）、Tetsugaku: International Journal of the Philosophical Association of Japan, Vol. 1, pp. 73–90, 2017.
7. 柿木伸之「そこに歴史はない——ベルリンからグラウンド・ゼロとしての広島を思う」、『現代思想』2016 年 8 月号、86～95 頁、青土社、2016 年。
8. 柿木伸之「切断からの像——ベンヤミンとクレーにおける破壊と構成」、富士ゼロックス版画コレクション＋横浜美術館「複製技術と美術家たち——ピカソからウォーフオルまで」展カタログ、24～27 頁、2016 年。

他 16 件

【社会活動】

広島芸術学会委員、ひろしまオペラ・音楽推進委員会委員として、広島における芸術の発展に微力を尽くしている。とくに同推進委員会が主催するオペラ公演や演奏会に際し、プログラムに寄稿したり、演奏会後のトークの司会を務めたりしている。2017 年度には、広島市現代美術館の特別展と武生国際音楽祭に際して講演を行なった。2018 年 2 月に行なわれた細川俊夫作曲のオペラ《松風》の新国立劇場での日本初演には、寄稿や対談への出演などで協力した。2016 年度の在外研究にもとづく中国新聞への寄稿「ベルリンーヒロシマ通信」は、各方面からの反響を得た。

2017 年 9 月 14 日	武生国際音楽祭 2017 作曲ワークショップ講演「嘆きの変容（メタモルフォシス）——〈うた〉の美学のために」
2017 年 4 月 29 日	広島市現代美術館「殿敷侃——逆流の生まれるところ」展 関連講演会「逆流の芸術——ヒロシマ以後のアートとしての殿敷侃の芸術」
2014 年 8 月～現在に至る	広島芸術学会委員
2007 年 4 月～現在に至る	ひろしまオペラ・音楽推進委員会委員

氏名	カーソン, ルーク
職位	准教授
研究分野	英語学、教育心理学、教育学
研究キーワード	Education, Cross-cultural psychology and communication, Learning Psychology, Metacognition

With regard to teaching at HCU, I teach all of my courses in English. This is designed to improve not only the English language ability of HCU Faculty of International Studies but also to increase their readiness for participation in the increasingly global society. Focusing on thinking, behaviour and communication in cross-cultural settings, I am seeking to prepare students for a more multi-cultural future.

Through my research, I am focused on the development of abilities that will allow individuals to realise potential, irrespective of academic discipline or interest. I am also examining the impact of culture on this issue and on effective learning.

【教育活動】

My teaching can be divided into two areas – English medium instruction and English language teaching. The central themes of the English medium courses are cross-cultural understanding, while the English language courses are communication focused.

2016, 2017 年度	English Discussion and Debate I
2016, 2017 年度	Cross-cultural language and communication I
2016, 2017 年度	Cross-cultural psychology I
2016, 2017 年度	Cross-cultural psychology Thesis Seminar I
2016, 2017 年度	Hiroshima and Peace Preliminary English Training Programme
2016, 2017 年度	English Discussion and Debate II
2016, 2017 年度	Cross-cultural language and communication II
2016, 2017 年度	Cross-cultural psychology II
2016, 2017 年度	Cross-cultural psychology Thesis Seminar II
2017 年度	Cross-cultural communication and psychology I (Graduate)
2017 年度	Cross-cultural communication and psychology II (Graduate)

【研究活動】

My research is focused at the intersection of education, culture and learning, with a specific focus on higher order learning skills, such as metacognition. My research during this time period had led to receiving a single-author book contract with Routledge, tentatively titled “Looking Inside the Independent Learning Experience: Cognition, Emotion and Metacognition”. I have also presented and published research nationally and internationally during this time period.

1. Luke Carson, Teaching Internationally for Internationalization: Western Perspectives in an Eastern Context. In B.E. Bizzel, R.C. Kahila & P. Talbot (eds). Cases on GlobalCompetencies and Educational Diplomacy in International Settings. pp.95-118., IGI Global, 2018
2. Luke Carson, Understanding the Differing Motivations of International University Students: A present-focused cultural comparison., World Congress on Education Proceedings., 2017
3. Carson, L., Second Language Use as a Threshold Concept: Reconceptualising Language Learning Journeys, International Journal of Education, Vol. 9, No. 9, pp. 34-43, 2017
4. Luke Carson, Are university lecturers communicating to learners as individuals in learner-centred classes?, Journal of Education and Human Development, Vol. 5, No. 3, pp. 20-26, 2016
5. Luke Carson, Keynote speech: Culturally Learned Values and the Interconnected World – The Case of Japan and Adaptability, International Institute of Social and Economic Sciences, 39th International Academic Conference, 2018
6. Luke Carson, Understanding the Differing Motivations of International University Students: A present-focused cultural comparison, World Congress on Education, 2017
7. Luke Carson, From Language Learning to Actively Communicating: A Threshold Concept, The Japan Association of Language Teaching PAN SIG Conference: Innovations in Education, 2016

【社会活動】

I have been involved in sharing my discipline knowledge with the public in Hiroshima through public lectures, high school lectures and kindergarten activities. Some of my university committee works also involved me with the Hiroshima community and the international community.

2017 年 11 月-2018 年 1 月	English and Culture Teaching: Samuel Kindergarten
2014 年-2019 年	Hiroshima and Peace Committee member

氏名	金谷 信子
職位	教授
研究分野	非営利組織論, 公共政策, 社会福祉
研究キーワード	非営利組織、非営利経済、公共政策、社会福祉、公民パートナーシップ、ソーシャル・キャピタル、市民社会

教育活動、研究活動、社会活動の各々について、一定の責任が果たせるよう取り組んできたと考えている。ただ、どの程度成果を上げることが出来たのか、自己評価は容易ではなく、いずれの活動においても試行錯誤が続いている。今後も努力を続けていきたい。

【教育活動】

学部においては、従前から担当している共通教育科目と専門科目として下記の科目を担当した。2017年度からは地域再生論も担当した。大学院では2名の修論指導を行った。また研究生も受け入れた。

2016, 2017 年度	非営利組織論 I
2016, 2017 年度	非営利組織論 II
2016, 2017 年度	NPO 論(オムニバス・コーディネーター)
2016, 2017 年度	専門演習 I
2016, 2017 年度	専門演習 II
2016, 2017 年度	卒論演習
2016, 2017 年度	非営利組織論 I (大学院)
2016, 2017 年度	特別演習 II (大学院)
2016, 2017 年度	特別講義 B(大学院)
2016, 2017 年度	特別講義 A(大学院)
2016 年度	特別演習 I (大学院)
2017 年度	非営利組織論 II (大学院)
2017 年度	地域再生論(オムニバス・コーディネーター)

【研究活動】

従前から継続してきた介護保険事業所の非営利事業者と営利事業者のパフォーマンスの比較研究を中心に進めてきた。また地域活性化に関する研究にも引き続き取り組んできた。

1. 金谷信子, 準市場における非営利・営利事業者のサービスの質と経営戦略的行動: 介護保険グループホームの場合, 広島国際研究, Vol. 23, pp. 43-60, 2017
2. 金谷信子, 準市場・訪問介護サービスにおける非営利・営利事業者の行動比較, 老年社会科学, Vol. 38, No. 3, pp. 297-307, 2016
3. 介護保険サービス事業における規模と範囲の経済志向そのメリットとデメリット, 社会政策学会第 135 回大会, 2017
4. (特別・招待講演)瀬戸内国際芸術祭にみる地域再生の進化と深化, 日本 NPO 学会「夏の瀬戸内セミナー2017」, 2017

5. 準市場における経営主体の行動比較 ―質の相違とクリームスキミングの観点から―,
社会政策学会第 133 回大会, 2016

【社会活動】

地方自治体や地域団体などからの協力依頼には、可能な限り対応するようにしており、社会活動に努めてきた。また学会の運営にも協力した。

2018 年 1 月-	コミュニティ政策学会編集委員
2017 年 7 月-2018 年 3 月	広島県指定管理者選定委員会自然公園部会委員
2017 年 3 月-2018 年 3 月	中国ろうきんNPO寄付システム&ひろしまNPOサポート倶楽部 助成金審査
2017 年 1 月	「中国地域のヘルスケア産業における IoT・ビッグデータの活用可能性調査」有識者ヒアリング
2016 年 6 月-2017 年 7 月	広島市男女共同参画推進センター・公募型男女共同参画共催事業選考委員会委員
2015 年 8 月-2020 年 7 月	大竹市・総合戦略推進会議 委員長
2014 年 6 月-2018 年 5 月	ひろしま NPO センター理事
2013 年 10 月-2017 年 10 月	大竹市・市民活動支援事業審査会
2013 年 7 月-	公益財団法人コミュニティ未来創造基金ひろしま 理事
2009 年 6 月-	広島市文化振興財団・文化活動助成事業審査委員会 委員

氏名	城多 努
職位	准教授
研究分野	公会計
研究キーワード	公会計、政府の経営学、高等教育機関、芸術文化団体の財政・財務

会計学、特に公会計を専門領域とし、会計をフィルターとして政治および経済社会を取り扱うことを研究の主眼としている。近年は特に地方自治体における管理会計ならびに高等教育機関、芸術文化団体における財政・財務を中心的な研究課題としている。研究によって得られた成果については、可能な限り教育ならびに社会活動へ還元することを基本方針としている。そのためのインターフェースのあり方についても関心を払い、実践している。

【教育活動】

教育活動については、専門教育においては、現代社会の、特に経済活動や行政などにおける諸問題について、会計という視点から俯瞰し、掘り下げることを主眼としている。またゼミナールにおいては、個人の問題意識を専門的な知識を用いて考え、自分なりに解決してゆく力を重視している。専門基礎教育においては学生生活を楽しく有意義に過ごすために必要な能力の涵養に努めている。

2016, 2017 年度	企業インターンシップ (科目コーディネーター)
2016, 2017 年度	学術研究の進め方
2016, 2017 年度	NPO 論
2016, 2017 年度	国際ビジネス入門 (科目コーディネーター)
2016, 2017 年度	卒業論文
2016, 2017 年度	基礎演習 I・II
2016, 2017 年度	専門演習 I・II
2016, 2017 年度	財務管理論 I・II
2016, 2017 年度	公会計論
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II
2016, 2017 年度	公会計論 I・II

【研究活動】

主な研究成果(公表可のもの)は以下の通り。2016-17 年度の研究活動は主として公立大学や地方自治体に対する実地調査などのインプットに時間を割いた関係で、アウトプットが少なくなってしまった。また研究委託元との契約により公表を行うことが出来ないものも含まれている。このことを踏まえ 2018 年度は個人の成果発表を重視したい。

1. 「公立大学法人化と財政措置～運営費交付金に着目して」 国際公会計学会第 20 回全国大会 神戸学院大学 2017 年 8 月 25 日
2. 「公共施設の統廃合-宇城市・宇部市の事例に基づいて」 広島市立大学会計セミナー 広島市立大学サテライトキャンパス 2018 年 3 月 10 日

ほか3件

【社会活動】

主たる社会活動は以下の通り。2017 年より政府会計学会 (JAGA) の国際研究担当理事を務める。同学会における国際的な連携と研究の推進に関する事業を担当。例年、日本公認会計士協会中国会および政府会計学会との共催で行われる広島市立大学会計セミナーでは幹事を務めている。2017 年は熊本県宇城市の天川竜治氏を迎え「災害と公会計―熊本地震、財政課はどう動いたか」を開催した。2018 年は「地方公共団体におけるファシリティマネジメントと地方公会計」でセミナーにおける司会を担当し、また「公共施設の統廃合―宇城市・宇部市の事例に基づいて」のタイトルで研究成果に関連する講演を行う。

2018 年 3 月 10 日	「広島市立大学会計セミナー:地方公共団体におけるファシリティマネジメントと地方公会計」
2017 年 3 月 27 日	「広島市立大学会計セミナー:災害と公会計―熊本地震、財政課はどう動いたか」
2017 年 2 月 -	政府会計学会 国際研究担当理事

氏名	金 栄鎬
職位	教授
研究分野	地域研究(現代韓国朝鮮研究)、政治学、国際関係論
研究キーワード	ナショナリズム、現代韓国・朝鮮、対外政策

教育活動は以前と比べて特に大きな変化はないが、2018 年度から始める一部クォーター科目の準備を必要とする。学内の大学運営にかかわる仕事が増えているため、模擬授業などになかなか手が回らないが、機会を見て貢献する予定。研究活動では気になっていたテーマのフォローが多少はできた。

【教育活動】

専門科目に受講生発表を適宜取り入れるなど学生の積極的な参加を促す新たな試みを行った。

2016, 2017 年度	東北アジア政治論
2016, 2017 年度	比較政治学
2016, 2017 年度	国際関係史(朝鮮半島)I・II
2016, 2017 年度	東北アジア政治論 I・II (大学院)
2016, 2017 年度	ハングル I
2016, 2017 年度	世界の文学 (オムニバス)
2016, 2017 年度	専門演習 I・II
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II
2016, 2017 年度	卒業論文
2017 年度	発展演習 II

【研究活動】

かつてより研究課題としてきたうち二つのテーマ(戦争の集合的記憶、比較政治研究)のフォロー研究を実行することができた。

1. 広島市立大学国際学部〈際〉研究フォーラム編, 〈際〉からの探求: つながりへの途, 文真堂, 2017
2. 金栄鎬, 韓国における北朝鮮認識、台湾における中国認識ー内政対立と分断・分裂体認識の対応の比較ー, 広島国際研究, Vol. 23, pp. 1-22, 2017
3. 金栄鎬, 韓日関係セミナー指定討論, 韓国国立外交院日本研究センター韓日関係セミナー, 2017
4. 金栄鎬, 意識調査からみる日韓の相互感情, 韓国学研究会第 25 回研究発表会, 2016

【社会活動】

学会、研究会等の活動に主に尽力している。

2017 年 7 月-2019 年 7 月	韓国・民主平和統一諮問会議委員
2016 年 10 月-2018 年 10 月	現代韓国朝鮮学会理事
2012 年 4 月-	韓国学研究会副会長

氏名	倉科 一希
職位	准教授
研究分野	アメリカ外交史、国際関係史
研究キーワード	冷戦史、米欧関係史

当該年度においては、教育活動および社会活動にやや大きな時間がとられ、研究活動には相対的に時間が割けなかった。これは、教育・社会活動の負担が大きかったこともあるが、科研プロジェクトとの関係で資金面の制約があり、大きな活動を行いにくかったこともある。海外での史料調査が中心となる研究であるため、研究資金の有無が研究の進展に大きな影響を与える。また、これまでの研究成果に新たな研究を加え、書籍化を図っていることも直近の成果が生まれていない一因である。学内業務としては、国際学部教務委員として通常業務に従事するとともに、カリキュラムの改編に関する業務へも従事した。

【教育活動】

学部教育については、国際学部における担当講義(1年生から4年生まで)および全学共通科目(1年生まで)を担当し、さらに専門演習(3年生)および卒論演習(4年生)を担当した。大学院研究については、2017年度に博士後期課程を修了した学生1名の博士論文審査委員会にて副査を担当した。また、博士後期課程に所属する学生の博士論文審査委員会における副査を担当することを想定し、論文指導にあたった。昨今の国際情勢およびアメリカ国内政治の動向からか、当該2年間には学生の受講数も増加傾向にある。この関心に応えられるよう、歴史的・理論的文脈を明確にした講義を提供できたと考えられる。

2016, 2017 年度	現代史 A
2016, 2017 年度	国際関係史入門
2016, 2017 年度	国際関係史(アメリカ)I
2016, 2017 年度	英語応用演習 IV
2016, 2017 年度	アメリカ政治論
2016, 2017 年度	国際関係史(アメリカ)II

【研究活動】

2016年度は科研プロジェクトの最終年度にあたったため、史料の取得と分析に務めた。17年度は科研を取得できなかったこともあり、これまでに取得した史料を整理して論文にまとめる作業が中心となった。その結果、個別の史料を歴史的・文脈に位置づけ、外交関係の展開を時系列的に把握することが可能となった。これらの作業の結果が、2. の単著論文である。その他、2017年7月にはアメリカ史学会・関西アメリカ史研究会合同例会において討論を担当した。

1. 共著書、『核はなぜなくなるのか II—「核なき世界」への視座と展望』法律文化社、2016
2. 単著論文、「ジョンソン政権と GATT ケネディ・ラウンド交渉」、『法学新報』Vol. 123, No. 7, pp. 305-329, 2017

【社会活動】

当該年度の社会活動の中心は、学会事務の執行が中心となった。下記の委員会業務に加え、国際政治学会アメリカ政治外交分科会責任者を担当した。これらの業務で特記すべき事例としては、国際安全保障学会の『国際安全保障』44 巻 1 号「同盟関係の現在」を編集委員として担当、日本アメリカ学会と American Studies Association の提携業務のため ASA2017 年年次大会への参加、日本国際政治学会における分科会の組織(2016 年度 2 件、2017 年度 1 件)があげられる。

2018 年 1 月-2020 年 12 月	国際安全保障学会 理事
2016 年 6 月-2019 年 5 月	日本アメリカ学会 国際委員
2015 年 9 月-2018 年 9 月	日本アメリカ史学会 編集委員
2015 年 1 月-2017 年 12 月	国際安全保障学会 編集委員

氏名	ゴーマン, マイケル
職位	准教授
研究分野	英米・英語圏文学
研究キーワード	American Modernism, Asian American Literature, Imperialism, Multiculturalism, Rural American Culture, Transnationalism

My primary scholarly interest is the cosmopolitan and transnational nature of North American rural life and culture. At a glance, this may seem far-removed from Japanese experience, but it has a direct bearing on my teaching, social contributions, and university service. By highlighting the diversity of human experience and by teaching literature, culture, and language classes in English, I hope to inspire and prepare students at Hiroshima City University for living in an increasingly international and multicultural society. Likewise, in my interactions with Japanese citizens in the community outside the university, I encourage others to relate their experiences in Hiroshima to those of people living in other parts of the globe.

【教育活動】

Most of my classes focus on literature and culture, but at the undergraduate level I also teach a class in English Writing. While I am not a language teacher, my courses are taught in English. As a result, to some extent all my classes help students to improve their English language skill.

2016, 2017 年度	英米文学特講 I
2016, 2017 年度	英文作法 I
2016, 2017 年度	アメリカ文化論 I
2016, 2017 年度	American Cultural Studies Seminar I (専門演習 I)
2016, 2017 年度	American Cultural Studies Thesis I (卒論演習 I)
2016, 2017 年度	American Literature & Culture I (graduate)
2016, 2017 年度	英米文学特講 II
2016, 2017 年度	英文作法 II
2016, 2017 年度	アメリカ文化論 II
2016, 2017 年度	American Cultural Studies Seminar II (専門演習 II)
2016, 2017 年度	American Cultural Studies Thesis II (卒論演習 II)
2016, 2017 年度	American Literature & Culture II (graduate)
2016 年度	特別講義 B (graduate)
2017 年度	特別演習 I (graduate)

【研究活動】

The bulk of my research and publications focus on transnationalism relating to two general themes: multicultural issues and environmental concerns. My recent work on the American novelist Willa Cather explores both. For instance, in "Rural Cosmopolitanism and Cultural Imperialism in Willa Cather's *One of Ours*" I focus on the challenges facing rural America's multicultural identity in

the aftermath of the Great War, and in a recently finished article, “*My Ántonia* and the Other Western Front: Slow Violence and Shadows of the Great War,” I unearth the violent subtext in the rural American setting of *My Ántonia*, a novel Cather published during World War I.

1. 〈原爆〉を読む文化事典, 青弓社, 2017
2. エコクリティシズムの波を超えて—人新世の地球を生きる, 音羽書房鶴見書店, 2017
3. Gorman, Michael, “Rural Cosmopolitanism and Cultural Imperialism in Willa Cather’s *One of Ours*,” *The Japanese Journal of American Studies*, Vol. 28, pp. 61-81, 2017
4. Gorman, Michael, Comments and Questions about ‘Ecocriticism and the Psychology of Information Processing: Taking a Seat at the Table’ by Professor Scott Slovic, エコクリティシズム・レビュー, No. 10, pp. 15-19, 2017
5. マイケル・ゴーマン, 核の不安から核の無関心へ—アメリカの大衆文化における核イメージの変容, 原爆文学研究, No. 15, pp. 112-126, 2016
6. ゴーマン、マイケル, グローバルな文脈から見たトウエイン, マーク・トウエイン 研究と批評, No. 15, pp. 86-90, 2016
7. Gorman, Michael, “From Nuclear Anxiety to Nuclear Apathy: The Evolution of Nuclear Imagery in American Popular Culture,” Atomic Bomb Literature International Conference, 2016

【社会活動】

In addition to being an active member of several scholarly organizations, I routinely share knowledge with members of the Hiroshima community through public lectures, volunteer courses, and other forums. Over the years, I have been asked to speak about Shakespearean plays, modern American poetry, the circumstances surrounding the 2016 US presidential election, and Cold War music culture.

2018 年 1 月	The 3rd HPI Public Lecture Series in English
2016 年 11 月, 2017 年 11 月	国際学部公開講座
2012 年-現在	中四国アメリカ学会

氏名	斎藤 祥平
職位	講師
研究分野	地域研究
研究キーワード	ロシア

教育活動、研究活動、社会活動に共通するのは、ロシア地域研究という専門分野との関連で活動を行ってきたことである。とりわけロシアと他地域(ヨーロッパ、アジアなど)との関係を意識してきたことが特徴である。大学運営に関しては、2017年度については入試委員会において入試業務およびオープンキャンパスに関連する業務に、国際交流委員会において大学間交流や留学関連業務に携わった。

【教育活動】

全学共通系科目として、ロシア語 I、II という第二外国語科目を担当し、学生の基礎的な語学力の向上に努めた。国際学部専門教育科目としてロシア研究、国際関係史(ロシア)I、国際関係史(ロシア)II といった講義形式の科目を担当したほか、ゼミナール形式の発展演習 II、専門演習 II、卒論演習 I、II を通じて研究手法やレポート・論文執筆の個別指導を行った。

2017 年度	ロシア研究
2017 年度	国際関係史(ロシア)I
2017 年度	国際関係史(ロシア)II
2017 年度	ロシア語 I
2017 年度	ロシア語 II
2017 年度	専門演習 II
2017 年度	卒論演習 I
2017 年度	卒論演習 II
2017 年度	発展演習 II

【研究活動】

査読付き日本語論文1本、査読付き英語論文1本を刊行した。特に、Crossing Perspectives in Manchukuo: Russian Eurasianism and Japanese Pan-Asianism, Jahrbücher für Geschichte Osteuropas, Vol. 65, No. 4, pp. 597-623, 2017 は主要業績となる論文だと考えている。そのほか、15th International Conference of European Association for Japanese Studies(リスボン)などにおいて英語による研究発表を2件行った。

1. ゴーレン・ウルバンスキーとの共著、帝国のあいだで、スクリーンの上で: 中露国境河川流域におけるロシア・コサック, 境界研究, No. 8, pp. 117-140, 2018
2. Crossing Perspectives in Manchukuo: Russian Eurasianism and Japanese Pan-Asianism, Jahrbücher für Geschichte Osteuropas, Vol. 65, No. 4, pp. 597-623, 2017
3. Judith Frolich, Tatiana Linkhoeva, Andreas Renner, Sheldon Garon, Christopher Szpilman, Rothen Kowner, Sven Saaler, Shohei Saito, The Circulation of Ideas between Japan and Northeast Asia: Possibility and Limits of Global History, 15th International Conference of European Association for Japanese Studies, 2017

4. Trubetzkoy's ethnographic vision of minorities across and beyond the Russian Empire (1905-1913): Parallel developments, transitional links by mediators, and multidirectional influences, The workshop Eurasianists' Views on "Asia": Past and Present, Russian/ Asian Studies, Graduate School of East and Southeast European Studies, LMU Munich, 2016

【社会活動】

レギーナ・ミュールホイザー講演会「～性暴力と性的搾取：独ソ戦（1941～45 年）下のドイツ軍の場合～」の共同通訳を通じて、講演者のレギーナ・ミュールホイザーのみならず、広島市男女共同参画推進センターをはじめ、様々な方と交流の機会を持つことができた。

2017 年 4 月	レギーナ・ミュールホイザー講演会「～性暴力と性的搾取：独ソ戦（1941～45 年）下のドイツ軍の場合～」、広島市男女共同参画推進センター、通訳（ウルリケ・ヴェールとともに）

氏名	城市 真理子
職位	准教授
研究分野	日本美術史、東洋美術史
研究キーワード	室町水墨画、肖像画、詩画軸、中世仏画

研究活動・社会活動に共通するのは、広島という地域性を重視していることである。有名なものの他、これまで知られていなかった古美術資料を掘り起こし、中世末・近世初期の広島の文化状況を再構築することを目標とした。中間的な報告として執筆・発表・講演を行い、社会人向けの講座などで紹介してきた。研究とその成果の社会への還元という意味では、順当な経過と思われる。教育活動に関しては、2016 年度は特に、着任以来の大学院(芸術学研究科)での長期に及ぶ指導学生たちの博論・修論が出揃った観があり、非常に感慨深い。また、同年度は、大学院の理論指導教員が 1 名欠員のため、通常よりも負担が大きかった。

【教育活動】

学部講義では学芸員資格科目が含まれ、芸術学部の受講生が多い。日本美術史の講義では、古代～近世の通史的な内容(絵画が主)に主要作家・作品に関する詳しい内容を付加。大学院の講義では、日本の中世～近世の絵画を素材に、主題や画面構成などの小テーマで構成。芸術学研究Ⅰ・Ⅱ(院ゼミ)において、『本朝画史』、『画筌』、Michael Sullivan “Chinese and Japanese Art”、『松崎天神縁起絵巻』を教材とし、講読等を行った。学部では、2016 年度の卒業生が卒論グランプリ入賞。大学院では、2016 年度に博士前期課程の院生が修了し、学芸員となった。また、博士後期課程の論文主担当の院生が 2 名、博士論文を提出し、修了した。

2016, 2017 年度	美術史Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	日本美術史
2016, 2017 年度	博物館実習(代表)
2016, 2017 年度	博物館資料論
2016, 2017 年度	芸術学研究Ⅰ・Ⅱ(分担)
2016, 2017 年度	日本美術史特講
2016, 2017 年度	美術史特講(日本)A・B
2016, 2017 年度	造形総合演習Ⅰ・Ⅱ(分担)
2016, 2017 年度	特別造形総合演習Ⅰ・Ⅱ(分担)
2016, 2017 年度	領域横断特別研究(分担)

【研究活動】

本学特定研究(先端的学術研究)「広島地域における中世・近世の美術(絵画・彫刻)の調査・研究」(2016～)により、広島県屈指の禅刹佛通寺(三原市)での絵画作品の調査の他、広島県立美術館、広島市郷土資料館等、公的機関で収蔵・管理している中世～近世初期の絵画資料・平安期の仏像について調査を行った。その成果は、三原市での講演の他、広島芸術学会での講演、展覧会での作品解説や図録掲載論文等に反映している。また、広島の地域性をテーマとするグラフ雑誌に、広島ゆかりの近世絵画の紹介文を連載(分担)している。広島の地域性と結びついた研究内容となっている。

1. 城市真理子, 小早川隆景と肖像画, 小早川隆景ものがたり 講演会記録集, 三原市教育委員会, 2017
2. 城市真理子, 小早川隆景像について, 小早川隆景展, 三原市教育委員会, 2017
3. 城市真理子, 菅原真弓, 五味あずさ, 広島県および周辺地域における文化財(古美術品)の基礎的調査および研究(二)浮世絵版画編, 広島市立大学 国際学部, 2017
4. 城市真理子, 小早川隆景の肖像画について, 『小早川隆景展』(展覧会図録), 2017
5. 城市真理子, 毛利興元像・幸松丸像について, 「毛利興元」(展覧会図録), 2016
6. (招待講演)城市真理子, 広島の中世・近世の絵画一周辺から中心を考える試み一, 広島の地域性と美術, 2017
7. (招待講演)城市真理子, 禅宗絵画・水墨画における「古い」一成熟した精神の表現一, 広島芸術学会, 2016

【社会活動】

学生たちとの活動では、社会連携事業「厳島八景に関する教育事業」(2016,2017)において、COC+事業への協力事業を行った。また、社会人向けの教育活動として、本学と県立広島大学との連携講座、広島大学の公開講座、中国新聞社の講座を担当し、主に、広島ゆかりの古美術品を紹介した。三原市・佛通寺に関する活動の他、広島芸術学会委員や頼山陽史跡資料館など、広島市を主とする社会活動が増えてきている。

2017 年 9 月 -	模擬授業, 呉宮原高校
2016 年 10 月	若冲を楽しむ, 中国新聞文化センター・ちゅーピーカレッジ
2016 年 9 月 -	広島大学公開講座「芸術と老年 Arts and Aging」, 広島大学総合科学部
2016 年 7 月 -	広島芸術学会 委員
2016 年 7 月	県立広島大学・広島市立大学連携講座, 県立広島大学・広島市立大学
2016 年 6 月 -	頼山陽史跡資料館, 南画精華展審査員
2013 年 9 月 -	三原市佛通寺文化財等調査委員会
2013 年 6 月 -	三原市文化財保護委員会

他 2 件

氏名	関村 誠
職位	教授
研究分野	美学・芸術論、思想史
研究キーワード	美、感性、像、イメージ、模倣、想像

大学院における学生の論文指導担当が、2016 年度は、博士前期学生 39 名、博士後期課程 14 名、2017 年度は、博士前期学生 28 名、博士後期課程 13 名であった。研究においては、海外での発表・講演等を複数行なった。「美」をテーマとする国際学会に学生を連れて行き、研究発表をさせることができた。その他、国内外での学会発表等の内容を大学での講義に反映させるよう努力した。大学運営の委員の中では、委員長であった研究科教務委員会の仕事を特に慎重に行なった。

【教育活動】

全学共通科目の「哲学A」は、前期の講義であり、1 年生が大多数であるため、大学の教養科目における勉学の導入の面も含めて講義した。「美学」は、国際学部と芸術学部の両方の学生を対象としており、制作者の立場からの問題と制作行為をいかに理解するかという観点も持ちつつ講義した。大学院における講義では、学生からの発言や議論の時間を多くとるようにした。学部と大学院における論文指導においては、学生が何を問題としているかを理解した上で、論文として仕上げていくための具体的な手続きを指導した。芸術理論研究分野の学生に対しては、専門研究を進めていく際に必要な文献の読解能力を高めるための演習を行なった。

2016, 2017 年度	哲学A
2016, 2017 年度	美学Ⅰ、美学Ⅱ
2016, 2017 年度	専門演習Ⅰ、専門演習Ⅱ
2016, 2017 年度	美学特講A、美学特講B
2016, 2017 年度	造形総合演習Ⅰ、造形総合演習Ⅱ
2016, 2017 年度	芸術学研究Ⅰ(2016, 2017)、芸術学研究Ⅱ(2017)
2016, 2017 年度	特別造形総合演習Ⅰ、特別造形総合演習Ⅱ
2017 年度	卒論演習Ⅰ、卒論演習Ⅱ

【研究活動】

プラトンの美学の研究においては、海外では、国際プラトン学会、ギリシャ哲学協会主催の国際学会、フランス哲学会連合大会で、国内では、ギリシャ哲学セミナーで発表した。プロティノス美学の研究を、科研費の執行も含めて行い、海外では、国際美学会、トゥールーズカトリック学院、台湾の中国文化大学で発表した。自らの専門分野の研究遂行において、他研究者の有益な意見をいただく機会となった。その他、国内外で、プラトンやプロティノスのギリシャ思想と、現代思想あるいは日本の思想文化との比較研究を行い、発表する機会を得た。日本の感性について海外で発表することで、日本文化がいかに受け取られているかを実感することができた。

1. Makoto Sekimura, Survenue de la beauté et illusion skiagraphique dans le *Phédon*, *XI Symposium Platonicum; Plato's Phaedo. Papers*, Cornelli, G. & Lopes, R. , International Plato Society, 952-958, 2016
 2. 関村誠, プロティノスにおける感覚と浄化 —第1論文「美について」を中心に、『新プラトン主義研究』STUDIA NEOPLATONICA 第 15 号、新プラトン主義協会編, 41-50, 2016
 3. Makoto Sekimura, The Question of *chôra* in Plato and of *fûdo* in Tetsuro Watsuji, *Global Ethics and Politics in Relation to Ecological Philosophy*, Edited by Maria Adam, pp. 207-217, 2016
 4. Makoto Sekimura, Immanence of beauty and sensitive function in Plotinus, *Proceedings of ICA 2016*, pp. 460-464, 2017
 5. Makoto Sekimura, Possibilité et impossibilité de la faculté sensitive chez Plotin, *Le possible et l'impossible*, Actes du XXXVème Congrès de l'ASPLF, pp. 107-113, 2017
 6. 関村誠, プロティノスの美の理論におけるエイドスとミシェル・アンリのカンディンスキー論におけるフォルム, *ミシェル・アンリ研究*, No. 7, pp. 41-61, 2017
 7. 関村誠, プラトンにおける分有論と美の到来 —『ヒippiアス(大)』から『パイドン』へ—, *ギリシャ哲学セミナー論集*, Vol. XV, pp. 1-15, 2018
 8. Makoto Sekimura, Moral Education and Assimilative Action in Plato's *Republic*, 29th International Conference of Philosophy (International Association of Greek Philosophy), 2017
 9. La relation à l'autre dans la culture japonaise, 3e Congrès du CRI2i, 2018
 10. Makoto Sekimura, La Naissance et la sensibilité des formes, un philosophe japonais devant la sculpture grecque, Collège internationale de philosophie, Paris, 2018
 11. (特別・招待講演) Makoto Sekimura, La question des images chez Platon, Conférence plénière du Congrès de l'ASPLF, 2018
- 他 14 件

【社会活動】

学会関係の活動の中では、広島芸術学会の学会誌の編集作業が毎年、公刊までの時間が限られており、間に合わせるために関係者と常に連絡をとりつつ行なっている。2014年から国際学会のフランス哲学会連合における副会長の一人となり、2018年3月に会長が交代してからは、学会を新しく若い研究者にとっても魅力的なものとする方向で話し合っている。2017年から『美術ひろしま』の編集委員となり、広島における美術活動をまとめるなかで、広島市立大学の学生および卒業生・修了生の制作活動も取り上げている。

2017 年-	『美術ひろしま』編集委員(広島市文化財団)
2014 年 8 月-	Vice-président de l'Association des Sociétés de Philosophie de Langue Française (フランス語哲学会連合)
2011 年-	広島芸術学会編集部部长
2009 年 10 月-	Directeur de la collection "Aisthesis" aux Éditions E.M.E. (Belgique)
2005 年 4 月-	広島芸術学会運営委員 (2011 年より編集部部长)
2002 年 7 月-	東京芸術大学美学・芸術論研究会委員

氏名	高久 賢也
職位	准教授
研究分野	国際金融論・国際マクロ経済学
研究キーワード	マクロ経済政策、開放経済、国際資本フロー

(2017 年 4 月に本学に着任したため)2017 年度は、自身の専門分野である国際金融論および国際マクロ経済学の専門性を活かして、主に教育活動と研究活動に重点をおいて取り組んできた。教育活動については、講義形式の授業では、学生の理解が促進されるように、基本的なことをなるべく丁寧に説明するように心がけ、演習形式の授業では、学生の主体性を促すように心がけたが、学生の興味を引き出すという側面で課題が残った。研究活動については、「国際資本移動とマクロ経済政策」という自身の研究テーマに基づいて、論文執筆や学会報告などを行った。

【教育活動】

2017 年 4 月に本学に着任してから、講義科目として、専門分野である国際金融論Ⅰ、国際金融論Ⅱ、および金融論といった科目を担当するとともに、演習科目として、基礎演習Ⅰ、発展演習Ⅰ、および発展演習Ⅱを担当した。さらに、オムニバス科目である国際ビジネス入門においては、主に国際学部の1年生を対象として、金融の基礎に関する講義を3回分担当した。なお、2017 年度は着任初年度ということもあり、専門演習と卒論演習を受講する学生はいなかった。

2017 年度	国際金融論Ⅰ
2017 年度	基礎演習Ⅰ
2017 年度	発展演習Ⅰ
2017 年度	国際金融論Ⅱ
2017 年度	金融論
2017 年度	国際ビジネス入門
2017 年度	発展演習Ⅱ

【研究活動】

2016 年度および 2017 年度については、「国際資本移動とマクロ経済政策」という研究テーマに基づいて引き続き研究活動を行ってきた。特に、世界金融危機以降の新興国における資本流入の増大と、それにとまなう資本流出リスクの高まりにより、近年、国際機関や各国政府において資本規制の有効性について議論がなされてきたという背景から、2016 年度および 2017 年度は、マクロ経済学の分野における主要な政策分析ツールの一つとなっている確率的動学一般均衡(DSGE)モデルを用いて資本規制の有効性に関する研究を行った。

1. Shigeto Kitano, Kenya Takaku, Capital Controls as a Credit Policy Tool in a Small Open Economy, The B.E. Journal of Macroeconomics, Vol. 18, No. 1, pp. 1-18, 2018
2. Shigeto Kitano, Kenya Takaku, Capital Controls and Financial Frictions in a Small Open Economy, Open Economies Review, Vol. 28, No. 4, pp. 761-793, 2017
3. Shigeto Kitano, Kenya Takaku, External Debt and Taylor Rules in a Small Open Economy, Pacific Economic Review, Vol. 21, pp. 541-559, 2016

4. Capital Controls and Financial Frictions in a Small Open Economy, 日本金融学会 2017 年度春季大会, 2017
5. Capital Controls as an Alternative to Credit Policy in a Small Open Economy, 日本金融学会 2016 年度秋季大会, 2016
6. Capital Controls and Financial Frictions in a Small Open Economy, 2016 年度第 1 回 日本金融学会中部部会, 2016

【社会活動】

2017 年度は主な社会活動はなかったが、今後、地域での公開授業の依頼などがあれば引き受けたいと考えている。

氏名	高橋 広雅
職位	教授
研究分野	経済成長論、行動経済学、財政・公共経済
研究キーワード	経済成長論、財政学、行動経済学

大きなくりでいうと社会規範と経済活動というテーマで研究を行っている。例えば、不正や、金銭の配分といった行動や規範に関心がある。また、増税スケジュールと消費行動の関係を調べるための経済実験も実施している。教育では、伝統的な経済学の基礎を理解した上で社会規範や行動経済学的な視点から様々な社会現象を捉えられるような教育を行いたいと考えている。行動経済学は学生の興味を引くようであるが、伝統的な経済学を学生に理解してもらうのはなかなか難しいと感じている。バランスとしては教育活動と研究活動の比率が高く社会活動の比率は低かった。大学運営では高大接続改革、特に入試改革の仕事を実施してきた。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度は全学共通科目の経済学、マクロ経済学Ⅰ、マクロ経済学Ⅱ、経済政策論Ⅰ、経済政策論Ⅱ、発展演習Ⅰ、発展演習Ⅱ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅱ、卒論演習Ⅰ、卒論演習Ⅱを担当した。経済学とマクロ経済学では経済学の初心者らを想定して基礎的な内容を丁寧に講義した。また、新聞記事などの現実の事例をできるだけたくさんとり入れるよう心がけた。経済政策論Ⅰ、経済政策論Ⅱ、マクロ経済学Ⅱは専門的な内容の講義を行った。これらの講義ではアンケートや簡単な経済実験を実施して学生が経済学に興味を持てるように努めた。専門演習では、スポーツの経済学や人の見た目と経済に関するテキストを取りあげた。

2016, 2017 年度	経済学
2016, 2017 年度	経済政策論Ⅰ
2016, 2017 年度	マクロ経済学Ⅰ
2016, 2017 年度	専門演習Ⅰ
2016, 2017 年度	専門演習Ⅱ
2016, 2017 年度	卒論演習Ⅰ
2016, 2017 年度	卒論演習Ⅱ
2016 年度	経済政策論Ⅱ
2017 年度	マクロ経済学Ⅱ

【研究活動】

参照点の違いが、彼らが不正行為を行うかどうかという意思決定に影響を及ぼすか否かを明らかにするため、経済実験を行った。実験の結果は、参照点の違いによって被験者の不正行為の意思決定が異なるものであった。まず、期待獲得金額が高い被験者は、期待獲得金額が低い被験者より、不正する確率が統計的に有意に高かった。このような行動の変化は損失回避によってもたらされるものと推測される。つまり、参照点が高い被験者は、実際の正解数でもらえる実験謝金が自分の参照点より低かった場合、損失回避により正解数を多く報告する傾向があった。また、不正の程度を表す不正の数に関しては、期待獲得金額が高い被験者は、期待獲得金額が低い被験者より、統計的に有意に多かった。

1. Zhang, W., Takahasi, H., and Shen, J., Does Physical Exercise Affect Tradeoffs between Fixed Pay and Performance-related Pay for Individuals?, 国民経済雑誌, Vol. 216, No. 6, pp. 25-46, 2017
2. Junyi Shen and Hiromasa Takahashi, The tangibility effect of paper money and coins in an investment experiment, Economics and Business Letters, Vol. 6, No. 1, pp. 1-5, 2017
3. Contagion of Self-Interested Behavior: Evidence from Group Dictator Game Experiments, German Economic Review, Vol. 17, No. 4, pp. 425-437, 2016
4. An Experimental Examination of Compensation Schemes and Level of Effort in Differentiated Tasks, Journal of Behavioral and Experimental Economics, Vol. 61, pp. 39-44, 2016

【社会活動】

中四国商経学会の理事を務めた。具体的には、広島市立大学所属の学会員のとりまとめを行った。また2017年7月には、美鈴が丘高校で「ゲーム理論で考える社会問題」というタイトルで模擬授業を実施した。

氏名	田川 玄
職位	教授
研究分野	地域研究、文化人類学・民俗学
研究キーワード	アフリカ、エチオピア、オロモ、ボラナ、牧畜民、ナショナリズム、社会変化、周縁社会と近代国家、人間と動物、開発、老人

はじめに四つの活動を概括する。教育活動においては、学部の全学共通科目、専門教育科目、ならびに基礎演習、発展演習、専門演習、卒論演習を担当し、また、大学院では必修科目を担当した。研究活動においては、科学研究費による研究プロジェクトを代表者および研究分担者として遂行した。これらの研究プロジェクトの成果および中間報告として、学会発表や論文作成を行った。大学運営においても、委員会運営に積極的に従事した。最後に社会活動では、学会運営に評議員や地方支部長として従事した。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度ともに大学院では学術における基礎的な方法論についての入門授業である「学術研究の進め方」を担当した。また、2016 年度、2017 年度ともに学部の専門科目では、「多文化共生入門」「比較文化論 I・II」「異文化間交渉論」を担当した。それぞれの授業においては、特定のテーマを設定した授業内容であるが、文化人類学にとどまらずそれと関連する学術領域の研究成果を授業に反映させた。同じく 2016 年度、2017 年度ともに全学共通科目では「文化人類学」「平和と人権 A」の担当をした。そのほか、2016 年度に発展演習 II、基礎演習 II、専門演習 I・II、卒論演習を担当した。

2016, 2017 年度	比較文化論 I
2016, 2017 年度	専門演習 I
2016, 2017 年度	アフリカ文化人類学 I
2016, 2017 年度	卒論演習 I
2016, 2017 年度	学術研究の進め方
2016, 2017 年度	アフリカ研究 I
2016, 2017 年度	多文化共生入門
2016, 2017 年度	平和と人権 A
2016, 2017 年度	比較文化論 II
2016, 2017 年度	文化人類学
2016, 2017 年度	卒論演習 II
2016, 2017 年度	アフリカ文化人類学 II
2016, 2017 年度	卒業論文
2016 年度	基礎演習 II
2016 年度	発展演習
2016 年度	専門演習 II
2017 年度	異文化間交渉論

【研究活動】

科研基盤 C「エチオピアの無形文化遺産をめぐる文化政治」を2017年度から開始しているほか、2016 年度、2017 年度と継続している共同研究として基盤 B「援助と投資の経済人類学：エチオピアの食料資源の市場化／脱市場化に関する実証分析」がある。また、2016 年度、2017 年度に参加していた共同研究の科研基盤 B「NGO活動の作りだす流動的社会空間について的人类学的研究ーエチオピアを事例として」の研究成果となる報告書と論文集に寄稿した。2016 年、2017 年ともに科研費などを利用しエチオピアに長期のフィールドワークを行なった。

1. 宮脇幸生編, NGO とアフリカの市民社会, 大阪府立大学人間社会システム科学研究科, 2017
2. 動物殺しの民族誌, 昭和堂, 2016
3. The Logic of a Generation-Set System and Age-Set System, Journal of Nilo-Ethiopian Studies, Vol. 22, pp. 15-23, 2017
4. 文化翻訳としての無形文化遺産ーエチオピアのガダ体系を事例として, 第 27 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会, 2018
5. 南部エチオピアのボラナ社会における老人ケア, 第 26 回日本ナイル・エチオピア学会学術大会, 2017
6. Gen Tagawa, Transformation of the Livelihood of the Borana-Oromo in Southern Ethiopia, IUAES Inter Congress 2016, 2016

【社会活動】

学会活動の社会への還元を行なった。具体的には、日本アフリカ学会中国四国支部の支部長として、アフリカ地域を対象とする研究者という枠をこえて、学生や市民にまで、アフリカ学会の活動を広げることができた。特に、ノンフィクション作家の高野秀行氏の講演会は、高野氏の多くのファンが参加した。また、横川シネマで行なった難民映画上映会では、本学国際学部や国連機関や NGO との共催であり、学会と他の社会組織と連携したイベントとなった。

2018 年 1 月	ドキュメンタリー映画上映会「難民・移民として生きる」, 日本アフリカ学会中国四国支部・広島市立大学国際学部
2016 年 9 月	ノンフィクション作家 高野秀行講演会「実験国家ソマリランドの正体」, 日本アフリカ学会中国四国支部
2015 年 5 月ー	日本アフリカ学会評議員
2011 年 6 月ー	日本アフリカ学会中国四国支部長
2009 年 4 月ー	日本ナイル・エチオピア学会評議員

氏名	田浪 亜央江
職位	准教授
研究分野	地域研究
研究キーワード	中東、パレスチナ、文化政策、パフォーミング・アート、イギリス委任統治

教育活動・研究活動・社会活動のバランスは、そこそこ取れたと認識している。個人的な願望としては研究活動により多くの時間を割きたかったが、教育活動や校務負担を考えると、この程度が現実的なのだろうとも思う。今後の作業の効率化・能率化で改善可能な仕事については善処をはかりたいが、ともすればエンドレスになりがちな学生対応などの感情労働にどの程度のエネルギーを割けるのか・割くべきかについては引き続き課題としたい。

【教育活動】

着任初年度ということもあり、特に前期は手探り状態であった。当初、授業の前提となる基礎知識が学生にどの程度共有されているのか、学生がどの程度関心をもって授業を履修しているのかなどが見えにくかったが、時間の経過とともに、比較的接触の機会の多い学生を通じて少しずつ様子が見えてきた。比較的少人数での授業が多いため、その点を生かした授業の形式を模索中である。授業以外にも、アラビア語の履修生を中心とした課外活動への関与、留学相談への対応などを行った。相談や依頼にどの程度応じるのかなど、学生との距離の取り方は次年度に引き続く課題である。

2017 年度	中東・アラブ研究I
2017 年度	エスニシティ論I
2017 年度	専門演習I(中東地域研究)
2017 年度	アラビア語I
2017 年度	アラビア語III
2017 年度	中東・アラブ研究II
2017 年度	エスニシティ論II
2017 年度	アラビア語II
2017 年度	アラビア語 IV
2017 年度	専門演習 II (中東地域研究)
2017 年度	基礎演習II

【研究活動】

目下の主な関心はイギリス委任統治下のパレスチナにおける、「移動」を切り口とした社会文化史、および現代パレスチナにおける文化活動(とりわけパフォーミング・アートと「文化構築」の関わり)であり、その線での研究活動を行った。これに関連して、夏季にパレスチナでフィールド調査、年度末にニューヨークで文献調査を行った。並行して前期はイラン・パペ著『パレスチナの民族浄化』を共訳刊行するための最終作業に従事し、後期は同書刊行を契機としたナクバに関する社会的啓発活動に従事した。成果としては本年度に新たにとりかかったものというよりも、これまで手を付けていたものをようやく少しずつ形にしているという段階である。

1. 広島市立大学国際学部叢書, 広島市立大学国際学部, 2018 (第 2 章「イギリス委任統治下のパレスチナにおけるスカウト運動」)
2. 長沢栄治・栗田禎子(編), 中東と日本の針路 「安保法制」がもたらすもの, 大月書店, 2016
3. 臼杵陽・鈴木啓之(編著), パレスチナを知るための 60 章, 明石書店, 2016
4. オスマン末期のパレスチナ人にとっての郷土／祖国——ハリール・サカーキーニーの日記を入りに, アジア太平洋レビュー, No. 14, pp. 68-80, 2017
5. 田浪亜央江, イギリス委任統治下パレスチナ人の旅行記に見る〈郷土〉, アジア太平洋レビュー, Vol. 13, pp. 46-57, 2016
6. イラン・パペ著『パレスチナの民族浄化 イスラエル建国の暴力』(法政大学出版局)の共訳, 2017 年 11 月
7. 「パレスチナ革命」という言葉について, 山形国際ドキュメンタリー映画祭 2017 政治と映画:パレスティナ・レバノン 70s-80s, 2017 年 10 月
8. バルフォア宣言 100 年に思う, 中国新聞文化面, 2017 年 7 月

【社会活動】

特定の肩書きを付しての社会活動、具体的に特記すべき活動は、行ってこなかったと認識している。他方、一市民として中東とりわけパレスチナ情勢に関する啓発活動、支援活動には継続的に取り組んでおり、自身の知見や経験をそれなりに社会に還元していると考えている。

氏名	寺田 英子
職位	教授
研究分野	地域研究、応用経済学、経済政策、商学
研究キーワード	交通経済学、交通政策、バス市場の制度分析、公共交通政策、中山間地の公共交通、イングランドの地方部の公共交通、港湾管理、港湾計画制度、港湾整備政策、ロジスティクス、港湾物流、港湾運営会社、国際拠点港湾、国際戦略港湾、敬老乗車証、民営化、英国の地域交通計画、乗合タクシー、マリナー、放置艇

2016 年度から 2017 年度は、学部運営面において、教務委員会の業務、特に 2017 年 10 月以降の高大接続会議における国際学部の領域認定制度の提案を準備する作業に時間を費やさざるを得なかった。その結果、教育、研究、および社会の各活動にあてる時間が犠牲となり、健康を害し、生産性が著しく低下したことが残念である。

この教訓を活かし、2018 年度は将来構想委員会、教務委員会、就職・キャリア形成支援委員会の業務を場合によっては断り、教育、研究、および社会活動にあてる時間を確保し、大学教員として専門知識を活かした貢献をしたい。2018 年度に入り学術誌に 2 本の論文を投稿し、6 月現在で 1 本採択されたので、海外の学術誌への投稿も実現したい。

【教育活動】

2016 年度から 2017 年度は、学部運営面において、教務委員会の業務、特に 2017 年 10 月以降の高大接続会議における国際学部の領域認定制度の提案を準備することに時間を費やさざるを得なかった。その結果、専門科目の講義内容を改善すること、および卒論指導にあてる時間が犠牲になったことが残念である。

この教訓を活かし、2018 年度は将来構想委員会、教務委員会、就職・キャリア形成支援委員会の業務を場合によって断り、教育にあてる時間を確保することとする。

すべての担当科目で学期中に 3 回の小テストを実施し、解答の解説と、理解に難がある概念については再説明をした。地域再生論は、具体例や質問を用意して受講者の集中力を維持できるよう工夫した。

2017 年度	都市経済学 I
2017 年度	専門演習 I (財政学)
2017 年度	交通論
2017 年度	財政学 I
2017 年度	基礎演習 I
2017 年度	英語応用演習 IV
2017 年度	都市経済学 II
2017 年度	専門演習 (財政学)
2017 年度	地域再生論
2017 年度	財政学 II
2017 年度	発展演習 II

【研究活動】

2016 年度から 2017 年度は、教務委員会の業務、特に 2017 年 10 月以降の高大接続会議における国際学部の領域認定制度の提案を準備することに時間を費やさざるを得なかった。その結果、研究活動に充てる時間が犠牲となり、査読付き論文を投稿することができなかった。2018 年度は過剰な業務を断り、研究調査にあてる時間を確保する。

2 年度にわたり国際拠点港湾に関するインタビュー調査を実施した。2016 年 2 月 5 日宇部興産(株)、9 月 26 日新潟県交通政策局、11 月 24 日広島県土木建築局、2017 年 9 月 11 日大阪府港湾局経営振興課、9 月 19 日名古屋港管理組合、2018 年 2 月 28 日山口県土木建築部、3 月 14 日四日市港管理組合。調査結果を分析して 2018 年度に学術誌に投稿する。

1. 寺田英子, 書評 小林潔司・古市正彦(編著)『グローバルロジスティクスと貿易』, 『運輸政策研究』, Vol. 20, No. 76, 70, 2018
2. 寺田英子, 「地方都市の港湾と漁港におけるプレジャーボートの放置艇対策—広島県の事例—」, 『アクセシビリティ改善のための交通システムとインフラ施策に関する研究』, Vol. 日交研シリーズ A-705, pp. 49-59, 2017
3. 寺田英子, 書評 Jason Monios 著, Institutional Challenges to Intermodal Transport and Logistics: Governance in Port Regionalization and Hinterland Integration, 海運経済研究, No. 50, pp. 66-68, 2016
4. 寺田英子, 英国(イングランド)の地域交通計画の運用にみる地方分権の難しさ, 『運輸と経済』, Vol. 76, No. 7, pp. 94-102, 2016
5. (特別・招待講演) 寺田英子, 「港湾研究の魅力について」, 中国港湾空港会, 2017
6. 杉田博章氏(横浜川崎国際港湾(株)), 寺田英子(広島市立大学)、小熊 仁氏(高崎経済大学)、小島克己氏(文教大学)、港湾と空港の経営改革, 寺田英子, 「国際拠点港湾におけるコンテナターミナル管理運営の改革」, 日本海運経済学会・第 51 回年次総会, 2017

【社会活動】

2016 年度から 2017 年度は、学部運営面において、教務委員会の業務、特に 2017 年 10 月以降の高大接続会議における国際学部の領域認定制度の提案を準備することに時間を費やさざるを得ず、外部組織の審議会委員としての貢献が不十分となったことが残念である。

2 年度にわたり、国土交通省の事業評価監視委員として 60 件以上の公共事業の費用便益分析を審議したので、専門知識が得られた。広島県地方港湾審議会委員として、長期構想の策定、および港湾計画の改定にむけた審議に参加した。広島県海域利用審査会では、広島県福山市横田漁港に建設されたプレジャーボートの係留保管施設の審査、および広島県放置艇解消のための基本方針を審議し、答申を提出した。

氏名	西田 竜也
職位	准教授
研究分野	国際関係論、国際安全保障
研究キーワード	国際関係、安全保障、外交

これまで教育活動では学生の主体性を生かすこと、研究活動では実際の政策に活用できる研究を目標としてきた。また、大学運営や社会活動でも積極的に貢献することも目標としている。

【教育活動】

教育活動では、学生が主体的かつ積極的に勉強に取り組むような授業運営を目指している。具体的には、単に講義で提供される知識を吸収するだけでなく、授業で何が問題なのかを自ら考え提起し、その問題について事前に学習してきた知識を用いて考え、最終的には自分の考えを作り上げ、発表共有できることを目的としている。そのため、授業の形式も学生によるプレゼンテーション、ディスカッションを中心として運営しており、必要な知識の準備のために宿題も課している。

2016, 2017 年度	国際安全保障論 I・II
2016, 2017 年度	専門演習 I・II
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II

【研究活動】

研究については、引き続き集団防衛同盟の研究を継続している。同研究を通じて、よりよい同盟の運営やあり方についての考察を進めることで、現実の外交政策や防衛政策に貢献することを目的としている。

1. 西田竜也,『アジアの平和と核 2019—国際関係の中の核開発とガバナンス』, 共同通信社, 2019
2. 金泰旭、浦上拓也、西田竜也編,『アジアの政治・経済・経営・文化から見る共同体形成』, 中央経済社, 2018
3. 広島市立大学国際学部＜際＞研究フォーラム編『＜際＞からの探究: つながりへの途』, 文眞堂, 2017
4. 西田竜也, 冷戦初期のアジア太平洋地域における多国間同盟システム, 広島国際研究, Vol. 24, 2018
5. 西田 竜也, 欧州防衛共同体(EDC)の意義と限界～集団防衛同盟の観点から～, 広島国際研究, Vol. 23, pp. 23-42, 2017
6. 西田竜也, 同盟理論からみた日米同盟, 法学新報, Vol. 123, No. 7, pp. 181-209, 2017
7. 西田竜也, アイゼンハワー政権のアジア太平洋地域での安全保障戦略と同盟政策～西太平洋集団防衛システムの構想～, 広島国際研究, Vol. 22, pp. 17-36, 2016
8. NISHIDA, Tatsuya, The Territorial Disputes Involving Japan: A Perspective from International Relations Theories, Security Diplomacy: Territorial Disputes and Governance, 2016

9. Jun Kurihara, Toshimichi Nagaiwa and Tatsuya Nishida, “The East and South China Seas: How to Prevent Accidental Collisions and Limit Their Politico-Military Escalation”, China in a Global Perspective No. 1. (http://www.canon-igs.org/column/160510_kurihara.pdf), 2016
10. 西田 竜也, アジア太平洋地域の安全保障環境, 国際シンポジウム「アジアの核・ガバナンス・平和」, 2018
11. 西田 竜也, WUDO、EDC、WEU そして NATO～冷戦初期の同盟形成について～, 日本国際政治学会 2017 年度研究大会, 2017
12. NISHIDA, Tatsuya, The Territorial Disputes Involving Japan: A Perspective from International Relations Theories, Security Diplomacy: Territorial Disputes and Governance, 2016

【社会活動】

教育・研究活動の成果を広く社会に共有し貢献すべく、社会活動にも積極的に取り組んでいる。具体的には公開講義やセミナーを行ったり、また、メディアへのインタビューも受けたりしている。日米リーダーシップ・プログラムといった知的交流にも貢献している。

2018 年 1 月	Hiroshima Peace Institute (HPI) Lecture Series Japan at the Crossroads: Prime Minister Abe, Security and the Constitution, 広島平和研究所
2003 年 7 月－	日米リーダーシップ・プログラム・フェロー

氏名	古澤 嘉朗
職位	准教授
研究分野	国際関係論
研究キーワード	紛争解決論、平和構築論、サブサハラ・アフリカ

研究面では①科研費・若手研究(B)「平和構築と法の多元性」関連の研究、そして②大和日英基金「重点助成」を基に英国ブラッドフォード大学との研究交流に努めた。教育面で特筆すべき点としては、主査として学部生5人の卒論指導を行い、その内の1人が2017年度に卒論グランプリ(主催:国際学部)で最優秀賞を受賞した。

【教育活動】

学部と大学院の講義を担当した以外に、学部3-4年生対象の演習の一環として長崎大学(2016年度)、立命館大学(2017年度)と合同ゼミを実施した。また夏期サマープログラム HIROSHIMA & PEACE の副委員長も2年間務めた。

2016, 2017 年度	紛争解決論I
2016, 2017 年度	国際政治学
2016, 2017 年度	基礎演習I
2016, 2017 年度	発展演習I
2016, 2017 年度	専門演習I
2016, 2017 年度	卒論演習
2016, 2017 年度	Hiroshima & Peace
2016, 2017 年度	紛争解決論II
2016, 2017 年度	英語応用演習 IV
2016, 2017 年度	専門演習II
2016, 2017 年度	卒論演習II
2016, 2017 年度	卒業論文
2017 年度	国際研究入門
2017 年度	紛争解決論I(院)
2017 年度	平和学概論(院)
2017 年度	紛争解決論II(院)

【研究活動】

下記以外に 2016・2017 年度中に執筆し脱稿し、2018 年公刊予定の原稿は、日本語論文1本、英語論文1本、日本語編著本2冊がある(2018 年3月末時点)。

1. 小笠原高雪・栗栖薫子・広瀬佳一・宮坂直史・森川幸一編、『国際関係・安全保障用語辞典』(第2版), ミネルヴァ書房, 2017 (担当:21 項目)
2. 広島市立大学広島平和研究所編、『平和と安全保障を考える事典』, 法律文化社, 2016 (担当:15 項目)

3. 古澤嘉朗, シエラレオネのチーフダム警察改革にみる国家の形—治安部門改革の変遷に着眼して(1996-2015 年),『国際安全保障』特集「主権国家体制の行方」, Vol. 45, No. 2, pp. 75-90, 2017
4. Yoshiaki Furuzawa, Japanese Peacekeeping at a Watershed, HCU-Bradford Joint Workshop (於:英国ブラッドフォード大学), 2018
5. 古澤嘉朗, 移行期・紛争後社会における法の多元性について—ケニアとシエラレオネの事例より, 日本国際政治学会研究大会・アフリカ分科会(於:神戸国際会議場), 2017
6. Yoshiaki Furuzawa, Chiefdom Police Training in Sierra Leone (2008-2015), Annual Conference of the International Association for Peace and Conflict Studies (於:英国マンチェスター大学), 2017
7. 古澤嘉朗, シエラレオネにおけるチーフダム警察改革(支援)についての考察, 日本アフリカ学会学術研究大会(於:信州大学), 2017
8. Masashi Urabe and Yoshiaki Furuzawa, Challenges for Peace Education Program in Hiroshima City, Adam Curle Conference (於:英国ブラッドフォード大学), 2016
9. (特別・招待講演)Yoshiaki Furuzawa, The Complexity of Documenting War, Its Aftermath, and Impacts – A Case of the Hiroshima Peace Memorial Museum, Adam Curle Symposium Launch Event – Documenting People's Agency in War (於:英国国立メディア博物館), 2016
10. Yoshiaki Furuzawa, Divided Views on Community Declarations from northern Kenya, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences Inter Congress (於:クロアチア・Hotel Palace Dubrovnik), 2016

【社会活動】

地域との連携を意識し、広島県主催の高校生対象事業「ひろしまジュニア国際フォーラム」(2016・17 年度 8 月)、また公益財団法人ひろしま国際センター主催の JICA 研修員対象事業「広島平和研修」(2017 年2・9・11 月)にファシリテーターとして関わった。また国連難民高等弁務官駐日事務所 (UNHCR) とのこれまでの関係を発展させるべく、難民映画祭との連携を模索した。

2018 年 1 月 26 日	日本アフリカ学会映画上映会「難民・移民として生きる」(主催:日本アフリカ学会中国四国支部 後援:国連 UNHCR 協会・UNHCR 駐日事務所 於:横川シネマ 担当:企画運営)
2017 年 11 月 12 日	国連 UNHCR 難民映画祭(共催:国連 UNHCR 協会・UNHCR 駐日事務所 於:広島国際会議場 担当:映画「とらわれて」トークゲスト)
2017 年 8 月 18・19 日	ひろしまジュニア国際フォーラム(主催:広島県 後援:外務省 於:広島国際会議場 担当:ファシリテーター)
2014 年 7 月-	特定非営利活動法人ピースビルダーズ・理事(非常勤)

他 4 件

氏名	武藤 彩加
職位	准教授
研究分野	言語学、現代日本語学(認知意味論)、日本語教育
研究キーワード	言語普遍性、相対性、生理的動機づけ、環境的動機づけ、認知的動機づけ

2000 年以來、継続的に留学生に日本語を教える仕事をしている。研究活動は認知言語学の枠組みでももに五感に関わる表現に関する研究調査を行っている。

【教育活動】

市立大で行なわれている留学生向け日本語科目のコーディネータをしており、自身も日本語の授業を担当している。ほかに、日本人学生を対象とした日本語学、日本語教育学に関する講義やゼミ、大学院における講義および修士論文の主査(3 名)と博士論文の副査も担当している。

2016, 2017 年度	日本語学・日本語教育学 I・II
2016, 2017 年度	日本語 I～IV
2016, 2017 年度	専門演習
2016, 2017 年度	卒論演習
2016, 2017 年度	日本語教育論 I・II
2016, 2017 年度	Japan Time I・II (夏期集中プログラム(Hiroshima and Peace))

【研究活動】

現在行っている研究調査と 2016 年～2017 年度に行った研究活動は以下の通りである。

[科研費]2016 年 4 月～2021 年 3 月(予定):文部科学省研究補助金, 基盤(C), 味覚語彙における普遍性と多様性に関する研究, 研究課題番号 16K02636, 研究代表者, 獲得額 4,290 千円.

[著書]

1. 広島市立大学国際学部<際>研究フォーラム編, からの探求:つながりへの途, 文真堂, 2017
2. 大橋正房他, ふわとろ SIZZLE WORD 「おいしい」言葉の使い方, B・M・FT 出版部, 2016

[論文]

3. 武藤彩加, 味を表す表現における動機づけに関する一考察 —生理的動機づけ, 認知的動機づけ, および環境的動機づけ, 日本認知言語学会論文集, Vol. 18, 2018
4. 武藤彩加, 味を表す場面における「事態把握」に関する一考察—複数の言語との比較から, 比較文化研究 久留米大学 比較文化研究所, Vol. 53, pp. 20-38, 2017
5. 武藤彩加, 中国語の味を表す場面における「話者に意識されない男女差」に関する一考察—母語話者を対象としたアンケートに基づく事前調査, 広島国際研究, Vol. 23, pp. 93-105, 2017

6. 武藤彩加, 味を表す表現における意味的動機づけに関する一考察ー生理的動機づけ、認知的動機づけ、および環境的動機づけ, JCLA Conference Handbook 2017, pp. 223-223, 2017
7. 武藤彩加, 日本語におけるテクスチャーを表すオノマトペスウェーデン語と英語、および韓国語と比較してー, Journal CAJLE 第 17 号, pp. 63-85, 2016
8. 武藤彩加, 英語母語話者によるおいしさの表現ー日本語との比較を通してー, 広島国際研究, Vol. 22, pp. 105-115, 2016

〔研究発表〕

9. 武藤彩加, 味を表す表現における意味的動機づけに関する一考察ー生理的動機づけ、認知的動機づけ、および環境的動機づけ, 日本認知言語学会第 18 回全国大会, 2017
10. 武藤彩加, 味を表す場面における「好まれる言い回し」(Fashion of Speaking)に関する対照言語学的考察ー中国語と韓国語、および英語とスウェーデン語間の比較を通して, カイロ大学日本学研究所創設記念シンポジウム非西欧社会の近代化再考: 日本とアラブ(エジプト)の場合, 2017
11. 武藤彩加, 「味を表す表現」使用にみられる男女差ー中国語母語話者を対象とした調査からー, 日本語教育国際大会, Bali ICJLE2016, 2016
12. 武藤彩加, 中国語母語話者による味を表す表現ー日本語との比較から, 日本語教育学会研究集会第 2 回中部地区, 2016
13. (特別・招待講演) 武藤彩加, 「味覚の共感覚表現」の動機づけに関する一考察, 日本語用論学会メタファー研究会, 2017

【社会活動】

2016 年～2017 年度に行った社会活動は以下の通りである。

2015 年 10 月-	広島市立大学ライブキャンパス講義「日本語学・日本語教育学」
2015 年 8 月-	広島市立大学オープンキャンパスミニ講義「日本語教育学入門」(高校生および保護者対象)

氏名	目黒 紀夫
職位	講師
研究分野	アフリカ地域研究、環境社会学、開発社会学
研究キーワード	マサイ、野生動物保全、開発援助、牧畜民、ケニア、アフリカ、環境保全、観光

過去2年間の教育活動、研究活動、社会活動については、それら3者が有機的に連動する形で取り組むことができたと考える。研究活動は毎年の現地調査に基づき着実に進展しており、その成果は学術論文や教科書として公表されるだけでなく、講義・演習の際の話題や市民向けの社会活動の教材にもなってきた。現在、研究対象であるアフリカは急激かつ大きな変化の最中にある。そうした時、大学教員の研究を現在進行形のものとして学生や市民に伝えることは、教育および研究の機関である大学の意義を理解してもらう上で重要だと考える。そこで、3つの活動の連動性を意識しながら、今後も取り組みを続ける考えである。

【教育活動】

過去2年間に、1年生向けの共通科目と2年生以上を対象とする専門科目、各学年次における演習科目(ゼミ)、そして大学院生向けの専門科目を担当してきた。科目により受講生の数だけでなく興味関心も異なるので、それぞれが対象とする年次だけでなく、その年に受講している学生の人数や様子を見ながら講義の内容や議論の進め方などを工夫してきた。受講生には一定の評価を得ているが、各年・各科目の学生の反応に注意を払いながら、内容については卒業論文に向けた長期的な計画を意識しながら、毎年改善の可能性を検討していくつもりである。

2016, 2017 年度	国際開発論Ⅰ
2016, 2017 年度	地球環境論
2016, 2017 年度	NPO 論
2016, 2017 年度	発展演習Ⅰ
2016, 2017 年度	国際開発論Ⅱ
2016, 2017 年度	アフリカ研究Ⅱ
2016 年度	基礎演習Ⅱ
2016 年度	発展演習Ⅱ
2017 年度	国際研究入門
2017 年度	地域課題演習
2017 年度	専門演習Ⅰ
2017 年度	平和学概論
2017 年度	地域再生論
2017 年度	専門演習Ⅱ

【研究活動】

過去2年間の研究活動としては、主には4件の科学研究費助成事業に携わってきた(4件中1件は個人研究、3件はグループ研究である)。それらは「マサイの伝統の表象」「アフリカの潜在力」「アフリカの観光」「アフリカの土地問題」を主題としており、ケニアでの現

地調査およびアフリカ各国での国際会議への参加、国内外の学会等の研究集会における発表を踏まえて、日本語および英語による学術論文の執筆という形でいずれも順調に成果を公表してきた。また学術論文とは別に、教科書の分担執筆も2件行なった。いずれも順調に進展しているので、引き続き精力的に研究活動を行なう考えである。

1. 島田周平, 上田元, 成澤徳子, 水野一晴, 遠藤聡子, 池谷和信, 寺谷亮司, 佐川徹, 松村圭一郎, 佐藤廉也, 藤岡悠一郎, 丸山淳子, 伊藤千尋, 小川さやか, 大門碧, 遠藤貢, 福西隆弘, 西浦昭雄, 吉田栄一, 目黒紀夫, 荒木美奈子, 松本尚之, 『世界地誌シリーズ8 アフリカ』, 朝倉書店, 2017
2. 目黒紀夫, 「万能薬」ではなく「サプリ」として一ケニア南部に暮らすマサイにとっての観光の意味, アフリカ研究, Vol. 92, pp. 83-94, 2018
3. Toshio Meguro, Gaps between the Innovativeness of the Maasai Olympics and the Positionings of Maasai Warriors, Nilo-Ethiopian Studies, Vol. 22, pp. 27-39, 2017
4. 日本アフリカ学会研究奨励賞, 日本アフリカ学会, 2016

他 9 件

【社会活動】

特定非営利法人の理事兼事務局長として、研究活動を基にした国際支援活動や国内における情報発信事業を行なってきた。特に後者については、メールマガジンの発行や写真展の開催という形で、専門的な知識を持たない市民に向けて今日のアフリカを取り巻く状況や、そこに暮らす人々の様子を伝えることを継続的行なってきた。また、市民向けの公開講座でも講演を行ない、大学教員としてどのようなフィールドワークを行なっているのかも含めて研究活動を紹介した。参加者との間で活発に議論を交わすことができ、評判も上々であった。様々な媒体を活用して、今後も研究活動の内容や成果を広く社会に発信していく予定である。

2017 年 10 月	県立広島大学・広島市立大学連携公開講座, 県立広島大学・広島市立大学
2012 年 6 月 -	特定非営利活動法人アフリック・アフリカ理事／事務局長

氏名	山口 光明
職位	教授
研究分野	健康心理学、運動心理学
研究キーワード	健康心理学(健康づくり、まちづくり)、運動心理学(スポーツ、健康づくり)

教育・研究・社会貢献の一貫したテーマとして、「磨けば光る瀬戸内の魅力」を自分たちの視点で探索し、すぐれた観光資源を VR(バーチャルリアリティ)の技術を用い、その魅力を発信することで地域のブランディングを目指しています。

そのプロセスにおいて、マリホ水族館(広島市)や水産海洋技術センター(呉市)からの技術相談に応えながら、水中撮影やバーチャルリアリティ(図1)の技術を高める事が必要不可欠であり、国際学部だけでなく情報科学部の教員や学生の力が必要となっています。

また、学生の地域に出る力を伸ばすためにも、瀬戸内ブランドを確立し、地域経済活性化や豊かな地域社会実現を目的としている せとうち DMO(図2)と情報の共有をしつつ、楽しいプロジェクトとして展開できればと考えています。



図1 バーチャルリアリティのイメージ



図2 せとうち DMO のホームページ

【教育活動】

地域社会の健康づくりやまちづくりについて学生達と一緒に取り組んでいます。その際、客観的なデータの収集と分析のために地域課題分析システム(RESAS:リーサス)を活用し、学生達の関心に合ったデータ(人口、まちづくり、産業、医療・介護、就職など)が入手できるようにしています。また、専門演習、卒論演習においては、学生がゼミ室において本を通した学びだけに終わらないように、学外の団体や研究機関(せとうち DMO、JR 西日本、水産海洋技術センター)と情報の共有をしながら、地域の活性化について共に考える機会をできるだけ設けるようにしています。

2016, 2017 年度	健康科学
2016, 2017 年度	体育実技 I (テニス、国際・芸術)
2016, 2017 年度	体育実技 I (テニス、情報科学)
2016, 2017 年度	体育実技 I (テニス、情報科学 木1)
2016, 2017 年度	専門演習 I
2016, 2017 年度	卒論演習 I
2016, 2017 年度	卒業論文

2016, 2017 年度	健康心理学
2016, 2017 年度	体育実技Ⅱ(テニス、国際・芸術)
2016, 2017 年度	体育実技Ⅱ(テニス、情報科学)
2016, 2017 年度	専門演習Ⅱ
2016, 2017 年度	卒論演習Ⅱ

【研究活動】

「瀬戸内の観光振興と外国人観光客のインバウンドを目指した地域活性化プロジェクト」(COC+プロジェクト)を2016年度、2017年度に実施。

瀬戸内の旅の思い出を想起させてくれる芸術作品(作品名:瑞風ログ)の創作と展示(展示場所:やまだ屋本社ロビー)、瀬戸内の魅力的なスポットの発掘(竹原市大久野島)、地域特産品(呉市のフォアグラハギ)のブランディングなどに取り組み、その成果の一部を2017年12月に宮島の広島経済大学成風館にて行われた「大学連携による学生の観光に関する研究・活動発表会」にて発表しました。

「瀬戸内の魅力」を発信する方法として、VR(バーチャルリアリティー)技術の活用を検討しています。具体的には、全天球カメラで水中撮影した映像を、VRゴーグルで見ることで瀬戸内の魅力を体感できるシステムの開発を呉市の水産海洋技術センターとの共同研究を通して行います。

1. 原田紗希、高橋雄三、山口光明, 状況のモニタリング精度と発揮されるリーダーシップ・タイプとの関係, 第46回人類働態学会東日本地方会, 2017

【社会活動】

2017年度から開設された「地域課題演習(瀬戸内の水産と魚の魅力を楽しむ)」を通して、学生達と瀬戸内海の水産の状況や魚の生態を学び、近海魚「チヌ(クロダイ)・フォアグラハギ」を対象にしながら、バーチャルリアリティーの技術を活用した瀬戸内の魅力発信の可能性について考えています。

現地での活動は、マリホ水族館(広島市)と広島県水産海洋技術センター(呉市)の2箇所で行います。瀬戸内海の魚の魅力の伝え方について考え、魚を身近に感じられる映像を撮るために全天球カメラを使った水中撮影を試みます。

2009年4月-	広島県テニス協会普及委員会委員
2008年4月-	広域公園管理運営協議会

氏名	山根 史博
職位	准教授
研究分野	環境政策・環境社会システム、経済政策
研究キーワード	環境経済評価、不確実性認知、生態系サービス、原子力災害

◆研究活動は「経済学の理論をベースに、統計調査・分析を用いて社会問題の原因やメカニズムを実証的に解明することで、具体的な改善策の提言に繋げること」であり、その知識やスキルを学生に教授し、市民向け講座などで社会への普及を図っている。教育・研究・社会活動へのエフォートの比率はおおよそ4:5:1。◆大学運営に関しては、社会連携委員と就職キャリア委員のほか、COC+関連でカリキュラム編成・アートプロジェクト・観光関連データベースのWGメンバーを務めた。

【教育活動】

◆基本統計学は従来 15 コマ 2 単位で開設していたが、2016 年度からⅠ(記述統計、確率論)とⅡ(標本分布、推測統計学)に分け、それぞれを 15 コマ 2 単位で開設することで学修内容の拡充を図った。◆ミクロ経済学は、2017 年度に各週で取り上げるトピックスのラインナップを改編し、Ⅰは公務員試験などで出題される基礎編(需要、供給、市場均衡)、Ⅱはビジネスや行政で活用できる応用編(価格戦略、不完全競争、公共財、負の外部性など)にすみ分け、学生の目的に合った履修選択をしやすいようにした。◆専門演習では、統計分析に関するテキストの輪読、統計ソフトを用いた分析の実践を通して、統計分析スキルの習得に取り組んだ。◆卒論演習では、「ラテンアメリカの経済成長」、「ホテル予約客のキャンセル行動」、「大学新卒生の地元就職と地元への愛着との関係」をテーマとする 3 名の卒論指導を行った。

2016, 2017 年度	基本統計学Ⅰ
2016, 2017 年度	基本統計学Ⅱ
2016, 2017 年度	ミクロ経済学Ⅰ
2016, 2017 年度	ミクロ経済学Ⅱ
2016, 2017 年度	発展演習Ⅱ
2016, 2017 年度	専門演習Ⅰ
2016, 2017 年度	専門演習Ⅱ
2016, 2017 年度	学術研究のための基礎統計
2016 年度	発展演習Ⅰ
2017 年度	地域課題演習
2017 年度	卒論演習Ⅰ
2017 年度	卒論演習Ⅱ
2017 年度	卒業論文
2017 年度	環境経済学Ⅰ
2017 年度	環境経済学Ⅱ

【研究活動】

◆2011 年以降、原子力災害に関する研究(「福島第一原発周辺の資産価値変動」、「低線量被曝による健康リスクや原発事故の再発リスクに対する人々の認知と不安のメカニズ

ム」)に取り組んでおり、現在も継続中である。◆2016 年度から環境省環境研究総合推進費プロジェクト S-15 に参画することになり、自然科学の専門家と連携しながら、国内の自然資本・生態系サービスの社会・経済的価値の評価、並びにそれらを持続的に利用・保全するためのガバナンスの解明に取り組んでいる。2016・2017 年度には web 調査を実施し、「生態系サービスに対する人々の価値評価と competence(知識や親しみ)との関係」、「地域住民としてのアイデンティティ効用と地域固有生態系サービスとの関係」に関する分析を行った。◆その他、ゼミ生と共同で「加工食品の品質管理水準」に関する統計調査に取り組んだ。

1. K. Matsushita, K. Taki, F. Yamane and K. Asano, Shadow Value of Ecosystem Resilience in Complex Natural Land as a Wild Pollinator Habitat, American Journal of Agricultural Economics, 2017
2. 浅野耕太・山根史博, 生態系サービスの湧出の場としての農村の社会経済的価値, 農村計画学会誌, Vol. 36, No. 1, pp. 165-169, 2017
3. K. Matsushita, F. Yamane, K. Asano, Linkage between Crop Diversity and Agro-ecosystem Resilience: Nonmonotonic Agricultural Response under Alternate Regimes, Ecological Economics, Vol. 126, pp. 23-31, 2016
4. 山根史博, 原発事故前後における福島第一原発周辺の家賃変動:空間線量率との関係, 日本原子力学会 2017 年春の年会, 2017
5. 山根史博・大垣英明・浅野耕太, 福島第一原発周辺の資産価値変動:放射能汚染と減染との関係, 日本原子力学会 2016 年春の年会, 2016
6. (特別・招待講演)低線量被曝や原発事故再発に対する人々の曖昧なリスク認識と不安, 農村計画学会, 西日本地区セミナー『リスクと地域のガバナンス研究の最前線』, 2016

【社会活動】

◆所属学会の編集委員などを務めた。◆高校生や行政職員を対象に統計リテラシーや統計調査に関する講義を行った。

2018 年 1 月	政策形成における統計の利活用【広島市役所職員研修】、広島市役所
2017 年 10 月	なぜ万人が統計学を知るべきなのか?【高校生のための広島市役所サテライト講座】、柳井市、広島市立大学
2017 年 4 月-	日本原子力学会編集委員
2016 年 4 月-2018 年 3 月	日本農業経済学会編集委員
2015 年 4 月-2017 年 3 月	日本公共政策学会学会賞選考委員

氏名	湯浅 正恵
職位	教授
研究分野	社会学
研究キーワード	社会秩序、制度、政治的なもの、アイデンティティ、社会運動、低線量被曝

原子力発電、原発事故、そして低線量被曝と広島の問題が、2016/2017 年度の教育、研究、社会活動の中心テーマだった。社会活動では「黒い雨」の被爆者の方たちから多くを学ばせていただき、国内外の学会で報告、出版する機会を得た。また国際学部の夏期集中講座である Hiroshima and Peace では責任者を務め、重責ながらも、やり甲斐を感じている。学外での平和首長会議の広島・長崎講座や、NGO の平和研修の講師の仕事も楽しく実り多い仕事であった。

【教育活動】

講義科目は特に大きな変更はないが、講義方法として、学生同士のディスカッションや発表の割合を増やした。学生は、クラスの他の学生の意見から多くを学び、良い刺激を受けていることがわかる。さらに講義内容について、これまでも毎回コメントペーパーを提出させ、質問を受けつけ、理解度を確認してきたつもりであったが、学生のディスカッション内容の発表から、理解できていない点をより明確に確認できた。今後でもできるだけ多くの科目で、ディスカッション時間を増やしていきたいと考えている。

2016, 2017 年度	社会学
2016, 2017 年度	国際社会論 I・II
2016, 2017 年度	労働と社会
2016, 2017 年度	英語応用演習 IV
2016, 2017 年度	国際研究入門
2016, 2017 年度	現代社会論 I・II
2006, 2017 年度	専門演習 I・II
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II
2016, 2017 年度	Hiroshima and Peace
2017 年度	平和学概論

【研究活動】

原発問題から、リスク社会における核、科学と政治に興味を持ち、研究を進めてきた。またその研究・教育手法としての芸術にも関心があり、アートベース・リサーチについても学会発表を行い、実践もしている。これらの研究の成果は、授業のみならず、本学を訪れる協定校学生や、首長会議の「広島・長崎講座」、また、NGO 主催の平和講座などで講義として提供した。今後は、これらの研究成果を、著作としてまとめたいと考えている。そ

のための理論枠組みとして、ハンナ・アーレントの政治理論を現在勉強中であり、学会発表なども含めて継続していきたい。

1. 戸田清、湯浅正恵, 「科学技術を暴力と平和の視点から考えるために」 「編集後記」 『平和研究第 48 号 科学技術と暴力』, 早稲田大学出版部, 2018
2. < 際 > からの探求: つながりへの途, リスク社会のシステム境界—東京電力福島第一原発事故の言説を事例としての一考察, 文眞堂, 2017
3. Kasai, A. and Yuasa, M., Out of Shadow: A collaborative arts performance for the black rain hibakusha, Journal of Applied Arts & Health, Vol. 7, No. 2, pp. 175–190, 2016
4. 破局へと向かう時代の公共性: ハンナ・アーレントの判断論からアートベース・リサーチについての一考察, 日本社会学会大会, 2017
5. Invisible Foreigners: Human Rights Issues of Japanese Immigration and Refugee Policies, 2017 Annual Meeting of American Sociological Association, 2017
6. Judging Nuclear Issues in Hiroshima: Challenge to Interdisciplinary Research on an unsettled past for an alternative future, Plenary session in Twelfth International Conference on Interdisciplinary Social Sciences, 2017
7. TEPCO's Fukushima Accident and Black Rain Survivors Movement: Reactivating nexus of knowledge production, expertise and government decisions, 6th STS (Science, Technology and Society) Italia Conference, 2016
8. 平和実践としてのソーシャリー・エンゲイジド・アート—日本平和学会 2016 春季大会 アートパフォーマンス「黒い雨」を振り返って—, 日本平和学会秋期研究集会, 2016
他 1 件

【社会活動】

広島「黒い雨」訴訟や福島原発訴訟から、低線量被曝の実態とそれをめぐる社会関係、政治について多くを学んだ。国内外の学生や市民の方々への講座提供は、いつも楽しい社会活動である。

2017 年 9 月 30 日	アジア保健研修所海外研修生広島平和研修特別講義
2017 年 9 月 9 日	呉映画サークル招聘講義
2017 年 8 月 25 日	マレーシア科学大学学生への特別講義
2017 年 7 月 19 日	祇園北高校模擬授業
2017 年 3 月 8 日 2018 年 3 月 7 日	国際基督教大学ロータリー平和センター広島研修特別講義(広島・長崎講座)
2016 年 11 月 19 日	呉映画サークル招聘講義
2016 年 10 月 1 日	アジア保健研修所海外研修生平和研修特別講義
2016 年-	原爆「黒い雨」訴訟世話人

氏名	横山 知幸
職位	教授
研究分野	翻訳論
研究キーワード	翻訳研究、英日翻訳、英文和訳、英語教育

教育活動に関しては、これまで蓄積してきたことを、学生や状況の変化に応じて、着実にアップデートしている。また、教職課程の再認定申請の英語コアカリキュラム分野の担当になったので、教職単位に関係する英語分野の授業のシラバス等の変更に関する各種業務も行っている。研究活動に関しては、従来から行っているコンピュータを用いた数値分析をもう少し発展させるとともに、英文和訳や英日翻訳の最も重要な側面に関する質的・理論的な議論も行っている。社会貢献の比重が比較的小さいが、必要とされ依頼されたことなどはきちんと行っている。大学運営に関しては、学部の人事委員会業務や入試関係業務等を誠実にしている。

【教育活動】

例年通り、学部や大学院の翻訳関係や英語教育関係の授業を行っている。学部のゼミや卒論指導、大学院の修士論文や博士論文の副指導も行っている。ゼミや大学院の極少人数の授業以外では、独自の授業用のサーバを研究室に設置し、XOOPS 系のコミュニティサイトを用いて、学生に積極的な作業を行わせるタイプの授業を行っている。学生の理解の把握や説明のための情報提示の利便性の向上を考えている。このサーバの書き込みを見れば、学生の理解の変遷がある程度わかるので、それに応じて説明情報を毎年少しずつ更新している。また、英語教育関係の授業では、教職課程の再認定作業のため、近い将来に増える授業内容の検討を行っている。

2016, 2017 年度	翻訳論 I
2016, 2017 年度	英文法論
2016, 2017 年度	英語読解法 I
2016, 2017 年度	翻訳論 I(大学院)
2016, 2017 年度	卒論演習 I
2016, 2017 年度	翻訳論 II
2016, 2017 年度	教科教育法(英語)A
2016, 2017 年度	英語読解法 II
2016, 2017 年度	翻訳論 II(大学院)
2016, 2017 年度	卒論演習 II
2016 年度	国際研究入門 (オムニバス)
2016 年度	専門演習 I
2016 年度	専門演習 II

【研究活動】

二本の論文を書いた。一つ目の論文では、前半で、「ジップの法則」、「品詞」と「文型」の発展、「独案内」と呼ばれる明治期の自習書について説明し、後半で、「独案内」一冊をコンピュータを利用して数量的に分析した。先ず訳さずに「素通り」して後で戻って訳すという現象が、英文和訳における「語順の違い」を引き起こすが、この論文では、「素通り」を

引き起こさない語彙との比較も行い、より広い視点からの分析を行った。二つ目の論文では、英文和訳や英日翻訳における困難点の最も基本的な部分のいくつかは、英語と日本語の「視点」の取り方の違いによって説明可能であり、さらに、この「視点」の取り方を調整することで、訳文のレベルが大きく向上する可能性があるということを、具体的な表現例を提示しながら論じている。

1. 横山知幸, 英文和訳において語順の違いを引き起こす語彙: 単語、単語の品詞、文型における単語の機能, 広島国際研究, Vol. 23, pp. 121-136, 2017
2. 横山知幸, 英文和訳と英日翻訳における言語的な「視点」の問題, 『〈際〉からの探求: つながりへの途』(広島市立大学国際学部叢書7 第4章), Vol. 7, pp. 75-98, 2017

【社会活動】

社会活動の比重は少ないが、自分の所属していない学会からの依頼による学術論文の査読や、他大学の博士課程所属の大学院生の論文の補助的・付加的指導の依頼を受けての面談など、必要とされ求められた場合には、何かしら出来る貢献を行っている。

氏名	吉江 貴文
職位	准教授
研究分野	地域研究、文化人類学
研究キーワード	文化人類学、ラテンアメリカ地域研究、文書研究

ここ数年来の自己の研究テーマとして、スペイン、ラテンアメリカに保管されている文書史料を手がかりに、中世ヨーロッパを発信源とする公文書管理システムのラテンアメリカ世界への移植・変容・融合の過程を通時的に辿ることにより、ラテンアメリカの植民地化・独立という史的プロセスについて歴史人類学の視点から捉え直す作業を進めてきた。2016、2017 年度における主な活動テーマは、そうした研究の成果にもとづいて、大学での教育内容をくみ立て直し、さらなる研究活動の発展つなげること、また、さまざまな機会における報告などを通して、その内容を社会一般に広く発信することなどである。

【教育活動】

1 年次生を対象としたスペイン語教育では、外国語による主体的な発信能力の強化をテーマとして、授業内容の改善をすすめ、学生同士でのスペイン語による日常会話のトレーニングなどにとくに力を入れることにより、実践的な外国語運用能力の向上を図った。また、スペイン語資格試験の取得支援、スペイン語圏への留学支援などにも力を入れた。その他の専門科目では、上述の公文書管理システムのラテンアメリカ世界への移植・変容・融合の過程をテーマとした近年の研究の成果をできるだけ授業に反映にさせるべく、講義内容の向上に努めた。

2016, 2017 年度	スペイン語、比較民族学、ラテンアメリカ研究

【研究活動】

2014 年度より進めている、国立民族学博物館共同研究会「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」を研究代表者として組織し、共同研究会における議論のとりまとめを行った。具体的に、2016 年度は、3 年半にわたる共同研究会の最終年度にあたったため、研究会全体の議論のとりまとめと共同研究の成果刊行物の準備を中心に進めた。2017 年度は同論文の編著者として、論文執筆、及び論集全体の校正・とりまとめ等の作業を行った。

1. 吉江貴文, スペイン帝国の文書流通プロセスを支えた力, 民博通信, Vol. 155, pp. 20-21, 2016

【社会活動】

- ・2017 年度の大学オープンキャンパスにおいて、「スペイン語の世界へようこそ」という題目で模擬授業を行い、本学を志望する学生に対して、本学における外国語教育の在り方や、スペイン語の授業内容についての紹介を行った。
- ・2016 年 8 月 1 日から 2017 年 7 月 31 日まで日本学術振興会の特別研究員等審査会専門委員及び書面審査員として従事し、研究者養成事業の推進に貢献した。
- ・国立民族学博物館共同研究会「近代ヒスパニック世界における文書ネットワーク・システムの成立と展開」の成果論集として、『近代ヒスパニック世界と文書ネットワーク(仮題)』を編集した。同書は、国立民族学博物館論集として、2018 年度に悠書館から出版される予定である。

2016 年 8 月-2017 年 7 月	独立法人日本学術振興会 特別研究員等審査会専門委員及び国際事業委員会書面審査員・書面評価員

氏名	吉田 晴彦
職位	教授
研究分野	国際関係論
研究キーワード	国際協力、平和研究、国際関係論

2016 年度、2017 年度については、国際学部長・国際学研究科長として、主に学内運営を中心に活動を行った。特に、新規人事募集、委員会改革、国際交流改革などに力を入れた。

教育活動は通常通り行ったが、例年以上に受講生が集まった科目を抱えたことなどもあり、此度の経験から部局長は教育業務負担を減らすなどの工夫をするべきであることを実感した。

なお、休業期間も学内運営業務に時間を取られることが極めて多く、研究活動、社会活動に十分な時間を割くことができなかったのは少々残念であった。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度については、ほぼ例年通り、下記の科目担当を中心に、教育活動を行った。国際関係論に関しては、この 2 年間、例年になく多くの受講生に恵まれたことは有り難かった反面、大人数であったが故に、学生に対する質問などにきめ細かに答えられなくなってしまったことは心残りであった。一方で、映像資料などを活用しながら行った平和と人権 B のアンケート評価が例年以上に高かったことは、今後の改善ポイントとして参考になった。

また、大学院留学生指導では実践的な意義のある課題研究報告書執筆を指導し、無事修士号取得に導けたことは、うれしい成果であった。

なお、部局長であったがゆえに、依頼のあった非常勤講師を断らざるを得なかったのは残念であったが、学内運営負担を考慮するとやむを得ないと考える。

2016, 2017 年度	国際関係論
2016, 2017 年度	国際協力論 I
2016, 2017 年度	国際協力論 II
2016, 2017 年度	平和研究入門
2016, 2017 年度	平和と人権 B
2016, 2017 年度	平和研究 II
2016, 2017 年度	卒論演習
2016, 2017 年度	国際協力論 I (大学院)
2016, 2017 年度	国際協力論 II (大学院)
2016, 2017 年度	平和学概論 (大学院)
2016 年度	専門演習 I
2016 年度	特別演習 I
2017 年度	特別演習 II

【研究活動】

研究に関しては、学内業務の多忙さから、継続的に十分な時間を割くことが困難であり、必ずしも満足のできる量的業績は挙げられなかったものの、好評だった共著書の改訂版

を出ることができたことは成果であった。国際協力に関する近年の動向をアップデートすることを中心に、国際援助の課題に関して論じる論考及び国際交流のあゆみと課題を扱う論考などが主な成果である。

1. 中村都編, 新版 国際関係論へのファーストステップ, 法律文化社, 2017

【社会活動】

社会活動に関しては、広島東洋カープと協力し、2016 年 8 月 6 日にマツダスタジアムで行われたピースナイターの学生引率及び、選手たちから預かった灯ろう流しのサポートを行った。

また、2016 年度及び 2017 年度の広島クリーンウォークに参加し、市街地の美化に資すると共に、本学のアピールを行った。

2016 年 8 月	ピースナイター2016

氏名	李 在鎬
職位	教授
研究分野	経営学
研究キーワード	グローバル・サプライ・チェーン論、中間財メーカー視点の成長戦略

専門分野である国際経営論と経営戦略論と通底するような形で、教育活動・研究活動・社会活動を展開してきた。まず、国際学研究科の教育においては、受講者が国際経営の理論を熟知し、批判的に捉えるよう指導し、学部講義科目においては、国際経営のみならず、その基礎となる一般経営学から丁寧に指導するよう心掛けてきた。研究においては、一貫して中間財メーカーの戦略論に関連した領域を深めており、昨年秋の国際学会で Best Paper 賞の共同受賞につながった。また、社会活動では、学会活動とともに、国際インターンシップを運営する NPO 組織であるアイセックの顧問理事職を務めており、いずれの活動も、専門分野との整合性が高い。

【教育活動】

担当講義科目の学部の国際経営論Ⅰ・Ⅱ、経営戦略論の過去2年間の全ての授業アンケートにおいて、総合的な満足度の得点が全学平均を上回る評価を得ている。大学院教育においては、修士課程2名、博士後期課程(D3)1名のゼミ生を指導してきた。D3の学生は、本学国際学研究科国際学専攻で2017年9月に無事に博士後期課程を修了するとともに、博士号を取得した。

2016, 2017 年度	国際経営論Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	国際経営論Ⅰ・Ⅱ(院)
2016, 2017 年度	発展演習Ⅰ
2016, 2017 年度	国際社会研究演習Ⅰ・Ⅱ(国際経営論;院)
2016, 2017 年度	基礎演習Ⅱ
2016 年度	基礎演習Ⅰ
2016 年度	国際ビジネス入門(分担)
2017 年度	経営戦略論
2017 年度	国際研究入門
2017 年度	企業インターンシップ
2017 年度	専門演習Ⅰ・Ⅱ
2017 年度	国際社会研究演習Ⅲ(国際経営論;院)
2017 年度	発展演習Ⅱ

【研究活動】

著書(共著)、論文、国内外学会発表といった成果を出してきた。持続的な研究活動が可能であったのは、十分な外部研究費が獲得できたからである。科研費基盤(C)代表「自動車メーカーの新興国市場におけるSCMと完成車物流—日韓主要メーカーの戦略—」が2017年3月に終了し、同年4月より、科研費基盤(C)代表「自動車産業における中間財メーカー視点の成長戦略のパターン—独立系企業を中心に—」の受給が現在も続いている。その他、受賞歴としては、2017年9月9日タイでの海外学会で Best Paper 賞を連名で受賞し、2018年3月22日本学で表彰状(研究及び大学運営)をいただいた。

1. 広島市立大学国際学部・際研究フォーラム, 際からの研究:国際研究の多様性, 文眞堂, 2018
2. 塩地洋・中山健一郎編著、三嶋恒平、佐伯靖雄、磯村昌彦、菊池航、李在鎬、ブングシェ・ホルガー共著, 自動車委託生産・開発のマネジメント, 中央経済社, 2016
3. Lee, Jaeho and Minoru Hirano, Cooperation and Competition between Partner Companies over International Joint Venture Business – A Case Study of a Korea-Japan Joint Venture Company of Automotive Stamping Die –, Proceedings of ICPM 2017 in Bangkok, pp. 167-170, 2017 (Best Paper)
4. Lee, Jaeho, Small-Sized Supplier's Competence-Driven Growth Strategies –A Case Study of a Japanese Durable Production Component Supplier–, Full paper of the 25th International Colloquium of GERPISA (<http://gerpisa.org/node/3786>), pp. 1-12, 2017
5. 李在鎬, 生産財部品メーカーの成長戦略 –オガイ精機の事例研究–, 第45回全国大会講演論文集, pp. 277-280, 2017
6. 李在鎬, 第4章オムロンの海外戦略と組織体制の変遷(佐竹弘章・入江安孝・李在鎬(2016)「製造業高付加価値経営の調査分析(オムロン株式会社)」, Discussion Paper Series, No. 4, pp. 57-76, 2016
7. Lee, Jaeho and Minoru Hirano, Cooperation and Competition between Partner Companies over International Joint Venture Business –A Case Study of a Korea-Japan Joint Venture Company of Automotive Stamping Die–, 3rd ICPM (International Conference on Production Management) (Assumption University, Suvarnabhumi Campus, Thailand), 2017
8. Lee, Jaeho, Small-Sized Supplier's Competence-Driven Growth Strategies –A Case Study of a Japanese Durable Production Component Supplier–, 25th International Colloquium of GERPISA (Universite Paris-Saclay (Cachan), Paris, France), 2017
9. 李在鎬, 生産財部品メーカーの成長戦略～シオガイ精機の事例研究～, 日本生産管理学会第45回全国大会(愛知工業大学), 2017
10. Lee, Jaeho, Growth Strategies of the Mega Auto Part Suppliers in Japan– A comparison of Denso and HAMS, 24th International Colloquium of GERPISA, 2016

他 3 件

【社会活動】

社会活動としては、2017 年 4 月より、アイセック広島委員会理事顧問(SRB 講師兼)として、海外インターンシップ応募者に対しての外部面接、英語面接を行ってきた。また、数回の定期集会において、組織運営や事業活動について助言を行った。アイセック・ジャパンは、126 の国と地域で活動する世界最大級の学生組織 AIESEC の日本支部として、海外インターンシップ事業を運営する NPO 組織である。

また、2017 年 8 月 30 日には、「経営学の始まり」というタイトルで、広島国際学院高等学校で、出張講義を行った。

2017 年 8 月	出張講義「経営学の始まり」
2017 年 4 月－	アイセック広島委員会理事顧問(SRB 講師兼)

氏名	李 玲
職位	講師
研究分野	商学
研究キーワード	国際マーケティング、グローバル・ブランド研究、国際的消費者行動研究

国際マーケティングを専攻し、消費者行動に立脚したグローバル・ブランド研究をメインテーマとしております。最近、特に最大の消費市場と視される中国市場に注目し、中国人消費者が強く意識する「面子」と購買行動の関係に焦点を当てております。教育活動や国際社会に役立ち、かつ貢献できるような研究成果を生み出せるように、日々研鑽しております。

【教育活動】

課題解決型の学習が求められる今、学生教育において、学生の分析力と課題発見力の養成を心掛けております。例示しながら多面的な視点と常識を覆すような見方で物事を洞察し分析することの重要性を学生に伝えることを、常に心掛けております。

2017 年度	企業インターンシップ
2017 年度	学術研究の進め方
2017 年度	経営学
2017 年度	地域再生論
2017 年度	国際ビジネス入門
2017 年度	卒業論文
2017 年度	基礎演習 I・II
2017 年度	専門演習 I・II
2017 年度	マーケティング論 I・II
2017 年度	卒論演習 I・II
2017 年度	マーケティング論 I・II (大学院)
2017 年度	特別演習 I・II
2017 年度	特別講義 A・B
2017 年度	国際社会研究演習 I・II・III・IV

【研究活動】

国際旅行の流行、グローバル・メディアの成長、ソーシャル・ネットワーキング・サービスの普及を伴うグローバル化は、消費者の国際移動やグローバル・フィールドでのコミュニケーションを促進させています。こうした中で、消費者への理解やグローバル・ブランドの役割はその重要性が増す一方です。とりわけ、消費者の購買行動を多面的な視点から捕捉し理解することは企業のグローバル戦略を成功させるための前提条件だと言えるでしょう。文化という異質性を表す要素を取り入れつつ、グローバル・ブランド消費のコンテキストにおける消費者行動の解明に焦点を当てながら研究を進めております。

1. 李玲, 中国人消費者の行動分析, 文眞堂, 2017
2. 広島市立大学国際学部 <際>研究フォーラム 編著, <際>からの探究: つながりへの途, 文眞堂, 2017

3. 李玲, 中国市場における面子と消費者行動, 『広島国際研究』第 22 巻, 2016
4. 李玲, グローバル・ブランド消費における原産国イメージの影響, 国際ビジネス研究学会 第 23 回全国大会, pp. 66-69, 2016
5. 李玲, グローバル・ブランド消費における原産国イメージの影響—中国人消費者のグローバル・ブランド消費を中心に—, 『多国籍企業研究』第 9 号, 2016
6. 李玲, 中国消費市場におけるグローバル贅沢ブランドと面子の関係, 『国際ビジネス研究』2016 年春号, 2016
7. 李玲, 中国消費市場におけるグローバル贅沢ブランドと面子の関係, 多国籍企業学会 第 57 回東部 11 月例会, 2016
8. 李玲, グローバル・ブランド消費における原産国イメージの影響, 国際ビジネス研究学会第 23 回全国大会, 2016

【社会活動】

研究活動や教育活動で培ったノウハウを活かしつつ、社会活動に取り組んでいきたいと思っています。ここ最近、主に模擬講義の実施に取り組みました。

2017 年 10 月	日本語学校留学生の体験入学会にて模擬講義
2016 年 8 月	オープンキャンパスにて模擬講義

氏名	渡辺 智恵
職位	教授
研究分野	英語教育学
研究キーワード	コンピュータを利用した英語教育、英語学習

2016～2017 年度は、教育活動、研究活動、社会活動、大学運営のすべてにおいて、比較的バランスよく取り組めたと自己評価している。特に大学運営においては、学部教務委員を務めるとともに、語学センター長として、学生ランゲージチューター制度の創設や語学センター廊下ギャラリーでの写真展をはじめ、新たな取組みをいくつか開始した。また国際交流担当副理事としては、主に国際学生寮の開設や新たな学術交流協定校の開拓に微力ながらも貢献することができた。また、各年度のオープンキャンパスとライブキャンパスでは、コンピュータを利用した英語ミニ講義を行うことにより、入試広報の一助となることができた。

2016 年度と 2017 年度それぞれ、広島市立大学教員表彰(教育及び社会貢献)を受けた。

【教育活動】

学部レベルの教育活動については、「CALL 英語集中 I・II・III・IV」、「eラーニング英語 I・II・III・IV」、「通訳技法論 I・II」、「専門演習 I・II」、「卒論演習 I・II」、「教養演習」を担当し、これら授業の履修者数は、前・後期合わせて各年度約 1,600 名であった。学部卒業論文の指導教員として、2016 年度は3名、2017 年度は 4 名を指導した。加えて、「英語応用演習 I・II・III・IV」のコーディネーターとして、非常勤講師との連絡調整、クラス分け、シラバスの作成、テキストの発注等を行った。履修者の大学院レベルでは、「通訳論 I・II」を担当するとともに、2016 年度には修士論文の指導教員として1名を指導した。

また、課外の教育活動として、夏季休暇中と春季休暇中にそれぞれ 1 ヶ月間の「インテンシブ英語学習プログラム」を実施するとともに、冬期休暇の前後の 1 ヶ月半、英語多読マラソンを実施し、授業以外での英語学習の機会を提供した。

2016, 2017 年度	CALL 英語集中 I・II・III・IV
2016, 2017 年度	eラーニング英語 I・II・III・IV
2016, 2017 年度	通訳技法論 I・II
2016, 2017 年度	専門演習 I・II
2016, 2017 年度	卒論演習 I・II
2016, 2017 年度	通訳論 I・II
2016, 2017 年度	教養演習

【研究活動】

2016 年度に採択された科学研究費の挑戦的萌芽研究「英語eラーニングでの自律的学習促進ツールとしての学習履歴データの活用に関する研究」の研究代表者として、また、2017 年度に採択された科学研究費の基盤研究(B)「共通教育期間を通じた英語力向上のための多様な大学環境でのeラーニングマネジメント」の研究分担者として、eラーニングを活用した英語教育に関する研究に取り組んだ。国内の学会や研究会での発表 3 件、国際学会での発表 1 件、論文発表 1 件を行った。

1. Tomoe Watanabe, A study on the assessment of the effects of an English e-learning program: focusing on task completion rates, study time and improper study, Proceedings of IAC 2017 in Vienna, pp. 102-115, 2017
2. 渡辺智恵, 共通教育期間を通じた英語力の向上とeラーニングの活用, 岩手県立大学高等教育推進センター主催ワークショップ, 2018
3. Tomoe Watanabe, A study on the assessment of the effects of an English e-learning program: focusing on task completion rates, study time and improper study, IAC-TLEI 2017, 2017
4. 池上真人、青木信之、渡辺智恵, 自学自習型 e ラーニング・プログラムにおける学習意欲の変化に関する縦断的研究, 第 42 回全国英語教育学会埼玉研究大会, 2016
5. 青木信之、鈴木繁夫、竹井光子、渡辺智恵、志水俊広、寺嶋健史、池上真人, 多様な大学環境における英語eラーニング ― これまでの実践を振り返って ―, 外国語教育メディア学会 (LET) 第 56 回全国研究大会, 2016

【社会活動】

2002年から継続して実施している市民対象の英語eラーニング講座「市大英語eラーニング講座」を2016年度と2017年度ともに3回ずつ計6回実施し、2年間の受講者数は計229名であった。また、両年度ともに広島市役所で開催された「広島市立大学地域貢献事業発表会」に、「広島市職員を対象にした英語力養成eラーニング講座の実施」と「市民の英語力向上のための研究と実践」という2テーマで出展した。

2017 年 11 月 24 日	広島市立大学地域貢献事業発表会
2017 年 9 月-12 月	市大英語eラーニング講座(平成 29 年度第 3 期)
2017 年 7 月-10 月	市大英語eラーニング講座(平成 29 年度第 2 期)
2017 年 5 月-8 月	市大英語eラーニング講座(平成 29 年度第 1 期)
2016 年 11 月 25 日	広島市立大学地域貢献事業発表会
2016 年 9 月-12 月	市大英語eラーニング講座(平成 28 年度第 3 期)
2016 年 7 月-10 月	市大英語eラーニング講座(平成 28 年度第 2 期)
2016 年 5 月-8 月	市大英語eラーニング講座(平成 28 年度第 1 期)

情報科学研究科

氏名	青山 正人
職位	准教授
研究分野	医用システム、知能情報学
研究キーワード	コンピュータ支援診断、医用画像処理、コンピュータ・ビジョン、バーチャル・リアリティ

教育活動・研究活動について、学生とのコミュニケーションを重視した活動となるよう常に心がけてきた。社会活動についてもできるだけ学外の方々、生徒（主に高校生）と会う機会を作るように心がけ、実際に得た機会では、本学に興味を抱いて頂けるやりとりとなるように接してきた。学内では、自分の立場でできる委員等は担当し、大局的な視点からの発言となるように課題整理をしながら取り組んできた。広島大学、広島工業大学、広島国際大学との4大学連携で取り組んでいる「臨床情報医工学プログラム」の実務担当の一人として、他大学との連携やガイダンスをはじめ学生の履修に関する対応を担当し、履修登録学生がプログラム修了に向けて順調に履修できるように対応できた。

【教育活動】

下の表以外に、「機器分析」、「医用情報科学概論」、「医用情報科学実験 I」を分担で担当した。下の表の科目について、まず、解析学 I 演習は、担当の1年生3クラスの学生の解答用紙のチェック(採点)、翌週の解説をもう一人の担当教員と交互に隔週で担当している。担当回の採点には長い時間を要するが、ミスの多い箇所などの弱点を直接確認できることは有効である。弱点を解説に反映させ、同じミスを繰り返さないように学生の理解が進むよう心がけた。他の科目も演習要素を取り入れたり、語りかけたりしながら講義を進めることで、学生自身が単に座って聴講するだけでなく、考えながら講義に参加するアクティブ・ラーニング型となるように実施した。

2016, 2017 年度	解析学 I 演習
2016, 2017 年度	医用プログラミング(主担当8コマ)
2016, 2017 年度	デジタル信号処理
2016, 2017 年度	医用画像診断支援特論

【研究活動】

コンピュータ支援診断、医用画像処理に関する研究を行っている。研究活動において、学生教育の視点を重視しており、研究室に配属され、主担当となった学生のテーマ設定を中心に研究を進めている。そのため、研究指導を行いながら、学生が卒業研究、修士論文でまとめた内容を外部発表につなげている状況となっている。研究活動での課題は、科学研究費補助金などの資金の獲得ができなかったことである。これらについて、設定している研究テーマそのものの見直しだけでなく、深く関連する技術分野であるコンピュータ・ビジョンやバーチャル・リアリティを取り入れたテーマ設定に研究対象分野を広げていくことなども検討しながら資金獲得につなげるように努めたい。

1. 青山正人, 古本大典, 高木勇一郎, 檜垣徹, 栗井和夫, HRCT と PET を統合させたコンピュータ支援診断の有用性, 臨床放射線, Vol.62, No.10, pp.1245-1254, 2017.
2. 青山正人, 片山玄汰, 藤原久志, 増谷佳孝, 逐次選択法を用いた特徴量の決定に基づく肺結節自動検出, 第 36 回日本医用画像工学会大会 (JAMIT 2017), 2017.

3. 北村 凱平, 竹内 遼, 青山 正人, 藤原 久志, 増谷 佳孝, 乳房 X 線画像における病変の良悪性鑑別のための CNN による部分領域学習と多数決処理, 生体医用画像研究会 第 4 回若手発表会, 2017.
4. 野村行弘, 増谷佳孝, 工藤俊介, 中口俊哉, 澤田好秀, 北村凱平, 青山正人, 花岡昇平, 中尾貴祐, 根本充貴, 三木聡一郎, 吉川健啓, 林直人, UTH CAD Challenge 2015 プロジェクト現況報告, 第 35 回日本医用画像工学会大会 (JAMIT 2016), 2016.
5. 増谷佳孝, 中村優記, 青山正人, 拡散 MR 画像による脳白質軸索半径の推定と可視化, 第 35 回日本医用画像工学会大会 (JAMIT 2016), 2016.

【社会活動】

体験授業実行委員会が立ち上がる前から高校生を対象とした体験授業や研究室見学を実施する際の調整を担当した。調整担当の高校に対し3科目×2回の体験授業の実施、研究室見学の受け入れ先を調整した。2016 年、2017 年は学部横断的な取り組みとなるよう文系生徒の大学見学・講義体験を国際学部の先生方にご協力頂き実現できた。その他、オープンキャンパスやライブキャンパス、広島県科学セミナー、ひろしまコンピュータサイエンス塾など学外に向けた取り組みについて、研究室としての出展だけでなく、講師依頼があれば、可能な限り受けるようにしてきた。今後、ますます、高大連携の重要性は増していくので、継続的に貢献できるよう取り組みたい。

2017 年度	ViEW2017 プログラム委員(他実行委員1件)
2017 年 10 月	ライブキャンパス 体験型模擬授業 講師
2017 年 3 月	ひろしまコンピュータサイエンス塾特別講義 講師
2016 年度, 2017 年度	電子情報通信学会医用画像研究専門委員会専門委員
2016 年 12 月-2017 年 12 月	広島市立大学情報科学部体験入学 体験授業 講師(他7件)
2016 年 12 月-2017 年 10 月	広島市立大学情報科学部体験入学 大学見学、研究室見学(他2件)
2016 年度	ViEW2016 実行委員(幹事補佐)(他実行委員1件)
2016 年 8 月	高校生による情報科学自由研究 MRI で撮ってみよう
2016 年 7 月	2016 ひろしま総文, 情報部門体験教室 講師
2016 年 7 月	広島県科学セミナー 講師

氏名	厚海 慶太
職位	助教
研究分野	メカトロニクス、生体医工学・生体材料学、知能機械学・機械システム、計測工学、制御・システム工学、科学教育
研究キーワード	計測制御工学、機能的電気刺激、センサ・アクチュエータ

教育活動は個々の学生の志向や理解度に対して臨機応変な対応を心がけると同時に、主にメカトロニクスやハードウェアに関連した自作「おもちゃ」を使いながら、当該分野に対する興味・関心の惹起や基礎知識の習得を目指している。この方針は学生実験など各科目への適用に留まらず、対象者の特性に応じ適宜アレンジを加えながら社会活動へと応用している。具体的には、小中学生など低年齢のうちから科学技術の正しい理解や「ものづくり」の楽しさなどの啓発を図るべく、市販品とは異なる独自の工夫を採り入れた電子工作教材の開発を継続している。大学運営に関しては、チューター業務など学生支援に参画しているほか、ひろしまコンピュータサイエンス(CS)塾の運営などに力を入れる予定である。今後、特に社会貢献活動を通じて大学運営に参画する。

【教育活動】

教育活動は学生実験の運営および教材開発に主体的に取り組んで来た。また、現行の学生実験で使用している教材の改良も継続的に行っている。卒業研究および修士課程で研究室配属された学生の研究活動に必要な実験装置の製作補助を行ってきた。そのほか、芸術学部の卒業制作に際して、学部の枠を越えて毎年1～2名程度の学生が、電気・機械など技術的な相談を求めて個別に来訪するのに応じ、必要な助言や技術を提供している。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	システム工学実験 I (分担)
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 β 2 (分担)
2017 年度	外書講読演習 I (分担)

【研究活動】

研究活動は、信州大学繊維学部との共同研究に力を入れ、ヒト前腕の機能的電気刺激に関する研究成果が大きい。制御工学の知識および計測工学の技術を応用し、ヒトを対象とした新たなインタフェースの構築を目指している。また、芸術学部の教員や事務局職員らと共同研究に取り組み、東広島市立美術館の企画展に成果物を出品した。

1. 永井美和, 厚海慶太, 谷口和弘, 松居和寛, 宮崎文夫, 李仕剛, 西川敦, 表面電極を用いた前腕への機能的電気刺激と等尺性条件下における指先力計測に基づく手指のモデル化, 第 37 回日本生体医工学会甲信越支部大会, 2017
2. 厚海慶太, 永井美和, 谷口和弘, 松居和寛, 宮崎文夫, 李仕剛, 西川敦, 表面電極を用いた機能的電気刺激(FES)によるヒト手指制御のためのシステム同定, 生体医工学シンポジウム 2017, 2017
3. Kento Takemura, Mami Kurosawa, Keita Atsuumi, Kazuhiro Matsui, Fumio Miyazaki, and Atsushi Nishikawa, Frequency Domain System Identification of Human Finger

Dynamics Using Functional Electrical Stimulation based on an Agonist-Antagonist Concept, IFESS2017(RehabWeek2017) 17-21 July 2017 London, UK, 2017

4. Lights, 東広島市立美術館, 2017 年 2 月 - 2017 年 3 月

【社会活動】

地域の科学館で開催される小中学生向け教室の講師、および、中学生ロボコンの審査員などを担当している。これらに加えて、高校生のための情報科学自由研究講師や、ひろしまコンピュータサイエンス(CS)塾の講師ならびに運営に協力してきたが、今後、当該方面に対する活動を一層強化する予定である。

2016 年-	乗り物テクノ教室(交通科学館)電子工作講座 講師
2016 年-	科学教室(こども文化科学館) 講師
2016 年-	創造アイデアロボットコンテスト(中学生ロボコン)広島県大会審査員

氏名	飯島 聡志
職位	特任助教
研究分野	知覚情報処理、感性情報学
研究キーワード	音響工学、歌声の知覚と生成

2017 年 10 月から特任助教として勤務しております。これまでは音楽活動をメインに活動してきました。そこで培った経験をもとに、新たなフィールドでも積極的に研究・教育・社会貢献に取り組んでいく所存です。社会が明るくなる研究や活動をしたいと思っています。

【教育活動】

研究室において、論文作成や英語の指導を行っています。これまでに使ったことのない計測器やソフトウェア等の取り扱いについても、積極的に取り入れて指導していきたいと思っています。

【研究活動】

これまでは、歌声の知覚と生成の相互作用について研究してきました。現在は、家畜の生体信号抽出と解析に関する研究を行っています。

1. SATOSHI IJIMA, SHUNSUKE ISHIMITSU, MASASHI NAKAYAMA, INFLUENCE OF THE LOMBARD EFFECT, FLETCHER EFFECT AND BAND-EMPHASIZED AUDITORY FEEDBACK ON SINGING VOICE, ICIC Express Letters Part B: Applications, Vol. 14, No. 2, pp. 647-656, 2018
2. Fundamental research for an early detection system to find respiratory diseases in pigs, NCSP 2018 RISP International Workshop on Nonlinear Circuits, Communications and Signal, 2018
3. 家畜の音声・体内伝導音による呼吸器病発見に関する基礎検討, 日本音響学会 2018 年春季研究発表会, 2018
4. Iijima, S., Ishimitsu, S. and Nakayama, M., Effects of Auditory Feedback on Singing, The Proceeding of The 24th International Congress on Sound and Vibration, Vol. Paper No. 461, 2017
5. Iijima, S., Ishimitsu, S. and Nakayama, M., Effects of Masking Noise in Auditory Feedback on Singing, International Journal of Innovative Computing, Information and Control, Vol. 13, No. 2, pp. 591-603, 2017
6. Fletcher 効果, Lombard 効果及び高域強調フィードバックが歌声に与える影響, 音声研究会, 2017
7. 歌唱における聴覚フィードバックにマスキングノイズが与える影響, 日本音響学会 2016 年秋季研究発表会, 2016
8. 未来博士 3 分間コンペティション 2016 最優秀賞, 未来を拓く地方協奏プラットフォーム, 2016

他2件

【社会活動】

社会活動も積極的に行い、研究を広く社会に還元したいと思っています。

氏名	池田 徹志
職位	講師
研究分野	知能ロボティクス、知能情報学、ヒューマンインターフェース・インタラクション
研究キーワード	自動運転、安心感評価、人物行動理解、環境知能

広島市立大に 2016 年度に着任し、先輩の先生方にアドバイスをいただく中で、広島市の中の本学での教育・研究・社会貢献の方法について、自分の貢献方法について理解と改善に努めた。着任後の 2 年間は、本学の学生に適した指導の確立がテーマであった。授業や研究指導の中で、本学の学生が基礎的な知識や考え方を習得し、就職後に活躍するために、どのような指導をすると伸びるのかに興味を持って取り組んだ。自らの企業での経験を活かし、仕事の進め方についても指導を行った。研究に関しては、学生が興味を持って取り組む研究課題を積極的に取り上げ、自動運転および知能ロボット研究の立ち上げを行った。社会貢献としては、大学の研究成果を広島市民のみなさまと共有する機会に展示発表を積極的に行った。また、高校生を対象としてロボットの講義および演習をする機会を持つことができた。

【教育活動】

着任後の 2 年間は、本学の学生がいかに基礎的な知識や考え方を習得し、研究室や就職後の活動の中での応用につなげられるかに興味を持ち、指導方法の改善に努めた。授業は学部 1 年生の数学およびプログラミングを担当した。数学では高校での数学 III による微分・積分の内容を復習しながら、発展的な科目および研究の基礎となる解析学の知識を習得させる授業を行った。プログラミングでは、講義中にも演習と解説を実施して対話的に学生の理解を確認しつつ、情報処理の基本技術となる C 言語を習得させる授業を行った。いずれの授業でも、限られた時間の中で基礎的な事項の強調と具体的な例を挙げることを心がけ、学生の反応をアンケートで確かめながら、適切なペース配分を心がけ、講義の準備を十分に行った。

2016, 2017 年度	解析学 I
2016, 2017 年度	解析学 I 演習
2016, 2017 年度	プログラミング II
2016, 2017 年度	プログラミング II 演習
2016, 2017 年度	知能ロボティクス特論

【研究活動】

ロボットなどの自動システムが日常生活の中で人と関わる時には、ロボットが人を理解して快適に共存できることが重要と考え、人の理解に基づく知能ロボットの実現に向けた研究を進めている。特に、自動運転や車いすロボットを例として、搭乗者が安心を感じられるような設計指針を提案している。(株)SUBARU、(株)国際電気通信基礎技術研究所、聖マリアンナ医科大との共同研究により、自動運転時のドライバの安心感を高める研究を進めている。自動運転中のドライバは運転を監視し、危険な状況では自ら対応することが要求されるため、ドライバは通常の運転よりも緊張を強いられる場面があると予想される。これに対して、運転シミュレータを用いてドライバの安心感を計測する基礎的な実験を行った。この研究成果を国内および国際会議に投稿した。また、指定した目的地まで自動走

行する車いすの制御に関する研究も進め、搭乗者が安心して利用できる移動方式の基礎的な提案を行った。

1. 佐藤 健次郎, 日高 雄太, 岩城 敏, 池田 徹志, TOF 型レーザセンサとパンチルトアクチュエータを用いた実世界クリッカーシステムのポインティング性能向上ー覗き込みウインドウ内レーザースポット位置計測法の提案と評価ー, 計測自動制御学会論文集, Vol. 54, No. 2, pp. 290-297, 2018
2. 立本 健司, 辻 和也, 岩城 敏, 池田 徹志, プロジェクタロボットの投影適正領域への経路計画方法, 計測自動制御学会論文集, Vol. 53, No. 11, pp. 583-589, 2017
3. Dražen Bršćić, Tetsushi Ikeda, Takayuki Kanda, Do You Need Help? A Robot Providing Information to People Who Behave Atypically, IEEE Transactions on Robotics, Vol. 33, No. 2, pp. 500-506, 2017
4. Kenji Tatsumoto, Satoshi Iwaki, Tetsushi Ikeda, Tracking projection method for 3D space by a mobile robot with camera and projector based on a structured-environment approach, Artificial Life and Robotics, Vol. 22, No. 1, pp. 90-101, 2017
5. 安孫子 優紀, 日高 雄太, 佐藤 健次郎, 岩城 敏, 池田 徹志, TOF 型レーザセンサとパンチルトアクチュエータを用いた実世界クリッ方式の提案と生活支援ロボット動作教示への応用, 計測自動制御学会論文集, Vol. 52, No. 11, pp. 614-624, 2016
6. 業務成績表彰(所内表彰), 国際電気通信基礎技術研究所, 2017

他4件

【社会活動】

研究活動の成果を広島市民の方と共有するため展示発表を行った。産学連携研究発表会では、主に広島市の企業の方を中心に上記の研究内容を展示し、広島市役所で行われた地域貢献事業発表会では、市民の方を対象にした研究展示と発表を行った。また、広島市立大オープンキャンパスにおいても、同様に研究展示と発表を行った。また高校生を対象とした授業として、JST 受託事業グローバルサイエンスキャンパス (GSC)において、選抜された高校生を対象に、第2期ジャンプステージ研究指導を行った。

2017 年 8 月	JST 受託事業グローバルサイエンスキャンパス 第2期 ジャンプステージ講義・演習
2016 年 11 月, 2017 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会 出展
2016 年 9 月, 2017 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 出展

氏名	石川 直樹
職位	助教
研究分野	情報ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	無線通信、情報理論

2017 年 4 月に情報工学専攻ネットワーク科学研究室の助教として着任し、無線通信の観点から情報ネットワークの研究に従事しています。2017 年度は科研費「研究活動スタート支援」のご支援の下、低遅延無線通信方式の研究に集中し一定の成果が得られました。

【教育活動】

2017 年度前期は情報科学部の「情報工学実験Ⅰ」および国際学部「情報基礎」の講義運営を補助しました。周囲の先生方のご配慮もあり、講義運営の基礎を学びました。後期は情報科学部の「情報工学実験Ⅱ」「プログラミングⅢ演習」「E-learning 英語Ⅱ」を補助しました。特に「情報工学実験Ⅱ」では、OpenCV を用いたロボットカーの自律制御を担当しました。学生にプログラミングの楽しさを実感してもらうため、Python のみでロボットカーを制御できるようライブラリを移植し、実装例として赤い物体を追いかける Python スクリプト「carp-lover.py」を配布しました。また、「E-learning 英語Ⅱ」では学習意欲を高めもらうため、外国語の習得がいかにより人生を豊かにするか、自主学習を邪魔しない範囲で話しました。いずれの講義でも、学生の才能や努力を積極的に認めるよう心がけています。

研究室では 1 日に少なくとも 2 回は学生居室に顔を出し、研究について相談しやすい雰囲気を作れないか試行錯誤しました。また、英語ゼミを主催し、科学技術論文を速く正確に読み解くコツについて指導しました。研究室の Web サイトを整備し、学生の受賞・発表すべてに URL を発行して就職活動等のアピールに使えるよう配慮しました。研究室内で培われてきた研究テーマについて、広島市内の大規模イベントにおける実証実験を補助しました。このテーマに関連して、指導学生が学科の最優秀卒業論文賞を受賞し光栄に思います。

2017 年度 前期	情報基礎
2017 年度 前期	情報工学実験Ⅰ
2017 年度 後期	情報工学実験Ⅱ
2017 年度 後期	プログラミングⅢ演習
2017 年度 後期	E-learning 英語Ⅱ

【研究活動】

2017 年度は大規模アンテナアレイに適した差動符号化方式について特に力を入れて研究しました。2000 年頃から提案されてきた従来の差動符号化方式はユニタリ行列を用いているため、システムの高レート化にともない極端に性能が劣化するという欠点があります。これに対し、正方のユニタリ行列を非正方行列に射影する独自のコンセプトを前年度に提案し、従来方式の送信レートおよび演算量が飛躍的に改善可能であることを示しました (IEEE TWC.2017.2657497)。英国サウサンプトン大学の Xu 博士および Rajashekar 博士と議論を重ね、2017 年度は 4 本の国際共著論文を IEEE ジャーナルに投稿し、年度内に非筆頭の 2 本が採録に至っています。年度初めに科研費獲得支援制度のお世話にな

り、おかげさまで、科研費「研究活動スタート支援」は採用となりました。また、正方・非正方変換の論文に関して、東京電機大学基金から論文賞を賜りました。なお、同賞は丹羽保次郎先生の功績を記念するものであり、2017 年度は 14 篇から 3 篇が選ばれました。

本務に影響の出ない範囲で、2017 年度は IEEE の国際論文誌に投稿された論文 25 本の査読を引き受けました。特に、IEEE Transactions on Communications における査読活動が高く評価され、Exemplary Reviewer (模範的査読者) として認定されました。なお、2017 年に認定された 75 人のうち、日本の大学・研究機関からは計 3 人が選ばれています。

1. C. Xu, R. Rajashekar, N. Ishikawa, S. Sugiura, and L. Hanzo, Single-RF index shift keying aided differential space-time block coding, IEEE Transactions on Signal Processing (IF = 4.300), vol. 66, no. 3, pp. 773–788, Feb. 2018.
2. R. Rajashekar, C. Xu, N. Ishikawa, S. Sugiura, K. V. S. Hari, and L. Hanzo, Algebraic differential spatial modulation is capable of approaching the performance of its coherent counterpart, IEEE Transactions on Communications (IF = 4.058), vol. 65, no. 10, pp. 4260–4273, Oct. 2017.
3. 石川 直樹, [招待講演] 空間変調の流行と 50 年間の研究変遷, 電子情報通信学会 スマート無線研究会, 2018 年 1 月.
4. 石川 直樹, [奨励講演] 空間変調のミリ波・可視光・マルチキャリア通信応用, 電子情報通信学会ワイドバンドシステム研究会, 2017 年 12 月.
5. IEEE Transactions on Communications Exemplary Reviewer 2017.
6. 東京電機大学基金 丹羽保次郎記念論文賞, 2018 年 2 月.

【社会活動】

広島市立大学が主催する産学連携研究発表会と地域貢献事業発表会に説明員として参加しました。また、IEEE の中堅国際会議 (採択率 50% 程度) の技術プログラム委員として活動しました。市大生の海外留学を応援したいと考えているので、文部科学省などの奨学金に応募する書類の添削を希望する学生はメールで気軽に連絡してください (ishikawa [at] hirosima-cu.ac.jp)。

2017 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会 出展
2017 年 10 月 -	電子情報通信学会 スマート無線研究会 専門委員
2017 年 9 月 - 2017 年 10 月	IEEE VTC 2018-Spring 技術プログラム委員
2017 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 出展

氏名	石田 賢治
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、情報ネットワーク
研究キーワード	情報通信工学、通信品質、アシュアランスネットワーク

誰にどこを指摘されても良いような行動を心がけています。教育活動、研究活動、社会活動、大学運営についても同様です。教育活動においては、学生諸君に対して、講義時間中に集中することを要請しています。また、講義中に定期的に問掛けや質問を行い、双方向で能動的な講義を心がけています。また、評価に関して、正直者が馬鹿を見ることがないように評価を行いますと講義中に伝え実践しています。研究活動の一貫したテーマとして、ネットワーク制御アルゴリズムに注目しています。特に、時々刻々と常に変化し続ける情報ネットワークに対して、静的な最適化ではなく、準最適でも良いので想定外の変化にも対応可能な制御技術に重点をおいて研究しています。

【教育活動】

以下の表の講義を担当しています。情報ネットワークの世界では、最良と思われた技術がすぐに陳腐化し、古い時代の技術が別のかたちで再び脚光を浴びることがよくあります。このような現象は技術の輪廻転生と捉えることができます。つまり、情報ネットワーク技術の発展を時間的な流れと共に理解することが極めて重要です。学生諸君が各種技術とその変遷を時間的な流れの中に位置づけて理解できるように心がけて講義しています。

2016, 2017 年度	情報ネットワーク特論
2016, 2017 年度	情報ネットワーク
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	コンピュータ基礎
2016, 2017 年度	ネットワークプロトコル
2016, 2017 年度	分散システム
2016, 2017 年度	教養演習

【研究活動】

研究室の構成員等と共に、想定外の事象への対処を目指すアシュアランスネットワーク技術や無線 LAN のようなベストエフォートネットワークにおける通信品質保証技術等の研究を進めています。昨年度は、研究室構成員の先生、修了学生と共に情報処理学会 DICOM2017 において優秀論文賞を頂きました。最近の主要な成果は以下の通りです。

1. Ryo Tsurumi, Mayu Morita, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, Throughput Control Method between Different TCP variants based on SP-MAC over WLAN, Proc. IEEE International Conference on Consumer Electronics - Taiwan (ICCE-TW), May 2018.
2. 寺岡 良章, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, 無線 LAN のアクセスポイントにおけるスループット保証を目指した TCP 受信ウィンドウ制御方式, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol.J101-B, No.2, pp.70-79, 2018.

3. Mayu Morita, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, TCP Characteristics Evaluation using Adaptive Throughput Control Method based on SP-MAC, Proc. The 6th Korea-Japan Joint Workshop on Complex Communication Sciences (KJCCS2017), P1, December 2017.
4. Yosuke Izumikawa, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, Tutomu Murase, and Kenji Ishida, Experimental Evaluation of TCP considering Capture Effect on WLAN, Proc. The 6th Korea-Japan Joint Workshop on Complex Communication Sciences (KJCCS2017), A4, December 2017.
5. Fumiya Teshima, Hiroyasu Obata, Ryo Hamamoto, and Kenji Ishida, TCP-TFEC: TCP Congestion Control based on Redundancy Setting Method for FEC over Wireless LAN, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E100-D, No.12, pp.2818-2827, 2017.
6. Ryoma Ando, Ryo Hamamoto, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, A Priority Control Method for Media Access Control Method SP-MAC to Improve Throughput of Bidirectional Flows, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E100-D, No.5, pp.984-993, 2017.
7. Ryo Hamamoto, Chisa Takano, Hiroyasu Obata, Kenji Ishida, Improvement of Throughput Prediction Scheme Considering Terminal Distribution in Multi-rate WLAN Considering both CSMA/CA and Frame Collision, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol.E99-D, No.12, pp.2923-2933, 2016.
8. Ryo Hamamoto, Chisa Takano, Hiroyasu Obata, Masaki Aida, Kenji Ishida, Proposal for Designing Method of Radio Transmission Range to Improve both Power Saving and Communication Reachability based on Target Problem, IEICE Transactions on Communications, Vol.E99-B, No.11, pp.2271-2279, 2016.
9. 濱本 亮, 小畑 博靖, 安藤 竜馬, 山本 西貴, 高野 知佐, 石田 賢治, H-SP-MAC: 隠れ端末問題の解決を目指したメディアアクセス制御 SP-MAC の改良, 電子情報通信学会論文誌 B, Vol.J99-B, No.10, pp.893-907, 2016.

【社会活動】

海外の社会活動として、IEEE 等の通信分野の複数国際会議の TPC を務めています。国内の各種独立行政法人等の各種委員も務めており、社会へ貢献しつつあります。また、中国地域においては、昨年度から、第 69 回電気・情報関連学会中国支部連合大会の実行委員長に就任して、他の実行委員と共に連合大会の成功を目指して活動しています。本学関係の社会活動として、リエゾンフェスタ、市役所での広島市立大学地域貢献事業発表会、オープンキャンパス等に毎年継続して出展しています。

氏名	石光 俊介
職位	教授
研究分野	リハビリテーション科学・福祉工学、機械力学・制御、通信・ネットワーク工学、制御工学、船舶海洋工学
研究キーワード	音響工学、サウンドデザイン、アクティブノイズコントロール、時間周波数解析

大学院生のグローバル人材育成を軸として積極的に国際会議や地域貢献にも実際に学生を参加させるとともに、企業との共同研究も通じて、社会人基礎力の育成も心がけた。実践的研究教育を行いつつ、今年度も成果を上げていきたいと考えている。

【教育活動】

昨年度は博士後期課程 2 名、前期課程 2 名が学位を取得し無事修了した。今年度は博士後期課程 2 名、前期課程 9 名の大学院研究指導をするとともに、学部生の育成および教育も行う。また、人間工学については教科書の作成も行う。さらには、毎朝の英語ゼミで学生を鍛えつつ、国際会議やジャーナル論文を促し、グローバル人材育成の一助を担いたいと考える。

2017 年度	人間工学
2017 年度	音響システム工学
2017 年度	機械力学
2017 年度	音響システム特論
2017 年度	情報科学講究

【研究活動】

研究活動では、農研機構革新的技術開発・緊急展開事業に採択(年間 2 千万円、市立大直接費)のほか、受託研究費として、マツダ 2 件(76 万円、135 万円)、メモリーテック(75 万円)、PRIN(330 万円、2 年間)、ヒロタニ(200 万円)を受け入れ、地域社会への技術還元とともに、研究を推進した。他分野との交流を推し進め、日本大学松戸歯学部とも協同で研究し、歯科学会で受賞した。研究成果は全 12 回の雑誌への掲載のほか、ジャーナル論文 8 件、国際会議 18 件、国内会議 15 件に、グローバル人材育成を見据えて、学生を中心に成果をまとめている。また、共同研究以外にも基礎研究として、オーディオや信号処理の検討も行った。今年度も引き続き、地域貢献を見据えた研究推進を行う予定である。

1. 機械の研究, 養賢堂, 2017 ほか 11 件
2. NAOAKI SHIBATANI, SHUNSUKE ISHIMITSU AND MANABU YAMAMOTO, COMMAND FILTERED-X LMS ALGORITHM AND ITS APPLICATION TO CAR INTERIOR NOISE FOR SOUND QUALITY CONTROL, International Journal of Innovative Computing, Information and Control(IJICIC), Vol. 14, No. 2, pp. 647-656, 2018 ほかジャーナル論文 7 件
3. Yuki Fukuda, Kenta Ueyama, Shunsuke Ishimitsu, Ryoji Higashi, Seiji Yumoto, Takashi Numanou, Study on Objective Evaluation Technique for Small Differences of Sound

Quality, AES New York 2017 143rd International Convention, 2017

ほか国際会議 17 件

4. 山際納月, 石光俊介, 伊達佑希, 自動車の乗車シーンにおける一連動作が与える聴感印象の解析, 日本音響学会 2018 年 春季研究発表会, 2018

ほか国内会議 14 件

【社会活動】

社会活動としては国際会議のプログラム作成メンバのほか、広島で開催される国際会議の local committee chair を務めている。また、授業公開や高校への出前授業も積極的に行った。7 件の技術相談で地域に貢献したほか、マツダやヒロタニのコンサルティング業務も行った。さらに、招待講演の要請も受けた。今年度も同様に努力したい。

2018 年 1 月-	サウンドデザインとその評価, 一般社団法人日本機械学会 関西支部
2017 年 12 月-	サウンドデザインとその評価, ビューエルアンドケアー
2017 年 11 月-	地域貢献事業発表会 2017
2017 年 10 月-	高校生のための広島市立大学サテライト講座, 柳井市、 広島市立大学
2017 年 10 月-	ライブキャンパス「音響システム工学」授業公開
2017 年 9 月-	広島市立大学産学連携研究発表会 2017
2017 年 8 月-	The 12th International Conference on Innovative Computing, Information and Control (ICICIC2015), Chairperson, Program committee member
2017 年 8 月-	桜サイエンスプロジェクト研究室公開, プレゼンテーション
2017 年 7 月-	平成 29 年度中高大連携公開講座「大学で何を学ぶか」出 前授業
2017 年 7 月-	オープンキャンパスにおける研究室公開
2017 年 4 月-2018 年 3 月	ICSV25 local committee chairman

氏名	市原 英行
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	ストカスティックコンピューティング、ディペンダブルコンピューティング、デジタル回路の設計とテスト、フェンシング競技支援

教育活動・研究活動・社会活動に対して、「できる範囲内で来るものは拒まず」の精神で活動を行っている。特に教育活動と研究活動は大学教員の本分であると考え、優先的に活動している。研究活動は上記のキーワードで精力的に行っており、この2年間では特にストカスティックコンピューティングに関する研究で一定の成果を得ることができた。教育活動は、質の良い授業や演習を行うことはもちろんのこと、研究活動を学生と行うことが重要と考えている。社会活動では、高校生向けの模擬授業やプログラミング講座、一般社会人向けの実践セミナーを行った。研究学会などの各種委員も務めている。大学運営においても、キャリア形成支援委員、進路指導委員、工学実験リプレイス WG 委員、学部過半数代表者を務めた。

【教育活動】

座学であるデータ構造とアルゴリズム II、システム LSI 設計では、演習をできるだけ行うことで、学生が理解しやすいように努めた。情報工学科3年生向けの情報工学実験 I・II は、学生が自ら解決方法を調べ、各セメスターの最後にはコンテストを行うアクティブラーニングを実践した。また 2017 年度は実験機器のリプレイスがあったため、カリキュラムの大幅な改編を担った。大学院向けの回路設計自動化特論は、ゼミ形式で行っており、学生には深い理解を求めている。自主プロジェクト演習のアドバイザーも2年間努めた。研究室では2年間で修士学生5名、学部学生4名の研究指導を行った。指導学生の2名は 2016 年度最優秀卒業論文賞および卒業論文プレゼンテーション賞、2017 年度の最優秀修士論文賞を受賞した。

2016, 2017 年度	データ構造とアルゴリズム II, システム LSI 設計, 情報工学実験 I・II, 回路設計自動化特論(大学院向け)

【研究活動】

ストカスティックコンピューティングに関する研究を中心に行っている。これは 2016 年度から 2018 年度まで科研費基盤研究(c)として助成を受けている。ストカスティックコンピューティング以外の研究テーマとして、テスト容易化設計、自律再構成可能耐故障システム、サイバーフィジカルシステム、フェンシング競技支援システムの研究も行ってきた。この2年間で、論文誌 IEEE Trans. on Emerging Topics in Computers に1件、国際会議に5件、国内研究会に 14 件の発表を行った。また、これとは別に 2017 年にはストカスティックコンピューティングに関する招待講演も行った。

1. 児島彰, 石川直樹, 市原英行, 井上博之, 大田知行, 小畑博靖, 窪田昌史, 新浩一, 高野知佐, 永山忍, 組み込みシステム技術とネットワーク技術を教育するための学生実験用ロボット教材と実験カリキュラムの開発, 情報処理学会 第 80 回全国大会, 2018
2. 久保田直弥, 藤葉麻紀, 市原英行, 岩垣剛, 井上智生, Stochastic Number Generation with Internal Signals of Peripheral Logic Circuits, 電子情報通信学会 VLD 研究会, 2017

3. (特別・招待講演)市原英行, ストカスティックコンピューティングの研究動向, DA シンポジウム 2017 –システムと LSI の設計技術–, 2017
4. Hideyuki Ichihara, Motoi Fukuda, Tsuyoshi Iwagaki, Tomoo Inoue, State Assignment for Fault Tolerant Stochastic Computing with Linear Finite State Machines, Proc. ITC-Asia, 2017
5. Naoya Kubota, Hideyuki Ichihara, Tsuyoshi Iwagaki, Tomoo Inoue, Stochastic Number Generation with Internal Signals of Logic Circuits, Proc. SASIMI, 2016
6. Hideyuki Ichihara, Tatsuyoshi Sugino, Shota Ishii, Tsuyoshi Iwagaki, Tomoo Inoue, Compact and Accurate Digital Filters Based on Stochastic Computing, IEEE Trans. on Emerging Topics in Comp., 2016

他 15 件

【社会活動】

ローカルでの社会活動としては、社会人向けの情報科学実践セミナー、高校生向けの模擬授業、プログラミング講座、GSC ステップステージセミナー、情報科学自由研究(2016 年度は受講生徒がポスター発表にて最優秀に選ばれた)などを行った。一方、グローバルな社会活動としては、国際会議の実行委員や各種委員、研究会の幹事や専門委員を務めた。

2017 年度	機能集積情報システム研究会幹事
2017 年度	ディペンダブルコンピューティング研究会専門委員
2017 年 12 月	GSC ステップステージ第5回セミナー(高校生向け)
2016, 2017 年度	模擬授業(呉宮原高校, 広島皆実高校, 安西高校), プログラミング講座(安西高校), GSC ステップセミナー, 情報科学自由研究
2016, 2017 年度	高校生による情報科学自由研究
2016, 2017 年度	実行委員(IEEE Asian Test Symposium 2016, International Test Conference in Asia 2019)
2016, 2017 年度	プログラム委員(Defect and Fault Tolerance in VLSI and Nanotechnology Systems Symposium, Pacific Rim International Symposium on Dependable Computing, Workshop on RTL and High Level Testing)
2016, 2017 年度	Workshop on RTL and High Level Testing 運営委員
2016 年 12 月	実践情報セミナー(社会人向け)

氏名	稲木 雅人
職位	講師
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	VLSI 設計自動化

教育活動において、2016～2017 年度では助教として主にアクティブラーニングに該当する実験・演習科目を中心に授業を受け持った。講義科目としては大学院の授業である回路設計自動化特論を分担し、これもアクティブラーニング形式で実施した。研究活動では、VLSI・LSI 設計自動化の分野において特に下流工程であるモジュール配置のフロアプラン、詳細な配置設計、配線設計、マスクパターン設計についての研究、それらを応用した FPGA などの再構成可能デバイス向け回路マッピング手法の研究、またそのための組み合わせ最適化手法についての研究を扱っている。社会活動としては主として国内会議幹事として学術活動に貢献し、また高校生への体験授業により学外における教育活動に貢献した。

【教育活動】

情報科学基礎実験 $\alpha - I(A)$ およびその前身の基礎実験 A では、毎週3時限をかけて、情報化社会の基盤である電子回路（論理回路）の設計および実装の基礎を、部品の配置と配線を手作業で変えることで様々な回路が実現できるブレッドボードと、それらを電子的に変更することができるとして広く使用されているマイクロチップである FPGA を用いて、簡単な回路を設計実装することを通じて習得させた。大学院の授業である回路設計自動化特論では最新技術を学生自ら説明および質疑応答することで、最新の知識と説明能力の両方を習得させた。その他演習科目では学生自ら演習課題に取り組むことにより対応する講義科目の内容を習得させた。

2016, 2017 年度	論理設計演習
2016, 2017 年度	回路設計自動化特論
2016, 2017 年度	e ラーニング英語 II
2016 年度	情報科学基礎実験A
2016 年度	プログラミング3演習
2017 年度	情報科学基礎実験 $\alpha - I(A)$

【研究活動】

2016～2017 年度では、高度な微細化が進展する LSI 設計製造において、回路パターンの LSI への転写に用いる露光光の回折により生じる製造不良の発生しやすい箇所であるホットスポットを、製造前に設計データ中から発見するホットスポット検知手法についての研究を主として行った。過去の LSI 製造により収集されたホットスポットのライブラリの存在を前提として、他分野の技術である近似文字列照合の技術を応用して既知のホットスポットに近似したパターンを発見する手法を提案し、さらにテーブル参照および並列処理によりそれを高速に実行する手法を提案し、それぞれ国際会議にて発表した（前者は会議開催地の情勢により論文のみ発表）。それと並行して機械学習による手法の研究も開始した。

1. Shuma Tamagawa, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, and Shin'ichi Wakabayashi, "Table Reference-Based Acceleration of a Lithography Hotspot Detection Method Based on Approximate String Search," in Proceedings of CENICS2017 (The Tenth International Conference on Advances in Circuits, Electronics and Micro-electronics), pp. 8-14, 2017.
2. Shuma Tamagawa, Ryo Fujimoto, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, Shin'ichi Wakabayashi, "A Hotspot Detection Method Based on Approximate String Search," in Proceedings of CENICS2016 (The Ninth International Conference on Advances in Circuits, Electronics and Micro-electronics), pp. 6-12, 2016.

他 4 件

【社会活動】

2016～2017 年度では回路設計についての主要な国内会議である『回路とシステムワークショップ』の LSI 設計自動化に関する分科会の代表である世話人、分科会企画責任者である企画委員、全体の幹事団の一員である出版広報担当幹事を3期に渡り順次務めた。幹事業務においてはワークショップ協賛依頼および調整、論文投稿案内の頒布計画および投稿状況に応じた実施、開催案内の頒布計画および実施、原稿の収集・訂正依頼などを行いワークショップの運営に貢献した。また、現代社会を支える LSI とその設計をテーマに、関係するパズル問題を通して大学で扱う学問分野を体験する論理パズル演習を、広島市立美鈴が丘高校での出張授業として2時限を2回の計4時限、大学訪問された広島県立祇園北高校の生徒らに対して1時限を1回行った。

2017 年 12 月-	美鈴が丘高校体験授業 論理パズル演習
2017 年 11 月-	祇園北高校体験授業 論理パズル演習
2017 年 9 月-2018 年 9 月	電子情報通信学会 第 31 回 回路とシステムワークショップ 出版広報担当幹事
2016 年 12 月-	美鈴が丘高校体験授業 論理パズル演習
2016 年 9 月-2017 年 9 月	電子情報通信学会 第 30 回 回路とシステムワークショップ C 分科会 企画委員
2015 年 9 月-2016 年 9 月	電子情報通信学会 第 29 回 回路とシステムワークショップ C 分科会 世話人

氏名	稲葉 通将
職位	助教
研究分野	知能情報学、エンタテインメント・ゲーム情報学
研究キーワード	対話システム、対話分析、自然言語処理、機械学習

近年は対話システムに関する研究、人狼ゲームに関する研究ともに順調に進捗しており、十分な研究費も獲得できている。また、研究活動に伴う社会活動も学会・研究会の運営と論文査読に関わるなど、活発に行なっている。教育活動に関しては、学生の興味が維持できるよう心がけ、授業に臨んでいる。

【教育活動】

解析学Ⅰ演習では、学生の質問に対し、わかりやすい解説を心がけている。また、毎週の採点でも誤りやすい点について適宜コメントを入れるなどの工夫を行っている。情報科学基礎実験については学生目線に立ったアドバイスを心がけている。基礎演習では、学生がプレゼンを行う際は、学生が興味を持つようなトピックを選ぶことで、モチベーションを高める工夫を行っている。また、学生間で討論を行う際にはゲームの要素を取り入れるなど、楽しみながら授業に参加できるようにしている。

2016, 2017 年度	解析学Ⅰ演習
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験
2016, 2017 年度	基礎演習

【研究活動】

研究活動に関しては、論文が国内外の論文誌、および対話系のトップ国際会議である SIGDIAL に採録されるなど、非常に順調であると言える。また、科研費の獲得やトヨタ自動車との共同研究の実施など、十分な研究費が獲得できている。

1. 稲葉 通将 高橋 健一, 非タスク指向型対話システムのためのリカレントニューラルネットワークを用いた発話候補ランキング, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J100-D, No. 6, pp. 661-671, 2017
2. Fujio Toriumi, Hirotaka Osawa, Michimasa Inaba, Daisuke Katagami, Kosuke Shinoda, and Hitoshi Matsubara, AI Wolf Contest -Development of Game AI Using Collective Intelligence-, Communications in Computer and Information Science, pp. 101-115, 2017
3. 鳥海不二夫, 稲葉通将, 大澤博隆, 片上大輔, 篠田孝祐, 松原仁, ゲームプログラミング大会を用いた集合知的ゲーム AI 開発手法 一人狼知能大会の開催と参加エージェントの分析-, デジタルゲーム学会論文誌, Vol. 9, No. 1, pp. 1-11, 2017
4. 稲葉通将, 大畠 菜央実, 鳥海不二夫, 高橋健一, 雑談ばかりしていると殺される? 人狼ゲームにおける発話行為タグセットの提案とプレイヤーの行動・勝敗の分析, 情報処理学会論文誌, Vol. 57, No. 11, pp. 2392-2402, 2016
5. Michimasa Inaba, Kenichi Takahashi, Neural Utterance Ranking Model for Conversational Dialogue Systems, The 17th Annual SIGdial Meeting on Discourse and Dialogue (SIGDIAL 2016), 2016

【社会活動】

社会活動としては国内外の学会・研究会の運営委員・実行委員として活動を行っているほか、論文誌の編集委員としての活動も行っている。

2017 年 4 月 -	Program Committee, The 8th International Joint Conference on Natural Language Processing (IJCNLP)
2016 年 4 月 -	運営委員, 人工知能学会 言語・音声理解と対話処理研究会
2016 年 4 月 -	Program Committee, IEEE International Conference on Agents (IEEE ICA 2016)
2016 年 4 月 -	専門委員, 電子情報通信学会 人工知能と知識処理研究専門委員会
2015 年 4 月 -	運営委員, 情報処理学会 ゲーム情報学研究会
2013 年 4 月 -	情報処理学会論文誌ジャーナル/JIP 編集委員会委員

氏名	井上 伸二
職位	助教
研究分野	計算機システム・ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	ネットワークソフトウェア、マルチエージェント、高度情報交通システム、センサネットワーク

高度情報交通システムを利用した渋滞軽減手法・無線センサネットワークの長寿命化につながる運用方法についての研究を中心に研究を続けている。いずれも状態が時々刻々変動するシステムであり、その変動にどのように追従しシステムを望ましい状態に近づけていくのか、その手法について研究している。この研究は現実世界のシステムを利用した検証を行うことは非常にコストが高いためコンピュータシミュレーションによって検証することになる。教育分野では学部・学科のプログラミング教育を中心に携わっており学生のプログラミング能力が向上するような教育を追及している。また比率は小さいが学会活動の専門委員なども拝命しており社会活動にも貢献している。

【教育活動】

2016 年度以前から情報科学部全体のプログラミングⅠ演習・プログラミングⅡ演習、そして情報工学科のプログラミングⅢ・(同)演習を担当しており、学生のプログラミング教育を担ってきた。スマホなど情報端末が学生にとって身近になってきてプログラムを中身の分からないブラックボックスのように捉えている学生も増えてきた。それに対して情報科学を学ぶ学生としてプログラミング能力を高めるような教育に取り組んでいる。また基礎演習では入学してきた1年生に授業で知識を得るだけではなく自ら興味のあるテーマを学習するように指導している。

2016, 2017 年度	プログラミングⅠ演習
2016, 2017 年度	プログラミングⅡ演習
2016, 2017 年度	プログラミングⅢ
2016, 2017 年度	プログラミングⅢ演習
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	ネットワークソフトウェア特論

【研究活動】

高度情報交通システムを利用した渋滞軽減手法の研究に取り組んできた。そして 2017 年度から車両の自動走行システムの一形態であるコンボイ(隊列)走行を動的に形成し道路の利用効率を上昇させる研究に取り組み始めた。またこれまで研究してきた無線センサネットワークの長寿命化についての研究については、無線センサネットワークをクラスタリングし負荷分散することによって一部の端末に負荷が集まり電力消費が進むということが発生しないような手法の確立を進めている。

1. 土砂災害の被害軽減を目指した MANET による草の根情報伝搬システムの研究開発, 電子情報通信学会 アシユアランスシステム研究会, 2017
2. 自律分散クラスタリングに基づく送信電力と送信間隔の統合制御法の適用順序に関する一考察, 電子情報通信学会 第 12 回ネットワークソフトウェア研究会, 2017

3. MANET クラスタリングにおける端末密度を考慮した制御パケット送信間隔制御法, 電子情報通信学会 ソサイエティ大会, 2016
4. MANET 自律分散クラスタリングにおける送信電力と送信間隔の統合制御法の安定したリアルタイム自己組織化, 電子情報通信学会 2016 年第 1 回アシュアランスシステム研究会, 2016
5. Experimental Evaluation of Self-Organized Transmission Power Control Scheme Considering Connectivity in MANET Autonomous Clustering, 7th IEEE Workshop on Self-organizing Real-Time Systems (SORT2016), 2016

【社会活動】

学会活動として 2011 年5月以降、電子情報通信学会情報ネットワーク(IN)研究会の専門委員として同研究会の運営のサポートを行っている。そして高校生向けの活動として 2016 年・2017 年と続けてオープンキャンパスにて研究室の研究活動の一部を高校生ならびにその保護者の方へ紹介している。

2017 年 8 月	オープンキャンパス 2017 研究室紹介
2016 年 8 月	オープンキャンパス 2016 研究室紹介
2011 年 5 月 -	電子情報通信学会 IN 研究委員会 専門委員

氏名	井上 智生
職位	教授
研究分野	計算機システム
研究キーワード	ディペンダブル・コンピューティング、LSI-CAD (計算機支援設計)、ストカスティック・コンピューティング、サイバー・フィジカル・システム

副理事(入学試験・就職担当)、キャリアセンター長として大学運営に携わりながら、情報科学研究科教員として教育・研究・社会活動に取り組んだ。2016-2017年度は、特に入試改革を中心とした高大接続改革に関する業務に重きを置いた活動になったが、その業務内容を生かす形で高校との連携を推進した。あわせて、国際会議実行委員会委員長(General Co-Chair)などの研究分野での活動を継続しながら、学生の研究指導、授業の改善工夫など教育の質の維持・向上に取り組んだ。結果として、研究分野での論文執筆・発表の件数は限定的となったが、研究指導をした複数の学生が研究発表で受賞するなど、教育と研究を両立することができた。

【教育活動】

学生(受講者)の特性に合わせた授業方法の工夫・改善を常に行っている。大学院授業「計算機支援設計特論」では、少人数クラスの利点を生かし、グループ討論・課題の時間を多く取り入れながら、研究活動や修了後の社会での業務にもつながる実践的な内容を取り入れている。共通専門基礎科目「離散数学」では、他のクラスを担当する2名の教員と共同して、授業内容、試験問題作成、評価などについて常に調整、情報交換を行い、それぞれの授業改善に努めている。全学共通系科目「キャリアサポートベーシック」については、キャリアセンターと連携し、招へいする外部講師の協力を得ながらキャリア教育としての質の向上に努めている。

2016, 2017 年度	計算機支援設計特論
2016, 2017 年度	CAD システム
2016, 2017 年度	離散数学
2016, 2017 年度	キャリアサポートベーシック

【研究活動】

コンピュータシステムの設計最適化手法、特にディペンダビリティ(信頼性、安全性など)を指向した計算機支援設計(CAD)技術に関する研究を行っている。本期間(2016-2017年度)では特に、低面積コストで高演算精度・高信頼を実現するストカスティック計算システムの設計法に関する研究に注力し、一定の成果を得ている。また、民間企業と共同で、レジスタ転送ベルにおけるスキャン設計技術に関する研究をスタートした。その他、ディペンダブル・サイバー・フィジカル・システム(リアルタイム制約を持つ組込み高機能システムの高信頼設計法)に関する研究にも取り組んでいる。いずれの課題についても今後も継続・発展させる。

1. T. Iwagaki, S. Yuasa, H. Ichihara, T. Inoue, "Experimental Evaluation of Test Cost Reduction by Scan Chain Testing in RTL Scan Circuits," Digest of Papers 18th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing, 2017.

2. H. Ichihara, M. Fukuda, T. Iwagaki, T. Inoue, "State Assignment for Fault Tolerant Stochastic Computing with Linear Finite State Machines," Proc. ITC-Asia, 2017
3. M. Fukuda, H. Ichihara, T. Iwagaki, T. Inoue, "Impact of State Assignment on Error Resilient Stochastic Computing with Linear Finite State Machines," Digest of Papers 17th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing, 2016
4. K. Itani, T. Iwagaki, H. Ichihara, T. Inoue, "Exploration of Four-Phase Dual-Rail Asynchronous RTL Design for Delay-Robustness," Digest of Papers 17th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing, 2016
5. N. Kubota, H. Ichihara, T. Iwagaki, T. Inoue, "Stochastic Number Generation with Internal Signals of Logic Circuits," Proc. Int'l Workshop SASMI, 2016
6. H. Ichihara, T. Sugino, S. Ishii, T. Iwagaki, T. Inoue, "Compact and Accurate Digital Filters Based on Stochastic Computing," Trans. on Emerging Topics in Comp., No. 99, 2016

【社会活動】

研究分野に関連するものでは、国際会議の実行委員、研究会専門委員会委員などを務めるとともに、民間団体による技術者育成のための事業に参加している。高校との連携にも力を入れており、広島県教育委員会と連携して、高校生の科学探究活動支援に取り組んでいる。地域の高等学校の各種委員会にも加わり、高校生の学習活動や高等学校教員の活動を支援している。また、中国経済連合会が主催する人材育成部会に参加し、人材育成と地域企業の活性化に協力している。

2017 年度	ITC-Asia 2019 Organizing Committee General Co-Chair
2017 年度	中国経済連合会人材育成部会 委員
2016, 2017 年度	一般社団法人パワーデバイス・イネーブリング協会 半導体テスト技術者検定 検定問題審議委員会 委員
2016, 2017 年度	安田女子高等学校 スーパーサイエンスハイスクール運営指導委員会 委員
2016, 2017 年度	広島市立沼田高等学校 学校協力者会議 (外部評価部会) 委員
2016 年度	Asian Test Symposium 2016 Organizing Committee General Co-Chair

他 17 件

氏名	井上 博之
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学
研究キーワード	組込みセキュリティ、広域分散環境

教育活動は大学の学生実験にアクティブラーニングを取り入れコンピュータとネットワークの仕組みを直感的に理解できるような実習を実施した。研究活動は組込みセキュリティのテーマにて、特に自動車の情報セキュリティで第一人者の何名かとして名前が出るようになった。社会活動としては高大連携講座、若手・学生向け情報セキュリティ講座やイベントを実施した。

【教育活動】

コンピュータシステムおよびネットワークを中心とした授業を実施した。情報工学実験 I とコンピュータ基礎では代表教員を務め、実験でのアクティブラーニングの積極的な活用を行った。

2016, 2017 年度	コンピュータ基礎
2016, 2017 年度	情報工学実験 I
2016, 2017 年度	オペレーティングシステム
2016, 2017 年度	情報工学実験 II
2016, 2017 年度	テクニカル・リーディング演習(分担)
2016, 2017 年度	情報通信方法特論

【研究活動】

情報セキュリティ関係の招待講演・基調講演などを多く実施した。成果はグループのメンバーでの論文として発表している。2017 年度はオライリーの車載セキュリティの英文書籍の翻訳(一部)および監修・監訳も行った。

他 33 件

1. Craig Smith 著, 井上博之 監修, カーハッカーズ・ハンドブック ―車載システムの仕組み・分析・セキュリティ, オライリー・ジャパン, 2017
2. 城間政司, 西尾泰彦, 井上博之, USB 周辺機器接続のセキュリティリスク分析におけるアセット導出手法, 情処論文誌, Vol.59, No.1, pp.199-210, 2018
3. K. Iehira, H. Inoue, K. Ishida, Spoofing Attack Using Bus-off Attacks against a Specific ECU of the CAN Bus, Proc. IEEE CCNC2018, pp.208-211, 2018
4. 西尾泰彦, 城間政司, 井上博之, 脅威モデリング連携型アタックテストによる車載ネットワーク脅威分析手法, 情処論文誌, Vol.58, No.12, pp.1943-1953, 2017
5. 井上博之, IoT における脅威の現状 ―情報セキュリティから IoT セキュリティに向けた取り組み―, 精密工学会誌, Vol.83, No.1, pp.46-49, 2017
6. 井上博之, 車載セキュリティへの攻撃手法とその対策事例, 車載テクノロジー, Vol. 4, No. 3, pp. 26-30, 2017
7. 井上博之, つながる自動車の IT セキュリティ, 日本セキュリティ・マネジメント学会誌, Vol. 30, No. 2, pp. 21-28, 2016

8. (特別・招待講演)井上博之, 車載システムの攻撃可能性検証プラットフォームと防御メカニズム, ISACA 名古屋, 2017
9. (特別・招待講演)井上博之, 徹底解説、自動車セキュリティの「攻撃」と「防御」最前線 2017, 日経 BP「escar Asia 2017」開幕直前セミナー, 2017
10. (特別・招待講演)井上博之, 実車実験から見るコネクテッドカーのサイバーセキュリティ, 自動車技術会 技術会議 2017 年度合同会議 基調講演, 2017
11. (特別・招待講演)井上博之, Connected Car のサイバーセキュリティ, 第 21 回サイバー犯罪に関する白浜シンポジウム 招待講演, 2017
12. (特別・招待講演)井上博之, サイバーセキュリティ概論, 自動車技術会 次世代エンジニア育成講座「2030 年の技術者像・車社会の展望」, 2017
13. (特別・招待講演)井上博之, 自動車への攻撃可能性とその実験プラットフォーム, SCAIS2017, 2017
14. (特別・招待講演)井上博之, 実車実験から見たつながる自動車のセキュリティ, 進化適応型自動車運転支援システム「ドライバ・イン・ザ・ループ」研究拠点形成事業 第 10 回部門研究会 基調講演, 2016
15. (特別・招待講演)井上博之, IoT セキュリティとしての自動車情報セキュリティ, 情報セキュリティワークショップ in 越後湯沢, 2016
16. (特別・招待講演)井上博之, 組込み／自動車セキュリティ研究の最前線—チュートリアル編／パネル編, SWEST18, 2016
17. (特別・招待講演)井上博之, ネットにつながるクルマのセキュリティとその保護機構, 電子情報通信学会ネットワークシステム研究会(NS) 招待講演, 2016

【社会活動】

社会活動では情報セキュリティ関係の委員や顧問を務めており、何度か広島市での教育イベントを誘致および運用している。学会の委員、国際会議の実行委員、広島情報産業協会の IoT ハンズオン講座や市立工業高校での講義などを実施した。

2018 年 2 月-2018 年 7 月	Technical Program Committee (TPC), The 5th IEEE International Workshop on BIOT2018
2018 年 4 月-2019 年 3 月	情報通信研究機構 (NICT) ナショナルサイバートレーニングセンター SecHack365 実行委員会 実行委員
2017 年	Local Organizing Committee, The 12th International Workshop on Security (IWSEC) 2017 (広島)
2017 年 9 月-2018 年 9 月	Program Committee, escar Asia 2018
2016 年 4 月-	情報処理推進機構 (IPA) セキュリティ・キャンプ 講師
2015 年 10 月-	Invited Expert in the Embedded Systems WG, TCG
2015 年 6 月-2016 年 5 月	電子情報通信学会 論文誌特集号(D) 編集委員
2015 年 4 月-	セキュリティコンテスト SECCON 実行委員会 実行委員
2015 年 4 月-	ET ロボコン中四国地区大会 実行委員
2014 年 4 月-	広島 HiBiS インターネットセキュリティ部会 顧問

他 10 件

氏名	岩垣 剛
職位	助教
研究分野	計算機システム
研究キーワード	ディジタルシステムの設計とテスト、ディペンダブルコンピューティング、非同期式回路、高位合成、テスト生成、テスト容易化設計

教育活動・研究活動を中心に据えながら、地域社会等に情報科学や研究成果をわかりやすく伝えるための活動や、学会活動を通じて学術面から社会に貢献することも重要だと考え、それらのバランスを意識して大学教員としての活動を行っている。中心となる教育活動においては、いわゆるアクティブラーニングを取り入れることを念頭におき、学生が主体的に学ぶ場を提供することを目指している。また、研究活動においては、自身の興味と自由な発想に基づく研究を大切にしつつ、社会のニーズに応える研究をしたいと考えている。大学における教育と研究は車の両輪であるため、それぞれを独立に考えず、相乗効果が得られるように工夫したい。

【教育活動】

担当講義においては、実験や演習を通じて、学生がその背景にある専門知識や技術を理解・習得したり、他の教科とのつながりや社会での応用例を意識したりできるような教材作りと指導を心がけている(特に初年次学生に対して)。また、学生自身の自主性・積極性をうまく引き出すような課題設定にも気を配っている。所属研究室においては、輪講や研究ミーティング、学会発表を通じて、学生のアカデミックスキルや専門性を向上させることを目指すとともに、アプリケーション開発やハードウェア設計等の演習課題を通じて、学外コンテスト等への応募を奨励し、学生のキャリア形成にもつなげたいと考えている。

2016, 2017 年度	計算機支援設計特論
2016, 2017 年度	プログラミング I 演習
2016, 2017 年度	e ラーニング英語 IV
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 α -1(A)
2016 年度	情報演習

【研究活動】

2016 年度・2017 年度は、ディペンダブルコンピューティングを軸として、高位合成の立場から大規模集積回路 (LSI) の信頼性向上を図った研究を中心に活動している。具体的には、日本学術振興会 (科研費) の支援の下、非同期式 LSI を対象としたフィールドでの信頼性向上に注力している。また、2017 年 10 月より、システムオンチップに適用可能なテスト容易化設計技術に関して、企業との共同研究を開始し、ニーズ指向の研究にも取り組んでいる。具体的には、テスト容易化設計 (スキャン設計) に伴うオーバーヘッド (面積、遅延、電力等) が大きいという課題に対して、レジスタ転送レベルからアプローチし、その解決を試みている。

1. T. Iwagaki, S. Yuasa, H. Ichihara and T. Inoue, Experimental evaluation of test cost reduction by scan chain testing in RTL scan circuits, Digest of Papers 18th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing (WRTLTL '17), pp. 1-6, 2017

2. H. Ichihara, M. Fukuda, T. Iwagaki and T. Inoue, State assignment for fault tolerant stochastic computing with linear finite state machines, Proc. 1st International Test Conference in Asia (ITC-Asia '17), pp. 156-161, 2017
3. T. Iwagaki, K. Itani, H. Ichihara and T. Inoue, Exploration of four-phase dual-rail asynchronous RTL design for delay-robustness, Digest of Papers 17th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing (WRTLTL '16), pp. 1-6, 2016
4. 岩垣, 湯浅, 市原, 井上, RTL スキャン設計におけるスキャンチェーンテストの故障検出能力について, FTC 研究会, 2018
5. 岩垣, 湯浅, 市原, 井上, RTL スキャン回路のスキャンチェーンテストにおける機能パス上の故障検出について, 電子情報通信学会 FIIS 研究会, 2017
6. T. Iwagaki, K. Itani, H. Ichihara and T. Inoue, Impact of operational unit binding on aging-induced degradation in high-level synthesis for asynchronous systems, 電子情報通信学会 DC 研究会, 2017

他 12 件

【社会活動】

社会活動においては、オープンキャンパス等の機会を活用して、高校生や地域住民に研究成果を広く知ってもらい、いわゆる「アウトリーチ活動」を推し進めたいと考えている。特に、出張講義や高校生による情報科学自由研究を実施する際には、高校で学ぶ知識（数学や物理等）の大切さや情報科学の楽しさ、情報科学が社会をどう支えているかを高校生に伝えたいと思っている。以上の活動を通じて、情報科学分野の裾野を広げ、社会に貢献したい。一方、学会活動においては、国際会議や学会の委員の依頼や査読の依頼があれば積極的に受け入れることを心掛けている。こうした活動を積み重ねることで、学術界の発展に寄与したい。

2017 年 12 月	広島県立安西高等学校 プログラミング体験講座
2016 年 12 月, 2017 年 10 月	愛媛県立西条高等学校 出張講義
2016 年 9 月-2017 年 3 月	システムと LSI の設計技術研究会運営委員会・表彰サブワーキンググループ
2016 年 8 月, 2017 年 8 月	オープンキャンパス 2016・2017 研究室紹介
2016 年 8 月, 2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究 2016・2017
2016 年 4 月-	システムと LSI の設計技術研究会運営委員
2016 年 4 月-	DA シンポジウム実行委員
2013 年-2016 年	17th IEEE Workshop on RTL and High Level Testing (WRTLTL '16) Local Arrangements Chair

氏名	岩城 敏
職位	教授
研究分野	ロボティクス
研究キーワード	ロボティクス、モーションメディア、コンプライアンス、力制御、テレオペレーション、バーチャルリアリティ

教育活動・研究活動・社会活動それぞれに一定の貢献実績があったと自己評価している。今後は、個人ではなく研究室総体としてのアウトプットを増やすように協力的な研究室運営に力を入れていきたい。また、共同プロジェクト等を積極的に推進し個々の能力ある教員の力を合わせることで、本学部総体として価値の高い成果が出るよう努めていきたい。また、学外研修を機にグローバル化活動推進にも注力する。

【教育活動】

情報基礎数学は本学部生が常識的に習得すべき基礎的内容なので、確実に身に付けられるよう演習中心に授業を進めた。ロボティクスⅠ・ロボティクスⅡでは、ロボットの重要性和魅力を訴えることで強く動機づけを行い、運動学・動力学を中心に、ビデオ・実機を用いて基礎技術を分かり易く習得させた。ロボティクス特論では、国際会議発表を模擬した授業を展開することで、基礎的英語力を鍛えるとともに、学生のテーマに応じた研究活動に直結するような実践的指導を行った。全ての科目の授業評価は本学部の平均をほぼ上回っており、それぞれ価値のある授業を提供できたと考える。

2016 年度	ロボティクスⅠ
2016 年度	情報基礎数学
2016 年度	ロボティクス特論
2016 年度	ロボティクスⅡ

【研究活動】

ジャーナル論文 4 件の掲載・受賞 2 件の成果は一定の成果を上げたものと自己評価する。これらは、本学FUND・外部資金・科研の研究資金サポートを受けたお陰であると認識している。なお、国際会議発表・国内発表に関しては、データベースへの登録を一部割愛しているが、本学部教員の平均的な件数は確保していると思われる。今後は、インパクトファクターの高い国際ジャーナルでの採択や論文賞受賞を目指す。

1. 佐藤 健次郎, 日高 雄太, 岩城 敏, 池田 徹志, TOF 型レーザセンサとパンチルトアクチュエータを用いた実世界クリッカーシステムのポインティング性能向上ー覗き込みウィンドウ内レーザースポット位置計測法の提案と評価ー, 計測自動学会論文集, Vol. 54, No. 2, 2018
2. 立本 健司, 辻 和也, 岩城 敏, 池田 徹志, プロジェクタロボットの投影適正領域への経路計画方法, 計測自動制御学会論文集, Vol. 53, No. 11, pp. 583-589, 2017
3. Kenji Tatsumoto, Satoshi Iwaki, Tetsushi Ikeda, Tracking projection method for 3D space by a mobile robot with camera and projector based on a structured-environment approach, Artificial Life and Robotics, Vol. 22, No. 1, pp. 99-101, 2017

4. 安孫子優紀, 日高雄太, 佐藤健次郎, 岩城敏, 池田徹志, TOF 型レーザセンサとパンチルトアクチュエータを用いた実世界クリック方式の提案と生活支援ロボット動作教示への応用, 計測自動制御学会論文集, Vol. 52, No. 11, pp. 614-624, 2016
5. Naoki Tsuchihashi, Kazuki Yoshinaga, Satoshi Iwaki, Tetsushi Ikeda, Non-contact manipulation of a single solid object on a plane surface using multiple air jets (Experiments with fuzzy control), pp328-333 2016/1/16, DOI: 10.1109/ICAMechS.2016.7813469, Proc. of ICAMechS International Conference on Advanced Mechatronic Systems (ICAMechS), 2016
6. Kenjiro Sato, Yuta Hidaka, Satoshi Iwaki, Tetsushi Ikeda, A Teaching Method for a Life-support Robot by Real-world Click - Proposal of Real Object Position Management Database -, The 2016 IEEE/RSJ International Conference on Intelligent Robots and Systems (IROS 2016), WeCI2. 4, 2016/10/12, 2016
7. 計測自動制御学会賞(技術賞), 計測自動制御学会, 2017
8. 日本機械学会中国四国支部 技術創造賞, 日本機械学会中国四国支部, 2017

【社会活動】

本学主催の公開講座や、広島県・市主催の講演には、今後はさらに積極的に協力していきたいと考える。

2017 年 3 月	技術創造賞特別講演、日本機械学会中四国支部
2017 年 1 月	平成28年度 第4回「電子デバイス事業化フォーラム」招待講演、(公財)ちゅうごく産業創造センター 主催
2013 年 4 月-	広島発高齢者見守り支援システム開発プロジェクト推進協議会副会長
2013 年 4 月-	日本ロボット学会理事
2008 年 1 月-	計測自動制御学会 SI 部門モーションメディア部会主査

氏名	岩田 一貴
職位	准教授
研究分野	知能情報学、統計科学
研究キーワード	パターン認識、機械学習、情報理論

一年間のトータルで考えたとき、教育活動、研究活動、社会活動、大学運営(学内委員など)のバランスがとれるように、意識して活動している。

【教育活動】

担当する授業では、毎回演習を兼ねたアンケートを取り、解らなかった箇所を申告させ、申告が多かった箇所は次の授業の冒頭で説明するようにしている。また、講義スライドとそれを印刷した配布資料は、教科書との対応を明記し、学生が後で自習してもわかるように丁寧に作成している。これらの工夫は、学生からの評価が高いようなので、今後も継続して行っていく予定である。

2016, 2017 年度	確率統計
2016, 2017 年度	パターン認識特論
2016 年度	離散数学
2016 年度	情報科学基礎実験B
2017 年度	最適化理論
2017 年度	情報科学基礎実験 β

【研究活動】

主にパターン認識、学習理論の分野で研究活動をしている。雑誌論文を年に一編は出版できるように、教育活動、社会活動、大学運営にかかる時間を上手くやりくりして、研究に集中できる時間を確保したい。大学院生への研究指導においては、個々の学生の関心や到達度に応じた助言を心掛けている。さらに、積極的に学会で研究発表させるようにしている。

1. Kazunori Iwata, Extending the Peak Bandwidth of Parameters for Softmax Selection in Reinforcement Learning, IEEE Transactions on Neural Networks and Learning Systems, Vol. 28, No. 8, pp. 1865-1877, 2017
2. Tsukasa Okamoto, Kazunori Iwata, and Nobuo Suematsu, Extending the Full Procrustes Distance to Anisotropic Scale in Shape Analysis, The 4th IAPR Asian Conference on Pattern Recognition, 2017
3. Kazuya Ose, Kazunori Iwata and Nobuo Suematsu, A Sampling Method for Coping with Contours Drawn with an Uncertain Stroke Order and Number, The 15th IAPR Conference on Machine Vision Applications, 2017
4. Kazunori Iwata, Reducing the Computational Cost of Shape Matching with the Distance Set, The 23rd International Conference on Pattern Recognition, 2016
5. 山本 大貴, 岩田 一貴, 末松 伸朗, 近傍標本点の対応を考慮した形状間の対応づけとその計算コストの削減, 第 20 回情報論的学習理論ワークショップ, 2017
6. 岡本 司, 岩田 一貴, 末松 伸朗, フルプロクルステス距離の拡張とその距離計量学習, 第 20 回情報論的学習理論ワークショップ, 2017

7. 柴田 悠雅, 末松 伸朗, 岩田 一貴, ノンパラメトリックベイズ時系列整列法の高速化, 平成 29 年度(第 68 回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2017
8. 山本 大貴, 岩田 一貴, 末松 伸朗, 近傍標本点の対応を考慮した形状整合の高速化, 平成 29 年度(第 68 回)電気・情報関連学会中国支部連合大会, 2017
9. 嶋本 義己, 末松 伸朗, 岩田 一貴, マルコフ連鎖モンテカルロ法を用いた画像レジストレーション, 第 20 回画像の認識・理解シンポジウム, 2017
10. 岡本 司, 岩田 一貴, 末松 伸朗, 非等方的スケーリングに基づく形状間の距離を用いた形状検索, 第 20 回画像の認識・理解シンポジウム, 2017
11. 大瀬 和也, 末松 伸朗, 岩田 一貴, 直接探索による輪郭線からのランドマークの選び方, 第 15 回情報科学技術フォーラム, 2016 (FIT 奨励賞受賞)
12. 嶋本 義己, 末松 伸朗, 岩田 一貴, 関数空間におけるメトロポリス法のための局所的提案分布, 第 15 回情報科学技術フォーラム, 2016

【社会活動】

近年は、広島県の高校生を対象とした研究指導に重点をおいて社会活動をしている。広島県科学セミナーに係る指導助言者としては、個別の研究に対する前向きなコメントや評価を直接高校生に伝えることによって、科学に対する関心・好奇心を高める役割を担っている。

2018 年 3 月 -	グローバルサイエンスキャンパス広島における指導教員
2018 年 1 月	平成 29 年度広島県科学オリンピック開催事業第 4 回広島県科学セミナーに係る指導助言者(数学分野)
2017 年 7 月-2017 年 8 月	広島市立大学情報科学部公開講座 高校生による情報科学自由研究、広島市立大学情報科学部
2017 年 1 月	平成 28 年度広島県科学オリンピック開催事業第 4 回広島県科学セミナーに係る指導助言者(数学分野)
2016 年 7 月	広島市立大学情報科学部公開講座 高校生による情報科学自由研究、広島市立大学情報科学部

氏名	岩根 典之
職位	准教授
研究分野	知能情報学、教育工学、感性情報学・ソフトコンピューティング
研究キーワード	Reuse, Ontology, Semantic Web, Human Interface, Human Computer Interaction, Machine Learning, Intelligent Tutoring System, Virtual Reality, Learning Sciences, Regional Issues

新しいことにチャレンジするという自らの方針に基づいて教育、研究、社会貢献に関する活動をしてきた。全体的にバランスよく取り組めてきたと考える。教育活動は、新規の科目を積極的に担当した。研究活動については、まず、アクティビティを示すことが重要という考えで取り組んだ。また、社会貢献についても依頼はすべて引き受けることができた。今後、さらに地域や関連分野の教育研究に還元できるよう新しいことにも積極的に挑戦していきたい。

【教育活動】

授業科目の新設や担当者の定年退職等から担当者の調整があった。積極的に新しい科目に挑戦するため2科目担当（副担当）させてもらった。それに伴い3年間担当した技術英語を交替した。Eラーニング演習だったが補助教材に様々な工夫を実践することができた。新規科目も含めて引き続き、新しい試みを試しながら授業を改善していくとともに教育研究の幅を広げていきたい。また、他大学の非常勤講師として情報社会関連の授業を担当した。準備に調査整理した内容は本学の担当授業にも反映するとともに新しいことにも挑戦していくつもりである。

2016, 2017 年度	オペレーティングシステム
2016, 2017 年度	コンパイラ
2016, 2017 年度	知能工学実験I
2016, 2017 年度	学習システム特論
2016 年度	技術英語演習I
2017 年度	地域課題演習
2017 年度	情報科学概論

【研究活動】

教育工学や学習科学関係の学会および国際会議を中心に成果を発表した。以下の発表10件では、科研費テーマに関する発表が4件、海外との共同研究テーマが1件、一般情報教育に関する発表が2件、授業改善に関する発表が2件だった。この2年間については研究エフォートの配分も適当であった。10件中8件は、第一著者として執筆口頭発表しているので個人のアクティビティを示す程度の件数ではある。しかし、全国大会レベルの発表が多いので研究会やジャーナルペーパーとしてまとめられるよう研究を発展させていく必要がある。また、多様な分野の研究者と共同研究をするなどして新規テーマの発掘に取り組む必要がある。

1. Noriyuki Iwane, Chunming Gao, Makoto Yoshida, Effects of Quizzes in Marking Supported E-Learning, ACM IMCOM2017 The 11th International Conference on Ubiquitous Information Management and Communication, 2017

2. Chunming Gao, Noriyuki Iwane, Developing a Prototype for Evaluations of Healthcare Appointment and Registration Smart Assistant, 2016 International Conference on Computational Science and Computational Intelligence, pp. 68-69, 2016
3. Noriyuki Iwane, Makoto Yoshida, Hajime Kishida, A Study on Haptic Media to Support Verbal Explanations, Proc. of 19th International Conference on Interactive Collaborative Learning (ICL2016), pp. 509-520, 2016
4. 喜多一, 岩根典之, 一般教育としての人工知能とデータ科学に関する知識体系の提案, 大学 ICT 推進協議会 2017 年度年次大会 (AXIESE2017), 2017
5. 岩根 典之, ロボットを用いた学生実験の改善と評価, 日本教育工学会第 33 回全国大会, 2017
6. 岩根典之, デジタル教材における身体知の表現と理解の支援, 教育システム情報学会第 42 回全国大会(JSiSE2017), 2017
7. 岩根典之, 手旗信号を題材としたスキル獲得プロセスの支援について, 教育システム情報学会第 42 回全国大会(JSiSE2017), 2017
8. 岩根典之, 教科「情報」の学習状況の調査について, 教育システム情報学会中国支部研究発表会, 2017
9. 岩根典之, ロボットを用いた学生実験の課題と構想, 第 32 回ファジィシステムシンポジウム(FSS2016), 2016
10. 岩根典之, ロクロ成形における経験知と形式知の獲得の試み, 教育システム情報学会第 41 回全国大会(JSiSE2016), 2016

【社会活動】

外部から依頼があれば基本的にすべて引き受けるという方針で社会貢献に努めてきた。委員会にもできる限り出席するよう努力して100%出席した(ファジィ学会評議会1回、一般情報教育委員会5回、教育システム情報学会社員総会1回、教育課程専門委員会4回など)。また、ファジィ学会支部大会については全業務についてはほぼひとりで対応していたので次期支部長への引継ぎも滞りなく実行できた。一般情報教育委員会では J17 カリキュラム標準における一般情報教育に関する部分をまとめる作業に関与することができた。さらに社会貢献できるよう努力するつもりである。

2017 年 6 月-	日本知能情報ファジィ学会評議員
2017 年 4 月-	情報処理学会一般情報教育委員会委員
2015 年-2017 年 3 月	日本知能情報ファジィ学会中国・四国支部支部長
2015 年 4 月-	一般社団法人教育システム情報学会社員
2015 年 2 月-	コンピュータ教育学院教育課程編成委員会委員
2007 年 4 月-	日本知能情報ファジィ学会中国・四国支部運営委委員
2000 年 3 月-	教育システム情報学会 中国支部 幹事

氏名	内田 智之
職位	准教授
研究分野	アルゴリズム、知能情報学、情報学基礎理論、リハビリテーション科学・福祉工学
研究キーワード	グラフアルゴリズム、計算論的学習理論、データマイニング、グラフ文法

2016 年度・2017 年度は、以下の通り、教育活動・研究活動・社会活動等にバランスよく積極的に取り組むことができた。教育においては、担当する講義以外にも大学院博士前期課程3名、学部4年生 10 名の教育指導を行い、修士論文・卒業論文を提出させることができた。研究活動においては、4件の雑誌論文と7件の国際会議論文の公表および7件の国内研究発表を行った。社会活動等では、国際会議の査読委員や広島井口高等学校学校関係者評価委員などを積極的に務めた。

【教育活動】

2016 年度に、大学院博士前期課程2年生1名に対し教育研究指導を行い十分に評価される修士論文を提出させた。2016 年度・2017 年度を通して大学院博士前期課程2年生2名に対し教育研究指導を行い、2017 年度に十分に評価される修士論文を提出させた。2016 年度に学部4年生5名、2017 年度に学部4年生5名に対し教育研究指導を行い十分評価できる卒業論文を提出させた。また、2016 年度・2017 年度は、以下の大学院・学部の講義を担当した。

2016, 2017 年度	計算量理論特論
2016, 2017 年度	計算論
2016, 2017 年度	線形代数学 II
2016, 2017 年度	グラフ理論概論
2016, 2017 年度	基礎実験 $\beta-1$
2016 年度	幾何学概論

【研究活動】

2016 年度・2017 年度は、主として「グラフ文法圧縮データからの省メモリ高速グラフマイニング手法の開発」および「グラフ言語に関する効率的な機械学習アルゴリズムの開発」について研究を行った。以下の通り、研究成果を着実に雑誌論文および国際会議論文として公表した。特に、国際会議 IMECS2017 において論文8が最優秀論文賞を受賞し、さらに複数本の研究発表論文が奨励賞を受賞した。

1. T. Shoudai, Y. Yoshimura, Y. Suzuki, T. Uchida, and T. Miyahara, Polynomial Time Learnability of Graph Pattern Languages Defined by Cographs, IEICE Transactions on Information and Systems, Special Section on Foundations of Computer Science – Frontiers of Theoretical Computer Science –, Vol. E101.D, No. 3, pp. 582–592, 2018
2. T. Uchida, S. Matsumoto, T. Shoudai, Y. Suzuki, and T. Miyahara, Learning of Primitive Formal Systems Defining Labelled Ordered Tree Languages via Queries, Late Breaking Papers of the 27th International Conference on Inductive Logic Programming, pp. 61–66, 2018

3. T. Horibe, Y. Itokawa, T. Uchida, Y. Suzuki, and T. Miyahara, Enumeration Algorithms for All Characteristic Paths and Subtrees from Structurally Compressed Tree-Structured Data, IAENG International Journal of Computer Science, Vol. 45, No. 1, pp. 206-218, 2018
4. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, and T. Uchida, Acquisition of Multiple Block Preserving Outerplanar Graph Patterns by an Evolutionary Method for Graph Pattern Sets, 2017 IEEE 10th International Workshop on Computational Intelligence and Applications, pp. 191-197, 2017
5. T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Shoudai, T. Uchida, and T. Kuboyama, Enumeration of Maximally Frequent Ordered Tree Patterns with Wildcards for Edge Labels, IPSJ Transactions on Mathematical Modeling and its Applications, Vol. 10, No. 2, pp. 59-69, 2017
6. Y. Yamagata, T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Uchida, F. Tokuhara, and T. Kuboyama, Acquisition of Multiple Graph Structured Patterns by an Evolutionary Method using Sets of TTSP Graph Patterns as Individuals, Proc. 2017 6th IIAI International Congress on Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI), pp. 459-464, 2017
7. T. Shoudai, K. Aikoh, Y. Suzuki, S. Matsumoto, T. Miyahara, and T. Uchida, Polynomial Time Inductive Inference of Languages of Ordered Term Tree Patterns with Height-Constrained Variables from Positive Data, IEICE TRANS. FUNDAMENTALS on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol. E100.A, No. 3, pp. 785-802, 2017
8. T. Horibe, Y. Itokawa, T. Uchida, Y. Suzuki, and T. Miyahara, Algorithm for Enumerating all Frequent Paths from Structurally Compressed Tree-Structured Data, Proc. International MultiConference of Engineers and Computer Scientists 2017, No. I, pp. 69-74, 2017

他 10 件

【社会活動】

2016 年度・2017 年度は、以下の委員・活動を積極的に行った。

2017 年 7 月	祇園北高等学校「大学模擬授業」
2016 年 8 月, 2017 年 8 月	オープンキャンパス 2016, 2017
2016 年 6 月-2018 年 3 月	国際会議 ICMLC の Technical Committee メンバー
2015 年 6 月-2018 年 3 月	広島県立広島井口高等学校学校関係者評価委員
2012 年 4 月-2018 年 10 月	国際会議 ICMLA の IPC メンバー

氏名	大田 知行
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク、情報通信工学
研究キーワード	無線マルチホップネットワーク、ネットワークソフトウェア

研究活動では、モバイル端末の持つ近距離無線通信装置で構成される無線マルチホップネットワーク向けネットワークソフトウェアの研究を行っている。社会活動として、電子情報通信学会英文論文誌の編集委員を務め、投稿される論文の編集業務を行っている。教育活動では、Android プログラミングやネットワークを活用したソフトウェア開発について、学部生向けに授業・演習を担当している。また、公開講座等を通じて、高校生向けにもアニメーションなどを作成できる Processing を用いた演習を実施した。

【教育活動】

プログラミング III では Android プログラミング技術の基礎を教えている。身近に使用しているスマートフォン向けアプリケーションの開発技術を習得することにより、今後さらにいろいろなデバイスで使用される Android OS 向けプログラミングの理解を深めることができる。また、アプリケーションを二人体制で開発することにより、小規模なチームでの開発演習を行っている。ネットワークソフトウェア演習では、ネットワークを活用したソフトウェアを開発するために必要となるプログラミング技術の基本を C 言語で学ぶことにより、クライアントサーバー型ネットワークシステムのプログラミング技術を習得できる。

2017 年度	情報工学実験 I, II
2017 年度	ネットワークソフトウェア演習
2017 年度	モバイルネットワーク特論
2017 年度	プログラミング III

【研究活動】

無線マルチホップネットワークを用いた情報収集配信手法に関する研究を行っている。現在、多くのモバイル端末は 4G/LTE 等のモバイルコアネットワークへの接続に加え、Wi-Fi/Bluetooth 等の近距離無線通信装置を持つ。これらの近距離無線通信装置を用いてモバイル端末間で無線マルチホップネットワークを構成し、各端末が集めた情報を比較的ローカルな地域において交換することが可能である。しかしながら、モバイル端末が少ない場合には、情報共有を行うために十分な無線マルチホップネットワークを構築することができないため、部分的にモバイルコアネットワークを利用する。高信頼かつ低コストな通信を実現するための、ネットワークプロトコルの研究を行っている。

1. Takeshi Hashimoto, Junich Aoki, Tomoyuki Ohta, and Yoshiaki Kakuda, Mobile agent-based information dissemination scheme using location information in vehicular ad hoc networks, IEICE Transactions on Communications (Special Section on Integration Technologies of Ambient Intelligence and Sensor Networks), vol.E99, no.9, pp.1958-1966, 2016
2. Takeshi Hashimoto, Ryota Ito, Tomoyuki Ohta and Yoshiaki Kakuda, Information dissemination scheme using mobile agents in autonomous clustering-based heterogeneous wireless networks, Proc. Fourth International Symposium on

- Computing and Networking (CANDAR'16), at the International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON), pp.279-285, 2016
3. Toshikazu Terami, Tomoyuki Ohta, and Yoshiaki Kakuda, A method of mobile core network load reduction using autonomous clustering-based two-layered structure for information dissemination in wireless networks, Proc. 2017 IEEE 41st Annual Computer Software and Applications Conference (COPMSAC), at the 41st IEEE International COMPSAC Workshop on Architecture, Design, Deployment and Management of Networks and Applications (ADMNET), pp.19-22, 2017
 4. Tomoyuki Ohta, Ryota Ito, and Yoshiaki Kakuda, Design of a node status visualizing software utilizing the AR technology for multihop wireless networks dissemination in wireless networks, Proc. 2017 IEEE 41st Annual Computer Software and Applications Conference (COPMSAC), pp.270-271, 2017
 5. 大田知行, 寺見俊一, 宝来樹, 西正博, 角田良明, 無線ネットワーク環境における災害避難支援のための情報配信手法のシミュレーション評価, 電子情報通信学会 安全・安心な生活とICT 研究会, 2018

他 17 件

【社会活動】

学会活動として、電子情報通信学会英文論文誌 B の編集委員を務めており、投稿された英文論文の編集作業を務めている。また、知的環境とセンサネットワーク研究会では幹事補佐を務め、研究会の運営補助を行っている。公開講座では、高校生向けに Processing プログラミング入門の演習を行い、簡単なプログラムで動作するアニメーションを作成し、プログラミングに対する興味を持ってもらえるような演習を実施している。

2017 年 11 月	広島県立祇園北高等学校体験授業, 情報科学部体験授業実行委員会
2017 年 6 月-2021 年 5 月	電子情報通信学会英文論文誌 B 編集委員
2017 年 6 月-2019 年 5 月	電子情報通信学会知的環境とセンサネットワーク研究専門委員会幹事補佐
2017 年 4 月-2017 年 11 月	Tenth International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON'17)プログラム委員
2016 年 7 月	広島県科学セミナー(情報科学入門), 広島県教育委員会

氏名	岡本 勝
職位	講師
研究分野	知能情報学、教育工学
研究キーワード	学習システム、知識工学、知能工学、ヒューマンインタフェース、拡張現実、教育工学、ヘッドマウントディスプレイ

教育活動では情報科学部 1 年生が大学で情報教育を行う上で必須となる知識技術の習得および3年生の専門科目を中心に行った。また大学院向け講義も担当した。研究活動では拡張現実感を用いた学習支援を中心として研究を行い、特に化学学習分野における拡張現実感の応用可能性を示した。同様にバーチャルリアリティ技術とヘッドマウントディスプレイ装置を用いた理科学習などの可能性も検討した。社会活動として、市内小学生らを対象としたコンピュータサイエンス塾での講師などを務めた。また関連研究分野学会の論文編集委員なども務めた。

【教育活動】

知識工学特論では大学院生向けに ICT を活用した教育活動の歴史や社会インフラとの関連性に関する講義や近年発表された論文を中心とした現状及び将来的な可能性について学習を行い、受講学生の発表をもとにしたディスカッションなども行った。情報基礎情報演習では情報科学部 1 年生向けに本学で学ぶ上で必要となる知識の習得を行える授業設計を行った。知能工学実験 I では、人工知能に関する技術をもとにして自律的にオセロを行えるプログラム実装を指導し、情報セキュリティでは最新トピックを中心として、近年の情報セキュリティに関する知識習得を行える授業設計を行い実施した。

2016, 2017 年度	知識工学特論、情報基礎、情報演習、知能工学実験 I、情報セキュリティ

【研究活動】

研究活動では「拡張現実感」「バーチャルリアリティ」「学習支援」を中心テーマとして活動した。特に拡張現実感技術を用いた学習支援を主として実施した。一般的な ICT 環境として想定できる PC を用いた学習支援システムの他、対象となる中高生年代での普及率が最も高い ICT インフラといえるモバイル端末、特にスマートフォンを活用したヘッドマウントディスプレイ型デバイスを用いた学習支援システムの実現などを行い、一定の学習効果があることを確認し、論文として公開した。また、バーチャルリアリティ技術とヘッドマウントディスプレイを活用した理科学習支援手法も開発し、実現可能性を示した。

1. 岡本勝、松原行宏:拡張現実感を用いた仮想環境での無機化学学習支援手法、画像ラボ、2016
2. 石村司、岡本勝、松原行宏:スマートフォンを用いた無機化学の AR 型仮想実験環境の開発、教育システム情報学会誌、Vol. 34、No. 3、pp. 274-279、2017
3. 京極瑞樹、岡本勝、松原行宏:ヘッドマウントディスプレイと速度制御型インタフェースを用いたドップラー効果の仮想体験学習手法、日本感性工学論文誌、Vol. 16、No. 3 pp.379-386、2017

他、採録決定 1 件

4. 岡本勝、松原行宏:非接触モーションキャプチャ技術を用いたトレーニングプロセスの検討、第 82 回人工知能学会 ALST 研究会、2018 年 3 月
5. 岡本勝、松原行宏:VR/AR 技術を用いた HMD 型仮想化学実験学習支援環境、第 79 回人工知能学会 ALST 研究会、2017 年 3 月
6. 岡本勝、松原行宏:スマートフォンの通信機能を活用した HMD 型無機化学学習支援環境の開発、第 42 回教育システム情報学会全国大会、2017 年 8 月
7. 岡本勝、乙原浩美、松原行宏:スマートフォン端末を活用した拡張現実型学習支援手法の開発、第 41 回教育システム情報学会全国大会、2016 年 8 月

他、研究発表 5 件

【社会活動】

教育システム情報学会(JSiSE)の和文誌、英文誌の編集委員会を担当し、投稿論文の審査や査読管理を行った。また人工知能学会の研究会幹事も担当した。コンピュータサイエンス塾では小学生を中心とした受講者に対してセンサ技術など最新のものも含めた講義および体験を行った。

2016 年 7 月 - 2017 年 5 月	JSiSE 英文誌編集委員会、JSiSE 和文誌編集委員会、人工知能学会 ALST 研究会幹事、コンピュータサイエンス塾講師

氏名	岡山 友昭
職位	講師
研究分野	計算科学、数学基礎・応用数学
研究キーワード	数値解析

教育活動・研究活動・社会活動いずれも精力的に行った。特に解析学Ⅰと解析学Ⅱの教科書の執筆には多数の演習問題の作成も含まれており、多くの労力を割いた。卒論や修士の指導にも力を入れており、学会発表・論文発表をさせることを心がけた。研究は学生や他大の先生との共著に加え、単著の論文も何本か主要論文誌に出すことができた。社会活動は学会論文誌の運営に加え、オープンキャンパスや高校での模擬授業などのアウトリーチにも貢献した。学内委員会活動や入試業務も精力的に行った。

【教育活動】

解析学Ⅰおよび解析学Ⅱでは、教科書を新規に執筆し、2017年度からは新しい教科書を用いて内容を厳選して講義を行った。線形代数学Ⅰおよび同演習では、4限と5限で連続したコマであることを生かし、例えば4限の講義で少し時間があれば5限の演習の解説を前倒しして行うなど柔軟に双方の時間を使うようにした。数値計算法では一コマの中で講義と演習をセットで行うことで内容が定着するようにした。その他の講義でも受講生の興味を引く題材を選んだり、理解が深まるよう噛み砕いた説明をしたりと様々な工夫を試みている。

2016, 2017 年度	Analysis I
2016, 2017 年度	Linear Algebra I
2016, 2017 年度	Exercises in Linear Algebra I
2016, 2017 年度	Analysis II
2016, 2017 年度	Numerical Methods
2016, 2017 年度	Advanced Mathematical Sciences B
2016, 2017 年度	Exercises in Foreign Book Reading I
2016, 2017 年度	Exercises in Foreign Book Reading II

【研究活動】

研究のテーマは高性能数値計算法の開発とその数学的解析である。2016年度までの科研費の助成を受けた研究が一段落し、2017年度からはその研究を継続・発展させる内容で科研費の助成を受けて研究を進めている。通常の有限区間における数値計算法に加え、半無限区間や全無限区間における数値計算法に対しても計算法の開発や数学的解析を行った。いずれの研究においても、サンプリング数の増加につれ誤差が指数関数的に減少する(＝高性能である)ことを示している。

1. 桂利行(編), 岡崎悦明・岡山友昭・齋藤夏雄・佐藤好久・田上真・廣門正行・廣瀬英雄(共著), 理工系学生のための微分積分, 培風館, 2017
2. Tomoaki OKAYAMA, Theoretical analysis of a Sinc-Nyström method for Volterra integro-differential equations and its improvement, Applied Mathematics and Computation, Vol. 324, pp. 1-15, 2018

3. Tomoaki OKAYAMA, Theoretical analysis of Sinc-collocation methods and Sinc-Nyström methods for systems of initial value problems, BIT Numerical Mathematics, Vol. 58, No. 1, pp. 199-220, 2018
4. Tomoaki OKAYAMA, Error estimates with explicit constants for the Sinc approximation over infinite intervals, Applied Mathematics and Computation, Vol. 319, pp. 125-137, 2018
5. Ryota HARA and Tomoaki OKAYAMA, Explicit error bound for Muhammad-Mori's SE-Sinc indefinite integration formula over the semi-infinite interval, Proceedings of the 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, pp. 677-680, 2017
6. Ken'ichiro TANAKA, Tomoaki OKAYAMA and Masaaki SUGIHARA, Potential theoretic approach to design of accurate numerical integration formulas in weighted Hardy spaces, Approximation Theory XV: San Antonio 2016, pp. 335-360, 2017
7. Tomoaki OKAYAMA and Koichi MACHIDA, Error estimate with explicit constants for the trapezoidal formula combined with Muhammad-Mori's SE transformation for the semi-infinite interval, JSIAM Letters, Vol. 9, pp. 45-47, 2017
8. Ken'ichiro TANAKA, Tomoaki OKAYAMA and Masaaki SUGIHARA, Potential theoretic approach to design of accurate formulas for function approximation in symmetric weighted Hardy spaces, IMA Journal of Numerical Analysis, Vol. 37, No. 2, pp. 861-904, 2017
9. 鶴島崇, 田中健一郎, 岡山友昭, 杉原 正顯, Ganelius 標本点を用いた関数近似公式, 日本応用数理学会論文誌, Vol. 27, No. 1, pp. 1-20, 2017

他 20 件

【社会活動】

Mac 上の研究開発環境を整えるシステム、Fink の開発者として以前より活動が続いている。2017 年度には日本応用数理学会論文誌の編集委員幹事に就任し、引き継ぎを受けて 2018 年度から編集委員副委員長を務めることになった。紙媒体から電子化される過渡期であり、それに伴う様々な案件にも対処している。2017 年 7 月には情報分野を志す高校生に模擬授業を行い、高校で学ぶ数学がどのように関係してくるかということも踏まえて、数値計算の初歩について講義した。

2017 年 7 月	賀茂高等学校で模擬授業:コンピュータの計算解法 ～答に近づける技術～
2017 年 4 月-2018 年 3 月	日本応用数理学会 日本応用数理学会論文誌編集委員幹事
2004 年 5 月-	Fink プロジェクト開発者

氏名	小野 貴彦
職位	准教授
研究分野	社会システム工学・安全システム、制御工学、機械力学・制御
研究キーワード	計測制御、人間工学、モデリング、数値最適化、コンピュータシミュレーション、救急車、加速度計測、生理・生体計測、経路最適化、乗り心地、マン・マシンシステム、IoT

教育活動として、学部生と大学院生を対象とした講義4科目、実験2科目、演習1科目を担当した。学部4年生と大学院生に対しては、学位論文の作成指導や学会発表の指導にも当たった。研究活動としては、計測制御技術、最適化技術、生体モデリング技術、IoT技術を活用し、安心・安全・迅速な救急搬送サービスを提供するための救急搬送支援システムの研究開発に取り組み、学会発表および学術雑誌で研究成果を公表した。社会貢献活動としては、国内企業と共同研究開発(2社3テーマ)を実施した。また、入試業務(試験監督、面接試験官など)および学内運営委員会・ワーキンググループ(4件)を担当し、大学運営に協力した。

【教育活動】

システム工学科3年生を対象に最適化手法、偏微分方程式、デジタル制御、システム工学実験Ⅰ＆Ⅱ、4年生を対象に外書講読演習Ⅱと卒業研究関連科目を担当した。実験では、代表教員として全体のとりまとめを行った。大学院博士前期課程の学生に対しては、システム推定学特論と自主プロジェクト演習を担当した。講義では、その日の講義内容はその場で理解することを目的に、演習の時間を設けるなどしてアクティブラーニングに積極的に取り組んだ。演習の解答例は、学内 Web サイト(IT's class)にも掲載し、復習環境を充実させた。また、学位論文の作成指導にも当たり、2年間で学部生5名、大学院生3名が学位取得に至った。

2016, 2017 年度	最適化手法
2016, 2017 年度	偏微分方程式
2016, 2017 年度	システム工学実験Ⅰ
2016, 2017 年度	デジタル制御
2016, 2017 年度	システム工学実験Ⅱ
2016, 2017 年度	外書講読演習Ⅱ
2016, 2017 年度	システム推定学特論
2016, 2017 年度	自主プロジェクト演習

【研究活動】

安心・安全・迅速な救急搬送サービスの実現を目指し、計測制御、数値最適化、生体モデリング等の各種技術を活用して、救急搬送支援システムの研究開発に取り組んだ。具体的なテーマは、①搬送患者の血圧変動の解析とモデリング、②救急車の走行モデリング、③救急車用運転訓練支援システム、④搬送経路の最適化とカーナビゲーションへの応用、⑤IoT 技術を活用した防振架台の防振性能向上、⑥新サイレンシステム開発である。①は他の学術機関と共同で実施し、③⑤は企業と共同で進めた。特に、③の商品化に向けて、ソフトウェアの開発と検証作業に集中的に取り組んだ。

1. 小野貴彦, 吉栖正生, 救急搬送時を想定した加速度による血圧変動の解析—身体部位間の相違の推定, 人間工学, Vol. 53, No. 6, pp. 195-204, 2017
2. 小野貴彦, 牧野佑城雄, 減速時の血圧変動を抑制するための救急車用運転訓練支援システム, 日本機械学会論文集, Vol. 82, No. 839, 16-00039, 2016
3. 小野貴彦, 救急車の走行データを利用した道路修繕箇所の優先順位決定, 日本機械学会中国四国支部第 56 期総会講演会, 2018
4. 新井敦士, 小野貴彦, 竹内将人, 井上博喜, 坂本浩一, 救急車新サイレンシステムの開発, 日本機械学会中国四国支部第 56 期総会講演会, 2018
5. 仲北隆輝, 小野貴彦, 救急車機関員向け安全確認支援システムの開発, 日本機械学会中国四国支部第 56 期総会講演会, 2018
6. 藤井信吾, 小野貴彦, 救急車用防振架台の振動吸収性能の向上に関する検討, 日本機械学会中国四国学生会第 48 回学生員卒業研究発表講演会, 2018
7. 杉山大貴, 小野貴彦, 振動乗り心地を考慮した救急車の経路探索, 日本機械学会中国四国学生会第 48 回学生員卒業研究発表講演会, 2018
8. 小野貴彦, 位置情報のみを利用した救急車の交差点右左折時の横加速度の簡易推定, 第 25 回計測自動制御学会中国支部学術講演会, 2016
9. 清水勇希, 小野貴彦, 搬送患者の負担の観点から見た救急車の移動経路の選択に関する考察, 第 25 回計測自動制御学会中国支部学術講演会, 2016

【社会活動】

研究成果の社会への還元として、救急車運転訓練支援システムの商品化を目指し、企業と共同製作を実施した。また、救急車の認知性向上のための新サイレンシステムの開発協力を依頼され、音響制御回路と制御ソフトの作成を担当した。その成果物である試作機は、第 26 回全国救急隊員シンポジウムで公開した。タブレットの内蔵カメラを利用して、視線移動や頭部回転で電子書籍のページをめくる視線インタフェースの開発も企業と共同で行った。開発経過は、ちゅうごく産業創造センター主催のビジネス交流マッチングで公表した。その他、オープンキャンパスで、システム工学科を代表して、学科の説明とシステム工学実験を披露した。

2017 年 11 月	第 26 回全国救急隊員シンポジウム:新サイレンシステムの試作機公開(企業から出展)
2017 年 1 月	ビジネスマッチング交流会:タブレット型情報端末を用いた視線入力システムの研究開発
2016 年 8 月	広島市立大学オープンキャンパス:システム工学実験の紹介

氏名	小畑 博靖
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	通信プロトコル、衛星通信、QoS 制御、無線 LAN 制御、物理現象等の数理モデルを用いた無線通信制御

2016～2017 年度では、教育活動、研究活動、および、社会活動のいずれにおいてもある程度実績を積んでおり、1 つの項目だけに集中することなくまんべんなく活動したと考えられる。

【教育活動】

学部科目においては、主に、実験・演習系科目を担当し、講義資料の準備に加え、実験・演習環境の構築も他担当者と共に実施した。大学院講義においては、座学だけでなく、提示した内容に関して学生が自ら調べ学習し発表する場を設けた。

2016, 2017 年度	ネットワーク設計
2016, 2017 年度	ネットワーク設計演習
2016, 2017 年度	情報工学実験 1
2016, 2017 年度	情報工学実験 2
2016, 2017 年度	プログラミング II
2016, 2017 年度	プログラミング II 演習
2016, 2017 年度	通信トラヒック特論

【研究活動】

2016～2017 年度では、主に無線 LAN 環境におけるスループット向上およびスループット保証を実現するメディアアクセス制御と TCP 輻輳制御について研究した。メディアアクセス制御に関する研究では、自然界の物理現象を示す数理モデルを応用した方式を提案し、ジャーナル等多くの研究成果を得た。また、他大学との共同研究も実施し、国際会議および国内研究会にて成果発表した。

1. 寺岡 良章, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, 無線 LAN のアクセスポイントにおけるスループット保証を目指した TCP 受信ウィンドウ制御方式, 電子情報通信学会論文誌 (B), Vol. J101-B, No. 2, pp. 70-79, 2018
2. Fumiya Teshima, Hiroyasu Obata, Ryo Hamamoto, and Kenji Ishida, TCP-TFEC: TCP Congestion Control based on Redundancy Setting Method for FEC over Wireless LAN, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E100-D, No. 12, pp. 2818-2827, 2017
3. Ryoma Ando, Ryo Hamamoto, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, A Priority Control Method for Media Access Control Method SP-MAC to Improve Throughput of Bidirectional Flows, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E100-D, No. 5, pp. 984-993, 2017
4. Ryo Hamamoto, Chisa Takano, Hiroyasu Obata, and Kenji Ishida, Improvement of Throughput Prediction Scheme Considering Terminal Distribution in Multi-rate WLAN

Considering both CSMA/CA and Frame Collision, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E99-D, No. 12, pp. 2923-2933, 2016

5. Ryo Hamamoto, Chisa Takano, Hiroyasu Obata, Masaki Aida, and Kenji Ishida, Proposal for Designing Method of Radio Transmission Range to Improve both Power Saving and Communication Reachability based on Target Problem, IEICE Transactions on Communications, Vol. E99-B, No. 11, pp. 2271-2279, 2016
6. 濱本 亮, 小畑 博靖, 安藤 竜馬, 山本 西貴, 高野 知佐, 石田 賢治, H-SP-MAC: 隠れ端末問題の解決を目指したメディアアクセス制御 SP-MAC の改良, 電子情報通信学会論文誌 (B), Vol. J99-B, No. 10, pp. 893-907, 2016

他 32 件 (国際会議・国内研究会等)

【社会活動】

社会活動として、まず、大学主催の研究展示会にて研究成果についてのポスター展示を実施した。さらに、高校生向けの事業である、高校生による情報科学自由研究のテーマを提供し、実際に研究指導を実施した。また、通信技術に関する内容で高校生向け体験授業(演習)も実施した。

2017 年 11 月 24 日	広島市立大学の地域貢献事業発表会、広島市立大学
2017 年 11 月 22 日	広島県立祇園北高等学校体験授業、広島市立大学
2017 年 9 月 13 日	広島市立大学産学連携研究発表会 2017, 広島市立大学
2017 年 8 月 21 日-22 日	高校生による情報科学自由研究 2017, 広島市立大学
2016 年 11 月 25 日	広島市立大学地域貢献事業発表会 2016, 広島市立大学
2016 年 11 月 22 日	広島県立祇園北高等学校体験授業, 広島市立大学
2016 年 9 月 14 日	広島市立大学産学連携研究発表会 2016, 広島市立大学
2016 年 8 月 22 日-23 日	高校生による情報科学自由研究 2016, 広島市立大学

氏名	角田 良明
職位	教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	ネットワークソフトウェア、アドホックネットワーク

教育活動として、質問主導型の授業など、研究活動として、草の根災害情報伝搬システムなど、社会活動として、祇園北高等学校との高大連携などを推進した。また、情報科学研究科長兼情報科学部長として、イノベーション人材育成プログラムの創設のための検討、社会人の学び直し事業 enPiT-Pro の実施、ハノーバー専科大学とのダブルディグリー制度の創設のための検討、日本・アジア青少年サイエンス交流事業による中国西南大学電子情報工学部からの学生の受け入れ、インド・ハイデラバードに学生を派遣した海外インターンシップの実施、大学共通テスト導入後の入学者選抜の基本方針の検討、グローバル人材育成を議論した中国・四国工業教育協会大学教育部会研究会の開催などに尽力した。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度は、学部では、基礎演習、ソフトウェア工学、ネットワークプロトコル、プロトコル工学を担当した。大学院博士前期課程では、ネットワークソフトウェア特論、情報工学特別演習Ⅰ～Ⅳを担当した。2016 年度、2017 年度には大学院博士後期課程においてそれぞれ情報科学講究Ⅴ、情報科学講究Ⅰを担当した。2016 年度は、博士後期課程1名、博士前期課程4名の学生を指導し、それぞれ博士、修士の学位を取得させた。2017 年度は、博士前期課程4名の学生を指導し、修士の学位を取得させた。アクティブラーニング型授業の実践として、個々の学生に適応した質問主導型の授業を実施した。例えば、理解のきっかけとなる質問、新しい疑問を生み出す質問など、学生の理解度に応じた質問を促し、深い学びを実感させた。

2016, 2017 年度	基礎演習(1 年前期)
2016, 2017 年度	ソフトウェア工学(3年前期)
2016, 2017 年度	ネットワークプロトコル(3年後期)
2016, 2017 年度	プロトコル工学(3年後期)
2016, 2017 年度	ネットワークソフトウェア特論, 情報工学特別演習Ⅰ～Ⅳ
2016 年度	情報科学講究Ⅴ
2017 年度	情報科学講究Ⅰ

【研究活動】

2017年度から3年間採択された科研費を活用して、「アシュアランスネットワーク一般設計方法論に基づいた MANET システムの強化」(研究代表者)について研究を行った。また、2016 年度から3年間採択された総務省 SCOPE「アシュアランスネットワーク設計原理に基づいた草の根災害情報伝搬システムの研究開発」(研究分担者)についても研究を行った。これらの研究は、アシュアランスネットワークの基礎と応用に関するものであり、連携させて研究を進めた。特に、草の根災害情報伝搬システムについては、学内の西教授、石田教授等、学外の KDDI 総合研究所との共同研究であり、災害情報の検出のためのモニタリング、災害情報の伝搬のための MANET など、高い評価の研究成果を得ることができた。

1. Nobuhiro Kajikawa, Yuya Minami, Eitaro Kohno, Yoshiaki Kakuda, On availability and energy consumption of the fast connection establishment method by using Bluetooth classic and Bluetooth low energy, Proc. Fourth International Symposium on Computing and Networking (CANDAR2016), 9th International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON 2016), pp. 286-290, 2016
2. Takeshi Hashimoto, Junichi Aoki, Tomoyuki Ohta, and Yoshiaki Kakuda, Mobile agent-based information dissemination scheme using location information in vehicular ad hoc networks, IEICE Transactions on Communications (Special Section on Integration Technologies of Ambient Intelligence and Sensor Networks), Vol. E99-B, No. 9, pp. 1958-1966, 2016
3. Tetsuya Murakami, Eitaro Kohno, and Yoshiaki Kakuda, A countermeasure to eavesdropping on data packets by utilizing control packet overhearing for radio overlapping reduced multipath routing in ad hoc networks, International Journal of Networking and Computing, Vol. 6, No. 2, pp. 345-367, 2016
4. (特別・招待講演) 角田良明, 学会活動や研究活動の経験を通じた大学教育 — IEEE 広島支部学生シンポジウムとモバイルアドホックネットワークのフィールド実験 —, IEEE 広島支部総会特別講演会(2016 年功績賞受賞記念), 2017
5. 2016 年功績賞, IEEE 広島支部, 2017

他7件

【社会活動】

International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN)、International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON)、International Symposium on Computing and Networking (CANDAR)については、主催者の一人として開催に尽力し、これらの国際会議において学生に論文発表を経験させた。祇園北高等学校評価委員として高大連携のために貢献した。祇園北高等学校の柞磨校長を本学に招聘し同校で実践しているアクティブラーニングについて講演していただくとともに、祇園北高等学校を訪問しアクティブラーニングについて熱心に議論し、本学部の高大接続改革に活かした。

2017 年 4 月-2018 年 3 月	広島県立祇園北高等学校評価委員会
2016 年 12 月-2017 年 12 月	Tenth International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON 2017)
2016 年 12 月-2017 年 12 月	Fifth International Symposium on Computing and Networking ---Across Practical Development and Theoretical Research--- (CANDAR 2017)
2016 年 6 月-2017 年 6 月	Sixteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN 2017)
2015 年 12 月-2016 年 12 月	Fourth International Symposium on Computing and Networking ---Across Practical Development and Theoretical Research--- (CANDAR 2016)
2015 年 6 月-2016 年 6 月	36th IEEE International Conference on Distributed Computing Systems (ICDCS 2016)

他 5 件

氏名	神尾 武司
職位	講師
研究分野	知能情報学、ソフトコンピューティング、通信工学
研究キーワード	機械学習、群知能、最適化手法、通信技術、信号処理

私の活動は研究が中心にある。研究活動で得られた知見・技術を教育活動や社会活動を通じて他者に提供し、それによって新しいアイデアや協力関係が生み出され、さらには研究活動にフィードバックされることを大いに期待している。そのため、研究活動では多くの分野の研究者が集まる学術会議に積極的に参加し、他分野との交流を図っている。そして、講義・研究指導といった教育活動を通して、学生が様々な分野の技術に興味を持ってくれるように努めている。さらに、産学連携発表会などの社会活動では、私自身が提供可能な技術だけでなく、最新の研究トレンドを考慮して、企業が抱える課題を解決するための相談を受け付けている。

【教育活動】

コンピュータ・ネットワークの発展と普及に伴い、情報を伝達する手段である通信システムは現代の情報化社会を支える極めて重要な技術となっている。私が担当する主な講義はコンピュータの基礎に関わる科目、通信方式に関わる科目、ハードウェアに関わる科目に大別されるため、いずれの科目においても通信等の情報技術との関連性とその重要性を説きつつ、それぞれの科目に興味を持ってもらうことを第1に考えて講義を行っている。また、研究室における教育については、国内外を問わず、国際会議で発表できるレベルを目指して研究指導を行っている。

2016, 2017 年度	コンピュータ基礎
2016, 2017 年度	通信工学 I
2016, 2017 年度	情報伝送方式特論
2016, 2017 年度	電子回路 I
2016, 2017 年度	情報演習
2016, 2017 年度	外書講読演習 I, II
2016, 2017 年度	システム工学実験 I, II

【研究活動】

私自身が主体となって行った研究テーマは3つある。1つ目は「地上デジタル放送において船内 SFN 再送信による回り込み波が等価 C/N 劣化量に与える影響の解析」であり、理論解析は完了したので今後はシミュレーションによる検証実験を行う予定である。2つ目は「電化製品の稼働状況を考慮した電力線通信のパラメータ最適化」であり、仮想データに基づく計算機実験は完了したので今後は実測された伝送路特性を用いて実験を行う予定である。3つ目は「マルチエージェント強化学習による航路の改善」であり、仮想航路に対するアルゴリズムの検証は完了したので今後は実航路を用いて提案手法の有効性を検証する予定である。一方、補助的な役割を担った研究テーマには、 $\Delta \Sigma$ 変調を利用した信号処理回路、量子力学デバイスを応用した THz 波受信システムなどがある。

1. Yoshinao Suzuki, Hisato Fujisaka, Takeshi Kamio, Sigma-delta domain bandpass and band-elimination wave filters, Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, Vol. 8, No. 4, pp. 319-341, 2017
2. Shota Hayakawa, Hisato Fujisaka, and Takeshi Kamio, A Numerical Model of a Frequency Discriminator for Terahertz Sensing and Communication Using Photoelectric Detectors, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2017
3. Takeshi KAMIO, Takahiro TANAKA, Kunihiro MITSUBORI, and Hisato FUJISAKA, Influence of Reference Courses on Reinforcement Learning to Search Ships' Courses, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2017
4. Takeshi Kamio, Ena Kono, and Hisato Fujisaka, Parameter Optimization for Power Line Communications Considering Operational Status of Electrical Appliances, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2016
5. Takeshi Kamio, Kazuhisa Haeiwa, and Hisato Fujisaka, Influence of Coupling Loop Interference on Equivalent C/N Degradation under SFN in a Ship, Proc. of International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2016

他 8 件

【社会活動】

基本的な社会活動としては、オープンキャンパスおよび本学主催の産学連携発表会において、最近取り組んでいる研究の紹介を毎年実施している。これらの活動を通じて、本学の広報活動に寄与しつつ、研究成果の社会への還元（共同研究など）を目指している。さらに、学術的な社会活動としては、所属学会からの依頼により、論文編集委員や国際会議の実行委員などを可能な限り引き受けている。

2017 年 9 月	広島市立大学産学連携発表会・マッチングセッション
2017 年 8 月	オープンキャンパス(システム工学科 3 年実験の紹介)
2017 年 8 月	オープンキャンパス(研究室紹介)
2016 年 8 月	オープンキャンパス(研究室紹介)
2016 年 7 月-2017 年 12 月	電子情報通信学会主催 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications(NOLTA2017)の General Secretary
2016 年 1 月-2017 年 6 月	電子情報通信学会 NOLTA ソサイエティ特集号 Special Issue on Circuits & Systems の編集幹事

氏名	上土井 陽子
職位	講師
研究分野	情報セキュリティ、分散システム、データベース
研究キーワード	セキュアプロトコル、プライバシー保護データ公開、データマイニング、分散コンピューティング、ネットワークシステム

2016 年度、2017 年度においては、教育活動としては各年度学部講義3つ、大学院講義1つの4講義を担当した。研究活動として主にプライバシー保護技術に関する7件の学外発表を行った。また、社会活動として、論文誌編集委員を中心として7件の情報処理関連学会の委員を担当した。また、学内委員として、2016 年度はコンピュータサイエンス塾担当委員として、2017 年度は社会連携委員として、小学生や高校生による自由研究活動を支援した。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度においては学部共通クラスに対する講義として「オートマトンと形式言語」、「情報化学基礎実験 $\alpha-1$ 」、情報工学科の専門科目である「グラフと最適化」、「分散システム」を担当した。また、大学院講義として博士前期課程情報工学専攻にて「プログラミング言語特論」を担当した。論理回路システム研究室にて 2016 年度には卒業研究学生3名、2017 年度には卒業研究学生を2名担当した。

2016, 2017 年度	グラフと最適化
2016, 2017 年度	オートマトンと形式言語
2016, 2017 年度	分散システム
2016, 2017 年度	プログラミング言語特論
2016 年度	情報科学基礎実験 A
2017 年度	情報科学基礎実験 $\alpha-1$

【研究活動】

2016 年度、2017 年度においては7件の学外発表を行った。研究活動分野はデータ工学分野、及び、情報セキュリティ分野であった。このうち、5件が国内研究会発表、1件が国際会議発表であり、1件がプライバシー保護規準討論委員会での専門家を対象とした招待講演であった。また、下記の研究活動内容とは別に情報セキュリティ分野での開発技術に関する出願特許が1件登録された。

1. 上土井陽子, 動的データセットにおけるプライバシー保護の厳密な安全性評価と妥当な安全性評価について, 第 10 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM2018), 2018
2. 上土井陽子, 強力なプライバシー保護要求の形式的表現, 2018 年暗号と情報セキュリティシンポジウム (SCIS2018), 2018
3. Yoko Kamidoi, K-anonymous techniques for high-dimensional datasets based on microaggregation, The 12th International Workshop on Security (IWSEC2017), 2017
4. 湯浅 祐介, ポリシーと使ったプライバシー保護要求の柔軟な指定, 第 9 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラム (DEIM'2017), 2017

5. 上土井 陽子, 動的データセットのプライバシー保護再公開における厳密な安全性評価について, 2017 年暗号と情報セキュリティシンポジウム (SCIS'2017), 2017
6. 上土井 陽子, 辺ラベル付きグラフのクラスタリングにおけるクラスタ表現決定法, 第 164 回 情報処理学会データベースシステム研究会 (SIG-DBS), 2017
7. (特別・招待講演) 上土井 陽子, 動的データのプライバシー保護再公開における正確な安全性評価について, PWS 匿名性・プライバシー規準討論勉強会, 2016
8. 平成 28 年度教員表彰, 広島市立大学, 2017

【社会活動】

2016 年度、2017 年度においては、学外の情報処理関連の学会委員を中心として7件の委員を担当した。このうち、2件においては情報セキュリティ分野の英文論文誌編集委員として、2件においてはデータ工学関連分野の和文・英文論文誌の編集委員として、1件は論文賞選定委員として、1件は査読委員として活動した。また、データベースシステム研究運営委員と兼ねて、データベース関連のフォーラムにおいて、8件の発表審査担当または座長担当があった。

2018 年 3 月-	Special Section on Data Engineering and Information Management 小特集編集委員会
2017 年 12 月-	情報処理学会 2017 年度論文賞選定ワーキンググループ (TOD)委員
2017 年 8 月-	電子情報通信学会英文論文誌 D 情報通信システムセキュリティ小特集編集委員会委員
2016 年 5 月-2017 年 7 月	電子情報通信学会英文論文誌 D 情報通信システムセキュリティ小特集編集委員会委員
2015 年 4 月-	情報処理学会データベースシステム研究会運営委員
2014 年 6 月-2018 年 5 月	情報処理学会論文誌:データベース(TOD)編集委員
2003 年 4 月-	電子情報通信学会査読委員

氏名	川端 英之
職位	講師
研究分野	ソフトウェア、計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	言語処理系、高水準言語プログラミング、数値処理ソフトウェア、最適化コンパイラ、ソフトウェア工学、形式検証支援

2016 年度および 2017 年度における教育活動・研究活動・社会活動は、プログラミング環境やプログラミング言語、プログラミングのためのライブラリ開発など、「プログラミング」を中心に据えたテーマに基づく活動がその主要部分を占めた。「プログラミング」は自身の重要な研究キーワードの一つであるが、情報科学のあらゆる分野において重要なキーワードでもある。研究活動だけでなく教育活動や社会活動においても「プログラミング」に軸足を置いた取り組みを実践できていることは有意義であると総括されよう。

【教育活動】

2016 年度および 2017 年度には、それ以前から引き続き、下記の科目の講義を担当した。「コンパイラ」および「数値計算プログラミング」は情報工学科向け専門科目である。いずれも、コンピュータを活用する技術に関する講義であり、実践的で地に足の着いた理解を促すために講義室での座学と演習室でのプログラミング演習とをほぼ交互に実施している。「プログラミング言語特論」は情報工学専攻向けの科目である。全 15 週のうち 8 週間を担当し、純粋関数型言語 Haskell を題材に、関数プログラミングについて講義した。この講義でも、内容の理解を深めるべく、毎週プログラミング課題を課している。

2016, 2017 年度	コンパイラ
2016, 2017 年度	数値計算プログラミング
2016, 2017 年度	プログラミング言語特論
2016 年度	情報科学基礎実験 A
2017 年度	情報科学基礎実験 α

【研究活動】

2016 年度および 2017 年度の研究活動は、(1)プログラム開発環境、(2)任意精度の計算結果を得られる実数計算ライブラリ、および、(3)定理証明支援系の可用性向上に関する研究に取り組んだ。(1)では、API の組合せによって実装されるアプリケーションの開発支援のための基礎技術の研究を進め、結果の一部は論文誌に掲載の運びとなった。(2)では、精度保証多倍長浮動小数点演算ライブラリの Haskell 向けバインディングの開発、および、FBCS に基づく実数計算の高速化手法の研究を行った。結果の一部は論文誌上で発表した。(3)では、定理証明支援系 Coq の対話的利用と連携した証明木表示ツールを開発した。PPL2018 でのポスター・デモ発表ではポスター賞を受賞した。

1. Hideyuki Kawabata, Speeding up Exact Real Arithmetic on Fast Binary Cauchy Sequences by using Memoization based on Quantized Precision, Journal of Information Processing, Vol. 25, pp. 494–504, 2017
2. Hideyuki Kawabata and Hideya Iwasaki, Improving Floating-Point Numbers: A Lazy Approach to Adaptive Accuracy Refinement for Numerical Computations, ESOP 2016, LNCS 9632, pp.390–418, 2016.

3. 余頃花純, 川端英之, 弘中哲夫, 区間演算ライブラリ MPFI を用いた実数計算ライブラリ IFN-H の記憶領域管理を Haskell のみで記述した設計と実装, 情報処理学会第 80 回全国大会, 2018
4. 西山 佳志, 西本匡志, 川端英之, 弘中哲夫, ソースコードに含まれる機能を要約して一覧表示できるプログラム理解支援ツール, 情報処理学会第 198 回ソフトウェア工学研究発表会, 2018
5. 木村 麻衣, 田中 雄太, 川端 英之, 弘中 哲夫, Traf: Coq での対話的証明と連動した証明木描画ツール, 第 20 回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ (PPL2018), 2018
6. 西本匡志, 西山佳志, 川端英之, 弘中哲夫, プログラム理解のためのコードの機能分けツールの検討, ウィンターワークショップ 2018・イン・宮島, 2018
7. 小林 周太郎, 川端 英之, 弘中 哲夫, 末尾再帰でない再帰プログラムの高速化のための最適化に関する一考察, 日本ソフトウェア科学会第 34 回大会, 2017
8. Masashi Nishimoto, Hideyuki Kawabata, Tetsuo Hironaka, Effective Indexing based on the TF-IDF Method with Selected Terms for Discovering Usages of APIs from Open Source Repositories, ITC-CSCC, 2017
9. 川端英之, 多倍長精度浮動小数点演算を用いた実数計算ライブラリの実現方式, 日本応用数理学会 2016 年度年会, 2016
10. 川端英之, Fast Binary Cauchy Sequence に基づく実数計算の精度区間メモ化に基づく高速化, 情報処理学会第 109 回プログラミング研究発表会, 2016
11. PPL2018 ポスター賞, 第 20 回プログラミングおよびプログラミング言語ワークショップ (PPL2018) プログラム委員会, 2018

(他12件)

【社会活動】

2016 年度および 2017 年度には、社会連携委員会事業「高校生による情報科学自由研究」の講師を務めた。2016 年度は、多数桁の数値計算のためのプログラミング手法を指導。2017 年度には、ワンボードコンピュータを用いた機械語プログラミングおよび Haskell による数式処理プログラミングを指導した。学外での活動としては、以前から引き続き、日本ソフトウェア科学会編集委員会委員を務めた。その業務は主として日本ソフトウェア科学会の論文誌「コンピュータ・ソフトウェア」の編集であり、いくつかの特集号の担当や各種表彰の審査、投稿される論文の査読等を行った。

2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究
2016 年 8 月	高校生による情報科学自由研究
2013 年 4 月 -	日本ソフトウェア科学会編集委員

氏名	川本 佳代
職位	助教
研究分野	教育工学、科学教育、リハビリテーション工学・福祉工学
研究キーワード	e-ラーニング、教育評価、CAI

2016 年度、2017 年度は教育システムを使用した高度な思考力の育成、言語障害患者のためのリハビリテーションシステムの開発を行なった。これらを研究課題とし、2016 年度は大学院博士前期課程の学生2名と学部学生2名、2017 年度は学部学生に対し研究指導補佐を行った。また、社会活動として、広島市立リハビリテーション病院と共に失語症の患者を対象にしたリハビリテーション用システムを開発している。

【教育活動】

2016 年度は大学院博士前期課程2年生2名に対し、教育研究指導を補佐し、修士論文を提出させることができた。2016 年度、2017年度に学部4年生2名ずつ、教育研究指導を補助し、卒業論文を提出させることができた。また、以下の授業を担当した。教職実践演習(中等)B は4年後期にある演習で、教職免許取得関係科目の総括となる。両年度とも受講生は教師にふさわしい知識、技術、考え方を身に付けたと考える。情報社会論はオムニバス形式で長い間その一部を担当してきたが、2017年度より他の方が一人で担当されることになり担当から外れた。しかし、事情により 2017年度も一部担当した。

2016, 2017 年度	教職実践演習(中等)B
2016, 2017 年度	システム工学実験 I
2016, 2017 年度	外書講読演習 I
2016, 2017 年度	外書講読演習 II
2016 年度	情報社会論

【研究活動】

教育システムを使用した高度な思考力の育成をテーマに研究を行なっている。その 1 つとして、批判的思考力・論理的思考力の育成を目指す学習システムの開発している。また、2016 年度は科学研究費「日本を担う人材のコミュニケーションスキル向上をめざす学習コミュニティの構築」(基盤研究(C)、課題番号 25350344、2013-2016)の総括を行なった。並行して、言語障害患者のためのリハビリテーション用システムの開発を行なっている。2017 年度後半に「職場復帰を目指す失語症患者のリハビリテーションプラン作成支援アプリの開発」を社会連携プロジェクトに採択していただき、アプリの開発を行い、実験を通してその有効性を明らかにした。各研究テーマとも今後も継続する予定である。

1. 砂山渡・高橋麻祐・川本佳代, ストーリー提供機能とライフ機能を用いた学習意欲の向上と維持の枠組み, 日本知能情報ファジィ学会誌, Vol. 29, No. 3, pp. 501-509, 2017
2. Kayo Kawamoto, Yusuke Hayashi, Tsukasa Hirashima, An Open-ended and Interactive Learning Using Logic Building System with Four-Frame Comic Strip, Human Interface and the Management of Information: Applications and Services, HIMI 2016, Lecture Notes in Computer Science, Vol. 9735, 2016

3. 後藤 賢悟, 砂山 渡, 川本 佳代, キャラクターを用いたテキストマイニングスキルの獲得支援, 人工知能学会第15回インタラクティブ情報アクセスと可視化マイニング, 2017
4. 石田 純太, 砂山 渡, 川本 佳代, 知識伝達における類推による説明能力の育成, 人工知能学会第15回インタラクティブ情報アクセスと可視化マイニング, 2017

【社会活動】

地方独立行政法人 広島市立病院機構 広島市立リハビリテーション病院と共同研究を行い、失語症の患者を対象にしたリハビリテーション用システムを開発している(研究活動参照)。このシステムは開発中であるが、実際に患者がリハビリテーションに使用しており、完成した暁には一般公開する予定である。また、広島県物理教育研究推進会幹事をしている。

2016 年4月 - 2018 年3月	広島県物理教育研究推進会幹事

氏名	釘宮 章光
職位	准教授
研究分野	生物分子化学、分析化学、生体関連化学、生物機能・バイオプロセス
研究キーワード	分子認識化学、バイオセンシング、分析化学、アミノ酸、予防医学、生体計測、環境計測

教育活動・研究活動・社会活動の全般において、化学とバイオテクノロジーをベースに情報科学への興味を掻き立てるような活動を行っていると考えている。大学生、高校生から小学生にこれら分野への興味をもってもらうために身近な事例を取り上げたりすることで講義資料も工夫して進めている。

また研究については地元企業と協力して装置の実用化を目指すなど、私のこれまでの経験を生かして産学連携にも力を入れている。具体的な成果も出つつあるので、引き続き研究にも力を注ぎたい。

【教育活動】

化学・バイオテクノロジーから情報科学まで広い範囲にわたって教育を行っている。情報科学部の学生に化学やバイオテクノロジーに興味をもってもらえるよう、身近な話題も取り入れて講義を行うよう工夫した。

「広島産業と技術」の授業については学生の興味を引くような企業、事業を行っている企業の方に講演を行っていただき、学生からも好評を得ていると考えている。広島のことについて学べるだけでなく、社会人になっても役に立つ内容に仕立てており、今後も工夫を重ねて充実した内容にしたい。

2016, 2017 年度	医用情報科学
2016, 2017 年度	生物情報処理特論(大学院)
2016, 2017 年度	広島産業と技術
2016, 2017 年度	生物工学Ⅱ
2016, 2017 年度	バイオ情報学特論(大学院)
2016, 2017 年度	化学実験
2016 年度	情報科学基礎実験 D
2017 年度	化学
2017 年度	情報科学序説
2017 年度	外書講読Ⅱ
2017 年度	情報科学基礎実験

【研究活動】

現在企業と共同で研究を進めている病気の診断に用いるアミノ酸計測用のバイオセンサーの開発について、私が筆頭著者として論文発表、国内・国外での学会発表などを積極的に行った。招待講演などの依頼も受けて講演を行った。また企業と共同で国内・国外特許出願も行った。このように研究活動を活発に行っており、開発は着々と進んでいると考えている。本研究の実用化に向けて、装置化を目指してさらに研究を進めていきたいと思う。

1. Akimitsu Kugimiya, Hidenori Konishi, Rie Fukada, Flow analysis of amino acids by using a newly developed aminoacyl-tRNA synthetase-immobilized, small reactor column-based assay, Applied Biochemistry and Biotechnology, Vol. 178, pp. 924-931, 2016
2. (特別・招待講演) 釘宮章光, 病気の診断に用いるアミノ酸計測用バイオセンサーの開発, 第 67 回中国四国産学連携化学フォーラム(広島), 2018
3. 釘宮章光・岩東航平・日高実優・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, 酵素反応を用いるヒスチジン計測法の開発, 日本化学会 第 97 春季年会(千葉), 2018
4. 釘宮章光・岩東航平・齋藤徹・香田次郎・中野靖久・鷹野優, 酵素反応を用いるヒスチジンの選択的計測のための反応条件検討, 日本分析化学会 第 66 年会(東京), 2017
5. Akimitsu Kugimiya, Miyu Hidaka, Toru Saito, Jiro Kohda, Yasuhisa Nakano, Yu Takano, Lysine and histidine sensing with enzymatic reactions and its application to biosensor for amino acids, 1st European Conference on Chemistry of Two-Dimensional Materials (Chem2DMat), 2017
6. Akimitsu Kugimiya, Kouhei Iwato, Toru Saito, Jiro Kohda, Yasuhisa Nakano, Yu Takano, Spectrophotometric Detection of Histidine Using Enzyme Reaction and Examination of Reaction Conditions, 19th International Conference on Chemical, Biological and Environmental Engineering, 2017

他 20 件

【社会活動】

安芸高校と美鈴が丘高校の生徒に対し、模擬授業や本学の大学案内を行い、本学への興味、あるいは情報科学分野への興味をもってもらえるように努めた。生徒からも多くの質問を受けたりし、興味をもってもらえたと思う。

小学生向けのボランティアの理科教室である「くらりか」を年に 3 回程度開催している。子供の理科離れを防ぐことを目的としており、理科に興味をもってもらえるよう、単に工作で終わるだけでなく、原理などについても詳しく説明し、理解してもらえていると思う。

今後も、小学生から高校生まで科学あるいは本学に興味をもってもらえるような活動を続けたいと思う。

2017 年 7 月 -	安芸高等学校 「大学研究」インターンシップ
2015 年 12 月 -	美鈴が丘高校 研究室見学
2014 年 4 月 -	くらりか(蔵前理科教室ふしぎ不思議)

氏名	串田 淳一
職位	講師
研究分野	知能情報学
研究キーワード	進化計算、最適化、対戦型ゲーム

社会活動では、以前から所属していた進化計算学会や IEEE SMC Hiroshima Chapter に加え、電子情報通信学会中国支部の学生会顧問を担当し、イベント(本学で開催)の準備や打ち合わせに参加した。また、情報科学基礎実験では、内容の変更に伴い新たに担当する回の講義をデザインした。研究活動についても、メインテーマである最適化手法の開発を行い、これまで通り国際会議や論文誌への投稿を行った。所属する研究室での卒論・修論指導も含めて、バランスよく各活動を遂行することができたと考える。

【教育活動】

研究室所属の学部生および大学院生全員に対し、共同での研究指導(プログラミングの補助や論文の添削等)を行った。また、担当講義の情報科学基礎実験 $\beta-1$ (旧実験 B)は 2016 年から内容が変更され、第6、7週の実験(ソート)を担当した。変更に伴い、新たに講義資料の準備や課題プログラムの作成、レポート採点における基準の設定などを行った。2016 年度の最初のグループでは、エクセルでのグラフの作り方などで手間取る学生も多かったが、その後のグループからは、補足のスライドを用意しておくことで、スムーズに実験が進むようになった。2017 年度も資料や実験手順を改善し、より理解しやすい内容となるように努めた。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	線形代数 1 演習
2016, 2017 年度	論理回路
2016, 2017 年度	機械学習特論
2016 年度	情報科学基礎実験 $\beta-1$
2017 年度	情報科学基礎実験 $\beta-1$

【研究活動】

2016、2017 年度は、生物進化に基づく最適化アルゴリズムや群知能に基づく手法に関する研究を行い、新たな進化的アルゴリズムや解探索の分析方法を提案した。これらの成果について国際会議や国内の研究会で発表を行った。また、筆頭著者の論文が進化計算学会論文誌に採択され、研究室の大学院生が執筆した論文も International Journal of Computational Intelligence Studies に採択されたため、一定の研究成果を残したと考えている。

1. J. Kushida, A. Hara, T. Takahama, Improving the Search Performance of Rank-Based Differential Evolution with Multivector Mutation, International Journal of Innovative Computing, Information and Control, Vol. 14, No. 1, pp. 171-180, 2018
2. T. Nishio, J. Kushida, A. Hara, T. Takahama, Particle Swarm Optimization with Dynamic Search Strategies Based on Rank Correlation, International Journal of Computational Intelligence Studies, Vol. 6, No. 4, pp. 311-332, 2018

3. 串田淳一, 原章, 高濱徹行, 進化的アルゴリズムにおける探索点の順位相関を利用した関数形状の推定, 進化計算学会論文誌, Vol. 7, No. 2, pp. 32-45, 2016
4. Jun-ichi KUSHIDA, Akira HARA and Tetsuyuki TAKAHAMA, Rank-Based Differential Evolution with Eigenvector-Based Crossover Operator, ICIC Express Letters, Vol. 10, No. 11, pp. 2547-2553, 2016
5. T.Takahama, S.Sakai, J. Kushida and A. Hara, Particle Swarm Optimization with Mutation Operations Controlled by Landscape Modality Estimation using Hill-Valley Detection, Artificial Life and Robotics, pp. 1-11, 2016
6. Jun-ichi Kushida, Shogo Nagura, Akira Hara and Tetsuyuki Takahama, Cartesian Ant Programming with Transition Rule Considering Internode Distance, 2016 IEEE 9th International Workshop on Computational Intelligence and Applications, 2016
7. Akira Hara, Hiroki Konishi, Jun-ichi Kushida and Tetsuyuki Takahama, Efficiency Improvement of Imitation Operator in Multi-agent Control Model Based on Cartesian Genetic Programming, 2016 IEEE 9th International Workshop on Computational Intelligence and Applications, 2016
8. Toshiki Nishio, Jun-ichi Kushida, Akira Hara, Tetsuyuki Takahama, Particle Swarm Optimization with Dynamic Search Strategies Based on Landscape Modality Estimation, 2016 IEEE 9th International Workshop on Computational Intelligence and Applications, 2016
9. 串田 淳一, 原 章, 高濱 徹行, 回転不変性を考慮した Particle Swarm Optimization の改良, 進化計算シンポジウム 2016, 2016
10. 複数の最良位置を記憶する回転不変性を持つ PSO の検討, 計測自動制御学会 システム・情報部門 学術講演会 2016, 2016
11. ○串田 淳一, 原 章, 高濱 徹行, Differential Evolution における重心の関数値に基づく集団分布の形状推定, 第12回進化計算学会研究会, 2017
12. Keiko Ono and Jun-ichi Kushida, Landscape Estimation of Decision-tree Induction based on Grammatical Evolution using Rank Correlation (to appear), CEC 2017, 2017

他 4 件

【社会活動】

所属する進化計算学会や IEEE SMC Hiroshima Chapter での学会開催(若手研究会、国際会議 IWCIA)の準備や編集委員などの業務を遂行した。また、本学の高校生による情報科学自由研究として、計算知能研究室より「生物の進化を利用した画像生成」のテーマを提供した。電子情報通信学会中国支部の学生顧問では、中国支部学生会の学生が中心となって行うイベントである「学生ケータイあわ〜ど 2016/2017」の補佐を務めた。打ち合わせの準備や最終審査会(本学で開催)の会場設営などを補助し、無事イベントを開催することができた。



「学生ケータイあわ〜ど」の当日の様子(情報棟 2F)

2018 年 4 月-	SICE システム・情報部門 コンピューテーション・インテリジェンス部会 部会運営委員
2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究「進化的アート 生物の進化を利用した画像生成」(テーマ提供)
2017 年 1 月-	IEEE Hiroshima Section SMC Chapter 役員 (Secretary)
2016 年 8 月	高校生による情報科学自由研究「進化的アート 生物の進化を利用した画像生成」(テーマ提供)
2016 年 4 月-2018 年 3 月	電子情報通信学会中国支部 学生会顧問
2015 年 1 月-2016 年 12 月	IEEE Hiroshima Section SMC Chapter 役員 (Treasurer)
2014 年 10 月-	進化計算学会 理事
2013 年 4 月-2017 年 3 月	情報処理学会 数理モデル化と問題解決研究運営委員会
2012 年 3 月-	進化計算学会 論文誌編集委員
2011 年 8 月-	進化計算学会 研究会専門委員

氏名	窪田 昌史
職位	助教
研究分野	計算機システム、ソフトウェア
研究キーワード	システムソフトウェア、並列処理、コンパイラ、ハイパフォーマンスコンピューティング、マルチコアプロセッサ

スーパーコンピュータやマルチコアプロセッサ、組込みシステムなどの計算機システムにおける並列処理の研究を行っている。特に、並列処理におけるプログラミング言語のコンパイラや通信ライブラリ、オペレーティングシステムなどのシステムソフトウェアの開発や、並列化によるアプリケーションプログラムの高速化などを主な研究テーマとしている。

【教育活動】

情報工学科 3 年生向けの情報工学実験 I、II では、組込みシステムやスマートフォン、タブレット向けのプログラミングに重点を置き、カリキュラムの作成を分担している。特に 2017 年 4 月に実験設備の入れ替えがあったため、それに対応して、画像認識やネットワークのプログラミングを身に着けるカリキュラムを充実させた。大学院生を対象としたコンピュータシステム特論では、C 言語プログラムと機械命令の関係について理解が深まるよう、講義資料を見直した。講義の中でのグループ討論も取り入れる予定である。

2016, 2017 年度	情報工学実験 I
2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	情報工学実験 II
2016, 2017 年度	コンピュータシステム特論
2016 年度	基礎演習
2016 年度	e-ラーニング英語 II
2017 年度	情報演習

【研究活動】

研究プロジェクト「3D 活性サイト科学」の研究分担者として、蛍光 X 線ホログラムからの 3 次元原子像再生の高速化や再生像からのノイズ除去の研究を行っている。PC クラスタやアクセラレータ(GPU)を対象とした高速化を行い、その性能評価を行っている。また L1 正則化を用いたノイズ除去アルゴリズムの改良を進めている。さらに、上記の像再生に加え、グラフ探索処理、電子回路シミュレーションなどのアプリケーションを対象とし、GPU や FPGA といったアクセラレータ向けの高速化手法の研究を行っている。

1. Tomohiro Matsushita, Atsushi Kubota, Naohisa Happo, Kazuto Akagi, Natsuhiko Yoshinaga and Kouichi Hayashi, Fast Calculation Algorithm Using Barton's Method for Reconstructing Three-Dimensional Atomic Images from X-ray Fluorescence Holograms, Zeitschrift für Physikalische Chemie, Vol. 230, No. 4, pp. 449-456, 2016
2. 窪田昌史, 松下智裕, 八方直久, 蛍光 X 線ホログラムからの 3 次元原子像再生の XcalableMP による並列化, 情報処理学会論文誌 プログラミング, Vol. 10, No. 1, pp. 30-30, 2017

3. 荒瀬郁実, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, 細粒度再構成可能デバイス MPLD の論理セル配置問題を対象とした SA 法における迷路法を用いたコスト算出方法, 信学技法, Vol. 117, No. 46, RECONF2017-15, pp. 75-80, 2017
4. 石崎大智, 胡濱良樹, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, OpenCL を用いた吸排気管シミュレーション用 FPGA アクセラレータの設計, 信学技法, Vol. 117, No. 46, RECONF2017-18, pp. 93-98, 2017
5. 胡濱良樹, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, FPGA のための C-to-OpenCL トランスレータの試作, 信学技法, Vol. 117, No. 279, RECONF2017-43, pp. 37-42, 2017
6. 原智裕, 窪田昌史, 松下智裕, 八方直久, 弘中哲夫, 蛍光 X 線ホログラムからの 3 次元原子像再生の GPU による高速化, 第 6 回電子デバイス・回路・照明・システム関連教育・研究ワークショップ, 2017
7. Yoshiki Ebisuham, Daichi Ishizaki, Atsushi Kubota, Kazuya Tanigawa and Tetsuo Hironaka, Prototyping a C-toOpenCL Translator that Generates FPGA-CPU Hybrid Execution Code, SC17 Research Exhibition, 2017
8. Yuji Yamashita, Atsushi Kubota, Kazuya Tanigawa and Tetsuo Hironaka, Reconfigurable Device MPLD and the CAD Tool, SC17 Research Exhibition, 2017
9. 石崎大智, 胡濱良樹, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, FPGA を対象とした C-to-OpenCL トランスレータの自動最適化機能の検討, 信学技法, Vol. 117, No. 479, CPSY2017-134, pp. 83-88, 2018
10. 寺本圭吾, 窪田昌史, 弘中哲夫, マルチポート・マルチバンクメモリを用いた大規模グラフ解析のメモリアクセスの最適化, 信学技法, Vol. 117, No. 479, CPSY2017-136, pp. 101-106, 2018

【社会活動】

情報処理学会プログラミング(PRO)研究会の運営委員および論文誌プログラミング編集委員として、学会の活動に貢献した。特に、毎年 7、8 月に開催されるワークショップ SWoPP (Summer United Workshops on Parallel, Distributed and Cooperative Processing) の PRO 担当として、SWoPP 組織委員や他の研究会の担当委員とも協力し、ワークショップの開催に貢献した。また、電子情報通信学会コンピュータシステム(CPSY)研究会専門委員として、研究会の活動に貢献した。

2016 年 4 月 - 2018 年 3 月	電子情報通信学会コンピュータシステム研究会専門委員
2016 年 4 月 - 2018 年 3 月	情報処理学会プログラミング研究会運営委員
2016 年 4 月 - 2018 年 3 月	情報処理学会論文誌プログラミング編集委員

氏名	黒木 進
職位	准教授
研究分野	メディア情報学・データベース、知能情報学
研究キーワード	マルチメディアデータベース

マルチメディアデータベースとその検索技術を中心に研究を行っています。特に、図面や地図などの 2 次元空間、現実世界を表す 3 次元空間、およびそれらの時間的な変遷を表す時空間データのデータベース化と検索技術の開発に取り組んでいます。時間とともに位置や形が変わる図形のためのデータベースやたんぱく質立体構造のための索引付けについて成果を得ました。また、データベース化された巨大なデータから有用な知識を見つけるデータマイニングとその応用分野である情報推薦についても研究しています。特に、位置情報に基づくソーシャルメディアについて注目しています。

【教育活動】

情報科学部 2 年生を対象とする科目であるデータ構造とアルゴリズムⅡでは線形リスト、木、グラフなどの基本的なデータ構造と、そのアルゴリズムについて講義しています。また、知能工学科 3 年生を対象とする科目であるデータマイニングと知能工学実験Ⅱではクラスタリングやルール学習など基本的なアルゴリズムについて講義しています。情報工学科 3 年生を対象とする科目であるデータベースでは関係データベースについて講義しています。大学院生を対象とする科目マルチメディアデータベース特論では多様なマルチメディアデータのクラスタリングと索引づけと検索アルゴリズムについて講義しています。

2016, 2017 年度	データ構造とアルゴリズムⅡ
2016, 2017 年度	データマイニング
2016, 2017 年度	知能工学実験Ⅱ
2016, 2017 年度	マルチメディアデータベース特論
2017 年度	データベース

【研究活動】

直近 2 年間においては、位置情報に基づくソーシャルネットワークサービスのユーザの行動の分析の研究を行いました。ユーザが現実世界のある地点を訪問し、ソーシャルネットワークサービスが指定する行動を行うことをチェックインといいます。個別のユーザのチェックインの履歴を集めて巨大なデータベースを作り、そこからチェックインの時間的、地理的な関連の分析を行いました。曜日別の特徴や、チェックイン地点の地理的な近さの特徴について分析しました。そしてこれらの知識に基づいてユーザがそのあと一定期間内にチェックインする回数や地点の予測をするためのモデルを研究しています。

直近 2 年間については著書、論文、研究発表、芸術活動・その他、受賞に関して該当がありません。

【社会活動】

データ工学研究室の研究テーマであるデータマイニングとその応用について紹介する展示を行いました。具体的には、巨大な系列データから有用なパターンを見つけようとする系列パターンマイニングの技法について紹介するとともに、バイオインフォマティクスへの応用としてたんぱく質立体構造の分析とクラスタリング、索引付けと検索アルゴリズム

について紹介しました。また、twitter 等のソーシャルメディア上の投稿を収集し、投稿内容や投稿時刻、投稿地点などのマルチメディア情報を分析して、現実世界で発生している事象や話題を見つけることや、意見や評価を抽出することについて紹介しました。

2017 年 11 月	地域貢献事業発表会、広島市立大学
2017 年 9 月	産学連携研究発表会、広島市立大学
2016 年 11 月	地域貢献事業発表会、広島市立大学
2016 年 9 月	産学連携研究発表会、広島市立大学

氏名	黒澤 義明
職位	助教
研究分野	知能情報学
研究キーワード	深層学習、ディープラーニング、印象抽出、情報推薦、ファッションアイテム、アパレルアイテム

最大のアピールポイントは、新規内容での実験演習授業(3 年次向け知能工学実験 I)を立ち上げたことである。社会が求める深層学習技術を取り入れた内容に加え、グループ学習を採用することで、単なる知識の蓄積だけではない教育の深度の向上を目指した。最新技術を学生にわかりやすく取り組みやすい内容にするため、事前調査やテキストの作成、また初年度の実施を受けた改善等に力を注いだ点は大いに評価できる。しかしながら、学生教育のために少々時間をかけすぎ、他の活動とのバランスが悪くなってしまったと言える。この点は反省している点である。今年度は研究室の学生が 3 人、個人の研究に携わることになったため、アパレルアイテムの推薦だけでなく、深層学習を用いた発話者の分離にも取り組み、画像だけでなく音声の課題にも取り組むつもりである。

【教育活動】

2017 年度から新たな内容の実験の立ち上げるため、2016 年度はその準備やテキストの整備を行った。最近流行となっている深層学習を実験に取り入れることで、学生にとってもわかりやすく親しみやすい、そして、社会貢献にもつながりやすい演習授業になったことは評価できる。その一方で、学生のコンピュータスキルを正に評価していなかったため、キー入力を間違える学生が続出し、サポートが間に合わないという問題が起こった。結果として、学生が消化できないまま次の作業に移行しなければならない点は問題であった。このため、2018 年度の授業実施に向け、内容を整理し、課題に取り組みやすくすることを目標に、改良を行った。

2016, 2017 年度	知能工学実験 I
2016, 2017 年度	プログラミング演習

【研究活動】

個人的には、ここ数年行ってきた文字情報を用いた「アパレルアイテムの情報推薦」を、画像情報を中心に深層学習を用い、発展させることを念頭に研究を行ってきた。深層学習の各種フレームワークに精通するため、同時に深層学習のための膨大なデータ整備に少々時間を要したため、主たる発表が少なくなってしまった点は少々残念である。一方で、所属研究室の大学院生の研究のサポートに時間を割き、多くの発表に貢献できた。上村君の発表(下記リスト 1)では優秀賞を頂戴し(同 8)、学界でも評価された点は特に重要と考えている。

1. Joji Uemura, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Suppressed Negative-Emotion-Detecting Method by using Transitions in Facial Expressions and Acoustic Features, The Second Workshop on Processing Emotions, Decisions and Opinions (EDO 2017), The 8th Language and Technology Conference (LTC), pp. 122-127, 2017

2. Takumi Takahashi, Kazuya Mera, Nhat Tang Ba, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Natural Language Dialog System Considering Speaker's Emotion Calculated from Acoustic Features, Dialogues with Social Robots, pp. 145-157, 2017
3. Takumi Takahashi, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Natural Language Dialog System Considering Speaker's Emotion Calculated from Acoustic Features, The 7th International Workshop on Spoken Dialogue System (IWSDS2016), 2016
4. Takumi Takahashi, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Natural language dialog system considering speaker's emotion for open-ended conversation, The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, 2016
5. Joji Uemura, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Method of recognizing multiple emotions from acoustic features using soft clustering, The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, 2016
6. 和泉沙織, 黒澤義明, 目良和也, 竹澤寿幸, 深層学習正解ラベルとしてのアパレルアイテム名利用とその有効性の検討, 言語処理学会年次大会, 2018
7. 黒澤 義明, 竹澤 寿幸, アパレルアイテム商品紹介文中の“演出”に着目した感性語の自動推定, 言語処理学会年次大会, 2017
8. EDO2017 Best Paper Award, 2017

他 6 件

【社会活動】

研究室で毎年行っているオープンキャンパス出展に協力することで、音声認識技術等を紹介する社会貢献を行った。また、これも毎年行っている貢献として、「高校生による情報科学自由研究」に題材を提供している。ここ 2 年は参加申し込みがなかったため、大きな貢献とは言えないかもしれないが、その前年にはオープンキャンパスでの発表時に最優秀賞を受賞したため、内容としては優秀であると考えている。参加者があれば尽力したい。そうした貢献に加えて 2017 年度にはさらに、「広島市立大学産学連携研究発表会 2017」にも出展を行い、研究で得た知見を社会に提供するようにも務めた。

2017 年 9 月 -	広島市立大学産学連携研究発表会 2017
2017 年 8 月 -	高校生による情報科学自由研究
2017 年 8 月 -	オープンキャンパス
2016 年 8 月 -	高校生による情報科学自由研究
2016 年 8 月 -	オープンキャンパス

氏名	桑田 精一
職位	准教授
研究分野	数学基礎・応用数学、数理物理
研究キーワード	量子情報理論、量子通信

数学基礎・応用数学、数理物理を専門分野として、量子情報科学に関する教育・研究・社会活動を行う。教育活動・研究活動・社会活動・学内運営活動のワークバランスとして、約 4:4:1:1の比重とする。また、大学運営に関する事柄として、内部質保証委員、FD・SD 委員、大学院入試検討ワーキンググループの各委員およびワーキンググループメンバーとして活動する。

【教育活動】

ターム制に移行した「物理学概論」および「基礎物理学」において、授業の進行具合に特に留意する。また、「基礎物理学」においては、WEB を用いた演習問題を充実させる。「情報科学基礎実験」における半導体電流・電圧特性に関する実験においては、新たな測定範囲を行うようにテキストを変更した。これによって、等価回路における理解がより深まるものと期待される。「物理学実験」においては、今年度から、科学実験室と同室になり、暗室がなくなった。暗室を利用した実験は引き続き行う予定なので、実験に不具合が生じないように工夫をする(例えば、簡易暗室箱の設置)。「解析学 I 演習」においては、代表教員の負担軽減のため、問題作成に携わる。

2016, 2017 年度	物理学概論
2016, 2017 年度	外書講読演習 I, II
2016, 2017 年度	Fundamental Physics
2016, 2017 年度	Communication Transmission System, Adv.
2016, 2017 年度	Exercise of Analysis I
2016, 2017 年度	Physics Experiment
2016, 2017 年度	System Engineering Experiment
2016, 2017 年度	Fundamental Information Science Experiment
2017 年度	情報科学序説

【研究活動】

量子論を用いた情報理論の重要性が増すなかで、量子コンピュータ、量子通信への応用をめざした量子情報理論を展開する。特に、この分野において、情報理論における関数解析の役割に焦点をおき、学会および国際会議で発表する。また、これらの成果をまとめ、学術雑誌に投稿する。さらに、今日種々の分野で応用されている深層学習に関する理論を用いて、量子コンピュータ、量子通信などに応用する研究を始める。

1. 大澤, 桑田, 田中, 藤原, 廣瀬, 小田部, 理工系学生のための基礎物理学, 培風館, 2017
2. S. Kuwata, H. Fujisaka, Nonlinear response theory of electronic transport in graphene, Proc. Int. Symp. Nonlinear Theory and Its Application (NOLTA 2017), pp. 669-672, 2017

3. S. Kuwata, Characterizing the Fourier Transform by Phase and Amplitude Preserving Maps, Int. J. Appl. Comput. Math., Vol. 3, No. 1, pp. 1149–1162, 2017
4. S. Kuwata, Supersymmetric resolvent-based Fourier transform, J. Mod. Phys., Vol. 8, pp. 133–146, 2017
5. S. Kuwata, Improving the convergence of Fourier transform using the resolvent for supersymmetric charge, Proc. Global Conference on Applied Physics and Mathematics, Vol. (to be published), 2016
6. S. Kuwata, Resolvent of harmonic oscillator Hamiltonian and its application to Fourier transform for generalized functions, AIP Conf. Proc., Vol. 1705, pp. 020012–1–020012–8, 2016
7. 桑田精一, フーリエ・ルジャンドル変換に基づく共形写像の一般化, 日本物理学会第 73 回年次大会, 2018
8. S. Kuwata, H. Fujisaka, Nonlinear Response Theory of Electronic Transport in graphene, 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, 2017
9. 桑田精一, ボルンの一般化された相反変換と分数フーリエ変換, 日本物理学会秋季大会, 2017
10. 桑田精一, 直交多項式における標本定理の適用, 日本物理学会第 72 回年次大会, 2017
11. 桑田精一, 振幅・位相保存写像によるユニタリー積分変換の特徴付け, 日本物理学会秋季大会, 2016
12. S. Kuwata, Improving the convergence of Fourier transform using the resolvent for supersymmetric charge, Global Conference on Applied Physics and Mathematics (25–27 July Rome), 2016

【社会活動】

夏のオープンキャンパスにおいて、研究室紹介を行う。また、機会があれば、近隣の高等学校において模擬授業を行う。

氏名	香田 次郎
職位	講師
研究分野	リサイクル工学、生物機能・バイオプロセス
研究キーワード	タンパク質、酵素、バイオリクター、バイオディーゼル燃料、植物工場、水耕栽培

この2年間、教員の退職や新旧カリキュラムの過渡期にあたったため、例年以上に教育活動に費やした時間が多く、特に後期はほとんどを教育活動に費やした。研究面ではLED植物工場に関するテーマを卒業研究で実施した。社会活動については、オープンキャンパスなどの広報活動、学会支部の運営に従事した。大学運営としては、衛生管理者として、薬品の保管状況調査の実施、法令で義務付けられている局所排気装置の定期自主点検および作業環境測定の実施調整、学内の巡視などに従事した。

【教育活動】

2016 年度は単独担当の講義を5科目、オムニバス形式の講義を2科目、実験・演習科目を4科目担当した。この年は、前任者の退職に伴い、担当講義を2科目引き継いだため、その準備に多くの時間を費やした。2017 年度は単独担当の講義を6科目、オムニバス形式の講義を1科目、実験・演習科目を4科目担当した。この年は新旧カリキュラムが進行したことにより新規科目がさらに増加したため、講義資料の作成、期末試験問題の作成と採点、成績評価に多大な時間を費やさざるを得なかった。

2016, 2017 年度	基礎生化学
2016, 2017 年度	生物学概論
2016, 2017 年度	物理・化学実験
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 D、情報科学基礎実験 α
2016, 2017 年度	生体センサ工学
2016, 2017 年度	分子生物学
2016, 2017 年度	生物工学 I
2016, 2017 年度	医用情報科学実験 I
2016, 2017 年度	外書講読演習 I
2016, 2017 年度	生物情報処理特論
2016 年度	医用情報科学
2017 年度	生物学

【研究活動】

2016 年度、2017 年度ともに、LED 植物工場に関する卒業研究の追実験を行って学会発表を行った。現在、これらの結果を学術雑誌に投稿するため論文を執筆中である。また、2016 年度には医用情報科学実験に関する解説論文を発表し、2017 年度にはバイオディーゼル燃料製造廃水の水耕栽培用液体肥料へのリサイクルに関する論文を英文誌に発表した。

1. Jiro Kohda, Yasuhisa Nakano, Akimitsu Kugimiya, Yu Takano, Takuo Yano, Recycling of biodiesel fuel wastewater for use as a liquid fertilizer for hydroponics, Journal of Material Cycles and Waste Management, Vol. 19, No. 3, pp. 999-1007, 2017
2. 福田浩士, 中野靖久, 藤原久志, 香田次郎, 常盤達司, 医療分野を担う情報処理技術者の育成ー広島市立大学情報科学部医用情報科学科の学生実験ー, 日本神経回路学会誌, Vol. 23, No. 4, pp. 146-152, 2016
3. 香田次郎, 鈴木陸人, 齋藤徹, 釘宮章光, 中野靖久, 鷹野優, ブロッコリースプラウト中のアントシアニン含量に及ぼす LED 点灯方法の影響, 日本食品工学会第 18 回(2017 年度)年次大会, 2017
4. 香田次郎, 佐々木理緒, 釘宮章光, 中野靖久, 矢野卓雄, 鷹野優, ブロッコリースプラウト中のアントシアニン含量に及ぼす LED 照射の影響, 日本食品工学会第 17 回(2016 年度)年次大会, 2016

他 14 件

【社会活動】

2016 年度、2017 年度ともにオープンキャンパス、広島市立大学地域貢献事業発表会に研究室と医用情報科学実験で出展した。また、広島市立大学産学連携研究発表会には 2017 年度に研究室で出展した。また、高大連携に関する学長指定研究において、大学見学の受け入れと出張体験授業を行った。また、2017 年度より廃棄物資源循環学会中国・四国支部幹事として、見学会や講演会の企画・運営に従事した。

2017 年 12 月	出張体験授業(12 月 15 日 美鈴が丘高校)、学長指定研究(他 2016 年度に 1 件)
2017 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会、広島市立大学(他 2016 年度に 3 件)
2017 年 10 月	大学見学(10 月 30 日 沼田高校)、学長指定研究
2017 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2017、広島市立大学
2017 年 8 月	広島市立大学オープンキャンパス、広島市立大学(他 2017 年度に 1 件、2016 年度に 2 件)
2017 年 5 月-	廃棄物資源循環学会 中国・四国支部 理事(兼幹事)

氏名	河野 英太郎
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	ネットワークセキュリティ、ネットワークソフトウェア、TCP/IP

2016、2017年度は、研究キーワードに挙げた分野の一部については、指導を行っている学生との共同での特許申請に結びつくなど目に見える成果を上げている。また、以下の各項目以外の事項として、在学生のチュータという仕事にて、学生の学修上の問題点の相談などを行っている。さらに、以前の「学外長期研修」の経験に関連し、学科を問わず海外留学の相談などにのる機会も増えている。近年、様々な活動が期待され、学内・学外問わず負っている役割が相対的に重くなっている。

【教育活動】

2016、2017年度は「プログラミング I」や「情報基礎」・「情報演習」など新入生に対する講義や「ネットワークソフトウェア演習」(情報工学科3年生向け)、「モバイルネットワーク特論」(大学院 博士前期課程向け)など上級年次向けの専門科目の講義を担当している。また、基本的に情報工学科や情報工学専攻の教員全員が担当することになっている「テクニカル・リーディング」や「卒業研究」、「情報工学特別演習」などの講義も担当している。その結果、指導学生が学外の研究会から優秀ポスター賞などの表彰を授与されるなど一定の評価に結びついている。

2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	プログラミング I
2016, 2017 年度	プログラミング I 演習
2016, 2017 年度	情報演習
2016, 2017 年度	ネットワークソフトウェア演習
2016, 2017 年度	モバイルネットワーク特論

【研究活動】

2016、2017年度は定常的に行っている国際会議や学術論文での研究内容の公表に加え、関連する学術研究内容に関する特許申請なども行っている。また、研究内容や継続的に行っている研究テーマに関して、海外で行われる国際会議でのパネルディスカッションのパネリストやモデレータなど、以降に掲載している内容について、海外の研究者等との情報交換や最新の研究動向の議論を行っている。

1. Ryuma Tani, Kento Aoi, Eitaro Kohno, Yoshiaki Kakuda, An adaptability-enhanced routing method for multiple gateway-based wireless sensor networks using secure dispersed data transfer, Proc. 37th International Conference on Distributed Computing Systems Workshop (ICDCSW 2017), The Sixteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2017), pp. 19-25, 2017
2. Nobuhiro Kajikawa, Yuya Minami, Eitaro Kohno, Yoshiaki Kakuda, On availability and energy consumption of the fast connection establishment method by using Bluetooth Classic and Bluetooth Low Energy, Proc. Fourth International Symposium on

Computing and Networking (CANDAR2016), 9th International Workshop on Autonomous Self-Organizing Networks (ASON2016), pp. 286-290, 2016

3. Tetsuya Murakami, Eitaro Kohno, and Yoshiaki Kakuda, A countermeasure to eavesdropping on data packets by utilizing control packet overhearing for radio overlapping reduced multipath routing in ad hoc networks, International Journal of Networking and Computing, Vol. 6, No. 2, pp. 345-367, 2016
4. Assurance in Internet of Things (IoT), The Sixteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks, 2017

他 2 件 (著書、国際会議パネルディスカッションパネリスト)

【社会活動】

2016、2017年度は継続的に行っている国際会議のプログラム委員に加え、国際会議のパネルディスカッションのパネリストやモデレータ、さらにはプログラム副委員長、プログラム委員長、関連する学術論文の編集委員など、従来より重い役割を担当している。また、グローバルサイエンスキャンパス事業に協力し、高校の受講生への指導を行うなどの活動も行っている。

2018 年 3 月-2018 年 10 月	The Seventeenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2018), プログラム委員
2017 年 5 月-	廃棄物資源循環学会 中国・四国支部 理事(兼幹事)
2017 年 3 月-2017 年 11 月	The Tenth International Symposium on Computing and Networking (ASON'17), プログラム委員長
2016 年 11 月-2017 年 6 月	The Sixteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2017), パネルディスカッション・モデレータ
2016 年 11 月-2017 年 6 月	The Sixteenth International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks (ADSN2017), プログラム副委員長
2012 年 5 月-	電子情報通信学会 アシユアランスシステム研究会 幹事
2012 年 5 月-	電子情報通信学会 ディペンダブルコンピューティング研究会 専門委員

他 3 件

氏名	小 寄 貴 弘
職位	准教授
研究分野	機械力学・制御、知能機械学・機械システム
研究キーワード	メカトロニクス、制御工学、パワーアシスト

今後発展が期待されている人間・ロボット共生分野に寄与できる技術者・研究者を育成することを念頭に、教育活動では、学生が基礎的知識・技能を修得できることを重視しつつ、専門的知識の伝授に偏ることなく、修得した知識・技能を活用して課題を解決できる能力も養うことができる学修指導となるように努めた。一方、研究活動では、メカトロニクス研究室の一員として、将来的には実社会に還元し、貢献できるような、主として人を支援するためのメカトロニクス関連技術に関する研究・開発を推進した。また、それを通して得られた研究成果を社会に対して公表する活動も行った。

【教育活動】

学部生に対しては、情報基礎・情報演習においては、情報機器操作の基本的技能と情報倫理・情報セキュリティ等に関する基礎知識を、システム工学科人間・ロボット共生コースの基盤を成す専門科目であるメカトロニクスIおよびIIでは、メカトロニクスの要素技術やシステム化を修得できるように努めた。大学院生に対しては、インテリジェント制御特論にて、メカトロニクスシステムを高性能化するための制御理論を講義した。講義においても、記述式演習の他にコンピュータを用いた演習等を一部導入することにより、理論の理解を促進できるようにするとともに、学修した理論を活用して課題解決する能力の育成にも配慮した。

2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	インテリジェント制御特論
2016, 2017 年度	メカトロニクス II
2016, 2017 年度	システム工学実験 II
2016, 2017 年度	情報演習
2016, 2017 年度	メカトロニクス I

【研究活動】

少子高齢化が進行し、労働力人口が減少する近年、人による作業を支援したり、代替したりすることができる高度なメカトロニクスシステムの研究・開発が必要とされている。メカトロニクスシステムを駆動するための、空気や水の圧力を利用したフルードパワーアクチュエータは、高い安全性を備えており、特に人との相互作用を伴う装置等に適する。そこで、フルードパワーアクチュエータで駆動されるウェアラブルパワーアシスト装置の開発、その制御システムの開発、および関連技術としてモデリング技術やセンシング技術等の研究を推進してきた。研究を遂行する中で得られた成果は、随時学会等で発表を行った。

1. Xiaowei Wang, Jianfeng Li, Kazuyuki Shima, Takahiro Kosaki, Shigang Li: Drone were me: Flying drone as avatar by aligned stereo view and head pose, IEEE 5th Global Conference on Consumer Electronics, 2016

2. 小寄 貴弘, 二反田 晃尚, 厚海 慶太, 李 仕剛: 水道水圧駆動人工筋アクチュエータを用いた肘関節用パワーアシスト装置の開発, 日本機械学会論文集, Vol. 82, No. 841, DOI:10.1299/transjsme.16-00174, 2016
3. 成相 貴弘, 富永 隆太, 厚海 慶太, 小寄 貴弘, 李 仕剛: 全天周視聴覚センサの試作, 映像情報メディア学会冬季大会, 2016
4. 杉野 詠一, 小寄 貴弘, 高橋 雄三, 李 仕剛: 重心運動の安定性を考慮した空気圧式腰部パワーアシスト装置の制御, 日本機械学会中国四国支部講演会, 2016
5. Takahiro Kosaki, Keita Atsuumi, Yuzo Takahashi, and Shigang Li: A pneumatic arm power-assist system prototype with EMG-based muscle activity detection, IEEE International Conference on Mechatronics and Automation, pp. 793-798, 2017
6. 高濱 慎一郎, 李 仕剛, 小寄 貴弘, 満上 育久, 厚海 慶太, 小作 敏晴: 球面カメラモデルを用いた RGB-D カメラと全天周カメラの間の姿勢校正, 第 19 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム, 2017
7. 松尾 将司, 李 仕剛, 小寄 貴弘, 満上 育久: 全天周カメラによる車線の検出, 第 19 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム, 2017
8. 趙梓豪, 李 仕剛, 小寄 貴弘, 満上 育久: 注視計測機能を有した全天周ドライビングレコーダー, 電子情報通信学会総合大会 (情報・システム講演論文集 2), p. 85, 2018

【社会活動】

産学連携研究発表会、市役所での地域貢献事業発表といった、特に地域社会に研究成果を公表する定例行事に出展し、研究活動についての理解を求めた。また、医療福祉機器技術事業化交流会での研究シーズ紹介、高校での模擬授業、オープンキャンパスへの出展も行った。特に、2016 年度はひろしまコンピュータサイエンス塾の実行委員長として、市民対象の講演会の講師、関係外部機関への協力要請・広報等を行うとともに、中学生を対象としたプログラミング講座を新規に開講し、その講師も担当した。

2017 年 8 月	中学生対象プログラミング講座
2017 年 1 月	医療福祉機器技術事業化交流会
2016 年 8 月	中学生対象プログラミング講座

氏名	小作 敏晴
職位	助教
研究分野	流体工学、機械力学・制御
研究キーワード	流体機械、メカトロニクス

教育活動として、授業は主に演習科目、実験科目を担当している。すべてが必修科目であり、特に情報科学基礎実験では情報科学部のほぼすべての2年生と接するため、レポートの評価については常に公平性を保ち、再提出が必要な学生の指導については担当教員間で情報を共有し、学生が合格点に達するよう細心の注意を払い、時間をかけて対応している。研究活動については、エネルギー変換、特に自然エネルギーの有効利用に関心があり、それらに関するテーマが中心となっている。また、メカトロニクス、制御技術の応用研究も行っている。社会活動については、該当期間内(2016～2017 年度)に該当する活動はないが、今後機会があれば積極的に参加する所存である。

【教育活動】

「基礎演習」では、学生が自分で選んだ IT 用語に関する調査、グループ発表、討論などを通して、学生の技術レポート作成とプレゼンテーション技法の習得に努めた。「情報科学基礎実験」では、一変量データの整理および統計的推測の理解を目的として、試料の質量測定、乱数生成、計算機による標本実験を担当した。「システム工学実験 I,II」では、移動ロボットのハードウェア・ソフトウェア実験の中で、ロボットをキーボードで遠隔操作するプロセス間通信プログラムの実験を担当した。「外書講読演習 I」では、メカトロニクスに関する英文書の学生による和訳、図表の説明を通して、学生の技術英語読解力および制御理論の基礎の習得に努めた。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	システム工学実験 I
2016, 2017 年度	システム工学実験 II
2016, 2017 年度	外書講読演習 I
2016 年度	情報科学基礎実験 C
2017 年度	情報科学基礎実験 β

【研究活動】

1.の「水飲み鳥」に関する研究は、2013～2016 年度に JSPS 科研費 25630442 の助成を受けた。取得可能動力の推定など一定の成果は得られたが、当初の計画で目標とした工学的実験装置の製作は達成できなかったため、問題点の整理を行い、将来の科研費再申請に向けて研究を継続している。2.の「垂直軸形可変ピッチ風車」に関する研究は、富山大学との共同研究として実施している。風洞実験において一定の成果が得られており、それを数値流体力学で検証するため、スーパーコンピュータによるシミュレーションを実施している。3、4 の「空気噴流による物体操作」の研究では、流体工学に関する技術支援を行っている。

1. 小作 敏晴, 佐野 学, 厚海 慶太, 水飲み鳥の揺動運動解析と熱力学的考察, 日本機械学会中四国支部第 54 期総会・講演会 講演論文集, 講演番号 1107, 2016

2. 谷崎 雄紀, 小作 敏晴, 厚海 慶太, 小嵯 貴弘, 李 仕剛, 離散渦法と遺伝的アルゴリズムによる可変ピッチ式ダリウス運動翼の空力最適化, 日本機械学会中四国支部第54期総会・講演会, 2016
3. 松下 翼, 土橋 直晃, 岩城 敏, 高木 健, 小作 敏晴, 複数の空気噴流による平面上物体の非接触操作(4本のエアジェットノズルを用いた複数物体制御方式の実験的検討), 日本機械学会論文集, Vol. 82, No. 835, p.15-00459, 2016
4. (3.に関して) 日本機械学会中国四国支部 平成28年度技術創造賞, 2017

【社会活動】

該当期間内(2016～2017年度)において、本項に該当する活動はなし。

氏名	児島 彰
職位	助教
研究分野	計算機システム、ソフトウェア、高性能計算
研究キーワード	リコンフィギュラブルシステム、計算機アーキテクチャ、システムソフトウェア、OS、コンパイラ、機械学習

教育活動では、2017 年度に学生実験用のロボットカーの設計の更新を行い、その成果を学会発表した。研究活動では、従来から研究を行っている FPGA を用いたリコンフィギュラブルシステムに関して、2016～2017 年度には、その応用として、組み込み向けシステムでの機械学習を取り扱った。また、研究分野での設計技術の向上を目的として、国際会議や学会主催の FPGA 設計コンテストに積極的に参加し、上位入賞した。社会活動では、従来から行っている、ネットワーク対応の組み込みマイコンを題材とした、高校生向けの自由研究の講座を、夏休み期間に引き続き開催した。2016～2017 年度の活動バランスは、教育活動が約 40%、研究活動が約 50%、社会活動が約5%、大学運営活動が約 5%あった。

【教育活動】

学部3年向けの「情報工学実験 I」「情報工学実験 II」では、実験で使用するロボットカーの設計を担当している。2017 年度は実験機器のリプレースの年度で、ロボットカーの更新を行った。従来から使用しているクラウド開発の mbed を搭載したロボットの改良を行ったことに加えて、組み込み Linux による Raspberry Pi を搭載したロボットを導入した。これに伴って、2種類の組み込みシステムを扱うカリキュラム内容に変更を行った。「基礎実験」では、主に論理回路の作成とアセンブラプログラミングを担当している。「コンピュータアーキテクチャ I」では、2017 年度より教科書の改訂に伴って、授業で取り扱うハードウェア記述言語として、従来の Verilog 2001 から、新しい規格の System Verilog に変更を行った。

2016, 2017 年度	情報工学実験 I
2016, 2017 年度	コンピュータアーキテクチャ I
2016, 2017 年度	情報工学実験 II
2016 年度	基礎実験 A
2017 年度	基礎実験 α

【研究活動】

組み込み用途向けの FPGA を用いた機械学習システムに取り組んでいる。2016～2017 年度はオンライン機械学習を扱った。低消費電力の組み込みシステムで、高速な機械学習の計算処理を FPGA により実現する。応用としては、車載されたエンジンの経年変化などに対応して ECU 内の特性計算を変化させるシステムが考えられる。今後は、精細な画像を高速にリアルタイム処理するシステムでの機械学習に FPGA を使用する組み込みシステムを研究で取り扱っていく予定である。また、学生実験の教育用に開発を行ったロボット教材とカリキュラムに関しての学会発表を行った。国際会議 HEART、ICFPT や学会主催の FPGA 設計コンテストに参加し、複数回上位入賞した(2016～2017 年度に2位4回)。

1. 児島 彰, 石川直樹, 市原英行, 井上博之, 大田知行, 小畑博靖, 窪田昌史, 新 浩一, 高野知佐, 永山 忍, 組み込みシステム技術とネットワーク技術を教育するための

学生実験用ロボット教材と実験カリキュラムの開発, 情報処理学会 第 80 回全国大会
講演論文集, Vol. 4, pp. 373-374, 2018

2. Yohei Nose, Akira Kojima, Tetsuo Hironaka, Consideration of Online Learning of Radial Basis Function Network for Engine Control and Acceleration using FPGA, Proceedings of the 32nd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC2017), pp. 696-699, 2017
3. Akira Kojima, Trax Player Implementation on FPGA using High Level Synthesis Tool, 2016 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT), pp. 323-326, 2016
4. 児島 彰, 石川 直樹, 市原 英行, 井上 博之, 大田 知行, 小畑 博靖, 窪田 昌史, 新浩一, 高野 知佐, 永山 忍, 組み込みシステム技術とネットワーク技術を教育するための学生実験用ロボット教材の開発, 第6回電子デバイス・回路・照明・システム関連教育・研究ワークショップ, 2017
5. HEART2017 Design Competition the 2nd place, 2017
6. ICFPT2016 Design Competition the 2nd place, 2016
7. 第 7 回 相磯秀夫杯 デザインコンテスト The 2nd RECONF/CPSY/ARC/GI Trax デザインコンペティション FIT2016 第 15 回情報科学技術フォーラム イベント企画 エンベデッド部門 第2位, 2016
8. HEART2016 Design Competition the 2nd place, 2016

【社会活動】

高校生を対象とした、「高校生による情報科学自由研究」を、「ネットワーク対応の組み込みマイコンをプログラミングしてみよう(IoT プログラミング入門)」という内容で開催した。組み込みマイコンの基礎、クラウド型プログラミング開発実習、センサーを接続してデータ計測、ネットワークの基礎、Web ページへのデータ転送とグラフ表示の学習を行った後、高校生同士の議論を通して、学習した技術の応用として、IoT 技術を使ったシステムの提案を高校生が行った。2017 年度は「通学に特化したスマート自転車」、2016 年度は「入浴事故を防ぐためのスマート・バス・システム」の提案が行われた。パラグライダーのスポーツ競技団体の委員や理事として、競技大会の開催などの活動を行った。

2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究, 広島市立大学
2016 年 8 月	高校生による情報科学自由研究, 広島市立大学
2016 年 4 月-2017 年 3 月	日本ハング・パラグライディング連盟 PG 競技委員
2016 年 4 月-2017 年 3 月	広島市ハング・パラグライディング連盟 理事

氏名	小林 康秀
職位	教授
研究分野	システム同定、適応制御、非線形システム
研究キーワード	制御理論、システム同定、システムモデリング、非線形システム

教育活動では、毎年の履修学生の習熟度に応じた教育内容にするため、毎回の講義に対する理解度を演習やレポート課題などで測定し、それに応じた教材等に見直しや工夫をすることにより、「学生が理解できる講義」を目標とし、学生の授業アンケートなどでの数値目標を達成することが出来た。研究活動では、システム制御分野を研究基盤として、現在の社会的なニーズの高い、自動運転技術、バーチャル・リアリティ関連の研究テーマを取り上げて研究を行っている。大学運営では、システム工学科の学科長として、学科の取りまとめ等を行った。社会貢献では、企業に対する技術マッチング、技術相談等を通じて企業の問題解決に協力したほか、公開講座や長年にわたり実施している市大生チャレンジ事業のアドバイザーとして、実施学生の指導・監督にあたり、受講者から高い評価を得ることができた。

【教育活動】

下記の科目の講義・研究指導などを通じて教育活動に参画した。講義科目では、毎回の講義の最後にまとめの演習問題やレポート課題を設定するなどして、抽象的な理論展開を具体的な問題に置き換えるような教材に工夫し、学生が理解できるように努めた。また、学生の理解度や理解不足の点は、毎回のレポートなどで把握し、次の講義にフィードバックを行うなどで、学生の授業アンケートでの「総合評価」の設問で、いずれの講義科目でも「4.0」以上の数値目標を達成することが出来た。大学院の講義では、学生が能動的に学べるようアクティブ・ラーニングを取り入れた。研究指導では、2016、2017 年度合計で、博士後期課程1名、修士課程の学生 18 名、卒業論文の学生 20 名の研究指導に携わり、それぞれの学位取得を指導した。

2016, 2017 年度	システム制御特論
2016, 2017 年度	現代制御理論
2016, 2017 年度	制御工学
2016, 2017 年度	常微分方程式
2016, 2017 年度	卒業論文Ⅰ
2016, 2017 年度	卒業論文Ⅱ
2016, 2017 年度	システム工学特別演習Ⅰ、Ⅱ、Ⅲ、Ⅳ
2016, 2017 年度	技術文書作成法
2016, 2017 年度	プレゼンテーション技法
2016, 2017 年度	情報科学序説
2016, 2017 年度	インターンシップ
2017 年度	情報科学講究Ⅱ

【研究活動】

研究活動では、「著書」1編、「ジャーナル論文」7編、「研究発表」31件などの研究成果の発表を行った。著書の「ドライバ状態の検出、推定技術と自動運転、運転支援システム

への応用」においては、自動車の安全性向上のために、ドライバの覚醒度を評価することが重要な課題となっており、運転操作を妨げない、リアルタイムで評価、早期に検出、信頼性が高い、不特定多数のドライバに対しても覚醒度を評価できる手法について解説などを含め、新しい手法を詳述している。また、ジャーナル論文では、観測雑音が存在するシステムに対する確率的制御評価、バーチャル・リアリティ技術を様々なシステムへ応用する研究についての発表を行っている。

1. 小林 康秀 齋藤 充行, ドライバ状態の検出、推定技術と自動運転、運転支援システムへの応用, 技術情報協会, 2016
2. Tatsuya Hayakawa, Daijiro Yoshimura, Mitsuyuki Saito, Yasuhide Kobayashi, and Wataru Wakita, A High Immersive Telexistence System of the Moving Object with Full Circumference Image and Inertial Force Presentation, Electrical Engineering in Japan, 2017
3. 早川達也, 吉村大二郎, 齋藤充行, 小林康秀, 脇田 航, 全周映像および慣性力呈示による移動体の高度没入型トレイグジスタンスシステム, 電気学会論文誌 C, 2017
4. 脇田 航, 齋藤充行, 小林康秀, 没入型 VR 環境における舞踊動作訓練システム, 電気学会論文誌 C, 2017
5. 齋藤充行, 切田滉人, 市本貴宏, 小林康秀, 脇田 航, 出力フィードバック制御における出力観測雑音の影響評価, 計測自動制御学会論文集, 2016
6. 脇田 航, 齋藤充行, 小林康秀, 人工指による押下感解析に基づくタッチパネルへのテクスチャベースの押下感呈示システム, 電気学会論文誌 C, 2016
7. 脇田 航, 齋藤充行, 小林康秀, 人工指による触知覚解析に基づく硬軟感および摩擦感推定法, 電気学会論文誌 C, 2016
8. 齋藤充行, 切田滉人, 脇田 航, 小林康秀, 出力観測雑音の存在を考慮した確率的出力フィードバック制御, 電気学会論文誌 C, 2016
9. 網本勇樹, 小林康秀, 齋藤充行, 脇田 航, 未知な変動パラメータを含むシステムのパラメータ予測, 第 22 回知能メカトロニクスワークショップ, 2017

上記のほか、「研究発表」31 件、電気学会表彰 1 件など

【社会活動】

主に本学主催の発表会等で企業に対する技術マッチングを行った。また、企業からの技術相談等を通じて企業の問題解決に協力したほか、情報科学部公開講座、市大生チャレンジ事業のアドバイザーとして、実施学生の指導・監督にあたり、高校生や多くの広島市民の受講者から高い評価を得ることができた。

1. 広島市立大学の地域貢献事業発表会 16 件、産学連携研究発表 9 件
2. 情報科学部公開講座「高校生による情報科学自由研究」 2 件
3. 市大生チャレンジ事業の「パソコンなんでも相談室」アドバイザー 2 件など

氏名	齋藤 徹
職位	助教
研究分野	計算化学、生物無機化学、バイオ情報学
研究キーワード	金属酵素、酸化反応、強相関電子系、半経験的分子軌道法、多階層シミュレーション

2016、2017 年度は研究に最も力点を置いた活動を行い、教育活動、社会活動と続く。研究については【研究活動】で述べるように、共同研究の開拓も含め首尾よく進めることができ、多数の成果を上げることができた。【教育活動】の研究指導では、学生の理解と進捗状況に気を配りながら進めてきた。直接指導していた学生が 2017 年度の最優秀卒業論文賞を受賞したことは大変励みとなった。一方、本学でのキャリアが浅いため、講義や演習に関しては分担とはいえ準備に多くの時間を取られてしまった。【社会活動】については、自身のテーマが基礎的なものであるため、オープンキャンパスや地域貢献事業発表会に参加するにとどまった。

【教育活動】

研究に関する教育では、学生が研究と就職活動を両立させられるよう、学生と研究計画・進捗について話し合う機会を多く設けた。その結果上述の学生の受賞に繋がったが、直接指導した中で大学院に進学した者はいない。このため、学生に対して大学院の魅力を伝え、進学率を上げることが今後の課題である。担当する講義、演習においては、出席の徹底と授業外学習の定着を図った。演習では、毎回受講生全員に予習内容を発表させるほか、復習用の課題も与えた。大学院生向けの生物情報処理特論では、受講生に馴染みの薄い生物、化学を学ぶ動機付けとして、医用情報科学との関連性の深い最先端の研究を紹介するなどの努力を行った。

2016 年度	情報基礎
2016 年度	e-ラーニング英語 I
2016 年度	外書講読演習 I
2016 年度	生物情報処理特論
2016 年度	情報演習
2016 年度	外書講読演習 II
2017 年度	情報基礎
2017 年度	外書講読演習 I
2017 年度	医用情報科学実験 I
2017 年度	e-ラーニング英語 I
2017 年度	生物情報処理特論
2017 年度	外書講読演習 II

【研究活動】

計算精度を損なわずに計算時間を大幅に短縮できる量子化学計算法を提案し、新規医薬品設計に応用することを目指している。まず、2016 年度に半経験的分子軌道法 (PM6) を改良した rPM6 法を独自に提案し、水素、炭素、窒素、酸素を含む基本的な有機分子に有用であることを示した。2017 年度はリン、イオウ、マンガン、鉄を含む分子も適

用可能とすることで、医薬品合成の鍵となる遷移金属触媒の計算を、通常の量子化学計算の約 3,000 倍の速さで実行できることを示した。同時に既存の PM6 が実験とは異なる誤った電子状態、反応経路を与えるという致命的な問題を解決できた。これらの成果を学術論文誌、国内外の学会で発表を行い、好評を得た。

1. T. Saito, Y. Takano, rPM6 Parameters for Phosphorous and Sulfur Containing Open-Shell Molecules, *Molecular Physics*, 116, 602-610, 2018
2. T. Saito, Y. Takano, rPM6 Parameters for Manganese and Application to Transition State Search for Oxidation Reactions of Cyclohexene by Manganese(IV)-Oxo Species, *Chemistry Letters*, 46, 1567-1569, 2017
3. M. Yamada, N. Yoshinari, N. Kuwamura, T. Saito, S. Okada, S. P. Maddala, K. Harano, E. Nakamura, K. Yamagami, K. Yamanaka, A. Sekiyama, T. Suenobu, Y. Yamada, T. Konno, Heterogeneous Catalase-like Activity of Gold(I)-Cobalt(III) Metallosupramolecular Ionic Crystals, *Chemical Science*, 8, 2671-2676, 2017
4. T. Saito, Y. Kitagawa, Y. Takano, Reparameterization of PM6 Applied to Organic Diradical Molecules, *Journal of Physical Chemistry A*, 120, 8750-8760, 2016
5. (特別・招待講演) T. Saito, Towards in silico design of biomimetic complexes, Mini-symposium on interplay between experimental coordination chemistry and theoretical coordination chemistry, 2017
6. (特別・招待講演) T. Saito, Y. Takano, Development and Applications of Theoretical Method for Chemical Reactions Involving Open-shell Molecules, CSJ West Japan Chemistry Forum 2016 in Kagawa, 2016

他 39 件

【社会活動】

社会連携委員として、高校生による情報科学自由研究ポスター発表の審査、講評に携わった。また、研究内容及び成果を広く知ってもらうために、研究成果については適宜ホームページに掲載した。概要でも述べたように、着任初年度、2年目は研究に最も力点を置いたことと、これまでの研究テーマが基礎研究であることから、際立った活動成果を上げるには至らなかった。しかしながら、オープンキャンパスにおける研究室紹介や広島市立大学地域貢献事業発表会に積極的に参加・出展を行った。今後は市内の高校への出前授業などにも意欲を持って取り組みたいと考えている。

2017 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会
2017 年 7 月	オープンキャンパス
2016 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会
2016 年 8 月	オープンキャンパス

氏名	齋藤 夏雄
職位	准教授
研究分野	代数幾何学
研究キーワード	代数多様体、正標数

本学に務める教員として、専門とする数学を通して本学および社会にどのような貢献ができるかということを常に意識して諸活動を行いたいと考えている。数学は情報科学分野における基礎となるものであり、ひいては理学・工学、さらには人間のさまざまな社会的活動の土台をなすものである。自身がそうした学問で人間社会の維持・発展に寄与できる立場にあることを自覚し、身につけた知見を教育活動や研究活動を通じて社会に還元することを、基本的な活動テーマとしたい。活動に当たって中心となるのは教育と研究であるが、それだけにとどまらず、学内運営や社会活動についても積極的に関わっていかなければいけないと考えている。

【教育活動】

現在、1年生向け講義である「解析学 I」および「同演習」、「線形代数学 I」および「同演習」、「線形代数学 II」を担当しているほか、教職科目である「教科教育法(数学)I」および「同 II」、さらに大学院生向け講義として「知能数理特論B」を受け持っている。「知能数理特論 B」においては、楕円曲線に関する基礎的な理論、さらにその応用である楕円曲線暗号の仕組みなどについて解説している。講義にあたっては独りよがりで一方向的な授業に陥らないよう、レポート提出などを通じて学生の反応や理解度を把握するよう努めるほか、1年生向け科目の演習では答案の採点や問題解説において学生一人一人に合わせた指導をするよう心がけている。

2016, 2017 年度	線形代数学 I
2016, 2017 年度	解析学 I
2016, 2017 年度	線形代数学 I 演習
2016, 2017 年度	解析学 I 演習
2016, 2017 年度	教科教育法(数学)I
2016, 2017 年度	知能数理特論 B
2016, 2017 年度	線形代数学 II
2016, 2017 年度	教科教育法(数学)II

【研究活動】

代数多様体についての研究を行っている。研究の大きな目的は、正標数の代数的閉体上定義された代数多様体について、特に正標数独特の性質や構造を持った多様体を分類し特徴づけることで、複素数体上の代数幾何学との相違を幾何的側面から明らかにすることである。代数幾何学における重要な多様体であるファノ多様体に対して正標数特有の病的現象を持ったものを抽出する大域的研究と、低標数における特異点の特殊な構造を調べる局所的研究を並行して行っている。ここ数年は、大域的研究としてはF分裂性と呼ばれる性質を持たないデル・ペッツォ曲面および3次元ファノ多様体、局所的研究としては有理二重点の変形空間の研究を主に行っている。

1. 低標数の有理二重点の変形空間について、野田代数幾何学シンポジウム 2018, 2018

2. Natsuo Saito, Characterization of non-F-split del Pezzo surfaces of degree 2, Tokyo Journal of Mathematics, Vol. 40, No. 1, pp. 247-253, 2017
3. 桂利行(編), 岡崎悦明・岡山友昭・齋藤夏雄・佐藤好久・田上真・廣門正行・廣瀬英雄(共著), 理工系学生のための微分積分, 培風館, 2017
4. 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の統計分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会 予稿集, pp. 224-226, 2017
5. 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の確率分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会 予稿集, pp. 146-148, 2017
6. Equisingular families of rational double points in characteristic 2, The 15th Affine Algebraic Geometry Meeting, 2017
7. 齋藤夏雄, 「おいしい数学 証明の味はパイの味」書評, 数学セミナー, pp. 92-92, 2016
8. 齋藤夏雄, 「ひとけたの数に魅せられて」書評, 数学セミナー, pp. 100-100, 2016

【社会活動】

2016 年まで、日本評論社発行の雑誌「数学セミナー」の書評委員を務めていた。数学に関する図書から紹介に値する物を選書し、書評執筆者の推薦を行うほか、自らも書評を執筆する活動を行っていた。すでに書評委員の任期は終了したが、昨年度より「数学セミナー」誌上で連載記事の執筆を担当している。

2014 年-2016 年	雑誌「数学セミナー」(日本評論社発行) 書評委員

氏名	齊藤 充行
職位	助教
研究分野	制御工学、制御・システム工学
研究キーワード	制御理論

教育に関しては、卒論生と M2 生に対して研究指導および就活指導をおこない、国際会議での受賞、希望職種に就職をさせることができ、また進学希望者には大学院への進学指導ができましたが、指導している学生間で研究の理解度や進度に差が生じ、大学を休みがちになり、大学院を休学及び退学する学生が出てしまいました。2018 年度は、学生 1 人 1 人を今まで以上に観察し、学生 1 人 1 人に合った研究指導を心がける予定です。研究に関しては、2016 年度は、数値目標を大きく達成することができましたが、2017 年度は、数値目標は達成したものの、投稿論文全てが不採択となっていました。社会活動については、これまでと同様、大学イベントへの参加、学生ボランティアのアドバイザー等、目標通りの活動ができたと思います。

【教育活動】

講義では、2016 年度までは、基礎(特に数学)を重視しておりましたが、2017 年度から、外書講読演習 I とシステム推定学特論で基礎だけではなく自動車技術でどのように応用されているかなど実用例を紹介しながら講義をおこなうように授業改善をしました。卒論指導・修論指導においては、2016 年度は、M1 生 1 名が国際会議と国内学会で受賞することができましたが、もう 1 名の M1 生については、研究をあまり進めることが出来ず大学を休みがちになってしまいました。2017 年度は、M2 生 1 名は、希望していた自動車関連外資系企業に内定し、論文採択、国際会議発表等をおこない奨学金返還免除対象者に選ばれましたが、M2 生 1 名が休学、M1 生 1 名が退学してしまい研究指導について多くの反省点があり、2018 年度からは、学生のレベルに合った研究テーマと今まで以上にきめ細かな観察と指導が必要だと考えております。

2016, 2017 年度	プログラミング I 演習(A～C)
2016, 2017 年度	外書講読演習 II
2016, 2017 年度	システム工学実験 II
2016, 2017 年度	外書講読演習 I
2016, 2017 年度	システム推定学特論

【研究活動】

毎年数値目標として、学術雑誌と国際会議論文を合わせて、1 編以上の投稿を目標とし、学術雑誌で投稿論文が採択されるように取り組んでおります。2016 年度は、著書 1 編、第 1 著者の論文 2 編、第 2 著者の論文 2 編が掲載され、学生ファーストの国際会議では受賞するなど目標を達成することができました。2017 年度は、第 3 著者の論文 1 編が掲載され、学生ファーストの国際会議発表をおこないましたが、私が第 1 著者の投稿論文 1 編が不採択、学生ファーストの投稿論文 3 編が不採択となっていました。2018 年度は、不採択となった論文の研究をやり直し、採択されるように取り組みます。

1. 小林康秀、齊藤充行、他(全著者人数:74 人), ドライバ状態の検出、推定技術と自動運転、運転支援システムへの応用, (株)技術情報協会, 2016

2. 齊藤充行, 切田滉人, 市本貴宏, 小林康秀, 脇田航, 出力フィードバック制御における出力観測雑音の影響評価, 計測自動制御学会論文集, Vol. 52, No. 9, pp. 1-8, 2016
3. 齊藤充行, 切田滉人, 脇田航, 小林康秀, 出力観測雑音の存在を考慮した確率的出力フィードバック制御, 電気学会論文誌C(電子・情報・システム部門誌), Vol. 136, No. 8, pp. 1071-1077, 2016
4. D. Yoshimura, M. Saito, W. Wakita and Y. Kobayashi, Derivation Method of Optimal Solution on Output Feedback Control, SICE Annual Conference 2017, 2017
5. 三浦大輝, 齊藤充行, 吉村大二郎, 脇田航, 小林康秀, ドライバの運転動作を考慮した自動運転のための車両モデルの交差点と狭路区間への適用, 自動車技術会 2017 年春季大会, 2017
6. 福島悠斗 齊藤充行 脇田航 小林康秀(広島市立大学) 市本貴宏 石川陽一(ボッシュ), ドライバの運転動作に対応した走行軌道生成のための車両モデルの狭路区間への適用, 第 14 回 ITS シンポジウム 2016-フロンティア-北の大地から発信する ITS, 2016
7. D. Yoshimura, M. Saito, H. Kirita, W. Wakita, Y. Kobayashi, Solvability Conditions of the Stochastic Linear Optimal Regulator Assuming State-Observation Noise, SICE Annual Conference 2016, 2016

他 11 件

【社会活動】

2016 年度は、プレオープンキャンパスで研究展示、オープンキャンパスで研究紹介をおこない、産学連携研究発表会で 4 件の研究紹介、地域貢献事業発表会で 13 件の研究紹介をおこないました。2017 年度は、オープンキャンパスで研究紹介、産学連携研究発表会で 5 件の研究紹介、地域貢献事業発表会で 3 件の研究紹介をおこないました。それ以外には、2016・2017 年度ともに 2007 年から続けております学生ボランティアのパソコン相談室のアドバイザーをおこないました。学外活動としましては、2016 年度に第 18 回 IEEE 広島支部学生シンポジウムにおいて「電気自動車の展望と課題～電気自動車は主役になれるのか～」パネルディスカッションの司会をおこない、2017 年度に自動車工学基礎講座で研究展示をおこないました。

2016 年, 2017 年	広島市立大学の地域貢献事業発表会
2016 年, 2017 年	広島市立大学の産学連携研究発表会
2016 年, 2017 年	パソコンなんでも相談室アドバイザー

氏名	佐藤 学
職位	教授
研究分野	統計科学
研究キーワード	因子分析、主成分分析、大気汚染、数学教育

数学教育は、情報科学を学ぶための基礎・基本であり、丁寧に行う必要がある。そのため、演習によるレポート添削、中間試験の実施による学生の実力の把握、再履修クラスの設置による成績不振者へのきめ細やかな対応を行った。さらに、推薦入試合格者に対する数学の入学前指導を行い、12 月上旬の合格発表後には勉強がとかく不十分になりがちな学生に対応した。さらに 2017 年度からは中期目標に基づいてリメディアル教育が始まった。それが円滑に開始できるように支援した。

高等学校の数学教員養成にも力を注いだ。教職課程委員会委員を務めた他、教育実習の訪問指導は、2016 年度、2017 年度では計 4 校に対して行った。また、毎年、高校の進路指導教員対象の大学説明会やオープンキャンパス(プレ、本、ライブ)さらに保護者対象説明会で教員を目指す者に関する相談に応じた。

【教育活動】

国際学部と芸術学部の学生が対象である全学共通科目では、「数学概論」を担当した。数学が不得手な学生が対象であり、1、2 年生向けの教養教育であることを意識して、講義を行った。

情報科学部の 1 年生が対象である共通基礎科目では、「線形代数学 I」と「線形代数学 I 演習」を担当した。この科目は数学のもっとも基礎的な内容であり、論理展開および計算演習を丁寧に行うように心がけた。「教科教育法(数学) I」と「教科教育法(数学) II」は、高校の数学教員免許を取得するための最重要科目である。教育実習を円滑に行うことができるように模擬授業を実施し指導案が適切に作成できるように心がけた。

大学院情報科学研究科の全専攻の学生が対象である専門科目では、「知能数理特論 A」を担当した。どの分野で修士論文を書く学生に対しても有益である知識と知恵を授けるように留意した。

2016, 2017 年度	数学概論
2016, 2017 年度	教科教育法(数学) I
2016, 2017 年度	知能数理特論 A
2016 年度	線形代数学 I
2016 年度	線形代数学 I 演習
2016 年度	教科教育法(数学) II
2016 年度	線形代数学 II

【研究活動】

高等学校の数学教育に関する調査研究を行った。これは、知能数理研究室・数理科学研究室に所属する教員の共同研究である。学習指導要領が改訂され、それに伴って新しい教科書が出回り始めた。しかし、確率分野における「確率」や統計分野における「データ」や「変量」のようにもっとも基本的な用語に食い違いがあることがわかった。食い

違いといっても、一部は誤り、一部は高校生に誤解を与える表現であるためにそれらを取りまとめて数学教育学会で発表した。

1. 田中輝雄、佐藤学、齋藤夏雄、関根光弘、廣門正行、岡山友昭、高等学校の統計分野における基本的な用語の定義の差異について、数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集、pp. 224-226、2017
2. 田中輝雄、佐藤学、齋藤夏雄、関根光弘、廣門正行、岡山友昭、高等学校の確率分野における基本的な用語の定義の差異について、数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集、pp. 146-148、2017

【社会活動】

統計関連学会の役員として活動した。日本統計学会では、世の中に定着しつつある「統計検定」をより普及させる方策を検討した。また、新しい学習指導要領で統計分野をどのように教えるかを検討し、関係する審議会に建議した。応用統計学会では、海外の制度に則り「試験統計家」(trial statistician)の認定制度の創設と普及に力を尽くした。幸い、この制度は 2018 年7月から開始された。

また、日本作業療法士協会が発行する学術雑誌『作業療法』の査読委員を務めて、統計科学的観点からの査読を行っている。

2015 年 4 月-2017 年 3 月	日本統計学会 代議員
2014 年 5 月-2016 年 5 月	応用統計学会 評議員

氏名	佐藤 康臣
職位	助教
研究分野	ソフトウェア、分散協調システム
研究キーワード	インターネット コンピューティング、情報推薦システム

教育活動・研究活動・社会活動の3点に通底する自己の活動テーマとしては、モノづくり、特にコンピュータプログラムの作成ということになる。教育においては、学生に自分が作成したコンピュータプログラムが動作したときの感動を味わってもらいたいと考えている。研究活動においては、理論のみならず、それをプログラムで実際に動かすことで、その効果を実証したいと考えている。社会活動においても、プログラミングやソフトウェア関連の活動を行ってきた。

現在、最も力を入れているのは教育活動だが、研究活動に比重を移す必要があると考えている。

【教育活動】

「企業活動とプロジェクトマネジメント」は広島修道大学と結んだ遠隔講義であり、外部講師による講義がメインである。私の役割としては、遠隔講義器材の操作、アンケート票（質問票）による学生と講師のやりとりの仲介などである。

「組込みソフトウェア実装特別演習」「製品企画プロジェクト特論演習」では、erlang 言語で作成されたブレーキシミュレータを題材に、erlang 言語によるプログラミングを指導している。

「情報科学基礎実験 β-2(C)」では、C言語により回帰分析プログラムを作成させることにより、回帰分析の原理を学習させている。

「システム工学実験」では、Java言語によりロボット操作のためのGUIを作成させることにより、GUIについて学習させている。

以上のように、教育活動においては、プログラミング教育がメインとなっている。

2016, 2017 年度	企業活動とプロジェクトマネジメント
2016, 2017 年度	製品企画プロジェクト特論演習
2016, 2017 年度	組込みソフトウェア実装特別演習
2016, 2017 年度	システム工学実験
2016 年度	情報科学基礎実験 C
2017 年度	情報科学基礎実験 β-2

【研究活動】

情報推薦システムに関する研究を行っており、2017年度は「印象を考慮した映画推薦システムの提案」「レビュー文の極性に基づくアイテム評価値予測手法の提案」を行った。

「印象を考慮した映画推薦システムの提案」については、推薦のベースとなるデータをインターネット上から収集するプログラム、および、それらのデータから推薦対象ユーザに映画の推薦を行うプログラムを作成しており、今後の研究・実験の基盤となりうるものである。

「レビュー文の極性に基づくアイテム評価値予測手法の提案」については、アイテムのレビューに含まれる単語の極性から評価値を予測するプログラム、および、レビューに含

まれる文の極性からアイテムの評価値を予測するプログラムを作成しており、これも今後の研究実験の基盤となりうるものである。

両研究とも对外発表には至っていないが、今後の実験データの収集により、对外発表が可能となると考えている。

【社会活動】

2009年、2010年、2013年に「高校生による情報科学自由研究」を担当した。高校生側からプログラミング関係のテーマの提案があり、それらを担当する形であった。今後も同様の提案があったときは対応していきたいと考えている。

また、2006年度から2008年度まで情報処理学会ソフトウェア工学会研究会運営委員に就任し、研究会の運営に携わった。これは数年おきの持ち回りになることが多く、今後も機会があれば就任しようと思っている。

氏名	式田 光宏
職位	教授
研究分野	MEMS (Micro-Electrical-Mechanical Systems)、ナノマイクロシステム
研究キーワード	MEMS デバイス、MEMS センサ、マイクロ医用応用、マイクロ加工

学際的な教育研究を推進することを目指し、学部教育においては、情報、工学、自然科学における基礎学問を講義した。また、卒論学生および博士前期課程学生に対しては、MEMS 工学を基盤技術とし、これに名古屋大学医学系研究科における動物実験、民間企業との共同研究を加え、分野を超えた教育研究を実施した。研究活動については、国際的な学術雑誌への論文投稿及び国際会議での発表を通じて、研究成果を国際社会に発信した。更に、IET、Elsevier の二つの学術洋雑誌にてエディタとして活動するとともに TPC として国際会議に加わった。また国内においては、電気学会、日本機械学会、日本生体医工学会、電子情報通信学会などでの学会活動を通じて社会に貢献した。

【教育活動】

カリキュラム改訂に伴う新たな担当科目(2017 年度後期開講科目:力学)を開講した。また、それ以外の担当科目に対しては、学生の理解度が向上するように講義内容を一部改善し、その結果、良好なアンケート結果を得た。研究室配属学生に対しては、卒業・修士・博士論文研究を通して、研究開発に対する方法論を指導した。具体的には、MEMS 工学を基盤技術とした実験研究を軸とし、これに名古屋大学医学系研究科における動物実験、民間企業との共同研究を織り交ぜ、分野を超えた教育研究を実施した。また博士前期課程学生に対しては、国際会議および国内学会などへの参加を通じて、物事を俯瞰的に捉えるよう教育した。

2016, 2017 年度	デジタル信号処理
2016, 2017 年度	制御工学
2016, 2017 年度	バイオメカニクス
2016, 2017 年度	医用マイクロ工学
2017 年度	力学

【研究活動】

MEMS 技術を基盤としそれを医用へと応用展開した。具体的には、(1)呼吸器系に対する生体情報極限計測技術、(2)マイクロニードルを応用した次世代経皮吸収剤技術、(3)MEMS 技術を用いたウェアラブル化、フレキシブル化センサシステムに関して、民間企業、名古屋大学医学系研究科とで共同で研究開発した。また得られた研究成果については、国際的学術論文誌:9編、国際会議論文:16 編、国内学会:14 件、講演:3件、著書:3件、解説記事:2件にて、国内外に向けて広く発信した。なお、呼吸器系に対する計測技術については、今後、企業との共同研究開発を推進し、実用化を目指す予定である。

1. Y. Hasegawa, H. Kawaoka, T. Yamada, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Respiration and heartbeat signal detection from airflow at airway in rat by catheter flow sensor with temperature compensation function, J. Micromech. Microeng., 27, 12, 2017.

2. N. Harada, Y. Hasegawa, R. Ono, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Characterization of basket-forceps-type micro-flow-sensor for breathing measurements in small airway, *Microsystem Technologies*, 23, 12, pp.5397-5406, 2017.
3. Y. Hasegawa, C. Okihara, T. Yamada, K. Komatsubara, K. Iwano, Y. Sakai, M. Shikida, Smooth-surfaced flexible wall shear stress sensor fabricating by film transfer technology, *Sensors and Actuators A*, 265, pp.86-93, 2017.
4. M. Shikida, P. Kim, S. Shibata, Vacuum cavity encapsulation for response time shortening in flexible thermal flow sensor, *Microsystem Technologies*, 23, 8, pp. 3547-3558, 2017.
5. H. Kawaoka, T. Yamada, M. Matsushima, T. Kawabe, Y. Hasegawa, M. Shikida, Heartbeat signal detection from analysis of airflow in rat airway under different depths of anesthesia conditions, *IEEE Sensors Journal*, 17, 14, pp.4369-4377, 2017.
6. M. Shikida, Y. Niimi, S. Shibata, Fabrication of flexible thermal MEMS device based on Cu on polyimide substrate and its flow sensor application, *Microsystem Technologies*, 23, 3, pp.677-685, 2017.
7. M. Shikida, T. Matsuyama, T. Yamada, M. Matsushima, T. Kawabe, Development of implantable catheter flow sensor into inside of bronchi for laboratory animal, *Microsystem Technologies*, 23, 1, pp.175-185, 2017.

他 40 件

【社会活動】

IET(Journal on Micro & Nano Technology)、Elsevier (Sensors and Actuators A)の二つの学術洋雑誌にてエディタとして活動するとともに、TPC (Technical Program Committee)として国際会議(IEEE Sensors)に加わった。また、国内学会においては、電気学会(センサ・マイクロマシンと応用システムシンポジウム 副幹事など)、日本機械学会(マイクロ・ナノ工学部門運営委員、学術誌(マイクロ・ナノ工学)アソシエイトエディタなど)、日本生体医工学会、電子情報通信学会などの学会活動を通じて社会に貢献した。

2013 年-	Technical Program Committee representing the Asia/Oceania region of the IEEE Sensors conference
2011 年-	Associate Editor for the Micromechanics Section of Sensors and Actuators A, Elsevier
2006 年-	Editorial Board Member on IEE Letters Journal on Micro & Nano Technology, IET

他 8 件(国内学会委員)

氏名	島 和之
職位	准教授
研究分野	ソフトウェア工学
研究キーワード	ソフトウェア信頼性、分散システム、P2P 型システム、関数型プログラミング

研究活動だけでなく、教育活動や社会活動にも取り組んでいる。研究分野であるソフトウェア工学やプログラミングの専門知識を、できるだけ活かしたいと考えている。例えば、学生の論理的思考を評価するため、近年注目されている関数型プログラミングの原理であるラムダ計算を教育に取り入れている。また、高校生による情報科学自由研究のため、Web サービスを利用し、雨量を自動的に記録するシステムを構築した。

【教育活動】

プログラミング I、プログラミング I 演習では、主に1年生を対象として C 言語による簡単なプログラミングを指導した。ソフトウェア工学概論では、ソフトウェア開発モデル、ソフトウェア開発における要求分析、設計、テストなどに関する基礎知識を教えた。オブジェクト指向技術では、Java 言語を用いたオブジェクト指向プログラミングおよび UML を用いたオブジェクト指向設計について説明した。組込みシステムのテストと非機能的品質評価特論では、組込みソフトウェアの機能性を評価するためのテストの方法や評価方法を教えた。また、安全性や信頼性などの概念や評価方法についても説明した。

2016, 2017 年度	プログラミング I、プログラミング I 演習、 ソフトウェア工学概論、オブジェクト指向技術、 組込みシステムのテストと非機能的品質評価特論

【研究活動】

下記の文献1において継続渡しスタイルのラムダ計算に基づく記法を提案し、同記法に基づくプログラミング言語を文献2において提案した。さらに、アクターモデルに基づく並行処理の実装について述べた。また、そこで実装したインタプリタの設計について文献3で述べた。

1. 継続渡しスタイルのラムダ計算に基づく破壊的風静的単一代入形式の関数型プログラミング言語, 第 23 回ソフトウェア工学の基礎ワークショップ (FOSE2016), 2016-12
2. 小島渚, 島和之: “継続渡しスタイルの関数型プログラミング言語におけるアクターモデルに基づく並行処理の実装”, 第 16 回情報科学フォーラム(FIT2017), 2017-9
3. 小島渚, 島和之: “継続渡しスタイルの関数型プログラミング言語のインタプリタによる並行処理の設計”, 電子情報通信学会研究報告(SS2018-42), 2018-1

【社会活動】

情報オリンピック日本委員会主催のレギオ講習会の講師を担当し、情報科学に興味を持つ高校生5名にプログラミングを指導した。COC+研究「瀬戸内の観光振興と外国人観光客のインバウンドを目指した地域活性化プロジェクト」のメンバーとして、観光情報の収集、編集、発信を担当した。高校生による情報科学自由研究のテーマ「沼田川の洪水予測～雨量と水位の関係～」について、広島県立総合技術高等学校の5名の高校生を指導した。

氏名	新 浩一
職位	講師
研究分野	超高層物理学、通信・ネットワーク工学
研究キーワード	電波伝搬、電磁波、無線通信システム、ネットワーク

2016 年度～2017 年度にかけては、【教育活動】、および【研究活動】を中心に活動した。【教育活動】では、学生に考えや疑問に思ふ内容に気を配ることを念頭に活動を行った。【研究活動】では、2016 年度以前より行っている研究を継続・発展させるとともに、オーロラの観測や、研究に機械学習の技術を取り入れる試みを行うなど、新たな課題・技術にも取り組んだ。【社会貢献】については、オープンキャンパスや大学見学の場で、取り組んでいる研究内容の外部公開を行った。

【教育活動】

担当するいずれの講義科目においても、学生からの質問に対し、丁寧に回答することを心がけた。特に「線形代数学Ⅰ演習」「情報工学実験Ⅰ」「情報工学実験Ⅱ」では、その講義形態から学生と直接質疑応答をおこなう機会が多く、学生がどのような点に疑問を持っているのかについてよく把握することができ、説明等に対してフィードバックすることができた。「確率統計」においては 2017 年度に教科書を変更し、より学生が理解しやすいと考えられる講義へと改善をおこなった。「情報工学実験Ⅰ,Ⅱ」においては 2017 年度にカリキュラムの変更を行い、学生が最新の技術に触れる機会の提供を行った。

2016, 2017 年度	確率統計
2016, 2017 年度	線形代数学Ⅰ演習
2016, 2017 年度	情報工学実験Ⅰ
2016, 2017 年度	情報工学実験Ⅱ
2016, 2017 年度	通信工学特論

【研究活動】

2016 年度～2017 年度については、主として、放送波および電磁波の伝搬に関する研究、電波の利活用に関する研究、災害対策のための研究の 3 つの分野について研究活動を行ってきた。研究成果は、外部公開した。災害対策のための研究では、カメラ等のセンサを用いたモニタリングのみならず、機械学習を用いた環境状態の判定に関する研究を進め、また、オーロラ画像の解析に関する研究も進めており、新たな分野に対する研究活動を行った。研究成果は、自身や学生によって国際会議等で公開を行った。

1. K. Shin, K. Kanekura, and M. Nishi, Estimation of Effective Earth Radius Factor under Overreach Interference Condition of Terrestrial TV Wave from Korea to Japan, Proc. of 2017 IEEE Conference on Antenna Measurements & Applications (2017 IEEE CAMA), pp. 36-39, 2017
2. T. Furukawa, K. Shin, and M. Nishi, Operational Evaluation of Self-powered Monitoring System for Landslide Disasters, Proc. of the 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA 2017), pp. 299-302, 2017

3. K. Yabata, Y. Matsuda, K. Shin, and M. Nishi, Proposal of Housing-site Human Detection System in 920 MHz Band, Proc. of 2017 IEEE 6th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2017), pp. 567-570, 2017
 4. 西 正博, 古川 達也, 新 浩一, 電源自立型の土砂災害監視カメラシステムの構築と評価, 情報処理学会論文誌, Vol. Vol.58, No. 3, pp. 736-744, 2017
 5. 西 正博, 新 浩一, [チュートリアル講演]地上デジタル放送における異常伝搬対策技術の検討, 電子情報通信学会 AP 研究会, 2017
 6. 百田 光希, 矢畑 皓平, 新 浩一, 西 正博, 実環境を考慮した車両周辺におけるテレビ放送波を用いたヒト検知システムの特性評価, 電子情報通信学会 AP 研究会, 2017
 7. K. Shin, K. Yabata, K. Momota, and M. Nishi, Evaluation of the Human Detection System using UHF band TV waves for the Car Security, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2016), pp. 222-223, 2016
 8. S. Taniyama, K. Shin and M. Nishi, Seasonal Characteristics of Overreach Interferences from Japan and Korea in Digital TV Waves, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2016), pp. 314-315, 2016
 9. Y. Wakasa, Y. Tanai, K. Shin and M. Nishi, Evaluation of Human Sitting-up Detection System using Electromagnetic Noise from Power-supply Line, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2016), pp. 922-923, 2016
 10. 菅原 正伍, Dennis van Dijk, 新 浩一, 西 正博, 山内 正敏, 北極圏におけるオーロラ観測と画像解析による分類, 地球電磁気・地球惑星圏学会 SGEPSS 講演会, 2016
- 他 23 件

【社会活動】

社会活動については、オープンキャンパスや高校生の大学見学を通して研究紹介を行い、主に高校生に対して情報科学技術を伝えるといった活動を行った。またこれらの活動を通して研究活動の外部への公開を行った。また学会研究会の委員を通じて社会活動を行った。

2017 年 11 月	広島市立大学地域貢献事業発表会 研究紹介
2017 年 8 月	広島市立大学オープンキャンパス 研究紹介
2016 年 11 月	祇園北高校生の大学訪問における研究室紹介
2016 年 8 月	広島市立大学オープンキャンパス 研究紹介
2016 年度 - 2017 年度	情報処理学会 MBL 研究会 特任委員

氏名	鈴木 祐介
職位	助教
研究分野	情報学基礎、知能情報学
研究キーワード	機械学習、グラフマイニング、データマイニング

2016 年度、2017 年度は「グラフ構造を持つウェブデータを対象としたマイニング手法の開発」という研究テーマで、研究を行った。また上記テーマを題材に研究室に所属する学部学生、大学院博士前期課程学生に対し研究指導補佐を行った。2016 年度、2017 年度は教育活動として、前期3科目、後期2科目を担当した。社会活動として、オープンキャンパスおよびライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度前期はプログラミング I 演習、基礎演習、情報基礎の3科目を担当した。後期は情報演習、知能工学実験 II の2科目を担当した。2017 年度は研究室に所属する学部4年生2名と大学院博士前期課程学生1名に対し、教育研究指導補佐を行った。

2016, 2017 年度	プログラミング I 演習
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	知能工学実験 II
2016, 2017 年度	情報演習

【研究活動】

「グラフ構造を持つウェブデータを対象としたマイニング手法の開発」という研究テーマでグラフマイニングアルゴリズムおよび機械学習アルゴリズムの研究、開発を行った。本研究テーマに関して、TTSP グラフパターン、BPO グラフパターン、補グラフパターンに対する機械学習可能性の考察を行い、学术论文の投稿および研究発表を行った。

1. T. Shoudai, Y. Yoshimura, Y. Suzuki, T. Uchida, T. Miyahara, Polynomial Time Learnability of Graph Pattern Languages Defined by Cographs, IEICE Transactions on Information and Systems, Special Section on Foundations of Computer Science, Vol. E101-D, No.03, pp. 582-592, 2018
2. T. Horibe, Y. Itokawa, T. Uchida, Y. Suzuki, T. Miyahara, Enumeration Algorithms for All Characteristic Paths and Subtrees from Structurally Compressed Tree-Structured Data, IAENG International Journal of Computer Science IAENG, Vol. 45/1, pp. 206-218, 2018
3. 宮原 哲浩, 鈴木 祐介, 正代 隆義, 内田 智之, 久保山哲二, Enumeration of Maximally Frequent Ordered Tree Patterns with Wildcards for Edge Labels, IPSJ Transactions on Mathematical Modeling and its Applications, Vol. 10(2), pp. 59-69, 2017
4. 正代 隆義, 愛甲 和秀, 鈴木 祐介, 松本哲志, 宮原 哲浩, 内田 智之, Polynomial Time Inductive Inference of Languages of Ordered Term Tree Patterns with Height-Constrained Variables from Positive Data, IEICE TRANSACTIONS on Fundamentals

of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol. E100-A, No.03, pp. 785–802, 2017

5. T. Uchida, S. Matsumoto, T. Shoudai, Y. Suzuki, T. Miyahara, Learning of Primitive Formal Systems Defining Labelled Ordered Tree Languages via Queries, Late Breaking Papers of the 27th International Conference on Inductive Logic Programming(ILP2017), 2018
6. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, T. Uchida, Acquisition of Multiple Block Preserving Outerplanar Graph Patterns by an Evolutionary Method for Graph Pattern Sets, 2017 IEEE 10th International Workshop on Computational Intelligence and Applications, 2017
7. Y. Yamagata, T. Miyahara, Y. Suzuki, T. Uchida, F. Tokuhara, T. Kuboyama, Acquisition of Multiple Graph Structured Patterns by an Evolutionary Method using Sets of TTSP Graph Patterns as Individuals, Advanced Applied Informatics (IIAI-AAI), 2017 6th IIAI International Congress on, 2017
8. F. Tokuhara, T. Miyahara, T. Kuboyama, Y. Suzuki, T. Uchida, A Context-Aware Fitness Function Based on Feature Selection for Evolutionary Learning of Characteristic Graph Patterns, 9th Asian Conference, ACIIDS 2017, (LNCS, volume 10191), 2017
9. T. Horibe, Y. Itokawa, T. Uchida, Y. Suzuki, T. Miyahara, Algorithm for Enumerating all Frequent Paths from Structurally Compressed Tree-Structured Data Graph Patterns, International MultiConference of Engineers and Computer Scientists, 2017

他2件

【社会活動】

2016 年度、2017 年度オープンキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。また 2016 年度、2017 年度ライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。

氏名	関根 光弘
職位	准教授
研究分野	位相幾何学
研究キーワード	結び目理論、力学系理論とその応用

初年度の数学教育および高等学校数学教職課程の学生に対する教育に重点を置いて活動しています。学内においては、2016 年度、2017 年度ともに学部教務委員会に属して任務を遂行しました。2016 年度前期に 1 ヶ月ほど病気休暇をいただいた為、講義、委員会等多数の皆様にご迷惑をお掛けしましたこととお詫びいたします。

【教育活動】

1 年次の「線形代数学」の代表教員として演習問題および解答例の作成、評価問題および評価基準の作成に携わった他、推薦入学生に対する入学前指導、「教科教育法(数学)II」の代表教員として高等学校数学教職課程の学生への指導を行いました。また、教員採用試験を受験する学生向けに勉強会を開催し、模擬授業の練習および専門教養に関わる指導を行いました。2016 年度および 2017 年度の卒業生からは、非常勤も含めて計 4 名が高等学校の教壇に立っています。

2016, 2017 年度	線形代数学 I
2016, 2017 年度	線形代数学 I 演習
2016, 2017 年度	幾何学概論
2016, 2017 年度	解析学 I 演習
2016, 2017 年度	教科教育法(数学)I
2016, 2017 年度	線形代数学 II
2016, 2017 年度	教科教育法(数学)II
2016, 2017 年度	知能数理特論 B

【研究活動】

外部のセミナーにおいて、平面曲線の位相不変量に関する研究成果を発表しました。

1. 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の統計分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集, pp. 224-226, 2017
2. 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の確率分野における基本的な用語の定義の差異について, 2017 年度数学教育学会春季年会予稿集, pp. 146-148, 2017
3. 関根光弘, 平面曲線の位相不変量について, 岐阜数理科学セミナー, 2017. 11

【社会活動】

特筆すべき社会活動はありません。前述の教育活動に関連した意味での社会活動に取り組みたいと思っています。

氏名	高井 博之
職位	助教
研究分野	無線通信方式、移動無線通信システム、通信・ネットワーク工学、ロボティクス
研究キーワード	無線通信方式・機器、ロボット工学、計算機網

2016年度・2017年度は、研究7割、教育2割、社会貢献1割を目途に活動した。

研究は、移動ロボット相互の指向性通信、光入射角センサを受信器に用いる空間分割通信システムの開発に取り組み、受信器回路の方式を確定できた。研究協力者からの定量評価不足の指摘を受け現在対応作業にあたっている。

2016年度・2017年度は情報科学部向けの基礎演習(1年生前期)を担当したが、知のトライアスロン(知トラ)事業との連携を上手く取ることができなかった。2018年度から始まる三学部合同基礎演習では知トラや大学の他の事業と密な連携が取れるような討論テーマを準備したい。

【教育活動】

2016年度・2017年度は情報科学部向けの基礎演習(1年生前期)を担当した。学生が主体的に取り組めるように、討論テーマを学生自身に調べさせる工夫をしたが積極的に討論に参加する学生と、ただ座っている学生に二分された。知のトライアスロン(知トラ)事業への積極参加が云われていたが、多くの学生が Web 検索に終始して踏み込んだテーマ討論には至らず、知トラへの投稿もごく少数に留まった。

2018年度から基礎演習は三学部合同となるので、学部間での差を生じさせず、学生が積極的に取り組み、知トラへも積極的に投稿できる討論テーマを時間をかけて準備したい。

2016, 2017 年度	基礎演習(1年生前期) 15コマ 情報基礎(補助)(1年生前期) 15コマ プログラミングⅡ(補助)(1年生後期) 15コマ システム工学実験Ⅰ(第3章)(3年生前期) 9コマ 外書講読演習Ⅰ(α -1)(3年生後期) 4コマ

【研究活動】

移動ロボット相互の指向性通信、光入射角センサを受信器に用いる空間分割通信システムの開発に取り組んでいる。光パルスの受信(概ね 100kbps)と光入射角の検出(概ね $\pm$ 数 $^{\circ}$)を両立できる光受信器回路を開発した。また、光受信器 8 基を円周状に並べた空間分割受信器を構成し、光入射角検出値に基づいて適宜光受信器を切り替えて通信を維持する、空間分割通信が当初の意図通りに機能することを確認した。しかしながら、光信号強度に対する受信パルスの誤り率や光入射角の検出誤差、ロボットの回転に対する受信器切り替えの影響など通信システムとしての定量的な評価が実験装置の不備等で未だできていない。

【社会活動】

高校生の夏休み自由研究「作ってチャレンジ! ロボットサッカー」を例年、福島准教授と協力して実施している。

また、コンピュータサイエンス塾向けの話題提供として、天文研究部と協力し、エアドーム型プラネタリウムの実演を企画したが日程が合わず実施できなかった。

2017年度後半に enPiT-pro ラボ講習「オープンソースソフトウェアを用いたサービスロボット向け実験用台車の開発実習」のテーマを提供、2018年度以降のラボ講習に向け、実習環境を準備中。

2016 年 7 月 - 2017 年 5 月	高校生の夏休み自由研究「作ってチャレンジ！ロボットサッカー」

氏名	高野 知佐
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学
研究キーワード	自律分散制御、ネットワーク性能評価、通信トラヒック分析、トラヒック制御、社会ネットワーク分析

教育活動・研究活動・社会活動の全てにおいて、主体的・積極的に行った。結果、研究活動としては、Network System Research Award of IEICE (March 3, 2018)(第 17 回ネットワークシステム研究賞受賞)を、社会活動としては、平成 29 年度電子情報通信学会活動功労賞 (Sep. 13, 2017)をいただくことができた。

【教育活動】

ネットワーク設計・演習：学生の質問にできるだけ対応し、全ての学生に授業内容を理解してもらうように務める。また、授業内容の範囲外の課題に対しても問題提起につながる、学生の興味を引くような授業を行いたい。

線形代数学演習：できるだけ学生の質問に対応し、全ての学生に内容を理解してもらうように務める。

情報工学実験 I、II：実験においては、全ての学生が楽しく今後の勉学につながるような内容を実施する。

データ構造とアルゴリズム I：授業中、学生が理解しているか適宜確認し、理解度が低い場合は繰り返し丁寧な説明を加える。

2016, 2017 年度	ネットワーク設計、ネットワーク設計演習、データ構造とアルゴリズム I、線形代数学 I 演習、情報基礎、e-ラーニング英語 IV、通信トラヒック特論、情報工学実験 I、情報工学実験 II

【研究活動】

これまでと同様に大学内および他大学との連携を図り、研究を進める。2017 度への科研費の獲得に向け申請書の提出を行う。具体的な研究内容は以下のとおり

- ・ネットワーク分析で得られた理論的システムを情報ネットワークの課題に利用するため、実用・運用モデルを検討する。
- ・DDoS 攻撃の影響を緩和する新しい方式の提案を行う。
- ・無線 LAN におけるチャネル競合問題を解決する、待ち行列理論や振動モデルを利用新しいモデルを提案する。

(2016 年～2017 年に発行された研究成果の一部)

(1) Ryoma Ando, Ryo Hamamoto, Hiroyasu Obata, Chisa Takano, and Kenji Ishida, “A Priority Control Method for Media Access Control Method SP-MAC to Improve Throughput of Bidirectional Flows,” IEICE Transactions on Information and Systems, vol.E100-D, no.5, pp.984-993, May 2017.

(2) Ryosuke Morita, Chisa Takano and Masaki Aida, “Autonomous clustering scheme for removing the effects of heterogeneous node degrees in ad hoc networks,” International Journal of Image Processing & Communication, vol. 21, no. 2, pp. 43-54, December 2016.

(3)Ryo Hamamoto, Chisa Takano, Hiroyasu Obata and Kenji Ishida, “Improvement of Throughput Prediction Scheme Considering Terminal Distribution in Multi-rate WLAN Considering both CSMA/CA and Frame Collision,” IEICE Transactions on Information and Systems, vol.E99-D, no.12, pp.2923-2933, December 2016.

(4)Ryo Hamamoto, Chisa Takano, Hiroyasu Obata, Masaki Aida, and Kenji Ishida, “Proposal for Designing Method of Radio Transmission Range to Improve both Power Saving and Communication Reachability based on Target Problem,” IEICE Transactions on Communications, vol. E99-B, no. 11, pp. 2271-2279, November 2016.

(5)濱本 亮, 小畑 博靖, 高野 知佐, 石田 賢治, “H-SP-MAC: 隠れ端末問題の解決を目指したメディアアクセス制御 SP-MAC の改良,” 電子情報通信学会論文誌 (B) (小特集号 ネットワークの設計・制御・分析・管理技術), vol.J99-B, no.10, pp.893-907, October 2016.

(6) Chisa Takano and Masaki Aida, “Fundamental framework for describing various node centralities using an oscillation model on social media networks,” IEEE ICC 2017, Paris, France, May 21-25, 2017.

(7)Chisa Takano and Masaki Aida, “Proposal of new index for describing node centralities based on oscillation dynamics on networks,” IEEE GLOBECOM 2016, Washington DC, USA, December 4-8, 2016.

他71件

【社会活動】

IEEE 国際会議および電子情報通信学会運営における補佐を積極的に行い、情報通信に関する研究活動の活発化に寄与した。平成 29 年度電子情報通信学会活動功労賞を頂くことができた。

2016 年 7 月 - 2017 年 5 月	電子情報通信学会英文論文誌 B 編集委員、電子情報通信学会英文論文誌査読委員、電子情報通信学会ネットワークシステム研究会専門委員、電子情報通信学会ネットワーク科学研究会専門委員、電子情報通信学会複雑コミュニケーションシステム研究会幹事、IEEE 国際会議 CANDAR workshop ASON PC Chair、IEEE 広島支部理事、広島市安全なまちづくり推進協議会委員および議長

氏名	鷹野 優
職位	教授
研究分野	計算生命科学、計算化学、生物物理学
研究キーワード	分子シミュレーション、量子化学、タンパク質

21 世紀の社会が抱える多種多様な課題を解決し人類の未来をきりひらくには、自然科学や情報科学などの広い分野の知識をもとに科学技術を発展させることが必要である。「生きる」のに不可欠な役割を果たすタンパク質のはたらきをコンピュータでシミュレーションして「見る」ことでタンパク質のはたらきに何が必要かを理解し、その仕組みを利用した物質設計につなげることを研究の目標としている。また、情報科学を自然科学へ応用できるよう、化学・物理学・生物学などの自然科学の教育を遂行し、「自ら調べ、考え、それを説明できる、能動的な人材の育成」にはげみたい。

【教育活動】

2016、2017 年度は、化学・物理学・生物学などの自然科学の授業を担当した。授業に使うスライドは穴埋め形式にして授業に集中するようにした。さらにスライドを用いる場合は、すぐに結果を見せるのではなく、思考過程が追えるように段階的に結果にたどり着くように工夫した。授業後には宿題を出し、次の授業で詳細な解説を行うことで学習内容の定着を図れるよう工夫した。また、授業資料や演習問題の詳細な解説を web 上に掲載することで、自主的に事後学習ができるようにした。その結果、平均以上の評価を得ることができた。

2016, 2017 年度	基礎化学
2016, 2017 年度	量子・統計力学
2016, 2017 年度	バイオ情報学特論
2016, 2017 年度	バイオインフォマティクス

【研究活動】

2016、2017 年度はコンピュータシミュレーションを用いて、生命現象を担っているタンパク質の機能発現機構の解明を行なった。また、それに必要な方法の開発をすすめた。特に、金属タンパク質の構造と機能の関係や抗体の構造の安定性について明らかにした。これらの成果について、著書を 1 冊、論文を 14 報出版し(うち 3 報の論文に関しては表紙として採択)、国際学会発表を 7 件、国内学会発表を 55 件(うち招待講演 4 件)行なった。また、これらの成果発表により、2016、2017 年度の大学の教員表彰を受けた。

1. Takehiko Tosha, Yusuke Kanematsu, Yu Takano, Minoru Kubo et al., Capturing an initial intermediate during enzymatic reaction of P450_{nor} using time-resolved XFEL crystallography and caged-substrate, Nature Communications, Vol. 8, 1585, 2017
2. Toru Saito, Yu Takano, rPM6 parameters for manganese and application to transition state search for oxidation reactions of cyclohexene by manganese(IV)-oxo species, Chemistry Letters, Vol. 46, pp. 1567-1569, 2017
3. Jiro Kohda, Yasuhisa Nakano, Akimitsu Kugimiya, Yu Takano, Takuo Yano, Recycling of biodiesel fuel wastewater for use as a liquid fertilizer for hydroponics, Journal of Material Cycles and Waste Management, Vol. 19, pp. 999-1007, 2017

4. Yusuke Kanematsu, Masanori Tachikawa, Yu Takano, Inverse Ubbelohde effect in the short hydrogen bond of Photosystem II: Relation between H/D isotope effect and symmetry in potential energy profile, Journal of Computational Chemistry, Vol. 37, pp. 2140-2145, 2016
5. (特別・招待講演)鷹野優, コンピュータシミュレーションでタンパク質のはたらきを理解する, 日本薬学会東海支部特別講演会, 2017
6. (特別・招待講演)鷹野優, コンピュータを使って金属タンパク質の活性サイトを観察・分類し、しくみを理解する, 大阪大学大学院理学研究科化学専攻・高分子学専攻の平成 29 年度第 2 回化学・高分子コロキウム講演会, 2017
7. 広島市立大学平成 29 年度教員表彰, 広島市立大学, 2018
8. 広島市立大学平成 28 年度教員表彰, 広島市立大学, 2017

他 71 件

【社会活動】

2016、2017 年度は、研究のキーワードであるタンパク質、分子シミュレーションに関してセミナーや出張講義、アウトリーチ活動を行なった。サイエンスアゴラでは、日本蛋白質構造データバンク(PDBj)とともに、タンパク質を「見る」「さわる」「つくる」「使う」といった体験を通して、タンパク質の「かたち」が生命と健康にとって重要であることを実感してもらう展示を行なった。計算生命科学の基礎では、分子シミュレーション法に関して遠隔講義を行なった。また、広島県科学セミナーの審査員やグローバルサイエンスキャンパス (GSC) ジャンプステージの講師として高校生の理科教育・情報教育に協力した。

2018 年 1 月	広島県科学セミナー
2017 年 11 月	サイエンスアゴラ, JST
2017 年 10 月-2018 年 1 月	計算生命科学の基礎Ⅳ, 神戸大学
2017 年 7 月	大阪大学蛋白質研究所セミナー「膜イオン輸送の学際研究: 計算科学から医学まで」
2016 年 11 月	サイエンスアゴラ, JST
2016 年 10 月-2017 年 1 月	計算生命科学の基礎Ⅲ, 神戸大学
2016 年 4 月-2016 年 11 月	グローバルサイエンスキャンパス (GSC)ジャンプステージ, 広島大学

他 3 件

氏名	高橋 健一
職位	教授
研究分野	知能情報学
研究キーワード	機械学習、知識獲得、eラーニング、エージェント

人工知能分野に係る教育・研究を行っている。教育では、情報の基礎であるネットワークや人工知能の基礎に関する講義を担当している。2017年度は新たに国際・芸術学部向けの「情報科学概論」を担当した。研究では、上記のキーワードに関連する研究を進めており、研究成果を国際会議にて発表した。大学院進学を所属の卒研生に勧めているが、就職状況が良く、大学院生が少なくなっている。大学運営では、2017年度は、知能工学専攻長、企画・広報委員として、大学運営に協力した。

【教育活動】

学部では、知能工学科2年次向けの「情報ネットワーク」、3年次向けの「人工知能」、大学院では、情報工学専攻および知能工学専攻大学院生向けに「情報圧縮特論」を担当している。2017年度から国際学部、芸術学部向けの「情報科学概論」を岩根典之准教授と一緒に担当した。授業では、学生の理解が深まるよう、また予習・復習を促すために、演習を併用した講義を行っている。新たに担当した「情報科学概論」では、情報が専門でない学生も知っておくべき内容を取り上げて演習・講義している。

2016, 2017 年度	人工知能
2016, 2017 年度	情報ネットワーク
2016, 2017 年度	情報圧縮特論
2017 年度	情報科学概論

【研究活動】

研究では、「学習支援のための web 型演習システムの研究」、「ゲームプレイヤーエージェントの機械学習」、「エージェントの行動規則獲得のための遺伝的手法の研究」に関する研究・実験を継続し、性能の改善を図る。これまでに、これらの研究に関して性能を改善してきた。これらの成果は、ジャーナルや国際会議などで発表してきた。2017年度では、遺伝的手法の研究およびeラーニングの研究において国際会議で発表した。また、大学院の学生にはゼミや学外の発表を通して、研究遂行、研究発表、論文作成の能力が向上することを期待している。しかしながら、大学院に進学する学生が少なくなり、大学院進学を勧めているが、就職状況が良く、早い時期に内定をもらっている。

1. Takashi Ito, Takahashi Kenichi, and Michimasa Inaba, Obtaining the Number of Tree in the Evolution for Genetic Programming with Multiple Trees, The 5th IIAE International Conference on Intelligent Systems and Image Processing 2017 (ICISIP2017), pp. 425-432, 2017
2. Takashi Ito, Shuhei Kotake, Takahashi Kenichi, and Michimasa Inaba, Detecting Concentration of Students Using Kinect in E-learning, The 5th IIAE International Conference on Intelligent Systems and Image Processing 2017 (ICISIP2017), pp. 451-456, 2017

【社会活動】

社会活動については機会があれば引き受けるつもりでいる。

氏名	高橋 賢
職位	准教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、計測工学
研究キーワード	長距離無線通信、コグニティブ無線、レーダー、衛星測位、無線信号検出

私の得意とする分野は、移動無線通信、レーダー、デジタルテレビジョン、GPS (Global Positioning System) など、電波や電気信号を用いた情報通信の要素技術(アンテナ、電波伝搬、信号処理)である。これらを核として、教育活動、研究活動、および社会活動を行ないたいと考えてきた。

【教育活動】

大学1年前期科目から大学3年後期科目まで、ほとんどすべてのセメスタを担当してきた。特に、解析学I演習に関しては、専門性とも異なり、得意分野でもないが、これまで10年余りに渡り担当することになった。担当教員間の強い思い入れが錯交する中で、多くの業務をこなすことになり、疲弊した。特定教員への負担の集中は皆で考えるべき課題である。

2016, 2017 年度	解析学I演習
2016, 2017 年度	情報基礎数学
2016, 2017 年度	通信方式
2016, 2017 年度	情報理論
2016, 2017 年度	集積回路・集積化デバイス
2016, 2017 年度	情報通信システム特論

【研究活動】

デジタルテレビジョン放送信号にて伝送される緊急情報の低消費電力受信方法、衛星測位の高精度化方法、低消費電力遠距離(LPWA: low power wide area)移動無線通信の電波干渉制御方法の3テーマを軸に研究を進めてきた。緊急情報の受信方法に関してはジャーナル論文2本、招待講演1件、国際学会2件公表した。LPWA電波干渉制御に関しては、総務省中国総合通信局が主催する講演会において講演とデモンストレーションにより、研究成果を社会に還元した。

1. 高橋 賢, ISDB-T 緊急警報放送における自動起動信号伝送路の非対称無記憶2元通信路近似, 映像情報メディア学会誌, Vol. 72, No. 1, pp. J47-J50, 2018
2. Satoshi Takahashi, Majority determination and subcarrier diversity of detecting broadcaster advised emergency wake-up signal for ISDB-T television receivers, The 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2017), pp. 542-545, 2017
3. Satoshi Takahashi, Detecting broadcaster transmitted earthquake early warning signal with AC Parity for ISDB-T digital television receivers, IEICE Information and Communication Technology Forum (IEICE ICTF 2016), pp. 1-4, 2016

4. Satoshi Takahashi, Detection of EEW wake-Up signal with AC parity for ISDB-T television receivers, IEICE Communication Express (ComEX), Vol. 5, No. 7, pp. 203-208, 2016
5. 高橋 賢, 非対称無記憶 2 元通信路近似を用いた ISDB-T 自動起動信号に対する間欠受信特性解析, 映像情報メディア学会技術報告, BCT2018-42, 2018
6. 高橋 賢, 田中 公一, 藤原 真, 八方 直久, 特性関数法によるレイリーフェージング環境での捕捉効果の解析, 映像情報メディア学会技術報告, BCT2018-23, 2018
7. (特別・招待講演) 高橋 賢, [招待講演] ISDB-T 緊急警報放送の自動起動信号判定方法, 電子情報通信学会技術研究報告, RCS2017-258, 2017
8. 高橋 賢, 送信電力制御シェードライトの高所設置による遠近問題の軽減, 電子情報通信学会技術研究報告, CS2016-46, 2016
9. 電子情報通信学会通信ソサイエティ活動功労賞 (通信方式研究会幹事に対する貢献), 電子情報通信学会, 2016
10. 電子情報通信学会通信ソサイエティ活動功労賞 (論文査読に対する貢献), 電子情報通信学会, 2016

他 12 件

【社会活動】

小学生を対象にした広島市立大学コンピュータサイエンス塾の講師、また企業や省庁などを対象にしたセミナー、さらには専門性を求められる国際学会の TPC (Technical Program Committee)、学会幹事、論文編集委員、論文査読者などを通して社会に貢献した。

2018 年 3 月	LPWA の基礎と応用, ワイヤレス IoT セミナー ～新技術 LPWA が拓く可能性～
2017 年 4 月-2018 年 3 月	ワイドバンドシステム特集号論文編集委員
2017 年 1 月-2017 年 12 月	Technical Program Committee (TPC) member of International Conference on Communications (ICC 2017)
2017 年 1 月-2017 年 12 月	Technical Program Committee (TPC) member of Globecom 2017
2016 年 1 月-2016 年 12 月	Program Committee (PC) member of International Japan-Egypt Conference on Electronics, Communications and Computers (JEC-ECC 2016)
2014 年 5 月-2016 年 5 月	電子情報通信学会 通信方式研究会 幹事
2007 年 10 月-	宇宙航空研究開発機構 (JAXA) 宇宙工学委員会 研究班
2006 年 5 月-	電子情報通信学会 ワイドバンドシステム研究会 研究専門委員

他 12 件

氏名	高橋 雄三
職位	助教
研究分野	人間工学、ヒューマンインターフェース・インタラクション、認知科学、実験心理学、デザイン学、社会システム工学・安全システム、衛生学・公衆衛生学、経営学、人類働態学
研究キーワード	人間工学、生理心理工学、産業衛生学、産業保健人間工学

教育・研究機関の構成員として、教育活動と研究活動のバランスを重視した活動を展開している。特に教育と研究の橋渡し段階における学生の活動を重視し、学部生の積極的な研究大会などでの研究発表を奨励する指導スタイルを確立している。また研究分野も情報科学領域に留まることなく、公立大学のミッションである地域貢献に繋がる安心・安全・協働に関わる研究テーマを積極的に展開し、地域の暮らしの安心・安全の確保、地域社会の活性化に繋がる研究の展開を心懸けている。また自分のキャリアを生かし、昨今の学生気質の変化に対応した個別ケースの対応にも注力している。可能な限り、学生ファーストの視点を進取した行動を心懸けている。

【教育活動】

1年生:基礎演習、2年生:情報科学基礎実験 β-2、3年生:システム工学実験Ⅰ、外書講読Ⅰ、4年生:卒業研究Ⅰ・Ⅱの指導を行っている。2017年度は研究指導学部4年生が人類働態学会西日本地方会第42回大会にて「若手優秀発表賞」を受賞するとともに「平成29年度広島市立大学情報科学部最優秀卒業論文賞」も受賞した。また全学年において講義を担当することができ、学生の成長に合わせた教育機会を持つことができた（「公立大学法人広島市立大学 教員表彰(教育)、公立大学法人広島市立大学(2017)」）。また2018年度開始の「3学部合同基礎演習」の「3学部合同基礎演習ワーキンググループ」メンバーとして当該講義の立ち上げ・実施に取り組んでいる。

2016, 2017 年度	システム工学実験Ⅰ
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 C (2017 年度:情報科学基礎実験 β-2)
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	外書講読Ⅰ

【研究活動】

モニタリング・エラー抑制インターフェースと眼と手の協応関係に関する研究(JSPS 科研費支援テーマ)を中心に、サーバント・リーダーシップと協調的フォロワーシップに関する研究、予見音を用いた生活道路の安全対策研究、協調行動の誘発条件に関する研究、随意筋活動の簡易測定手法の開発に関する研究など、人間工学を中心とした領域の研究を広範囲で実施している。その成果は学会発表を重ねることで深化させることを心がけ、2018年度以降順次、査読付国際会議録・ジャーナル論文への昇華を進めている。さらに研究成果は学生への研究教育にフィードバックするとともに講演活動やシンポジウム開催など様々な機会を通じて公表している。

1. 早田桃子, 高橋雄三, 眼と手の協応特性からみた操作方法の習得特性, 人類働態学会西日本地方会第42回大会, 2017(若手優秀発表賞)

2. 原田紗希, 高橋雄三, 山口光明, 状況のモニタリング精度と発揮されるリーダーシップ・タイプとの間の関係, 第 46 回人類働態学会東日本地方会, 2017
3. 早田桃子, 高橋雄三, 操作の学習方法の違いが課題遂行中の眼と手の協応特性に及ぼす影響, 日本経営工学会 2017 年 秋季大会, 2017
4. 高橋雄三, 視線の動きとマウスポインタの動きの間の協応関係解析アルゴリズムの検討, 第 52 回人類働態学会全国大会, 2017
5. 高橋雄三, 課題に対する回答の確信度が随意筋収縮前後の表面筋電位変化に及ぼす影響, 日本人間工学会第 58 回大会, 2017
6. 服部知輝, 高橋雄三, 共有画面を通じて協調操作を促進するリーダーシップ行動の表出と認知, 人類働態学会西日本地方会第 41 回大会, 2016
7. 門田梨恵, 高橋雄三, 行為のモニタリング精度が眼と手の協応動作に及ぼす影響, 第 45 回人類働態学会東日本地方会, 2016
8. 服部知輝, 高橋雄三, ネット上で行われる協調作業時に表出されるリーダーシップ行動の認知プロセス, 日本人間工学会関東支部第 46 回大会, 2016
9. 門田梨恵, 中池育, 高橋雄三, 操作手順の学習方法がモニタリング・エラーの発現機序に及ぼす影響, 日本経営工学会 2016 年 秋季大会, 2016
10. 高橋雄三, 錦織さなえ, システムからの操作要求に対応する 2 者間で発現する協調行動の定量的評価, 日本人間工学会第 57 回大会, 2016

他、国際会議録1件、国内学会発表1件、表彰1件

【社会活動】

自身の研究フィールドの COE である国際人間工学連合の Affiliated Society である人類働態学会の理事や公益社団法人日本経営工学会の編集員、国際会議のプログラム委員など、学術団体での活動に力を入れてきた。また、人工知能と人間の共生に関するシンポジウムの企画・運営や企業との共同研究などに結びつく講演活動などの活動も展開している。今後は保健・衛生・公衆衛生領域の教育活動にも活動範囲を広げていく計画である。

2018 年 1 月-2018 年 9 月	Program Committee Member, 14th International Conference on Industrial Management
2017 年 11 月	研究紹介(マツダ株式会社生産管理・物流部, 公益社団法人日本経営工学会中国四国支部)
2017 年 11 月	「くらしの中の共生」第 14 回シンポジウム司会者
2017 年 7 月-2019 年 5 月	日本経営工学会論文誌第 34 期編集委員
2016 年 12 月	「くらしの中の共生」第 13 回シンポジウム話題提供
2016 年 6 月-2018 年 6 月	人類働態学会第 24 期理事 (研究推進担当)

氏名	高濱 徹行
職位	教授
研究分野	計算知能、進化的計算、最適化
研究キーワード	ナチュラル・コンピューティング、進化的アルゴリズム、最適化アルゴリズム

進化的アルゴリズムを代表とする、複数の探索点を用いて最適解を探索する集団的最適化アルゴリズムの設計・改良と最適化アルゴリズムを応用した機械学習を中心的なテーマとして研究・教育活動を行っている。研究活動では、科研費のテーマである「高次元多峰性問題における山谷構造と分布タイプ推定を利用した効率的な集団的最適化」の研究を進めている。教育活動では、大学院生向けに集団的最適化手法を用いたファジィ推論ルールの教師あり学習手法の教育を、卒研生向けに計算知能分野の基礎知識の教育を、学部生向けにニューラルネットワーク、概念学習、ベイズ学習など基本的な機械学習手法の教育を行っている。

【教育活動】

大学院生向けの機械学習特論では、人間が得意とする曖昧な概念を体系的に取り扱うためにファジィ集合・ファジィ推論などを、集団的最適化手法として遺伝的アルゴリズム・差分進化などを、機械学習手法としてファジィ推論ルールの教師あり学習手法を教育している。3年生向けの機械学習では、基本的な機械学習手法として、ニューラルネットワーク・概念学習・決定木の学習・ベイズ学習・競合学習などを教育している。2年生向けの数理計画法では、実問題の定式化からはじめ、線形計画問題・ネットワーク計画問題とその解法を中心に、非線形計画問題への導入教育も行っている。1年生向けのデータ構造とアルゴリズム I では、プログラミングのために必須となるアルゴリズムとデータ構造に関する教育を行っている。

2016, 2017 年度	機械学習特論
2016, 2017 年度	機械学習
2016, 2017 年度	数理計画法
2016, 2017 年度	データ構造とアルゴリズム I
2016, 2017 年度	情報科学序説

【研究活動】

最適解の探索が非常に困難である高次元多峰性問題を効率的かつ安定的に解くための研究を進めており、主な研究成果は次の通りである。①山点・谷点に対するアルゴリズムパラメータ(AP)の選択法と、新しい探索点を生成する際にアーカイブを使用する確率を適応的に調整する方法を提案した。②目的関数値の良さに従って探索点を上位・中位・下位のようなグループに分割するというグループ化法と、各グループで独立に AP を適応的に調整する方法を提案した。③自然界において災害を生き残るために極端な個体(extreme individual)の重要性が知られている。これを考慮したグループ化として、極端な個体である最良探索点群と探索点群については特定の AP を使用し、その他の個体群は AP を適応的に調整する方法を提案した。④変数間依存性の高い最適化問題は、探索点の分布が偏った形状を持ち、特定の方向へ探索を進める必要のある難しい問題である。

このような問題に対して、斜交座標系を構成し、斜交座標上で子個体を生成する交叉方法を提案した。

1. T.Nishio, J.Kushida, A.Hara, T.Takahama, Particle swarm optimisation with dynamic search strategies based on rank correlation, International Journal of Computational Intelligence Studies, Vol. 6, No. 4, pp. 311-332, 2018
2. T.Takahama, S.Sakai, J. Kuashida and A. Hara, Particle Swarm Optimization with Mutation Operations Controlled by Landscape Modality Estimation using Hill-Valley Detection, Artificial Life and Robotics, Vol. 21, No. 4, pp. 423-433, 2016
3. 串田淳一, 原 章, 高濱徹行, 進化的アルゴリズムにおける探索点の順位相関を利用した関数形状の推定, 進化計算学会論文誌, Vol. 7, No. 2, pp. 32-45, 2016
4. Setsuko Sakai and Tetsuyuki Takahama, "A Study on Selecting an Oblique Coordinate System for Rotation-Invariant Blend Crossover in a Real-Coded Genetic Algorithm", in Recent Studies in Economic Sciences: Information Systems, Project Managements, Economics, OR and Mathematics, Kyushu University Press, 2018
5. Setsuko Sakai and Tetsuyuki Takahama, "A Comparative Study on Grouping Methods for an Adaptive Differential Evolution", in Challenging Researches in Economic Sciences: Legal Informatics, Environmental Economics, Economics, OR and Mathematics, Kyushu University Press, 2017
6. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, Particle Swarm Optimization with the Velocity Updating Rule According to an Oblique Coordinate System, Proc. of the 2nd International Symposium on Swarm Behavior and Bio-Inspired Robotics (SWARM2017), pp. 70-77, 2017
7. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, An Adaptive Differential Evolution with Exploitation and Exploration by Extreme Individuals, Proc. of SICE Annual Conference 2017 (SICE2017), pp. 1147-1152, 2017
8. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, An Adaptive Differential Evolution with Learning Parameters According to Groups Defined by the Rank of Objective Values, Proc. of the Eighth International Conference on Swarm Intelligence (ICSI2017), pp. 411-419, 2017
9. Tetsuyuki Takahama and Setsuko Sakai, An Adaptive Differential Evolution with Adaptive Archive Selection and Hill-Valley Detection, Proc. of 2016 IEEE Congress on Evolutionary Computation (CEC2016), pp. 48-55, 2016

その他、国際会議2件、数理解析研究所講究録2件、研究会報告2件

【社会活動】

2017 年 9 月に開催された SICE Annual Conference 2017 で co-chair を担当した。

氏名	竹澤 寿幸
職位	教授
研究分野	知覚情報処理・知能ロボティクス、知能情報学
研究キーワード	音声言語情報処理、自然言語処理

知識基盤社会におけるさまざまな形態のコミュニケーションに対応する知識情報処理において極めて重要な役割を担う言語と音声に関する情報処理技術の基礎から応用までの幅広い教育・研究活動を行う。実際に動いて役に立つシステムを構築したり、大規模なコーパスを用いた現実の課題に取り組ませたりすることで、社会の役に立つ人材に育つよう教育を行う。特に優秀な学生に対しては言語と音声を組み合わせたフロンティア領域を開拓するよう研究指導を実施する。研究成果は論文や学会・国際会議等で広く発表し、企業との共同研究ないし受託研究等の産学連携に結び付け、地域や社会に貢献する。

【教育活動】

大学院博士前期課程の科目「音声言語情報処理特論」で、音声認識・対話・翻訳技術を講義し、実際に言語モデルを構築して、音声認識システムを動作させる課題を課している。2017年度から博士後期課程の学生の主指導教員を務めている。

学部では知能工学科の科目「数値解析」と「自然言語処理」を担当している。「自然言語処理」では、形態素解析、構文解析、意味解析等の基礎技術を講義し、後半では音声認識と機械翻訳の話題を扱っている。2017年度から「地域課題演習」を担当し、しまなみ海道をサイクリングして、GPS データを集めるテーマを実施している。

2016, 2017 年度	音声言語情報処理特論
2016, 2017 年度	自然言語処理
2016, 2017 年度	数値解析
2017 年度	情報科学講究 V
2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

平成 25 年度(2013 年度)文部科学省の事業である COI STREAM の下で科学技術振興機構(JST)が実施する COI プログラムに採択された「精神的価値が成長する感性イノベーション拠点」に参画し、音声対話や表情からの感性情報の獲得と利用に関する研究を推進している。また、COC+事業の一つとして実施している観光関連データベースの構築を推進するとともに、観光情報学の研究を実施する。その他、企業との共同研究や受託研究も進める。

1. 河原達也編著、秋田祐哉、伊藤彰則、伊藤克亘、小林哲則、篠崎隆宏、清水徹、竹澤寿幸、武田一哉、峯松信明、三村正人、山本幹雄、李晃伸, IT Text 音声認識システム 改訂 2 版, オーム社, 2016
2. 酒井達弘、田村慶一、北上始、竹澤寿幸, 最小外接矩形とセルの再帰分割を用いたセルベースの DBSCAN の高速化, 電子情報通信学会和文論文誌 D「データ工学と情報マネジメント特集」, Vol. J101-D, No. 4, 2018

3. 植松敏美、難波英嗣、田村慶一、石野亜耶、竹澤寿幸、広島地域に貢献する人材育成のための観光関連データベースの構築と活用の検討、観光情報学会 第 16 回研究発表会, 2017
4. Joji Uemura, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Suppressed Negative-Emotion-Detecting Method by using Transitions in Facial Expressions and Acoustic Features, The Second Workshop on Processing Emotions, Decisions and Opinions (EDO 2017), 2017
5. 飯沼俊平、難波英嗣、竹澤寿幸、場所と旅行者の行動に焦点を当てた複数旅行ブログエントリの自動要約、観光と情報(観光情報学会論文誌), Vol. 13, No. 1, pp. 53-68, 2017
6. 藤井一輝、難波英嗣、竹澤寿幸、石野亜耶、奥村学、倉田陽平、旅行者の行動分析のための旅行ブログエントリの属性推定、観光と情報(観光情報学会論文誌), Vol. 13, No. 1, pp. 83-96, 2017
7. 福田悟志、難波英嗣、竹澤寿幸、要素技術とその効果を用いた学術論文の自動分類、日本図書館情報学会誌, Vol. 62, No. 3, pp. 145-162, 2016
8. EDO2017 Best Paper Award, The Seventh Workshop on Processing Emotions, Decisions and Opinions (EDO 2017), 2017
9. 日本図書館情報学会論文賞, 日本図書館情報学会, 2017

他 37 件

【社会活動】

専門性を生かした学術活動のみならず、地域から依頼された社会活動を引き受け、産学連携、地域貢献を推進する。広島市大塚公民館から依頼があり、2017 年 6 月に公開講座を実施し、小学生を含む幅広い世代の人に音声対話ロボットの仕組みの話をするとともに、ロボットとの対話を体験していただくことができた。

2018 年 1 月-2019 年 3 月	広島リサーチコンプレックス推進協議会 幹事
2017 年 6 月	大学との連携講座「会話ロボット“ペッパーくん”と話してみよう」, 広島市大塚公民館
2015 年 4 月-2019 年 3 月	公益財団法人ひろしま産業振興機構経営委員会委員
2014 年 10 月-2018 年 9 月	広島市立図書館協議会委員(副委員長)
2014 年 9 月-2018 年 8 月	広島産学公連携 MICE 推進協議会委員
2013 年 8 月-2018 年 6 月	公益財団法人広島市みどり生きもの協会評議員

他 30 件

氏名	田中 公一
職位	教授
研究分野	素粒子・原子核・宇宙線・宇宙物理、電子・電気材料工学
研究キーワード	半導体光物性、量子井戸、シリコン微粒子、宇宙線

教育研究指導において、卒業研究の過程で得られたデータの測定・解析などの結果を研究室に所属する学生が学会発表できた。大学運営では、情報科学部企画・広報委員会、臨床情報医工学プログラム実行委員会に所属する情報工学専攻の委員、2017年度入学者Cクラスチューターとして職務を遂行した。

【教育活動】

担当する授業では、教科書だけでなくパワーポイントで作成した資料を用いて、解り易くなるように心がけた。このとき、シラバスに述べた授業計画を基本に、授業アンケートを反映した授業の改善に努めた。講義後には復習のための資料や次回の予習できるような例題などをe-learningに掲載した。授業中は演習問題を用いて理解度の高い授業になるように工夫した。研究室に所属する学生の教育研究指導に努め、卒業研究の過程で得られたデータの測定・解析などの結果をIEEE広島支部学生シンポジウムの第18回(2016)、第19回(2017)で発表を行わせた。

2016, 2017 年度	物理学概論
2016, 2017 年度	地球環境論
2016, 2017 年度	情報物性特論 I
2016, 2017 年度	物理学
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 α

【研究活動】

量子井戸、シリコン微粒子の研究において、純度の高いシリコン(Si)と二酸化ケイ素(SiO_2)の共スパッタリングで、Siの割合やアルゴン気圧を変えてシリコンのナノ構造物質を作製して膜厚を測定した。光スペクトルを測定し、波長分布の変化(色の変化)とナノ構造の大きさの相関を得た。2年間で国際会議2編の発表を行い、学術論文1編を発表した。また、参加した宇宙線の国際共同研究では5編の学術論文が発行された。また、執筆中の教科書『理工系学生のための 基礎物理学』を完成させ、培風館から出版した。

1. K. Tanaka, H. Imatoku, M. Fujiwara, N. Happo and S. Takahashi, A Modeling of Eigen-States in $\text{In}_{0.53}\text{Ga}_{0.47}\text{As}/\text{In}_{0.52}\text{Al}_{0.48}\text{As}$ Multi-Quantum Wells Structure Using Photocurrent Spectroscopy, Proceedings of 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp. 681-684, 2017
2. K.P. Arunbabu, S. Ahmad, A. Chandra, S.R. Dugad, S.K. Gupta, B. Hariharan, Y. Hayashi, P. Jagadeesan, A. Jain, V.B. Jhansi, S. Kawakami, H. Kojima, P.K. Mohanty, S.D. Morris, P.K. Nayak, A. Oshima, B.S. Rao, L.V. Reddy, S. Shibata, K. Tanaka, M. Zuberi, Dependence of the muon intensity on the atmospheric temperature measured by the GRAPES-3 experiment, Astroparticle Physics, Vol. 94, pp. 22-28, 2017

3. K. Tanaka, M. Fujiwara, N. Happo and S. Takahashi, Minibands of Eigen-State Energies of $\text{In}_{0.53}\text{Ga}_{0.47}\text{As}$ Multi-Quantum Wells Lattice-Matched to InP, Proceedings of 17th International Conference on Numerical Simulation of Optoelectronic Devices, pp. 61-62, 2017
4. Koichi Tanaka and Taichi Yoshida, Characterization of Photoluminescence and Surface Chemistry after Annealing about $\text{Si}:\text{SiO}_2$ Films Fabricated by Radio Frequency Sputtering, Key Engineering Materials, Vol. 698, pp. 13-18, 2016
5. 小島浩司, 大嶋晃敏, 伊藤信夫, 荻尾彰一, 川上三郎, 野中敏幸, 林嘉夫, 松山利夫, 山崎勝也, 柴田祥一, 森下伊三男, 高丸尚教, 中村亨, 田中公一, 鈴木建司, S.C.Tonwar, S.K.Gupta, P.K.Mohanty, S.K.Duggad, 大面積高精度 muon 望遠鏡による方位別宇宙線強度変動の研究(20), 日本物理学会 第 73 回年次大会(2018 年), 2018
6. 大嶋晃敏, 伊藤信夫, 荻尾彰一, 川上三郎, 小島浩司, 柴田祥一, 高丸尚教, 田中公一, 田中秀樹, 中村亨, 野中敏幸, 林嘉夫, 松山利夫, 森下伊佐夫, P.K Mohanty, S.K Gupta, S.C.Tonwar, S.R Dugad, GRAPES-3 ミューオン検出器の拡張と新型検出器の計画について, 日本物理学会 第 73 回年次大会(2018 年), 2018
7. 今徳 光(広市大・4 年生), 田中 公一, 藤原 真, 八方 直久, 高橋 賢, 比例計数管出力のシミュレーション, 第 19 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム(HISS) A-38, 2017
8. 小島浩司, 大嶋晃敏, 伊藤信夫, 荻尾彰一, 川上三郎, 野中敏幸, 林嘉夫, 松山利夫, 山崎勝也, 柴田祥一, 森下伊三男, 高丸尚教, 中村亨, 田中公一, 鈴木建司, S.C.Tonwar, S.K.Gupta, P.K.Mohanty, S.K.Duggad, 大面積高精度 muon 望遠鏡による方位別宇宙線強度変動の研究(19), 日本物理学会 2017 年秋季大会, 2017

他 6 件

【社会活動】

2016 年度、2017 年度の広島市立大学産学連携研究発表会、および、広島市立大学の地域貢献事例発表会にて研究を紹介した。2016 年度、2017 年度の広島県科学オリンピック開催事業第3回広島県科学セミナーに指導・助言者として参加した。

2017 年 1 月, 2018 年 1 月	平成 28 年度, 平成 29 年度, 広島県科学セミナー 広島県教育委員会
2016 年 11 月, 2017 年 11 月	2016, 2017 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2016 年 9 月, 2017 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2016 ～災害に強いまちづくり～ 2017 ～ものづくりをデザインする～

氏名	田中 輝雄
職位	教授
研究分野	数学教育、計画数学、確率論、確率過程論
研究キーワード	数学教育、最適停止問題、バンディット問題、確率制御問題、確率過程、動的計画法、数理計画法、マルコフ決定過程、階層化意思決定法、探索理論、スポーツ最適化、集合値確率過程、確率微分方程式

数学に関する教育活動、研究活動および大学運営を中心に行った。教育活動では、教職に関する「教科教育法(数学)I, II」および「数理科学特論 A」を通して数学基礎力、数学指導力の向上に努めた。数学内容学の研究活動では、最適停止問題、確率制御問題およびマルコフ決定過程の研究に取り組んだ。また、数学教育の研究活動では、高校の数学教育に関する研究に取り組み、数学教育学会にて研究成果の発表を行った。大学運営では、推薦入学者に対する数学の入学前指導ワーキンググループ委員として、2017 年度入学生 44 名、2018 年度入学生 47 名の入学前課題の評価等を分担して行った。

【教育活動】

「教科教育法(数学)I, II」では、高校数学科解析学分野を担当するために必要な基本的知識、よい授業を実践できる能力を修得させることを目標にした。高校数学科解析学分野に関する授業の目標、あり方、展開の仕方、構成方法、指導方法等について教授に努め、さらに指導案の作成、および模擬授業の実施や観察を通して、実際の授業構成や授業展開に必要な技能の教授に努めた。「数理科学特論 A」では、ブラウン運動と確率微分方程式の基礎と応用に関する知識を修得させることを目標にした。決定論的現象と非決定論的現象の違い、常微分方程式と確率微分方程式の違いを意識させながら、乱数、確率微分方程式の基礎、数値計算法等について教授に努めた。

2016, 2017 年度	教科教育法(数学)I
2016, 2017 年度	数理科学特論 A
2016, 2017 年度	教科教育法(数学)II

【研究活動】

数学教育、最適停止問題、確率制御問題、マルコフ決定過程の研究に取り組んだ。数学教育では、高校「数学 I」、「数学 A」、「数学B」の確率統計分野における基本的な用語の定義について教科書によって差異があることを示し、確率統計分野を指導する際の留意点について論じた。この成果は[1]、[2]として発表した。最適停止問題では、多次元時間変数を持つ確率過程に対して制約条件付き最適停止問題の定式化を与え、ラグランジェ双対理論を展開し最適停止時刻の特徴付けを与えた。確率制御問題とマルコフ決定過程([3])では、分数型評価基準の最適化問題の定式化を与え、最適制御(政策)を求めるアルゴリズムと特徴付けを与えた。

1. 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の統計分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集, pp. 224-226, 2017

2. 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の確率分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集, pp. 146-148, 2017
3. T. Tanaka, A partially observable discrete time Markov decision process with a fractional discounted reward, Journal of Information and Optimization Sciences, Vol. 38, No. 1, pp. 21-37, 2017

【社会活動】

社会活動・公開講座では、2011 年度と 2012 年度に広島県科学オリンピックセミナー(数学)の講師を務めたが、2016 年度と 2017 年度ともに社会活動実績はない。今後は、高校への模擬授業や公開講座等の高大接続の取り組み等で数学を通して貢献できる取り組みを、機会が許すならば担当する。高校生の数学への関心を高めることができる機会をとらえ、さらに本学のアピールに貢献する。

氏名	田中 宏和
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、電子デバイス・電子機器、生体医工学・生体材料学
研究キーワード	無線通信システム、情報理論、誤り訂正符号化技術、マルチメディアシステム

教育活動・研究活動・社会活動において、バランス良く活動することができた。

【教育活動】

- ・情報ネットワークでは研究室配属の学生にとっての基礎技術を習得することと併せて、情報科学科の学生にとっての基本となる情報通信の仕組みを習得することを目的とした教材を作成し、講義を行った。
- ・大学院では、学部で情報ネットワークの講義を受けていない学生も多くいたことから、基礎的な内容と大学院レベルの発展的内容を織り交ぜて行った。

2016, 2017 年度	医用情報通信特論
2016, 2017 年度	情報ネットワーク
2016, 2017 年度	情報と企業

【研究活動】

BAN シミュレータの開発やNEDOプロジェクトを行うことで、下記の研究成果を発表した。

1. 田中宏和, 他, 生体情報センシングとヘルスケアへの最新応用, 技術情報協会, 2017
2. Shoichiro Yamasaki, Tomoko K. Matsushima, Shinichiro Miyazaki, Kotoku Omura, and Hirokazu Tanaka, Wireless Packet Communications Protected by Secret Sharing and Vector Coding, IEICE Trans. Fundamentals, Vol. E100-A, No. 12, pp. 2680-2690, 2017
3. Kento Takabayashi, Hirokazu Tanaka, Chika Sugimoto and Ryuji Kohno, Cross-layer Design and Performance Analysis of Quality of Service Control Scheme for Wireless Body Area Networks, IEEE Access, Vol. 5, No. 1, pp. 22462-22470, 2017

他 28 件

【社会活動】

情報通信の研究を行う上では最新の技術動向、研究動向を把握した上でテーマを選定することが重要であり、学会活動・国際標準化活動への積極的な貢献を通して情報収集・意見交換等を行っていく。

2016 年 6 月-	電子情報通信学会 スマートインフォメディアシステム研究専門委員会 委員長
2015 年 3 月-	国際電気標準会議 (IEC) Systems Committee Active Assisted Living (Syc.AAL) WG1 議長
2013 年 5 月-	欧州電気通信標準化機構 (ETSI) Technical Committee (TC) Smart BAN 副議長

他 5 件

氏名	谷川 一哉
職位	講師
研究分野	リコンフィギャラブルシステム,
研究キーワード	高位合成、高速化、リコンフィギャラブルデバイス

私の教育・研究活動の方針として、常に自分自身をアップデートする事を心がけている。教育活動では、学生の変化に対応した教育方法を導入した。具体的には、最近の学生は本をあまり読まず、動画により情報を得る傾向にある。そこで、講義や演習の解説には、内容解説を動画に録画し、学生が好きなときに見られる環境を提供した。また、研究活動では、使える新しい技術は出来るだけ取り入れるように、情報収集とトライをしている。具体的には、自分が使用するプログラミング言語に Python を取り入れる事により、研究をサポートするツールの開発スピードが向上した。

【教育活動】

2016 年度からコンピュータアーキテクチャⅡの担当となり、「前回の講義内容に関する小テストを講義の開始直後に行い、評価に導入することで、学生の復習を促す」工夫をした。2016 年度より情報科学基礎実験の論理回路とアセンブリプログラミングについて学ぶ内容において、FPGA ボードを使った内容に変更した。この変更により、実験内容の質を落とすことなく、学生の実験にかかる時間が短縮されたと認識している。システムレベル設計検証特論では2017年度からオブジェクト指向設計をベースにした内容にすることで、ソフトウェア開発で主流になっているオブジェクト指向を学べる講義とした。

2016, 2017 年度	システムレベル設計検証特論
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験
2016, 2017 年度	コンピュータアーキテクチャⅡ
2016 年度	コンピュータシステム特論
2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

主な研究活動としては、1) より簡単に高速化を実現するための研究、2) より低コストな回路デバイスのソフトウェアに関する研究の2つを行った。1つ目の研究では、ある処理を高速化する際には、複数のハードウェアの性能差を考慮して、プログラムを手動で書き換える必要がある。この作業をハードウェアの知識がないプログラマでも利用できるように、処理変換を自動化する研究を行った。2つ目の研究では、低コストに利用できる回路デバイスを本研究室で開発しているが、その回路デバイスの性能を最大限に活かすには、回路デバイスの特性を考慮した回路設計が必要になる。そこで、その回路設計をソフトウェアで自動化する研究を行った。

1. 胡濱良樹, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, FPGA のための C-to-OpenCL トランスレータ, 信学技報, Vol. 117, No. 279, pp. RECONF2017-43, pp. 37-42, 2017
2. 谷川 一哉, 弘中 哲夫, 再構成可能デバイス MPLD/SePLD における設計アルゴリズムについて, DA シンポジウム 2017 論文集, pp. 91-96, 2017

3. Yuji Yamashita, Kazuya Tanigawa, Tetsuo Hironaka, Takashi Ishiguro, A prototype design of reconfigurable device SePLD in 0.6um CMOS process, Proc. of the ITC CISC 2017, pp. 579-582, 2017
4. 胡濱良樹, 石崎大智, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, MacCormack スキームを用いた吸排気管シミュレーションの OpenMP による並列化, ハイパフォーマンスコンピューティングと計算科学シンポジウム論文集, Vol. 2017, pp. 8-8, 2017
5. 石崎大智, 胡濱良樹, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, OpenCL を用いた吸排気管シミュレーション用 FPGA アクセラレータの設計, 信学技報, Vol. 117, No. 46, pp. RECONF2017-18, pp. 93-98, 2017
6. 荒瀬郁実, 窪田昌史, 谷川一哉, 弘中哲夫, 細粒度再構成可能デバイス MPLD の論理セル配置問題を対象とした SA 法における迷路法を用いたコスト算出方法, 信学技報, Vol. 117, No. 46, pp. RECONF2017-15, pp. 75-80, 2017

他 4 件

【社会活動】

電子情報通信学会のリコンフィギャラブルシステム研究専門委員会の幹事として、専門委員会の会計とデザインガイアという研究発表会の開催を主に担当している。デザインガイアは複数の研究会が合同で研究発表を行う研究発表会であり、そのプログラム調整や招待講演者の選出、会場の受付などを担当した。また、研究発表会の運営が効率よく進むように、役割分担を明確にした組織とするように提案を行った。さらに、新庄高校の模擬授業の講師を担当し、情報科学に関する入門的な内容を説明した。また、コンピュータサイエンス塾の講師も担当し、小学生に対してコンピュータがプログラムをどのように理解しているか分かりやすく教えた。

2018 年 3 月-2018 年 10 月	中国支部連合大会実行委員会 プログラム編成委員
2018 年 2 月-2019 年 5 月	電子情報通信学会 特集号 編集委員
2017 年 11 月-2018 年 12 月	Finance co-chairs(The 2018 International Conference on Field-Programmable Technology)
2017 年 2 月-2018 年 2 月	電子情報通信学会 特集号 編集委員
2016 年 6 月-2018 年 6 月	電子情報通信学会 リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会 幹事
2013 年 5 月-2016 年 6 月	電子情報通信学会 リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会 幹事補佐

氏名	谷口 和弘
職位	講師
研究分野	医用システム、ヒューマンインターフェース・インタラクション、知能機械学・機械システム
研究キーワード	医用ロボット、ウェアラブル機器、インプラントブルコンピュータ

2016 年度と 2017 年度の教育活動、研究活動、社会活動を以下にまとめる。教育活動については、メカトロニクス I の授業アンケートの 2 年間の平均値は 4.45 であった(2013 年度から 2017 年度の 5 年間の平均値は 4.48)。研究活動については、外耳装着型コンピュータ(earable、イアラブル)の研究成果が原著論文として、2 年連続で Instruments and Instrumentation 分野において上位 20%以内に入る雑誌 Sensors (Impact Factor は 2.677)に掲載された。また研究成果についての報道が 11 件であった。社会活動については、ひろしまコンピュータサイエンス塾の講師、あさみなみ区民大学の講師、広島なぎさ中学校・高等学校での指導助言により、小学生、中高生、社会人を対象に地域貢献をすることができた。以上の活動が行えたのも、多くの方々のご支援やご協力、そしてご指導によるものである。

【教育活動】

情報科学部 1 年生を対象とした基礎演習、情報科学部 2 年生を対象とした情報科学基礎実験 β 2(C)、医用情報科学科 2 年を対象にしたメカトロニクス I と医用情報科学、卒業研究指導、大学院医用情報科学専攻博士前期課程を対象とした医用ロボット学特論を担当した。メカトロニクス I の授業アンケートの 2 年間の平均値は 4.45 であった(2013 年度から 2017 年度の 5 年間の平均値は 4.48)。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	医用情報科学
2016, 2017 年度	メカトロニクス I
2016, 2017 年度	医用ロボット学特論
2016 年度	情報科学基礎実験 C
2017 年度	情報科学基礎実験 β

【研究活動】

外耳装着型コンピュータ(earable)の研究成果について報告した原著論文が 2 年連続で Sensors に掲載された。Sensors は Instruments and Instrumentation 分野において上位 20%以内に入る雑誌であり、Impact Factor は 2.677 である。また、研究成果は 2 年間で 11 件のテレビ(テレビ新広島、広島ホームテレビ)、新聞(日本経済新聞など)、雑誌(日経エレクトロニクス)で取り上げられた。そして電子情報通信学会 創立 100 周年 記念事業 シンポジウムで招待講演をさせていただいた。2016 年度と 2017 年度の研究活動をまとめると、著書 1 件、論文・MISC6 件、研究発表・招待講演 8 件、報道 11 件、受賞 6 件、合計 32 件であった。

1. Kazuhiro Taniguchi, Hisashi Kondo, Mami Kurosawa, Atsushi Nishikawa, Earable TEMPO : A Novel Hands-Free Input Device Using the Movement of the Tongue

- Measured with a Wearable Ear Sensor, Sensors, Vol. 18, No. 3, pp. 733-744, 2018.
Impact Factor 2.677.
2. Kazuhiro Taniguchi, Hisashi Kondo, Toshiya Tanaka, Atsushi Nishikawa, Earable RCC: Development of an Earphone-Type Reliable Chewing-Count Measurement Device, Journal of Healthcare Engineering, Vol. Volume 2018 (2018), No. Article ID 6161525-8, 2018 . Impact Factor 0.965.
 3. Kazuhiro Taniguchi, Hikaru Chiaki, Mami Kurosawa and Atsushi Nishikawa, A Novel Earphone Type Sensor for Measuring Mealtime: Consideration of the Method to Distinguish between Running and Meals, Sensors, Vol. 17, No. 2, pp. 252-266, 2017 . Impact Factor 2.677
 4. 谷口和弘, [広島発]産学官医連携体制による高齢者見守り支援システムの研究開発, 電子情報通信学会会誌, Vol. 99, No. 10, pp. 970-974, 2016.
 5. 広島ホームテレビ「J ステーション」, “特集: 耳で機械を動かせる! ? 「広島発! 驚きの新技術イアラブルって何だ?」”, 2018 年 3 月.

他 27 件

【社会活動】

地域の中高生に対しては、2017 年度は広島なぎさ中学校・高等学校の創造国際科(ロボット)にて指導助言をおこなった。またグローバルサイエンスキャンパスで広島学院高校の生徒の研究活動を支援した。さらに、オープンキャンパス等において研究紹介を行った。小学生に対しては、ひろしまコンピュータサイエンス塾において定期講座講師を 6 年連続で務めた。地域に対しては、総務省地域 ICT イノベーションセミナーで講演、あさみなみ区民大学で授業を行った。学会に対しては、生体医工学シンポジウム編集委員や日本コンピュータ外科学会評議員を行った。

2017 年 11 月	広島なぎさ中学校・高等学校での指導助言
2017 年 11 月	祇園北高校 研究室見学
2017 年 10 月	総務省地域 ICT イノベーションセミナー
2017 年 6 月	あさみなみ区民大学
2017 年 4 月-2018 年 3 月	グローバルサイエンスキャンパス ジャンプステージ
2016 年 10 月-2017 年 3 月	グローバルサイエンスキャンパス ステップステージ
2016 年, 2017 年	広島市立大学地域貢献事業発表会
2016 年, 2017 年	広島市立大学産学連携研究発表会
2016 年, 2017 年	オープンキャンパス研究室紹介
2015 年-2018 年	日本コンピュータ外科学会 評議員
2012 年-2018 年	ひろしまコンピュータサイエンス塾 定期講座講師
2012 年-2017 年	生体医工学シンポジウム編集委員

氏名	田村 慶一
職位	准教授
研究分野	メディア情報学・データベース、ウェブ情報学・サービス情報学
研究キーワード	データベース、Web マイニング、ソーシャルメディアマイニング、並列処理、時系列データ、発見的探索手法、深層学習、IoT

2016 年度と 2017 年度の活動の総括として、教育活動については、講義・実験の新教材作成、また、研究開発を通し、研究室配属の学生の指導を行った。研究活動については、「ビッグデータ分析とその応用」に係る研究開発、戦略的基盤技術高度化支援事業と SCOPE の共同研究開発を中心に活動を実施した。社会活動は IEEE SMC Hiroshima Chapter の役員と同 Chapter の主催する研究会の主催、各種プログラム委員を通じた査読活動と、学内イベントによるアウトリーチ活動を行った。大学運営では、主なものとして 2016 年度において知能工学学科実験室の機種更新を担当した。

【教育活動】

大学院講義の「知識ベース特論」は、2017 年度より単独担当となったため、全体の見直しと新規教材の作成を行った。学部講義の「データベース」「プログラミング III とその演習」については、教材の充実と説明等を工夫し、講義アンケートにおいては、科目平均以上の評価を受けることができた。また、2017 年度からスタートした知能工学実験 I・メディア学習実験の教材を新たに作成した。学生指導については、学部生 6 名、博士前期課程 2 名の卒論・修論指導と博士後期課程 1 名の指導を行った。

2016, 2017 年度	知識ベース特論
2016, 2017 年度	データベース
2016, 2017 年度	プログラミング III, プログラミング III 演習
2016, 2017 年度	知能工学実験 II (2016 年度), 知能工学実験 I (2017 年度)

【研究活動】

「ビッグデータ分析とその応用」を中心に、ハイパフォーマンスデータマイニング、ソーシャルメディア上のデータ分析、時系列データ分析の研究を行った。「大規模ソーシャル画像データを用いた動向情報の時空間分析に関する研究」(基盤研究(C)・課題番号: 23700124)では、個人研究としてソーシャルメディア上のデータを対象とした社会情報分析に係る研究開発を実施した。また、「次世代 8K 高精細フラットパネルの高歩留まり製造を実現する欠陥検査システムの実用化開発」(戦略的基盤技術高度化支援事業)、「検診結果に基づく深層学習による予測システムの開発とひろしま健康長寿ネットワークの構築」(SCOPE 地域 ICT 振興型研究開発フェーズ I とフェーズ II)において他大学と企業との共同研究開発を行った。研究成果として、学術論文 3 件、受賞 2 件、国際会議発表 10 件を出すことができた。

1. Keiichi Tamura, Hajime Kitakami, Tatsuhiko Sakai, Adaptive Distributed Modified Extremal Optimization for Maximizing Contact Map Overlap and Its Performance Evaluation, International Journal of Computational Intelligence Studies (IJCISStudies), Vol. 6, No. 4, pp. 288-310, 2017

2. Keiichi Tamura, and Takumi Ichimura, Classifying of Time Series using Local Sequence Alignment and Its Performance Evaluation, IAENG International Journal of Computer Science, Vol. 44, No. 4, pp. 462-470, 2017
3. (受賞) Best Paper Award of The 2017 IAENG International Conference on Data Mining and Applications, 2017
4. (特別・招待講演) 田村慶一, 深層学習の基礎技術と研究事例紹介, ニューロビジネス研究会, 2017
5. Tatsuhiko Sakai, Keiichi Tamura, Hajime Kitakami, and Toshiyuki Takezawa, Photo Image Classification using Pre-trained Deep Network for Density-based Spatiotemporal Analysis System, The 10th International Workshop on Computational Intelligence & Applications 2017 (IEEE IWCIA2017), 2017
6. Keiichi Tamura and Takumi Ichimura, Clustering of Time Series using Hybrid Symbolic Aggregate Approximation, The 2017 IEEE Symposium Series on Computational Intelligence (SSCI) (SSCI 2017), 2017
7. Keiichi Tamura, Tatsuhiko Sakai, and Hajime Kitakami, Location-based Temporal Burst Detection using Outlier Factors in Geo-tagged Tweets, 8th International Conference on E-Service and Knowledge Management (ESKM 2016), 2016

その他、学術論文 1 件、受賞 1 件、招待講演・チュートリアル 3 件、国際会議発表 7 件、研究会発表 15 件である。

【社会活動】

学会活動として、IEEE SMC Hiroshima Chapter 庶務幹事を務め、若手研究会(実行委員)、IEEE IWCIA(2016 年度 General Co-Chair、2017 年度 Program Co-Chair)を開催し、その企画と運営を担当した。あわせて、電子情報通信学会、Net と IAENG のプログラム委員を通して査読活動を行った。また、オープンキャンパス(2016 年度と 2017 年度)、広島市立大学地域貢献事業発表会(2016 年度と 2017 年度)、産学連携研究発表会(2016 年度)への出展を行った。

2017 年 8 月-2018 年 3 月	広島県 IoT 人材育成検討会議委員
2017 年 1 月-2018 年 12 月	IEEE SMC Hiroshima Chapter 庶務幹事
2016 年度, 2017 年度	IEEE SMC Hiroshima Chapter 若手研究会 実行委員
2016 年度, 2017 年度	IEEE IWCIA 実行委員(2016 年度, General Co-Chair, 2017 年度 Program Co-Chair)
2016 年 5 月-	電子情報通信学会常任査読委員

氏名	辻 勝弘
職位	助教
研究分野	電子デバイス・電子機器
研究キーワード	半導体デバイス、集積回路、デバイスモデリング、デバイスシミュレーション、パラメータ抽出

教育活動は、3 年次以下の演習・実験では、パワーポイント、基礎実験専用の Web ページ等を用いて教育を行い、シラバスの目的は概ね達成できたものとする。また、ここ 2 年間で、4 名の学生に対して卒業研究・論文の指導を行った。内容としては、いずれも卒業研究にふさわしい出来であったと考える。研究活動においては、過去に国際会議 (ICMTS2009～2014) で発表した内容を 3 報 (うち 1 報は 2014 年度アクセプト) の査読付き論文にまとめることができた。社会活動としては、長年にわたってオープンキャンパスに参加し、研究活動の紹介を行っている。これは今後も継続して行っていく予定である。

【教育活動】

ここ数年、下記の表に示される演習・実験に携わって、学部学生に対して教育を行っている。特に物理学概論では、パワーポイントを使って解説を行うと同時に、学生にはあらかじめ複数の問題を書いた紙を配り、講義時間中に解説を基に答えてもらうという方式をとっている。また、基礎実験では 1 週間前から予習を促す掲示と同時に宿題を課し、実験の開始と同時に TA に採点をしてもらい、実験時間中に返却を行っている。さらに専用の Web ページを開設し、学生にはいつでもアクセス可能にし、実験の進行、レポートの書き方、考察課題の考え方等に役立つようにしている。e ラーニング英語 III では、実習時間中の静粛性と集中できる環境づくりに努め、学生の英語力が向上するようにしている。

2016, 2017 年度	物理学概論
2016, 2017 年度	e ラーニング英語 III
2016, 2017 年度	システム工学実験 I
2016, 2017 年度	外書講読演習 II
2016, 2017 年度	システム工学実験 II
2016, 2017 年度	外書講読演習 I
2016 年度	情報演習
2016 年度	情報科学基礎実験 D
2017 年度	情報科学基礎実験 α -2

【研究活動】

2006 年 4 月から 2011 年 3 月まで NEDO 出資の半導体 MIRAI プロジェクトに参加した。近年は、そこで学んだ学術的な知識とノウハウを基に研究を行っている。特に Charge-Based Capacitance Measurement (CBCM) というサブ-フェムトファラッド (fF) オーダーまで測定可能な容量測定手法を用い、容量特性から MOSFET のモデリングに重要なパラメータ (例えば、しきい値電圧およびそのばらつき、実効チャネル長等) の抽出を行い、解析を行っている。これらの実験結果、解析結果、考察等をまとめ、公表したものが下記における 1、2 の査読付き論文である。今後はさらにデバイスシミュレータ・回路シミュレータを用いて、複合的に解析を行うことや、新しい測定回路の開発、超高速通信向けのトランジスタの解析等を行う予定である。

1. Katsuhiro Tsuji, Kazuo Terada and Hisato Fujisaka, Study on effective MOSFET channel length extracted from gate capacitance, Japanese J. Appl. Phys., Vol. 57, pp. 016601-1-016601-7, 2018
2. Katsuhiro TSUJI, Kazuo TERADA, Ryo TAKEDA, and Hisato FUJISAKA, Study on Threshold Voltage Evaluated by Charge-Based Capacitance Measurement, IEICE TRANSACTIONS on Electronics, VOL.E99-C, NO.4, pp. 466-473, 2016

【社会活動】

長年にわたって、オープンキャンパスに参加し、研究活動の紹介を行っている。近年は、「ナノ集積回路の特性測定」と題して、ICTを支える代表的なトランジスタである MOSFET の特性ばらつきの測定方法、測定結果、ばらつきの解析結果等を公開している。今後もオープンキャンパス等に積極的に参加し、社会に対して、研究公開を行っていく考えである。

2016 年度, 2017 年度	オープンキャンパス研究室紹介

氏名	常盤 達司
職位	講師
研究分野	生体医工学
研究キーワード	生体信号計測、脳波、てんかん、凍結治療、随意運動、運動準備電位、補足運動野、非線形信号処理

教育活動では、受講生にわかりやすい説明、講義資料の作成を心がけ、講義・実験形態も対話形式を一部盛り込むなど工夫した。

研究では、「低侵襲脳外科治療への応用を目指した凍結プローブの開発」や「高齢者に多発している ふらつき に関連した脳情報処理に関する研究」、「生体信号の取得や解析に関する研究」をテーマに活動を行った。また、学内の学部間共同研究として、芸術学部教員、事務職員と連携して光に関連した作品を作成し、東広島市美術館等で展示活動を行った。

大学運営では、学生チュータをはじめとして、「臨床・情報医工学プログラム実行委員」「FD・SD委員」「学生委員」「Global Science Campus 高校生指導」「enPit-Pro 実行委員」などの各種委員に従事した。さらに、全学委員として、「就職・インターンシップワーキンググループ」、「広報戦略策定ワーキンググループ」「大学案内・ウェブサイトワーキンググループ」にも参画し、本学の将来について委員内で議論を重ねた。

【教育活動】

分担、夏期・春期集中講義を含めると、2016 年度には9科目の講義・実験を担当し、2017 年度には7科目の講義・実験を担当した。今後は、講義中に質問があった内容や説明不十分と感じた資料の更なる拡充を図る。

2016, 2017 年度	医用情報科学概論(分担)
2016, 2017 年度	脳情報工学特論(分担, 夏期集中)
2016, 2017 年度	外書講読Ⅱ(分担)
2016, 2017 年度	生体計測工学特論
2016, 2017 年度	医用情報科学実験Ⅱ(分担)
2016, 2017 年度	プログラミングⅡ演習(分担)
2016, 2017 年度	医用プログラミング(分担, 春期集中)
2016 年度	情報科学基礎実験D(分担)
2016 年度	生体信号処理(分担)

【研究活動】

2016 年度、2017 年度の2年間で、上記研究テーマに関して学術雑誌3報、国際会議1件、国内会議4件の研究活動を行った。さらに、学部間共同研究(芸術学部、情報科学部、事務局、「世界平和に対する広島市立大学の貢献―挑戦的学内連携の構築を通して―」、広島市立大学 指定研究)の成果が東広島市美術館の図録に掲載された。また、指導学生の実績が1件、本学の教員表彰が1件あった。学術論文の査読は3(報/年)程度行った。

1. Tatsuji Tokiwa, Lev Zimin, Takao Inoue, Sadahiro Nomura, Michiyasu Suzuki, Takeshi Yamakawa, Detailed spectral profile analysis of electrocorticograms during freezing

against penicillin-induced epileptiform discharges in the anesthetized rat, *Epilepsy Research*, Vol. 143, pp. 27-32, 2018

2. T. Inoue, M. Fujii, H. Kida, T. Yamakawa, Y. Maruta, T. Tokiwa, Y. He, S. Nomura, Y. Owada, T. Yamakawa, M. Suzuki, Epidural focal brain cooling abolishes neocortical seizures in cats and non-human primates, *Neuroscience Research*, Vol. 122, pp. 35-44, 2017
3. K. Nakada, M. Tsunematsu, T. Kihara, T. Hattori, T. Tokiwa, and H. Fukuda, CISTEM Education with Robotic Platform: For Human-Human Synchrony and Human-Machine Synchrony, *Journal of Robotics and Mechatronics(JRM)*, Vol. 29, No. 6, pp. 969-979, 2017
4. T. Tokiwa, L. Zimin, H. Ishiguro, T. Inoue, H. Kajigaya, S. Nomura, M. Suzuki, T. Yamakawa, Palm-Sized Cryoprobe System with Built-in Thermocouple and Its Application to an Animal Model of Epilepsy, The 44th Annual meeting of the Japanese Society for Low Temperature Medicine, 2017
5. Tatsuji Tokiwa, Zimin Lev, Hiroshi Ishiguro, Takeshi Yamakawa, Cryoprobe System with Built-In Thermocouple for Cryosurgery, 39th Annual International Conference of the IEEE Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC'17), 2017
6. 中村圭, 常盤達司, 厚海慶太, 長山哲也, “Lights,” 現代の造形—Life & Art—「光—身近に潜む科学とアート—」, pp. 36-37, 東広島市立美術館特別図録第 42 号, 2017 年 2 月 24 日, 2017 年度知的環境アプリケーションアイデアコンテスト 最優秀賞, 知的環境とセンサネットワーク研究会 (ASN), 2018
7. 平成 28 年度 教員表彰 (教育及び大学運営, 広島市立大学), 広島市立大学, 2017
その他、国内会議3件

【社会活動】

2018 年4月から2年間、一般財団法人電子情報通信学会中国支部の学生会顧問 兼 支部委員を務める。中国地方の他大学との連携を図り、円滑な運営を心がける。また、日頃の研究活動を紹介する取り組みとして、広島市立大学産学連携研究発表会、地域貢献事業発表会にて、ポスター展示を毎年行った。

2018 年 4 月 - 2020 年 3 月	一般社団法人 電子情報通信学会 中国支部 学生会顧問 兼 支部委員

氏名	中田 明夫
職位	教授
研究分野	ソフトウェア、計算機システム、情報ネットワーク
研究キーワード	リアルタイムシステム、組込みシステム、分散システム、設計検証、設計最適化、形式的手法、モデル検査

近年ロボット・自動車・情報家電などのさまざまな機器に組み込まれ、多種多様なネットワーク上で連携動作するコンピュータシステムである「組込みシステム」を安全かつ効率よく実現するための、さまざまな設計・構築技術に関する研究を推進する。学生の教育に関しては、「ソフトウェア開発技術者としての基礎的な素養を身につけ、組織の中で自主性を持ち、仲間と協調してプロジェクトを推進できる人材」の育成を目指す。そのために、少人数ゼミナールによる最新技術に関する英語文献の輪読やプログラミング指導を行う。社会活動としては、電子情報通信学会などの学術論文誌の編集委員・査読委員および研究専門委員等の活動を通じて学会運営に貢献する。

【教育活動】

学部生向け授業「オートマトンと形式言語」「リアルタイムシステム」については、講義と演習を短いサイクルで繰り返し、演習問題の解答も次週の冒頭で次の内容に進む前に説明する、というアクティブラーニングによる授業を実施している。また、大学院授業「組込みアーキテクチャ設計・ソフトウェア設計特論」については、ほぼ毎回受講生の理解度を確認するレポート課題を出題している。また、eラーニング環境を整備し、授業資料の閲覧からレポート提出まで電子的に行えるようにしている。さらに、大学院授業「製品企画プロジェクト特別演習」においては、「スクラム」と呼ばれるアジャイルソフトウェア開発手法に基づいて、少人数グループで具体的なソフトウェア製品の企画からプロトタイプ実装までの開発を行わせる演習を実施している。

2016, 2017 年度	オートマトンと形式言語
2016, 2017 年度	組込みアーキテクチャ設計・ソフトウェア設計特論
2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	リアルタイムシステム
2016, 2017 年度	製品企画プロジェクト特別演習

【研究活動】

研究指導に関しては、定期的に研究グループ内での研究進捗を報告させ、その内容について討論させることにより、他者へ研究内容をわかりやすく伝え、また、その内容に対して質疑を行えるように訓練している。また、大学院生には在学中1回以上の国内研究会における対外発表を義務づけている。研究指導の方針としては、できるだけ学生が自主的に問題を設定し、解決に到ることができるように、まず、何が課題であるかを学生に説明し、その解決法をまず自分で考えさせて説明させ、その説明に対してコメントを与え、内容の改善を行わせることを短いサイクルで繰り返すことで指導を行っている。今後は国際会議への投稿を積極的に促していきたい。

1. 松岡伶音, 中田明夫, EDF スケジューリングでプロセッサ共有する実時間マルチタスク分散システムに対する拡張時間ペトリネットを用いたデッドライン割り当て最適化手

- 法, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. SS2017, No. 43, pp. 53-58, 2018
2. 橋本和磨, 中田明夫, マルチタスクシステム仕様に対する性能検証のタスク併合による効率化, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. SS2016, No. 79, pp. 115-120, 2017
 3. 鈴木悠斗, 中田明夫, デッドライン制約を考慮しヒープメモリ削減を行うマルチタスクスケジューリング手法の提案, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. SS2016, No. 76, pp. 97-102, 2017
 4. 岡本怜也, 中田明夫, 応答時間の均一化を目的とした Real-Time Calculus によるシステム同定手法, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. SS2016, No. 75, pp. 91-96, 2017
 5. 中山敬基, 中田明夫, ヒープメモリ使用状況の予測によりメモリ使用量削減を行うマルチタスクスケジューリング手法の提案, 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会, 電子情報通信学会技術研究報告, Vol. SS2016, No. 39, pp. 19-24, 2017
 6. 電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会研究奨励賞, 2016

【社会活動】

電子情報通信学会和文論文誌 D 編集委員、および、情報処理学会シニア査読委員として、引き続き論文誌編集業務、編集委員会参加、査読業務等によって学会活動に貢献していく予定である。また、2018 年度から電子情報通信学会ソフトウェアサイエンス研究会研究専門委員会委員長として、研究会運営業務を通じて学会活動に貢献していく予定である。

2017 年 6 月-2020 年 5 月	(社)情報処理学会 論文誌シニア査読委員
2016 年 6 月-2018 年 5 月	(社)電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究会 研究専門委員会 副委員長
2015 年 11 月-2016 年 11 月	国際会議 ICFEM 2016 プログラム委員
2015 年 6 月-2019 年 5 月	(社)電子情報通信学会 和文論文誌 D 編集委員会 編集委員
2012 年 6 月-2016 年 5 月	(社)電子情報通信学会 ソフトウェアサイエンス研究会 専門委員
2005 年 11 月-	(社)電子情報通信学会 ソサイエティ論文誌編集委員会 常任査読委員

氏名	中野 靖久
職位	准教授
研究分野	視覚情報処理
研究キーワード	視覚、色覚、演色、医用照明

本大学で研究・教育活動を行うにあたって、研究ではヒトの視覚特性の理解と、これを色覚検査や医用照明に応用するための研究を続けている。教育では、情報系の科目に力を入れて取り組んでいる。研究において、マイコンを用いた実験装置の制御や実験プログラムの作成などを行うことが多く、その経験が教育にも生かされていると思う。「医用情報科学実験 II」ではこれらの知識を活用し、「遠隔医療システム」の構築をテーマにしたカリキュラムを自ら提案して指導している。大学運営ではここ6年ほど「ひろしまコンピュータサイエンス塾」に関わり、実行委員会の委員長を務めたり、講座を担当したりすることで早期情報教育に取り組んでいる。また、入試関連の大学運営にも力を入れている。

【教育活動】

「情報基礎」、「情報演習」では芸術学部の学生向けに、コンピュータやネットワークの仕組みを解説したり、オフィスや画像作成アプリの使い方を指導したり、掲示板やホームページ作成によりネットワークのマナーを教えたりすることができた。「数値解析」、「プログラミング III」、「医用情報科学実験 II」では医用情報科学の学生に対して、計算のアルゴリズム、C++の使い方、組み込み／ネットワーク／GUI プログラミングなどを教えることにより、より高度な情報教育に取り組んでいる。「外書講読演習 II」では、隔年で視覚や医療に関連した英語雑誌のニュース記事を読むことで、英語と専門分野の知識を同時に学んでもらう取り組みを行っている。「視覚情報学特論」は大学院の講義で、視覚に関連したテーマを勉強してプレゼンさせ、皆でディスカッションする講義形式により学生が自ら考える力を引き出すよう心がけている。

2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	視覚情報工学
2016, 2017 年度	医用情報科学実験 II(分担)
2016, 2017 年度	視覚情報学特論
2016 年度	情報演習
2016 年度	数値解析
2016 年度	外書講読演習 II(分担)
2017 年度	プログラミング III
2017 年度	情報演習(分担)

【研究活動】

1. 「色覚検査のための任意スペクトル・任意パターン刺激提示装置の開発」や 2. 「手術に適したスペクトルを持つ LED 照明の設計手法の確立」などのテーマで学生とともに研究を進めている。1のテーマでは、回路作製及び光学系作製を行い、赤、緑、青の3原色に加えて任意の単色光を混合して任意のパターンを呈示できる視覚刺激装置を作製した。今後はこの装置を使って実際に色覚検査や正常なヒトの色覚特性の測定ができるか検証していく。2のテーマでは、8色の LED を用いて被写体を撮影し、被写体の分光反射率を推定する撮影システム、被写体の特定部分を強調する照明のスペクトルを最適化

により導き出すプログラム、そのスペクトルを8色の LED を用いて再現する照明装置を学生とともに作製した。今後この装置を使って、手術や診断などの医用の現場で役に立つ照明の開発を目指す。

【社会活動】

社会活動では「ひろしまコンピュータサイエンス塾」の2年次の講座を担当し、主に小学6年の受講生に対して、迷路探索やライントレースを行うロボットの作製を指導した。「ひろしまコンピュータサイエンス塾」では早期情報教育に力を入れており、優秀な人材を見出し、早い段階から情報教育を行うことで、将来情報の分野で活躍する人材の育成を目指している。今年度(2018 年度)から規模が縮小されるので、教育の質が落ちないように心がけていきたい。「照明基礎講座スクーリング」では、照明学会の「照明基礎講座」受講修了生を対象に、「明視論」という講義を担当した。「明視論」ではこれから照明の分野で活躍する社会人に対して、視覚や色覚の機能とその不思議について講義し、今後も興味を持って勉強を続けてもらえるよう指導した。

2017 年 7 月-	照明基礎講座スクーリング
2017 年 7 月-2018 年 3 月	ひろしまコンピュータサイエンス塾 2年次定期講座, 広島市立大学 大学院 情報科学研究科
2016 年 7 月-	照明基礎講座スクーリング
2016 年 7 月-2017 年 3 月	ひろしまコンピュータサイエンス塾 2年次定期講座, 広島市立大学 大学院 情報科学研究科

氏名	中山 仁史
職位	講師
研究分野	知覚情報処理、知能情報学、ヒューマンインターフェース・インタラクション
研究キーワード	音声、骨伝導、音声認識、音声信号処理、歌声、組込みシステム

企業や社会などから音声インタフェースを基とした応用と発展の相談やニーズが高まっている現状がある。従来、ヒトの音声コミュニケーションを対象とした音声また音響解析によるインタフェースの構築が主であったが、ヒトや動物の生体情報の解析や既存の技術に対するブレークスルーとなるインタフェースの提案と発展を行う。

【教育活動】

従来の実験や演習における問題点や課題を明らかにし、学生の理解を促すような説明や指導ができるような試みを行う。また、実験実習などでレポートの書き方やマナーを理解できていない学生が多いため、このような問題を明らかにするための検討や試みを行う。

2016, 2017 年度	システム工学実験 I 及び II, 情報基礎(芸術学部)

【研究活動】

音声や音響技術を中心にパターン認識などを活用した信号抽出や解析技術を中心に研究を行っている。音声の音響的特徴の差異や変化に着目した舌癖判断や豚など動物を対象とした信号解析技術は、競合技術や既存技術がほとんどない現状がある。エンドユーザやニーズを明確にした上で、求められている発明や技術の提案を行い、当該分野や専門領域でインパクトのある成果を出せるような研究活動を行う。

1. Masashi Nakayama, Naoki Shigekawa, Takashi Yokouchi and Shunsuke Ishimitsu, Sensors for Everyday life -Healthcare Settings-, IN-TECH, 2016
2. Satoshi Iijima, Shunsuke Ishimitsu and Masashi Nakayama, Influence of the Lombard Effect, Fletcher Effect and Band-Emphasized Auditory Feedback on Singing Voice, Part B: Applications, ICIC Express Letters(ICIC-ELB), Vol. 9, No. 4, pp. 331-338, 2018
3. 中山仁史, 石光俊介, 山下公子, 石井かおり, 葛西一貴, 堀畑聡, 口腔習癖改善のための音響特徴量を用いた舌癖識別システム, 電気学会論文誌 C, Vol. 138, No. 3, 2018
4. Masashi Nakayama, Kosuke Kato and Masaru Matsunaga, Statistical analysis and modeling of formant frequencies of vowels phonated by traditional Japanese Shigin singers, International Journal of Innovative Computing, Information and Control, Vol. 13, No. 5, pp. 1441-1425, 2017
5. Satoshi Iijima, Shunsuke Ishimitsu and Masashi Nakayama, Effects of Masking Noise in Auditory Feedback on Singing, International Journal of Innovative Computing, Information and Control, Vol. 13, No. 2, pp. 591-603, 2017
6. 中山仁史, 石光俊介, 中西良太, 坂野史歩, 空田卓也, 前田夕貴, 高齢者見守りのための音情報を用いた転倒識別に関する研究, 日本機械学会論文誌, Vol. 82, No. 844, 13 pages, 2016

7. Masashi Nakayama, Naoki Shigekawa and Takashi Yokouchi, FRAME-BY-FRAME SPEECH SIGNAL PROCESSING FOR FIELD PROGRAMMABLE GATE ARRAY DEVICES, ICIC Express Letters, Vol. 10, No. 12, pp. 2949-2955, 2016
8. Yibing Cheng, Masashi Nakayama and Shunsuke Ishimitsu, COMPARISONS OF CONTEXT-DEPENDENT SUB-WORD TRANSFER FUNCTIONS FOR THE SPEECH SUPPORT SYSTEM, Part B: Applications, ICIC Express Letters(ICIC-ELB), Vol. 7, No. 9, pp. 2007-2012, 2016
9. Masashi Nakayama, Shunsuke Ishimitsu, INVESTIGATION OF QUANTIZATION SIZE FOR SOUND QUALITY IMPROVEMENT ON BODY-CONDUCTED SPEECH USING THE DIFFERENCE CALCULATION, The 23rd International Congress on Sound and Vibration (ICSV23), 2016
10. 日本矯正歯科学会 学術大会優秀発表賞, 2016

【社会活動】

地域企業や社会への発信また情報収集を行うために、学会などの発表に加えて地域貢献事業発表会や産学連携発表会などでの発表を行っている。また、学会発表や招待講演などでの技術相談が増えているため、これらの機会を生かして研究成果を普及できるような活動も行う。

2016 年 7 月 -2017 年 5 月	広島市立大学地域貢献事業発表会、広島市立大学産学連携研究発表会

氏名	永山 忍
職位	教授
研究分野	情報学基礎
研究キーワード	決定グラフの最適化、数値計算回路の合成法、計算機設計支援ツール、設計自動化ツール、決定グラフを用いた正規表現マッチング

2016 年度に教授に就任、2017 年度に情報工学科学科長に就任したため、立場上、大学運営や教育活動の比重が重たくなったが、なんとか時間を作り研究活動や社会貢献活動を行った。特に社会貢献活動では、学会で複数の主要幹事業務を務め、非常に忙しい日々を送った。本人の思いとしては、もう少し研究活動に時間を割きたかったが、全ての活動に共通する滅私奉公の精神で 2016/2017 年度は活動した。とはいえ、学生の指導や共同研究を通じて論文の執筆、研究成果の発表を行った。大学運営業務に関しては、不慣れなため無駄な時間を要してしまったが、要領が得られれば効率化が図れ、研究活動の時間を確保できると考えている。

【教育活動】

2016/2017 年度は、昨今話題になっているアクティブラーニングを意識して授業を計画し実施した。通常の講義科目である「論理回路」や「離散数学」でも、授業での説明を最小限にとどめ、演習時間を長くするなどの改善を行った。またプレゼンテーション技法においても、ループリック評価を取り入れ、良い発表とはどんなものか？を学生自身に意識させるよう改善も行った。大学院講義「コンピュータシステム特論」では、学生同士のディスカッションやディベートを導入し、研究活動に必要な思考力や表現力の強化を目指した。

2016, 2017 年度	情報工学実験 I
2016, 2017 年度	LSI 設計演習
2016, 2017 年度	論理回路
2016, 2017 年度	離散数学
2016, 2017 年度	コンピュータシステム特論
2016 年度	オペレーティングシステム
2017 年度	プレゼンテーション技法
2017 年度	卒業研究1
2017 年度	卒業研究2
2017 年度	技術文書作成法
2017 年度	テクニカルリーディング演習
2017 年度	情報科学序説

【研究活動】

2016/2017 年度は、東北大学との共同研究として「車載ネットワークセキュリティ」に関する研究を中心に行い、本学学生とともに研究成果を国際会議や論文誌で発表した。また研究室学生の指導を通じて、「データマイニング用ハードウェア」や「LSI マスクパターンの異常検出法」に関する研究成果も発表した。マツダとの共同研究として「新しい ECU の開発」に関する研究も学生指導の一環として行い、研究会にて成果を発表した。本人の研究としては「論理最適化アルゴリズム」に関する研究を行い、研究会での成果発表で

受賞するに至った。立場上やむを得ない部分もあるが、もう少し研究活動に時間を割ければ良かったと後悔している。

1. Fast Network Intrusion Detection Systems, Cambridge Scholars Publishing, 2016
2. Shinobu Nagayama, Tsutomu Sasao, Jon T. Butler, A balanced decision tree based heuristic for linear decomposition of index generation functions, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E100-D, No. 8, pp. 1583-1591, 2017
3. Binbin Xue, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, Shin'ichi Wakabayashi, An Programmable Architecture Based on Vectorized EVBDDs for Network Intrusion Detection Using Random Forests, International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp. 132-135, 2017
4. 増田 祥吾, 永山 忍, 稲木 雅人, 若林 真一, FPGA 実装による RBF 近似関数の高速計算について, 電子情報通信学会 技術研究報告, Vol. 117, No. 455, pp. VLD2017-89, 1-6, 2018
5. (特別・招待講演) Shinobu Nagayama, Development of fast and reliable network intrusion detection systems underlying IoT, Compass for Next-Gen ICT – Message from RIEC Nation-Wide Cooperative Research Projects –, 2017
6. 第 40 回 多値論理フォーラム 優秀発表賞, 2018

他国際会議8件、研究会 11 件、招待講演4件、表彰3件

【社会活動】

2016/2017 年度は、主に学会活動を通じて社会に貢献した。そのうちで主要なものは「電子情報通信学会 VLSI 設計技術研究専門委員会幹事」「電子情報通信学会 英論文誌 A 編集幹事」「多値論理研究会 技術担当幹事」「IEEE Technical Committee on Multiple-Valued Logic, Secretary」や国際会議の Program Chair など、多数の幹事業務を務めた。高校生への模擬授業も積極的に行い、「情報科学」という学問の周知に力を注いだ。また高校生への教育だけでなく、社会人の学び直しについても文科省事業 enPiT-Pro への参画を通じて検討した。

2017 年 12 月	連続講義(クリスマス講座), 広島市立大学
2016 年 5 月-2018 年 5 月	VLSI 設計技術研究専門委員会 幹事
2016 年 5 月-2018 年 5 月	ESS システムと信号処理サブソサイエティ 会計幹事
2016 年 5 月-2017 年 5 月	IEEE International Symposium on MVL, Program Chair
2016 年 1 月-2017 年 12 月	IEEE Technical Committee on MVL, Secretary
2015 年 3 月-2017 年 3 月	ASPDAC2017 OC Member (Publication Chair)
2015 年 2 月-2016 年 7 月	電子情報通信学会 英論文誌 A 編集幹事

他学会委員等 23 件、模擬授業 12 件

氏名	難波 英嗣
職位	准教授
研究分野	知能情報学、情報図書館学・人文社会情報学
研究キーワード	自然言語処理、テキスト自動要約、World Wide Web、電子図書館、特許、引用分析、情報検索、テキストマイニング、シソーラス、観光情報学

大学における研究成果の社会への還元を中心的な課題と位置付け、教育活動、研究活動、社会活動を行っている。具体的には、(1)多くの企業や外部機関との共同研究を実施すること、(2)企業との共同研究に学生も参加させることにより、大学における研究成果が社会にどのように還元させるか、学生自身に体験させること、(3)研究成果を企業に提供すると同時に学会等で発表することに取り組んでいる。研究成果は、ジャーナル論文や国際会議論文として発表し、その一部で受賞している。また、多くの企業や外部機関と共同研究を継続していることから、一定の成果が得られていると思われる。

【教育活動】

大学教育では、以下の講義を担当した。また、大学院生の修士研究、学部生の卒業研究の指導を行った。その研究成果を、学会等で発表している(研究活動欄参照)。修士課程の学生が第 10 回データ工学と情報マネジメントに関するフォーラムにおいて学生プレゼンテーション賞を受賞した。2016 年 9 月に博士課程を修了した学生のジャーナル論文が、日本図書館学会論文賞を受賞した。

2017 年度	情報科学基礎実験 β
2017 年度	プログラミング I
2017 年度	プログラミング I 演習
2017 年度	情報検索
2017 年度	データ構造とアルゴリズム I
2017 年度	知的情報検索特論

【研究活動】

以下の研究発表、招待講演、受賞に加え、オリックス株式会社、株式会社アイ・アール・ディー、株式会社ブリヂストン、パナソニック IP マネジメント株式会社、パナソニック株式会社、科学技術振興機構(JST)からそれぞれ受託研究費の提供を受け、共同研究を行った。総務省戦略的情報通信研究開発推進授業(SCOPE)に研究代表者として採択され、「訪日外国人旅行者を対象とした地域情報マイニング技術の研究開発」という研究課題で東京工業大学、首都大学東京、広島経済大学と共同研究を行った。「ユーザの視点に立った高度な学術論文検索支援に関する総合的研究」(科学研究費補助金(基盤研究 A)代表者:富浦洋一九州大学教授)という研究課題において、分担者として研究を行った。

1. Iinuma, S., Nanba, H., and Takezawa, T., Automatic Summarization of Multiple Travel Blog Entries Focusing on Travelers' Behavior, Proceedings of ENTER 2018, 2018
2. 飯沼俊平, 難波英嗣, 竹澤寿幸, 場所と旅行者の行動に焦点を当てた複数旅行ブログエントリの自動要約, 観光と情報, Vol. 13, No. 1, 2017
3. 藤井一輝, 難波英嗣, 竹澤寿幸, 石野亜耶, 奥村学, 倉田洋平, 旅行者の行動分析のための旅行ブログエントリの属性推定, 観光と情報, Vol. 13, No. 1, 2017

4. Hirayama, T., Nanba, H., and Takezawa T., Takezawa, T., Mapping Historical Documents to Geographical Space, Proceedings of International Workshop on Mobile Ubiquitous Systems, Infrastructures, Communications, And AppLications, 2016
5. Fujii, K., Nanba, H., Takezawa T., Takezawa, T., Ishino, A., Okumura, M., and Kurata, Y., Travellers' Behaviour Analysis Based on Automatically Identified Attributes from Travel Blog Entries, Proceedings of Workshop of Artificial Intelligence for Tourism, PRICAI 2016, 2016
6. Nanba, H., Sakai, T., Kando, N., Keyaki, A., Eguchi, K., Hatano, K., Shimizu, T., Hirate, Y., and Fujii, A., NEXTI at NTCIR-12 IMine-2 Task, Proceedings of the 12th NTCIR Workshop Meeting on Evaluation of Information Access Technologies: Information Retrieval, Question Answering and Cross-lingual Information Access, 2016
7. 福田 悟志, 難波 英嗣, 竹澤 寿幸, 要素技術とその効果を用いた学術論文の自動分類, 日本図書館情報学会誌, Vol. 63, No. 3, pp. 145-162, 2016
8. (特別・招待講演) Nanba, H., Automatic Compilation of Travel Information from Texts, Asia Pacific Society for Computing and Information Technology (APSCIT 2017), 2017
9. (特別・招待講演) 難波英嗣, Web 上の学術リソースの検索, 第 120 回情報基礎とアクセス技術研究会・第 47 回デジタル図書館ワークショップ合同研究会, 2016
10. 日本図書館情報学会論文賞, 日本図書館情報学会, 2017
11. 平成 28 年度 広島市立大学 教員表彰, 広島市立大学, 2017

他 1 件

【社会活動】

毎年 8 月に開催されるオープンキャンパスでは、毎年、研究室として参加している。学会の運営委員、査読委員として以下のとおり活動している。

2016 年-	電子情報通信学会 データ工学研究会 専門委員
2016 年-	電子情報通信学会 食メディア研究会 専門委員
2016 年	Artificial Intelligence for Tourism (PRICAI 2016 workshop) Organizer
2012 年-	情報処理学会論文誌 査読委員
2012 年-2016 年	ARG Web インテリジェンスとインタラクション研究会

氏名	西 正博
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、地球電磁気
研究キーワード	無線システム、電波伝搬、通信放送協調、地震電磁気、オーロラ電波、ネットワーク、ヒト検知、環境モニタリング

2016 年度から 2017 年度までの間、新たに教授およびモニタリングネットワーク研究室の研究室長に就任したことにより、責任感を持って、教育研究活動、および社会活動に取り組んできました。研究室の学生を指導することで、2016 年度では 4 名の大学院生、6 名の学部生、2017 年度では 2 名の大学院生、3 名の学部生が修了、卒業することができ、希望の進学や就職をすることができました。研究室では特に、国際会議や国内学会での発表を行うように学生を指導し、研究を通じて、社会や企業で活躍できるよう、コミュニケーション能力やプレゼン技術を教育してきました。また地域貢献を目指し、土砂災害モニタリングのネットワークの運用を継続しています。

【教育活動】

2016 年度からは新たにワイヤレスネットワークを担当することになりました。現在、モノのインターネット(IoT)が進展しており、今後需要が高まる無線や電波の知識について、演習を含めて講義を行っています。また、コンピュータ基礎や情報基礎、基礎演習など、1 年生向けの講義を担当することが多く、今後の進路選択に必要となる知識の提供のみならず、情報セキュリティや情報モラル、情報リテラシーについて、大学生として知っておくべき内容についても講義を行いました。大学院における講義においては、より深く理解してもらうことを目的として、対話型で学生が説明する時間を多くする講義を心がけました。

2016, 2017 年度	コンピュータ基礎、情報基礎、基礎演習、情報社会論、ワイヤレスネットワーク、情報工学特論

【研究活動】

2016 年度から総務省の SCOPE 地域 ICT 振興型研究開発を研究代表者として受託しており、情報工学専攻のモニタリングネットワーク研究室、ネットワークソフトウェア研究室、情報ネットワーク研究室の先生方および KDDI 総合研究所の研究者と共同で、土砂災害情報を地域住民に効率的に配信することを目指した、草の根災害情報伝搬システムの研究開発を行っています。我々の研究室では特に、山の中の土砂災害危険箇所、電源自立型のモニタリングシステムを構築し、24 時間連続で運用を行っています。その他、韓国からのオーバリーチ伝搬による日本の無線システムへの干渉を観測により評価する研究や、電波を用いたヒト検知システムの研究開発を行ってきました。2 年間で論文誌 1 件、国際会議 6 件、国内学会 24 件、受賞 1 件です。以下には論文誌および国際会議の業績を示します。

1. K. Shin, K. Kanekura, and M. Nishi, Estimation of Effective Earth Radius Factor under Overreach Interference Condition of Terrestrial TV Wave from Korea to Japan, Proc. of 2017 IEEE Conference on Antenna Measurements & Applications (2017 IEEE CAMA), pp. 36-39, 2017
2. T. Furukawa, K. Shin, and M. Nishi, Operational Evaluation of Self-powered Monitoring System for Landslide Disasters, Proc. of the 2017 International

- Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA 2017), pp. 299-302, 2017
3. K. Yabata, Y. Matsuda, K. Shin, and M. Nishi, Proposal of Housing-site Human Detection System in 920 MHz Band, Proc. of 2017 IEEE 6th Global Conference on Consumer Electronics (GCCE 2017), pp. 567-570, 2017
 4. 西 正博, 古川 達也, 新 浩一, 電源自立型の土砂災害監視カメラシステムの構築と評価, 情報処理学会論文誌, Vol. Vol.58, No. 3, pp. 736-744, 2017
 5. K. Shin, K. Yabata, K. Momota, and M. Nishi, Evaluation of the Human Detection System using UHF band TV waves for the Car Security, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2016), pp. 222-223, 2016
 6. S. Taniyama, K. Shin and M. Nishi, Seasonal Characteristics of Overreach Interferences from Japan and Korea in Digital TV Waves, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2016), pp. 314-315, 2016
 7. Y. Wakasa, Y. Tanai, K. Shin and M. Nishi, Evaluation of Human Sitting-up Detection System using Electromagnetic Noise from Power-supply Line, Proc. of International Symposium on Antenna and Propagation (ISAP 2016), pp. 922-923, 2016

【社会活動】

毎年、広島市立大学の地域貢献事業発表会、広島市立大学産学連携研究発表会、オープンキャンパスにはモニタリングネットワーク研究室として参加しています。それぞれの発表会では、研究室の学生にも参加を促し、一般の方や企業の方、高校生の皆さんに向けて、分かりやすい発表を指導しています。その他、特に 2016 年度からは SCOPE の研究開発が開始されたこともあり、地域での土砂災害被害軽減への取り組みということで、広島市立大学産学連携研究発表会での研究紹介や、公開講座での市民への取り組み説明、河内地区防災講演会での講演および三入学区防災フェアにおける技術展示等の社会活動を行ってきました。また、電子情報通信学会中国支部の庶務幹事や中国総合通信局放送部会幹事に就任して、社会貢献をあわせて行ってきました。

2016 年 11 月	広島市立大学公開講座, 広島市立大学
2016 年 10 月	広島市三入学区防災フェア, 三入学区自主防災連合会
2016 年 6 月	広島市河内地区防災講演会

氏名	長谷川 義大
職位	助教
研究分野	ナノマイクロシステム
研究キーワード	MEMS(Micro-Electrical-Mechanical Systems)、MEMS センサ

自身の研究を通じての教育、社会貢献の理念のもと、教育活動、研究活動、社会活動をそれぞれ十分に実施できた。具体的には、教育活動の一環として、学生への研究指導を懇切丁寧に行った結果、研究が予想以上に進展し、教育効果が高まったとともに、その成果を社会に発信できたと考えている。大学運営は、学科としてのチューターのほか、2016-2017 年度には学部委員として、企画・広報委員として大学案内冊子のリニューアルに注力した。また、2016 年度にはホームページ運営検討 WG の統括として、学部ホームページの適切な運営を指揮管理した。

【教育活動】

2016-2017 年度は、学部の授業として、2年生の情報科学基礎実験を担当した。また、学科の授業として、医用情報科学実験 I、外書講読演習 I・II、医用情報科学概論を担当した。また、2017 年度は 2018 年度に新たに開講する機械工学の授業の準備も行った。研究室学生への研究指導は、一部の博士前期課程、学部学生の研究指導を行った。授業、研究指導ともに、どの部分で学生が躓いているのかが分かるように十分にコミュニケーションを取りながらの指導を心掛けている。

2016, 2017 年度	医用情報科学実験 I
2016, 2017 年度	医用情報科学概論
2016, 2017 年度	外書講読演習 I・II
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 D、 α

【研究活動】

2015-2016 年度に研究設備を整備構築した。2017 年度はその研究設備を活かして、社会に役立つマイクロ医用デバイスの開発を進めた。具体的には、ヒトの呼吸機能の計測、解明を目的とした MEMS 熱式流量センサデバイスの開発や、簡便に体内への薬剤投与手段を提供することを目的とした経皮マイクロニードルの開発を行った。また、これまで気体測定用の流量センサのみを開発してきたが、研究設備の習熟度が向上したことから、液体流れの計測にも挑戦している。上記研究活動に関連して 2016-2017 年度で、6 件の論文投稿、14 件の国際会議報告を行った。

1. Y. Hasegawa, H. Kawaoka, Y. Mitsunari, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Catheter type thermal flow sensor with small footprint for measuring breathing function, *Microsystem Technologies*, pp. 1-11, 2018
2. Chiaki Okihara, Yoshihiro Hasegawa, Miyoko Matsushima, Tsutomu Kawabe, Mitsuhiro Shikida, Development of tube flow sensor by using film transfer technology and its application to in situ breathing and surface image evaluation in airways, *Microsystem Technologies*, pp. 1-8, 2018
3. Y. Hasegawa, H. Kawaoka, T. Yamada, M. Matsushima, T. Kawabe, M. Shikida, Respiration and heartbeat signal detection from airflow at airway in rat by catheter

flow sensor with temperature compensation function, Journal of Micromechanics and Microengineering, Vol. 27, No. 12, 125016, 2017

4. Y. Hasegawa, C. Okihara, T. Yamada, K. Komatsubara, K. Iwano, Y. Sakai, M. Shikida, Smooth-surfaced flexible wall shear stress sensor fabricated by film transfer technology, Sensors and Actuators A: Physical, 2017
5. H. Kawaoka, T. Yamada, M. Matsushima, T. Kawabe, Y. Hasegawa, M. Shikida, Heartbeat Signal Detection from Analysis of Airflow in Rat Airway under Different Depths of Anesthesia Conditions, IEEE Sensors Journal, Vol. 17, No. 14, pp. 4369–4377, 2017
6. Naoaki Harada, Yoshihiro Hasegawa, Ryota Ono, Miyoko Matsushima, Tsutomu Kawabe, Mitsuhiro Shikida, Characterization of basket-forceps-type micro-flow-sensor for breathing measurements in small airway, Microsyst Technol, pp. 1–10, 2017
7. N. Harada, R. Ono, M. Matsushima, T. Kawabe, Y. Hasegawa, M. Shikida, Micro Flow Sensor Integration Onto Basket Forceps for Pulmonary Function Evaluation, The 11th Annual IEEE International Conference on Nano/Micro Engineered and Molecular Systems, 2016

他 27 件

【社会活動】

研究成果を地域社会へ発信し、交流することを目的にして、産学連携研究発表会および地域貢献事業発表会への出展を継続している。また、広島地域の高校を対象とした研究室見学やオープンキャンパスでの研究紹介も継続して参加させて頂いている。更に2017 年度には、高校生による情報科学自由研究にも参加した。これらを通じて、研究や学科の教育内容について発信を行った。他にも、研究分野の国際会議のプログラム委員を2015 年度から継続しており、現在は計2件の委員を務めている。これら学会活動を通して、学術分野の発展に尽力している。

2017 年 11 月	地域貢献事業発表会
2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究
2017 年 6 月–	IEEE Sensors2017 Conference Technical Program Committee
2015, 2016, 2017 年 11 月	研究室見学(祇園北高校)
2015, 2016, 2017 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会出展
2015, 2016, 2017 年	International Microprocesses and Nanotechnology Conference Technical Program Committee
2015, 2016, 2017 年	オープンキャンパス 研究室紹介

氏名	八方 直久
職位	准教授
研究分野	ナノ構造物理、結晶工学、量子ビーム科学、薄膜・表面界面物性、物性Ⅰ、物性Ⅱ
研究キーワード	原子分解能ホログラフィー、半導体物理

3・4年目となった科研費・新学術領域研究「3D活性サイト科学」計画班の分担者として活動し、研究業績は目標以上に達成することができたと自負する。実験などの出張が多くなり、授業を行うことに苦慮したが、欠講することではなく、最低限の教育業務を全うできた。委員会などの学内業務も、出張を避けて日程調整していただいたため、概ね出席し、最低限の貢献ができたと思う。以上、各分野について、概ね目標を達成できたと考える。

【教育活動】

学部4年生に研究指導し、蛍光X線ホログラフィー実験によるミオグロビンの構造解析や、その実験における光軸調整の精度向上について調べ、卒業論文としてまとめさせた。また、博士前期課程の大学院生に研究指導し、スピントロニクス材料の局所結晶構造解析に伴う測定システム開発を行い、修士論文としてまとめさせた。

2016, 2017 年度	基礎物理学
2016, 2017 年度	電子物性
2016, 2017 年度	基礎実験 α
2016, 2017 年度	テクニカル・リーディング演習
2016, 2017 年度	物理化学実験
2016, 2017 年度	情報物性特論Ⅱ

【研究活動】

太陽電池材料、熱電材料、インバー合金、超伝導体、シンチレーター材料、生体試料などの局所結晶構造解析について研究し、13 件の論文(査読付)が掲載され、16 件の学会発表を行った。

1. T. He, X. Yang, T. Terao, T. Uchiyama, T. Ueno, K. Kobayashi, J. Akimitsu, T. Miyazaki, T. Nishioka, K. Kimura, K. Hayashi, N. Hoppo, H. Yamaoka, H. Ishii, Y.-F. Liao, H. Ota, H. Goto, Y. Kubozono, Pressure-induced superconductivity in $\text{Ag}_x\text{Bi}_{2-x}\text{Se}_3$, *Physical Review B*, Vol. 97, pp. 104503-1-8, 2018
2. J. R. Stellhorn, S. Hosokawa, N. Hoppo, H. Tajiri, T. Matsushita, K. Kaminaga, T. Fukumura, T. Hasegawa, K. Hayashi, A valence-selective x-ray fluorescence holography study of an yttrium oxide thin film, *Journal of Applied Crystallography*, Vol. 50, pp. 1583-1589, 2017
3. S. Hosokawa, J. R. Stellhorn, T. Matsushita, N. Hoppo, K. Kimura, K. Hayashi, Y. Ebisu, T. Ozaki, H. Ikemoto, H. Setoyama, T. Okajima, Y. Yoda, H. Ishii, Y.-F. Liao, M. Kitaura, M. Sasaki, Impurity position and lattice distortion in a Mn doped Bi_2Te_3 topological insulator investigated by x-ray fluorescence holography and x-ray absorption fine structure, *Physical Review B*, Vol. 96, pp. 214207-1-12, 2017

4. K. Hayashi, K. Ohoyama, N. Happo, T. Matsushita, S. Hosokawa, M. Harada, Y. Inamura, H. Nitani, T. Shishido, and K. Yubuta, Multiple-wavelength neutron holography with pulsed neutrons, *Science Advances*, Vol. 3, pp. e1700294-1-7, 2017
5. K. Kimura, K. Hayashi, K. Hagihara, H. Izuno, N. Happo, S. Hosokawa, M. Suzuki, H. Tajiri, In-Plane Positional Fluctuations of Zinc Atoms in Single Crystal $Mg_{85}Zn_6Y_9$ Alloy Studied by X-ray Fluorescence Holography, *Materials Transactions*, Vol. 58, pp. 539-542, 2017
6. T. Yamamoto, K. Hayashi, N. Happo, S. Hosokawa, H. Tajiri, Local atomic structure near an Nb atom in aged beta-Ti alloys, *Acta Materialia*, Vol. 131, pp. 534-542, 2017
7. S. Shirakata, Y. Kitamura, N. Happo, S. Hosokawa, K. Hayashi, Local structure analysis of $Cu(In,Ga)Se_2$ by x-ray fluorescence holography, *Physica Status Solidi C*, Vol. 14, pp. 1600171-1-4, 2017
8. A. Sato-Tomita, N. Shibayama, N. Happo, K. Kimura, T. Okabe, T. Matsushita, S.-Y. Park, Y. C. Sasaki, K. Hayashi, Development of an X-ray fluorescence holographic measurement system for protein crystals, *Review of Scientific Instruments*, Vol. 87, pp. 063707-1-9, 2016
9. Y. Wakabayashi, D. Nakajima, Y. Ishiguro, K. Kimura, T. Kimura, S. Tsutsui, A. Q. R. Baron, K. Hayashi, N. Happo, S. Hosokawa, K. Ohwada, S. Nakatsuji, Chemical and orbital fluctuations in $Ba_3CuSb_2O_9$, *Physical Review B*, Vol. 93, pp. 245117-1-13, 2016
10. T. Matsushita, A. Kubota, N. Happo, K. Akagi, N. Yoshinaga, K. Hayashi, Fast Calculation Algorithm Using Barton's Method for Reconstructing Three-Dimensional Atomic Images from X-ray Fluorescence Holograms, *Z. Phys. Chem.*, Vol. 230, No. 4, pp. 449-456, 2016
11. T. Yamamoto, K. Haysashi, N. Happo, S. Hosokawa, X-ray fluorescence holography for a Ti-Nb binary alloy consisting of the martensite, austenite and omega phase, *Z. Phys. Chem.*, Vol. 230, No. 4, pp. 509-518, 2016
12. 波田拓馬、八方直久、他 3 名, 蛍光 X 線・中性子線ホログラフィー測定装置用制御ソフトウェアの開発, 第 30 回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム, 2017
13. 宮内後太郎、八方直久、他 4 名, スピントロニクスデバイスのための蛍光 X 線ホログラフィー測定システムの構築, 第 30 回日本放射光学会年会・放射光科学合同シンポジウム, 2017

他 16 件

【社会活動】

産学連携発表会に2件を出展した。また、チタン合金の研究に関する問い合わせ(ひろしま産業振興機構、(株)キャステム)に対応した。

氏名	馬場 雅志
職位	講師
研究分野	計算機科学、知能情報学、知覚情報処理・知能ロボティクス
研究キーワード	コンピュータグラフィックス、コンピュータビジョン

情報科学の一分野であるコンピュータグラフィックスを通して社会へ貢献することをテーマに教育・研究活動を行っている。具体的には、被爆資料の電子展示や原爆きのこ雲の高さ推定などを行ってきた。さらに、芸術学部学生との協業や学外の他分野の方との協業なども行っている。

【教育活動】

講義に関しては、学部向け講義の「コンピュータグラフィックス1」、大学院向け講義の「コンピュータグラフィックス特論」、コンピュータを使った演習である「知能工学実験」を担当している。これらは、すべて研究の専門分野であるコンピュータグラフィックスに関連したものである。これらの講義以外に、原爆被害の実態を解明するために行った研究や被爆の実態を後世に伝えるために CG を利用した研究成果などを紹介する講義を「平和と人権 A」で行っている。また、大学院向けの自主プロジェクト演習では、毎年テーマの提案やアドバイザーとしての指導を行っている。

2016, 2017 年度	平和と人権 A
2016, 2017 年度	コンピュータグラフィックス 1
2016, 2017 年度	コンピュータグラフィックス特論
2016, 2017 年度	知能工学実験 2

【研究活動】

コンピュータグラフィックスの専門知識を生かし、CGのテキスト作成を行っている。CG-ARTS 協会より出版している『コンピュータグラフィックス』においては執筆と編集委員を担当し、『ビジュアル情報処理』においては執筆を担当した。最近の研究テーマとしては、コンピュータグラフィックスによる実カメラの再現と、全天球カメラを使った実シーンの光源環境の再現を行っている。これらの研究テーマによって 3 件の賞を得ることができた。

1. ビジュアル情報処理(改訂新版), CG-ARTS 協会, 2017
2. 古川亮, 内藤雅仁, 溝森将輝, 宮崎大輔, 馬場雅志, 日浦慎作, 佐野村洋次, 田中信治, 川崎洋, アクティブステレオ法による 3 次元内視鏡のための HDR 画像生成と投光器位置の自己校正, 電子情報通信学会論文誌 D, 2018
3. Ryo Furukawa, Masahito Naito, Daisuke Miyazaki, Masashi Baba, Shinsaku Hiura, Hiroshi Kawasaki, HDR Image Synthesis Technique for Active Stereo 3D Endoscope System, Engineering in Medicine and Biology Society (EMBC), 2017
4. Ryo Furukawa, Masahito Naito, Daisuke Miyazaki, Masahi Baba, Shinsaku Hiura, Yoji Sanomura, Shinji Tanaka, Hiroshi Kawasaki, Auto-calibration Method for

- Active 3D Endoscope System Using Silhouette of Pattern Projector, Pacific-Rim Symposium on Image and Video Technology, pp. 222-236, 2017
5. Daito Kakeya, Masashi Baba, Shinsaku Hiura, Generation of Omni-directional HDR Light-Probe Images Based on the Intensity Distribution Model Around the Sun, SIGGRAPH2017 posters, 2017
 6. 馬場雅志, 中根智絵, 日浦慎作, チルトレンズのカメラキャリブレーションと CG による再現, 情報処理学会論文誌, Vol. 58, No. 2, pp. 605-614, 2017
 7. Masashi Baba, Keisuke Haruta and Shinsaku Hiura, Estimating lighting environments based on shadow area in an omni-directional image, SIGGRAPH2016 Posters, 2016
 8. Daisuke Miyazaki, Mia Nakamura, Masashi Baba, Ryo Furukawa and Shinsaku Hiura, Optimization of Illumination for Generating Metamerism, Journal of Imaging Science and Technology, Vol. 60, No. 6, pp. 60502-1-60502-15, 2016
 9. Daisuke Miyazaki, Takuya Shigetomi, Masashi Baba, Ryo Furukawa, Shinsaku Hiura and Naoki Asada, Surface normal estimation of black specular objects from multiview polarization images, SPIE Optical Engineering, Vol. 56, No. 4, pp. 041303-1-041303-17, 2016
 10. 溝森将輝, 古川亮, 内藤雅仁, 宮崎大輔, 馬場雅志, 日浦慎作, 佐野村洋次, 田中信治, 川崎 洋, 3 次元内視鏡のための CNN による投影パターンマーカ自動検出, CVIM, 2017
 11. 山本 拓弥, 馬場 雅志, 日浦 慎作, 球面状ライトフィールドを用いた任意視点全方位画像の生成, MIRU2017 画像の認識・理解シンポジウム, 2017
 12. 掛谷 大登, 馬場 雅志, 日浦 慎作, 太陽周辺の輝度分布モデルを用いた HDR 光源環境画像の生成, Visual Computing / グラフィクスと CAD 合同シンポジウム 2017, 2017
 13. RICOH THETA x IoT デベロッパーズコンテスト RICOH 80 周年記念賞, 2016
 14. 優秀研究発表賞, 情報処理学会 CG とビジュアル情報学研究会, 2016
 15. ビジュアルコンピューティング賞, 画像電子学会, 2016

他 7 件

【社会活動】

高校生向けの公開講座として「高校生による情報科学自由研究」を毎年開催している。テーマは「コンピュータグラフィックスに挑戦！」であり、高校生がフリーソフトを使って CG で画像をつくることを行っている。また、10 月に行われるオープンキャンパス(ライブキャンパス)において、自分で作った画像をポスターとして発表する機会を提供している。また、研究成果の社会への還元については、「リエゾンフェスタ」や「市役所研究紹介展」などによって社会に紹介している。さらに、学会における活動として、論文誌編集委員や学会プログラム委員などの活動を活発に行っている。

2017 年 7 月-2017 年 9 月	高校生による情報科学自由研究, 広島市立大学
2016 年 7 月-2016 年 9 月	高校生による情報科学自由研究, 広島市立大学

氏名	原 章
職位	准教授
研究分野	知能情報学
研究キーワード	進化計算論

2016 年度および 2017 年度については、研究活動としての地元企業との共同研究、および、社会活動としての学会広島支部組織 IEEE SMC Hiroshima Chapter の Chair としての業務に比重を置き活動した。教育・研究・社会活動のそれぞれについて、学生による授業評価、共同研究の成果や研究発表業績、General Chair としての主催国際会議の成功など、一定の成果を得ることができた。

【教育活動】

研究室所属学生に対して計算知能技術に関する研究指導を行い、学生が筆頭著者の発表として、2016 年度は国際会議 1 件、国内研究会 3 件、2017 年度は論文誌 1 編、国内研究会 1 件の成果を得た。

また、担当講義を通じて情報科学部および情報科学研究科所属学生の能力向上を図った。特に、「情報基礎」、「ソフトウェア工学概説」では、授業アンケートにおいて理解度や満足度等の項目で高い評価を得ることができた。

2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	ソフトウェア工学概説
2016, 2017 年度	知能工学実験 I
2016, 2017 年度	推論方式特論
2016 年度	情報演習
2017 年度	技術英語演習 I

【研究活動】

進化計算の分野において、木構造プログラムの意味に基づく新たな遺伝操作を提案し、遺伝的プログラミング手法の探索効率を改善した。得られた成果は、国際会議等で発表を行い、特に、AAI 2016 の発表では、“Honorable Mention Award”を受賞した。

また、平成 27 年度(2015 年度)より採択された経済産業省戦略的基盤技術高度化支援事業「次世代 8K 高精細フラットパネルの高歩留まり製造を実現する欠陥検査システムの実用化開発」において、研究分担者として地元企業との共同研究を行い、成果をまとめた。

1. Toshiki Nishio, Jun-ichi Kushida, Akira Hara, and Tetsuyuki Takahama, Particle swarm optimization with dynamic search strategies based on rank correlation, International Journal of Computational Intelligence Studies, Vol. 6, No. 4, pp. 311-332, 2018
2. Akira Hara, Jun-ichi Kushida, Takamichi Yamagata, and Tetsuyuki Takahama, The Influence of Generation Alternation Model on Search Performance in Deterministic Geometric Semantic Genetic Programming, 2017 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC2017), 2017
3. Akira Hara, Hiroki Konishi, Jun-ichi Kushida, and Tetsuyuki Takahama, Efficiency Improvement of Imitation Operator in Multi-agent Control Model Based on Cartesian

Genetic Programming, 2016 IEEE 9th International Workshop on Computational Intelligence and Applications (IWCIA2016), 2016

4. Akira Hara, Jun-ichi Kushida, and Tetsuyuki Takahama, Deterministic Genetic Semantic Genetic Programming with Optimal Mate Selection, 2016 IEEE International Conference on Systems, Man, and Cybernetics (SMC2016), 2016
5. Akira Hara, Jun-ichi Kushida, Ryo Tanemura and Tetsuyuki Takahama, Deterministic Crossover Based on Target Semantics in Geometric Semantic Genetic Programming, 2016 IIAI 5th International Congress on Advanced Applied Informatics (AAI2016), 2016 (Honorable Mention Award 受賞)

他 7 件

【社会活動】

学会広島支部組織 IEEE SMC Hiroshima Chapter の Chair を務め、System Science, Human-Machine Systems, Cybernetics 分野を研究する教員や学生、企業研究者を対象に、研究会や学術講演会などの企画、運営を行った。特に、国際会議 IEEE IWCIA 2016 および 2017 では、General Chair を務め、成功を収めることができた。また、電気学会の技術委員会の委員を務めた。

その他、電気学会の調査・研究委員を務めたほか、地域の高校生に向けて、本学情報科学部主催「高校生による情報科学自由研究」のテーマ提供を行った。

2017 年 11 月	2017 10th IEEE International Workshop on Computational Intelligence and Applications (IEEE IWCIA 2017), General Chair
2017 年 10 月-2020 年 9 月	制御工学および機械学習の相互強化とその応用展開調査専門委員会
2017 年 4 月-2019 年 3 月	都市マルチエージェント・シミュレーション統合手法検討協同研究委員会
2016 年 11 月	IEEE IWCIA 2016, General Chair
2016 年 8 月, 2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究「進化的アート 生物の進化を利用した画像生成」(テーマ提供)
2015 年 1 月-2018 年 12 月	IEEE Hiroshima Section SMC Chapter 役員 (Chair)
2014 年 11 月-2016 年 10 月	省エネルギー都市の設計・評価に向けたマルチエージェント・シミュレーションと全体最適化技法研究委員会

氏名	日浦 慎作
職位	教授
研究分野	知覚情報処理、計測工学
研究キーワード	コンピュータビジョン、3次元画像計測、ミックスリアリティ(複合現実感)、コンピューショナルフォトグラフィ

カメラにより撮影した画像を解析することで実世界の情報を獲得するコンピュータビジョン(CV)と、計算機により魅力的な画像を生成するためのコンピュータグラフィックス(CG)、およびそれらの融合による複合現実感技術(MR)に関する教育研究を行っている。さらに近年ではデジタルファブリケーション技術(3D プリンタ等)を用い、実物体の見えを制御する研究にも取り組んでいる。大学運営では副理事(研究担当)、理事長補佐として主に研究振興・支援を担当している。

【教育活動】

情報分野では大学入学時点での知識・技能に大きな開きがあるため、1年前期の必修科目である「コンピュータ基礎」では必ず習得して欲しい必須項目と、高度な知識欲を満たす周辺の話題とのバランスに意を用いて講義を行っている。また3年後期「画像情報処理」では、それまでにほとんどの学生が履修している CG 関連科目と対比的に、実画像とその処理を獲得段階(カメラの構造・特性等)から解説し、今や誰もが利用するスマートフォンにおける画像処理なども取り上げながら身近な話題として親しめるような講義を志向している。

2016, 2017 年度	コンピュータ基礎
2016, 2017 年度	画像メディア工学特論
2016, 2017 年度	画像情報処理

【研究活動】

研究室では充実したスタッフと共同で CG、CV、MR に関する研究を幅広く展開している。特に当研究室は標準データセットのような既存データでなく、多種多様なセンサやパターン光照射など、画像獲得段階において工夫を凝らすことでより高度なシーン解析や CG 評価を行っている点が特徴的である。さらに他大学・研究機関と共同で多くの研究を行っており、大阪大学や電気通信大学とは 3D プリンタにより出力した物体の見えに関する研究を、また九州大学・産総研とは3次元計測に関する共同研究を実施している。

1. 馬場雅志, 中根智絵, 日浦慎作, チルトレンズのカメラキャリブレーションと CG による再現, 情報処理学会論文誌, Vol. 58, No. 2, pp. 605-614, 2017
2. D. Miyazaki, M. Nakamura, M. Baba, R. Furukawa and S. Hiura, Optimization of Illumination for Generating Metamerism, Journal of Imaging Science and Technology, Vol. 60, No. 6, pp. 60502-1-60502-15, 2016
3. D. Miyazaki, T. Shigetomi, M. Baba, R. Furukawa, S. Hiura and N. Asada, Surface normal estimation of black specular objects from multiview polarization images, SPIE Opt. Eng., Vol. 56, No. 4, pp. 041303-1-041303-17, 2016

4. 堀田祐樹, 芝優希, 小野智司, 古川亮, 日浦慎作, 川崎洋, プロジェクタ用符号化開口と階層的復元を用いた Depth from Defocus, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J99-D, No. 5, pp. 559-570, 2016
 5. T. Inazumi, J. Kwon, S. Hiura and M. Sakamoto, Texture Suggestion System Considering the Elderly's Preference on 3D Printing, 2018 AAAI Spring Symposium Series, 2018
 6. Y. Shiba, S. Ono, R. Furukawa, S. Hiura and H. Kawasaki, Temporal shape super-resolution by intra-frame motion encoding using high-fps structured light, Int. Conf. on Computer Vision (ICCV), 2017
 7. R. Mine, D. Iwai, S. Hiura, and K. Sato, Shape Optimization of Fabricated Transparent Layer for Pixel Density Uniformization in Non-planar Rear Projection, ACM Symp. on Computational Fabrication, 2017
 8. T. Kawamura, K. Nguyen, S. Yasugi, M. Okamoto, M. Ogura, S. Hiura, DFD2.0: Motion Robustness by Amplitude Domain Approach, Int. Conf. on Machine Vision Applications (MVA), 2017
 9. H. Kawasaki, M. V. Scarzanella, T. Hirukawa, R. Furukawa and S. Hiura, Simultaneous Independent Image Display Technique on Multiple 3D Objects, Asian Conference on Computer Vision (ACCV), 2016
 10. (特別・招待講演) Computational Photography : camera as an optical image processor, Int. Symp. on Imaging, Sensing, and Optical Memory (ISOM), 2017
 11. (特別・招待講演) コンピュータショナルフォトグラフィの基礎と最新動向, 第 153 回応用光学懇談会講演会, 2017
 12. Best Presentation Paper Award, PSIVT2017, 2017
- 他, 図書(共著)1 件, 国際会議 3 件, 特別・招待講演 5 件, 受賞 1 件, 国内口頭発表 32 件

【社会活動】

英国王立協会(Royal Society)と日本学術振興会が共催するプレミアムな研究交流事業である日英先端科学シンポジウムに対し、Planning Group Member として議題・講師選定や司会等の運営に携わった。また研究成果の社会還元としては、大手電機メーカーや化粧品メーカー等に対し研究コンサルティングを実施しており、その成果が市販デジタルカメラのオートフォーカス高性能化などに既に実用化されている。また犯罪捜査における監視カメラ映像の鑑定にも協力し、容疑者の逮捕立件につながったと聞いている。

2017 年 2 月-2017 年 3 月	科学研究費委員会 専門委員 審査第二部会 情報学小委員会
2016 年 4 月-2017 年 3 月	日本学術振興会 日英先端科学シンポジウム PGM
2012 年 4 月-	中国地域質感色感研究会 副委員長

氏名	廣門 正行
職位	講師
研究分野	代数幾何学
研究キーワード	代数多様体、特異点理論、スキーム理論

現在教員としての活動として、主に以下の a、b、c が挙げられます。

- 教育活動: 学部 1 年生向け解析学 I、II を中心に授業の面での活動を行うと共に、システム工学科 4 年生の卒業研究、大学院向け講義等を行っています。
- 研究活動: 専門分野(代数幾何学)における研究、および数学教育分野における活動を中心に進めています。
- 社会活動: 教育実習訪問指導、推薦入学者に対する入学前指導、ジャーナルの査読等を通じて、本格的な社会活動に繋げることが課題です。

比重としては、現在 a が最も重く、次に b、c と続きます。以下それぞれについて、より具体的に述べます。

【教育活動】

情報科学部1年生対象の解析学 I、II、解析学 I 演習を中心に、授業の面での教育活動を行っています。解析学 I は情報科学部1年生全員及び下年次生が対象で、受講学生数の面でかなりの規模となります。これ等基礎科目の講義を行うに際して、学生が不公平感を持たない様努めると共に、普段の演習問題、定期試験の問題において、既製品の使用は極力避け、本学の学生に合った形での講義・演習が実施できる様、留意しています。他方、学部4年生の卒業研究では、学術的に価値のある卒業論文が書けることを目標に活動を進めています。

2016, 2017 年度	解析学 I
2016, 2017 年度	解析学 I 演習
2016, 2017 年度	解析学 II
2016, 2017 年度	外書購読演習 I
2016, 2017 年度	数理科学特論 B
2016, 2017 年度	応用幾何学
2016, 2017 年度	教科教育法(数学)
2017 年度	線形代数学 II

【研究活動】

現在、専門分野(代数幾何学)における研究活動、および数学教育分野における活動を中心に行っています。前者では、代数多様体の分類理論の拡張・一般化の問題を扱っています。特に特異点理論に代表される、代数多様体の局所的性質の考察を進めています。以下 2)、3) の結果が得られました。(6、7 は同テーマの研究発表です。)

後者の数学教育分野に関する活動では、学部1年生向けの解析学の教科書 1) を共同執筆し、本学での学生に適した教材を提供出来る様努めています。4)、5) では数学教育学会における研究・発表活動(共著)を行いました。

- (著書) 桂利行[編], 岡崎悦明, 岡山友昭, 齋藤夏雄, 佐藤好久, 田上真, 廣門正行, 廣瀬英雄[共著], 理工系学生のための微分積分, 培風館, 2017

2. (論文) Masayuki Hirokado, Further evaluation of Wahl vanishing theorems for surface singularities in characteristic p , To appear in Michigan Mathematical Journal, 2019
3. (論文) Masayuki Hirokado, Canonical singularities of dimension three in characteristic 2 which do not follow Reid's rules, To appear in Kyoto Journal of Mathematics, 2018
4. (論文) 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の確率分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集, pp. 146-148, 2017
5. (論文) 田中輝雄, 佐藤学, 齋藤夏雄, 関根光弘, 廣門正行, 岡山友昭, 高等学校の統計分野における基本的な用語の定義の差異について, 数学教育学会 2017 年度春季年会予稿集, pp. 224-226, 2017
6. (研究発表) Masayuki Hirokado, Further evaluation of Wahl vanishing theorems for surface singularities in characteristic p , Workshop 'Algebraic varieties in positive characteristic and related topics', 2018
7. (研究発表) Masayuki Hirokado, Canonical singularities of dimension three in characteristic 2 which do not follow Reid's rules, Workshop 'Singularities in positive characteristic, fundamental groups and ramifications', 2017

【社会活動】

規模の大きな社会活動は行っておりません。現在活動中の、教育実習訪問指導、推薦入学者に対する入学前指導、ジャーナルの査読等を通じて、より規模の大きな社会活動に繋がられればと思っております。

氏名	弘中 哲夫
職位	教授
研究分野	コンピュータアーキテクチャ、計算機システム、システムソフトウェア
研究キーワード	リコンフィギャラブル コンピューティング、並列処理、ソフトウェア工学

教育活動・研究活動・大学運営の3つにおいてそれぞれの目的を達成するための新しい仕組みを考え、考えた仕組みを実現する事を自己の基本活動テーマにしている。教育研究活動では主に計算機アーキテクチャ分野では新しいコンピューティングの仕組みとしてリコンフィギャラブルコンピューティング分野、ソフトウェア開発支援分野ではビッグデータを活用したソフトウェア設計支援の仕組みに取り組む。また、大学運営では、大学組織全体のバランスを体系的に考えた運営の仕組みを教務運営中心に実現することに取り組んだ。この他、学生が自分の将来計画を見据えて教育研究に取り組めるようなキャリア教育を行いたいと思っている。

【教育活動】

学部の担当講義として、基礎演習、電気回路、コンピュータアーキテクチャ I、コンピュータシステム論を担当してきた。この中で特に電気回路に対する学生の受講意欲向上や学習効果を高めるため、他の担当教員と連携し、グループ学習や演習を取り入れたアクティブラーニングを実施し、学習意欲が向上するように工夫している。また、大学院教育ではコンピュータアーキテクチャ特論にアクティブラーニングを積極的に取り入れている。具体的には新規に開発した教材により、実際にコンピュータ設計を経験することで学部のコンピュータアーキテクチャ教育より一段深いコンピュータアーキテクチャへの理解を促進する教育を行っている。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	電気回路
2016, 2017 年度	コンピュータアーキテクチャ I
2016, 2017 年度	コンピュータシステム論
2016, 2017 年度	コンピュータアーキテクチャ特論
2016, 2017 年度	システムレベル設計検証特論
2016 年度	情報科学講究 I , 情報科学講究 III
2017 年度	情報科学講究 V

【研究活動】

2017 年度からコンピュータアーキテクチャ研究室はコンピュータシステム研究室のメンバーを迎え入れ新しい体制のコンピュータアーキテクチャ研究室となった。新体制になったのを機会に研究室内の研究体制を見直し、研究テーマを従来のコンピューティングハードウェアを中心とした研究領域から、新メンバーの知見を大きくいかせるハードウェアおよびソフトウェアの両アーキテクチャ領域を組み合わせた研究テーマに取り組むようになった。

1. Yohei Nose, Akira Kojima, Tetsuo Hironaka, Consideration of Online Learning of Radial Basis Function Network for Engine Control and Acceleration using FPGA, Proc.

- of the 32nd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2017), pp. 696–699, 2017
2. Yuji Yamashita, Kazuya Tanigawa, Tetsuo Hironaka, Takashi Ishiguro, A prototype design of reconfigurable device SePLD in 0.6um CMOS process, Proc. of the 32nd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2017), pp. 579–582, 2017
 3. Masashi Nishimoto, Hideyuki Kawabata, Tetsuo Hironaka, Effective Indexing based on the TF-IDF Method with Selected Terms for Discovering Usages of APIs from Open Source Repositories, Proc. of the 32nd International Technical Conference on Circuits/Systems, Computers and Communications (ITC-CSCC 2017), pp. 684–687, 2017
 4. Yoshiki Ebisuhamma, Daichi Ishizaki, Atsushi Kubota, Kazuya Tanigawa and Tetsuo Hironaka, Prototyping a C-to-OpenCL Translator that Generates FPGA-CPU Hybrid Execution Code, The International Conference for High Performance Computing, Networking, Storage and Analysis, 2017

【社会活動】

研究を中心とした学会活動として、国際会議の運営、電子情報通信学会の研究会運営、論文誌運営、情報処理学会の論文誌運営に参加している他、中四国地区中心に教育関連の学会の運営に携わっている。また、オープンキャンパス研究紹介に参加し、積極的に高校生に本学のPRを行った。さらに、大学運営にかかわる社会活動としては、公立大学の評価方法を研究し提言する公立大学政策・評価研究センター連携研究員としての活動を行った。この他に、自らの専門性を用いた社会活動として高等裁判所、地方裁判所所属の専門委員として特許の紛争にかかわる裁判における専門員として裁判官に特許に関する知見を提供した。

2018年3月-2018年12月	Advisory Committee member of the 2018 International Conference on Field-Programmable Technology (FPT'18)
2016年8月, 2017年8月	オープンキャンパス研究室紹介, 広島市立大学
2015年5月-2017年5月	電子情報通信学会 リコンフィギャラブルシステム研究専門委員会 専門委員
2015年5月-2019年5月	電子情報通信学会 ソサイエティ論文誌編集委員会査読委員
2015年4月-2018年3月	電子デバイス・回路・照明・システム関連教育・研究ワークショップ実行委員会 委員
2014年10月-2018年9月	東京高等裁判所, 東京地方裁判所および大阪地方裁判所所属 専門委員
2013年8月-2015年8月	公立大学政策・評価研究センター連携研究員
2013年4月-2017年3月	情報処理学会論文誌 TSLDM (Transactions on System LSI Design Methodology) 編集委員

氏名	樋脇 治
職位	教授
研究分野	医用生体工学・生体材料学、神経科学一般
研究キーワード	脳機能計測、非侵襲的生体計測、神経電気磁気学

研究面において新たな研究テーマを設定した。脳機能の非侵襲的計測解析に関して、従来なかった高時間分解能と高空間分解能を両立させる新しい技術の新規開拓を行ない、先行研究がほとんどないオリジナリティの高い研究を開始した。この研究については、製品として実現するべく、国内出願はもとより、欧米への外国出願を行ない、海外への事業展開を目指している。既に企業と協力して事業化製品化に向けた研究開発を実施している。社会活動では、地域での社会人や小中学生を対象とした技術関連の啓蒙活動に参加した。今後、研究成果の社会への還元を行なうべく、産学連携による研究成果に基づく製品化の実現およびアウトリーチ活動を進める予定である。

【教育活動】

学部5科目、大学院前期課程1科目を担当した。学部科目では、学生が着実に知識を習得できる講義を心がけた。区切りごとにその内容についての演習科目を解かせるようにし、確実に知識を習得するとともに受け身ではない学習を行なえるようにした。大学院前期課程科目である「生体情報学特論」では、主に脳情報科学に関連する視聴覚教材を活用し、学生が課題について調べた内容をプレゼンテーションするとともに学生同士がディスカッションを行うことにより、自ら調査し考えをまとめて述べる能力を涵養するようにした。また、視聴覚教材を英語で視聴することにより英語能力を伸ばすようにした。

2016, 2017 年度	生体情報工学
2016, 2017 年度	生体情報学特論
2016, 2017 年度	電気電子計測
2016, 2017 年度	電子情報計測
2016, 2017 年度	電気磁気学
2016, 2017 年度	脳情報工学

【研究活動】

脳の非侵襲的計測解析について、従来なかった高時間分解能と高空間分解能を両立させる新しい技術に関する研究を推進した。脳底部から脳に近赤外光を透過し、頭皮上で透過光を計測することにより脳活動に由来する信号を計測する手法を開発した。この手法の妥当性・有効性を確認するためにコモンマーモセットを用いて体性感覚誘発信号の計測を行なった。その結果、大脳皮質の第一次体性感覚野直上の頭皮の限局した部位に速い潜時で体性感覚誘発信号が計測されることを確認した。これにより、本開発手法が高時間分解能と高空間分解能を両立する非侵襲的脳機能計測手法であることを示した。

1. Osamu Hiwaki, Hideki Miyaguchi, Noninvasive measurement of dynamic brain signals using light penetrating the brain, PLOS ONE, Vol. 13, No. 1, e0192095, 2018
2. Osamu Hiwaki, Noninvasive measurement technique for fast dynamic brain signals by light penetrating the brain, 第 40 回日本神経科学大会, 2018

3. (招待講演) 樋脇治, 「経頭蓋磁気刺激の基礎と応用」日本磁気科学会第19回研究会, 2017
4. (特許出願)発明者 樋脇治, 日本国出願, 脳機能計測装置、特願 2017-018219, 米国出願, 脳機能出願装置, 15640833, 英国出願, GB1711246.7, 印国出願, 201714023485, PCT 出願, PCT/JP2017/25030

【社会活動】

地域における技術者養成に関する活動として、ET ソフトウェアデザインロボットコンテスト中四国地区実行委員として活動した。また、小中学生を対象としたロボコン大会であるロボカップジュニアジャパンの広島ブロック運営委員としても活動した。学会関係では、IEEE EMB West Japan Chapter Vice Chairman、日本生体医工学会・中国四国支部評議員、大阪科学技術センター電磁界(EMF)に関する調査研究委員会委員を務めた。また、2016年7月には広島皆実高等学校において模擬授業を行なった。

2016年4月 -	ET ソフトウェアデザインロボットコンテスト中四国地区実行委員
2016年4月 -	ロボカップジュニアジャパン広島ブロック運営委員
2015年1月 -	IEEE EMB West Japan Chapter Vice Chairman
1997年1月 -	大阪科学技術センター電磁界(EMF)に関する調査研究委員会委員

氏名	福島 勝
職位	准教授
研究分野	レーザー分光
研究キーワード	量子力学、化学物理

教育活動・研究活動・社会活動の3つの項目に関して、それぞれ、可能な限り丁寧に取り組み、各項目で満足できる成果が得られたと思われる。

【教育活動】

担当科目に対して、幅広い観点から、教育・指導できた。卒業研究に関しても各年、2名の卒論生を指導した。

2016, 2017 年度	システム工学実験
2016, 2017 年度	外書購読演習 II
2016, 2017 年度	化学概論
2016, 2017 年度	外書購読演習 I
2016, 2017 年度	アナログ素子・回路特論
2016, 2017 年度	物理・化学実験
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 $\alpha-2$ (D)

【研究活動】

専門分野である分子分光分野で、国際レベルの研究水準を維持・継続でき、新たな研究テーマの発見にもつながった。

1. Dispersed fluorescence spectroscopy of the SiCN A 2D - X 2P system : observation of some vibrational levels with chaotic characteristics, J. Chem. Phys., vol. 145, no. 21, 214304 (19 pages), 2016.
2. Electronic spectrum of jet cooled SiCN, J. Chem. Phys., vol. 145, no. 12, 124304 (13 pages), 2016.
3. Vibrational Assignment for the NO₃ Radical in the Ground Electronic State, 日本化学会春季年会, 2018
4. 含金属フリーラジカルのジェット分光 : SiCN X $\sim 2\Pi$ の振電構造, 日本化学会春季年会, 2018
5. Vibrational structure of the X 2A₂' state of NO₃, 第 18 回分子分光研究会, 2018
6. 2C-R4WM Spectroscopy of the NO₃ B $\sim 2E'$ - X $\sim 2A_2'$ system, The 2nd Asian Workshop on Molecular Spectroscopy, 2018
7. (特別・招待講演) 3 原子分子の不規則な(カオス的)振動構造, 日本分光学会中国四国支部 年次講演会, 2018
8. NO₃ X 2A₂' 状態の振動構造, 第 11 回分子科学討論会, 2017
9. Isomerization reaction of the MgNC/MgCN X $\sim 2\Sigma^+$ system, 34th International Symposium on Free Radicals, 2017
10. (特別・招待講演) SVL DF and 2C-R4WM spectroscopies of NO₃, 34th International Symposium on Free Radicals, 2017

11. Isomerization reaction of the $\text{MgNC/MgCN } X^2\Sigma^+$ system, International Symposium on Diversity of Chemical Reaction, 2017
12. Vibronic Coupling in the X^2A_2' state of NO_3 , 1st Asian Workshop on Molecular Spectroscopy, 2017
13. SVL Dispersed Fluorescence Spectra of NO_3 - Interpretation of the ν_4 progressions -, 第 17 回分子分光研究会, 2017
14. 含金属ラジカルの発光スペクトル, 日本化学会春季年会, 2017
15. $\text{NO}_3 \text{ B } 2E' - X \text{ } 2A_2'$ 遷移の 4WM と LIF スペクトル, 第 10 回分子科学討論会, 2016
16. Vibrational Analysis of the $\text{SiCN } X^2P$ System, 71st International Symposium on Molecular Spectroscopy, 2016
17. 2C-R4WM Spectroscopy of Jet Cooled NO_3 , 71st International Symposium on Molecular Spectroscopy, 2016
18. $\text{NO}_3 \text{ B } 2E' - X \text{ } 2A_2'$ 遷移の 2C-R4WM 分光, 第 16 回分子分光研究会, 2016

【社会活動】

所属する日本分光学会の、特に中国四国支部の活動、および、分子分光研究会の運営に、これまでどおり、継続的に貢献できた。高校生自由研究にて、ロボット講座を担当した。特に、2016 年度は、担当生徒が優秀賞を受賞した。

2016, 2017 年度	高校生自由研究
2016 年 4 月-	日本分光学会 中国・四国支部 代議員
2000 年 3 月-	分子分光研究会 運営委員

氏名	福田 浩士
職位	准教授
研究分野	生体生命情報学、医用生体工学・生体材料学、リハビリテーション科学・福祉工学
研究キーワード	脳情報工学、生体情報工学、計算論的神経科学、生体医工学、ブレイン-コンピュータ・インタフェース

教育、研究および社会活動に通底する活動テーマは脳情報工学分野からの医療・福祉への貢献である。エフォートは教育活動 55%、研究活動 35%、社会活動5%、大学運営5%として活動した。教育活動では学科教育の核となる生体信号計測技術に関連する科目において学生にわかりやすい授業を提供することを心掛け、実践した。研究活動では、医療・福祉系分野の大学と高齢者の自動車運転支援に関する研究およびパーキンソン病患者のリハビリテーション支援に関する共同研究を行い、成果を得た。

【教育活動】

学部教育では基礎科目であるプログラミングⅡと電気回路、実践的科目の医用情報科学実験Ⅰ・Ⅱ、基礎と実践の橋渡しとなる専門科目である生体信号処理(アナログ信号処理)、医用プログラミングを担当し、生体信号計測技術を習得するための教育を行った。また、生体信号処理が 2017 年度からアナログ信号処理に名称変更するにあたって、医用プログラミングや医用情報科学実験Ⅰ・Ⅱの内容により結びつくように内容を改善し、生体信号計測に関するカリキュラムシーケンスを一層充実させることができた。

2016, 2017 年度	電気回路
2016, 2017 年度	医用情報科学実験Ⅰ
2016, 2017 年度	生体システム工学特論
2016, 2017 年度	脳情報工学特論
2016, 2017 年度	プログラミングⅡ
2016, 2017 年度	プログラミングⅡ 演習
2016 年度	生体信号処理
2016, 2017 年度	医用プログラミング
2016, 2017 年度	医用情報科学実験Ⅱ
2016 年度	医用情報科学
2016 年度	生体信号処理
2017 年度	医用情報科学概論
2017 年度	アナログ信号処理

【研究活動】

2016 年度、2017 年度は広島大学大学院医歯薬保健学研究科、県立広島大学保健福祉学部、森ノ宮医療大学保健医療学部と共同で進めている高齢者を対象とした自動車運転支援に関する研究やパーキンソン病患者を対象としたリハビリテーション支援に関する研究のウェイトを増やし、研究を進めている。高齢者やパーキンソン病患者のデータを収集できる環境が整い、医工連携の成果が出始めた。

1. Kazuki Nakada, Miwako Tsunematsu, Takuya Kihara, Takumu Hattori, Tatsuji Tokiwa, and Hiroshi Fukuda, CISTEM Education with Robotic Platform: For Human-Human Synchrony and Human-Machine Synchrony, Journal of Robotics and Mechatronics, Vol. 29, No. 6, pp. 969-979, 2017
2. 福田浩士, 國重雅史, 飯田忠行, 宮口英樹, 原田俊英, 感覚-運動機能研究のための実験システム開発環境の構築と医工連携, 日本神経回路学会誌, Vol. 23, No. 4, pp. 153-161, 2016
3. 福田浩士, 中野靖久, 藤原久志, 香田次郎, 常盤達司, 医療分野を担う情報処理技術者の育成ー広島市立大学情報科学部医用情報科学科の学生実験ー, 日本神経回路学会誌, Vol. 23, No. 4, pp. 146-152, 2016
4. 國重雅史, 福田浩士, 飯田忠行, 石附智奈美, 宮口英樹, ドライビングシミュレータ時の運転行動の違いが健常高齢者の走行データ・眼球運動のパフォーマンスに与える影響, 第5回全国作業療法学系大学院ゼミナール, 2017
5. 國重雅史, 福田浩士, 飯田忠行, 石附智奈美, 宮口英樹, ドライブシミュレーター実施時における健常高齢者の事故因子についてー自律神経の変化, 注視領域を対象とした検討ー, 平成29年神経行動作業療学会, 2017
6. 中田一紀, 恒松美輪子, 木原琢也, 服部託夢, 常盤達司, 福田浩士, ロボットプラットフォームを活用した CISTEM 教育の試み ～人と人、人と機械との同調に向けて～, スマートインフォメディアシステム研究会(SIS), 2017
7. (特別・招待講演) 福田浩士, リハビリテーションと医用情報科学, 日本医工学治療学会第33回学術大会, 2017
8. 國重 雅史, 福田 浩士, 飯田 忠行, 石附 智奈美, 宮口 英樹, 健常高齢者の上肢二点間到達運動時における運動プランニングの特徴ー脳波による検討ー, 第50回日本作業療法士学会, 2016
9. 中西 一, 中西 遥, 福田 浩士, 石附 智奈美, 宮口 英樹, パーキンソン病患者の上肢反復動作における動作特徴についてーパーキンソン病患者の上肢反復動作における動作特徴についてー, 第50回日本作業療法士学会, 2016
10. 2017 年度知的環境アプリケーションアイデアコンテスト最優秀賞, 電子情報通信学会知的環境とセンサネットワーク研究会, 2018

他 8 件

【社会活動】

電子情報通信学会の査読委員として活動した。また、広島大学、県立広島大学、森ノ宮医療大学といった国内大学との共同研究を行った。また、マツダ株式会社パワートレイン開発本部第1走行・環境性能開発グループからの技術相談を受けた。さらに、コンピュータサイエンス塾の講師として小学生に対してデジタルとアナログというタイトルで講義し、受講生、保護者から高い評価を得た。

2018 年 1 月-2019 年 12 月	電子情報通信学会査読委員
2017 年 1 月-2018 年 12 月	電子情報通信学会査読委員
2016 年 1 月-2017 年 12 月	電子情報通信学会査読委員
2012 年 4 月-	電子情報通信学会査読委員

氏名	藤坂 尚登
職位	教授
研究分野	通信・ネットワーク工学、電子デバイス・電子機器
研究キーワード	通信・信号処理ハードウェア、量子力学現象応用回路、非線形回路解析

教育と研究においては、学生が思考を怠らないこと、創造性を養うこと、即戦力と未来を開拓する力の両方を養成することの3点を目標に掲げている。

学部3年生までは、受講者に常に質問を投げかける、演習に多くの時間を割くなど、思考することを怠らない授業を心掛けた。研究室に配属された学部4年生や大学院生は、創造性豊かな技術者・研究者に成長するよう、基盤としての物理学から、エレクトロニクス、通信・情報理論、信号・情報処理アルゴリズム、数値解析法など、広い知識を吸収し活用することが必要な研究テーマに取り組んだ。また、研究室配属学生には実践的な現在の技術と未来に必要となる可能性のある知識の両方を習得できるよう、実習や研究の機会を与えた。

【教育活動】

通信技術と関連するハードウェアに関する授業を担当している。電気回路では、グループで議論しながら問題を解き、解法と解答のプレゼンテーションを行う形式の演習に多くの時間を割き、学生の積極性を引き出す工夫をした。電子回路Ⅱでは、集積回路構成法に焦点を当て、自らの回路設計を回路シミュレータにより評価できる現実感を味わせる演習を実施した。通信工学の授業でも同様に、数値シミュレーションやソフトウェア無線システムを用いた実演を交え、現代の無線デジタル通信の物理層に関する基礎知識を提供した。非線形回路論では、視覚的な解説と学生自らが数値解析を行う多くの課題を通して、非線形システムの解析法、非線形現象応用技術、カオス理論を体得できる授業を行った。

2016, 2017 年度	電気回路
2016, 2017 年度	電子回路Ⅱ
2016, 2017 年度	通信工学Ⅱ
2016, 2017 年度	非線形回路特論

【研究活動】

量子力学現象を応用した通信・信号処理ハードウェアに関する研究を柱として活動している。CMOS 集積回路の微細化が限界を迎えつつある今日、メゾスコピックな物理系に生じる量子力学現象を積極的に利用したデバイスとその応用回路に関する研究は非常に重要である。私は、汎用コンピューティングではなく、情報化社会のもう一方の基盤である通信とその信号処理に特化した量子現象応用回路に関する研究を推進した。また、全ての能動デバイスは非線形な特性を持つため、応用回路の解析は容易ではなく、非線形数学分野の理論を基に高精度かつ効率的に回路解析を行う研究も同時に進めた。

さらに、研究を通じたグローバル人材育成の一環として、学生には研究成果を国内学会だけでなく国際会議の場で発表することを勧め、指導している大学院生は博士前期課程在籍中に少なくとも1件、多ければ5件程度を国際会議で発表した。

1. Y. Suzuki, H. Fujisaka, and T. Kamio, Sigma-Delta Domain Bandpass and Band-elimination Wave Filters, Nonlinear Theory and Its Applications, IEICE, Vol. 8, No. 4, pp. 319-341, 2017
2. K. Tsuji, K. Terada, R. Takeda, and H. Fujisaka, Study on Threshold Voltage Evaluated by Charge-Based Capacitance Measurement, IEICE Transactions on Electronics, Vol. E99-C, No. 4, pp. 466-473, 2016
3. S. Hayakawa, H. Fujisaka, and T. Kamio, A Numerical Model of a Frequency Discriminator for Terahertz Sensing and Communication Using Photoelectric Detectors, Int'l Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2017
4. S. Hamada, A. Kawane, H. Fujisaka, and T. Kamio, A Probabilistic Model of Nano-Carbon Materials Based on Probabilistic Current, Int'l Symposium on Nonlinear Theory and its Applications, 2016

他、学術誌 1 件、国際会議論文 11 件

【社会活動】

本学を訪れる高校生には科学と技術に興味を持ってもらうべく研究を易しく紹介するとともに、日本の科学と技術のレベル維持に貢献すべく高校の数学や物理の重要性も説いた。また、産学連携研究発表会を通して研究成果の社会還元も行った。

一方、学術的な国内集会、国際会議、論文誌編集などの学会活動にも貢献しつつ、研究集会に参加する研究者に未開の研究分野を開拓する可能性を秘めた研究事例を提供する姿勢を維持することに努めた。

2017 年-2021 年	電子情報通信学会 非線形問題専門委員会顧問
2017 年	IEICE International Symposium on Nonlinear Theory and its Applications 2017, General Co-chair
2016 年 6 月-2017 年 5 月	電子情報通信学会 非線形問題専門委員会委員長
2016 年-2017 年	Nonlinear Theory and its Applications, IEICE, Special Section on Nonlinear Circuits and Systems and Their Applications, Guest Associate Editor
2015 年-2017 年	高校生大学訪問における研究室紹介, 広島市立大学
2013 年 6 月-2017 年 5 月	IEICE Trans. on Fundamentals Associate Editor
2013 年-2017 年	産学連携研究発表会, 広島市立大学

氏名	藤原 久志
職位	准教授
研究分野	物理化学、計測工学、生物物理学
研究キーワード	計測・制御プログラミング、界面の物理化学、細胞動態、ナノ計測、光学顕微鏡、光干渉、高速画像記録

教育・研究および社会活動では、所属する医用情報科学科・専攻の目指すところ、すなわち「情報」「自然科学」「工学」を基礎とした医学と情報科学の融合領域における教育・研究に留意して、授業や研究、学会活動等を展開した。

教育と大学運営の双方で特筆すべき活動として、2017 年度には、第2期中期計画の重点取組項目の筆頭に挙げられる3学部合同基礎演習(中期計画での名称は“3学部合同ゼミ”)の実施内容・体制の骨子作成に中心的に携わった。

さらなる大学運営への貢献としては、職員過半数代表者として、労基法その他関連諸法令において責務として規定されている事項を遂行した。また、公立大学法人広島市立大学が学生、教職員にとってより良い履修環境、就業環境であり、地域に貢献できるように努めた。

【教育活動】

「情報」「自然科学」「工学」の3分野を基礎とする医用情報科学分野で活躍できる情報技術者の育成に努めた。

授業としては、下記の表に示す講義・演習・実験科目を準備・遂行した。特に、医用情報科学実験Ⅱでは、「デジタル信号処理プログラミング」を担当し、デジタル信号の処理・解析ソフトウェア作成技術を指導した。

卒業研究教育では、医用画像工学における「光学顕微鏡による計測・解析手法の開発」との位置づけで、「平面脂質二分子膜の形成確認のための電気-画像同時計測装置の開発」、「定量位相顕微鏡の改良」、「一次元光検出素子と XY 自動ステージを用いた顕微鏡計測装置の試作」を指導した。

2016, 2017 年度	光計測システム特論
2016, 2017 年度	応用光学
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	機器分析
2016, 2017 年度	光バイオイメージング
2016, 2017 年度	医用情報科学実験Ⅱ
2016, 2017 年度	外書講読演習Ⅱ
2016 年度	医用情報科学
2017 年度	医用情報科学概論
2017 年度	幾何光学・波動

【研究活動】

「膜タンパク質のアミノ酸配列の統計的解析」と「医用画像工学分野に資する研究テーマの創設」の二つの課題を遂行した。

「膜タンパク質のアミノ酸配列の統計的解析」では、創薬研究において重要な膜タンパク質のアミノ酸配列の統計的解析を行い、日本蛋白質科学会年会等で発表を行った。

「医用画像工学分野に資する研究テーマの創設」では、まず「高速度画像記録装置の開発」の成果を日本バイオイメーシング学会で発表した。さらに、「光学顕微鏡による計測・解析手法の開発」との位置づけで、「平面脂質二分子膜の形成確認のための電気-画像同時計測装置の開発」、「定量位相顕微鏡の改良」、「一次元光検出素子と XY 自動ステージを用いた顕微鏡計測装置の試作」に取り組んだ。

1. 福田浩士、中野靖久、藤原久志、香田次郎、常盤達司, 医療分野を担う情報処理技術者の育成—広島市立大学情報科学部医用情報科学科の学生実験—, 日本神経回路学会誌, Vol. 23, No. 4, pp. 146-152, 2016
2. 北村 凱平、竹内 遼、青山 正人、藤原 久志、増谷 佳孝, 乳房 X 線画像における病変の良悪性鑑別のための CNN による部分領域学習と多数決処理, 生体医用画像研究会 第 4 回若手研究会, 2017
3. 藤原 久志、津崎 祐二、石渡 孝, 一回貫通型および複数回貫通型膜タンパク質の膜貫通領域のアミノ酸配列解析, 第4回生命分子科学研究会, 2017
4. 藤原久志、洲崎悦子, 高速度画像記録装置の構築とバイオイメーシングへの応用, 第 25 回日本バイオイメーシング学会, 2016
5. 藤原 久志、津崎祐二、石渡孝, 1回貫通型および複数回貫通型膜タンパク質のアミノ酸配列の統計的解析, 第 16 回日本蛋白質科学会年会, 2016

【社会活動】

2017 年 11 月 23、24 日に、JMS アステールプラザで開催された「平成 29 年度 日本結晶学会年会」の生物系のプログラム委員を務めた。本学会は、多様な分野(物理・鉱物系、化学系、生物系)に亘って、結晶についての議論を行う学会である。同年会の生物系のプログラム委員として、学会のプログラム作成やシンポジウムの企画・遂行を行った。特に、企画したシンポジウム「放射光X線利用による核酸構造研究の新展開」においては、核酸(医薬)を基盤とした高機能生体分子の解析と設計の研究について、第一線でご活躍されている先生方にご紹介頂き、最新展望を議論することができた。医学と結晶学の融合分野に対する医用情報科学の貢献を模索する良い機会となった。

2017 年 10 月	大学訪問(沼田高校)
2017 年	平成 29 年度 日本結晶学会年会 プログラム委員(生物系)

氏名	藤原 真
職位	講師
研究分野	ナノ材料、応用物理学一般、質量分析、N 体シミュレーション
研究キーワード	多粒子シミュレーション、多体問題専用計算機、フーリエ変換(イオンサイクロトロン共鳴)質量分析、FT-ICR、ナノ材料、ポーラスシリコン、光物性

教育活動としては、新しく担当した科目の授業内容が改善され形になってきた。物理系の科目は基礎知識の十分でない学生に対してどのように教えていくのかが永遠のテーマとなっている。研究活動としては、FT-ICR 質量スペクトルのリアルシミュレーションを中心に取り組み徐々に成果が出ているが、さらにこのテーマを推し進めていきたい。社会活動としては、研究成果の社会還元、また産学連携による研究推進という観点から発表を行っている。

【教育活動】

光エレクトロニクス、情報物性特論ⅠとⅡは新しく担当した科目であったため、教材の選定や授業内容について改善を進めてきた結果、ようやく形になってきた。物理系の科目では物理の基礎的知識が十分でない学生に対して興味をもってもらいながら物理の基礎をどのように学んでもらうのがよいか検討しながら改善を進めている。

2016, 2017 年度	物理学概論
2016, 2017 年度	情報物性特論Ⅰ
2016, 2017 年度	光エレクトロニクス
2016, 2017 年度	情報物性特論Ⅱ
2016, 2017 年度	テクニカルリーディング演習
2016, 2017 年度	物理学
2016, 2017 年度	物理化学実験
2016 年度	基礎実験 D
2017 年度	情報科学基礎実験 α

【研究活動】

FT-ICR 質量スペクトルのリアルシミュレーションを中心に取り組んだ。GRAPE6 によるシミュレーションプログラムはさらにパラメータの調整を進め 10,000 粒子によるシミュレーションをより高速に計算できるようにもっていきたい。その後様々な測定条件に対して計算を行い、とくにこれまで計算できなかった高磁場中における質量分析計内でのイオンの挙動とスペクトルの形状の関係等についてデータをさらに蓄積分析評価する。また、引き続き NVIDIA の GPU を搭載した PC を GPGPU として利用することでより高速な多粒子シミュレーションの実現を目指してプログラムの開発を行っていく。

1. 大澤、桑田、田中、藤原、廣瀬、小田部, 理工系学生のための基礎物理学[Web アシスト演習付], 培風館, 2017
2. K. Tanaka, H. Imatoku, M. Fujiwara, N. Happo and S. Takahashi, A Modeling of Eigen-States in $\text{In}_{0.53}\text{Ga}_{0.47}\text{As}/\text{In}_{0.52}\text{Al}_{0.48}\text{As}$ Multi-Quantum Wells Structure Using

Photocurrent Spectroscopy, Proceedings of 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications, pp. 681–684, Mexico, 2017

3. K. Tanaka, M. Fujiwara, N. Happo and S. Takahashi, Minibands of Eigen-State Energies of $\text{In}_{0.53}\text{Ga}_{0.47}\text{As}$ Multi-Quantum Wells Lattice-Matched to InP, Proceedings of 17th International Conference on Numerical Simulation of Optoelectronic Devices, pp. 61–62, Denmark, 2017
4. Makoto Fujiwara, Naohisa Happo, Koichi Tanaka, Characteristics of complicated peak coalescence phenomena on FT-ICR mass spectra at high magnetic field, The 7th Asia Oceania Mass Spectrometry Conference, Singapore, 2017

【社会活動】

研究成果の社会還元、また産学連携による研究推進という観点から地域貢献事業発表会、産学連携研究発表会において発表を行った。

2017 年 11 月	2017 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2017 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2017, 広島市立大学
2016 年 11 月	2016 広島市立大学の地域貢献事業発表会, 広島市立大学
2016 年 9 月	広島市立大学産学連携研究発表会 2016 ～災害に強いまちづくり～, 広島市立大学

氏名	舟阪 淳一
職位	准教授
研究分野	計算機システム・ネットワーク
研究キーワード	インターネット、ネットワークキャッシュ、コンテンツデリバリ、P2P ネットワーク

教育活動については例年通りに進めているところもあるが、中学生対象のプログラミング講座の講師を担当したことにより、いままでとは異なる教え方にも気づくようになっている。研究活動については学生の教育とからめながら、学外の研究者との議論を大事にして進めてきている。2016、2017 年度はひろしまコンピュータサイエンス塾実行委員会副委員長および委員長をつとめることになったため、比較的多くの時間と労力を割いて対応した。大学執行部の方針が十分に伝わって来なかったため、時間と手間が浪費されたように思える。また 2018 年度以降の実施体制について検討する時間が十分にいただけなかったのは残念である。

【教育活動】

以前より担当しているプログラミング I・同演習(2017 年度代表教員)、ネットワーク設計・同演習、および情報ネットワークについてはマンネリ化しないように毎年資料を見直して実施してきた。またテクニカル・リーディング演習では研究室の分担の一部を担当し、2017 年度は研究室の代表教員の立場をつとめた。2016 年度からはプログラミング II に加えて同演習も担当し、連携した課題設定などを工夫した。2016 年度は大学院講義「情報通信方法特論」の担当を開始したが、井上博之先生が学外研修のため一人で担当した。この年度は試行錯誤的に実施したが、井上先生との分担となった 2017 年度からは、より充実した内容となるように更新して実施した。

2016, 2017 年度	プログラミング I・同演習
2016, 2017 年度	ネットワーク設計・同演習
2016, 2017 年度	情報通信方法特論
2016, 2017 年度	情報ネットワーク
2016, 2017 年度	プログラミング II・同演習
2016, 2017 年度	テクニカル・リーディング演習

【研究活動】

2016 年度も引き続き PR-SCTP と順不同配送を用いて高速で順序逆転の少ない動画ファイルのダウンロード方式を評価し、国際会議で1件(リスト2)発表した。引き続き論文投稿を進めている。2016、2017 年度は複数の経路上に複数の TCP 接続を確立してプログレッシブダウンロードの動画再生レートを向上させる技術について研究を進めた。結果として国際会議にて1件(リスト3)、国内研究会にて1件(リスト5)の研究発表を行った。また IoT(Internet of Things)環境におけるアシュアランスについて国際会議のパネリストを要請され、発表・討論を行った(リスト4)。なおプログラミング I・同演習で使用する教科書を更新、上梓している。

1. 島和之、舟阪淳一、藤原真、三村和史、河野英太郎、佐藤康臣、情報科学部学生のための C 言語の基礎 第3版, 大学教育出版, 2016

2. Junichi Funasaka and Kazuya Takeda, Evaluation on Required Time and Arrival Order of Blocks for Segmented File Downloading Methods Using PR-SCTP and Unordered Delivery, Proc. 36th IEEE ICDCS Workshops, pp. 140-145, 2016
3. Hiroaki Horiba, Tokumasa Hiraoka, and Junichi Funasaka, A Progressive Download Method Based on Timer-Driven Requesting Schemes Using Multiple TCP Flows on Multiple Paths, Proc. 37th IEEE ICDCS Workshops, pp. 26-31, 2017
4. Junichi Funasaka, Assurance in IoT (Internet of Things), 16th International Workshop on Assurance in Distributed Systems and Networks, 2017
5. 舟阪淳一, 複数経路において複数の接続を確立するプログレッシブダウンロード方式の到着順序を考慮した要求方式, 電子情報通信学会ネットワークシステム研究会, 2017

【社会活動】

2016 年度には電子情報通信学会和文論文誌 B 特集号ネットワークソフトウェア技術とその応用特集号編集委員をつとめた。国際会議 ADSN2016 の Vice Program Chair をつとめた。また国際会議 ASON2016、ASON2017 のプログラム委員をつとめた。2017 年度には国際会議 ADSN2017 のプログラム委員もつとめている。2017 年 8 月 24、25 日には情報科学研究科ひろしまコンピュータサイエンス塾「中学生対象プログラミング講座(初級)」の講師をつとめた。実施後のアンケートからは8割以上の受講者に興味をもってもらえ、内容を理解してもらえたと考える。また事業を地域貢献事業発表会で紹介した。

2017 年 11 月	地域貢献事業発表会「ひろしまコンピュータサイエンス塾」
2017 年 8 月	情報科学研究科ひろしまコンピュータサイエンス塾実行委員会・中学生対象プログラミング講座(初級)

氏名	古川 亮
職位	准教授
研究分野	マルチメディア・データベース
研究キーワード	画像処理、画像認識、コンピュータグラフィックス、仮想現実感

研究活動では 3 次元内視鏡の研究を推進し、top conference での発表や、論文賞受賞の成果を得た。教育活動では、担当講義でのアクティブラーニングの導入を進めた。

【教育活動】

コンピュータグラフィックス II については、アクティブラーニングの推進のために、学生に、CG についての知識を発表してもらう機会を毎回とるようにした。

知能工学実験、線形代数学演習 I については、学生からの質問について、的確にこたえることを心掛けた。

2016 年度	コンピュータグラフィックス II
2016 年度	線形代数学演習 I
2016 年度	知能工学実験

【研究活動】

3 次元内視鏡の研究を推進し、ICCV、ECCV などの top conference での発表や、論文受賞ができたことが成果といえる。

1. Ryo Furukawa, 他, Auto-calibration Method for Active 3D Endoscope System Using Silhouette of Pattern Projector, PSIVT , pp. 222-236, 2017
2. Yuki Shiba, 他, Temporal Shape Super-Resolution by Intra-Frame Motion Encoding Using High-Fps Structured Light, ICCV 2017, 2017
3. Ryo Furukawa, 他, Depth estimation using structured light flow--analysis of projected pattern flow on an object's surface--, ICCV 2017, 2017
4. Ryo Furukawa, 他, 3D Endoscope System Using Asynchronously Blinking Grid Pattern Projection for HDR Image Synthesis, CARE, , 2017 ,
5. Hiroshi Kawasaki,他, Calibration technique for underwater active oneshot scanning system with static pattern projector and multiple cameras, WACV 2017, 2017
6. Ryo Furukawa, 他, Shape Acquisition and Registration for 3D Endoscope Based on Grid Pattern Projection, ECCV, pp. 399-415, 2016
7. 堀田 祐樹,他, プロジェクタ用符号化開口と階層的復元を用いた Depth from Defocus, 電子情報通信学会論文誌 D, Vol. J99-D, No. 5, pp. 559-570, 2016
8. KUKA Best Paper Award MICCAI 2017 3rd Place, 2017
9. MIRU フロンティア賞, 2017
10. IEEE Winter Conference on Applications of Computer Vision, Best Paper Honorable Mention, 2017
11. 平成 27 年度日本生体医工学会論文賞・阪本賞, 生体医工学, 2016

【社会活動】

ひろしまコンピュータサイエンス塾実行副委員長(2017 年)として同事業の実施を行った。

2016 年 7 月 - 2017 年 5 月	ひろしまコンピュータサイエンス塾実行委委員

氏名	前田 香織
職位	教授
研究分野	情報ネットワーク
研究キーワード	Network Architecture, Multimedia Communication, Mobile Communication, Network security

講義におけるアクティブラーニングの採用、研究指導の過程での学生の外部発表など、教育や研究活動の中で、学生が主体的考え、動くことができるようにつとめた。2016 年度は新たな研究室の編成となり、研究室運営がスムーズとなるよう心がけたつもりである。が、今報告期(2016～2017 年度)の初年度は図書館長、2 年目は専攻長や複数の研究科委員のため、時間的な制約も多かったため、実際には教育、研究面でのエフォートがやや小さかったかもしれない。

【教育活動】

学部、大学院の講義では講義の冒頭や最後に予復習用の小テストの実施、質問記述、プレゼンの機会を設けるなどのアクティブラーニングの形態を採り入れた。また、講義の発言や質問を評価のウェイトとして高くするようにした。このような工夫により学生の講義に対する積極性を引き出せるよう努めた。研究室配属学生への研究指導ではゼミや実験などを行い、大学院生を中心に外部発表を行った。そのうちいくつかは優秀論文賞などを受賞することができた。

2016, 2017 年度	マルチメディア情報通信特論
2016, 2017 年度	情報と企業 (3 大学での遠隔講義)
2016, 2017 年度	マルチメディア通信
2016, 2017 年度	メディアと社会
2016 年度	教養演習
2017 年度	基礎演習

【研究活動】

IoT 基盤を支える技術に関する研究を行った。2016 年度から新しい研究室の構成となり、従来の実践的と理論的な内容が融合するような研究テーマを設定した。具体的にはクラウド利用の効率化やセキュリティ、ネットワーク分析に関するものである。従来おこなっている移動透過通信、高品質ストリーム伝送に関する研究も続けている。これらの一部は科研費(基盤 B)のテーマとして実施した。それぞれのテーマで進捗具合によって、論文誌、国際会議、研究会、シンポジウムで成果を発表した。そのうち、シンポジウム発表したものは優秀論文賞を受賞できた。

1. 近堂徹, 小川竜ノ介, 前田 香織, 石川直樹, コンテナ連携によるユーザ協調型ストリーム配信プラットフォームの開発, 信学技法, Vol. IA2017-63, pp. 61-66, 2017 (優秀研究賞受賞)
2. 加森剛徳, 林健汰, 前田香織, 近堂徹, 相原玲二, 属性ベース暗号による認証を用いたグローバルライブマイグレーション支援システムの開発, 第 10 回インターネットと運用技術シンポジウム, pp. 25-32, 2017 (企業冠賞受賞)

3. 林健汰, 加森剛徳, 前田香織, 近堂徹, 相原玲二, CP-ABE を用いた VDI の使用権限委譲機構の開発, 第 10 回インターネットと運用技術シンポジウム, pp. 19-24, 2017 (優秀論文賞受賞)
4. 平空也, 高野知佐, 前田香織, 拡散型フロー制御を用いる DDoS 攻撃緩和手法の評価, 信学技法, Vol. IA2017-23, pp. 1-6, 2017
5. 新谷隆文, 前田香織, 無線 LAN の通信品質における MAC 層情報の有効性調査, 情報処理学会論文誌, Vol. 58, No. 3, pp. 664-671, 2017
6. 新谷隆文, 前田香織, 北口義明, MAC フレーム情報を用いた無線 LAN の通信品質推定とネットワーク監視への応用, インターネットと分散システム運用技術シンポジウム 2016 論文集, pp. 26-32, 2016 (企業冠賞受賞)
7. 坂口 和也, 小川 竜ノ介, 前田 香織, 高野 知佐, 近堂 徹, リソース監視情報の提供量を用いるクラウド構成管理フレームワークの実装, 信学技法, Vol. IA2016, No. 56, 2016
8. Yuta Ukida, Kaori Maeda, et.al, A Design and Evaluation of User-space IP Mobility Implementation, Proc. of MOBIQUITOUS 2016, pp. 251-256, 2016
9. (特別・招待講演) IPv6、ここまでとこれから, IPv6 Summit in TOKYO2017, 2017

他 6 件

【社会活動】

国、広島県、広島市等の機関から依頼された審議会、協議会の委員としての活動をおして、地域貢献をした。学術機関や学会関連では日本学術会議への参加、補助金の審査、研究会運営、国際会議の編集委員、座長等の活動を行なった。

2018 年 4 月-2020 年 3 月	弓削商船高等専門学校運営諮問委員会委員
2018 年 2 月-2020 年 2 月	広島市総合計画審議会専門部会専門委員
2017 年 10 月-2023 年 10 月	日本学術会議連携会員
2017 年 6 月-2017 年 11 月	科研費専門委員会専門委員
2015 年-2018 年 (各年 12 月-翌 7 月)	Program Committee, The 40th/41st/42nd COMPSAC 2016/2017/2018
2015 年 4 月-2019 年 3 月	情処学会インターネットと運用技術研究会運営委員
2015 年 2 月-2019 年 3 月	広島県個人情報保護審議会委員
2013 年 7 月-2019 年 4 月	ひろしま IT 融合フォーラム 会長
2013 年 5 月-	信学会インターネットアーキテクチャ研究会専門委員会顧問
2010 年 7 月-2016 年 12 月	総務省情報通信審議会
2009 年 4 月-2019 年 3 月	広島市情報政策アドバイザー・ボード委員

他 9 件

氏名	増谷 佳孝
職位	教授
研究分野	医用システム、生命・健康・医療情報学、生体医工学・生体材料学、放射線科学
研究キーワード	医用画像、画像解析、計算解剖学、拡散 MRI

教育、研究、社会活動についての総括としては、まず自らの研究の活動レベルを維持しつつ、本学の学生を中心とした周辺の学生や若手教員、研究者にもその研究テーマの魅力や社会的重要性を伝えていくことが現在の自己の活動テーマと言える。また、これらのバランスの観点からは、その研究に積極的に関与できる人材としての大学院生の数がまだ少なく、進学を積極的に勧めるなどの工夫が必要かと思われる。また、研究テーマの特殊性から、県内企業との共同研究も実現できておらず、今後、より積極的な情報発信が重要と考えられる。

【教育活動】

担当講義である「医用画像処理」、「解析学 II」、「機器分析」、「医用情報科学概論」、「計算解剖学特論」についてアンケート結果に基づき、それぞれ更新を行っている。医用画像処理」では座学だけでなく 15 回中3回の実習を取り入れた内容としており、これにより重きを置くよう工夫を重ねている。また、1年生向けの「解析学 II」では、将来の研究活動での重要性を自分の研究テーマである画像処理を例にとり具体的に伝える工夫を行っている。また、2変数関数をイメージしやすいよう、3D 表示を取り入れ、数式を読み取りやすくするようスライドを導入するなどの工夫を行い、アンケートでの好評を得ている。その他の講義についても最新の研究成果を取り入れるなど毎年の講義内容を更新している。その他、他大学や団体からの要請を受け、特別講義を行った。

2016, 2017 年度	医用画像処理、解析学 II、機器分析、医用情報科学概論、計算解剖学特論

【研究活動】

外部研究資金に関連する「多元計算解剖学」や「拡散 MRI」を中心とした研究を行い、積極的に学会発表を行っている。特に、拡散 MRI に関しては MRI の基礎と応用に関する国際会議のトップカンファレンスである ISMRM(国際磁気共鳴医学会)に採択され、発表を行った。また、これらに関して他大学との共同研究も積極的に行い、その成果発表や特許申請も行っている。今後の課題は、大学院生による研究発表の件数を増やすことである。

1. 橋爪誠, ほか, 多元計算解剖学の基礎と臨床への応用, 誠文堂新光社, 2018
2. Kobatake H, Masutani Y, et al., Computational Anatomy Based On Whole Body Imaging, Springer, Japan, KK, 2017
3. Taoka T, et al., Evaluation of glymphatic system activity with the diffusion MR technique: diffusion tensor image analysis along the perivascular space (DTI-ALPS) in Alzheimer's disease cases, Jpn J Radiol., 2017
4. Takemura MY, et al., Alterations of the optic pathway between unilateral and bilateral optic nerve damage in multiple sclerosis as revealed by the combined use of

advanced diffusion kurtosis imaging and visual evoked potentials, Magn Reson Imaging, 2017

5. 佐々木公, 増谷佳孝, 放射基底関数を用いた Q 空間補間の精度評価: 単一 b 値の拡散 MRI データにおける実験, 日本磁気共鳴医学会, 2017
6. 佐々木公, 増谷佳孝, 拡散 MRI の Q 空間データにおける補間 および線積分に基づく線維に垂直な方向の信号減衰比 の再構成法の比較, 電子情報通信学会医用画像研究会, 2017
7. 増谷佳孝, 阿原一志, 鈴木宗村, 植田琢也, 造影 CT 画像における点群入力に基づく腸間膜の3次元形状推定と再構成について, 電子情報通信学会医用画像研究会, 2017
8. Masutani Y, Sasaki K, Toward Analytic Computation of Fiber-Radial Diffusional Kurtosis by Q-Space Data Representation with Radial Basis Functions, ISMRM 25th Annual Meeting, 2017

他 26 件

【社会活動】

医用画像関連の工学、医学、および境界領域での関連学会の幹事等を務めている。その一環として、日本磁気共鳴医学会ではスタディグループを主催してセミナーを開催するなど、日本全国の同分野の若手研究者向けに学ぶ機会の提供を行っている。また県内では、代表として高校生～一般向けの「ひろしま医工学スクール」を広島大学、広島工業大学、広島国際大学と連携して 2016 年度と 2017 年度にわたり開催し好評を得ている。その他、学会や研究会からの依頼を受け、両年度で 12 件の講演を行っている。

2018 年 7 月-	日本磁気共鳴医学会 理事
2017 年 5 月-	電子情報通信学会 医用画像研究会 顧問
2015 年 5 月-2017 年 5 月	電子情報通信学会 医用画像研究会 委員長
2014 年 9 月-	日本コンピュータ外科学会評議員
2012 年 7 月-2016 年 7 月	日本磁気共鳴医学会 理事
2009 年-	日本医用画像工学会 幹事

氏名	松原 行宏
職位	教授
研究分野	知能情報学、感性情報学・ソフトコンピューティング、教育工学
研究キーワード	知識工学、知能情報学、感性工学、人工知能

学習工学研究室長として、教育活動(40)、学内運営(25)、研究活動(25)、社会活動(10)のエフォート割合で活動を行うことを目標とした。2016、2017 年度は概ねバランス良く活動を展開し、一定の社会貢献ができたと考える。研究室は3名の教員で運営し、2016年度14名、2017 年度12名の学生を指導した。また2カ年でジャーナル論文4件、著書1件、国際会議論文5件、研究会全国大会等論文42件を発表し、また受賞が8件である。一方、JST や科研の審査員、学会等の委員長や理事、編集委員長、公立高校の評価委員等を務め地域社会に貢献した。学内では就職キャリア形成支援委員長や学科長を務め組織運営の活性化を行った。

【教育活動】

学部の専門科目(学部共通科目)1科目(オートマトンと形式言語、2年次)、専門科目(知能工学科)1科目(感性情報処理、3年次)、資格取得関係科目(演習系科目、教職に関する科目)1科目(教職実践演習 B、4年次)、大学院の研究科開設科目(知能工学専攻)1科目(知識工学特論、大学院1、2年次)を直近の5年以上担当している。学部2年次から大学院2年次まで各学年で科目を担当し、また共通系科目から専門科目、演習系科目まで万遍なく担当しており、バランスが取れている。

2016, 2017 年度	オートマトンと形式言語
2016, 2017 年度	知識工学特論
2016, 2017 年度	感性情報処理
2016, 2017 年度	教職実践演習 B

【研究活動】

査読付ジャーナル論文2件、国際会議論文2件、国内研究会、全国大会、支部大会等10件を年間目標としている。過去2年間(2016 年度、2017 年度)の状況は以下のとおりであり、概ね目標を達成している。また受賞等も2年間で8件あり、研究室としての一定のアクティビティを達成している。

[ジャーナル論文:4件、著書:1 件]

- 岡本勝, 松原行宏, 拡張現実感技術を用いた仮想環境での無機化学学習支援手法, 画像ラボ, Vol. 27, No. 9, pp. 17-23, 2016
- 京極瑞生, 岡本勝, 松原行宏, ヘッドマウントディスプレイと速度制御型インタフェースを用いたドップラー効果の仮想体験学習手法, 日本感性工学会論文誌, Vol. 16, No. 3, pp. 379-386, 2017
- 石村司, 岡本勝, 松原行宏, スマートフォンを用いた無機化学の AR 型仮想実験環境の開発, 教育システム情報学会誌, Vol. 34, No. 3, pp. 274-279, 2017
- 人工知能学会編: 松原行宏, 岡本勝分担執筆, 人工知能学大事典, 15-8, 教育における仮想現実／人工現実, 共立出版, 2017
- 河野貴範, 松原行宏, 岡本勝, 力覚及び擬似力覚提示機能を持つ漢字学習支援システムに関する研究, 日本教育工学会論文誌, Vol. 41, No. Suppl., pp. 77-80, 2018

[国際会議論文:5件、国内研究会・全国大会・支部大会等:42件]

6. M.Kyogoku, M.Okamoto, Y.Matsubara, Development of Velocity Control-Based Interface for Virtual Doppler Effect Experience, Proceedings of the 13th International Conference on Industrial Management, pp. 509-515, 2016
7. T.Ishimura, M.Okamoto, Y.Matsubara, Smartphone Based Inorganic Chemistry Learning Support System using AR Approach, Proceedings of the 13th International Conference on Industrial Management, pp. 502-508, 2016 (他3件)
8. 松原行宏, 山田直輝, 岡本勝, 学習支援システムにおけるタブレット PC と力覚提示デバイスの有効性, 2016 年度日本人間工学会全国大会, 2016
9. 岡本勝, 松原行宏, VR/AR 技術を用いた HMD 型仮想化学実験学習支援環境, 人工知能学会 ALST 研究会, 2017 (他40件)

[受賞:8 件]

10. 日本感性工学会, 大会優秀発表賞(庭園に関する感性工学的研究), 2017
11. 教育システム情報学会, 学生研究発表会優秀発表賞(スマートデバイスを用いた弦楽器の押弦スキル学習支援システム), 2018 (他6件)

【社会活動】

JST審査委員、科研費審査員、およびその他の審議機関の委員を務め地域の教育関連事業に協力した。電子情報通信学会・シニア会員および教育工学研究会(ET 研究会)委員長、論文誌特集号委員長、人工知能学会・先進的学習科学と工学研究会(SIG-ALST)・専門委員、教育システム情報学会・理事(学会誌論文誌担当)、編集委員会副委員長として学会、研究会活動を活性化した。またその他多くの学会の編集委員、査読委員、プログラム委員等を務め、社会に貢献するとともに、広島市立大学の名称を外部に広報した。一方、広島市立美鈴が丘高校の外部評価委員を務め地域の教育行政にも貢献した。

2016 年, 2017 年	JST 専門委員
2016 年, 2017 年	広島市立美鈴が丘高校 外部評価委員
2016 年, 2017 年	電子情報学会 ET 研究会委員長, 特集号編集委員長
2016 年, 2017 年	教育システム情報学会 理事, 副編集委員長 など

氏名	満上 育久
職位	准教授
研究分野	知覚情報処理、ヒューマンインターフェース・インタラクション、知能情報学
研究キーワード	コンピュータビジョン、ヒューマンインタフェース

着任直後に新規の講義を2つ担当したため、授業準備にエフォートを割いた。また、次年度からの研究室リニューアルに向けて研究室の設備・インフラを再構築した。成果発表については、(現時点では前所属での成果だが)論文・国際会議発表・招待講演等の形で積極的に情報発信活動を行った。今後積極的に外部(京都大学、大阪大学、その他研究機関等)との共同研究を推進すべく、競争的資金の申請や研究打合せなどの準備を活発に行った。

【教育活動】

本学着任直後に2つの講義を担当した。離散数学については、3名の教員で同一の内容を講義することから、他2名の教員と密に情報交換をしながら指導にあたった。ヒューマンインタフェースについては、前任の教員と同様にアクティブラーニングを取り入れ、学生が積極的に考え発言できる講義を行った。

2017 年度	離散数学
2017 年度	ヒューマンインタフェース

【研究活動】

研究室の研究設備やネットワーク環境などが整備されていなかったため、2018 年度に新規に学生が配属されるまでに全体の再設計を行い、必要な機材を調達し、環境を整備した。また、自身が所属するシステムインタフェース研究室の学生および他研究室の一部学生の卒論・修論について助言を行った。また、(年度途中で異動したため現時点では前所属での成果だが)論文(7 件)・国際会議発表(4 件)で積極的に情報発信活動を行った。それ以外に、国内外で計8件の招待講演を行った。

1. Yasushi Yagi, Ikuhisa Mitsugami, Satoshi Shioiri, Hitoshi Habe, Behavior Understanding Based on Intention-Gait Model, Springer, 2017
2. Fumio Okura, Ikuhisa Mitsugami, Masataka Niwa, Kota Aoki, Chengju Zhou, Yasushi Yagi, Automatic collection of dual-task human behavior for analysis of cognitive function, ITE Transactions on Media Technology and Applications, 2018
3. Hirotake Yamazoe, Hitoshi Habe, Ikuhisa Mitsugami, Yasushi Yagi, Depth Error Correction for Projector-Camera Based Consumer Depth Camera, Computational Visual Media, pp. 1-9, 2018
4. Hirotake Yamazoe, Ikuhisa Mitsugami, Tsukasa Okada, Tomio Echigo, Yasushi Yagi, Immersive walking environment for analyzing gaze-gait relations, 日本バーチャルリアリティ学会論文誌, Vol. 22, No. 3, pp. 435-443, 2017
5. Hazem El-Alfy, Ikuhisa Mitsugami, Yasushi Yagi, Gait Recognition Based on Normal Distance Maps, IEEE Transactions on Cybernetics, Vol. 48, No. 5, pp. 1526-1539, 2017

6. Ikuhisa Mitsugami, Yamato Okinaka, Yasushi Yagi, Gaze Estimation Based on Eyeball-Head Dynamics, Proc. The 1st International Workshop on Human Activity Analysis with Highly Diverse Cameras, 2017
7. (特別・招待講演)満上育久, 人の内的変化を探る歩容解析, 大阪電気通信大学 情報学研究所 視覚情報学講演会, 2017
8. (特別・招待講演)Ikuhisa Mitsugami, Yamato Okinaka, Ko Nishino, Yasushi Yagi, Gaze Estimation from Head Tracking, Machine Learning Seminar, 2017
9. (特別・招待講演)Ikuhisa Mitsugami, Yamato Okinaka, Ko Nishino, Yasushi Yagi, Gaze Estimation from Head Tracking, 4th Conference for Core to Core Program& 5th imec Handai International symposium, 2017
10. (特別・招待講演)満上育久,多視点画像からの三次元形状復元, 沖縄工業専門学校, 2017
11. (受賞)論文評価貢献賞, MIRU2017 プログラム委員会, 2017
他、論文 3 件、国際会議 3 件、招待講演 5 件

【社会活動】

情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア(CVIM)研究会の運営委員として、2ヶ月に1度の研究会に参加し活発な議論や学生・若手研究者への助言を行った。2017年度からは幹事となり、研究会をより中心的な立場で運営した。また、CVIM 研究会が主催する画像の認識・理解シンポジウム(MIRU2017)では広報委員長を務めた。画像関係分野のメーリングリストである image-ml の管理も行うなど、国内画像研究分野の研究者の活発でスムーズな情報交換を支援した。国際会議の Publicity Chair や Advisory を務めるなど、国際的な学術界への貢献も行った。その他、論文誌や国際会議の査読委員を多数務めた。

2017 年 4 月 -	情報処理学会 コンピュータビジョンとイメージメディア (CVIM)研究会 幹事
2017 年	第 20 回画像の認識・理解シンポジウム 広報委員長
2017 年	International Advisory, International Conference on Information and Communication Technology for Embedded Systems
2012 年 4 月-2017 年 3 月	日本ロボット学会 論文査読委員
2010 年 4 月 -	電子情報通信学会 常任査読委員

他 4 件

氏名	三村 和史
職位	教授
研究分野	知能情報学、情報学基礎理論
研究キーワード	情報統計力学、数理工学、情報理論、符号理論

情報理論分野や計算機科学分野の諸問題について、情報理論的手法や統計力学的手法を用いて解析的に接近し、非自明な性質を明らかにすることを目的に研究を進めている。内閣府革新的研究開発推進プログラム、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業、科研費の研究課題について研究を行った。また、情報理論に関連する電子情報通信学会において、幾つかの学会業務に従事した。教育においては、それらの基礎となる数学や、情報理論とその応用について講義を担当した。

【教育活動】

情報理論とその関連分野を概説する特論をはじめとし、2016 年度においてはプログラミング教育にも従事した。2017 年度は担当講義の変更に伴って数学教育に従事した。各講義間の関係や最近の研究成果などの説明を交えて講義で行うことによって、講義の位置づけや意義を明確にし、学習意欲を高められるよう努めた。

2016, 2017 年度	情報理論
2016, 2017 年度	確率的情報処理特論
2016 年度	プログラミング I
2016 年度	プログラミング I 演習
2016 年度	情報科学基礎実験 B
2017 年度	線形代数学 I
2017 年度	線形代数学 I 演習
2017 年度	情報基礎数学

【研究活動】

内閣府革新的研究開発推進プログラム ImPACT、科学技術振興機構戦略的創造研究推進事業 CREST、科研費基盤研究 B、科研費基盤研究 B、科研費挑戦的萌芽研究の研究課題を進めた。ImPACT に関しては、情報処理の課題を実装した場合のコヒーレントイジングマシンの性能を解析的に評価して、性能を最大化にする方法を議論した。CREST に関しては、形データの数理的取り扱いについて検討した。また科研費基盤研究 B、挑戦的萌芽研究については、それぞれグループテスト、圧縮センシング、スパース重ね合わせ符号などの性能評価、および反復アルゴリズムのダンピングの性能評価法などについて解析的な評価を行った。

1. Toru Aonishi, Kazushi Mimura, Shoko Utsunomiya, Masato Okada, and Yoshihisa Yamamoto, Statistical Mechanics of Coherent Ising Machine – The Case of Ferromagnetic and Finite-Loading Hopfield Models –, Journal of the Physical Society of Japan, vol. 86, 104002, 7 pages, Sep. 2017., Vol. 86, pp. 1040002-1-1040002-7, 2017
2. Tadashi Wadayama, Taisuke Izumi, and Kazushi Mimura, Bitwise MAP Estimation for Group Testing based on Holographic Transformation, IEICE Transactions on

Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol. E99-A, No. 12, pp. 2147-2154, 2016

3. Kazushi Mimura, A study on dynamics of iterative sparse recovery algorithms, Japan-Singapore Workshop on Coding and Information Theory, 2018
4. Yosuke Fujii, Kohei Suzuki, Ayako Iwasaki, Takuya Okada, Kazushi Mimura, and Ryo Yamada, Morphological characterization of 3D shape with curvature flow and spherical harmonics decomposition, The 2017 IEEE International Symposium on Biomedical Imaging, 2017
5. (Invited) Kazushi Mimura, Recent Progress in Compressed Sensing, 2016 RIMS Joint Research: Wavelet Analysis and Signal Processing, 2016
6. Tadahiro Kitazono and Kazushi Mimura, Upper Bounds for the Number of Solutions to Spatially Coupled Sudokus, The 2016 IEEE International Symposium on Information Theory and its Applications (ISITA2016), 2016
7. Kazushi Mimura, Distance Distribution of the Nonlinear Codes and its Application to the Group Testing, Seminar of Mathematics Department, Kings College London, 2016

他 5 件

【社会活動】

電子情報通信学会の基礎境界ソサイエティの事業担当幹事として活動したほか、情報理論研究専門委員会の委員、英文論文誌特集号の編集委員として活動した。また、国際会議の運営については、電子情報通信学会が主催し、IEEE が technical cosponsor となっている情報理論に関する国際会議 ISITA2016 のプログラム委員として活動した他、ISITA2018 の総務として活動している。また、国内会議についても、情報理論に関する幾つかの国内会議について運営に携わった。

2018 年	第 41 回情報理論とその応用シンポジウム プログラム委員
2017 年-2019 年	IEICE 基礎境界ソサイエティ 事業担当幹事
2017 年-2018 年	IEICE 英文論文誌 SITA 特集号 編集委員
2016 年-2018 年	ISITA2018 general secretary
2016 年-2017 年	第 10 回シャノン理論ワークショップ 実行委員
2016 年	ISITA2016 TPC member
2016 年	第 39 回情報理論とその応用シンポジウム プログラム委員
2015 年-2016 年	第 39 回情報理論とその応用シンポジウム 実行委員
2012 年-2019 年	IEICE 情報理論研究専門委員会 委員

他 4 件

氏名	宮崎 大輔
職位	准教授
研究分野	知覚情報処理・知能ロボティクス
研究キーワード	コンピュータビジョン

後述の通り教育活動、研究活動、社会活動をおこなった。チューター、学部の委員会、学部のワーキンググループ、全学のワーキンググループ、学科の慶弔会幹事、非公開業務など、学内運営にも携わった（高校に訪問して高校の先生と打ち合わせ、本学学生に対する面談や電話連絡、物品を用意して運んで会場の設営をして終了後に撤収作業、学生アルバイトを募集して書類手続きをして作業内容を説明、事務の該当する部局とのやり取りや該当する教員とのやり取り、高校生との相談、ポスターやホームページの作成、司会や受付、原稿を集めて目次を作成、高校生や高校の先生の引率）。

【教育活動】

授業（実施、講義資料の作成、レポートの採点、サンプルプログラムの作成、試験の作成および採点）。情報処理学会からの依頼にもとづき、教科書の執筆に従事した（他大学の教員に連絡をして共同執筆者の依頼、参考資料の調査、内容を検証するためのプログラムの作成、プログラミングや市販 CG ソフトによる図の作成、執筆と添削）。

2016, 2017 年度	コンピュータグラフィックス II
2016, 2017 年度	コンピュータグラフィックス I
2016, 2017 年度	画像応用数学特論
2016, 2017 年度	知能工学実験 II
2017 年度	技術英語演習 I

【研究活動】

科研費申請書の執筆（研究内容と理論の考案、理論の検証のためのプログラム作成、論文サーベイ、研究機材の調査）。学生への研究指導（内容と理論とプログラムと実験装置の説明、プログラムの一部を作成、学生のプログラムのデバッグ、論文の一部を執筆、論文や発表資料の添削）。研究内容と理論の考案と検証、その資料の作成。実験装置の購入、組み立て、動作確認。実験データ取得とデータ処理。論文執筆。発表資料作成。プログラミング。論文サーベイ。

1. Daisuke Miyazaki, Mia Nakamura, Masashi Baba, Ryo Furukawa, Shinsaku Hiura, Optimization of LED illumination for generating metamerism, Journal of Imaging Science and Technology, Vol. 60, No. 6, pp. 60502-1-60502-15, 2016
2. Daisuke Miyazaki, Takuya Shigetomi, Masashi Baba, Ryo Furukawa, Shinsaku Hiura, Naoki Asada, Surface normal estimation of black specular objects from multiview polarization images, SPIE Optical Engineering, Vol. 56, No. 4, 041303, 2016
3. 宮崎 大輔, 川崎 拓, 河本 悠, 日浦 慎作, 偏光とエントロピー最小化による未校正照度差ステレオ法の検討, 画像の認識・理解シンポジウム, 2017
4. 宮崎 大輔, 石黒 健司, 河本 悠, 日浦 慎作, ジョイントバイラテラルフィルタを用いた多波長カラー照度差ステレオ法, 研究報告コンピュータビジョンとイメージメディア, 2017

5. (特別・招待講演)宮崎 大輔, コンピュータビジョンにおける偏光の活用, 偏光計測研究会, 2016
6. 宮崎 大輔, 中根 郁実, 古川 亮, 日浦 慎作, メタリズム生起のための光源色・物体色の同時最適化, 研究報告コンピュータビジョンとイメージメディア, 2016
7. 津田 香林, 宮崎 大輔, 古川 亮, 日浦 慎作, マルチバンドカメラを用いたワンショット照度差ステレオ法, MIRU2016 Extended Abstract, 2016

他 12 件

【社会活動】

論文の査読(国際会議 30 本、国内会議 5 本、英文論文誌 23 回、和文論文誌 3 回)(なお、英文論文誌 IJCV、PAMI と国際会議 CVPR2016、ECCV2016、SCCG2016、e-Heritage2016 は査読者・プログラム委員として名前がウェブ上で公表されている)。国内会議 MIRU2017 組織委員長(委員長への委員会開催の日時や人数の問い合わせ、目録を作成して受賞者の銀行口座に振り込み、賞状用紙に受賞者の論文タイトルと著者を印刷して会議のハンコを押印、当日欠席した人の賞状を筒に入れて郵送)。第 204 回 CVIM 研究会テーマ担当。外部機関から依頼された非公開の業務。裁判の画像鑑定に関する業務。

2017 年 8 月	組織委員長, MIRU2017
2016 年 10 月	Program Committee Member, ECCV2016
2016 年 8 月	Program Committee Member, e-Heritage2016
2016 年 6 月	Program Committee Member, CVPR2016
2016 年 4 月	Program Committee Member, SCCG2016
2013 年 4 月-2017 年 3 月	情報処理学会コンピュータビジョンとイメージメディア研究会 運営委員

他 12 件

氏名	宮原 哲浩
職位	准教授
研究分野	情報学基礎、知能情報学
研究キーワード	知識発見、データマイニング、計算論的学習理論、帰納論理プログラミング、機械学習

2016 年度、2017 年度は機械学習、データマイニング、計算学習理論の分野を中心に研究を行った。特に、次のテーマを主な研究目標とした。「強力な表現能力を持つグラフ構造パターンによるグラフ構造データからの深層知識の発見」、「パターンの機械学習によるデータマイニング手法の開発」。研究室に所属する学部学生、大学院博士前期課程学生に対し研究指導を行った。2016 年度、2017 年度の教育活動として、前期4科目、後期1科目の授業を担当した。2016 年度、2017 年度の社会活動として、オープンキャンパスおよびライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。

【教育活動】

2016 年度、2017 年度前期は計算論、記号処理プログラミング、知能工学実験 I、推論方式特論の4科目を担当した。後期は数理論理学の1科目を担当した。2016 年度は研究室に所属する学部4年生1名と大学院博士前期課程学生1名に対し、2017年度は研究室に所属する学部4年生2名と大学院博士前期課程学生1名に対し、「パターンの機械学習によるデータマイニング手法の開発」というテーマで教育研究指導を行った。

2016, 2017 年度	計算論
2016, 2017 年度	記号処理プログラミング
2016, 2017 年度	知能工学実験 I
2016, 2017 年度	推論方式特論
2016, 2017 年度	数理論理学

【研究活動】

2016 年度、2017 年度は機械学習、データマイニング、計算学習理論の分野を中心に研究を行った。特に、次のテーマを主な研究目標とした。「強力な表現能力を持つグラフ構造パターンによるグラフ構造データからの深層知識の発見」、「パターンの機械学習によるデータマイニング手法の開発」。2016 年度は雑誌論文1件、国際会議論文3件、研究発表7件、2017 年度は雑誌論文3件、国際会議論文5件、研究発表6件の研究成果を発表した。

1. 松本 一教, 宮原 哲浩, 永井 保夫, 市瀬 龍太郎, IT Text 人工知能 改訂 2 版, オーム社, 2016
2. T.Shoudai, Y.Yoshimura, Y.Suzuki, T.Uchida, T.Miyahara, Polynomial Time Learnability of Graph Pattern Languages Defined by Cographs, IEICE Transactions on Information and Systems, Vol. E101-D, No. 3, pp. 582-592, 2018
3. T.Horibe, Y.Itokawa, T.Uchida, Y.Suzuki, T.Miyahara, Enumeration Algorithms for All Characteristic Paths and Subtrees from Structurally Compressed Tree-Structured Data, IAENG International Journal of Computer Science, Vol. 45, No. 1, pp. 206-218, 2018

4. T.Miyahara, Y.Suzuki, T.Shoudai, T.Uchida, T.Kuboyama, Enumeration of Maximally Frequent Ordered Tree Patterns with Wildcards for Edge Labels, IPSJ Transactions on Mathematical Modeling and its Applications, Vol. 10, No. 2, pp. 59-69, 2017
5. T.Shoudai, K.Aikoh, Y.Suzuki, S.Matsumoto, T.Miyahara, T.Uchida, Polynomial Time Inductive Inference of Languages of Ordered Term Tree Patterns with Height-Constrained Variables from Positive Data, IEICE Transactions on Fundamentals of Electronics, Communications and Computer Sciences, Vol. E100-A, No. 3, pp. 785-802, 2017
6. T.Uchida, S.Matsumoto, T.Shoudai, Y.Suzuki, T.Miyahara, Learning of Primitive Formal Systems Defining Labelled Ordered Tree Languages via Queries, CEUR Workshop Proceedings, Vol-2085, 2018
7. K.Shin, T.Kuboyama, T.Miyahara, K.Tanaka, Multiple Alignments of Data Objects and Generalized Center Star Algorithm, Fuzzy Systems and Data Mining III – Proc. FSDM 2017, 2017
8. F.Tokuhara, T.Miyahara, T.Kuboyama, Y.Suzuki, T.Uchida, Acquisition of Multiple Block Preserving Outerplanar Graph Patterns by an Evolutionary Method for Graph Pattern Sets, Proc. 2017 International Workshop on Computational Intelligence and Applications (IWCIA 2017), 2017
9. Y.Yamagata, T.Miyahara, Y.Suzuki, T.Uchida, F.Tokuhara, T.Kuboyama, Acquisition of Multiple Graph Structured Patterns by an Evolutionary Method using Sets of TTSP Graph Patterns as Individuals, Proc. 2017 IIAI International Conference on Advanced Applied Informatics (IIAI AAI 2017), 2017
10. F.Tokuhara, T.Miyahara, T.Kuboyama, Y.Suzuki, T.Uchida, A Context-Aware Fitness Function Based on Feature Selection for Evolutionary Learning of Characteristic Graph Patterns, Springer-Verlag, Lecture Notes in Artificial Intelligence 10191, 2017
他3件

【社会活動】

2016 年度、2017 年度にオープンキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。
2016 年度、2017 年度にライブキャンパスにおいて研究室の研究公開を行った。2016 年度、2017 年度に高校生による情報科学自由研究のテーマを提案した。

氏名	村田 佳洋
職位	准教授
研究分野	ソフトコンピューティング
研究キーワード	遺伝アルゴリズム、組合せ最適化、ナビゲーションシステム、ワイヤレスセンサネットワーク

遺伝アルゴリズムを用いた組み合わせ最適化手法の開発、ならびにナビゲーションシステム向けの経路探索研究に関する研究を行っている。この専門を生かし、学生向けには確率統計、ソフトコンピューティング、データ構造とアルゴリズム I の教育を行っている。またシステム工学実験においては、実験立案からシステム構成、パート担当、幅広く担当しており、本年度の大規模な担当者変更を学生に負担なく遂行するために各所で尽力する予定である。一方、留年生向けの指導にも力を入れている。具体的には、同級生の友人が激減することによる転落を防げるよう、忠言ならびに集合場所・機会(講義、ゼミ等)の提供に力を入れている。

【教育活動】

専門のソフトコンピューティング(遺伝的アルゴリズムを含む、自然界等にインスパイアされた計算手法の総称)を通じ、現実世界の問題への計算機を用いた取り組み方についての教育に力を入れている。特に趣味のゲーム経験を活かし、「これら学術的知見をどう現場に応用するのか」を学生に分かりやすい形で教えることに注力している。近年では、ソーシャルゲームのガチャが確率統計と関わり深く、学生の興味を引きやすい。一方、実験を通じてレポートの書き方の指導に力を入れている。具体的には、「正解」を書くものではなく、「データ」と「日本語」で「レポート」するものであることを理解させられるよう心掛けている。

2016, 2017 年度	確率統計、ソフトコンピューティング、データ構造とアルゴリズム I、システム工学実験(画像パート)、外書講読演習 I(代表)、組込みソフトウェア実装・シミュレーション特論

【研究活動】

遺伝アルゴリズムを用いた組み合わせ最適化手法の開発、ならびにナビゲーションシステム向けの経路探索研究に関する研究を行っている。近年では国際会議 ITSC2016 にて、西日を考慮したカーナビゲーションシステムについて発表した。東京オリンピックに向けた無線通信システム整備計画など、日本に密着した話題を見聞きし興味深かった。今後は、看板などのランドマークを参考にしやすい経路のナビシステムや、ナビ用地図を作成するためのメタ的なナビゲーションシステムの研究を行っていく予定である。研究成果は ITS 系(ITSC 等)の会議、および進化アルゴリズム系(CEC、SEAL 等)の会議で発表している。また情報処理学会論文誌や電気電子情報通信学会に投稿している。

1. Hiroki Matsuda, Yoshihiro Murata, A path-finding algorithm for finding a low glare path using time-expanded network, Conference: 19th IEEE Intelligent Transportation Systems Conference, pp. 1844-1849, 2016

【社会活動】

本研究室学生が参加しているサイバー防犯ボランティアに関し、ゼミ室の利用や、持ち出し可能な機器等の管理を通じて支援を行っており、今後も継続する予定である。ひろしまコンピュータサイエンス塾のスタッフとして、選抜小学生向けの教育に携わった。選抜されただけあり親・子供ともに熱心で優秀な生徒が多く、LEGO ロボットへのプログラミングを通じて良い教育ができたと思われる。予算の関係で今後の規模が縮小されるとのことで残念でならない。また初頭プログラミングの公開講座に携わり、スクラッチを用いた教育を行った。本学のオープンキャンパスにおいても、進学希望の高校生向けに研究紹介を行っている。

2016 年 7 月 - 2017 年 5 月	オープンキャンパス、ひろしまコンピュータサイエンス塾

氏名	目良 和也
職位	助教
研究分野	感性情報学・ソフトコンピューティング、ヒューマンインターフェース・インタラクション、知能情報学
研究キーワード	感情情報処理、情緒、情緒計算手法(EGC)、自然言語対話、好感度、音響分析

「心の通ったコミュニケーションができるコンピュータ」の実現を目指し、口調や表情などの情報からの感情推定に関する研究を行っている。講義では主に情報系の基礎知識を教える講義を担当している。研究室では自身の研究に関連する範囲の中で、学生の興味や希望を出来るだけ考慮してテーマを決め、研究指導している。また外部機関との共同研究も積極的に行っている。

【教育活動】

主に学部生向けの基礎知識を教える科目を担当している。2017 年度まで担当していた「基礎演習」は 2018 年度から「3学部合同基礎演習」となっている。「3学部合同基礎演習」では、本学学生が情報、国際、芸術を共に学べる環境であることを生かし、3学部混成クラスで文献調査、プレゼンテーション技法、芸術鑑賞などを行うことでお互いの長所を生かし、苦手なことは助け合いながら学んでいく講義を目指している。「情報活用基礎」(旧名:情報基礎、情報演習)では、情報セキュリティやネットワークリテラシーに関する講義を主に担当している。「情報科学基礎実験」では、C言語によるプログラミングの演習を担当している。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	情報基礎
2016, 2017 年度	情報科学基礎実験 B
2016 年度	情報演習

【研究活動】

研究室では、「心の通ったコミュニケーションができるコンピュータ」の実現を目指し、口調や表情などの情報からユーザの感情を推定する技術について研究している。また、推定した感情を考慮して対話するシステムについても研究している。現在は、喜びや怒りのような基本的な感情だけではなく、照れ隠しやお世辞のような本心を押し隠すタイプの感情の検出にも挑戦している。さらに、広島大学医学部、マツダ、NTTドコモとの共同研究も実施している。

1. Takumi Takahashi, Kazuya Mera, Nhat Tang Ba, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Natural Language Dialog System Considering Speaker's Emotion Calculated from Acoustic Features, Dialogues with Social Robots, pp. 145-157, 2017
2. 目良和也, 上村譲史, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 口調と表情遷移に基づく抑圧された負の感情の検出, 第 13 回日本感性工学会春季大会, 2018
3. Joji Uemura, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Suppressed Negative-Emotion-Detecting Method by using Transitions in Facial Expressions and

Acoustic Features, The Second Workshop on Processing Emotions, Decisions and Opinions (EDO 2017), 2017

4. 齋藤晶太, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 瀧上順也, 鈴木芳典, 音声に明確に表出しない感情の認識のための感情音声データベースの構築, 日本音響学会 2017 年秋季研究発表会, 2017
5. 岡田敦志, 上村譲史, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 表情・音響情報・テキスト情報からのリアルタイム感情推定システム, 2017 年度人工知能学会全国大会, 2017
6. 目良和也, 谷有希, 村田唯, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 演技感情と推定感情のタグを付与した感情音声コーパスの構築, 日本音響学会 2017 年春季研究発表会, 2017
7. 高橋拓誠, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, トピック情報を考慮した用例ベース対話システム, 言語処理学会第 23 回年次大会, 2017
8. 田淵悠真, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, ユーザ感情を考慮した返答発話生成ルールの自動生成手法, 言語処理学会第 23 回年次大会, 2017
9. 杉原穂, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 対話を通じて話者の嗜好情報を学習する音声対話システム, 言語処理学会第 23 回年次大会, 2017
10. Takumi Takahashi, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Natural language dialog system considering speaker's emotion for open-ended conversation, The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, 2016
11. Joji Uemura, Kazuya Mera, Yoshiaki Kurosawa, and Toshiyuki Takezawa, Method for recognizing multiple emotions from acoustic features using soft clustering, The 5th Joint Meeting of the Acoustical Society of America and Acoustical Society of Japan, 2016
12. 上村譲史, 新升悠太, 目良和也, 黒澤義明, 竹澤寿幸, 7 感情の強度推定結果に基づく音響的特徴からの話者感情の推定手法, 2016 年度人工知能学会全国大会, 2016
13. Best Paper Award, The Second Workshop on Processing Emotions, Decisions and Opinions (EDO 2017), 2017

【社会活動】

市民向けの研究成果発表の場として、毎年、産学連携研究発表会と広島市立大学地域貢献事業発表会に参加し、ポスター発表と実機によるデモンストレーションを行っている。また COI 広島からの依頼で、2017 年度より COI 公開シンポジウムと JST フェアで研究成果を紹介している。

2018 年 1 月 31 日	COI 公開シンポジウム
2017 年 11 月 24 日	広島市立大学地域貢献事業発表会
2017 年 9 月 13 日	産学連携研究発表会
2017 年 8 月 31 日 - 9 月 1 日	JST フェア
2017 年 1 月 31 日	COI 公開シンポジウム
2016 年 11 月 25 日	広島市立大学地域貢献事業発表会
2016 年 9 月 14 日	産学連携研究発表会
2016 年 8 月 7 日	オープンキャンパス

氏名	森 康真
職位	助教
研究分野	知能情報学、メディア情報学・データベース
研究キーワード	知識情報処理、データマイニング、ソーシャルメディア

全体として、研究活動に関する環境が大きく変わったため、その立て直しが急務である。教育活動については、担当授業科目について、関連する教員と連携を取りながら、引き続き授業の見直しや改善を行っていく。研究活動については、研究に興味を持つ学生と研究をより深いものにしていく。学術誌や国際会議などへの発表へ向けて努力し、予算獲得につながる研究を行いたい。社会活動については、公開講座「高校生による情報科学自由研究」を中心とした活動を継続していく。機会があれば高校生以外を対象とした活動にも貢献したい。

【教育活動】

担当授業科目は以下の通り。情報科学部の学生を対象とした基礎演習は 2017 年度で最後となり、2018 年度より3学部合同基礎演習となるため、これまでの経験を踏まえ準備を進めている。情報科学基礎実験は 2016 年度と 2017 年度で科目名が変更となり、実施内容の変更も行った。データマイニングは主担当教員から連絡がないため、担当できない状況が続いている。情報科学概論は主担当教員が定年退職のため交代となり、2016 年度までの担当であった。プログラミング III 演習では、毎回レポートとして提出されるソースコードに対して、動作チェックを行い、学生にコメントを返している。e ラーニング英語 IV は学科に割り当てがあるため、2016 年度のみ担当した。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	データマイニング (演習補佐)
2016, 2017 年度	プログラミング III 演習
2016 年度	情報科学基礎実験 B
2016 年度	情報科学概論 (演習補佐)
2016 年度	e ラーニング英語 IV(支援教員)
2017 年度	情報科学基礎実験 β

【研究活動】

知識情報処理の研究に従事しており、テキストデータからの知識発見、ソーシャルメディアと知識創造支援などの研究を行っている。2016 年度は学生の指導を通して、研究室の教授の研究テーマを分担する形での研究が中心であった。指導に関わった学生が HISS 優秀研究賞を受賞した。2017 年度は、研究室の教授の定年退職に伴い、研究室学生の指導や研究体制が大きく変わることであり、その影響を受けている。継続して研究分担する話もいただいていたが、先方が多忙のため実現には至らなかった。研究全般についてさらなる自助努力が必要である。

1. 高橋 誉文, 北上 始, 福本 翔平, 森 康真, 田村 慶一, ギブスサンプラーに基づくアミノ酸配列モチーフの高精度抽出法, 情報処理学会論文誌:数理モデル化と応用, Vol. 9, No. 3, pp. 32-43, 2016

2. ゲン ティ ホン アン, 北上 始, 森 康真, 高橋 誉文, 遺伝的アルゴリズムとギブスサンプリングによるアミノ酸モチーフの高精度抽出法, 第 18 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム, 2016 (HISS 優秀研究賞)
3. 高橋 誉文, 北上 始, 福本 翔平, 森 康真, 田村 慶一, ギブスサンプラーに基づくアミノ酸配列モチーフの高精度抽出法, 情報処理学会 第 108 回研究報告数理モデル化と問題解決 (MPS), 2016-MPS-108(15), 1-10, 2016

【社会活動】

データ工学研究室における研究の分担に基づいて、2010 年度より公開講座「高校生による情報科学自由研究」にテーマを提供している。実施テーマは、「ビッグデータの科学～ソーシャルネットワークの分析～」である。受講者数は、2016 年度2名、2017 年度4名(3名と1名に分かれて別日程で実施)であった。2017 年度は、自由研究の実施期間以外にも、高校教員と一緒に生徒らの指導を行った。広島県立広島工業高等学校の3年生らのグループが、第 19 回 IEEE 広島支部学生シンポジウム(HISS 19th)で発表を行い、HISS 最優秀高校生プレゼンテーション賞を受賞した。

2017 年 8 月	高校生による情報科学自由研究
2016 年 8 月	高校生による情報科学自由研究

氏名	李 仕剛
職位	教授
研究分野	知覚情報処理, 知能ロボティクス
研究キーワード	ロボットビジョン、球面画像処理、マンマシンインターフェース、車のロボット化

教育活動としては、学部生1年次科目「線形代数Ⅱ」、2年次科目「論理回路」、3年次科目「ヒューマンインターフェース」、及び、大学院科目「ロボットビジョン特論」を担当しました。研究活動としては、主に全天周の視野をもつ球面画像の処理に関する研究、視線推定に関する研究、車の運転補助に関する研究に取り組みました。社会活動としては、主に学術交流協定校中国西南大学との学術交流活動に力を入れました。

【教育活動】

学部生1年次科目「線形代数Ⅱ」、2年次科目「論理回路」、3年次科目「ヒューマンインターフェース」、及び、大学院科目「ロボットビジョン特論」を担当しました。事前に時間をかけて準備を行い、わかりやすいように説明することに努めました。大学院科目に関しては、教材の作成に力を入れました。

2016, 2017 年度	論理回路
2016, 2017 年度	線形代数Ⅱ
2016, 2017 年度	ロボットビジョン特論
2016 年度	ヒューマンインターフェース

【研究活動】

この2年間に、主に全天周の視野をもつ球面画像の処理に関する研究、視線推定に関する研究、車の運転補助に関する研究に取り組みました。その中で、代表者として「科学研究費助成事業(基盤研究(c))」「運転者の注意解析に基づく能動的な運転補助システム」の研究プロジェクトに取り組んでいました。また、博士後期課程の修了生が本学の学術交流協定校の中国西南大学電子情報工程学院の教員になったのをきっかけに、中国西南大学電子情報工程学院とロボットビジョンに関する国際共同研究を始めました。

1. Jianfeng Li, Shigang Li and Tong Chen, Tracking on full-view image for camera motion estimation based on spherical model, IEEE International Conference on Robotics and Biomimetics, 2017
2. Shigang Li, Katsuya Fujiura and Isao Nakanishi, Recording Gaze Trajectory of Wheelchair Users by a Spherical Camera, IEEE International Conference on Rehabilitation Robotics, pp. 929-934, 2017
3. Shigang Li, Tatsuya Fujiura, and Isao Nakanishi, Gaze-Based Interface for Wheelchair Robot - Acquiring Gaze Trajectory by Full-View Camera, Proceeding of ICRA Workshop on "Advances and challenges on the development, testing and assessment of assistive and rehabilitation robots", pp. 25-26, 2017
4. Shigang Li, Hanchao Jia, Jianfeng Li, Discrete spherical Harris corner detector, Proceeding of ROBIO 2016, pp. 357-362, 2016

5. 小寄貴弘, 二反田晃尚, 厚海慶太, 李仕剛, 水道水圧駆動人工筋アクチュエータを用いた肘関節用パワーアシスト装置の開発, 日本機械学会論文誌, Vol. 82, No. 841, 2016
6. Jianfeng Li and Shigang Li, Two-phase approach - calibration and iris contour detection - for gaze tracking of head mounted eye camera, Proc. of IEEE International Conference on Image Processing, 2016
7. 藤浦達也, 李仕剛, 中西功, 全天周注視軌跡マップの作成, 電子情報通信学会論文誌, Vol. J99-D, No. 7, pp. 679-682, 2016
8. 北村理知, 李仕剛, 中西功, 離散球面画像における FAST の実現, 電気学会論文誌 C, Vol. 136, No. 6, pp. 838-843, 2016
9. Shigang Li and Hiroya Funaki, Spherical Laplacian operator, IEICE Transaction on Information and Systems, Vol. E99-D, No. 6, pp. 1716-1719, 2016
10. Jianfeng Li and Shigang Li, Gaze Estimation from Color Image Based on Eye Model with Known Head Pose, IEEE Transactions on Human-Machine Systems, Vol. 46, No. 3, pp. 414-423, 2016

【社会活動】

この2年間での社会活動としては、主に学術交流協定校中国西南大学との学術交流活動に力を入れました。具体的には、中国西南大学電子情報工程学院を訪問し、本学情報科学部と学部間の学術交流の覚書を交わすことができました。これを機に、中国西南大学電子情報工程学院からの1名の修士修了生が 2016 年4月に本学情報科学研究科に進学することができました。中国西南大学の客員教授を兼任することで、先方の大学院生の指導をお手伝いし学術交流協定校との国際共同研究の基盤を作りました。日本・アジア青少年サイエンス交流事業を通して、2016 年8月に中国西南大学電子情報工程学院の教員1名と学生4名を本学に招へいする活動に尽力しました。

2017 年 3 月 -	中国西南大学客員教授
2003 年 4 月 -	SCOPE 専門評価委員

氏名	若林 真一
職位	教授
研究分野	VLSI 設計技術、最適化アルゴリズム
研究キーワード	電子設計自動化、計算機支援設計、FPGA

教員活動の大部分は理事・副学長（企画・戦略担当）の職務に充てている。理事・副学長として所掌している企画・広報、入学試験、FD・SD に係る業務を、担当事務と連携して推進している。また、学内理事会、運営調整会議、理事・事務連絡会議等の大学執行部の定例会議に出席し、理事長を補佐して大学の日常的な運営に携わっている。さらに、2019 年 4 月に設置が予定されている平和学研究科の設置準備委員会委員長や文部科学省大学教育再生戦略経費「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COC+）」の事業推進責任者を務めるなど、中期計画の円滑な推進のために、中長期的な視点に立った大学の運営に携わっている。

情報科学研究科の教授としては、学部と大学院の講義科目を担当するとともに、情報工学専攻論理回路システム研究室の研究室長として、研究室の円滑な運営に努力するとともに、研究室に配属された学生に対する教育と学生生活全般に関する指導を、研究室の他の教員と協力して行っている。

【教育活動】

講義については、2016 年度、2017 年度はそれぞれ 4 つの学部講義科目と 1 つの大学院科目を担当し、前年度の講義アンケートの結果等を参考にして、なるべくわかりやすい講義となるように努めた。研究室における卒業研究・修士論文研究については、研究室の他の教員とも協働して指導を行った。研究室の 2016 年度学部卒業生は 9 名、修士修了生は 4 名、2017 年度学部卒業生は 9 名（内 2 名は 2017 年 9 月卒業）、修士修了生は 3 名だった。2017 年 9 月に学部を早期卒業（在学期間 3 年 6 か月）した学生は情報科学部最優秀卒業論文賞を受賞した。

2016, 2017 年度	論理設計，論理設計演習，電子回路，LSI 設計演習（学部）
2016, 2017 年度	論理回路システム特論（大学院）

【研究活動】

ネットワーク侵入検知、オンラインデータに対する k-匿名化、LSI マスクパターンデータに対するホットスポット検出等に関して研究を推進し、研究論文を国際会議に発表した。特に、オンラインデータに対する k-匿名化と関連する近似最近傍探索手法に関する研究は 2016 年度以降、注力している研究テーマである。また、これらの研究テーマに関し、国内の研究会等においても、多数の研究発表を行った。2016 年度、2017 年度とも科学研究費補助金基盤研究(C)を獲得し、企業とも共同研究を行い、受託研究費を獲得した。

1. Toshitaka Ito, Yuri Itotani, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, An FPGA-based Nearest Neighbor Search Engine Using Distance-based Hashing for High-Dimensional Data, Proc. 21st Workshop on Synthesis And System Integration of Mixed Information technologies (SASIMI2018), pp.347-352, 2018.
2. Binbin Xue, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, Shin'ichi Wakabayashi, A Programmable Architecture Based on Vectorized EVBDDs for Network Intrusion Detection Using

- Random Forests, Proc. 2017 International Symposium on Nonlinear Theory and Its Applications (NOLTA2017), 2017.
3. Shuma Tamagawa, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, Shin'ichi Wakabayashi, Table Reference-Based Acceleration of a Lithography Hotspot Detection Method Based on Approximate String Search, Proc. 10th International Conference on Advances in Circuits, Electronics and Micro-electronics (CENICS2017), pp.10-14, 2017.
 4. Yuto Arai, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, An Efficient FPGA Implementation of Mahalanobis Distance-Based Outlier Detection for Streaming Data, Proc. 2016 International Conference on Field-Programmable Technology, pp.253-256, 2016.
 5. Tomoaki Hashimoto, Shin'ichi Wakabayashi, Shinobu Nagayama, Masato Inagi, Hiroki Takaguchi, A High-Speed Programmable Network Intrusion Detection System Based on a Multi-Byte Transition NFA, Proc. 9th International Conference on Advances in Circuits, Electronics and Micro-electronics (CENICS2016), pp.45-51, 2016.
 6. Shuma Tamagawa, Ryo Fujimoto, Masato Inagi, Shinobu Nagayama, Shin'ichi Wakabayashi, A Hotspot Detection Method Based on Approximate String Search, Proc. 9th International Conference on Advances in Circuits, Electronics and Micro-electronics (CENICS2016), pp.6-12, 2016.

【社会活動】

文部科学省平成 27 年度大学教育再生戦略経費「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の事業推進責任者として事業の推進に努めるなど、本学の社会貢献に関する理事・副学長(企画・戦略担当)としての職務を果たした。また、理事・副学長として、広島市が設置した各種委員会の委員等を務め、地域行政の円滑な実施に貢献した。

2016 年 4 月 - 2018 年 3 月	広島大学旧理学部1号館の保存・活用に関する懇談会委員 平和に係る教育・研究の導入機能等に関する検討会委員 広島の拠点性強化に向けた懇話会ワーキンググループ会議委員 ひろしま医工連携イノベーション推進協議会委員

氏名	脇田 航
職位	助教
研究分野	知覚情報処理、ヒューマンインターフェース・インタラクション、知能情報学、図書館情報学・人文社会情報学、エンタテインメント・ゲーム情報学、文化財科学・博物館学
研究キーワード	バーチャルリアリティ、複合現実感、コンピュータグラフィックス、デジタルミュージアム、ハプティクス、ロコモーションインタフェース

教育活動としては、演習系科目では社会人基礎力を身に付けさせるよう指導し、研究指導においてはサーベイ力、プログラミング力、プレゼン力、問題解決力、論文執筆力を身に付けさせ、ジャーナル掲載 2 件、受賞 10 件となった。研究活動としては、科研費(若手 A)採択、ジャーナル論文 7 件、国際会議 3 件、学会受賞 10 件、招待講演 5 件、デモ展示活動 19 件、特許申請 3 件、また電気学会に協同研究委員会を設立し、部門大会企画セッション 2 回、研究会 6 回、見学会 4 回を開催した。社会活動としては、査読 7 件、座長 5 件、論文審査員 1 件、論文委員引き受け 2 件、ニュース記事掲載 5 件、テレビ報道 1 件、テレビ番組 2 件、本学発ベンチャー企業(第一号)を 1 社立ち上げた。

【教育活動】

基礎演習においては、情報倫理やレポートの書き方だけでなく、情報科学に関するテーマ発表とディベートを通して、社会人基礎力である、前に踏み出す力、考え抜く力、チームワーク力を身に付けさせるよう指導した。システム工学実験においては、質問があってもすぐに答えを教えるのではなく、わからない原因を学生自身に理解させ、解決方法を自分で導けるように指導した。卒業研究においては、サーベイ力、プログラミング力、プレゼン力、問題解決力、論文執筆力を身に付けさせ、研究会・国際会議発表、ジャーナル掲載まで指導することができ、多数の受賞を得た。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	e ラーニング英語 I
2016, 2017 年度	システム制御特論
2016, 2017 年度	卒業研究 I
2016, 2017 年度	外書講読演習 II
2016, 2017 年度	プレゼンテーション技法
2016, 2017 年度	システム工学実験 II
2016, 2017 年度	卒業研究 II
2016, 2017 年度	技術文書作成法

【研究活動】

2016～2017 年度は、科研費(若手 A)に採択され、ジャーナル論文採録 7 件(Electrical Engineering in Japan 1 件、電気学会論文誌 5 件、計測自動制御学会 1 件)、国際会議採択 3 件、学会受賞 10 件、招待講演 5 件、デモ展示活動 19 件、特許を 3 件申請した。また、2016 年度に電気学会 C 部門知覚情報技術委員会下に知・技の伝承と複合現実型実応用協同研究委員会を新設し、C 部門大会企画セッション 2 回、研究会 6 回(東京 2、大阪 2、愛媛 1、長崎 1)、見学会 4 回を開催した。また、2016～2017 年度ともに教員表彰(研究部門)を受賞した。

1. Tatsuya Hayakawa, Daijiro Yoshimura, Mitsuyuki Saito, Yasuhide Kobayashi, and Wataru Wakita, A High Immersive Telexistence System of the Moving Object with Full Circumference Image and Inertial Force Presentation, Electrical Engineering in Japan, Vol. 203, No. 2, pp. 29-38, 2018
2. 早川達也, 吉村大二郎, 齊藤充行, 小林康秀, 脇田 航, 全周映像および慣性力呈示による移動体の高度没入型テレイグジスタンスシステム, 電気学会論文誌 C, Vol. 136, No. 9, pp. 1192-1200, 2017
3. 脇田 航, 齊藤充行, 小林康秀, 没入型 VR 環境における舞踊動作訓練システム, 電気学会論文誌 C, Vol. 137, No. 3, pp. 495-501, 2017
4. 脇田 航, 齊藤充行, 小林康秀, 人工指による触知覚解析に基づく硬軟感および摩擦感推定法, 電気学会論文誌 C, Vol. 136, No. 8, pp. 1085-1091, 2016
5. 脇田 航, 齊藤充行, 小林康秀, 人工指による押下感解析に基づくタッチパネルへのテクスチャベースの押下感呈示システム, 電気学会論文誌 C, Vol. 136, No. 8, pp. 1092-1099, 2016
6. (特別・招待講演) 脇田 航, 知・技の伝承と複合現実型実応用研究, Innovation Potluck, イノベーション・ハブ・ひろしま Camps, 広島市, 2018
7. (特別・招待講演) 脇田 航, 簡易没入型歩行感覚呈示装置の開発, 中国地域さんさんコンソ発 介護工学新技術説明会～介護需要に応える技術～, JST 東京本部別館 1F ホール, 東京都, 2017

他 93 件

【社会活動】

学会活動としては、査読 7 件、座長 5 件、論文審査員 1 件、論文委員 2 件、電気学会 C 部門大会オーガナイザ 2 件、研究会幹事 2 件、技術委員会委員 1 件、協同研究委員長 1 件を行った。地域貢献としては、2016～2017 年度地域貢献事業(パソコンなんでも相談室)アドバイザー、2016～2017 年度オープンキャンパスにて研究活動成果を一般公開した。メディア報道として、ニュース記事掲載 5 件、テレビ報道 1 件、テレビ番組 2 件が取り上げられた。また、研究成果の社会還元として、本学発ベンチャー企業(第一号)を 1 社立ち上げた。また、2017 年度教員表彰(社会貢献部門)を受賞した。

2018 年 2 月	知覚情報研究会「複合現実型実応用および一般」担当幹事
2016 年 7 月-2018 年 6 月	電気学会 C 部門知覚情報技術委員会 知・技の伝承と複合現実型実応用協同研究委員会委員長

他 53 件

芸術学部

氏名	青木 伸介
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	工芸、漆芸、乾漆

漆芸技法の研究を基に制作と発表（個展、グループ展など）を主な研究活動としている。研究内容としては、乾漆に見られる漆の造形性と接着力、素材特有の表情の豊かさ、土や繊維、その他素材と複合することで見られる独特な色と質感、それらの密接な関係から創造される新たな技法を研究している。近年では漆と紙の造形、塗り重ねによる表現の研究を行っている。また、それらに関連したアジア漆芸文化の研究も含む。これらの研究、教育活動をする上で漆を造形素材として有効かつ安定的に使用するための植栽研究は、協力機関と連携しながら継続していく重要な取り組みと捉えている。また、生活に密接に関係している漆工文化は漆産業の中核であり、そのような日本伝統の生活デザインを地域社会や大学間との連携、情報共有などを通して研究し教育に取り入れていきたい。

【教育活動】

教育活動では主にデザイン工芸学科の2年次における漆造形に関わる基礎固めを実習形式で行っており、道具の制作や塗りの工程手順を手板、箱の制作を通して学び、その後に漆芸技法の蒔絵、螺鈿、乾漆など加飾や応用表現の方法を教育に取り入れている。このように一連の基礎技術を習得すると共に、物づくりにおいての心構えや、造形素材への興味や探究心を養うことを重要視している。またそれに関連した、より専門的な取り組みとして、漆樹の植栽から採取法まで職人の指導を取り入れることで、テーマ制作、卒業制作に取り組む上で重要な機軸と捉えている。

2017 年度	造形実習ⅡA
2017 年度	基礎演習Ⅰ
2017 年度	造形実習ⅡB
2017 年度	描出演習Ⅱ
2017 年度	卒業制作
2017 年度	テーマ研究
2017 年度	造形計画研究

【研究活動】

研究活動では、乾漆造形をベースに漆と紙を使った研究を行い、その成果発表として個展や展覧会を継続的に行なっている。近年では、広島において工芸系の作家を中心とした国際展に関わり、市民一般を対象としたギャラリートークを行った。また、その素材となる漆樹の植栽においても、広島県内に植栽地を広げる活動に参加するなどしている。東京都で行われた若手漆芸作家の大規模な展覧会では、アーティストトークにおいて多くの来場者に普段の研究と成果を紹介している。それから、漆芸系大学などの関係機関との連携により大学として成果発表の場を作っている。

1. 鱗躍会, 柳井美術(東京), 2018 年 4 月
2. 漆芸の現在形, アーティストトーク (和光ホール 東京), 2018 年 1 月 - 2018 年 2 月
3. あいづまちなかアートプロジェクト, 福島県会津若松市, 2017 年 10 月 - 2017 年 11 月

4. 芸術学部新任教員展 2017, 広島市立大学芸術資料館 5F 展示室, 2017 年 10 月
5. 国際工芸作家協会展, (はつかいち美術ギャラリー 広島), 2017 年 9 月 - 2017 年 10 月
6. 個展, 色彩の漆, 伊勢丹新宿店 東京, 2016 年 7 月

【社会活動】

社会活動として、市民一般に対して行われている文化庁主催のイベントに日本文化財漆協会の理事として参加している。内容としては、協会が管理生産している日本産漆を使った沈金技法を用いたワークショップである。多くの来場者が見込まれるイベントとして研究内容の一般公開に大きな役割を担っている。また、復興支援を目的とした作家主体の展覧会に参加し、成果の一部を被災地に還元する活動を行った。2016 年には、アートの持つ力として医療センター内の壁面を利用した地域の素材と色によるホスピタルアートの制作に携わった。

2017 年 9 月-2017 年 10 月	文化庁日本の技体験フェア
2017 年 9 月-2017 年 10 月	つくることできること展(九州北部豪雨復興応援プロジェクト)
2017 年 9 月	広島市立大学芸術学部公開講座, 広島市立大学
2016 年 10 月	文化庁日本の技体験フェア
2016 年 3 月-2016 年 6 月	春日部市立医療センターホスピタルアート

氏名	有持 旭
職位	講師
研究分野	アニメーション、現代美術、比較美術史、グラフィック文化
研究キーワード	アニメーション、シュルレアリスム、エストニア、風刺画

実践的研究として、短編アニメーションを制作し、美術館や国際映画祭にて発表しています。また近年では、理論的研究として、エストニア・アニメーションに関する比較美術史研究を行なっています。これらの研究を大学での美術教育に還元しています。

【教育活動】

学生に対し、デザインおよびアニメーションに関する実践的研究と理論的研究を指導しています。

2016, 2017 年度	Introduction to Design and Industrial Arts (1 コマ)
2016, 2017 年度	Plastic Arts Studio IA
2016, 2017 年度	Plastic Arts Studio IB
2016, 2017 年度	Applied Arts Studio IIA
2016, 2017 年度	Applied Arts Studio IIB
2016, 2017 年度	Applied Arts Studio IIIA
2016, 2017 年度	Applied Arts Studio IIIB
2016, 2017 年度	Graduation Work Studio
2016, 2017 年度	Applied Arts Workshop
2016, 2017 年度	Digital Media Workshop
2016, 2017 年度	Studies in Design and Applied Arts I
2016, 2017 年度	Studies in Design and Applied Arts II
2016 年度	Academic Skills Seminar

【研究活動】

実践的研究として、短編アニメーションを制作し、美術館や国際映画祭にて発表しています。また近年では、理論的研究として、エストニア・アニメーションに関する比較美術史研究を行なっています。

2017 年度

1. 6 月 研究会発表、第 1 回 超現実アニメーション上映会、第 15 回関西シュルレアリスム研究会、近畿大学、大阪
2. 6 月 学会発表、「プリーツ・パルンの風刺画から読み解く〈不条理〉」、日本アニメーション学会、青森県立美術館、青森
3. 7 月 二人展、ヒロシマ・コード／HIROSHIMA CODE、旧日本銀行広島支店、広島
4. 8 月-9 月 研究調査、「エストニア・アニメーションにおけるシュルレアリスム受容の調査研究」、文部科学省・科学研究費研究代表、エストニア、ポーランド、チェコ、フランス
5. 10 月 外部資金獲得、「独立以前のエストニアにおける風刺画と文芸新聞及び雑誌の相関」、DNP 文化振興財団
6. 11 月 上映会(グループ)、ANIMALGAM 01-新しい視点-、東京

7. 11 月 学会発表、「《タリンフィルム》シュルレアリスト・グループの活動」、日本アニメーション学会、新千歳空港ターミナルビル、北海道

2016 年度

1. 4 月 上映会&トーク、イリュミナシオンとナラトロジー、フラッグスタジオ、大阪
2. 6 月 研究発表、「遊び〈甘美な死骸〉を導入したアニメーション作品の上映と解説」、第 11 回関西シュルレアリスム研究会、京都産業大学、京都
3. 7 月 グループ展、Unveiling vol.II、SNOW Contemporary、東京
4. 8 月 グループ展、文化庁メディア芸術祭 in 広島、旧日本銀行広島支店、広島
5. 10-12 月 グループ展、大地に立って 空を見上げて-風景のなかの現代作家-、群馬県立館林美術館、群馬
6. 11 月 研究調査、「エストニア・アニメーションにおけるシュルレアリスム受容の調査研究」、文部科学省・科学研究費研究代表、エストニア
7. 11 月 学術誌、論文“Surrealism Narratology drawn by Contemporary Japanese Manga”、Rocio 出版、“Szépirodalmi Figyelő”、No.5、2016 年、ハンガリー
8. H29.2 月 上映会(グループ)、カラダ！リズム！フィルム！、横浜美術館、神奈川
9. H29.3 月 上映会&トーク、IAMAS ARTIST FILE #04、岐阜県美術館、岐阜

【社会活動】

広く社会に向けて、主にアニメーションに関する実践的および理論的な活動を行なっています。

2016, 2017 年度	サマースクール担当
2016 年度	文化庁メディア芸術祭・広島展開催委員

氏名	荒木 亨子
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作、日本画

個展、グループ展、公募団体展での制作と発表が主な研究活動となる。教育に関しては、制作指導だけでなく Flag of the west (広島市立大芸術学部日本画制作展) や芸美会等の展覧会開催によって、展示・発表の実践的指導を行った。自身の制作活動をもとに指導を行うが、学生から、あるいは教育の場から学ぶ点も多々あった。教育活動と創作活動が連動して互いが高まるよう尽力していきたい。社会活動においては、作品発表時にギャラリートークや座談会を実施した。大学運営の点では、学生の進路・就活の支援、COC+等、また高校生に向けた進路相談等を行う。2017 年度後半は、2021 (平成 33) 年度を視野にいたした入学試験準備や地域実践演習等新規案件に取り組んだ。

【教育活動】

2016 年後期より学部3年生を担当。2017 年度からは、学部2年生を担当。模写・デッサン・日本画制作の指導を行う。日本画の基礎から個々の表現に発展・展開するよう指導を行う。大学院では A 研究室を担当。より専門的に日本画の制作研究を行い作家活動を前提とした教育を行う。大学院前期は、素材研究・異素材制作で制作の幅や材料に対する知識、経験を増やす研究を指導。制作研究と同時に展示発表など作家活動への展開を実践的に行う。

また日本画専攻にて「制作の現場—日本画2人展」を開催し、作品だけでなく制作過程や作家の考えなどに触れ、創作を学ぶ機会とする。大学院生、卒業生を対象に Flag of the west (広島市立大芸術学部日本画制作展) や、芸美会を開催し、作家活動の支援を行う。新しく導入された COC+の授業、地域実践演習の準備等、地域と美術の連携を図る。

2016 年度	構成実習Ⅱ、創作総合研究Ⅰ・Ⅱ、日本画総合研究Ⅰ・Ⅱ 日本画研究Ⅰ・Ⅱ、日本画材料技法演習
2017 年度	日本画実習Ⅱ、構成演習、材料実習Ⅱ (金属材料)、彫塑演習 創作総合研究Ⅰ・Ⅱ、日本画総合研究Ⅰ・Ⅱ

【研究活動】

日本画制作研究と所属学会での発表 (東京春季創画展4月、創画展 10 月) や個展、グループ展での制作研究と作品発表を行う。作品制作ではモチーフからの着想と合わせ、感覚や心象も含んだ情景として卓上静物をテーマに制作。日本画画材の物質性や質感、色彩をもちいた表現を研究。

1. -On the table- 荒木亨子展, 天満屋広島八丁堀7階アートギャラリー, 2018 年4月 - 2018 年4月
2. 第 44 回創画展, 西武池袋本店 別館2階 西武ギャラリー, 2018 年3月-2018 年4月
3. La Primavera, 日本橋高島屋6階美術画廊, 2018 年1月 - 2018 年1月
4. 広島市立大学ゆかりの作家展, そごう広島, 2017 年 11 月-2017 年 12 月
5. 芸術学部新任教員展 2017, 芸術資料館5F 展示室, 2017 年 10 月-2017 年 10 月
6. 芸美展, 福屋八丁堀本店7階美術画廊, 2017 年 10 月-2017 年 10 月

7. 創画70周年記念展, 飯田市美術博物館、東京都美術館、京都市美術館別館、松坂屋美術館、浜松市秋野不矩美術館他, 2017 年3月-2018 年2月
8. 第44回創画展, 東京都美術館・京都市美術館・愛知県芸術センター, 2017 年10 月 - 2017 年 10 月
9. -On the Table- 荒木亨子展, TOHO ART CORPORATION, 2017 年 10 月 - 2017 年 10 月
10. 俊英日本画小品展, 銀座スルガ台画廊, 2017 年9月 - 2017 年9月
11. こころばえの会, 森田画廊, 2017 年6月-2017 年6月
12. 帝京大学所蔵絵画展, 帝京大学総合博物館, 2017 年4月-2017 年6月
13. 第 43 回東京春季創画展, T-ART GALLERY・TERRATORIA 2017 年4月-2017 年4月
14. 25人の作家たち, 佐藤美術館, 2017 年1月 - 2017 年3月
15. Group show of Contemporary Artists 2016, Tokyo Metropolitan, 2016 年 12 月 - 2016 年 12 月
16. 春待ちの月, 日本橋高島屋6階美術画廊, 2016 年 11 月-2016 年 12 月
17. 荒木亨子 日本画展, 成城さくらさくギャラリー, 2016 年 11 月 - 2016 年 11 月
18. 第 43 回創画展, 2016 年 10 月-2016 年 10 月
19. こころばえの会, 森田画廊, 2016 年6月-2016 年6月
20. 革新表現に挑む女流画家たち, 秋野不矩美術館, 2016 年4月 - 2016 年6月

【社会活動】

社会活動としては、概ね展示の際のギャラリートークを行う。作品や日本画をよりわかりやすくより身近に感じてもらえるような機会、展覧会を企画し芸術普及を目指す。芸美会/福屋(広島市)広島市立大学の日本画研究室博士と卒業生の展覧会にてギャラリートークを行う。第5回都美セレクトングループ展: 東京都美術館の展覧会企画公募に応募、開催。ギャラリートークで作品解説、日本画や公募団体についての座談会開催。佐藤美術館の 25 周年記念展に参加し、アーティスト・トークで作品解説を行う。社会連携採択事業「みんなでアーティスト～日本画～ワークショップ」横川商店街・横川創苑での制作と展示を行う。特定研究「制作の現場—日本画2人展」/日本画の展覧会、座談会開催。

2017 年7月	広島市立大学 芸術学部サマースクール 2017
2017 年6月-2017 年9月	社会連携採択事業「みんなでアーティスト～日本画～ワークショップ」(横川商店街・横川創苑)
2017 年1月-3月	「25人の作家たち」(佐藤美術館)
2016 年, 2017 年 10 月	「日本画制作の現場Ⅲ」(広島市立大学芸術資料館5階展示室)
2016 年, 2017 年 10 月	「芸美会」(福屋八丁堀本店7階美術画廊)
2016 年 12 月	第5回都美セレクトングループ展(東京都美術館)
2016 年4月	「革新表現に挑む女流画家たち展」(秋野不矩美術館)

氏名	石松 紀子
職位	准教授
研究分野	美術史
研究キーワード	現代美術、文化研究

学生たちが目にしてきた美術の多くは日本や欧米の美術であり、授業においても主流的な現代美術史を概観している。それだけでなく、アジアの現代美術も紹介することによって、これまでの美術史に固執するのではなく、むしろそのような概念がどのように形成されてきたのかを問い直す姿勢を促したいと考えている。グループワークやディスカッションにおいては、学生自らが問題を考える機会をもち、主体性や自主性をもって仲間と協働する場をつくっている。現代美術を媒体にして、文化、社会、民族といったさまざまな違いを柔軟に理解する姿勢を養い、社会の中で自ら考え、行動できる人材の育成に貢献していきたいと考えている。

【教育活動】

学部の授業では、1945年から現代までの美術動向について時代背景や社会状況を考慮しながら、多様な美術表現の文脈を概観する授業を行っている。また、大学院の授業では、モダニズム、ポストモダニズム、ポストコロニアリズムなど現代美術を理解する上で重要となる理論や、日本の戦後美術に関する批評を読み進める授業を行っている。いずれの授業でも、主に欧米と日本、そしてアジアの現代美術を対象としている。授業の中では、時にグループ・ワークを取り入れ、あるテーマのもとグループで話し合い発表をしてもらうなど、学生が主体的に授業に関われる機会をつくっている。

2017 年度	現代美術史 I
2017 年度	専門語学演習 A
2017 年度	美術史特講(現代)A
2017 年度	現代美術史 II
2017 年度	専門語学演習 B
2017 年度	美術史特講(現代)B
2017 年度	現代美術史特講
2017 年度	アートマネジメント概論

【研究活動】

研究活動においては、欧米や日本の美術史研究であまり取り上げられてこなかった、アジアなどの非欧米圏の美術を対象に研究調査を行っている。これまではイギリスで活動するアジア系、アフリカ系、カリブ系のアーティストたちを対象に調査をすすめてきたが、最近では東南アジア地域、特にイギリスの植民地だったマレーシアへと対象領域を広げている。これまでの欧米中心的な美術史でほとんど語られてこなかったアジアの現代美術に注目しながら、欧米とアジアの美術のあいだにどのような対話や抵抗があり、美術の文脈においてどう関係しあっていたかについて研究調査を行っている。

1. “Impact of the National Cultural Congress (1971) on Malaysian Art: Exploring Cultural Identity in-between Globalism and Localism”, The 10th International Malaysian Studies Conference, 2016

2. 「第1回アジア美術展をめぐる国際的な潮流」, カルチュラル・タイフーン 2016, 2016

【社会活動】

2017 年度は東広島市美術展の写真とデザイン部門の審査員を務めた。今後はさらに活動範囲を広げていきたい。

2017 年 10 月	第 30 回東広島市美術展審査員

氏名	伊東 敏光
職位	教授
研究分野	彫刻 美術
研究キーワード	風景彫刻、造形理論(彫刻の遠近法、時間軸表現)、素材研究

伝統に根ざした彫刻表現の新たな展開を求めて教育・研究を行っている。教育では、アカデミックな造形理念と技術を体験的に身に付けるための実習中心の指導を行い、同時に現代社会や美術の動向を敏感に察し造形化出来る豊かな創作能力の育成を目指す。研究では、歴史的にも作例が乏しい「風景彫刻」を研究テーマに、制作と理論の両面から風景をモチーフとした独自の彫刻表現の確立を目指している。展覧会の企画監修や審査を含む社会活動においても、芸術への既存の価値観に新たな視点を加えることを常に心がけている。

【教育活動】

彫刻専攻が実技の柱とする塑造、石彫、木彫、金属、ミクストメディアのうち塑像と金属を主に担当している。塑造においては人体の構造や動勢を把握し、視覚的な表現に留まらない彫刻表現を指導している。金属では、鉄の溶接、溶断、鍛造等の技術を体験的に身に付け、モチーフと素材の特性を生かした独自の造形を生み出すことを目標に授業を進めている。学部3年以上には、目まぐるしく変化する現代社会や人々の美意識を、課題制作や自由制作という素材選択型の実技を通して考えるよう求め、卒業制作において専門性の高い技術を基にした独創的な作品の創作につなげられるよう指導している。

2017 年度	実材制作実習 I
2017 年度	彫刻実習Ⅳ
2017 年度	彫刻研究 B I
2017 年度	彫刻研究 B II
2017 年度	彫刻実習 I
2017 年度	彫刻実習 II
2017 年度	彫刻実習Ⅲ
2017 年度	卒業制作
2017 年度	創作総合研究 I
2017 年度	創作総合研究 II

【研究活動】

「風景彫刻」を研究テーマとし、風景をモチーフとした新たな彫刻表現の確立を目標に実制作を中心とした研究を行っている。彫刻表現は人体や動物を主なモチーフとして発展し展開されて来たが、本研究では過去に作例が少なく、傑作と言われる作品がほとんど見当たらない風景をモチーフにすることで、これまであまり試みられることのなかった彫刻における遠近法や時間軸の表現方法の研究を行っている。また、対馬市や小豆島町におけるアーロプロジェクトの企画や運営を行い、アートと地域社会の連携方法と効果について、実践的な研究を行っている。

1. 「学園前アートフェスタ 2017 -メメント森-」 大和文華ホール（奈良県）
2017 年 11 月
2. 「Taoyan International Drift-Wood Art Festival」 The Fenghe Park（台湾・桃園市）2017 年 10 月 - 11 月
3. 「対馬アートファンタジア 2017」 対馬市厳原町各所（長崎県）2017 年 9 月 - 10 月
4. 「創造他人-ソウゾウビト-」 スパイラルホール（東京都） 2017 年 9 月
5. 「三都半島アートプロジェクト 2017「島語り」小豆島町（香川県）2017 年 9 月 - 10 月
6. 「AHAF SEOUL 2017 [韓、日、中]の特別展」 Asia Episode」 Grand International Seoul Parnas（韓国・ソウル市）2017 年 8 月
7. 個展：「Ito Toshimitsu -風景をモチーフとした彫刻-」 Hideharu Fukasaku Gallery Roppongi（東京都） 2017 年 9 月
8. 「ART FORMOSA 2017」 Songshan Cultural and Creative Park×eslite hotel（台湾・台北市）2017 年 6 月 - 7 月
9. 「何がアートなの?」 Galleria DISEGNO（イタリア・マントヴァ市）2017 年 5 月 - 6 月
10. 「HARBOUR ART FAIR 2017」 Harbour City（香港）2017 年 3 月
11. 個展：「ITO Toshimitsu Collage-Memories In Scenery」 KEUMSAN GALLERY（韓国・ソウル市）2017 年 3 月
12. 「瀬戸内国際芸術祭 2016」 〈潮耳荘〉 伊東敏光+康夏奈（吉田夏奈）+広島市立大学芸術学部有志小豆島町神浦（香川県）2016 年 10 月 - 11 月
13. 「彫刻-気概と意外」 東京芸術大学大学美術館陳列館（東京都）2016 年 9 月 - 10 月
14. 「対馬アートファンタジア 2017」 対馬市厳原町各所（長崎県） 2016 年 8 月 - 10 月
15. 「AHAF SEOUL 2016」 JW Marriott Hotel Seoul（韓国・ソウル市）2016 年 8 月
16. 「アートフェア東京 2016」 東京国際フォーラムホール E（東京都）2016 年 5 月
17. 「ENVIRONMENT International Sculpture Exhibition」 Academy of Fine Arts of Frosinone（イタリア・フロジノーネ市）2016 年 3 月 - 4 月
18. 「瀬戸内国際芸術祭 2016」 小豆島町釈迦ヶ鼻園地、白浜（香川県）2016 年 3 月 - 11 月
19. 作品設置：〈怪物と少年〉
学校法人修道学園修道高校
第 68 回卒業記念（広島県）
2016 年 3 月

〈怪物と少年Ⅱ〉

鉄／w210×d70×h260cm／瀬戸内国際
芸術祭 2016（香川県小豆島町釈迦ヶ
鼻園地）





＜潮耳荘＞

伊東敏光＋康夏奈＋広島
市立大学芸術学部有志

瀬戸内国際芸術祭 2016
(香川県小豆島町神浦)

【社会活動】

芸術の専門機関(芸術学部)の教員として、また美術家として、高等学校の絵画・彫刻コンクールの審査や市民美術展の審査、高校生や市民を対象とした講座などを行い、また地域と連携したアートプロジェクトの企画運営を通して、社会と芸術の結び付きを深めることによって、芸術家の育成や社会の活性化に繋がる芸術活動の普及に努めている。中でも美術に関心を持つ高校生には、サマースクールや COC+サテライト講座などの機会に広島市立大学芸術学部の活動を紹介し、芸術活動の意味や未来への可能性を伝えている。

2017 年 11 月	第 16 回広島県高等学校 絵画・彫刻コンクール審査員
2017 年 10 月	高校生のための広島市立大学サテライト講座 [主催]: 広島市立大学 COC+ [後援] 柳井市教育委員会、柳井地区広域行政連絡協議会
2017 年 7 月	サマースクール(高校生相等年齢以上向け) 広島市立大学芸術学部、広島市立大学社会連携センター
2016 年 11 月	第 15 回広島県高等学校 絵画・彫刻コンクール審査員
2016 年 10 月-現在	一般社団法人 HAP(Hiroshima Art Platform)理事
2016 年 10 月	第 29 回東広島市美術展「彫刻・工芸」審査員
2016 年 7 月	サマースクール(高校生相等年齢以上向け) 広島市立大学芸術学部、広島市立大学社会連携センター
2016 年 4 月-現在	(小豆島町) 三都半島アートプロジェクト プロデューサー
2015 年 12 月-2016 年 11 月	(独立行政法人日本学術振興会) 科学研究費委員会専門委員(芸術一般 若手研究 B)

氏名	今村 雅弘
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作、技法材料研究

美術・芸術活動を通して社会と関わり生活をして行く事は、生活の中で人生を豊かにし日本の文化を個々が継承して行く事だと思っています。また教養や行動力を身につけることは周囲の一時的な動向に惑わされない価値観が養われます。美術教育、自身の作品制作、社会との関わり方など、広島という環境ならではの学びがあるように思います。一寸先に一喜一憂することなく地道に研究を続け、他者と関わる機会を大切にすること。それらの事を念頭に学生と接し大学の様々な運営に関わりたいと考えます。

【教育活動】

学部、大学院を通して伝統技法、表現の基礎教育から高度で個性のある絵画表現を行えるよう学生に指導している。絵画制作実習、演習を行うカリキュラムの中で技法材料や、造形性に対する知識、教養を養い、粘り強く目の前の課題を完成させることでより高い芸術領域を目指す。作家育成を専攻目標の一つとすることから、2010 年より続く広島での展覧会「芸美会展」を企画開催している。また広島市立大学日本画専攻の修了生、大学院生を広く紹介する為に 2016 年から関東の複数会場での大規模な展覧会「Flag of the West」を隔年で開催し、作家としての足掛かりとなるよう働きかけている。

2016, 2017 年度	日本画実習Ⅰ・Ⅲ
2016, 2017 年度	構成実習Ⅰ・Ⅱ(平面)
2016, 2017 年度	材料実習Ⅰ・Ⅲ
2016, 2017 年度	日本画研究Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	創作総合研究Ⅰ・Ⅱ
2016 年度	領域横断特別研究
2016 年度	基礎演習
2017 年度	古美術研究(演習)

【研究活動】

研究活動は、日本画の公募団体である創画会において独創性のある表現が評価され、2011 年創画会会員に推挙された。現在は同会運営委員として審査運営にあたり、後進の指導にあたっている。研究発表は年二回の創画展出品に加え、美術画廊での個展、企画展に出品している。また大学での教育研究に繋がる企画展示にも作品を出品し、自身の研究とともに市立大学日本画専攻の研究成果を地域社会に示している。研究内容は、市立大学に赴任以前から抽象的な表現様式で独自の絵画世界を模索し、自身の制作における一つのテーマである“気色”“気配”を日本画の素材技法を駆使しながら日本絵画の平面性という意味合いを含めた日本画の可能性を追及している。

1. 「第 44 回東京春季創画展」,西武池袋本店別館 2 階西武ギャラリー・東京都豊島区南池袋 1 丁目 2 8-1, 2018 年 4 月
2. 「Flag of the West」, 数寄和・森田画廊・ナカジマアート・新宿タカシマヤ, 広島, 福屋八丁堀本店, 2018 年 4 月/ 同 2016 展覧会, 2016 年 3 月- 8 月

3. 「五穀豊穰」, 数寄和・東京都杉並区西荻北 3-42-17, 2018 年 1 月
4. 「Will+s 展 2017」, 西武池袋本店・東京都豊島区南池袋 1-28-1, 2017 年 11 月-12 月
5. 「第 44 回創画展」, 東京都美術館・東京都台東区上野公園 8-36, 2017 年 10 月
6. 「広島市立大学ゆかりの作家展」, そごう広島店・広島県広島市中区基町 6-27, 2017 年 11 月 - 12 月
7. 「第 17 回芸美会展」, 福屋八丁堀本店, 2017 年 10 月 /同展覧会 2016 年 10 月
8. 「今村雅弘・宮島弘道 二人展」, 西武池袋本店・東京都豊島区南池袋 1-28-1, 2017 年 8 月 - 9 月
9. 「第 43 回東京春季創画展」, T-ART GALLERY TERRATORIA・東京都品川区東品川 2丁目 6-10, 2017 年 4 月
10. 「東京創画小品展」, 上野松坂屋, 2017 年 3 月
11. 「Will+s 展 2016」, 西武池袋本店・東京都豊島区南池袋 1-28-1, 2016 年 11 月 -12 月
12. 「それからの仕事-4人の同世代作家による日本画展」, 尾道市立大学美術館・広島市立大学美術館, 2016 年 11 月 - 12 月
13. 「今村雅弘個展」, 森田画廊・東京都銀座 1-16-5 銀座三田ビル 2F, 2016 年 10 月 - 11 月
14. 「第 43 回創画展」, 東京都美術館・東京都台東区上野公園 8-36, 2016 年 10 月
15. 「今村雅弘展」, 数寄和・東京都杉並区西荻北 3-42-17, 2016 年 3 月 - 4 月

【社会活動】

毎年中学・高校生を対象としたサマースクールを実施し、美術を志す若い学生に対し大学入試を想定した実技指導を行っている。また市民を対象とした公開講座には毎年多くの受講生が集まり、日本画制作を通して美術・芸術への理解を深めて頂いている。地域貢献として安佐南区役所「あさみなみ・まちの顔づくり事業」、五日市記念病院「清風会芸術奨励学生作品買上展示事業」、呉医療センター／中国がんセンター「学生作品買上展示事業」に大学での社会連携事業として従事した。また地元の美術教育活動においても、ワークショップや企画展でのギャラリートークイベントなど作品展示とともに美術理解の底上げに尽力している。2016 年からは NPO 法人アートプラットホーム G の理事を務め、教育、研究の経験と成果を地域社会に還元している。

2017 年 10 月	第 44 回創画展作品審査
2017 年 9 月	日本画公開講座, 芸術学部日本画研究室
2017 年 9 月	みんなでアーティスト～日本画～ワークショップ, 広島横川商店街 (社会連携採択事業)
2017 年 7 月	サマースクール, 芸術学部日本画研究室
2017 年 3 月	第 43 回東京春季創画展作品審査
2016 年 12 月	奈良芸術短期大学「筍々会展」ギャラリートーク
2016 年 10 月	第 43 回創画展作品審査
2016 年 9 月	公開講座, 芸術学部日本画研究室
2016 年 8 月	サマースクール, 芸術学部日本画研究室
2016 年 4 月	第 42 回東京春季創画展作品審査
2016 年 4 月-	NPO 法人アートプラットホーム G 理事
2011 年 10 月-	一般社団法人 創画会会員

氏名	ウォーゼン, チャールズ
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻

Worked to maintain balance between teaching students from 1st year undergraduates through doctoral candidates, managing academic affairs with strong emphasis on international exchange, and making artwork including participation in Setouchi Triennale 2016. Regarding international exchange, travelled to Vancouver to develop connection with Emily Carr University of Art & Design, which became HCU partner in fall of 2017, and was first HCU Arts Faculty member to visit University of Rennes 2, another HCU partner. Began collaboration with faculty members from Pomona College for future art exhibition.

【教育活動】

In addition to sculpture students, also taught and advised students from other departments within the Arts Faculty and those from Faculties of International Studies and Information Sciences. Applied for and received school funds to invite numerous international art professionals to give lectures. Coordinated 20th Anniversary events of partnership with Hochschule Hannover, which included a visit from nine people from Germany and workshops in HCU Arts Faculty. Continued to apply for and receive JASSO funds (approx. 4 million yen total per year) to send HCU students to partner schools abroad.

2016, 2017 年度	立体造形概論 古美術研究(演習) 構成実習Ⅱ(平面・立体) 構成実習Ⅲ(立体) 彫刻実習Ⅱ 現代美術演習Ⅰ 現代美術演習Ⅱ 彫刻研究BⅠ 彫刻研究BⅡ

【研究活動】

Showed large-scale work at Setouchi Triennale 2016 on Shodoshima and showed in group exhibitions in Hiroshima. Continued to explore ways to employ 3D scanning and printing to make art, and trained students to use related software and hardware. Presented lecture on this technology at *Widerstaendige Praktiken*, a design symposium in Hannover, October 2016, and later contributed a text on 3D scanning for related publication.

1. Friedrich Weltzien (Publisher), Hans-Jörg Kapp (Publisher), Constantin Alexander (Author), & 12 more, *Widerspenstiges Design: Gestalterische Praxis und gesellschaftliche Verantwortung*, Reimer, Dietrich, 2017

2. (特別・招待講演) Peter Krieger, Cesy Leonard, Kay Marlow, Rolf Nobel, Constantin Alexander, Robert Bramkamp, Kai van Eikels, Elke Gaugele, Stefan Heijnk, Andrea Kollnitz, Wilfried Koepke, Friedrich Weltzien, Whither 3D Printing?, Widerstaendige Praktiken: Design als Orientierungs-Strategie, 2016
3. Setouchi Triennale 2016, Islands of the Inland Sea, Kagawa Prefecture, 2016 年 3 月 - 2016 年 11 月

【社会活動】

Was invited by Art Front Gallery to conduct workshop at Faret Tachikawa, a large-scale public arts complex in Tokyo, September 2016. Gave presentations and demonstrations on 3D printing and scanning at Summer Extension Courses at HCU Sculpture Dept. in August 2016 and 2017.

2017 年 8 月	塑像を 3D スキャンとプリント, HCU 彫刻専攻
2016 年 8 月	3D スキャン&プリントワークショップ, HCU 彫刻専攻

氏名	鰐澤 達夫
職位	教授
研究分野	現代美術、アートディレクター、プロデューサー
研究キーワード	現代美術、アートディレクション

教育活動においては、現代作家の育成をメインに、アートディレクター、プロデューサー、キュレーター、アートマネジメント等を活動範囲として、現代社会の要請に対応したスペシャリスト及び独自性のあるパイオニアとして、活動できる人材を育てていきたい。研究活動は、美術家としての活動はもとより、アートディレクター、プロデューサーとしても企業とのコラボレーションをとおして、現代美術を背景とした活動範囲を広げていきたい。少子社会の中、広く国外からも優秀な人材を確保して、研究活動、制作活動を継続し、現代社会にふさわしい新しい提案、活動を継続していきたいと考えている。

【教育活動】

現代美術論を通じて、現代作家がどのようなコンセプトによって、制作活動を行っているのか？を理解することで、自身の制作活動に反映させ、現代美術演習によって、個人チェックを継続することで、コンセプトの構築を目指す。また、現代美術特別演習において、その応用と展開を図る。現代表現研究では、学生個々の特徴にあった制作活動他、ディレクター、プロデューサーの育成を目指す。

2016 年度	現代美術論
2016 年度	現代美術演習
2016 年度	造形研究
2016 年度	現代美術特別演習
2016 年度	現代表現研究

【研究活動】

現在の研究、制作活動では、具体的には、食品サンプル、陶磁器、作品台、背景画面の4点によって、作品として提示している。例えば、ドイツの第二次大戦後に実際の家庭で食されていた「冷たい食事」と言ったネガティブな題材を作品に反映させている。また、禅寺等で企画された内容においては、「白馬蘆花に入る」のテーマのもとに、白いモチーフとして、食品サンプルを提示する。禅寺と社会との結界を背景画面に反映させることで、サイトスペシフィック性とそれ以外の次元を繋げることをテーマに新しい活動として制作範囲を広げている。

【社会活動】

今までも企業のアートディレクターとして、アートをメインに、デザインの活動を行なっているが、現在は、中国の武漢にデザイン事務所を設計したことをきっかけとして、日本国内、広島、大阪、東京にプロデューサーという立場で、デザイン事務所を展開し、日本と中国において、どれだけのデザインワークとしての提案ができるか？また、一昨年からの活動として、今年も武漢の国際デザインフォーラムにおいても美術家としてのディレクションの提案、レクチャー、大学での公演活動を通じて、デザインのコンセプト、内容をプレゼンテーションすることで、活動範囲を広げると同時に、研究活動の継続と、優秀な人材確保にも繋げていきたい。

氏名	及川 久男
職位	教授
研究分野	芸術、デザイン、美術史、アートディレクション
研究キーワード	コミュニケーション・ツールとしてのデザイン戦略、問題解決のためのデザイン処方、近代デザイン史の経済学的捉え方

教育活動・研究活動・社会活動の3点については、教育活動に最もウェイトを置いています。それは教育こそが未来へのデザインとなると考えるからです。デザインはアカデミックな部分よりも現場的な面が多く、教育をしていくために研究が必要であり、社会での実践が教育に最も反映できると考えているからです。課題によっては学生と共に研究し、学生と共に社会で実践する、それが学生にとっての実験であり学習に繋がると考えています。

【教育活動】

教育活動では、視覚造形では、あらゆる造形の基礎であるイメージを表現し伝えること（描く、書く、話す、作る、身体表現する等）を重視しています。そして描くことからそれぞれの表現への発展プロセスを学ぶ事によって、将来の社会にも対応していく事が出来る人材と、ものをつくる上で企画し計画することそのものがデザインであり、その創作研究（コンセプト&ワーク）によって創作性の向上とより高い表現力を通してデザイナーや作家、研究者として社会貢献できる人材を育成していきます。

カリキュラムでは、調査に基づいた考察と対話を通じて表現計画を立てることで、多様な展開を示唆し自らの創作性を向上させます。また、実習を通じて表現に必要な不可欠な技術を習得します。さらに、こうした段階的学習を、社会連携プロジェクト等への参加によって実践的に強化していくことで、柔軟な視覚表現者を育成していきます。

2016,2017 年度	道具論
2016,2017 年度	プレゼンテーション概論
2016,2017 年度	デザイン概論
2016,2017 年度	創作と人間
2016,2017 年度	色彩論
2016,2017 年度	写真(映像)概論
2016,2017 年度	造形実習ⅡB・ⅢB・Ⅳ
2016,2017 年度	造形研究(演習)
2016,2017 年度	視覚造形演習
2016,2017 年度	造形計画研究Ⅰ・Ⅱ
2016,2017 年度	テーマ研究
2016,2017 年度	卒業制作
2016,2017 年度	修了制作
2016,2017 年度	カラーコーディネート(比治山大学)
2016,2017 年度	イラストレーション(国際学院大学)
2016 年度	デザイン史特講

【研究活動】

研究活動の中心は、社会連携、地域連携などの受託研究です。研究のキーワードにもあるように、デザインをどのようにコミュニケーションに役立てることが出来るのか、社会の問題解決に生かしていくか、ということです。視覚による知覚とコミュニケーションは、五感全体の 8 割を超えと言われています。デザインの諸分野の中でも、特にこの視覚を中心的に扱う分野として、「イメージを表現し伝えること(描く、書く、話す)」を重視しています。その具体的な仕事の一例として、グラフィックデザインやアートディレクション、イラストレーションに見ることができます。そして、視覚的表現を含むあらゆるデザインは表現の「計画」に他ならないと考えています。

1. 「西国街道デザインマンホール」受託研究 2017.12～
2. 「MICE ロゴ・マーク アートディレクション」2017.12.28～2018.2.28
3. 「広島市立広島みらい創生高等学校 校章アートディレクション」2017.10.18～2017.12.19
4. 「広島湾七大海の幸ポスター6点制作」2017.9.11～2018.3.30
5. 「広島保育・介護人財サポート ロゴ・マーク制作」受託研究 2017.6.6～2017.10.31
6. 「平清盛生誕九百年記念 ロゴ・マーク アートディレクション」受託研究 2017.3.1～2017.5.25
7. 「広島駅自由通路 鯉のモザイクタイルデザイン制作」2016.11.09～2017.10.29
8. 「府中町シティプロモーション ロゴ・マーク アートディレクション&キャッチコピー・タイプフェース制作」受託研究 2016.10.28～2017.3.31
9. 「瀬戸内4県都市市長会議のエンブレム デザイン」市政貢献プロジェクト 2015.10.21～2018.3.29

【社会活動】

2018 年、特許庁が「デザイン経営宣言」を行いました。私は以前よりデザインは芸術性、科学性、社会性の3つの性質に優れたものでなければならぬと考えます。そういった意味で、研究を教育に反映し社会で実践して初めて検証ができたと言えます。したがって社会活動では、所属している日本グラフィックデザイナー協会、広島アートディレクターズクラブで、展覧会・コンペティションなど毎年開催、出品しています。また社会奉仕団体国際ロータリークラブのメンバーとして米山奨学金など職業奉仕活動に力を入れています。

2017 年 12 月	MICE ロゴ・マークの選考アドバイザー
2017 年 11 月 16 日	屋外広告物講習会(広島市)
2017 年 7 月 26 日～8 月 4 日	ヒロシマ平和ポスター展 出品
2017 年 7 月 23 日	広島平和ポスター学生コンペティション 2017 審査員
2017 年 5 月 20 日	第 9 回 広島 ADC 賞審査会(審査員)
2017 年 5 月 9 日～6 月 6 日	第 38 回 広島広告企画制作賞 審査委員長
2016 年 11 月 9 日	屋外広告物講習会(福山市)
2016 年 8 月 - 2016 年 9 月	公開講座「色彩論及び色相環などのワークショップ」
2016 年 8 月 9 日～8 月 13 日	ヒロシマ平和ポスター展 出品
2016 年 7 月 24 日	広島平和ポスター学生コンペティション 2016 審査員
2016 年 7 月 19 日	府中町ロゴマーク・キャッチコピー選考委員会委員長
2016 年 4 月 19 日～6 月 7 日	第 37 回 広島広告企画制作賞 審査委員長
2016 年 4 月 2 日	第 8 回 広島 ADC 賞審査会(審査員)

氏名	大塚 智嗣
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	美術、芸術、工芸、デザイン、造形、漆、轆轤、環境、アート、彫刻、木工

私が本学へ就任してから15年以上経過した。当初大学構内に蒔いた小さな漆の種が今や大きな漆樹となったように、漆を通した教育活動や研究活動、社会活動は互いにしっかりと根を築きながら繋がりは始めている。今後は更に大きく実りある活動になるような研究を進める。

【教育活動】

学部では1年次の基礎演習、造形実習、2年次から4年次までの造形実習、テーマ制作、卒業制作の実技指導や材料技法概説、創作と人間を担当。大学院研究科、後期博士では造形応用研究、漆造形演習、創作総合研究、特別造形総合演習、博物館実習を担当。漆分野の技法、技術は多岐に渡り、基礎から応用、実践まで、各学年に応じた指導をおこなった。特に近年成果を上げている2年次の造形演習ⅡBで実施している漆の植栽および漆樹採取や3年次の造形実習ⅢBで実施している宮島轆轤の技術指導は、全国の大学にはない独自の教育として他大学、研究機関より高い評価を得ている。

2016, 2017 年度	造形実習ⅠB・ⅡA・ⅡB・ⅢA・ⅢB
2016, 2017 年度	造形研究
2016, 2017 年度	材料技法概説
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	テーマ研究
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅱ・Ⅰ
2016, 2017 年度	造形応用研究Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	漆造形 演習
2016 年度	基礎演習
2016 年度	博物館実習
2016 年度	創作総合研究Ⅱ
2016 年度	特別造形総合演習Ⅱ
2017 年度	創作と人間

【研究活動】

主な研究活動としては創作を中心とした個展やグループ展を開催、その他地域に根ざした研究などを行っている。近年の活動としては、東京での個展(企画展)の開催、地元広島においては国際工芸展やCOC+による広島轆轤の技術指導と轆轤の展示を行なうとともに、同時開催として講演会、シンポジウムなど企画運営を主導した。海外では中国と韓国それぞれの国において漆の国際展に出品、さらに中国美術系大学の講師30名への漆講義と実技指導や日本とデンマークの文化についての大学連携教育プログラムの参加など多岐に渡る研究を実施した。

1. 大塚 智嗣, 魅了する轆轤のかたち-知られざる技と心-, 日本文化財漆協会報, 2017

2. コーディネータ 大塚智嗣／魅了する轆轤のかたち展—知られざる技と心—, シンポジウム: 轆轤の可能性 ディスカッション: 宮島轆轤の保存・創造への提言, 2017
3. パネリスト 大塚智嗣／『創造する工芸—その多様性と可能性』, シンポジウム『これからの工芸』, 2017
4. 大塚智嗣, 広島県支援事業平成 28 年度大学連携による新たな教育プログラム 家政学とグローバル人材プログラム～日本とデンマークの幸せの知恵～, 日本の漆と食文化について, 2017
5. (特別・招待講演) 大塚智嗣, 大学漆器教師人材養成プログラム(中国美術系大学講師30名対象), 大塚智嗣制作論 漆芸技術講習他, 2016
6. 大塚智嗣 個展, 巷房・2+階段下 (銀座), 2017 年 11 月 - 2017 年 12 月
7. 国際北陸工芸サミット「ワールド工芸100選」展 甦生 VIII, 富山県立美術館, 2017 年 11 月 - 2018 年 1 月
8. 漆の言い分、木の本音Ⅳ・漆の言い分、木の本Ⅴ・漆の言い分、木の本Ⅶ, 中国湖北美術館, 2016 年 9 月 - 2016 年 10 月
9. 漆の言い分、木の本音 III, 韓国統営漆美術館, 2016 年 8 月 - 2016 年 10 月
10. 他3件

【社会活動】

個人の研究発表と同時に地域の工芸諸職(宮島細工)や産業((株)マツダ)、((株)アンデルセン)、(アサヒビール(株))、文化(弥山を守る会、日本文化財漆協会、西日本漆を守る会、木地師学会、広島漆再生プロジェクト)と連携した研究を行なっている。具体的には漆を通した創作活動、研究活動、学会、研究会などにおいて常に発信することで、様々な団体、研究機関より依頼があり活動している。なかでも長年にわたる宮島轆轤と広島産漆についての技術保存と継承問題に関わる研究は地域と密接な関わりがあり、社会活動を実行する上で大きな基盤となっている。

2017 年 12 月 -	「宮島の伝統工芸を見直そう」, 弥山を守る会	講演会
2017 年 9 月	「創造する工芸 - その多様性と可能性 -」第6回 国際工芸美術作家協会展	総括
2017 年 - 現在	マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ/技術指導	
2016 年 10 月 - 2017 年 10 月	第 42 回・第 43 回 宮島特産品振興大会	審査員
2016 年 10 月 - 2017 年 10 月	第 60 回・第 61 回 岩国市美術展覧会	審査員
2016 年 4 月 - 2018 年 3 月	広島県支援事業平成 28 年度・29 年度大学連携による新たな教育プログラム 家政学とグローバル人材養成プログラム ～日本とデンマークの幸せの知恵～	協力研究者
2016 年 4 月 - 2017 年 3 月	魅了する轆轤のかたち展 - 知られざる技と心 - 展 広島市立大学 COC+「サテライト宮島」及び轆轤後継者育成プログラム	総括
2015 年 - 現在	国際工芸美術作家協会	議長
2014 年 - 現在	広島漆再生 Project 委員会	委員長
2012 年 - 現在	宮島特産品振興大会	副審査委員長
2010 年 - 現在	西日本うるしを守る会	会員
2003 年 - 現在	木地師学会	会員
2001 年 - 現在	日本文化財漆協会	理事

氏名	大矢 英雄
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	油彩画、テンペラ画

インターネットの広範な普及、デジタル技術とAI科学の急速な進化によって、人間の社会生活が大きく変わろうとしている時代に、数千年の歴史を持つ旧来の芸術表現、特に絵画表現がどのように変化し対応していくべきかを、画家としての表現発表活動と大学の教育現場を通して思考し、世間に広く提言する。

【教育活動】

手近にあるメソッドやテクニックを覚えるだけに汲々としている現代社会に対して、大学に於ける美術教育とは何かを常に問う方法を実践していく。自らの位置を確認し、創意工夫をもって伝統と現代を結ぶ文化の在り方を探し続ける考え方の修得を学生に求める。具体的には、古典的な素材の研究と絵画技法を紹介し、体験応用を促す。現代のコンピューターテクノロジーに依る技術と旧来の絵画技法の手技との比較を深く考察することを求める。

2016, 2017 年度	絵画論、卒業制作A(演習)、卒業制作B(演習)、創作総合研究Ⅰ、創作総合研究Ⅱ

【研究活動】

西洋文明の中で永く培われて来た油彩技法を整理し、埋もれてしまった古典的技法に現代の文脈の中で新たな光を当てることを基本としている。具体的には油彩技法以前の卵テンペラ技法を、特にそのメチエとマチエールの点から、現代的に再開発し、追求していく。

【社会活動】

原爆被爆都市としての広島の意味付けを広く永く認識させるためのひとつの方法として、2004 年度から「光の肖像」展プロジェクトを主宰している。これは西洋絵画技法によるヒロシマ被爆者の肖像画を制作、展示するもので、制作と展示に当たっては私を始めとする油絵専攻教員と油絵専攻卒業生が代々携わるものとなっている。非常にシンプルなプロジェクトであるが故に一般に受け入れられ易く、かつ重要な意味を数多く含むものである。

2005 年 8 月-2017 年 8 月	光の肖像展
2000 年 8 月-2018 年 8 月	広島市立大学 油絵専攻公開講座, 広島市立大学

氏名	笠原 浩
職位	教授
研究分野	映像表現、アニメーション、メディアアート、デザイン学
研究キーワード	映像、メディアアート、コンピュータグラフィックス、アニメーション

デジタルコンテンツ制作、映像表現制作をメインとし、広くデザイン領域における造形教育・指導方法についての研究をメインテーマとしています。大学学内においてもその活用は多く必要とされており、大学運営業務にその結果は反映されているところが多いでしょう。しかしその結果、大学運営委員にも数多く携わり、多くの時間をそれに費やすことにもなっています。それにより本来の制作研究に割く時間が乏しくなっているのも否めない事実ではあり、今後の改善として検討していく必要があるでしょう。

【教育活動】

先端的造形表現の実践として、デジタル機器を使用した実習をメインに行います。それに伴い、現代を考えるためにも映像史、メディア芸術史等の講義も行い、映像をデザインする意味を考え、今後の可能性や必要性をも捉えることを重要視しています。映像表現を主軸にしながらも、学生個々のスキルや指向性も考慮し、多様な表現メソッドに対応出来る造形教育を実践しています。また、社会現場での適応力を培うためにも、協働制作実習を多く取り入れたり、コミュニケーション力を高めるための合評やプレゼンテーションの機会を増やすなどの課題を設けています。

2016, 2017 年度	造形実習ⅡA
2016, 2017 年度	造形実習ⅢA
2016, 2017 年度	創作と人間
2017 年度	メディアと社会
2017 年度	造形実習Ⅳ
2017 年度	造形研究(演習)
2017 年度	写真映像概論
2017 年度	造形実習ⅡB
2017 年度	造形実習ⅢB
2017 年度	描出演習Ⅰ
2017 年度	卒業制作
2017 年度	描出演習Ⅱ
2017 年度	映像メディア造形演習
2017 年度	領域横断特別研究

【研究活動】

デザインワークとしてデジタル画像処理の研究、映像コンテンツの実制作をメインに、受託研究を実践の場として展開しています。デジタルコンテンツの需要は学内に留まらず、社会からも数多く必要とされるケースがあり、実践として研究項目が反映されているものだと考えます。

1. 広島広域公園内自動販売機ラッピングデータ制作, 2018 年 1 月

2. ヒバクシャからの手紙『むっちゃん』アニメーション映像, 2017 年 8 月
3. 広島広域都市圏鳥瞰図マップ, 広島市市役所より発信, 2016 年 10 月

【社会活動】

地域におけるデジタルコンテンツ関係のコンペティションの審査員、講演会等に召集されるケースが多々有ります。規模の大小に関わらず基本的にはすべて受け入れる方向で取り組んでいます。

2017 年 8 月-	広島市高大連携芸術専門講座
2017 年 5 月-	広島県新県美展 審査員
2016 年 11 月-	Youth Life CM 大賞 審査員
2016 年 8 月-	全国総合文化祭全国大会広島「情報部門」審査員、講演
2016 年 8 月	ひろしまシン大学「ところで、アニメーションって？」
2016 年 7 月-	安佐南区 「絆花壇」プレート選定委員、デザインフィニッシュ
2015 年 10 月-	ひろしま総文プレ大会(情報部門)の審査員・講演
2015 年 5 月-	広島県新県美展 「映像部門」審査員
2009 年 4 月-	広島国際アニメーションフェスティバル実行委員
2007 年 4 月-	日本陸連広島支部広報活動支援協力研究員
2002 年 4 月-	(財)広島市文化財団「美術ひろしま」編集委員

氏名	倉内 啓
職位	教授
研究分野	芸術一般(美術、工芸、染織、型染)
研究キーワード	染織、染色、糊防染、型染、紅型、テキスタイル、工芸

自己の課題は、芸術における工芸の意味を問いかけることであり、工芸的手法を現代の造形表現として広く認識させることである。特に専門分野の染色において、日本では民族衣裳の装飾加工技術としてさまざまな防染技法が生まれているのだが、西洋には近代まで防染による模様染めの文化がないことが大きな問題としてあげられる。西洋の理論によって構築された近代の美術概念の枠組みの中で、見落とされてしまいがちな日本人の感性やものづくりの原点を鑑み、伝統的な技法を継承しながらも現代的な造形表現の創作を通じて教育活動・研究活動・社会活動を行う。

【教育活動】

全学における共通系科目は「創作と人間」を担当しており、工芸領域の染織分野について、その成り立ちや歴史的な背景、専門的な技法等の解説をし、自己の創作のルーツを語る。デザイン工芸学科1年次における工芸基礎教育においては、繊維を使ったプリミティブな手法で造形を試みることで、造形素材としての繊維についての知識習得とその加工法を体現させる。2～3年次の染織造形分野における専門教育は、染織の基礎教育(素材、技法)について実技教育を徹底して行い、より専門性を高め、その応用として4年次の卒業制作での展開を図らせる。博士前期・後期課程の学生については個々の研究テーマに沿った創作研究が行えるよう方向付けし、それぞれに適切な指導を行う。

2016, 2017 年度	造形実習ⅠB
2016, 2017 年度	造形実習ⅡA
2016, 2017 年度	造形実習ⅡB
2016, 2017 年度	造形実習ⅢA
2016, 2017 年度	造形実習ⅢB
2016, 2017 年度	テーマ制作
2016, 2017 年度	造形研究
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	創作と人間
2016, 2017 年度	教養演習
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅰ
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅱ
2016, 2017 年度	染織造形演習
2017 年度	創作総合研究Ⅰ
2017 年度	領域横断特別研究

【研究活動】

研究は主に、染色工芸の防染技法の一つである型紙を用いた糊防染による模様染の創作活動を行なっている。また、これらの作品の発表と自己の作品に由来する日本の伝統的な染織文化を広めることに重きを置いた活動も行なっている。2016～2017年度の展

覧会は延べ8回行い、発表の場も東京、京都、広島、沖縄と広範囲に展開することができた。また、第6回 国際工芸美術作家協会展(はつかいち美術ギャラリー)においては、出品作品(3点)の解説と制作における着想を発表。創作は型染めによる平面作品であり、主に屏風の形態をしたものが多く、第72回 新匠工芸会展(東京都美術館、京都市美術館)において、二曲染屏風『輪櫻』が「稲垣賞(準大賞)」を受賞。

1. きょうと現代染色アーカイヴ V『旅の染景』(清流会主催), 染・清流館(京都市), 2018年4月 - 2018年5月
2. 染色回遊展 Vol.4 (沖縄県立芸術大学大学主催), 沖縄県立芸術大学附属図書館・芸術資料館, 2018年3月 - 2018年3月
3. 第72回 新匠工芸会展 (新匠工芸会主催), 東京都美術館, 京都市美術館 2017年10月 - 2017年10月, 稲垣賞(準大賞)受賞
4. 第6回 国際工芸美術作家協会展「創造する工芸 - その多様性と可能性 -」(国際工芸美術作家協会主催), はつかいち美術ギャラリー, 2017年9月 - 2017年10月
5. ギャラリー梧桐企画展「島想い」, ギャラリー梧桐(京都), 2017年6月 - 2017年6月
6. 第71回 新匠工芸会展 (新匠工芸会主催), 東京都美術館, 2016年10月 - 2016年10月
7. 京都芸術大学同窓会アートフェア 2016(京都市立芸術大学同窓会主催), 京都市立芸術大学ギャラリー@ KCUA, 2016年3月 - 2016年4月

【社会活動】

社会的な活動としては、第5回新県美展(第69回広島県美術展)の審査、第71・72回新匠工芸会展の一般公募作品の鑑査、「新匠工芸会」の運営委員長、本学の公開講座、デザイン工芸学科のサマースクールでの実技指導。産官学連携関係は、COC+教育研究事業・アートプロジェクト(染織造形プロジェクト)のディレクションおよび統括、広島市可部地区の山まゆ織復興事業の技術相談、ならびに、三菱商事アート・ゲート・プログラム(2016年度奨学金制度奨学生)の推薦および指導。

2017年8月	芸術学部サマースクール(デザイン工芸学科), 広島市立大学芸術学部
2017年6月	第5回新県美展(第69回広島県美術展)審査(工芸系)
2017年4月-2018年3月	COC+教育研究事業・アートプロジェクト(染織造形プロジェクト)ディレクションおよび統括。
2016年8月	芸術学部サマースクール(デザイン工芸学科), 広島市立大学芸術学部
2016年8月	芸術学部公開講座(染織:藍染絞), 広島市立大学芸術学部
2016年4月	三菱商事アート・ゲート・プログラム(2016年度奨学金制度奨学生)の推薦および指導。
2015年5月-	新匠工芸会運営委員長
2012年10月-	広島市可部地区の山まゆ織復興事業の技術相談。

氏名	佐藤尉隆(作家名:中野渡尉隆)
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	油彩画、メモリー・ドローイング、エアブラシ

2009 年から独自に行ってきた研究テーマ「絵画への合成樹脂の応用」は、有機溶剤を多く用いる為、非常に制約が多く、大学内では制作環境の大幅な改変を必要とすることが判明したため保留に至った。これに代わり古典的な油彩画本来のあり方を問い直す研究を徐々に進めている。例えばその一つが「メモリー・ドローイング」というメソッドである。これは 19 世紀中頃から欧米に広まっていった後、20 世紀後半から徐々に忘れられていった教授法であるが、この英文を院生と翻訳するゼミを行った。この事から明らかになったことはオールド・マスター達の芸術が、非常に地道な視覚記憶の鍛錬を長期間にわたって続けた結果であったという点である。ものの見方に関する、この研究の方向性を、自らの作品および学生への指導にプラスになるよう考慮して指導に生かそうと考えている。

【教育活動】

実技指導においては、油彩画の技法材料論的なメチエに対する理解を深めることに重点をおいている。講義形式のデッサン概論では西洋美術史に沿ってロマネスクから初期ルネッサンスの遠近法の発展までの講義を行い、また別の回では「アルベルティの正統作図法」やピエロ・デッラ・フランチェスカの「絵画の透視法」などを解説して、実際の作図に取り組みさせた。絵画論ではメモリー・ドローイングのビギナー用エクササイズを実際に試みってもらう事を通して、ものを見るということに関しての再認識を促している。

2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	油絵実習ⅢA
2016, 2017 年度	デッサン概論
2016, 2017 年度	油絵入門
2016, 2017 年度	デッサン実習Ⅲ
2016, 2017 年度	絵画論
2017 年度	学外演習

【研究活動】

2017 年度は、廿日市にあるアートギャラリーミヤウチで自身の個展を開催した。旧作を主に選び、市大に着任後の新作も加えて展示構成を行った。これまで照明や展示空間も含めた空間装置として機能し得るような絵画をシリーズで追求してきた。社会連携委員として担当した油絵作品監修では 2018 年 3 月「広島赤十字・原爆病院賞」において院生 1 名を、並びに 2017 年度と 2016 年度には「清風会芸術奨励作品展」において、院生 2 名を、また、2016 年には呉医療センター・中国がんセンター主催の「Love&Smiles」展において院生 2 名を、それぞれ作品買上賞受賞に導いた。

1. 個展: 中野渡尉隆「霧／層」、アートギャラリーミヤウチ、広島 2017 年 9 月 - 2017 年 11 月 Yasutaka Nakanowatari "mist/layer", ART GALLERY Miyauchi, Hiroshima
2. IMAGO MUNDI - LUCIANO BENETTON COLLECTION, GALLERIE DELLE PRIGIONI、ヴェニス、2018 年 4 月～

3. 「あさみなみ芸術化構想 2018—安佐南区役所作品展示」油絵作品監修, 2018 年 3 月 - 2019 年 3 月
4. 「広島赤十字・原爆病院賞」油絵作品監修, 2018 年 1 月 - 2018 年 3 月
5. 平成 29 年度 第 5 回「社会医療法人 清風会芸術奨励作品展」油絵作品監修, 2017 年 11 月 - 2017 年 12 月
6. 研究成果展示「翻訳ゼミ”Memory Drawing”(メモリー・ドローイング)」旧日本銀行広島支店 3F フリースペース 2017 年 03 月-2017 年 4 月
7. 「あさみなみ芸術化構想 2017—安佐南区役所作品展示」油絵作品監修, 2017 年 3 月 - 2018 年 3 月
8. 平成 28 年度 第 4 回「医療法人社団 清風会芸術奨励作品展」油絵作品監修, 2016 年 11 月 - 2016 年 12 月
9. 独立行政法人国立病院機構 呉医療センター・中国がんセンター「Love&Smile」展 油絵作品監修, 2016 年 11 月 - 2016 年 12 月

【社会活動】

2017 年 9 月下旬から 11 月まで行われた、アートギャラリーミヤウチ(広島県)での個展の初日に アーティストトークを行った。また同展覧会において 10 月中旬に実施された 3 年生の学外演習(必須科目)において、アーティストトークを行った。その他、2016 年、2017 年 8 月初旬に開催された夏期公開講座では、一般公募により集まった希望者に対して油絵指導を行った。

2017 年 9 月-2017 年 11 月	アーティストトーク アートギャラリーミヤウチ 広島
2017 年 7 月-2017 年 8 月	平成 29 年度広島市立大学芸術学部公開講座 (油絵コース)
2016 年 8 月	平成 28 年度広島市立大学芸術学部公開講座 (油絵コース)

氏名	志水 児王
職位	准教授
研究分野	芸術・現代美術
研究キーワード	芸術・現代美術、インスタレーション

美術や芸術を学ぶことで、豊かで機知に富んだ感性や多角的なものの見方ができる想像力と、社会のシステムや構造に目を向けることができる批評力、そして人間や自然をより深く考察し表現活動を続けてゆける思考力の獲得を期待したい。

【教育活動】

構成演習では平面に限らず、身の回りに存在しているものや出来事を、新しい視点で見つめ直すきっかけを作り、視点の多様性や視野の拡張を目標とする。国内外の現代作家を積極的に紹介し、古典だけではなく、実験性、現代性を実習に持ち込む事を理想とする。油絵入門では他学科で油絵に興味のある生徒を対象に初歩的かつ基本的な描き方、ものの見方を体験学習できる事を目的とする。彫塑演習では平面を描く上で欠かす事のできないパースペクティブな視点や立体把握能力を高めることで、3次元を2次元へ置き換える作業へ、より奥行きのある見方を学習する目的がある。

2016, 2017 年度	構成演習Ⅰ
2016, 2017 年度	構成演習Ⅱ
2016, 2017 年度	構成演習Ⅲ
2016, 2017 年度	油絵入門
2016, 2017 年度	塑像演習
2016, 2017 年度	絵画論(オムニバス／2コマ)
2016, 2017 年度	デッサン概論(オムニバス／2コマ)
2016, 2017 年度	基礎演習
2017 年度	創作と人間(オムニバス／1コマ)
2017 年度	学外演習

【研究活動】

芸術と科学との融合的視点を軸として、様々なメディアを実験的に使用し、平面だけでなく空間に展開する美術作品を継続的に制作。研究対象は現代美術。2018 年度文化庁メディア芸術祭では審査委員推薦作品として東京都国立新美術館(六本木)にて作品が紹介される。また Sound Mark International sound art in Struer Denmark では、展覧会終了後 Struer City Museum に作品が収蔵された。

1. 畠中実、鈴田ふくみ, Re-actions Jio SHIMIZU / Kanta HORIO, 三菱地所アルティアム, 2017
2. 畠中実 他, アートとメディア・テクノロジーの展望 ICC オープン・スペース 10 年の記録 2006-2015, 東日本電信電話株式会社, 2016
3. threshold, 2017 年 9 月 - 2017 年 10 月 (アートギャラリーミヤウチ 広島)
4. Re -action Jio SHIMIZU / Kanta HORIO, 2017 年 9 月 - 2017 年 10 月(三菱地所アルティアム,福岡)

5. Sound Mark International sound art in Struer Denmark, Struer Denmark, 2017 年 5 月
- 2017 年 6 月
6. Art Photo Tokyo (茅場町共同ビルディング 東京) インターナショナル アート フェア,
2016 年 11 月 - 2016 年 11 月
7. Diaphanes (広島市立大学芸術資料館 広島), 2016 年 10 月

【社会活動】

2017 年 8 月末から 9 月下旬まで開催された 2 人展では、初日にアーティストトーク、展示期間中後期にクロストークとプレゼンテーションが行われた。ゲストには NTT Intercommunication Center 主任学芸員・畠中実氏、九州大学・城一裕氏、アルティアム主任学芸員・鈴田ふくみ氏とのクロストークが開催され、多くの福岡市民の方にお越し頂き、ICC の活動記録やメディアと芸術の関係性、可能性についての展望が語られた。9 月下旬から 11 月まで行われたアートギャラリーミヤウチ(広島県)での個展の際には初日にアーティストトーク、10 月中旬に実施された 3 年生の学外演習(必須科目)時にアーティストトークとプレゼンテーションを行った。

その他、2016 年、2017 年 8 月初旬に開催される夏期公開講座では、一般公募により集まった希望者に対して油絵指導を行った。

2017 年 9 月	クロストーク及びプレゼンテーション 三菱地所アルティアム 福岡
2017 年 9 月	アーティストトーク ギャラリーミヤウチ
2017 年 8 月	アーティストトーク 三菱地所アルティアム 福岡
2017 年 8 月	油絵夏期公開講座, 広島市立大学芸術学部油絵専攻
2016 年 8 月	油絵夏期公開講座, 広島市立大学芸術学部油絵専攻

氏名	田中 圭介
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻、木彫、現代美術

教育活動・研究活動・社会活動を通して、彫刻という芸術文化の継承と発展、ひいては人間社会の発展に寄与すべく研究と実践を続けている。自己の研究活動のテーマとして、“人間の幸福”を掲げ、作品制作を通じて、人間が幸福と感ずることと、幸福を求めることの間にあるジレンマを顕在化し、幸福とは何かという問いを追求している。この研究の成果をもって、社会との接点を持ち、地域社会や国際社会に意義ある影響を与えるべく努力している。教育活動においては、自己の活動の姿勢を示しながら、学生個々人の思考や能力を尊重し、各人の独創的研究の補助や、そのための指導に努めている。また、教育活動の土台である大学運営においては、100 年先の芸術教育を見据えて必要な改革に尽力することが本学の発展につながると考え、そのための考察を今後も続けていく。

【教育活動】

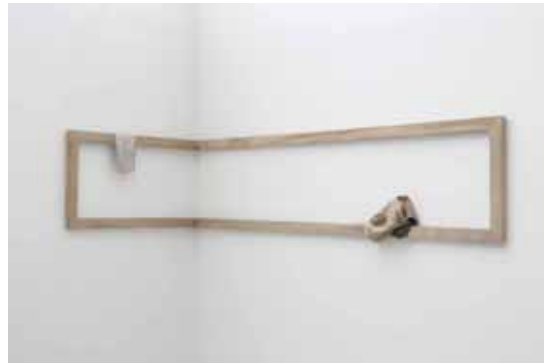
教育活動において、第一に表現者たる作家育成を目的として、第二に社会貢献のできる人材育成を目的として、指導、研究を進めている。作家育成に関しては、主として彫刻分野の発展と革新について自身の問題として向き合える学生の育成を心がけている。また、近年の既存のカテゴリーに収まらない多様な芸術表現にアプローチする学生の感性も尊重し、各人が独創的な表現を生み出し社会に出て活動を継続できる技能を身につけられるよう指導している。作家志望でない学生に関しては、各人の進路希望に寄り添いながら、本学での学びを生かせる進路を共に検討し、その進路のための有益な技能を身につけられるよう適宜指導している。

2016, 2017 年度	彫刻論(古典研究を含む)
2016, 2017 年度	構成演習 I
2016, 2017 年度	彫刻概論
2016, 2017 年度	実材制作実習 II
2016, 2017 年度	彫刻実習 I
2016, 2017 年度	彫刻実習 III

【研究活動】

研究活動として、彫刻という分野の可能性と意義について思考し、創作と発表を繰り返している。特に木材を素材とした木彫の伝統の継承と革新について、継続的に研究している。また、現代において、彫刻という分野がかかえるジレンマや、そのことに大きく関わる現代美術と称されるグローバルな動向に対し積極的に向き合い、独自の芸術表現を模索し続けている。

1. Current Traditions : Contemporary Japanese Wood Sculpture, Salisbury University Art Galleries, 2017 年 9 月 - 2017 年 10 月
2. Art Basel Hong Kong, Hong Kong Convention and Exhibition Centre, 2017 年 3 月



3. ART STAGE SINGAPORE 2016, MARINA BAY SANDS, Singapore, 2016 年



4. ART BASEL HONG KONG, Hong Kong Convention and Exhibition Centre, 2016 年



【社会活動】

社会活動として、研究成果の発表を、画廊やアートフェアを中心に行っている。また、講義や講演、審査などの依頼も積極的に受け、自身の考えを言葉で伝える機会を持つことや、地域社会に自身の研究成果を還元する機会を持つことを心がけている。

氏名	釣谷 幸輝
職位	講師
研究分野	版画
研究キーワード	メゾチント、木口木版画、ノン・トクシク技法

現在、本大学では教育活動、研究活動、社会活動、大学運営においてそれぞれおよそ4:4:1:1の割合で行っている。これらに通底するものは一貫してできるだけ多くの人々に創造力の大切さを訴えることにある。創造力を持った人間は新しいものを生み出すのみならず、社会をより良い方向へと変えていくことができると考えている。そうした理念を実践できる場として大学での教育や作品発表、社会活動を行っている。とりわけここ数年は学生とともに、いくつかのプロジェクトを積極的に展開することで地域と密接に関わってきた。大学運営としては、施設運営委員会委員長をはじめ、就職支援・キャリア形成委員、国際交流委員、COC+APWG 会議、紀要編集委員に携わった。

【教育活動】

主に版画に関連した科目および、油絵表現に関する科目を担当している。

版画領域においては4版種すべての技法を網羅しながら、「版画制作実習Ⅰ」で凹版の代表的な技法である銅版画を、制作者の健康に配慮したノン・トクシク(無害な)技法で行い、「版画制作実習Ⅱ」では凸版技法のひとつであり緻密で写実的な版表現の可能な木口木版画技法の講義を行った。

また「油絵研究 CⅠ・CⅡ」においては、絵画表現で培った基礎的な造形力を基に版画を含めた表現媒体の幅広い研究の指導を行っている。

2016, 2017 年度	版画制作実習Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	版画制作演習
2016, 2017 年度	絵画論
2016, 2017 年度	油絵入門
2016, 2017 年度	油絵研究 CⅠ・CⅡ
2016, 2017 年度	博物館実習

【研究活動】

研究活動としては主に版画家としての創作・発表活動と、メゾチント技法、木口木版画技法、ノン・トクシク技法における技法材料の研究を行っている。

創作・発表活動においては、国内外における個展、グループ展を中心に積極的に作品発表を続けており、コンクール等における受賞や、海外での展覧会において招待作家としても出品を行った。

メゾチント技法では新しい「目立て」法の開発、木口木版画技法では版木の研究、ノン・トクシク技法においては主にグランドの塗布についてと、技法普及のための研究活動を行った。

1. 『版と表現』(岩崎ミュージアム／横浜), 2017 年
2. アートフェア・アジア 2017(ホテルオークラ福岡／福岡), 2017 年
3. 『身体表現／リズム／記憶 コレクション展』(黒部市美術館／黒部), 2017 年
4. 第4回国際メゾチントフェスティバル(エカテリンブルグ美術館／ロシア), 2017 年

5. 国際コンテンポラリー・ミニプリント・カザンラク(カザンラク美術館／ブルガリア), クラシカル プリントメイキング部門 1 等, 2017 年
6. 第 3 回 ON PAPER(シカゴ・プリントメーカーズ／アメリカ), 賞候補 2017 年
7. 第 61 回 CWAJ 現代版画展(ヒルサイドフォーラム／代官山／東京、ハイフィールド・ホール・アンド・ガーデنز／マサチューセッツ州／アメリカ), 2017 年
8. 国際版画ビエンナーレ スピリットグラフィック(Old City Hall 他／クロアチア), 2017 年
9. 『パランスキー・アート』展 (ギャラリーウォール／ステファン・スレマック国際図書館／ニシュ／セルビア), 2017 年
10. 『第 4 回エンター・イントゥー・アート』(“Kulturbahnhof” - Cultural center 他／ドイツ) ～18, 2017 年
11. マクネイ・プリントフェア(マクネイ美術館／アメリカ), 2017 年
12. アワガミ国際ミニプリント展(いんべアートスペース／徳島), 賞候補 2017 年
13. 5th Annual International Juried Print Exhibition (リマーク/ニューグランド版画工房／アメリカ), 2017 年
14. 第 28 回国際スモールプリント(招待)(シカゴ・プリントメーカーズ・コラボレイティブ／アメリカ), シカゴ／アメリカ, 2017 年
15. 個展 カザンラク美術館, カザンラク美術館, 2017 年
16. 個展 ギャラリー惣(銀座), 2017 年
17. 第 8 回ドオーロ国際版画ビエンナーレ 2016 招待出品 (Alijo／ポルトガル), 2016 年
18. 第 2 回上海半島美術館日本版画招待展 2016(上海半島美術館／中国), 2016 年
19. 『パランスキー・アート』展(ニシュ文化センター／セルビア), 2016 年
20. 個展 レスコバック・ナロッドニー美術館 (レスコヴァツ／セルビア), 2016 年
21. 個展 The Gallery TRAG(ベオグラード／セルビア), 2016 年
22. 個展 なかお画廊(熊本), 2016 年
23. 個展 ガレリアポンテ(金沢), 2016 年
24. 個展 ギャラリー6 坪(十日町市), 2016 年

他

【社会活動】

社会活動においては、本学における「社会人講座(版画コース)」、「公開講座(版画)」を担当するとともに、西宮の版画工房コントロールポワン.jpにおいてメゾチントのワークショップを行った。とりわけ国内では、需要がありつつもまだ普及途上にある制作者の健康に配慮したノン・トクシック(無害な)技法に関するワークショップや、自身のメインテクニックである「メゾチント技法」および「木口木版画技法」に関するワークショップを行なっている。

また、プロジェクトとして COC+事業「宮島双六観光マップ」制作プロジェクトや、「くれ三十六景 ～学生たちが見た呉の風景～」展(呉市立美術館)などを行った。

2017 年 12 月	ギャラリートーク「瑛九」展(広島市立大学資料館)
2017 年 7 月	広島市立大学 公開講座 木口木版画
2016 - 2017 年度	COC+事業「宮島双六観光マップ」製作プロジェクト
2016, 2017 年度	広島市立大学社会人講座(版画コース)
2016 年 7 月	広島市立大学 公開講座 ノン・トクシック技法による銅版画
2016 年度	プロジェクト「呉かるた」制作(野呂山芸術村事業)
2016 年	メゾチント・ワークショップ(コントロールポワン.jp／西宮)

氏名	永見 文人
職位	教授
研究分野	デザイン学(金属工芸・金属造形)、デザイン学、芸術一般
研究キーワード	金属造形、金属彫刻、金属工芸、鍛金・彫金・鋳金

我が国の金属工芸では、他国には類のない繊細さと高度な技術に裏づけされた優れた作品が残されている。「教育活動」においては、金属工芸の「彫金・鍛金・鋳金」の基礎技法と表現方法を指導する中で習得した技術と柔軟な思考をもとに、現代の工芸と金属造形の新たな表現と方向性を目指すことを指導の目的としている。自身の研究活動においても文化財の保護と後継者の育成にも寄与している。

【教育活動】

デザイン工芸学科金属造形分野の学部・博士前期の学生を対象とした実習及び演習教科を担当し、学部の卒業制作・博士前期の修了制作までの指導をしている。「創作と人間」では、全学対象教科として、専門の金属工芸の紹介を通じて、創作の喜びと社会における芸術の役割について講義している。「教職実践演習(中等)C」では、教職の資格修得科目として、高校美術教員の経験を生かし、将来、中学または高校の美術教員を目指す芸術学部の4年生、約30名に教育現場に立つ上での実践力を身につける教育を実施している。「博物館実習」では、学芸員資格修得希望の学生に金属工芸の立場から、作品の鑑賞方法や、保管・取扱い方法について指導している。その他「COC+(地域活性授業)」の一環として「たたらプロジェクト(2017年実施、終了)」と「宮島オリジナルグッズの考案(2018年実施中)」を計画している。

2016, 2017 年度	造形実習ⅡA(金属造形分野)
2016, 2017 年度	造形実習ⅢA(金属造形分野)
2016, 2017 年度	造形研究(演習)(金属造形分野)
2016, 2017 年度	創作と人間
2016, 2017 年度	造形実習ⅡB(金属造形分野)
2016, 2017 年度	造形実習ⅢB(金属造形分野)
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	造形実習ⅠB
2016, 2017 年度	教職実践演習(中等)C
2016, 2017 年度	テーマ研究(演習)
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅰ
2016, 2017 年度	金属造形演習
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅱ
2016, 2017 年度	博物館実習

【研究活動】

公募団体展覧会の日展、現代工芸美術展を中心に出品し、日展には、24回の入選、現在会友である。現代工芸展に於いては、2006年より本会員になり、2012年の「第51回展」では審査委員を務める。その他、広島・山口で多数のグループ展を実施している。かつては、家族をモチーフとした作品から、女性像と生命、近年では、生命の根源を水と捉

え、水の循環を雲と水をモチーフとして表現とした作品を多く発表している。金属工芸の伝統技法で作られた道具類からオブジェ、クラフトまで、幅広く制作活動と研究を行なっている。



《春風のシンフォニー》
2012 第 51 回日本現代工芸美術展
銅に銀メッキ、真鍮にクロームメッキ、
真鍮、チタン、鉄、ス W30×D26×H68 cm



《雲風》
2014 改組 新第 1 回日展
銅に銀メッキ、真鍮にクロームメッキ、
真鍮、鉄、ステンレス W40×D30×H90 cm

1. 作品:「月あかり(香炉)」,「栗水滴」等 9 点・「Metal Festa」出品, 福屋デパート(広島八丁堀店・広島), 2017 年 11 月
2. 作品:「涙する果実Ⅱ」,「春の水景」, はつかいち美術ギャラリー, 2017 年 9 月 - 2017 年 10 月
3. 作品:「雲風」,「リスのテーブル」, 吉賀大眉美術館, 2017 年 6 月 - 2017 年 9 月
4. 作品:「春風のシンフォニー」, 泉美術館, 2017 年 6 月 - 2017 年 7 月
5. 作品:「春風のシンフォニー」,「リスのテーブル」, 廿日市 美術ギャラリー, 2017 年 5 月 - 2017 年 6 月
6. 作品:「春風のシンフォニー」, LIXILE ギャラリー・東京都 中央区 銀座, 2016 年 12 月 - 2017 年 1 月
7. 作品:「たゆたう」・改組 新 第 3 回日展(入選)(団体展), 東京国立新美術館・東京都 六本木, 2016 年 10 月 - 2016 年 12 月
8. 作品:「夏雲の恵みⅡ」, 吉賀大眉記念館・山口県 萩市, 2016 年 6 月 - 2016 年 10 月

【社会活動】

毎年実施される「サマースクール」については、デザイン工芸学科入学を希望する受験生 50 余名を対象として、「鉛筆素描」の実技指導と講評を中心に、受験勉強の方法等を指導している。デザイン工芸学科工芸 3 分野で 3 年に一度のサイクルで持ち回る「公開講座」では、10 名程度の一般市民を対象として金属工芸の作品制作の指導をしている。2012 年と 2015 年に実施した講座においては、広島のかつての伝統産業であった「広島銅蟲」の認知度を高めることと体験を兼ねた講座を企画した。刀の外装には、金工・漆・

染織といった本学の工芸三分野の技術が駆使されているが、現在は、その後継者の減少に苦労している。本学金属造形分野は、広島県在住の「刀鍛冶」の方と協同し、2010～2014年に「広島 KAZARU 展」を企画し、金工・漆・染織に関する公募展とワークショップを計画する事で若者層の後継者育成に努力してきた。「広島 KAZARU 展」においても「広島銅蟲」に関連する展示を企画した。2015年12月と2016年11月には、新たに厳島神社重要文化財「錦包み藤巻き太刀、腰刀拵え」の復元を目的とした予備調査を実施した。

2016年11月-	第2回 厳島神社重要文化財「錦包み藤巻き太刀、腰刀拵え」調査
2015年12月-	第1回 厳島神社重要文化財「錦包み藤巻き太刀、腰刀拵え」調査

氏名	中村 圭
職位	講師
研究分野	デザイン学
研究キーワード	ビジュアル・コミュニケーション・デザイン、基礎デザイン教育、デザインによる地域課題解決

教育活動においては、ビジュアル・コミュニケーション・デザインを中心として、ディレクション能力の向上を重視し、構想力のある人材育成に取り組んでいる。

研究活動においては、デザインが社会性の強い分野であることを踏まえて、社会活動との連動性を重視している。具体的には、地域の諸課題に対して、デザインの手法により解決や新しい提言を行うことに取り組んでいる。

【教育活動】

実習系科目と座学系科目の2系統の教育活動に取り組んでいる。

実習系科目では、専門分野である視覚造形(ビジュアル・コミュニケーション・デザイン)に加えて、2016 年度以前にはデザイン工芸学科 1 年の実習科目カリキュラム構築と主担当教員を務めた。また、専門分野では、2 年生から 4 年生までのカリキュラム構築と指導を行った。大学院生や外国人研究生に対しては、学生個々の研究計画に合わせた指導を行った。また、実習系科目において、制作環境の充実が教育効果の大きなファクターであるため、このことについても常に改善を試みて来た。

座学系科目では、デザイン工芸概論を担当しており、実際にデザインや工芸に携わる専門家を招聘し、その仕事と今日における状況を、全学学生に対して紹介している。刀匠による真剣の紹介や、茶道家元によるお点前のデモンストレーションなど、地域性も考慮した内容としている。また、NPO 論やプレゼンテーション技法概説でのオムニバス講義の担当などを通じて、芸術と他領域の関連性について、他学部の学生を中心に紹介した。

以下の表は、担当の科目のほか、1コマだけ講義を行ったものなども含む。

2016, 2017 年度	造形実習ⅡA
2016, 2017 年度	造形実習ⅡB
2016, 2017 年度	造形実習ⅢA
2016, 2017 年度	造形実習ⅢB
2016, 2017 年度	造形実習Ⅳ
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	デザイン工芸概論
2016, 2017 年度	プレゼンテーション技法概説
2016, 2017 年度	NPO 論
2016, 2017 年度	地域課題演習
2016, 2017 年度	視覚造形演習
2016 年度	基礎演習
2016 年度	造形実習ⅠA
2016 年度	造形実習ⅠB
2017 年度	描出演習Ⅱ

【研究活動】

「創造的文化芸術活動を通じた基町地域活性化の実践的研究(研究代表)」、「大学と行政の協働による創造的な文化芸術活動や地域交流等を通じた、基町住宅地区の魅力作りや持続的な活性化に関する研究(研究分担)」などの研究を通じて、基町プロジェクトに取り組んでいる。基町プロジェクトでは、創造的な文化芸術活動で基町住宅地区(広島市中区)の魅力づくり・活性化を目指しており、その実践的研究を行なっている。

また、情報科学部教員との共同研究「世界平和に対する広島市立大学の貢献 ―挑戦的学内連携の構築を通して―」に取り組み、実際に作品制作や展示を含めて実践的に行った。

1. 基町プロジェクト・シンポジウム 2016「広島基町高層アパートと大高正人」ドキュメント, 基町プロジェクト(広島市立大学), 2017
2. 「Lights」,2017, 中村圭/常盤達司/厚海慶太/長山哲也「現代の造形-Life&Art-『光-身近に潜む科学とアート-』」(東広島市立美術館)

【社会活動】

次に挙げるようなデザインに関する社会活動に取り組んでいる。行政の依頼によるデザイン賞の審査員。障害者の芸術活動を支援する NPO の協力委員など。基町プロジェクトを通じた、地域に創造的な文化芸術拠点を形成することによる地域活性化への貢献(他大学との連携を含む)。その他。

2017 年 9 月-	広島市ひろしま街づくりデザイン賞受賞者選考審議会委員
2017 年 4 月-	平成 29 年度障害者芸術文化活動支援事業アートサポートセンター協力委員
2017 年 4 月-	ひろしまグッドデザイン賞選定委員会委員
2016 年 7 月 -2017 年 3 月	東広島市立美術館特別企画展実行委員会委員として、『現代の造形-Life&Art-「光-身近に潜む科学とアート-」』の展示企画、会場レイアウト、グラフィックデザイン、関連イベント企画に携わる。
2014 年 4 月-	基町プロジェクトにおいて、企画、運営に携わる。

氏名	七搦 綾乃
職位	助教
研究分野	彫刻、木彫
研究キーワード	自然物や布をモチーフとした木彫表現の研究

大学での様々な活動において、私は彫刻という有史以前より行われてきた、芸術表現の現代における可能性を探求し、その制作方法や、歴史、特性、魅力を教育などを通じて、後世に残し、社会に広めることを行ってきた。特に研究活動は、上記の一連の実践の土台となる最も重要なものと考えており、日々の授業準備、教育活動、大学運営等を行いながらの限られた時間の中で最大限の努力を行ってきた。幸いにも、国内外の様々な展覧会(2年間で計23件)に参加することができ、様々なコンペティションで評価を頂き、いくつかの賞も頂くことができた。これらの経験による新たな知見により、更に彫刻という表現について考えを深めることができ、それを教育活動、社会活動にも活かすことができたと考えている。

【教育活動】

彫刻の様々な技術や表現、伝統的な美意識や価値観について学ぶための基礎となるデッサン(素描)の担当などを行った。1学年平均10人の学生は、それぞれの個性に加え、実技の能力にもある程度のばらつきがある。彫刻におけるデッサン(素描)の美意識や技術、表現方法をレクチャーしながら、ある程度実習が進んでからは、各自の進度、能力に沿った指導を心掛け、それぞれが彫刻におけるデッサンの意義を理解し、技術及び表現方法を向上させられるよう努めた。実習ではほとんどの学生が目的を達成できたと考えている。また、学生の中には時折悩みを抱えている者もあり、そのような場合は実習以外でも声をかけ様子を聞くなどし、きめ細かな対応を心掛けた。

2016, 2017 年度	デッサン実習Ⅰ
2016, 2017 年度	デッサン実習Ⅱ
2016, 2017 年度	デッサン実習Ⅲ

【研究活動】

私は学生のころより、彫刻の中でも、木を用いた彫刻表現の研究を行ってきた。近年は、これまでは彫刻表現の中心的な題材ではなかった布、および自然物や自然現象(植物、石、山、虹など)をモチーフに研究・制作を展開し、木による彫刻表現の新たな可能性を模索している。様々な芸術作品を参照しながら、木の加工の仕方にも独自の方法を取り入れ、新たな表現手法を手に入れることができた。そのようにして制作した作品は、幸い多くの方から評価を得ることができ、様々な展覧会に招聘して頂いた結果、2年間で国内外の23の展覧会に参加し、資生堂 art egg 賞、ミッドタウン・アート・アワード準グランプリ等いくつかの賞を頂くことができた。

1. 「ミッドタウン ストリートミュージアム 2018 MIDTOWN BLOSSOM 2018・MIDTOWN OPEN THE PARK 2018」, 2018
2. 「第7回 彫刻の五・七・五展」, 2017
3. 「第10回 Tokyo Midtown Award」, 2017
4. 「Bank ART Under35 2017 七搦綾乃」, 2017

5. 「対馬アートファンタジア 2017」, 2017
6. 「Cosa c'è? 一形の根拠を探して」, 2017
7. 「Rainbow/虹」, 2017
8. 「Seeing the Unseen」ミヅマアートギャラリー共同企画展, 2016
9. 「子猫を一匹飼っている」, 2016
10. 「第 52 回神奈川県美術展」, 2016
11. 「対馬アートファンタジア 2016」, 2016
12. 「血のつながった雫」, 広島芸術センター, 2018 年 3 月 - 2018 年 4 月
13. 「EXHIBITION ZEN&BE-ZEN II INSTALLATIONS IN A ZEN GARDEN 生かされている」, 岡山 曹源寺, 2018 年 3 月 - 2018 年 4 月
14. 「ミッドタウン ストリートミュージアム 2018 MIDTOWN BLOSSOM 2018・MIDTOWN OPEN THE PARK 2018」, Tokyo Midtown, 2018 年 3 月 - 2018 年 5 月
15. 第 7 回「彫刻の五・七・五」展, 2017 年 11 月
16. 第 10 回 Tokyo Midtown Award, 2017 年 10 月 - 2017 年 11 月
17. 「Bank ART Under35 2017 七瀬綾乃 個展」, 2017 年 9 月
18. 「Cosa c'è? 一形の根拠を探して」, DISEGNO ASSOCIAZIONE PER LE ARTI CONTEMPORANEE、イタリア, 2017 年 5 月 - 2017 年 6 月
19. Tokyo Midtown Award 2017 準グランプリ, 2017
20. 「第 10 回 資生堂 art egg 賞」, 株式会社資生堂, 2016

他 3 件

【社会活動】

社会活動においては毎年夏休みに開催される公開講座において、社会人を対象に彫刻制作の技法等について、講義と指導を行った。彫刻表現における伝統的な価値観、美意識等を伝えながら、3D プリンターを用いた講座では最新の技術に触れ、立体物を作る技術の進歩とそれに伴う表現の変化の可能性について、受講者の方々と一緒に考え、議論しながら制作を行った。講座では受講された社会人の方々のそれぞれの興味や技能にあった指導を心掛けた。また私は社会活動として、広島市内でギャラリーを運営しており、そこで県内外の芸術家の展覧会を多数開催した。広島在住の芸術家をはじめとした、優れた芸術家の作品を広く市民に公開することで、幾ばくか、広島の芸術・文化の更なる普及・発展に寄与できたのではないかと考えている。

2017 年 7 月	彫刻【塑像及び 3D プリンター】
2016 年 8 月	彫刻【3D プリンター】
2016 年 7 月	彫刻【塑像】

氏名	野田 睦美
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	染織造形、現代織物、綴織、タピスリー

現在、日本の染織及び新しい繊維造形は、その独特な美意識によって世界から注目されています。繊維には、柔軟性や温もりがあるといった特質に加えて、微粒子の染料が繊維に染み込み発色することで現れる豊かな光彩があります。私は日本の伝統的な染めと織りの技術を基に、新素材による繊維と染色について研究し、デザイン、糸の開発、染色、製織、作品設置までを一貫して行った染織造形を制作しています。そして、日本とフランスの美術織物の到達点を吸収し、独自の染織技術による「糸ではないような糸、織物ではないような織物で、見る人・場・光を予測し、現代人に共鳴する作品」という新しい分野の可能性を探求し、創作活動を行っています。

【教育活動】

広島市立大学芸術学部デザイン工芸学科染織造形では、日本の伝統技術から現代技術までを研究した上で、現代社会においてより重要になっている染織芸術の可能性を、素材、技術、知識といった多角的な視野から考え、独自の研究と創造力を融合させ、染織芸術の未来を切り開くことを目標としています。授業では学生が好奇心を高め、着想だけではなく様々な考察を基にした創作及び各自のテーマを探究できるように指導を行っています。特に発想から完成に至るまで、講義、個別相談、技術指導等を通して、学生が自由に制作できるように配慮しています。そして広島市立大学が芸術における社会的役割を担い、発展するための教育活動に繋がりたいと思います。

2016, 2017 年度	造形実習ⅡA・ⅢA
2016, 2017 年度	造形研究
2016, 2017 年度	工芸材料概説
2016, 2017 年度	形体演習Ⅱ
2016, 2017 年度	造形実習ⅠB・ⅡB・ⅢB
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	描出演習Ⅱ
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	創作総合研究Ⅱ
2016, 2017 年度	染織造形演習
2016, 2017 年度	テーマ研究
2016, 2017 年度	古美術研究
2016, 2017 年度	領域横断特別研究

【研究活動】

京都府生まれ。広島、京都、フランスにて創作活動を行う。生と死が入り混じる独自の染織造形の世界を展開している。京都市立芸術大学美術学部、美術研究科(博士前期課程、博士後期課程)を修了。その後、文化庁新進芸術家海外派遣研修員に推挙されフランスに1年間派遣。フランスでは École Nationale Supérieure des Beaux-Arts de Paris(パリ国立美術高等学校)と Paris Ateliers-Tapisserie de hautelice (パリ市立工房堅機タピスリー)において、創作と作品発表を行う。受賞、パブリックコレクション、展覧会、文献、タピスリーのデザイン等がそれぞれ多数ある。

1. 第72回新匠工芸会展(東京都美術館・京都市美術館), 2017年10月-11月
2. 第6回国際工芸美術作家協会展(広島・はつかいち美術ギャラリー), 2017年9月-10月
3. 講演: 樋田豊次郎、パネリスト: 樋田豊次郎、大塚智嗣、木本一之、野田睦美, 『創造する工芸—その多様性と可能性』, シンポジウム『これからの工芸』, 2017年9月
4. 文献: 『第71回新匠工芸会展覧会図録』, 新匠工芸会, 2017年4月1日
5. 文献: 『美術ひろしま2015-2016』, 公益財団法人広島市文化財団, 2016年12月
6. 日韓現代美術交流展(JARUFO 京都画廊), 2016年11月
7. 第71回新匠工芸会展(東京都美術館・京都市美術館), 2016年10月-11月
8. 京都芸大同窓会アートフェア2016(京都市立芸術大学ギャラリー@KCUA), 2016年3月-2016年4月
9. 文献: 『京都芸大同窓会アートフェア2016』, 京都芸大同窓会アートフェア2016実行委員会, 2016年6月26日
10. 文献: 『第70回新匠工芸会展覧会図録』, 新匠工芸会, 2016年4月1日

他、展覧会多数



命そのときの華 h. 205.0×w. 277.0×d. 10.0 cm/2016

和紙, 棕櫚縄, 絹糸, ラミー糸, ポリエステル糸, 羊毛, 銀糸, 銅製ネット, ポリエステル製ネット, 石

【社会活動】

創作活動及び研究発表や広島市立大学芸術学部における社会人講座、公開講座、サマースクール、アートプロジェクトを通して、新しい染織芸術の魅力を伝える活動を国内外で行っています。

2018年4月-2019年3月	愛知県綴織緞帳クリーニング/監修
2018年4月-2019年3月	COC+染織造形アートプロジェクト・加計/監修
2017年9月	国際工芸美術作家協会シンポジウム『これからの工芸』
2017年8月	芸術学部デザイン工芸サマースクール
2017年7月-	旗呉 FLAGS +染織造形アートプロジェクト/監修
2017年4月-2018年3月	COC+染織造形アートプロジェクト・宮島/監修
2017年4月-2018年3月	マツダ・広島市立大学芸術学部共創ゼミ/技術指導
2016年8月	芸術学部デザイン工芸サマースクール
2016年4月-2017年3月	江田島紙布による新製品開発提案/監修
2016年8月	芸術学部公開講座「藍染絞りによる夏のストール制作」
2015年4月-	公益財団法人一宮地場産業ファッションデザインセンター「翔工房」・JAPAN YARN FAIR & 総合展「THE 尾州」/技術指導
2014年3月-	パリ市立工房堅機タピスリー上級技術特別研修客員
2012年4月-	芸術学部社会人講座(染織造形通年コース)/指導
2012年4月-	民族藝術学会会員
2011年5月-	新匠工芸会運営委員
2009年5月-	京都工芸美術作家協会会員

氏名	藤江 竜太郎
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	環境芸術、ランドアート、アートプロジェクト、ワークショップ、パブリックフ アニチャー

環境を主素材とした制作活動とそこから培った審美感を基に、公共空間に向けた魅力的な空間づくりへのきっかけとした企画やデザインを行なう研究とともに、環境と造形の関係を整理し、関わる人々にとって意識的に豊かな環境作りに貢献できる提案と、人づくりを通して教育と社会活動を同時に行う。

【教育活動】

入試内容の変更により生まれた造形の基礎力低下に伴う点において、1年次前期造形実習のカリキュラムを基礎力強化に重点を置いた内容に修正する。とりわけ立体造形力に関しては、経験の少ない学生が多くみられるために立体造形のリメディアル教育を充実させる内容を今年度から行い、後期からの多様な表現力を身につけるカリキュラムに向けての準備に充てる内容にしていく。

2年次以降の造形実習では、テーマによるアイデアの立案方法とそれに伴う具体的な造形技術の習得、制作した作品の発表に必要なプレゼンテーション能力の習得に力を入れて取り組む教育カリキュラムを綿密に調整しながら組み上げた。

2017 年度	工芸制作Ⅱ
2017 年度	造形実習ⅠA
2017 年度	形体演習Ⅰ
2017 年度	造形実習ⅡA
2017 年度	造形実習ⅢA
2017 年度	造形研究(演習)
2017 年度	材料技法演習
2017 年度	造形実習ⅠB
2017 年度	造形実習ⅡB
2017 年度	造形実習ⅢB
2017 年度	描出演習Ⅱ

【研究活動】

環境を作品の素材として扱うことを主軸に、目の前のごくありふれた日常の中に、非日常性を与えることで空間や時間の連続性を遮断するような違和感を与える。そうすることにより、日常生活の中で見逃しがちな、小さな変化の事象、自然のわずかな声に目を向けるきっかけになる作品を制作する。



かがわ・山なみ芸術祭 2016「Memory of water」

1. BEYON, 広島地下街紙屋町シャレオ, 2017 年 6 月
2. たんけん！！みんなのアートジャングル 主催: (公財) 廿日市市文化スポーツ振興事業団, はつかいち美術ギャラリー, 2016 年 11 月 - 2016 年 12 月
3. かがわ・山なみ芸術祭 2016 まんのう町エリア, 国営讃岐まんのう公園, 2016 年 9 月 - 2016 年 10 月

【社会活動】

作品制作で培った感覚的な表現を社会に発信する媒体として、都市計画やプロダクトデザインを用いた展開方法を模索しながら、生活に寄り添うアートの存在方法を突き詰めていく。



紙屋町シャレオ・アートベンチデザイン

2016 年-2017 年	紙屋町シャレオ・アートベンチデザイン

氏名	古堅 太郎
職位	講師
研究分野	芸術一般
研究キーワード	現代美術、インスタレーション

2001 年広島市立大学大学院芸術学研究科修了。2010 年ベルリン・ヴァイセンゼー美術大学大学院彫刻科修了。2004 年から 2016 年までドイツを拠点に活動。国内外の展示やレジデンスなどに参加。2009 年ポーラ美術振興財団在外研修員としてドイツに滞在。2017 年より広島市立大学芸術学部現代表現領域講師。大学では主に学部生の演習を担当。身近な出来事を起点としながら、そこに潜む問題意識に社会的な視点を与えることを目指す。研究活動では、細胞の代謝を変化するアイデンティティーのアレゴリーと位置づけ、近年、広島戦後に注目した作品を制作。社会活動では、昨年より COC+の一環としてアートプロジェクトを開催。

【教育活動】

造形実習ⅡA、造形実習ⅡB では、それぞれ3週間程度の課題を連続して行うことにより、身近な出来事に潜む問題意識に社会的な視点を与える分析力と理論的な構築力を獲得する。造形実習ⅡA、造形実習ⅡB の延長線上に位置する造形実習ⅢA、造形実習ⅢB では、先述の演習と同じく、テーマを設定した課題を連続して行うことにより、分析力と理論的な構築力に加え、思考やアイデアに沿った造形力や発想力を獲得する。描出演習Ⅱでは、チラシやポスター、ポートフォリオの制作に必要な DTP の基礎的な知識とデザイン力を学ぶ。現代美術論では、19世紀以降の美術史を起点に、著名なアーティストや作品の時代背景やコンセプトなどを学ぶ。

2017 年度	造形実習ⅡA
2017 年度	造形実習ⅡB
2017 年度	描出演習Ⅱ
2017 年度	造形実習ⅢA
2017 年度	造形実習ⅢB
2017 年度	現代美術論

【研究活動】

近年の主な個展に、『N のパラドックス』A/T(近藤愛助/古堅太郎)、アートギャラリーミヤウチ、広島/2016、『A Call To Family』ITO、ドイツ/2015、『私とあなたと知らない誰か』TWS ベルリン、ドイツ/2013 など。近年の主なグループ展に、『ヒロシマ・コード』旧日本銀行広島支店、2017、『Artist in FAS 2016』藤沢市アートスペース、神奈川/2016、『I like to eat with my hands』ウェックスフォード・アーツ・センター、アイルランド/2016、『Grainy, Blurry』国際交流基金ケルン、ドイツ/2013 など。

【社会活動】

昨年度より、文部科学省による「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の一環として広島市立大学芸術学部の現代表現領域が中心となり、尾道市立大学、AIR ONOMICHIと協働し、アートプロジェクトを開催した。広島市立大学の学生が実際に尾道を訪れ、現地でのリサーチを経て、企画の立案、作品の制作、展覧会の運営を行った。

芸術を通じて地域課題に取り組むことにより、学生には、より実践的な作品制作について学ぶことができ、地域社会には学生を通じて地域の資産を新しい視点で捉える機会を提供することができた。

2017 年 4 月 -	尾道市立大学と連携したアーティストによる空き家再生事業を軸に、観光振興による地域創生に向けた人材育成事業(COC+関連事業)

氏名	前川 義春
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	彫刻、造形芸術、ランドスケープ、地域創造、国際交流

教育・研究担当理事・副学長としての大学業務が中心であり、理事会、経営協議会、教育研究評議会、運営調整会議、理事・事務連絡会議、人事委員会、危機対策会議、内部質保証委員会の委員を務めた。また委員長を務める全学委員会としては、教務委員会、全学共通教育委員会、学生委員会、国際交流委員会があり、中期計画に沿った委員会運営を行なった。担当する委員会の下部組織として、全学共通教育専門委員会、3 学部合同基礎演習検討 WG、COC+教育プログラム専門委員会、カリキュラム編成 WG の委員長を務め、その他、広島市立大学大学院平和学研究科設置委員会、教職課程委員会、外国語教育専門委員会、保健管理室運営委員会、いちだい知のトライアスロン実施委員会、COC+実施特別委員会、COC+事業運営部会、アートプロジェクト WG の委員を務めた。

【教育活動】

第 2 期中期計画の重点課題の一つとなっている、「3 学部合同基礎演習」(1 年次前期開講)の導入に向けた検討を、2016 年度に全学共通教育委員会及び WG の委員長として行い、2017 年度にはマニュアル作成および担当教員説明会を開催し、2018 年 4 月の開講に導いた。また本学初の学術交流協定締結校である、ドイツ・ハノーバー専科大学との交流 20 周年記念事業として、2017 年と 2018 年に教職員の相互派遣を行い、今後の両校の国際間学生教育の新たな展開やダブルディグリーについての協議を行った。芸術学部・芸術学研究科彫刻専攻における学部生、大学院生における教育としては、特任教員とともに下記にあげる授業科目を担当し、学部生には基礎実技を中心とした実習科目の指導、大学院生には現代社会と対峙する実践的な創作活動の指導を行った。

2016, 2017 年度	ひろしま論(オムニバス／1 コマ)
2016, 2017 年度	実材制作基礎演習(工芸制作を含む。)
2016, 2017 年度	彫刻論(古典研究を含む。)(オムニバス／1 コマ)
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	彫刻研究 AI・AII
2016, 2017 年度	創作総合研究 I・II
2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

2010 年以来継続している「あさみなみ芸術化構想—西風新都中央線(大塚シンボル通り)沿道作品設置」事業では、2016 年に卒業生、修了生の石彫作品各 1 点を設置し、これまでに自己の作品 2 点を含む計 6 点の大型彫刻作品を設置するとともに、ステンレス製によるアートマップ(案内板)を作成し、上り・下り線に各 1 基ずつ設置した。地域住民の彫刻周辺での花の植栽や継続的な除草作業などの協働環境整備が評価され、2016 年度の「広島県いきいき地域づくり賞」を受賞した。また「あさみなみ芸術化構想—安佐南区役所作品展示」事業では、毎年度末に在学生や修了生の絵画、工芸、彫刻など 6 点の

展示入れ替え事業を受託研究として企画・運営し、市民に向けた鮮度ある学生の作品展示を継続している。

1. 「あさみなみ芸術化構想 2018—安佐南区役所作品展示」企画・運営，安佐南区役所，2018 年 3 月 - 2019 年 3 月
2. 「机の上と壁の小さなアート展 パート 34」，大阪市、茶屋町画廊，2018 年 1 月
3. 「2017 HAIKU-Sculpture 彫刻の五・七・五—かたちで詠む春夏秋冬—」，女子美術大学美術館／東京都，2017 年 11 月
4. 「あさみなみ芸術化構想 2017—西風新都中央線沿道作品設置」環境整備，安佐南区／西風新都中央線沿道(大塚シンボル通り)，2017 年 4 月 - 11 月
5. 「あさみなみ芸術化構想 2017—安佐南区役所作品展示」企画・運営，安佐南区役所，2017 年 3 月 - 2018 年 3 月
6. 「机の上と壁の小さなアート展 パート 33」，大阪市、茶屋町画廊，2017 年 1 月
7. 「あさみなみ芸術化構想 2016—西風新都中央線沿道作品設置」企画・運営・環境整備，安佐南区／西風新都中央線沿道(大塚シンボル通り)，2016 年 8 月 - 2017 年 3 月



西風新都中央線(大塚シンボル通り)設置作品 ※企画、制作、及び全作品の監修		
主催:広島市立大学／大塚上町内会(大塚未来会議) 協力:大塚・伴南学区社会福祉協議会 広島市立大学「あさみなみ芸術化構想」や大塚上町内会「まちづくり推進事業」の一環として、西風新都の玄関口となる「大塚シンボル通り」に、芸術学部・芸術学研究科の学生・教員の作品を展示することや、地域住民による沿道の花の植栽などを通して、芸術のある豊かで優しいまちづくりを推進しています。大学と地域住民、広島市が協働して、地域の活性化と若い芸術家育成に努めています。		
 [2010 年度設置] 作品名:「Untitled」 H 1.7m×W 4.0m×D 2.0m 御影石 (2002 年制作) 作者: 加納 土朗 広島市立大学大学院修了 国立ローマ美術大学留学 ニュルンベルク造形芸術大学留学	 [2010 年度設置] 作品名:「穿孔」 H 1.6m×W 8.5m×D 1.3m 御影石 (2003 年制作) 作者: 前川 義春 東京芸術大学大学院修了 ミュンヘン造形芸術大学大学院修了 現在、広島市立大学教授	 [2011 年度設置] 作品名:「WORLD」 H 1.8m×W 1.8m×D 1.8m コンクリート (2002 年制作) 作者: 和田 礼治郎 広島市立大学大学院修了。 東京芸術大学博士課程修了 文化庁新進芸術家海外研修生としてベルリン派遣 現在、ベルリン在住



〔2015 年度設置〕

作品名:「10mの流動体」
H 0.75m×W 10m×D 0.75m
御影石 (1998 年制作)

作者: 前川 義春

東京芸術大学大学院修了
ミュンヘン造形芸術大学大学院修了
現在、広島市立大学教授



〔2016 年度設置〕

作品名:「雪鳥(ゆきがらす)」
H 1.5m×W 0.5m×D 1m
インド産砂岩 (2013 年制作)

作者: 川西 智尋

広島市立大学芸術学部卒業



〔2016 年度設置〕

作品名:「くもあい」
H 1.65m×W 0.75m×D 0.7m
インド産砂岩、玄武岩
(2013 年制作)

作者: 西尾 愛

広島市立大学大学院修了

【社会活動】

教育・研究担当理事・副学長として、県内の国公立大学が連携して単位互換、生涯学習、高大連携、教職員研修などを推進する教育ネットワーク中国の委員を務めている。また芸術学部教員として市内、県内外の公的機関の委員を務め、芸術振興と若手芸術家育成に関わる活動を行なっている。2016 年には公益財団法人広島市文化財団が刊行する『美術広島 2015-2016』に、ひろしま美術文化小史『広島市立大学芸術学部の 20 年』pp. 84～88 を執筆し、「東京藝術大学生・大学院生による竹原芸術イベント事業」では審査員を務めるとともに、展覧会カタログに展評『～ぶらまちアート～歴史・町・広島竹原藝術祭』に寄せて pp. 4～5 を執筆した。また広島市立大学芸術学部公開講座(彫刻コース)では、講師として彫刻を愛好する市民に首像や胸像を中心に塑造による人体表現の指導を行っている。

2017 年 9 月-2018 年 3 月	広島市教員等育成に関する懇談会構成員
2016 年 7 月-2016 年 10 月	「東京藝術大学生・大学院生による竹原芸術イベント事業」審査員
2016 年 7 月	広島市立大学・県立広島大学連携公開講座「ひろしま学を考える」講師
2016 年 4 月-	小豆島町アートフィールド検討会顧問
2015 年 8 月-	広島市立大学芸術学部公開講座(彫刻コース)講師
2015 年 7 月-2017 年 6 月	彫像・記念碑等の設置に関する懇談会委員
2015 年 7 月-	呉市立美術館運営審議委員会委員
2015 年 4 月-	広島県大学連携推進連絡会委員
2015 年 4 月-	教育ネットワーク中国大学間・高大連携委員
2015 年 4 月-	教育ネットワーク中国運営委員会委員

氏名	前田 力
職位	准教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作、古典研究、技法材料研究

日本画での絵画制作とそれらを展示・発表することを自己研究の軸とする。自身の根底にある制作のテーマを思索・考察し、それらを絵画として作りあげるまでの過程について研究していく。自身の研究から得た知識、経験を学生に伝えることで指導の幅を広げ、基礎力の底上げを行い、表現力や創造性を養い、卒業後も創作・制作活動を行える力を身に付けさせていきたい。また、広島市や地域住民の方々にも日本画の活動を広く知って頂けるように広報活動にも力を入れていく。日本画ワークショップや特研に於ける「制作の現場」を中心に、大学内の知のトライアスロン事業や芸術資料館の運営にも積極的に関わり、今後も続けていきたいと考えている。

【教育活動】

学生個々の表現力や想像力を養い、構成演習や材料実習などで具体的な技術指導を行うことで、学生の練度に応じた教育活動をして参りたいと考える。入学した学生の基本的な実技力を身に付け、独自の個性を伸ばし、主体性を持つ学生になる様に指導を行う。通年の日本画実習を通して自らの向上心と問題意識を持ち、その問題点を克服することで自己の作品に磨きをかけ、基礎力を伴った独自性のある作品が描ける学生となる様に指導して参りたい。卒業後も作家活動を行えるような力を身に付けさせ、創作研究に長年取り組んで行けるような教育を目指す。また学生には豊かな感性や表現力をいかに発揮出来る様な制作アトリエの空間作りを考慮し、刺激し合いながら切磋琢磨出来る環境作りも重要だと考える。

2016, 2017 年度	日本画研究(含古典研究)Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	創作総合研究Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	教職実践演習(中等)C
2016 年度	構成演習
2016 年度	材料実習Ⅱ
2016 年度	彫塑演習
2016 年度	日本画実習Ⅱ
2017 年度	日本画実習Ⅰ
2017 年度	材料実習Ⅰ
2017 年度	デッサン実習Ⅰ
2017 年度	構成実習Ⅰ(平面)

【研究活動】

広島県内の風景や人々の営み、歴史をテーマにして絵画表現(日本画制作)を行う。作品制作を通じて制作にかかわる主題について考察し、構成構図などの創作表現と日本画の技法を研究することで、自身の日本画作品を作り出していくことを目標とする。作品の研究発表は、公募展(日本美術院)の再興院展と春の院展を中心に行い、広島地域に限定せず、全国の自主企画、招待企画による作品発表を積極的に行う。また、広島福屋

デパートにて教員、卒業生と共に作品発表「芸美会」に出品し活動する。また隔年で行っているアートプロジェクト「Flag of the West」を通じ広島市立大学日本画専攻の活動を知って貰える様に活動する。

1. 「更生保護」表紙絵ゆかりの作家展 東京展、松山展、広島展 2018
2. 第 73 回春の院展「刻む」日本美術院春季展賞 受賞, 2018
3. Flag of the west2018 広島市立大学芸術学部日本画制作展
4. 第 72 回春の院展「空を縫う」奨励賞受賞 外務大臣賞受賞, 2017
5. 郷さくら 桜花賞 館長賞, 2017
6. 第 17 回芸美会展 福屋八丁堀店 「青い花」
7. 再興第 101 回秋の院展「憂いの街」日本美術院大観賞, 2016

【社会活動】

社会活動は広島市立大学日本画の教員と学生が、大学内では「公開講座」を通じ、学外では「日本美術院地域連携教育プログラム」・「広島市立大学社会連携プロジェクト採択事業」として日本画のワークショップを中心に活動する。大学の近隣の方々と広島市民に日本画専攻の活動内容を知って貰い、理解して貰う上で大変重要な機会である。また、日本画になじみの無い方でも、直接画材に手を触れることによって、日本画に興味を持ってもらえる貴重な体験になると考えている。過去、ワークショップの終了時にアンケート調査を行ったが、「楽しんで取り組めた」「貴重な体験が出来た」と答えた方が多数で大変好評を得た。福屋で開催している作品展覧会「芸美会」ではギャラリートークを行い、作品の鑑賞のポイントや作家の思考、技法の考察などを解りやすく解説している。広島市の文化発展と地域の活性化に繋がれば良いと考えている。

2017 年 9 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム 池坊いけばな日本画教室
2017 年 8 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム 第 2 回「日本画を描こう！」
2017 年 6 月-	広島市立大学社会連携プロジェクト採択事業
2016 年 8 月-	日本美術院 地域連携教育プログラム「日本画を描こう！」

氏名	南 昌伸
職位	教授
研究分野	金属工芸、金属造形
研究キーワード	工芸、金属工芸、金属造形、鍛金、彫金、鋳金、金属材料

2016・2017 年度は、大学運営、学部運営の業務が中心であった。全学の一環としてであった 2021(平成 33)年度からの入試改革、教育改革については、学部の高次接続改革 WG を立ち上げ検討を重ねてきた結果、2018 年の 5 月時点でほぼ方針が決定した。学部の取り組みとしては、マツダ株式会社との協働による「共創ゼミ」の開設に向けて議論を重ね 2017 年度からの開設が実現した。また、COC+事業の節目となる3年目(2017 年度)の取り組みとしては、先導的アートプロジェクトに加えて地域志向型のアートプロジェクト 10 件を芸術学部として実施した。教育研究においては、国内外の地場産業を学ぶ研修旅行として、伝統的金属工芸を産業として持つ富山県高岡市(2016)と、ジュエリー産業を打ち出している韓国の大邱広域都市(2017)の研修旅行を引率した。

【教育活動】

学部2年生の「造形実習ⅡA(前期)・ⅡB(後期)」は、金属工芸の基本的な技術を身につける演習課題が複数組まれている。自身が担当する 2 年生対象の専門基礎科目「工芸材料概説」を受講させ、事前講義として役立つように内容を構成している。3 年生、4 年生、博士前期課程の指導については、定期的に行う経過発表会で、自身の構想、経過等を言葉、視覚情報を使って伝えられるよう準備を促し、繰り返し行った。創作における自身の考えを的確に他者に伝えられるようにプレゼンテーションを重ねながら、制作の内容を高めていけるように指導している。博士後期課程については、領域横断特別研究を担当し、領域横断学生 1 名(2017)を受け入れ指導した。

2016, 2017 年度	工芸材料概説
2016, 2017 年度	造形実習ⅢA
2016, 2017 年度	造形研究(演習)
2016, 2017 年度	造形実習ⅡB
2016, 2017 年度	金属造形演習
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅰ
2016, 2017 年度	造形計画研究Ⅱ
2017 年度	領域横断特別研究

【研究活動】

2017 年度は、金属造形分野の企画による「メタルフェスタ」―広島市立大学芸術学部 金属造形分野 教員・卒業生・社会人講座修了生による作品展―を広島市内で開催した。総勢 26 名が、金属工芸、金属造形として制作した作品、約 230 点を展示した作品数と幅のある表現は見応えのある展覧会となった。金属に限った作品展示で、これだけ多くの作品が広島で一堂に紹介される展覧会は前例がなく、学生に刺激を与え、視野を広げる貴重な教育の場となると同時に、多くの市民に金属工芸の可能性と魅力に触れて頂く良い機会となった。個人の発表としては、泉美術館(広島)、はつかいち美術ギャラリー(広島)、LIXIL:GINZA(東京)の各企画展に金属造形作品を出品した。また、宮島が所蔵している

平安時代の太刀、拵えを復元するため、本学の教員と刀匠を含む研究グループが共同して厳島神社にて現物調査を行なった。

1. メタルフェスタ, 2017 年 11 月 - 2017 年 11 月
2. 創造する工芸-その多様性と可能性-, 廿日市市はつかいち美術ギャラリー, 2017 年 9 月 - 2017 年 10 月
3. 現代工芸作家展, 広島市佐伯区 泉美術館, 2017 年 6 月 - 2017 年 7 月
4. 第42回現代工芸中国会展, 広島県廿日市市はつかいち美術ギャラリー, 2017 年 5 月 - 2017 年 6 月
5. クリエイションの未来展 第 10 回 宮田亮平監修「みなの中ー東京藝術大学鍛金研究室で学ぶー」"Reunion", 東京建物京橋ビル LIXIL:GINZA 2F, 2016 年 12 月 - 2017 年 1 月

【社会活動】

中国地方の工芸作家で構成されている現代工芸中国会に所属し、常任委員として年間の事業計画、展覧会活動等に携わっている。2017 年は、廿日市市はつかいち美術ギャラリーでの展覧会を企画、実施した。また、任意団体「KAZARU 展」代表を務め、2016 年に工芸の伝統技術継承の活動として、厳島神社所蔵の平安時代の刀・拵えの調査を行なった。その他、2017 年には、広島市からの依頼を受け、第 10 回ヒロシマ賞受賞者選考審議会委員としてヒロシマ賞の受賞者選考に関わった。引き続いて 2018 年の第 11 回ヒロシマ賞受賞者選考審議会委員、第 6 回新県美展(第70回広島県美術展)審査員(工芸)に就任し審査にあたっている。

2018 年1月-2020 年 10 月	第 11 回ヒロシマ賞受賞者選考審議会委員
2016 年1月-2017 年 10 月	第 10 回ヒロシマ賞受賞者選考審議会委員

氏名	向川 貴晃
職位	助教
研究分野	芸術一般
研究キーワード	油絵、ヴィジュアル系、ゴシック

地域社会の中で芸術のあり方や、喪われつつある芸術文化を次世代へ継承することがテーマとなっています。レンブラント等の伝統的古典絵画技法の研究を基にし、日本独自の文化「ヴィジュアル系」や「ゴス」といったテーマに着目し、喪われつつある絵画芸術の価値と意味を探究的研究をしています。被爆者の肖像画を残す「光の肖像」展プロジェクトでは、風化しつつある被爆経験の継承もまた目的としています。伝統的な文化を継承しつつ、新たな価値を次世代へと繋ぐ活動を行っています。

【教育活動】

レンブラント等の古典絵画技法の研究を基に、西洋古典絵画の伝統的な油絵具の特質を活かした描法や、絵画の造形性、空間性について指導しています。基礎的な表現をしっかり踏まえた上でのポートフォリオ制作を通して、現代絵画としてどのように作品制作をして行くのかを、自身の作品と向き合っって口述するプレゼンテーションも行っています。また、学外でのワークショップやプロジェクトに学生も参加し、地域社会との交流を通して、芸術のあり方や創作活動の広がりを経験させるプログラムを実践しています。

2017 年度	油絵基礎演習
2017 年度	デッサン実習 I

【研究活動】

レンブラント等の伝統的な技法研究を行うほかに、日本独自に発展を遂げた「ヴィジュアル系」や「ゴス」といった文化に着目した制作研究をしています。油絵といった絵画ジャンルに留まらず、X JAPAN などのミュージシャンに衣装提供をしているファッションブランドの h.NAOTO とのコラボレーションも行っています。また、2005 年から広島市の被爆者と関わり肖像画を残すことで、風化しつつある被爆経験と喪われつつある絵画芸術の価値と意味を問いかける「光の肖像」展プロジェクト研究も継続しています。

1. わんぱくアート 2017「作品展」成果展, 野呂山レストハウス, 2018 年 3 月 - 2018 年 5 月
2. 「篠田教夫鉛筆画の臨界点」成果展, 東邦アート, 2018 年 1 月 - 2018 年 2 月
3. 野呂山芸術村事業「退村作家 12 人展」, 野呂山レストハウス, 2017 年 12 月 - 2018 年 3 月
4. 葵の会 2018 グループ展, スルガ台画廊, 2018 年 1 月
5. 野呂山芸術村油彩画展 2017, 野呂山レストハウス, 2017 年 10 月 - 2017 年 12 月
6. 芸術学部新任教員展 2017, 広島市立大学芸術資料館, 2017 年 10 月
7. ヴァニラ画廊企画展 GOTH〜受胎, ヴァニラ画廊, 2017 年 7 月 - 2017 年 8 月
8. 血とバラ ―女吸血鬼カーミラが誘う美しき幻影と幻想耽美―, スパンアートギャラリー, 2017 年 6 月 - 2017 年 7 月
9. 永遠の幻想・美の幻影展, 六本木ストライプスペース, 2017 年 6 月
10. 村崎百郎 UMA 未確認生物展, 横浜元町中華街・ギャラリーソコソコ, 2017 年 4 月 - 2017 年 5 月

11. h.NAOTO×向川貴晃コラボ 2017, シンクアートスタジオ, 2017 年 3 月
12. 現代の造形—Life & Art—「光—身近に潜む科学とアート—」, 東広島市立美術館, 2017 年 2 月 - 2017 年 3 月
13. 葵の会 2017, スルガ台画廊, 2017 年 1 月

他、展覧会多数

【社会活動】

広島の被爆者と関わり肖像画を残すことで、風化しつつある被爆経験と喪われつつある絵画芸術の価値と意味を問いかける「光の肖像」展プロジェクト研究を継続しています。また、広島県呉市の野呂山芸術村事業として、幼児・小学校低学年の児童を対象としたワークショップ「わんぱくアート」を開催しています。子どもたちの創造性の育成と地域社会の中での創造的な環境の向上を目指し、絵本作家や教員志望の学生たちとともに活動しています。油絵専攻公開講座・サマースクールでは、高校生や社会人、地域の方を対象に指導も行っています。

2017 年 11 月	野呂山芸術村事業実行委員会採択事業「わんぱくアート 2017」
2017 年 7 月-2017 年 8 月	広島市立大学 芸術学部油絵専攻公開講座
2005 年 8 月-2017 年 8 月	光の肖像展

氏名	森永 昌司
職位	教授
研究分野	文化財科学
研究キーワード	油彩画、油彩画材料、美術教育、図像学

東京藝術大学美術学部油画専攻を卒業後、美術教育の大学院に進学し、併せて技法材料研究室のゼミにも参加、美術教育と油画技法材料の両方を研究しました。2010 年度の文化庁新進芸術家海外派遣制度により 1 年間ロシア・サンクトペテルブルク市に滞在しました。指導領域は油彩画の基礎をなす技法材料研究を旨とした絵画技術体系全般に渡っています。

【教育活動】

特に古典技法の基礎的知識を伝える為に「油彩画材料論」（専門基礎科目）を永らく開講しています。また他学部提供している総合科目として「デッサン概論」を担当しており、毎年 100 名以上の受講者を迎え入れています。実技指導を伴った実技系科目は言うまでもなく、その他、博物館実習、油絵入門、絵画論、ひろしま論など多くの授業を分担しています。

2016, 2017 年度	デッサン概論、油彩画材料論、絵画論、デッサン実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、油絵実習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、卒業制作、油絵研究Ⅰ・Ⅱ、創作総合研究Ⅰ・Ⅱ、古美術研究演習

【研究活動】

「徹底した写実を追求する画家」としての一定の評価を受けています。八千代の丘美術館での個展形式の特別展示の他に、アートビレッジでの交流展、グループ展示、ゼミ生による企画展示などの作品発表をおこないました。

1. 八千代の丘美術館 第 16 期入館作家, 2017 年 4 月 - 2018 年 3 月
2. 野呂山芸術村交流展, 呉市 川尻町 野呂山芸術村ギャラリー, 2016 年 10 月
3. 第 31 回 桐美会展, 広島 ギャラリー・ブラック, 2016 年 8 月
4. 光の肖像展, 2016 年 8 月 - 2017 年 8 月
5. 642 Conference 展, 広島 ギャラリー・ブラック, 2017 年 4 月

【社会活動】

2004 年度の広島市の公民館の指定管理者制度への移行に伴い、財団事業として「さえきアートキャンパス」の立案・実施に携わって以来、全ての世代に対する草の根的な美術教育を実践してきました。

2016 年には母校の広島市立基町高等学校の外部評価委員に任命されるなど後継世代の育成に力を発揮しつつあります。また、第 4 回新県美展の審査員を委嘱されるなど、広島美術界の発展に貢献しております。

2016 年-2017 年	平成 28 年 8 月・平成 29 年 8 月「さえきアートキャンパス」企画・担当（佐伯区民文化センター主催 広島市未来都市創造財団事業）

2016 年-2017 年	広島市立基町高等学校 外部評価委員
2016 年-2017 年	広島市立大学「公開講座・サマースクール」講師（広島市立大学芸術学部 主催）
2016 年 8 月	広島市立大学「高大連携講座」講師（広島市教育委員会）
2016 年 6 月	第 4 回新県美展 審査員（広島県文化課）

氏名	吉田 幸弘
職位	教授
研究分野	プロダクトデザイン
研究キーワード	プロダクトデザイン、景観シミュレーション、創造的まちづくり、復元

アートやデザインの視点で研究や教育を行い、また大学運営においては広報担当副理事として芸術学部のある大学としての特色ある広報活動を展開している。

【教育活動】

プロダクトデザインを中心に全学年に対し立体造形力を高める教育を行っている。2016、2017 年度は学科長として全体を通じカリキュラムや課題を統括している。

2016, 2017 年度	コンピューターアート
2016, 2017 年度	総合表現研究
2016, 2017 年度	基礎演習
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	形体演習Ⅱ
2016, 2017 年度	立体造形演習
2016, 2017 年度	都市論
2016, 2017 年度	創作総合表現Ⅰ
2016, 2017 年度	創作総合研究Ⅱ

【研究活動】

広島市における歴史文化遺産の復元や、創造的まちづくりの視点からデザインやアートを切り口に市の行政課題解決に向けた活動を続ける。

1. 2017 年 4 月 さわるひろしま 産業奨励館、原爆ドーム 1/100 触察模型製作(広島平和資料館東館)
2. 2016 年 3 月 猿猴橋復元(広島市東区)

【社会活動】

広島市の文化芸術振興のため施策の策定における各種委員会の委員や講演会を多数行っている。

2017 年 4 月－	広島市障害者施策推進協議会 委員
2017 年 4 月－	広島市景観審議会 委員
2017 年 4 月－	広島市特産品等ブランド化推進審議会 委員
2017 年 4 月－	広島市眺望景観検討部会 部会長職務代理者
2017 年 4 月-2018 年 3 月	第 15 回ひろしまグッドデザイン賞選定委員会 審査委員長
2017 年 4 月-2018 年 3 月	広島県「障害者文化芸術活動支援事業」アートセンターひゆるる協力委員会 委員長
2017 年 3 月	広島県高等学校 ID コンペ 2017 審査委員
2016 年 9 月	広島市南区「地域再発見講座」講演会 講師
2016 年 7 月	広島市オープンカフェ出店者選定委員会 委員長

2016 年 6 月 -	広島市水辺のライトアップ検討会 委員
2016 年 4 月 -	「ひろしまドリミネーション 2016」企画検討会議 委員

氏名	藁谷 実
職位	教授
研究分野	芸術一般
研究キーワード	日本画制作、古典研究、技法材料研究

日本画家として創作研究活動の実践から身につけた事柄を、高度な芸術教育に生かし、作家及び社会で活躍できる創造的でユニークな人材を育成。作家の育成には、長い時間が必要なため、地元企業と連携し、卒業生のための展覧会を運営するなど、市民への芸術鑑賞の機会創出と同時に創作研究を続ける卒業生を支援。

大学運営では、芸術資料館長を 3 年間務め、展覧会開催を中心とした芸術資料館の運営及び、中期計画に基づくデジタルアーカイブの準備や収蔵品の活用、展示施設の充実に努める。学部では、美術学科長、日本画専攻長を務め、教育と運営に取り組む。

【教育活動】

学部では、4 年生を担当。自画像、自由制作、卒業制作などを通して取材、テーマ、表現様式を学生一人一人と対話を重ね、独自性を導き、実技指導を行う。その他、伝統的な日本画材料の解説、また、美術史の授業でも触れることのない近代以降の日本画の流れを解説。

他の学年に対しても、写生旅行や古美術研究旅行の引率時にコミュニケーションを図り、学年ごとの実技進捗状況を把握するため適宜指導をおこなう。

大学院博士前期課程では、古典研究を重視、より高度な模写を指導。創作では独自性を求める。博士後期課程では実技と論文をあわせて指導。その他、全学共通科目を担当。

2016, 2017 年度	創作と人間
2016, 2017 年度	絵画論演習
2016, 2017 年度	日本画入門
2016, 2017 年度	技法演習(裏打ち技法)
2016, 2017 年度	日本画実習Ⅳ
2016, 2017 年度	卒業制作
2016, 2017 年度	日本画研究(含古典研究)Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	創作総合研究Ⅰ・Ⅱ
2016, 2017 年度	日本画材料技法演習

【研究活動】

日本画作品の創作と研究を行う。研究テーマは、自然と人間の関わりから生まれる普遍的な情趣を日本画の技法により表現するもので、作品制作を通じて創作に関わる主題、表現、技法の研究を行う。日本美術院を主な研究発表の場として日本画の伝統を継承し、新たな独自性のある表現を追求。同人として研究会を行い、後人を育成。その他、招待企画による作品発表を行う。

先端学術研究では、直感や思考という目に見えない創作へのアプローチをエスキースや言葉などから浮き上がらせる試み「日本画制作の現場」を継続して行い、学生達の創作意欲を刺激し、ヴィジョン形成の手がかりとする。

1. 「ラ・ロック・シェル・セーズ」「イランの硝子」「結晶」・Flag of the West 2018 広島市立大学芸術学部日本画制作展,かわべ美術/「クラブハウス」ナカジマアート・東京都, 2018 年 3 月 - 2018 年 4 月
2. 「夕靄の音色」・第 73 回春の院展, 日本橋三越本店・東京都 他 16 カ所, 2018 年 3 月 - 2018 年 4 月 / 「日と影」・第 71 回春の院展, 2016 年 3 月 - 2017 年 2 月
3. 「月日の景色」・東広島市美術展, 東広島市美術館・東広島市, 2017 年 11 月 - 2017 年 11 月
4. 「ふるさとの山白く」「春を待つ」ほか 7 点・藁谷実・剛巳 2 人展, ギャラリーマスガ・福島県須賀川市, 2017 年 11 月 - 2017 年 11 月
5. 「一隅」・芸美会展, 福屋八丁堀本店・広島市, 2017 年 10 月 - 2017 年 10 月 / 「溪声」・第 16 回芸美会展 2016 年 10 月 - 2016 年 10 月
6. 「時の眺め」・第 102 回院展, 東京都美術館ほか全国 12 会場, 2017 年 9 月 - 2018 年 6 月 / 「廻廊」・再興第 101 回院展, 2016 年 9 月 - 2016 年 9 月
7. 「日時計のある家」・第 72 回春の院展, 日本橋三越本店・東京 他、巡回展 17 会場, 2017 年 3 月 - 2017 年 4 月

【社会活動】

春と秋に公募される院展の審査委員をはじめ、東広島市美術展などの審査委員を務める。院展広島展の際、日本美術院の企画として一般の美術愛好家が制作した持参作品の講評会を行った。

作品の発表時にはギャラリートークを行い、鑑賞者に対し、創作の意図などを説明し、より作品に親しめるよう交流を図る。

日本美術院の地域連携プログラムを積極的に行い、地元企業(福屋、SOGO、中国新聞社)と連携して若年層向けの日本画ワークショップを展開。また、NHK 文化センターとも連携し、市民向けの日本画講座を卒業生のキャリア形成の一助となるよう 3 クラスを監修。

広島経済同友会幹事会卓話の依頼を受け、創作についての講演会を実施。

2017 年 10 月	東広島市美術展審査及び講評執筆
2017 年 9 月	日本美術院地域連携プロジェクト「日本美術院&池坊 子供日本画教室と生け花教室」
2017 年 8 月	再興第 102 回院展審査
2017 年 5 月	「有芽の会」審査
2017 年 4 月	広島経済同友会幹事会卓話
2017 年 3 月	第 72 回春の院展審査
2016 年 8 月・2017 年 8 月	日本美術院地域連携プログラム「日本画を描こう」

広島平和研究所

氏名	ガネサン, ナラヤナン
職位	教授
研究分野	東南アジア政治・国際関係
研究キーワード	Southeast Asia Comparative politics, International relations, Foreign policy, Regionalism

In the last two years much of my efforts have been focused on research and publications especially on the ethnic peace process that began with the elected government in 2015 in Myanmar. I have undertaken field research, conducted elite interviews and published quite extensively on the ongoing process and the growing role of China in the process as well. Additionally I have travelled to Europe and given public lectures to disseminate the research findings to a broader academic audience.

【教育活動】

The focus of my recent teaching activities has been primarily related to the graduate class in Development Issues in Southeast Asia. For undergraduate teaching the focus of the Peace Studies lectures are on Japan-ASEAN relations and conflict and cooperation in Southeast Asia. I have kept abreast of ongoing developments in the region and worked them into the lectures for the students.

2016, 2017 年度	Peace Studies I, II
2016 年度	Development Issues in Southeast Asia I, II
2016 年度	Hiroshima and the World
2016 年度	Development Issues in Southeast Asia

【研究活動】

Research activities have been very rewarding in that I have successfully placed many research articles and papers in peer reviewed journals in Asia, Europe and the United States. Many of them deal with issues of peace and democratization and the ongoing ethnic peace process in Myanmar. Additionally I have also written on important developments in Singapore and am working on more articles examining regional relations, especially those with China. Another area of interest recently is Sino-Japanese political and economic rivalry in Southeast Asia.

1. Bilateral Issues in Myanmar's Foreign Policy Towards China, Centre for Southeast Asian Studies, University of Freiburg, 2018
2. "Democratization and Its Implications for the Resolution of Ethnic Conflict in Myanmar", Asian Journal of Peacebuilding, Vol. 5, No. 1, pp. 111-129, 2017
3. "Assessing civil conflicts in Southeast Asia", Hiroshima Peace Research Journal, Vol. 4, pp. 57-77, 2017
4. "Appraising Myanmar's Democratic Transition and Evolving Challenges", Japanese Journal of Political Science (Cambridge, U.K.), Vol. 18, No. 1, pp. 196-215, 2017
5. "Changing Dynamics in Myanmar's Peace Process and the Growing Role of China", Asian Journal of Peacebuilding (Seoul National University), Vol. 5, No. 2, 2017

6. “Singapore in 2017: Structural Changes and Political Challenges”, Asian Survey (University of California, Berkeley), 2018
7. (特別・招待講演) The Myanmar Ethnic Peace Process, 2017
8. (特別・招待講演) History, Politics and the Peace Process in Myanmar, 2017
9. (特別・招待講演) Democratization and its Impact on Ethnic insurgency in Myanmar, 2016

他 3 件

【社会活動】

In terms of social contributions I have continued assisting the German government in coordinating the training of the Myanmar civil service, especially in the areas of public administration and public policy formulation since 2013. The Social Science Summer School at Yangon and Mandalay Universities have also been very rewarding in focused training of academics at the leading Universities in the country. Similarly the public lectures delivered there have also been rather well received. The German government has acknowledged the utility of both programmes and pledged medium term funding for both projects until 2021. Apart from these activities I regularly volunteer as peer reviewer for academic journals on articles on Southeast Asian politics and foreign policy.

2018 年 2 月	英語による市民講座, 広島平和研究所
2017 年 2 月	英語による市民講座, 広島平和研究所
2016 年-	Academic advisor, Panna Institute, Yangon, Myanmar
2016 年-	Reviewer, Heidelberg Conflict Transformation Index (Heidelberg University)
2015 年-	Coordinator and Trainer, Social Science Summer School, Yangon and Mandalay Universities
2015 年-	Myanmar Expert and Coder, Varieties of Democracy Project (Gothenburg University, Sweden)
2015 年-	Member, Editorial Committee, Asian Journal of Comparative Politics (London)
2013 年-	Member, Editorial Committee, Asian Journal of Peacebuilding (Seoul National University)
2010 年-	International Studies Review (Ewha Woman's University, Seoul)
2010 年-	Manuscript Reviewer, International Relations of the Asia Pacific (Oxford University Press)
2010 年-	Member, Editorial Committee, Asia-Pacific Social Science Review (De la Salle University, Manila, the Philippines)
2008 年-	Manuscript Reviewer, Asian Survey (University of California, Berkeley)
2008 年-	Manuscript Reviewer, Institute of Southeast Asian Studies (Singapore)
2008 年-	Manuscript Reviewer, Japanese Journal of Political Science (Cambridge University Press)

氏名	河上 暁弘
職位	准教授
研究分野	公法学、政治学
研究キーワード	憲法学、法学、政治学、行政学、地方自治論、人権論

私の研究テーマは、長期的には、「いかにしたらこの世から戦争をなくすことができるか」という理論モデルを提示することだが、当面の研究の視座は、憲法学の視点から、国家権力の立憲主義的統制、民主化、分権化、そして人権保障の視点から平和創造のあり方を考えることである。これまで、戦争違法化の理論と歴史、日本国憲法制定過程と戦後日本憲法史、市民・地方自治体による平和保障の理論、戦後日本の人権・平和問題と憲法訴訟等に関する研究を行ってきた。こうした研究成果を大学での講義等の教育活動や社会活動においても十分に還元できるように全力を尽くしたい。

【教育活動】

大学では、全学共通科目として、「法学(日本国憲法)」を担当し、憲法の基礎理論を講義している。これは教職科目ということもあり、学部の違いを超えて多くの学生が受講する科目である。法学・憲法学の学習で求められるのは、条文を丸暗記したり、重要単語を覚えたりすることではない。しかし、この点の誤解が多く、食わず嫌いの学生を全国的に生み出しているように思われる。まずはこの誤解を解き、具体的な論点を取り上げ、関心を深める努力を続けたい。その他の科目は学部科目も大学院科目も、いわば応用科目であるが、毎年、最新の論点や学説を紹介できるようにしたいと考え、工夫をしているところである。

2016, 2017 年度	法学(日本国憲法)
2016, 2017 年度	現代社会と法Ⅰ
2016, 2017 年度	現代社会と法Ⅱ
2016, 2017 年度	日本国憲法論Ⅰ
2016, 2017 年度	日本国憲法論Ⅱ
2016, 2017 年度	平和研究Ⅰ
2016, 2017 年度	平和研究Ⅱ

【研究活動】

近年の自身の研究活動を振り返ると、戦後 70 年・憲法制定 70 年を迎えたこともあり、あらためてその原点となった日本国憲法・地方自治法等に関する歴史的・原理的な考察を行ってきた。また、他方で、近年は、戦後改革・戦後民主主義・戦後「平和」国家のあり方を問い直すような政治状況変化も見られる。あらためて、そうした「構造」変化がいかなる要因によって起きている(起ころうとしている)のか、それにいかなる論点が含まれているのかなどの問題について、歴史的・構造的な分析を試みたいと考えている。

1. 河上暁弘「高柳賢三・マッカーサー往復書簡と憲法 9 条制定過程」阪口正二郎 江島晶子 只野雅人 今野健一 (編集代表), 憲法の思想と発展(浦田一郎先生古稀記念), 信山社, 2017, pp.51-71

2. 河上暁弘, 憲法9条の成立 I-IV, 自治総研, Vol. 43, No. 2-5, pp. 1-28, pp. 18-44, pp. 98-123, pp.31-65, 2017
3. 河上暁弘, 憲法と地方自治 ―これまでとこれから, 北海道自治研究, No. 576, pp. 2-13, 2017
4. 河上暁弘, 地方自治から考える日本国憲法, 月刊自治研, Vol. 58, No. 687, pp. 16-23, 2016
5. 河上暁弘, 憲法成立の原点と安保法制「成立」という現点から考える平和, 総合人間学, No. 10, pp. 102-124, 2016
6. 河上暁弘, 憲法と核・原子力, 日本平和学会 2017 年度秋季研究集会 分科会(「グローバル・ヒバクシャ」), 2017

【社会活動】

前述の教育・研究活動のほか、市民等の求めに応じて、学術研究の成果を還元し、研究者としての社会的責任を果たすため、講演や取材等には積極的に応じている。近年は、広島を中心とした中国地方や本学赴任まで在住していた東京圏に加えて、東海、近畿地方（大阪、兵庫）などで、講演等を行っている。近年は憲法問題等への関心の高まりがみられるように思われるが、今後とも積極的な社会貢献活動を行いたいと思う。

2016 年 9 月 4 日	広島県青年女性平和友好祭実行委員会主催の講演会で「いま憲法と平和を考える」と題して講演(於:広島県廿日市市)など

氏名	吉川 元
職位	特任教授
研究分野	国際関係論、平和研究、国際安全保障論
研究キーワード	平和、国際安全保障

過去 2 年間は、大学院平和学研究科の設置に向けて微力ながら尽力した。2019 年 4 月の開設の運びに至ったことは感無量である。教育活動に関しては、学内では全研究科共通科目の 1 科目の担当であるが、大学院共通科目としてふさわしい講義をどのようにすればよいかについて、迷いもあり、院生の期待に応えるほどの十分な教育活動はできなかったと思う。同時に、担当する科目及びそのテーマにしっかりとした動機と研究関心を有する学生が年々減少する傾向にあり、私の教育活動に院生の研究をひきつけるほどの魅力がないのではと、自身の限界を感じたこともあった。

【教育活動】

学内の教育活動として、広島市立大学全研究科共通科目（博士前期課程対象）「国際関係と平和」を担当した。過去 2 年の間に、履修生の数は減少し、かつ日本語が十分でない留学生が増えたために、易しい日本語による講義を心がけつつ、テーマに関しても入門科目的な、科目の位置づけを強いられ、いささか苦慮した。学外教育活動として、東京大学大学院総合文化研究科客員教授（平成 29 年 10 月 1 日～平成 30 年 3 月 31 日）を務めた。

2016, 2017 年度	全研究科共通科目 国際関係と平和

【研究活動】

過去 2 年にわたって、大まかに二つのテーマの研究に取り組んだ。第一は、国際平和秩序と民族問題の関係性について研究である。国際政治史上、3 度にわたる国際秩序の大変動期（第一次世界大戦後、第二次世界大戦後、冷戦終結時）において国際平和秩序との関連で、様々な視点から少数民族の扱いについて論じられてきた。第一次世界大戦後の住民交換、民族浄化の施策、第二次世界大戦後の民族浄化と民族大移動、同化政策の暗黙の了解、そして冷戦終結後の自主的な民族移動が、国際平和の秩序形成の視点から実施されたことを明らかにした。同時に、国際秩序の編成期において、民族浄化や住民交換が国民国家、民族国家の形成目的で実施されたことを明らかにした。本研究は、来年度、共編著として出版される予定である。

第二は、東アジア共同体の構築に関する研究である。本研究テーマは、特定研究費の研究テーマであるが、本研究は道半ばで、今後、数年を目途に研究を続け、その成果を刊行する予定である。

過去 2 年の研究成果は、以下の通りである。

1. 広島市立大学広島平和研究所監修、吉川元・水本和実編、『なぜ核はなくならないのかⅡ』法律文化社、2016、230 頁。同書の第 1 章「武器の進化と国際平和」（15-31 頁）を執筆。
2. 国際法学会 2016 年度研究大会(2016 年 9 月 10 日)において、「国際平和秩序の変動要因としての民族問題」について発表。
3. 日本国際政治学会 2017 年度研究大会(2017 年 10 月 28 日)において、共通論題「デモクラシーと国際秩序」について発表。

4. (特別・招待講演) 吉川 元「ヒロシマから考える中東と私たちの平和」日本中東学会第23回公開講演会、2017年9月30日。
5. (特別・招待講演) “International Protection of National Minorities: The Road to National Self-determination, International Symposium: Self-determination Process in Europe—The Catalan Case—,” 2017年7月19日、於、神戸大学。

【社会活動】

広島地元連絡協議会(放射線影響研究所)(2013年5月1日～現在に至る)、及び広島平和文化センター理事(2013年～現在に至る)を務める。

広島平和文化センターの活動と広島平和研究所の活動は、相互に協力しあう領域があるために、今後、更なる協力体制を構築できるよう、尽力したい。

学会活動として、①日本国際政治学会会員(評議員 2016年6月～現在に至る)、②国際法学会会員(評議員 2016年6月～現在に至る)、③日本平和学会会員。近年は、日本国際政治学会及び国際法学会の会員の高齢化が進んでいることから、若手の会員の募集に力を入れている。また本学には国際政治学会会員は多数いることから、会員の学会活動の活性化にも尽力したい。

2016年6月～	日本国際政治学会評議員
2016年6月～	国際法学会評議員
2013年5月～	広島地元連絡協議会(放射線影響研究所)理事
2013年～	広島平和文化センター理事

氏名	ジェイコブズ, ロバート
職位	教授
研究分野	歴史学(核兵器の文化と戦争史、米国の冷戦史と文化、科学技術の文化史)
研究キーワード	Nuclear weapons, American history and culture, hibakusha studies, nuclear testing, war and peace studies, popular culture studies

During FY2016 and FY2017 I supervised two doctoral students, one of whom completed her PhD work and was awarded her degree. I taught American Cultural History classes during three of the four semesters. I also published a co-edited book with Routledge, published two peer-reviewed journal articles and two peer-reviewed book chapters. I presented two peer-reviewed conference papers and was an invited speaker at seven conferences or seminars. I also offered two lectures in Hiroshima & Peace each year.

【教育活動】

During FY2016 and FY2017 I supervised two doctoral candidates one of whom was awarded her PhD during FY2017. I also taught American Cultural History 1 & 2 to HCU master's degree students. I taught two lectures in Hiroshima & Peace and offered lectures in three omnibus classes. I also organized the Hiroshima Peace Institute (HPI) English Language Lecture series and offered one lecture during each series.

2016, 2017 年度	Doctoral Seminar
2016, 2017 年度	Peace Studies I
2016, 2017 年度	Peace and Human Rights
2016, 2017 年度	American cultural history
2016, 2017 年度	Peace Studies II
2016, 2017 年度	Summer Intensive Hiroshima & Peace

【研究活動】

During FY2016 and FY2017 I conducted field research gathering oral history testimony of hibakusha from French nuclear testing in French Polynesia and US and UK nuclear testing in Kiribati, and at Hanford, Washington. I also conducted field work meeting with scholars and touring deep underground spent nuclear fuel storage facilities under construction in both Sweden and Finland. I published two co-edited books, *Images of rupture in civilization between East and West: The iconography of Auschwitz and Hiroshima in Eastern European arts and media* in 2017 and, *Reimagining Hiroshima and Nagasaki: Nuclear humanities in the post-Cold War*. I also published two peer-reviewed papers in journals and two peer-reviewed book chapters.

1. Jacobs, Robert and N.A.J. Taylor, eds., *Reimagining Hiroshima and Nagasaki: Nuclear humanities in the Post-Cold War*, Routledge Press, 2018
2. David Lowe, Cassandra Atherton, and Alyson Miller, eds., *The unfinished bomb: Shadows and reflections*, Lexington Books, 2017

3. Jacobs, Robert and Urs Heftrich, Bettina Kaibach and Karoline Thaidigsmann, eds., Images of rupture in civilization between East and West: The iconography of Auschwitz and Hiroshima in Eastern European arts and media, Universitätsverlag Winter, 2016
4. Kazumi Mizumoto and Gen Kikkawa, eds., なぜ核はなくなるのか II, Horitsu Bunka Sha, 2016
5. Jeff Kingston, ed., Asian nationalisms, Routledge Press, 2016
6. Robert and N.A.J. Taylor, eds., Reimagining Hiroshima and Nagasaki: Nuclear humanities in the post-Cold Wa, Routledge Press, 2017
7. Robert Jacobs, “Imagining a nuclear World War Two in Europe: Preparing U.S. troops for the battlefield use of nuclear weapons”, Estonian Yearbook of Military History, Vol. 7, No. 13, pp. 166-186, 2018
8. Robert Jacobs, “The visible and the invisible when considering Northern European spent permanent spent nuclear fuel storage”, Hiroshima Peace Research Journal, Vol. 5, pp. 13-33, 2018
9. (特別・招待講演) Robert Jacobs, “The invisible nuclear war hidden inside of the Cold War”, Peace Studies Workshop at the University of Bradford, 2018
10. (特別・招待講演) Robert Jacobs, “Hiroshima in America, America in Hiroshima”, Chugoku Association of Elementary School Principals, 2017
11. (特別・招待講演) Robert Jacobs, “The fallout of Chicago Pile-1”, Physics Colloquia commemorating the 75th anniversary of CP-1 experiment, 2017
12. (特別・招待講演) Robert Jacobs, “Hanford reaching”, Columbia River Forum, 2017
13. Robert Jacobs, “Nuclear technologies and the discourse of disaster”, Legacies of the Manhattan Project conference, 2017

他 6 件

【社会活動】

During both FY2016 and FY2017 I taught two classes on Nuclear Issues in the Global Studies module of Jogakuin High School. I presented thirteen lectures to various groups visiting to Hiroshima, and another ten lectures to visiting student groups from both Japanese and international universities. I was a member of the Writing Committee of the Hiroshima Memorial Peace Museum and a board member of the Consequences of Radiation Exposures organization. I worked as an Executive Editor of the *Asian Journal of Peacebuilding* and as an Associate of the *Asia-Pacific Journal*.

2018 年 2 月	The Second HPI Public Lecture Series in English
2018 年 2 月	Presentation to students from Waseda University
2018 年 1 月	英語で伝えようヒロシマセミナー, 広島平和記念資料館
2017 年 12 月	Presentation to a delegation of senior UN tour guides
2017 年 5 月	Presentation to graduate students from Georgetown University of Qatar
2017 年 5 月	Presentation to members of the Royal College of Defense Studies (UK)
2016 年 8 月	GSAPS program of Waseda University
2016 年 7 月	Hiroshima Peace Forum of the Mayors for Peace

他 5 件

氏名	徐 顕芬
職位	准教授
研究分野	地域研究、国際関係論
研究キーワード	日中関係史、日中両国の対外援助

私の研究領域は東アジア国際関係史、国際協力論、中国政治外交論である。教育活動、研究活動及び社会活動は、基本的にこれらの領域の問題をめぐって展開している。大学の運営に関わることについては、図書館運営委員会委員および「いちだい知のトライアスロン」実施委員会委員として、平和研究所と図書館との連携、平和研究所の図書資料の購入などに携わっている。

【教育活動】

2017 年 4 月に広島市立大学広島平和研究所に着任した。2017 年度には授業がなかった。

【研究活動】

研究活動の成果は、大きく三つに分かれる。一、研究論文の執筆である。科研費研究会の成果として共著が出版され、分担執筆を行った。また中国語での論文を中国の学術雑誌に投稿した。二、外交文書を編集翻訳して、解説付きで中国の学術雑誌に投稿した。三、論文の翻訳である。

1. 徐顕芬「一九七〇年代の対ベトナム援助をめぐる日米中の対応」菅英輝編著『冷戦変容と歴史認識』晃洋書房、2017 年、111-138 頁。
2. 徐顕芬「日中両国の対外援助規範の比較」俞敏浩・今野茂充編著『東アジアのなかの日本と中国：規範・外交・地域秩序』晃洋書房、2016 年、97-121 頁。
3. 徐顕芬「日中和平友好条约谈判日本档案（下）—园田直日本外务大臣访华相关会谈记录」（中国語）《历史教学问题》2017 年第 2 期、129-136 頁。
4. 徐顕芬「日中和平友好条约谈判日本档案（上）—园田直日本外务大臣访华相关会谈记录」（中国語）《历史教学问题》2017 年第 1 期、130-136 頁。
5. 徐顕芬「“援助”与“历史”的感情纠葛—中日关系的恩怨」（中国語）《边疆与周边问题研究》2016 年第 2 期、2016 年 6 月。
6. 徐顕芬（中国語訳）「日中和平友好条约与福田外交」（原著者：井上正也）、公益財団法人东洋文库超越亚洲研究部门现代中国研究班主编『展望当代中国研究：档案资料的内与外』东洋文库、2018 年 3 月、47-71 頁。
7. 徐顕芬（和訳）「中国の核兵器開発の道程と日米の反応 1954-1969 年」（原著者：崔丕）、菅英輝、初瀬龍平編著『アメリカの核ガバナンス』、晃洋書房、2017 年 11 月、140-163 頁。
8. 徐顕芬（和訳）「中印国境問題をめぐる中国の戦略的選択とその影響 1950-1962 年」（原著者：戴超武）、菅英輝編著『冷戦変容と歴史認識』、晃洋書房、2017 年 2 月、91-110 頁。

【社会活動】

社会活動としては、現代中国研究に関わる講習会の講師として講義を行った。また、大学生を対象とした、将来の外交官を養成する講座シリーズの一つとして、講座を行った。

2017 年 7 月 13-14 日	中国広東省東方歴史研究基金会主催の第 3 回「当代史：文献と方法」講習会の講師として「日本の外交文書と日中関係の解説」と題して講義（於：中国遼寧省）
2016 年 10 月 20 日	上海外国語大学の「上研職団外交英才クラブ 外交育苗行程講座シリーズ」で「1970 年代後半から 1980 年代前半にかけての日中首脳会談」と題して講義（於：中国上海）

氏名	孫 賢鎮
職位	准教授
研究分野	地域研究、国際法学
研究キーワード	国際法、朝鮮半島の国際関係、北東アジア安全保障、北朝鮮の諸問題

広島平和研究所に着任してから、朝鮮半島の国際関係や北朝鮮の核問題などをテーマとして大学院授業、市民講座などを行った。この 2 年間に北東アジア国際関係論の授業を通じて学生に北朝鮮や朝鮮半島問題に興味を待たせることができたと思う。そして、広島平和研究所と韓国の世宗研究所や国立慶北大学との研究提携締結にかかわり、韓国との研究交流だけではなく、学生交流の構築にも貢献できた。韓国との交流が活発化し、今後、学生、一般市民を対象にした教育・研究活動に力を入れたい。

【教育活動】

教育活動として、2016 年度オムニバス形式の国際学部専門科目「平和研究Ⅰ」、「平和研究Ⅱ」を 2 回ずつ担当した。また、国際学研究科の授業として「北東アジア国際関係論」を単独で行い、日本人、中国人の留学生を対象に北朝鮮問題や北東アジア国際関係における日本の立場などについて講義を行った。

2016 年度	平和研究Ⅱ
2017 年度	Northeast Asia International Relation
2017 年度	Northeast Asia International Relation
2017 年度	平和研究Ⅰ

【研究活動】

研究テーマとして、北朝鮮の核問題、朝鮮半島の非核化、北朝鮮の人権問題（難民・脱北者の難民認定問題）、拉致問題を中心に研究を行った。また、日本の災害対策問題の法的構造や日本の水産用医薬品の使用に関する法的問題を韓国の研究機関に紹介した。研究論文の発表の場としては、広島平和研究所紀要、韓国の法制研究院、長崎大学核兵器廃絶研究センターなどを中心に発表した。

1. 鈴木達次郎、広瀬訓、藤原帰一，核の脅威にどう対処すべきか―北東アジアの非核化と安全保障，法律文化社，2018
2. Japan Disaster and Safety management related laws main contents, Korea Legislation Research Institute, 2017
3. Draft of human rights legislation in North Korea, Korea Legislation Research Institute, 2017
4. 孫賢鎮，朝鮮半島情勢―北朝鮮のミサイル開発―，広島市立大学 広島平和研究所，2017
5. 吉川元、水本和実編，なぜ核はなくならないのかⅡ，法律文化社，2016
6. Son Hyun Jin, A Study on the Legal Status of North Korean Defectors, Journal of Legislation Research, Vol. 53, pp. 109-147, 2017
7. Establishment of a Legal system for dealing with North Korea Political Prison Camp after Unification, 法研, Vol. 2, pp. 16-19, 2017

8. 北朝鮮の脱北者の法的地位:国際法の観点から, 広島平和研究, Vol. 4, pp. 35-56, 2017
9. Laws and Administration on use of Aquatic Medicine in Japan, Science, Technology and Law, Vol. 7, No. 2, pp. 23-43, 2016
10. Legal Status of North Korean Defectors-Refugee recognition and Protection, 2018
11. Son Hyun Jin, A Study on Japan's Security-related Legislation, The Korean Society of International Law, 2016

【社会活動】

社会活動としては、広島平和研究所の市民講座を始め、長崎大学核兵器廃絶研究センターの市民講座などで朝鮮半島問題について講義を行った。また、韓国大統領直属民主平和統一委員会諮問委員(2014 年～現在)を務める。学会活動として、韓国国際法学会理事(2012 年～現在)、日本国際法学会会員、日本国際政治学会会員、日本平和学会会員などがある。

2017 年 11 月	朝鮮半島の非核化:その現状と展望
2014 年 4 月-	日本国際政治学会
2014 年 4 月-	日本平和学会
2014 年 3 月-	民主平和統一委員会諮問委員
2012 年 3 月-	大韓国際法学会理事
2006 年 4 月-	日本国際法学会

氏名	竹本 真希子
職位	准教授
研究分野	ドイツ近現代史、平和思想・平和運動史
研究キーワード	ドイツ、平和運動、平和主義

2016 年および 2017 年は、とくに研究活動の分野で大きな成果の得られた年であった。これまでの研究の集大成として単著を出版したほか、科研費による研究プロジェクトのテーマである原子力受容史についても論文を執筆し、講演を行うなどした。また、2017 年度後半は、2011 年より関わってきた戦後広島とヨーロッパに関する資料の翻訳と出版の準備に多くの時間を割いた。この成果は、2018 年前期に出版される予定である。教育活動と社会活動についても、とくに 2017 年は新しい科目の開設やドイツでの公開講座でのドイツ語による講演など、充実したものであった。

【教育活動】

2017 年度からは新たに開設された「国際化時代の平和」のコーディネーターを務めることとなった。本科目は「平和研究 I・II」と同様、広島平和研究所研究員の最先端の研究成果を教育に生かそうというものであるが、その中でもとくに平和をめぐるグローバルかつ今日的な課題を扱うものである。受講生も多く、現代的なテーマについて反響もあり、好評であったと言ってよいであろう。一方、歴史学については、年々履修者数が減少している傾向にあることを認識している。古代からのヨーロッパの歴史認識や歴史理論を扱っているが、歴史学と歴史認識の重要性と現代的な意義を伝えるために、より幅広くかつ新しい視点を取り込みつつ、講義内容を更新していきたいと考えている。

2016, 2017 年度	平和研究 I(コーディネーター、分担)
2016, 2017 年度	平和研究 II(分担)
2016, 2017 年度	歴史学
2017 年度	国際化時代の平和(コーディネーター、分担)

【研究活動】

2016 年および 2017 年は、これまで行ってきた研究成果を広く世に問うことができた。単著『ドイツの平和主義と平和運動』では、19 世紀末から 1980 年代までのドイツの歴史を振り返りつつ、とくにヴァイマル共和国期の左派の知識人の議論を中心にドイツの平和主義の特徴を追った。さらに第二次世界大戦後の西ドイツの反核平和運動および反原子力運動にも触れ、平和運動の歴史的変化について明らかにした。本書については、ドイツ史研究者による書評会や研究会などの場でたくさんの意見や批判を得たため、今後はこれを生かしていきたい。

1. 単著『ドイツの平和主義と平和運動 ヴァイマル共和国期から 1980 年代まで』法律文化社, 2017 年
2. 書籍の章「補論 国際原子力機関(IAEA)」若尾祐司・木戸衛一(編)『核開発時代の遺産 未来責任を問う』昭和堂, 2017 年, 51-63 頁
3. 書籍の章“Hiroshima and Auschwitz: Analyzing from the Perspective of Peace Movements and Pacifism”, in: Urs Heftlich, Robert Jacobs, Bettina Kaibach and

Karoline Thaidigsmann (eds.), Images of Rupture between East and West, Universitätsverlag Winter, 2016, pp. 65-81

4. 書籍の章「平和運動—東西対立を越えて」石田勇治・福永美和子(編)『想起の文化とグローバル市民社会』(現代ドイツへの視座—歴史学的アプローチ第 1 巻), 勉誠出版, 2016 年, 337-356 頁
5. 論文「日本におけるロベルト・ユンクの言論活動とその受容」『専修史学』No. 64, 30-52 頁, 2018 年
6. 研究報告「ドイツにおける反核と反原発の結びつき」日本平和学会秋季研究集会自由論題部会, 2017 年
7. 研究報告「西ドイツにおける反核運動と核意識」世界政治研究会, 2017 年
8. 研究報告「20 世紀の平和運動—ドイツを中心に」専修大学歴史学会大会, 2017 年

【社会活動】

社会活動の中心はこれまでと同様、広島平和研究所の連続市民講座である。「ニュルンベルク裁判と戦後ドイツ」についての講演をもとに執筆した原稿は、2018 年 3 月、広島平和研究所編のブックレット『戦争の非人道性 その裁きと戦後処理の諸問題』に掲載され、これにより市民講座に参加していない人々にも社会活動の成果を周知することができるようになった。このほかに 2016 年には、静岡平和資料センターと協力し、ギャラリー・トークを行った。これは、2011 年度から 2013 年度にかけておこなった科研費での研究プロジェクトによるロベルト・ユンクについての資料展示に関するものである。ユンク展示については、静岡だけでなく、これまで東京や京都、新潟、福島などでも展示を行っており、大きな反響を得ている。2017 年 11 月にはドイツ・ボンの日独協会主催の公開講座で日本とドイツの平和主義と平和運動について講演し、ドイツの市民との意見交換を行った。

2017 年 11 月	Pazifismus und Friedensbewegung in Deutschland und Japan, Deutsch-Japanische Gesellschaft Bonn
2017 年 7 月	「ニュルンベルク裁判と戦後ドイツ」, 広島市立大学広島平和研究所連続市民講座
2016 年 7 月	ギャラリー・トーク「ロベルト・ユンクが日本でみたもの」, 静岡平和資料センター

氏名	直野 章子
職位	教授
研究分野	社会学
研究キーワード	記憶論、戦後補償、被爆者援護制度、ナショナリズム論、トラウマ研究、原爆体験の記憶

2016年10月に前任校の九州大学から赴任して以降、2017年度にかけて、研究活動においては、2015年夏に出版した主著『原爆体験と戦後日本』を踏まえて、理論上、実証研究上の展開を模索し、社会活動においては、著書の内容、とりわけ「被爆体験の継承」にかかわる考察を一般向けにわかりやすく伝えることに力点を置いた。教育活動においては、原爆体験や戦後補償、戦争の傷跡にかかわる研究内容を学部で講義し、大学院では子どもの貧困にかかわる文献講読などを行い、新たなプロジェクトの一步とした。研究所所属ということで、前任校時代に比べて教育にかける時間と労力が減り、代わりに研究活動に重点を置いた。

【教育活動】

国際学部の講義においては、日本の戦後補償、特に被爆者に対する援護政策について、被爆体験の継承について、被爆体験を含む戦争体験とトラウマについて講義を行った。大学院の講義においては、子どもの貧困にかかわる社会学の基本的文献講読、家族社会学とフェミニズム理論の観点を踏まえて、とくにひとり親家庭における貧困についての文献を講読し、受講生が社会問題に関する社会的アプローチについて理解し、社会学理論を通して社会問題を分析する力を獲得することに目標をおいて教育をおこなった。

2017 年度	現代日本社会論I
2017 年度	平和研究I
2017 年度	現代日本社会論II
2017 年度	平和研究II
2017 年度	国際化時代の平和

【研究活動】

研究活動においては、2016年度以前からの主たる研究テーマである原爆体験の記憶に関する論考を学術雑誌や書籍に発表することに重点を置いた。特に、オバマ米大統領の広島訪問を批判的に考察する論考を複数発表した。また、被爆体験の継承と記憶研究にかかわる論考や戦争被害受忍論と戦後補償にかかわる論考も発表した。学会発表においては、被爆者運動を具体例として取り上げながら、社会運動理論とポスト構造主義理論の認識論を検討した。17年度からは4か年計画の科研費(基盤C)を獲得し、記憶研究の理論、方法論と認識論を検討している。

1. 書評:『現場から創る社会学理論—思考と方法』, 社会と調査, Vol. 20, pp. 111-111, 2018
2. 講演録 被爆者を引き受ける: 七一年目の広島で (12・11 基本懇意見書にこだわる被爆者問題講演会の報告), ヒバクシャ, Vol. 34, pp. 18-24, 2017

3. 調査する〈わたし〉が「他者」と出会って：高山真著『〈被爆者〉になる：変容する〈わたし〉のライフストーリー・インタビュー』, 日本オーラル・ヒストリー研究, Vol. 13, pp. 219-222, 2017
4. 「被爆体験の継承」再考——記憶を導きとして, 歴史学研究, Vol. 956, pp. 44-52, 2017
5. 「原爆体験記」の刊行と原爆体験の形成——集合的記憶の視点から, 広島平和記念資料館史料調査研究会報告, Vol. 12, pp. 1-32, 2017
6. 原爆症認定訴訟における体験の記憶と政治, 京都大学人文科学研究所シンポジウム「証言／告白／愁訴——医療と司法における語りの現場から」, 2017
7. 社会運動と主体——フレーミング理論と言説分析の対話を通して, 第90回日本社会学会大会 テーマセッション8: 社会理論と運動・紛争研究, 2017
8. 原爆被害者の怒りを拓く——対米責任追及と「戦後日本」高雄さくえ編, 被爆 70 年ジェンダー・フォーラム in 広島「全記録」——ヒロシマという視座の可能性をひらく, ひろしま女性学研究所, 2016
9. 「困い込まれること」と「主体化」をめぐる政治と言葉について, 理論と動態, Vol. 9, pp. 118-128, 2016
10. 被爆者という主体性と米国に謝罪を求めないということの間, 現代思想, Vol. 44, No. 15, pp. 74-85, 2016
11. 戦争被害受忍論——その形成過程と戦後補償制度における役割, 地球社会統合科学, Vol. 23, No. 1, pp. 11-19, 2016
12. 3. 11を心に刻んで, 岩波書店編集部編, 2016

【社会活動】

社会活動に関しては、被爆体験の継承について、記憶論の観点から行ってきた実証的研究を一般向けに何度か講演した。また、平和研の市民講座を通して、あまり知られていない戦争被害受忍論について、講義を行った。他に、広島市教育委員会の委員や広島市総合計画審議会の委員を務めている。

2018 年 2 月 -	広島市総合計画審議会専門部会専門委員
2017 年 12 月	広島平和記念資料館講演会で「被爆体験の継承」を再考する」と題して講演
2017 年 12 月	ノーモア・ヒバクシャ記憶遺産を継承する会主催パネルディスカッション「“核兵器なくせ”にノーベル平和賞：世界を動かした被爆者の声と若い力をさらに」でパネリスト
2017 年 10 月	広島生活協同組合連合会 50 周年「戦争も核兵器もない平和な世界を」市民の集いで「〈被爆体験〉の行方」と題して記念講演
2017 年 6 月	広島平和研究所 2017 年度前期連続市民講座「戦後処理をめぐる諸問題」
2017 年 5 月	ヒロシマ・ピースフォーラムで「被爆体験の継承を問い直す」と題して講義
2016 年 12 月	原爆被害者相談員の会主催「第36回 12・11基本懇意見書にこだわる被爆者問題講演会で「被爆者を引き受ける——71年目の広島で」と題して講演

氏名	永井 均
職位	教授
研究分野	日本近現代史
研究キーワード	戦犯裁判、残留日本兵、日本・フィリピン関係史

2016 年は学外長期研修制度を利用して、フィリピン・マニラ首都圏のアテネオ・デ・マニラ大学アジア研究センター(ACAS)に籍を置いて在外研究を実施した。その主な目的は、新しい研究課題に着手することであり、概ね所期の目的は達成されたと考えている。帰国後の 2017 年度は、従来の教育活動を再開・継続するとともに、研究活動では、在外研究で培った研究成果を日英両言語で論文化し、国際会議等で発表することができた。社会活動においては、メディア等の要請に応じるなどして、自身の知見を社会還元するように努めた。

【教育活動】

2016 年度は在外研究のため、毎年コーディネーターを務めている全学共通の講義「平和と人権 A」を 6 月まで行ったほかは免除された。2017 年度より大学校務に復帰し、大学院では、通常の授業や博士論文作成の助言などを行い、学部では「平和と人権 A」のほか、「平和研究」など国際学部の講義を分担で担当した。講義内容については、最新の研究動向や最近の国内、世界情勢を踏まえて、新しい視点を取り込みながら、適宜更新していく。

2017 年度	平和と人権A(コーディネーター、分担)
2017 年度	日本近現代史 I
2017 年度	平和研究 I (分担)
2017 年度	日本近現代史 II
2017 年度	平和研究 II (分担)
2017 年度	地域研究演習(日本歴史)

【研究活動】

2016 年度は在外研究のため、フィリピンのマニラ首都圏で充実した研究活動を送った。特に、新しいテーマである残留日本兵の研究に着手できたことは意義深い。在外研究中は論文を数本執筆・発表したほか、アテネオ・デ・マニラ大学などで戦犯裁判に関する講演を行い、中国・北京、天津で開催された国際ワークショップで報告を行った。帰国後の 2017 年度は、東京裁判フィリピン判事の研究論文(英文)や日本占領下フィリピンの市民生活に関する論文(日本語)などを執筆・発表した。また、フィリピン・アンヘレス市にてフィリピン国会歴史委員会主催の国際シンポジウムに招待され、研究報告(英語)を行った。

1. 「日本占領下の『日常』と『非日常』—フィリピンのティーンエイジャーが見た戦争」, ヘレン・メンドーサ『戦争の思い出—日本占領下で生き抜いたフィリピン少女の物語』, 157-188 頁, 2018 年
2. “Burdened by the ‘Shadow of War’: Justice Jaranilla and the Tokyo Trial”, Kerstin von Lingen ed., Transcultural Justice at the Tokyo Tribunal: The Allied Struggle for Justice, 1946-48, pp. 202-220, 2018

3. 「日本における東京裁判研究の動向—回顧と展望」,『広島平和研究』第4号, 99-111 頁, 2017 年
4. 「戦争をめぐる『裁き』と『赦し』」, 大野拓司・鈴木伸隆・日下渉編『フィリピンを知るための64章』, 141-143 頁, 2016 年
5. 「『敗者の裁き』再考—第二次世界大戦後の戦犯問題をめぐる日本側対応」,『年報日本現代史』第21号, 33-67 頁, 2016 年
6. (特別・招待講演)“The Struggle for Justice: War Crimes Trials by the Philippines, 1947-53”, “International Conference on the 75th Anniversary of World War II in the Philippines” at Holy Angel University, Angeles City, Philippines, 2017
7. (特別・招待講演)“A Challenge for a Newborn Nation: The Forgotten Story of the Philippines War Crimes Trials”, Lecture at Faber Hall Function Room (FH101), Ateneo de Manila University, Quezon City, Philippines, 2017
8. (特別・招待講演)“‘Justice’ and ‘Forgiveness’: The Untold Story of the Philippines War Crimes Trials”, Lecture at “The Philippines: Past & Present” by Museum Volunteers of the Philippines (MVP) at the Rockwell campus, Ateneo Graduate School of Business and Ateneo Law School, Makati City, Philippines, 2017
9. 「もう一つの日比関係史—ホセ・アバド・サントス家の戦争物語」『HIROSHIMA RESEARCH NEWS』第20巻第2号(通巻54号), 広島市立大学広島平和研究所, 2018年3月, 6-7 頁, 2018年3月
10. 「ルバング島の小野田少尉—在フィリピン日本大使の手記を読む」『HIROSHIMA RESEARCH NEWS』第19巻第2号(通巻52号), 広島市立大学広島平和研究所, 2017年3月, 3 頁, 2017年3月

【社会活動】

在外研究中の2016年度はフィリピン残留日本兵に関するNHKの番組制作に協力し(ETV特集「小野田元少尉の帰還—極秘文書が語る日比関係」、2017年3月4日放映など)、いくつかの新聞取材に応じるとともに(朝日新聞、北海道新聞、まにら新聞など)、広島県「グローバル未来塾 in ひろしま」海外研修やフィリピン博物館ボランティア主催のレクチャーシリーズで講師を務めた(マニラ首都圏)。2017年度は、広島平和研究所主催の「2017年度前期 連続市民講座」で講師を務めたほか、広島女学院高等学校の生徒や「ナガサキ・ユース代表団」6期生などに対して講義を行った。

2017年7月12日	広島市立大学広島平和研究所主催「2017年度前期 連続市民講座」で講義、広島市まちづくり市民交流プラザにて
2017年1月25日	Lecture at “The Philippines: Past & Present” by Museum Volunteers of the Philippines at the Ateneo Graduate School of Business and Ateneo Law School, Makati City, Metro Manila
2017年1月5日	広島県「グローバル未来塾 in ひろしま」海外研修で講義、マニラ首都圏マカティ市にて

氏名	福井 康人
職位	准教授
研究分野	国際法学、国際関係論
研究キーワード	軍縮・不拡散、国際人道法(国際人権法、国際環境法、国際刑事法、国家責任法の要素を含む)、法源論、一般国際法、レジーム間相互関係

これまで 30 年余りの外交官生活を踏まえての反省もあり、使用に耐える国際法を引き続き追求したいと考えています。グローバル化が進展した今日の社会において、我々が毎日口にする食事を例に見ても純国産ということは少なくなっており、海外との関係は無視できず、そこには国際関係を規律する何らかの国際法の介在を見出すことが出来ます。このため国際法を研究・教育・社会活動で取り上げる際にはつねに実務でも「使える国際法」を意識して、英語・フランス語をも駆使しつつ研究等に邁進していきたいと考えています。

【教育活動】

研究所勤務のため担当コマ数は限られているが、学生さんには生きた国際法を学んでほしいと願っており、国際法と関係ない分野に進んでも国際社会の動きを理解する上で役立つような知識として学んでほしいと願っています。ですから、テレビ・新聞等に報道される事象を国際法というツールを使用して捉えるとどうなるかといったことから始めて貰えるように基礎的なことをまず、マスターしてほしいと願っています。またどの国の人も等しく接する国際法ですので、できれば英語かフランス語でも議論できるように頑張ってもらいたいと思い、このような観点から、本学での平和研究Ⅰ・Ⅱや非常勤先での国際法講義を行っています。

2017 年度	国際法

【研究活動】

日本語及び英語で、紀要等であっても読む人が見ればわかるように一定水準の論考を執筆するように心がけた。

1. 福井康人, 現代国際関係学叢書第2巻「軍縮・軍備管理」第2章 米ロ二国間軍縮: 戦略兵器削減条約(START)を軸に見て, 志學社, 2017
共著書他4冊
2. 福井康人, 条約実施体制の構築: 武器貿易条約を事例として, 広島国際研究, Vol. 22, pp. 1-15, 2016
3. 福井康人, 新たな技術と国際法の適用可能性-自律型致死兵器システム(LAWS)を事例として-, 世界法年報, Vol. 36, pp. 154-185, 2017
4. Yasuhito Fukui, CTBT: Legal Questions Arising from Its Non-Entry into Force Revisited, Journal of Conflict and Security Law, Vol. 22, No. 2, pp. 183-200, 2017
5. Yasuhito Fukui, (Report) Negotiating the Nuclear Weapons Convention: With a Mind to Its Future Conclusion, Souka Peace Studies, pp. 166-186, 2017
6. 福井康人, 新たな技術への国際法の適用可能性: 自律型致死兵器システムを事例として, 世界法学会, 2016

7. (特別・招待講演)Yasuhito Fukui, The new technology and legal lacunae: the case of LAWS, ICRC Asian regional meeting, 2016
8. (特別・招待講演)福井康人, 核兵器禁止条約-締結までを念頭において, 人間の安全保障学会, 2016

他 6 件

【社会活動】

連続市民講座では、核兵器禁止条約の採択に繋がった人道的アプローチについて、その背景のみならず、通常兵器分野の事例も比較してこうした動きが核軍縮に与える影響について話した。英語による市民講座ではマーシャル諸島が核兵器国に対して起こした一連の訴訟から代表的な対英国訴訟を題材にして、実際に ICJ 判決文を読みながら英国の先決的抗弁訴訟戦術について解説するとともに、一連の訴訟展開について英国の戦術等につき解説を行った。また、夫々の講義は前年に実施したものやその後に実施したものと関連性が保たれるように意を用いた。なお、研究所内では紀要『広島平和研究』編集委員長、軍縮学会では学会誌『軍縮研究』の編集委員を務めた。

2016 年 7 月 - 2017 年 5 月	市民講座 2016 年市民講座「人道的アプローチの有用性」 英語による市民講座“The Marshall Islands ICJ Judgement: Preliminary Objections as Litigation Tactics”

氏名	水本 和実
職位	教授
研究分野	国際政治・国際関係論(核軍縮、安全保障)
研究キーワード	平和、核兵器、核軍縮、核廃絶、原爆投下、被爆体験、平和貢献

広島平和研究所の使命は、単に研究だけでなく、広島におけるあらゆる「平和」活動について研究者としてのニーズがあれば貢献する事だと考えている。テーマは核・原爆・被爆から日本の戦争や植民地支配、国際貢献・国際協力などを視野に入れている。広島市、広島県、平和記念資料館、平和文化センター、JICA 中国、あるいは平和教育や NPO の平和活動への支援を行い、そこでの知見を大学や大学院の教育に生かすことをめざしてきた。今後も継続する。

【教育活動】

学部教育のうち、全学共通科目では「広島からの平和学:実践の方法」「平和インターンシップ」を毎年、単独で担当し、オムニバス形式の「平和と人権 A(ヒロシマと国際平和)」は3~4回担当したほか、2017年新設のオムニバス形式の「国際化時代の平和」は2回、担当した。またオムニバス形式の国際学部専門科目「平和研究Ⅰ」「同Ⅱ」は毎年、それぞれ2回ずつ担当した。大学院教育では、国際学研究科専門科目として「現代軍縮・平和論Ⅰ」「現代軍縮・平和論Ⅱ」を単独で、オムニバス形式の「平和学概論」など3科目を2、3コマずつ担当しているが、2017年後期に「現代軍縮・平和論Ⅱ」に受講登録があり、開講した。

2016, 2017 年度	広島からの平和学:実践の方法
2016, 2017 年度	平和と人権 A(ヒロシマと国際平和)
2016, 2017 年度	平和研究Ⅰ
2016, 2017 年度	平和インターンシップ
2016, 2017 年度	平和研究Ⅱ
2017 年度	国際化時代の平和
2017 年度	現代軍縮・平和論Ⅱ

【研究活動】

研究テーマとしては、核軍縮を大きなテーマとし、サブのテーマとしては日本の核軍縮政策やアジア地域の核軍縮、あるいは核兵器以外の大量破壊兵器(生物・化学兵器)などに関心を持ち、研究を行った。論文発表の場としては、広島平和記念資料館資料調査研究会の毎年の研究報告、広島平和研究所で発行した単行本、ブックレット、紀要などを中心に発表し、研究協定を結んでいる韓国・世宗研究所のフォーラムなどでも発表した。引き続き今後も同じテーマについて研究し、同じ媒体で発表を続ける予定。

1. 水本和実, 生物・化学兵器と旧日本軍の毒ガス兵器, 戦争の非人道性——その裁きと戦後処理の諸問題, pp. 143-164, 2018
2. 水本和実, 北東アジアの核・ミサイル危機をどう見るか——平壤訪問を踏まえて, 広島平和研究, No. 5, pp. 5-12, 2018

3. 水本和実, NPT 再検討会議の失敗と変わらぬ被爆地の思い——2015 年の核をめぐる動向と論調, 広島平和記念資料館資料調査研究会 研究報告 13 号, No. 13, pp. 43-59, 2017
4. 水本和実, 新たな脅威と盛り上がる「核兵器の非人道性」の議論——2014 年の核をめぐる動向と論調, 広島平和記念資料館資料調査研究会 研究報告 12 号, No. 12, pp. 17-31, 2017
5. 水本和実, 停滞する核軍縮と日本の課題, インテリジェンス・レポート, No. 96, pp. 4-21, 2016
6. 水本和実, 被爆国日本の役割, なぜ核はなくならないのかⅡ——「核なき世界」への視座と展望, pp. 203-221, 2016
7. 水本和実, 今日の核兵器と国際平和, なぜ核はなくならないのかⅡ——「核なき世界」への視座と展望, pp. 1-12, 2016
8. 水本和実, 最新の核をめぐる動向と論調, 広島平和記念資料館資料調査研究会 研究発表会, 2017
9. Kazumi Mizumoto, Nuclear Threat in Northeast Asia: from the Viewpoint of Civil Society in Hiroshima, Northeast Asia Peace and Cooperation Forum 2017, 2017
10. 水本和実, 日本の平和主義と安全保障, 世宗研究所—広島平和研究所共同研究会, 2016

【社会活動】

広島平和記念資料館の資料調査研究会や展示検討会議、広島市の平和行政（「平和宣言」やピースツーリズム）、広島県の平和政策（「国際平和拠点ひろしま構想」、カンボジア支援活動）、広島平和文化センターの市民講座をはじめ、JICA 中国やカンボジアひろしまハウスなどの国際貢献・国際協力活動への関与を行っており、引き続き継続する。

2017 年 6 月-2018 年 3 月	ピースツーリズム推進懇談会
2016 年度, 2017 年度	青少年国際平和未来会議 2016、2017
2016 年度, 2017 年度	広島市「平和宣言に関する懇談会」
2016 年 11 月, 2017 年 11 月	広島平和記念資料館資料調査研究会 研究発表会
2016 年 10 月-	学校法人広島女学院評議員会
2013 年 7 月-2019 年 3 月	広島平和記念資料館 展示説明文執筆会議
2010 年 8 月-	広島平和記念資料館展示検討会議

氏名	湯浅 剛
職位	教授
研究分野	ポスト・ソ連空間の地域機構、政治変動、安全保障
研究キーワード	政治変動、国際秩序、地域主義、政治エリート論

2016年度は、本学着任2年目であったが、平和研内で企画委員長を担当することになり、国際シンポジウムなど、研究所が主催する主要行事の企画・実施を担当するとともに、研究所の刊行物「ブックレット」のシリーズについても、元市職員の湯浅敏郎氏の協力を得ながら、原稿とりまとめ・編集を担当した(当該年度中に計2巻を刊行)。2017年度も引き続き企画委員長を担当するとともに、日本学術振興会特別研究員(PD)の受け入れも実施した(当該研究員は、テニユアの研究職に就くことが決まったため、2018年3月末にて離任)。この他、以下に示した諸活動を通じ、平和研の研究・教育・社会活動の充実に貢献できたと自負している。

【教育活動】

下記の担当科目は国際学研究科での開講科目であるが、2016年度、17年度ともに受講者がいなかったため実施しなかった。この他、輪講形式の科目である「国際化時代の平和」(全学共通科目)、「平和研究Ⅰ」「平和研究Ⅱ」(以上、国際学部)、「平和学概論」(大学院国際学研究科)にてそれぞれ単発の講義を実施した。なお、2016年9月まで、外国人研究生1名(出身国:ロシア)の受け入れを担当した。

2016, 2017 年度	International Organizations, International Politics of Central Asia

【研究活動】

平和研に関連するものとしては、2016～17年度を通じ、研究所内のプロジェクト研究「ユーラシアにおける地域主義とガバナンス」を実施し、2年間で計10回の研究会を開催した。当該プロジェクトの成果については、引き続き公刊をめざして調整しているところである。この他、外部資金獲得状況については、自身が研究代表者となっているものを含め、2017年度には計4件の科研費による助成を受け、研究活動を遂行した。

1. 松戸清裕(編者)、野部公一、徳永昌弘、浅川あや子、河本和子、大串敦、油本真理、藤沢潤、佐々木卓也、湯浅剛ほか、ロシア革命とソ連の世紀3: 冷戦と平和共存, 岩波書店, 2017
2. 湯浅剛, 上海協力機構(SCO): 変貌と相対化, 国際シンポジウム「アジアの核・ガバナンス・平和」(共催: 広島平和研究所、長崎大学核廃絶研究センター(RECNA)、於・広島国際会議場), 2018
3. 湯浅剛, ユーラシア国際関係におけるエネルギー・ファクター, 日本国際政治学会2017年度研究大会・部会14(市民講座)「ユーラシアのエネルギー安全保障」(於・神戸国際会議場), 2017
4. 湯浅剛, ロシア主導地域統合と「一帯一路」構想, アジア経済研究所研究会『「一帯一路」構想と中国の対外政策の新展開 分科会2」(於・同研究所会議室C23), 2017
5. 湯浅剛, 中央アジアをめぐる国際政治, 中央アジア地域研究の地平をひらく(主催: 科学研究費補助金基盤研究(A)「批判的地域主義に向けた地域研究のダイアレクティブ」、東京外国語大学海外事情研究所), 2016

6. 湯浅剛, ソ連解体後の変動をどう捉えるか: 政治体制と地域秩序の変遷と展望, 国際安全保障学会 2016 年度研究大会、部会 5「ロシアの外交・安全保障政策の将来」, 2016
7. Takeshi Yuasa, Andrey Kazantsev, Security Challenges in Central Asia, Central Asia at the Crossroads: The Interests of Global and Regional Players (Hosted and organized by Carnegie Moscow Center, Venue: Hotel National, Moscow), 2016
8. Takeshi Yuasa, "Russia, China and Japan's Role and Strategy in Central Asia", IFRI Seminar "Assessing the Role of Russia, from Europe to Asia: Japanese and European Perspectives" (Institut français des relations internationales, Paris), 2016

【社会活動】

平和研の活動に関連しているものとしては、2016～17 年度を通じ、所内の企画委員長として同僚の協力を得ながら「連続市民講座」の企画を担当するとともに、当該企画において自身も登壇した(2017 年 7 月 26 日)。また、所外の案件であったが、広島県庁の担当者からの依頼で、北方領土返還運動に関連する行事で講師を務めたことも付記しておきたい(2017 年 7 月 28 日および同年 11 月 11 日に実施)。

2017 年 6 月-2017 年 7 月	広島市立大学 広島平和研究所 連続市民講座, 広島平和研究所
2017 年 3 月-2017 年 4 月	OSCE (Organization for Security and Co-operation in Europe)/ ODIHR (Office for Democratic Institutions and Human Rights) Short-Term Observer for Parliamentary Election in Armenia, March 2017
2016 年 3 月-	日本中央アジア学会理事、会誌編集委員

附属施設

氏名	塩田 芳丈
職位	特任教授
研究分野	(該当なし)
研究キーワード	(該当なし)

2017 年度の担当業務である①附属図書館長の業務、②広島市立大学塾の業務の概要は次のとおりである。

① 附属図書館長の業務

- ・「図書館運営委員会」の審議を通じた図書館の適切な運営
2017 年度の取組の一つとして、研究室に所蔵する図書の管理方法の見直しに向け総務室の協力により他の公立大学の実態調査を実施した。それを踏まえ翌年度以降に対応策を検討・実施する予定である。
- ・「いちだい知のトライアスロン実施委員会」の審議を通じた読書等の振興
- ・総合共通科目「教養演習」の実施

② 広島市立大学塾の業務

- ・開設に向けた実施要綱、募集選考要領、スケジュール等の策定
- ・1期生募集の広報、選考の実施
- ・プログラム企画立案に関する資料収集、ヒアリング等
- ・プログラムの調整、実施

【教育活動】

「いちだい知のトライアスロン」の充実に向け、学生の読書の実態を把握するため新入生へアンケートを実施した。アンケートからは、入学前の読書量の多寡にかかわらず6割以上の学生が入学後は「これまで以上に読書したい」という意識があるという結果が出た。その気持ちを読書に繋げる取り組みを今後検討したい。また、「教養演習」を「3学部合同基礎演習」に移行するに伴い、コースの見直し、ウェブシステムの改修を行った。

広島市立大学塾は、10 月以降の前半プログラムを実施した。実施にあたっては、ゲスト講師としてお越しいただいた、広島市等の行政機関、NPO、NGO、若手起業家など多くの皆様のご理解・ご協力をいただいた。実験的プログラムという位置づけもあった1年目の取組から得られた評価を、2年目以降の改善・充実に繋げていきたい。

2017 年度	教養演習

【研究活動】

(該当なし)

【社会活動】

(該当なし)

氏名	松本 良徳
職位	特任教授
研究分野	(該当なし)
研究キーワード	(該当なし)

国際理解を深め国際感覚を育むとともに、語学やコミュニケーション能力の重要性を認識する機会を学生に提供することにより、グローバル人材の育成を図るため、2015 年度にシンガポール国立大学の学生やホストファミリーとの交流、シンガポールで事業展開している広島企業の訪問などを内容とするシンガポール短期交流プログラムを実施した。参加した学生にとってシンガポール国立大学の学生等との交流は海外に視野を広げる貴重な機会となった。このため、2016 年度には新たにサンフランシスコ、マレーシアでの短期交流プログラムを実施し、2017 年度までに 79 人の学生がこのプログラムに参加した。このうち 12 名が交換留学など長期留学をしており、2 名が今後交換留学を予定しているなど、長期留学への動機づけにもなっている。

【教育活動】

(該当なし)

【研究活動】

(該当なし)

【社会活動】

(該当なし)

氏名	植松 敏美
職位	特任助教
研究分野	観光情報
研究キーワード	観光関連データベース

広島市立大学「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」を推進することを目的に活動しています。主な職務は、4 本柱の一つである観光関連データベースの企画・構築・運用支援です。また、COC+の実施に伴う教育・研究・社会活動についても職務の一環として取り組んでいます。

教育活動については「地域課題演習」・「観光情報学」等の「地域貢献特定プログラム」に担当・補助教員として携わっており、研究・社会活動では主担当である観光関連データベースの素材開発の一端として、尾道(しまなみ)・岩国地区での観光客や観光サイクリストを特定した行動履歴について様々な機器を用いて収集・解析を実施し、各関連市町へフィードバック・展開し、地域貢献を検討しています。

【教育活動】

地域課題演習においては、参加する教員や学生のサポートや会議体や全体での活動発表会等の支援に務めています。また、1テーマの主担当教員や他テーマの補助教員としての活動についても実施しています。また、観光情報学に関しては補助教員として使用教材(システム)の準備などを行い、一部のパート(観光関連データベース)に関しては簡易講義や演習補助なども実施しています。



2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

研究活動においては、広島地域に貢献する人材育成のための観光関連データベースの構築と活用を目標に活動しています。様々な研究や演習の素材として利用できるように、各市町より提供頂いた観光関連データ以外にも各地域に直接出向き、観光客や観光サイクリストを対象に行動履歴データの収集活動にも取り組んでいる。収集した行動履歴デ

ータに関しては、地域課題演習や観光情報学の演習などを使い、分析手法を策定し地域へのフィードバックとして実施できれば理想と考えています。



1. 植松敏美, 難波英嗣, 田村慶一, 石野亜耶, 竹澤寿幸, 広島地域に貢献する人材育成のための観光関連データベースの構築と活用の検討, 観光情報学会 第16回研究発表会 講演論文集, pp. 48-51, 2017
2. 広島地域に貢献する人材育成のための観光関連データベースの構築と活用の検討, 観光情報学会 第16回研究発表会, 2017

【社会活動】

上記研究活動の取り組みと一部重複しますが、社会連携プロジェクトとして二つのテーマ※で活動を実施し、各種情報群としての行動分析や研究素材とすることで様々な属性の特徴を掴み、解析結果を提示することで更なる地域の活性化や向上に取り組む事を最終目的としています。また、各地域への観光振興に繋がるフィードバックができるよう現在も継続して取り組んでいます。



※ 観光情報ツールを活用した地域観光振興プロジェクト(岩国編)

※ しまなみ観光サイクリストの行動情報収集プロジェクト(しまなみジャパン)

氏名	國本 善平
職位	特任教授
研究分野	地域人材の育成
研究キーワード	地域志向教育、地域再生

文部科学省の補助事業である「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」の全体のコーディネート(事業調整)を担当しています。具体的には、COC+教育カリキュラム(地域貢献特定プログラム)の実施調整・講義をはじめ、アートプロジェクト等の学外教育研究活動の企画調整、インターンシップや地元就職の促進、観光関連データベースの構築と活用、事業協働機関(参加大学、自治体、企業・団体)との連絡調整等を行っています。

【教育活動】

地域貢献特定プログラムの全学共通系科目・広島科目「地域課題演習」の企画調整、シラバス作成、合同講義、テーマ別演習の実施、取りまとめ。

地域貢献特定プログラムの全学共通系科目・広島科目「ひろしま論」において、広島市の都市空間の歴史的変遷について講義。

全学共通系科目・平和科目「平和と人権 A(ヒロシマと国際平和)」において、被爆からの復興とお好み焼の成立過程について講義。



2016 年度	ひろしま論、平和と人権 A
2017 年度	地域課題演習、ひろしま論、平和と人権 A

【研究活動】

以下について情報の収集や考察を行っています。一部は講義や講演活動に活かしています。

<COC+ 関連>

大学における地域志向教育のあり方について。大学の教育活動としてのアートプロジェクトの運用方法について。大学の学外教育活動の地域での受け皿環境について。若者の地域定着の実態について。

<その他>

食文化としてのお好み焼の成立史とグローバルな存在意義について。高齢社会における食について。オープンカフェなど公共空間の活用や都市デザインについて。

【社会活動】

自治体の講演会や他大学の公開講座、地域団体主催のフォーラムの講師等を引き受けています。



2018 年 1 月	上智大学総合人間科学部の学生グループによるヒロシマ学習講師
2017 年 10 月	広島県生活協同組合連合会 50 周年企画「2017 市民平和フォーラム」講師
2017 年 8 月	広島工業大学地域環境宮島学習センター「宮島・土曜講座」講師
2017 年 7 月	県立広島大学・広島市立大学連携公開講座「ひろしま学を考える」講師
2016 年 6 月	呉市・平成28年度男女共同参画週間事業「自分を生きる、みんなで生きる」講演会講師

上記のほか、修学旅行で広島市を訪れる中学校への講話活動(年間数回)、広島市公民館での社会人講座など。



氏名	佐藤 俊雄
職位	特任教授
研究分野	地域研究
研究キーワード	地域再生、観光

本学が文部科学省に採択されたCOC＋事業において位置づけられた地域貢献特定プログラムのうち、新規科目である「広島の観光学」「地域再生論入門」の講義を新たに構築し、実施した。加えて、複数人教員が担当する「地域課題演習」(新規科目)の講義も担当した。広島広域都市圏等内の大学と連携して「大学連携による学生の観光研究・活動発表会」(2017年12月16～17日)を企画し、7大学の参加を得て、成功裏に実施した。

【教育活動】

新規科目である「広島の観光学」「地域再生論入門」の講義を担当した。その構築にあたっては、COC＋事業対象地域の25市町の全てにヒアリング調査と先進事例の現地調査を実施し、観光と地域再生というテーマを通じて、広島広域都市圏等の魅力と可能性を学生に伝えた。人口減少・超高齢化が進む地方においては、観光、地域再生ともに地域での取り組みが活発な分野であるため、常に最新の動向を伝えるように努めた。「広島の観光学」では、2年度目において履修者数の拡大と授業満足度の向上を図った。「地域課題演習」では、多数の教員が参加するため、講義方法の検討に参加するとともに、グループワークに意を払う方法論を取り入れて、一定の成果を上げることができた。

広島都市圏等内の大学と連携し、観光について学ぶ学生の研究・活動成果を発表し、相互に学びあい、地域志向マインドの醸成を図る場として、「大学連携による学生の観光研究・活動発表会」を企画した。7大学から約90名の学生・教員が参加し、学生・教員から高い評価を得た。学生からは、研究・活動上の刺激、広島地域の観光に関する関心の高まりという両面から、高く評価された事業となった。

2016, 2017 年度	広島の観光学
2017 年度	地域再生論入門
2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

「広島の観光学」「地域再生論入門」の講義構築のため実施した諸調査において把握した新たなファクトファインディングを、都市計画学会中国四国支部の研究会において発表した(2018年2月)。また「大学連携による学生の観光研究・活動発表会」における現地講義においても発表した(2017年12月)。

【社会活動】

「地域課題演習」で学生が取りまとめた内容を、現地講義でお世話になった山口県上関町観光協会にフィードバックした。

三原市まちづくり戦略検討会議に委員(副座長)として参加し、三原市総合戦略(三原市版地方創生計画)の進捗状況の点検を行うとともに、事業レビュー(三原市行政施策の点検)等を実施した。事業レビューの結果、三原市の行政経費の削減、事業内容の改善に一定の成果が見られた。

2013 年-	三原市まちづくり戦略検討会議

氏名	島筒 博章
職位	特任講師
研究分野	(該当なし)
研究キーワード	(該当なし)

社会連携センターの知財マネージャーとして、大学知財の創出(研究シーズの知財化)・管理・運用に係る業務を担当している。

産学連携関連業務としては、研究者の外部資金・公的資金獲得に係る、共同研究契約、秘密保持契約等の締結に当たり、相手機関との交渉&協議等を担当している。
教育支援分野では、情報関連の教職免許取得希望者への夏季集中講義(知的財産権・15コマ)、新入生への情報活用基礎講義分担(知的財産権・3コマ)を担当している。

【教育活動】

夏季集中講義では、特許権、著作権、意匠権、商標権、不正競争防止法等について、その概要、留意事項等について講義している。

情報活用基礎の講義分担では、知的財産権の概要、情報化時代において重要な著作権の内容と侵害行為等への留意事項を中心に講義している。

2016, 2017 年度	夏季集中講義:知的財産権、情報活用基礎:知的財産権

【研究活動】

(該当なし)

【社会活動】

(該当なし)

氏名	三上 賢治
職位	特任助教
研究分野	芸術一般
研究キーワード	アートマネジメント、アートプロジェクト

広島市立大学「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」における業務全般に関わり、主には先導的教育研究事業として取り組んでいる広島市立大学 COC+アートプロジェクト「広島ニュートラベル」の企画・運営を担当している。また、2017 年度から開講した「地域課題演習」の担当教員の一人として人材育成を行うとともに、教育活動・研究活動・社会活動のすべてが含まれるアートプロジェクトにおいて、芸術学部美術学科、デザイン工芸学科の全 10 専攻が実施する 12 の地域展開型プロジェクトをマネジメントしている。

【教育活動】

2017 年度から開講した「地域課題演習」の担当教員の一人として、2017 年は安芸高田市を中心とした中山間地域の課題や魅力を知ることが目的に、安芸高田市地域おこし協力隊員による鹿や猪といった害獣対策の課題や食資源としての活用、田植えなどの農業体験、若い移住者の魅力的なライフスタイルを学ぶ現地学習を行った。

2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

2016 年度から広島市立大学 COC+事業における COC+アートプロジェクト「広島ニュートラベル」の企画・運営及びアートマネジメントに関連する研究活動を行なっている。

1. COC+アートプロジェクト「広島ニュートラベル」企画・運営, 2016 年-

2016 年度

- ・特定研究「COC+事業における先導的アートプロジェクトの実施と人材育成のための基盤研究」研究代表
- ・社会連携プロジェクト「グローバルキッチンプロジェクト」研究代表

2017 年度

- ・特定研究「COC+事業における先導的アートプロジェクトの実施と人材育成のための基盤研究」研究代表
- ・特定研究「創造的文化芸術活動を通じた基町地域活性化の実践的研究」研究分担者

【社会活動】

広島市中区基町地区の献血推進協議会、公衆衛生協議会会長として広島市中区で行う太田川クリーンウォークや平和記念公園清掃への参加、環境講座の開催、ゴミ処理施設の視察、献血活動の推進など地域の公衆衛生業務全般に関わっている。

2017 年 4 月-	広島市基町学区献血推進協議会 会長
2017 年 4 月-	広島市基町学区公衆衛生協議会 会長

氏名	吉岡 研一
職位	特任准教授
研究分野	地域研究
研究キーワード	データ解析、統計的テキスト分析、行動計量、ベイジアンアプローチ

広島市立大学「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)」を推進するために雇用されています。主な職務は、COC+の実施に係る自治体、企業・団体等の関係機関との連絡調整及び文書作成・経理事務です。また、COC+の実施に伴う教育・研究・社会活動も職務の一環として取り組んでいます。

教育活動については、COC+科目の「地域課題演習」を担当しています。また、研究活動については、COC+の実施に伴う課題への対応やデータ解析・統計学の観点からCOC+のデータの利用に係る解析手法等の研究を行っています。なお、社会活動については、これまでCOC+にかかるものではありませんが、地域の自治体や観光事業者向けに経済・経営的な面から支援していきます。

【教育活動】

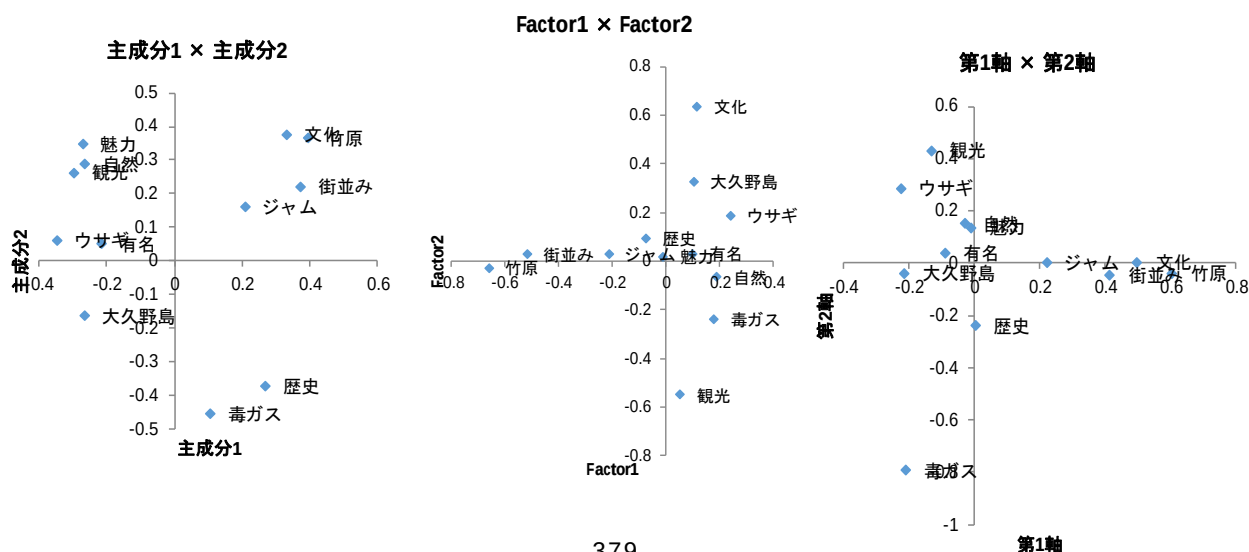
地域課題演習において、科目に設定した10のテーマに参加する教員の連絡調整とともに、現地活動に要する所要経費の支払い事務、現地活動時の安全対策、自治体への依頼手続き等の各テーマの共通事項について標準化に取り組みました。また、一つのテーマの主担当と別の一つのテーマの補助を務めました。

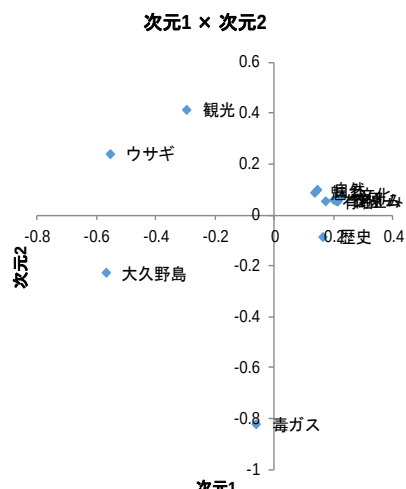
主担当テーマでは、学生の興味・関心の尊重と自主的活動の促進を基本に、テーマの一連の活動を通じてマネジメントサイクル(PDCA)が完結するよう、講義を組み立てました。特にテーマの履修内容の振り返りに資するため、講義で作成した各種資料や現地での活動記録、成果物、活動の所感等を取りまとめた履修の記録(小冊子)を作成しました。

2017 年度	地域課題演習

【研究活動】

観光関連データベースの主要な格納データであるテキストデータの社会科学分野における利用を想定して、適切な解析手法の選択等に関する知見を得るため、複数の解析手法の解の特性について比較研究を行いました。固有値問題という意味で数理的に同等な解析手法を取り上げ、実際のテキストデータから小標本のデータセットを作成し、これを事例に解の感応度等について分析しました。



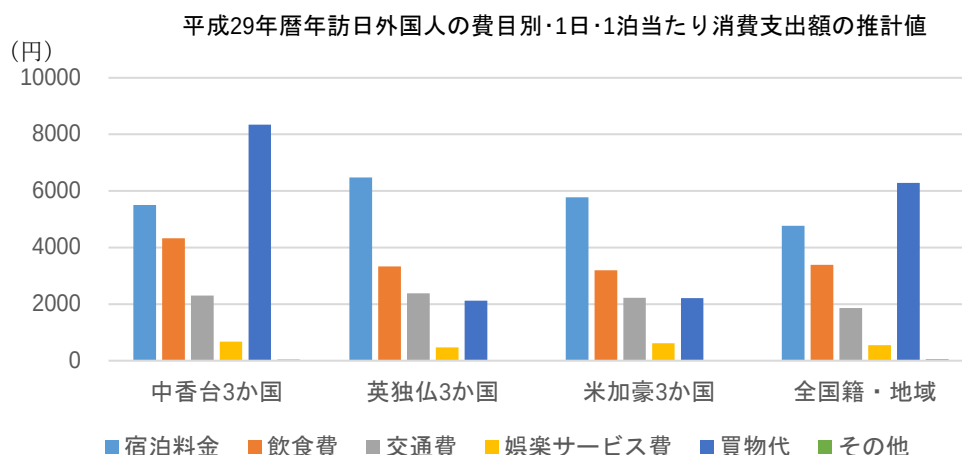


【注】グラフは、同じデータセットから生成される解析手法固有のデータ行列から計算された第1固有ベクトルと第2固有ベクトルの各要素の組み合わせの散布図である(左上から右に順に主成分分析、因子分析(反復主因子法)、対応分析、多次元尺度構成法)。

前2つの手法は軸(因子)の解釈に、後ろ2つは変数の分類に適しているといわれているが、解析手法の比較研究は見当たらないことから、それは当を得たものか、という問題意識が研究の出発点である。

なお、分析に使用したテキストデータは、地域課題演習において学生が作成した大久野島・竹原の観光に関するレポート14人分である。分析用のデータセットは、学生のレポートについて、テキスト分析用のフリーソフトKHCoderを利用して、前処理を行った上で出現頻度の高い観光に関する単語12語を抽出して作成した。

また、COC+に関連して、広島広域都市圏及び尾道市を対象区域とする観光振興施策について、地域産業連関表を利用して経済波及効果等を分析しました。これに関連して、2つの県にまたがる小地域を対象にノンサーベイ法による産業連関表の作成方法を研究しています。



【注】上のグラフの元データは、産業連関分析に使用するため、「訪日外国人の消費動向 平成29年年度報告書」(観光庁)等の官庁統計を加工して作成した推計値である。平成29年暦年の広島広域都市圏への訪日外客数を100としたとき、中国・台湾・香港の3国・地域約10、英国・ドイツ・フランスの3国約20、米国・カナダ・オーストラリアの3国約35と欧米系が多数である。なお、我が国全体を100としたとき、中国・台湾・香港約50、英国・ドイツ・フランス約3、米国・カナダ・オーストラリア約8の構成である。

【社会活動】

観光分野では、これまで計量分析に不十分な状況にあった官庁統計や観光関連データがこの数年間で質・量とも格段に充実してきたことから、自治体の要望を聞きながら、研究活動に関係づけて、広島広域都市圏や構成自治体の区域を対象として観光政策や観光産業等について、データに基づく計量的な分析を自治体と協働して行いたいと考えています。

また、観光事業者の事業効率化による生産性向上と働き方改革による労働環境改善は、観光振興を図る上で重要な課題となっていることから、こうした課題に対して、例えば、観光庁等が無償で提供する観光情報を事業に活用しようとする事業者に対して事例紹介の場を提供する等の支援を行うこととしています。

公立大学法人広島市立大学 ファカルティ・レポート
2016 年度－2017 年度

編 集 広島市立大学 内部質保証委員会
発 行 平成 3 0 年 9 月
事務局 広島市立大学事務局企画室
〒731-3194
広島市安佐南区大塚東三丁目 4 番 1 号
T E L 082-830-1500
F A X 082-830-1656

